



2020シラバス 多摩大学 経営情報学部

現代の志塾

多摩大学は「今を生きる時代についての認識を深め、課題解決能力を高める」ため、教育理念を「現代の志塾」と定め、教育・研究・社会貢献の全分野の共通理念としています。「現代の志塾」とは「アジアユーラシアダイナミズム」の「現代」、社会の不条理の解決のために自らの職業や仕事を通じて貢献をする「志」、人間的な触れ合いによる少人数制ゼミを中心とした「手作り教育」の「塾」を意味しています。実社会の問題解決の最前線に立つ「志」人材の育成に尽力するため、個性と特色にあふれた「ゼミ力の多摩大」を形成しています。

学年暦

・補講は原則土曜日に実施します。

	日	月	火	水	木	金	土
4月				1	2	3	4
				オリエン テーションⅠ	オリエン テーションⅡ	オリエン テーションⅢ	
	5	6	7	8	9	10	11
	入学式	①履修登録期間開始	①	①	①	①	①
	12	13	14	15	16	17	18
		②	②	②	②	②履修登録期間終了	②
	19	20	21	22	23	24	25
		③履修登録 確認期間開始	③	③	③	③履修登録 確認期間終了	③
26	27	28	29	30			
	④	④	昭和の日④	教学イベント			

	日	月	火	水	木	金	土
5月						1	2
						特別研修日	
	3	4	5	6	7	8	9
	憲法記念日	みどりの日	こどもの日	振替休日	④	④履修登録 削除期間開始	④
	10	11	12	13	14	15	16
		⑤	⑤	⑤	⑤	⑤	⑤
	17	18	19	20	21	22	23
		⑥	⑥	⑥	⑥履修登録 削除期間終了	⑥	⑥
24	25	26	27	28	29	30	
	⑦	⑦	⑦	⑦	⑦	⑦	

	日	月	火	水	木	金	土
6月	5月31日	1	2	3	4	5	6
		⑧	⑧	⑧	⑧	⑧	⑧
	7	8	9	10	11	12	13
		⑨	⑨	⑨	⑨	⑨	⑨
	14	15	16	17	18	19	20
		⑩	⑩	⑩	⑩	⑩	⑩
	21	22	23	24	25	26	27
		⑪	⑪	⑪	⑪	⑪	⑪
28	29	30					
	⑫	⑫					

	日	月	火	水	木	金	土
7月				1	2	3	4
				⑫	⑫	⑫	⑫
	5	6	7	8	9	10	11
		⑬	⑬	⑬	⑬	⑬	⑬
	12	13	14	15	16	17	18
		⑭	⑭	⑭	⑭	⑭	⑭
	19	20	21	22	23	24	25
		定期試験Ⅰ	定期試験Ⅱ	オリンピック (サッカー予選)	海の日・オリン ピック	スポーツの日・オリ ンピック(開会式)	オリンピック
	26	27	28	29	30	31	
オリンピック	オリンピック	追試験日・ オリンピック	追試験予備日・オ リンピック	オリンピック	オリンピック		

	日	月	火	水	木	金	土
8月							1
							オリンピック
	2	3	4	5	6	7	8
	オリンピック	オリンピック	オリンピック	オリンピック	オリンピック	オリンピック	オリンピック
	9	10	11	12	13	14	15
	オリンピック	山の日					
	16	17	18	19	20	21	22
	23	24	25	26	27	28	29
		パラリンピック	パラリンピック	パラリンピック	パラリンピック	パラリンピック	

	日	月	火	水	木	金	土
9月	8月30日	8月31日	1	2	3	4	5
	パラリンピック	パラリンピック	パラリンピック	パラリンピック	パラリンピック	パラリンピック	パラリンピック
	6	7	8	9	10	11	12
	パラリンピック						
	13	14	15	16	17	18	19
							卒業のつどい
	20	21	22	23	24	25	26
		敬老の日	秋分の日	履修登録期間開始 ①	①	①	①
	27	28	29	30			
	①	①	②				

	日	月	火	水	木	金	土
10月					1	2	3
					②	②	②
	4	5	6	7	8	9	10
		②	②履修登録期間終了	③履修登録確認期間開始	③	③	③
	11	12	13	14	15	16	17
		③	③履修登録確認期間終了	④	④	④	④
	18	19	20	21	22	23	24
		④	④	⑤履修登録削除期間開始	⑤	⑤	⑤
25	26	27	28	29	30	31	
	⑤	⑤	⑥	⑥	⑥	⑥	

	日	月	火	水	木	金	土
11月	1	2	3	4	5	6	7
		⑥	文化の日⑥	⑦履修登録削除期間終了	⑦	⑦	⑦
	8	9	10	11	12	13	14
		⑦	⑦	⑧	⑧	多摩祭事前準備	多摩祭Ⅰ
	15	16	17	18	19	20	21
	多摩祭Ⅱ	多摩祭後片付け	⑧	⑨	⑨	⑧	⑧
	22	23	24	25	26	27	28
		勤労感謝の日⑧	⑨	⑩	⑩	⑨	⑨
29	30						
	⑨						

	日	月	火	水	木	金	土
12月			1	2	3	4	5
			⑩	⑪	⑪	⑩	⑩
	6	7	8	9	10	11	12
		⑩	⑪	⑫	⑫	⑪	AL発表祭⑪
	13	14	15	16	17	18	19
		⑪	⑫	⑬	⑬	⑫	⑫
	20	21	22	23	24	25	26
		⑫	⑬				
27	28	29	30	31			

	日	月	火	水	木	金	土
1月						1	2
						元日	
	3	4	5	6	7	8	9
				⑭	⑭	⑬	⑬
	10	11	12	13	14	15	16
		成人の日	⑭	⑮	⑮	大学入学 共通テスト準備	大学入学 共通テスト
	17	18	19	20	21	22	23
	大学入学 共通テスト	⑬	⑮	月曜授業⑭	金曜授業⑭	⑮	⑭
24	25	26	27	28	29	30	
	⑮	定期試験 I	定期試験 II			⑮	

	日	月	火	水	木	金	土
2月	1月31日	1	2	3	4	5	6
						追試験日	追試験予備日
	7	8	9	10	11	12	13
		2月集中講義①	2月集中講義②	2月集中講義③	建国記念の日 2月集中講義④	2月集中講義⑤	
	14	15	16	17	18	19	20
			2月集中講義⑥	2月集中講義⑦	2月集中講義⑧	2月集中講義⑨	
	21	22	23	24	25	26	27
			天皇誕生日				
	28						

	日	月	火	水	木	金	土
3月		1	2	3	4	5	6
	7	8	9	10	11	12	13
	14	15	16	17	18	19	20
					卒業のつどい		春分の日
	21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31				



1. 基本理念	1
2. 経営情報学部ディプロマポリシー・経営情報学科ディプロマポリシー・事業構想学科ディプロマポリシー …	2
3. 経営情報学部カリキュラムポリシー・経営情報学科カリキュラムポリシー・事業構想学科カリキュラムポリシー …	4
4. 学生生活	6
5. 授業	7
6. 初年次教育科目の指定について	12
7. 履修登録・確認・削除	13
8. 学期末試験	16
9. 成績	19
10. 学科選択	22
11. 進級・卒業要件、履修上限、認定科目	23
12. 教職課程	29
13. オフィスアワー制度について	33
14. 授業評価アンケート(VOICE)について	34
15. 単位互換科目について	34
16. アセスメント	36
17. TOEIC 試験補助について	36
18. 多摩大学学則(抜粋)	37
19. 多摩大学学生懲戒規程	44
20. 多摩大学履修規程(抜粋)	46
21. 多摩大学経営情報学部履修細則	47
22. 多摩大学早期卒業規程(抜粋)	51
23. 多摩大学経営情報学部早期卒業細則(抜粋)	52
24. 多摩大学成績評価規程	53
25. 前提科目一覧	54
26. カリキュラム表(科目一覧)・カリキュラムマップ・カリキュラムマトリックス …	55
27. 実務経験のある教員一覧	66
28. シラバス	69

1. 基本理念

多摩大学の設立母体である学校法人田村学園建学の精神である「質実清楚・明朗進取・感謝奉仕」を礎とした本学の基本理念は「国際性・学際性・実索性」の3つのキーワードで表現されます。

<国際性>

グローバル社会の一員として、積極的な役割を果たす人材を育成する。

<学際性>

行き過ぎた専門化の弊害を是正するため、学際的な研究・教育への取組みを重視する。

<実索性>

大学に対する「象牙の塔」批判を克服すべく、「社会に通用する大学」を標榜する。

2. 経営情報学部ディプロマポリシー・経営情報学科ディプロマポリシー・事業構想学科ディプロマポリシー

【経営情報学部 ディプロマポリシー】

1 育成する人材

本学は「現代の志塾」を教育理念とし、グローバル化、情報化社会の進展に即応して、世界の中で大きな役割を担うことで日本の将来を背負うという自覚に基づいた強い実行力と、それぞれの地域社会の可能性に対しての広い視野を持ち、自らを厳しく律することができる高い倫理観を備えた「志」の高い「多摩グローバル人材(多摩のローカリティを究めることにより、グローバルに目を開く“グローバルティ”という思想を持つ、多摩地域の活性化をリードするグローバル人材)」を育成する。

経営情報学部では、「多摩グローバル人材」の具体像として、企業経営、情報科学に関する学術と応用を教育研究し、高度の経営情報知識と、これを支える豊かな教養とを合わせ備えた創造的、実践的な問題解決能力を有する人材を育成する。

2 学位授与方針

経営情報学部の教育課程においては、以下の学修成果目標を達成し「志」を実現できる力すなわち「学士力」を備え、学則に定める単位数などの卒業要件を満たした者に卒業を認定し、学位を授与する。

(学修成果目標)

(1) 知識と理解【グローバル社会に対する理解】

基礎的な学力を養い、グローバルとローカルの関係性を意識しながら産業社会で発生する様々な問題に対処していける専門的能力を体系的に修得する。

(2) 思考と判断【考え抜く力】

現状を分析して課題を明らかにできる課題発見力、課題解決に向けたプロセスを明らかにして準備できる計画力、課題に対して新たな価値や解決方法を生み出せる創造力を修得する。

(3) 関心と意欲【社会の発展に貢献する力】

物事に積極的に取り組む主体性や目的に向かって周囲の人を動かしていける巻き込み力、失敗を恐れずに粘り強く行動していける実行力を身につけ、国際的ビジネスの場で活躍するとともに、わが国の産業社会の健全たる発展に貢献できるようになる。

(4) 表現と技能【役割分担により組織目標の達成に貢献する力】

自分の意思をわかりやすく伝えることができる発信力や、聞き上手になって積極的に相手の意見を受け止められるようになる傾聴力、組織の中で自分がどのような役割を果たすべきなのかが理解できる状況把握力や協調性を身につけることで、コミュニケーション能力を高め、所属する組織や社会の活動に貢献できるようになる。

(5) 高い志【環境対応能力と先進性】

社会における多様な価値観や文化的な背景に対する理解や配慮ができる多様性や、社会のルールや約束を守ることができる規律性を身につけ、社会の発展に積極的に関与していくという高い志を確立する。

【経営情報学科 ディプロマポリシー】

1 育成する人材

経営情報学科では、「多摩グローバル人材」の具体像として、情報科学に関する学術と応用を教育研究し、高度の経営情報知識と、これを支える豊かな教養とを合わせ備えた創造的、実践的な問題解決能力を有する人材を育成する。

2 学位授与方針

経営情報学科では、以下の能力を身に付け、「志」を実現できる力すなわち「学士力」を備え、学則に定める単位数などの卒業要件を満たした者に卒業を認定し、学位を授与する。

- (1) 情報技術を活用し、専門知識を生かして課題を発見し解決できる能力
- (2) 複雑で多様な情報を効率的に収集・処理し、分析の結果から課題を解決できる能力
- (3) 経営学の考え方や概念および専門的知識を理解し説明する能力
- (4) 高いレベルのコミュニケーション能力を身につけ、国内外のビジネスの場で発言できる能力

【事業構想学科 ディプロマポリシー】

1 育成する人材

事業構想学科では、「多摩グローバル人材」の具体像として、企業経営に関する学術と応用を教育研究し、高度の経営情報知識と、これを支える豊かな教養とを合わせ備えた創造的、実践的な問題解決能力を有する人材を育成する。

2 学位授与方針

事業構想学科では、以下の能力を身に付け、「志」を実現できる力すなわち「学士力」を備え、学則に定める単位数などの卒業要件を満たした者に卒業を認定し、学位を授与する。

- (1) グローバルとローカルという2つの地域的視点で組織のマネジメントができる能力
- (2) 社会科学を基軸とした幅広い教養を深めるとともに、経済学の知識で社会の発展に貢献できる能力
- (3) 経営学の考え方や概念および専門的知識を理解し説明する能力
- (4) 高いレベルのコミュニケーション能力を身につけ、国内外のビジネスの場で発言できる能力

3.経営情報学部カリキュラムポリシー・経営情報学科カリキュラムポリシー・事業構想学科カリキュラムポリシー

【経営情報学部 カリキュラムポリシー】

経営情報学部では、「志」の高い「多摩グローバル人材」を育成するため、ディプロマポリシーで掲げた5つの学修成果目標を以下の2つの柱で構成されたカリキュラムに反映させて、学生自身が各自の「志」を実現できる「学士力」を身につけ、人間的成長を促すための教育を体系化された教育課程で実現する。

講義の成績は、一般講義科目に関してはシラバスに記載された到達目標への達成度により絶対評価で評価する。ゼミなどの演習科目に関しては、ディプロマポリシーで掲げた5つの学修成果目標を評価の視点として、ゼミ活動によりどれだけ成長できたのかを総合的に判断し評価する。

(1)ゼミ中心教育カリキュラム

双方向型少人数教育をゼミの形でを行い、産業社会や地域社会の中で直面する問題を採り上げ、それらを分析し解決策を提案・実施する活動を通じて、問題解決の実践力を養う実学教育プログラムを展開する。

まず入学直後の1年次には、「プレゼミ」を履修する。「プレゼミ」は、今後のキャリア形成を見据えて自らの「志」を確立することと、ゼミ活動を通じて主体的学びの態度を習得することで、自らが学修計画を立てる大学での学びへのソフトランディングを図ることを目的としている。

2年次から4年次までの3年間は、担当教員の指導の下、特定の専門分野を深掘りするための演習を行う「ホームゼミ」を履修し、問題解決能力に磨きをかけると共に、社会に対する関心を広げ、グループワークを通じてコミュニケーション能力を高める。

「プレゼミ」と「ホームゼミ」により、卒業まで連続した4年間ゼミを実施する。

(2)実践的知識獲得のための講義カリキュラム

問題の分析・解決策提案・実践に必要な考え方や知識を幅広く学ぶため、学際性、国際性、実際性を考慮した科目群を配置する。講義内容は、知識断片の記憶を排し、どのような手法や知識がどのような問題解決に役立つかを中心に教える実学教育プログラムを展開する。

経営情報学部のカリキュラムは、豊かな人格形成の基礎となる教養と産業社会に関する基礎的な理解を得ることを目的とする「産業社会科目群」と、特定の専門領域に関する問題を探求する「問題解決学科科目群」によって構成している。

1年次の段階では、基礎的な知識の習得と自らの可能性と向き合って将来の方向性を発見し「志」を固めていくことを目標に「産業社会科目群」を中心に履修し、2年次以降に所属する学科とホームゼミの選択を通じて、集中的に学んでいく専門領域を確定させる。

2年次からは、「経営情報学科」と「事業構想学科」に分かれ、それぞれの学科の「問題解決学科科目群」の科目を中心に、ホームゼミ担当教員の指導の下、体系的に専門教育を実施する。

また、「多摩グローバル人材」となるためには、実体験に基づく実社会に対する深い理解が重要なことから、一般講義科目のほか、インターンシップなどのキャリア教育科目、および課外活動や留学などの特別教育プログラムを幅広く実施する。特別教育プログラムでの学修成果については、国内のものは「アクティブラーニング実践」で、海外のものは「Study Abroad」で単位の認定を行う。

【経営情報学科 カリキュラムポリシー】

経営情報学科では、必修科目である経営情報論を中心に、「情報デザイン」「データサイエンス」科目群の選択必修科目を履修することで、情報技術や情報処理の知識や技術を学び、実践的な活用能力を身に付ける。また、学部共通として、経営理論、経営管理、マーケティング、会計、キャリアデザイン、コミュニケーションスキルに関する科目を設置している。さらに、学生の問題意識や興味に合わせて、選択科目として「グローバル」「ローカル」に関する科目群を設置している。

【事業構想学科 カリキュラムポリシー】

事業構想学科では、必修科目である事業構想論を中心に、「グローバル」「ローカル」科目群の選択必修科目を履修することで、組織マネジメント、国際経済や国際ビジネス、地域経済や地域ビジネスについて学び、事業を構想する力(創造的問題解決力)を身に付ける。また、学部共通として、経営理論、経営管理、マーケティング、会計、キャリアデザイン、コミュニケーションスキルに関する科目を設置している。さらに、学生の問題意識や興味に合わせて、選択科目として「情報デザイン」「データサイエンス」に関する科目群を設置している。

< 学科教育の特徴 >

- (1) 1年次に「教養基礎科目」「専門基礎科目」を履修することで、学部学科の基礎知識を習得した上で、2年次から学科に所属する。
- (2) 学科間の垣根は低く、他学科の科目を履修できるなど、ゆるやかな学科制を採用することで、複眼的思考に優れた人材の育成を図る。
- (3) 2年次より「専門コア科目」を履修することで、学科の専門知識を中心に学ぶ。
- (4) 学生が自身の問題意識や興味に合わせて、自主的に学びを深められるよう、「特別選択科目」科目群を設置している。

4. 学生生活

(1) 学生証

学生証は本学学生の身分を証明する重要なものです。請求のあったときにはいつでも提示できるよう、常に携帯してください。

《提示が必要なとき》

- ・授業で出席登録を行うとき
- ・通学定期を購入するとき
- ・多摩大学所定の学期末試験を受けるとき
- ・各種証明書の発行を受けるとき
- ・学割証の発行を受けるとき
- ・その他、本学教職員から請求があったとき

《学生証に関する注意》

- ・他人に貸与又は譲渡してはいけません。
- ・紛失や盗難にあった場合は、直ちに学生課に届け出て、再発行(有料)の申請をするとともに、必ず最寄りの警察に届け出てください。(再発行の手続は学生課にて行ってください。)
- ・破損・汚損した場合や記載事項に変更のある場合は、学生課に届け出てください。
- ・卒業、退学等により学籍を離れるときは、直ちに学生課に返却してください。

(2) 事務局窓口受付時間

平日 8:50~17:00

土曜日 8:50~12:30

(日曜日、祝祭日、その他大学所定の休日は休業)

(3) T-NEXT(多摩大学学生ポータル)

T-NEXTは多摩大学の学生と教職員だけが閲覧できる学内システムです。ウェブシラバス、履修登録／確認、学科選択、掲示板、講義サポート(講義資料掲示等)といった大学での重要な申請や通知を行います。T-NEXTへのログインの方法や個人のパスワード等については、入学時のオリエンテーション等にて説明を実施しています。不明な場合はメディア・サービス(ALC)にお問い合わせください。

(4) 大学からの伝達、連絡事項の確認方法について

学生の皆さんに対する伝達、連絡等は、原則としてT-NEXTのみでお知らせします。掲示した事項については、周知されたものとして取扱います。大変重要な掲示をT-NEXTで行いますので**必ず毎日確認**してください。

(5) 伝言・照会

電話による伝言依頼、住所、電話番号の照会等は受け付けておりません。教員と連絡が取りたい場合は、T-NEXTで掲示する教員のメールアドレス宛に連絡してください。

5. 授 業

(1) セメスター制

1年を春学期と秋学期の2学期に分けて授業を行います。そして、本学では1学期毎に授業が完結するセメスター制を導入し、半期に集中して授業を行うことにより学修効果を高めています。

学期毎に15回の授業を実施します。週2回授業を行う科目もあります。授業は学年暦に従って行われ、祝日に授業を行うこともあります。

春学期 4月1日(水)から9月22日(火)まで

秋学期 9月23日(水)から翌年3月31日(水)まで

(2) 単位制

科目の履修には単位制が採用されています。単位制とは、科目毎に一定の基準により単位数が決められ、その科目を履修し、試験等に合格して単位を修得する制度です。その修得した単位数が卒業の要件として定められた基準を満たした場合に、卒業が認められます。

(3) 授業時間

授業時間は1時限90分で行います。

時 限	授 業 時 間
1時限	9時00分 ～ 10時30分
2時限	10時40分 ～ 12時10分
昼休み	12時10分 ～ 13時00分
3時限	13時00分 ～ 14時30分
4時限	14時40分 ～ 16時10分
5時限	16時20分 ～ 17時50分
6時限	18時00分 ～ 19時30分

(4) 休講

①教員の届出による休講

担当教員が病気や学会出張等止むを得ない理由により出講できない場合には、補講・代講等の講義又は課題等への振替を行います。

②交通機関の運休による休講

交通機関の事故・ストライキ、台風・地震等自然災害による交通機関の運休が発生した場合、休講の措置を取ります。この場合は、T-NEXT又は本学ホームページにてその旨を掲示します。

③台風および大雪にともなう休講

台風や大雪等により警報が発せられた場合、休講措置をとります。この場合は、T-NEXT又は本学ホームページにてその旨を掲示します。

(5) 補講

補講は休講等に対する措置として、平常授業を補うために行うものです。補講日は原則土曜日に設定されていますので、土曜日に授業を行うことがあります。補講が行われる科目や日時についてはT-NEXTの掲示にて連絡します。

(6) 欠席届の手続き

止むを得ない理由で欠席をする(した)場合は、担当教員に欠席届(書式は自由)を提出してください。但し、欠席届を考慮するかしないかは、担当教員の判断に任されています。

(7) 授業中のマナー

本学は、学生の皆さんが安心して勉学に励むことができるよう、快適で安全な環境づくりを心がけています。学生の皆さんが快適で楽しいキャンパスライフを送ることができるよう、下記のとおり授業中のマナー向上にご協力をお願い致します。

・私語

*授業中は控えてください。

・教室の入退室

*遅刻はしないでください。

*授業担当教員の断りなく途中退出はしないでください。

・出席

*代返等、出席に関する不正行為はやめましょう。

代返：学校で出欠をとる際、出席しない者に代わって出席をよそおって返事をする事。

出典 三省堂大辞林

・携帯電話・スマートフォン端末等の使用

*授業担当教員の指示・許可を得て授業のために使用する場合を除き、これらの機器の使用を禁止します。

*授業中は必ず電源を切るかマナーモードに設定してください。

*授業に関係のないイヤホンの使用は禁止します。

・飲食

*原則できませんが、授業担当教員の指示に従ってください。

・ゴミの放置

*授業中や休み時間に出たゴミは、教室に放置せずゴミ箱へ入れ、教室美化に努めましょう。

(8) アクティブ・ラーニング(以下「AL」)

学生を中心とした効果的な学修を目指し、主体的な深い学びを得るため、下記のAL手法を取り入れた授業を行います。

AL手法の概要

【授業形態】

- 講義：知識伝達・習得を目標とする授業
- 演習：既習知識の応用を目標とする授業

【活動人数：個人(一人での回答・作業)】

■プレゼンテーション

聴衆に対して、計画を提案したり、グループ活動の成果を報告するといった目的で行われる発表形態の一つ。パワーポイントなどのソフトを使用し、スライドを提示しながら発表者(プレゼンター)がプレゼンを行う形態が一般的である。図表や音声、映像などを使用するなどの工夫を行うことで、情報を簡潔かつわかりやすく伝えることが求められる。

■ワークシート

授業で使用するワークシートに、授業中に気づいたことや疑問点などを書いたり、先生から問われたことについて記入をする。双方向性を高めながら振り返ることが可能となる。また、ワークシートに記入した内容に基づいてペアワークを行ったり、グループでの意見交換を行ったりすることもある。

■T/Fテスト(正誤テスト)

授業内容について、「True」「False」のいずれかで回答可能な質問が提示されるので、答えを個人で考え、選択肢を選んだりプリントに記入して回答する。回答はペアやグループ、クラスで発表することで情報を共有し、場合によって、教員が解説を行う。

■問題作成

その回の授業内容に基づいて問題を学生自身が作成する手法。

提示された問題の形式に合わせて問題を考え、用紙などに記入する。作成した問題は周囲の人と交換し互いに回答しあうことも可能。

【活動人数：ペア(二人一組で意見交換をしたり回答を考える)】

■ペアワーク

ペアになった学生同士で、先生から提示された問題や質問について互いの意見を話し合う。目的や用途に応じて、時間制限を設けたり、役割を明確にし、考えやアイデアを引き出したり、二人の話す機会を均等にするための工夫がなされる。

■相互教授法

ペアになった学生で、先生役と学生役を決め、先生役と学生役で話し合いながら、分からない言葉や概念について意味を明確化する。学生役は、話し合った内容についての質問を作成して先生役に問いかけ、先生役はそれに回答する、というやり取りを行う。

■ピア・レビュー

既習知識の応用を目標とする授業で行われる。各自でレポート課題に取り組み、ペアを作ってお互いのレポートを交換する。教員から提示されたレポートへのコメントの観点に沿って、相手のレポートを読み、メモやコメントを記入する。そのメモやコメントに基づいて口頭でも説明しあう。そして意見交換を踏まえ、自分のレポートを改善する。

■ノートテイキング=ペア

ペアとなった二人の学生が協力して各自のノートの改善を行う。他の学生と作業することで違う視点からのノートの再検討が可能となる。まずは各自で授業内容の重要なポイントをまとめたノートを作成し、ペアになった相手にノートに沿って、重要なポイントについて説明を行う。相手の説明を聞く中で、自分のノートへの補足や、相手の説明で理解できない、納得できない箇所がないか考え、もしあればその内容について話し合う。

■ロールプレイ

自分を別の人物や役割に置くことで、既習知識やスキルを応用したり、問題解決などを体験することができる手法。理論を現実を使うことを検討できることに加え、多くの役割を設けて、多様な視点から物事を捉えることにつなげることができる。

状況設定やシナリオに合わせてペアやグループを構成し、役割分担をした後、自分の役に基づいて発言したり、議論を行ったりする。シナリオの中で求められる結論に達したり、役の特徴に沿って展開できるようになるなどの目標が達成された時点でロール・プレイは終了し、ペア・グループ内での気づきや疑問について話しあい、またクラス全体で議論内容を共有する。

【活動人数：グループ(複数人からなるグループ内で話し合ったり、問題に取り組む)】

■PBL(Problem-based Learning/Project-based Learning)

少人数グループである「問題」を選び、問題に対して、「情報の共有」「状況の評価」「問題解決のための計画」を紙やボードにまとめながらグループで問題の状況・解決方法について話し合う。

問題の状況から把握できる事実を洗い出し、「導かれる問題解決のアイデア」、「アイデア実現の為に何を行う必要があるのか」をグループで話し合う。また、必要に応じて、話し合った内容に基づいて調査や活動を行う。行った調査や活動について評価や振り返りを行い、活動の計画を見直す。

■Ball-toss(ボール-トス)

複数人のグループで円型に並び、学生から学生へランダムにボールを投げ渡すと同時に、質問を投げかける。質問された方は受け取りながら回答し、次の学生へ質問とともにボールを投げ渡す手法。

■ジグソー法

あるトピックやテーマについて複数の視点で書かれた資料をグループに分かれて読み、自分なりに納得できた範囲で説明を作って他の人とその情報を交換し、交換した知識を統合してテーマ全体の理解を構築する手法。

「他者に説明することで自分の考えをはっきりさせる」、「他者の考えをできるだけ正確に理解して自分の知識を増やす」、「自分の考え方と人の考え方を比較して、それらを統合する」などが期待される。

■ Buzz Group(バズ=グループ)

4~6人のグループを作り、クラス全体に提示された質問について制限時間内に話し合い、グループごとで考えを出し合い、その後クラス全体で情報を共有する。クラス全体の話し合いの前に小さなグループ内で意見交換を行うことで、自分の考えを表現する機会が与えられ、様々な意見やアイデアを引き出すことができる。

■ KJ法

各自で収集したデータやアイデアを一つにつき一枚のカードに記述し、カードを似通ったものごとに複数のグループにまとめ、そのグループに見出しをつけて図解化・体系化を行う。収集したデータや、ブレインストーミングによってさまざまなアイデアを出した後に、それらのデータやアイデアを統合したり、整理することで新たな発想を生み出したり、問題解決の糸口を探ることができる。

■ マインド・マップ

紙に頭の中の思考・発想を図式化するもの。用紙の中心に、表現したい概念の中心となるキーワードやイメージを置き、そこから放射状に関連するキーワードやイメージをつなげていく。個人の思考を整理したり、グループでの話し合いで豊かな発想を引き出すことを目指すものである。

6.初年次教育科目の指定について

(1) 初年次教育科目について

大学での学修は、自ら資料・情報を収集し、自ら考えをまとめていく側面が強くなります。また、皆さんは「経営情報学」等の専門分野を学ぶこととなります。よって、1年生のときに、大学での学修の基礎的能力を皆さんに養ってもらいたいと思います。

このような観点から、多摩大学経営情報学部では「初年次教育科目」を指定しています。

カリキュラム上、必修科目ではない科目もありますが、「初年次教育科目」のうち★のついた科目は、1年生のうちに原則必ず履修することになります。

※初年次教育(First Year Experience)とは

主に大学新生を対象にした、高校からの“円滑な移行”をはかり、学習及び人格的な成長の実現にむけて、大学での学習と生活を“成功”させるべく、総合的につくられた教育プログラム(2006,中央教育審議会大学分科会大学教育部会)

(2) 初年次教育の内容と科目の指定について(全員履修科目14科目)

内容 (中央教育審議会大学分科会大学教育部会)	科目 ★：全員履修科目
①大学生活への適応(大学生活、学修、対人関係等)	★プレゼミⅠ ★プレゼミⅡ
②大学に必要な学修技術の獲得(読み、書き、批判的思考力、調査、タイムマネジメント)	★スタディースキル入門 ★ビジネススキル入門 ITコミュニケーション入門 ★ビジネス数学基礎
③当該大学への適応	★多摩学Ⅰ(④⑥を兼ねる。) ★多摩学Ⅱ(④⑥を兼ねる。)
④自己分析	★多摩学Ⅰ(③⑥を兼ねる。) ★多摩学Ⅱ(③⑥を兼ねる。)
⑤ライフプラン・キャリアプランづくりへの導入	ライフ・デザイン ★キャリア・デザイン入門
⑥学修目標・学修動機の獲得	★多摩学Ⅰ(③④を兼ねる。) ★多摩学Ⅱ(③④を兼ねる。)
⑦専門領域への導入	★地域ビジネス入門 ★グローバルビジネス入門 ★ITビジネス入門 ★グローバルヒストリーⅠ ★グローバルヒストリーⅡ ★IT活用法Ⅰ マーケティング入門 マクロ経済学 ミクロ経済学

7.履修登録・確認・削除

(1)履修登録とは

履修登録とは、授業を受けて単位を修得するために、毎学期の始めに、各自の履修計画に基づき、シラバス、カリキュラム表、その学期の時間割表等から履修授業を決定して、履修授業の登録をする手続きのことです。履修登録を怠ったり、登録漏れや間違いがあったりした場合は、たとえ授業に出席し試験を受けたとしても単位は修得できません。従って、この手続きは、最も重要な手続きであることを認識してください。また履修系統図をホームページに記載しており、卒業までに身につけることができる知識・能力が、どのように授業に対応しているのかを図に示してあります。履修する授業を選択する際の参考にしてください。

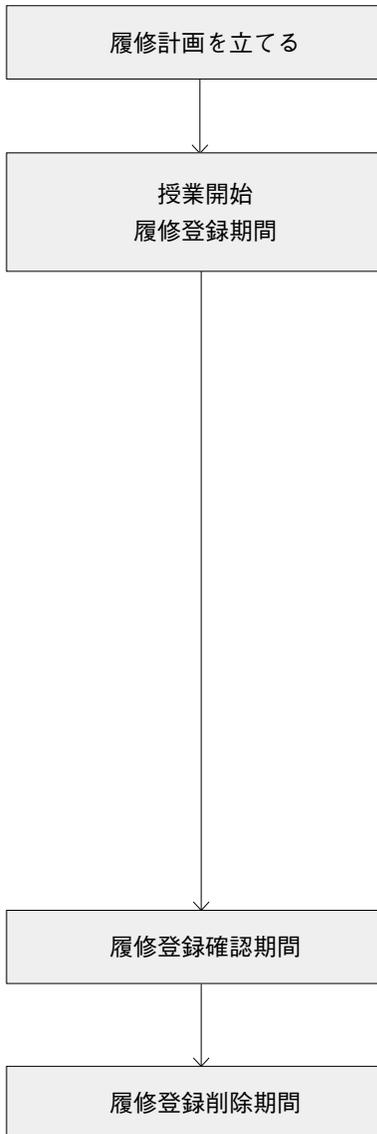
(2)登録・確認方法

T-NEXT上から授業を登録・確認する方法により行います。なお、T-NEXTの利用に当たっては、多摩大学共通アカウント及び共通パスワードが必要です。

(3)履修登録・確認上の注意

- ・履修登録及び確認は、パソコン及びスマートフォン等から行ってください。なおパソコン教室等学内のパソコンも使用可能です。
- ・履修登録・確認期間中（特に最終日）は学内のパソコン及び学内ネットワークの利用が混雑したり、パソコンの動作が遅くなったりすることが予想されます。登録に当たってはあらかじめ履修授業を決定した上で、十分に時間的な余裕を持って行ってください。
- ・履修登録・確認に当たっての詳細な注意事項は別途指示します。

(4)履修登録・確認・削除の流れ



前学期の成績結果、シラバス、カリキュラム表、時間割等から、履修する授業を決定してください。

授業開始

春学期：4月6日（月）

秋学期：9月23日（水）

履修登録期間

春学期：4月6日（月）から4月17日（金）

秋学期：9月23日（水）から10月6日（火）

- ・クラス分けされている科目があるので注意してください。
- ・履修について、卒業要件や進級要件で不明なことや確認したいことがある場合、提供されている資料を確認した後、教務課窓口まで相談に来てください。
- ・登録は、T-NEXT上から行います。T-NEXT利用に当たっては、多摩大学共通アカウント及び共通パスワードが必要です。不明な場合は、メディア・サービス(ALC)で再発行手続きをしてください。
- ・ネットワークの混雑を考え、登録は余裕を持って行ってください。

履修登録確認期間

春学期：4月20日（月）から4月24日（金）

秋学期：10月7日（水）から10月13日（火）

履修登録削除期間

春学期：5月8日（金）から5月21日（木）

秋学期：10月21日（水）から11月4日（水）

(5) 履修登録に関するルールについて

- ・履修登録確認期間中での科目追加、削除は、それぞれ8科目を上限とします。
- ・履修登録確認期間後の科目追加、削除は、それぞれ4科目を上限とします。ただし、履修登録確認期間最終日を含め、14日以内とします。その最終日が休業日の場合であっても手続き可能な日程は延長しません。
- ・履修登録確認期間中と履修登録確認期間後14日以内に履修登録科目の追加や削除を希望する学生は、教務課で所定の申請用紙にて変更及び登録申請を行います。本申請は当該学期中1度のみとします。
- ・履修登録削除期間中に、単位修得が困難だと判断した科目等の削除申請を教務課で所定の申請用紙にて受け付けます。

○履修登録確認期間から履修登録削除期間における追加、削除可能科目数

	履修登録確認期間中	履修登録確認期間後 14日以内	履修登録削除期間中
追加	8科目まで	4科目まで	不可
削除	8科目まで	4科目まで	上限なし ※但し、登録した全科目を 削除することは不可

(6) 履修者の選抜について

1 履修者の選抜について

初回の講義に出席した者の中から、教室の規模に見合った受講者数等になるように選抜を行い、履修許可者を決定します。

履修許可者において、履修を希望しない者は、履修登録期間中はT-NEXTにて、履修登録確認期間以降は、教務課で申請用紙にて削除の申請をしてください。

2 履修許可者の選抜方法

履修許可者は、各科目の初回の講義に出席した者の中から選抜します。初回の講義に出席しなかった者には履修許可を与えません。

ただし、初回講義の出席に関して正当な理由(病気や事故、交通機関の障害など)があつて参加できなかった者で、履修登録期間中に担当教員にその旨を申し出、その理由が証明できる場合に限り、追加で履修許可の選抜を受けることができることとします。

8. 学期末試験

(1) 学期末試験の種類

① 定期試験

各学期末の試験期間中に実施する試験であり、春学期定期試験と秋学期定期試験の年2回実施します。

○ 試験期間

春学期定期試験：7月20日（月）、7月21日（火）

秋学期定期試験：1月26日（火）、1月27日（水）

○ 試験時間

試験時間は1時限60分間です。

時 限	試験時間	遅刻限度時間	途中退席可能時間
1 限	9:20～10:20	9:40	10:00
2 限	10:50～11:50	11:10	11:30
昼休み	11:50～12:30		
3 限	12:30～13:30	12:50	13:10
4 限	14:00～15:00	14:20	14:40
5 限	15:30～16:30	15:50	16:10
6 限	17:00～18:00	17:20	17:40

※平常講義の時間割と時間帯・教室・曜日が異なりますので発表された時間割に注意してください。

※試験開始後、20分以上遅刻した場合、受験を認めません。

※試験開始から40分経過以降、途中退席を認めず。

○受験には学生証を必要としますが、試験当日持参しなかった場合、教務課にて仮学生証の交付を行います。その際には、手数料として、100円を徴収します。

・仮学生証の有効期限は当該試験期間内に限ります。

・一旦納入された手数料は、如何なる理由があっても返金しません。

② 授業内試験

○各担当教員の判断により、講義時間中等に必要に応じて随時実施する試験をいいます。

○仮学生証の発行は行いません。試験当日に学生証を持参しなかった場合には、各担当教員によって取扱いが異なります。

③ 定期試験の追試験

定期試験中に病気又は止むを得ない理由により、試験を受験できなかった者には、審査の上で追試験を許可することがあります。

○ 手続き期間

教務課窓口への事前届出を原則としますが、事後となった場合は、当該科目の試験当日を含む3日以内とします。なお、3日目が休日の場合は、その翌業務日までとします。（期間の過ぎた申請は、一切受け付けません。）

○**手続きの際に必要な書類**

1. 追試験受験願 (教務課に備付)
2. 理由を証明する添付書類
 - 病気・ケガ・・・・・・・・医師の診断書
 - 交通機関の遅延等・・遅延証明書等
 - 忌引・・・・・・・・・・会葬礼状等
 - その他・・・・・・・・理由を詳細に記載した書類等

○**追試験受験料 (1科目につき1,000円。但し、1親等以内の忌引の場合は免除します。)**

○**試験日**

- 春学期試験の追試験・・・・7月28日(火)
- 秋学期試験の追試験・・・・2月5日(金)

④**再試験**

卒業年次の学生は、その年度の春学期又は秋学期に履修登録して不合格になっている場合に限り、多摩大学履修規程第5条に基づき、再試験を受験できる可能性があります。

再試験を実施する科目は制限がありますので十分注意してください。

○**多摩大学経営情報学部再試験実施要領**

この要領は、多摩大学履修規程第5条に基づき、再試験の実施に関する事項を定める。

- ① 再試験を実施する科目は、卒業年次に履修登録を実施している演習科目以外の科目を原則とする。
- ② 再試験は次の要件をすべて満たした者に受験を許可する。
 - ・再試験対象の科目が不合格となり卒業に必要な単位が不足してしまった場合
 - ・再試験対象の科目において、指定された課題を提出、又定められた試験を受験している場合
 - ・不足単位が3科目以内の場合
 - ・再試験を受験し合格(単位修得)することにより不足単位が満たされ「卒業」が可能となる場合
 - ・授業科目担当者が再試験受験を許可した場合
- ③ 再試験を受験できる科目数は、不足単位の科目数とする。
- ④ 再試験の受験が許可された者は、指定の期間内(発表日を含め3日以内、なお、3日目が休日の場合は、その翌業務日まで)に再試験料を納入し、受験手続を完了しなければならない。
- ⑤ 再試験の合格評価は、履修規程第9条に定める合格最低評価をもって行う。

※詳細に関しては、別途T-NEXTの掲示等にて告知します。

○**手続きの際に必要な書類**

- 再試験受験申請書 (教務課に備付)

○**再試験受験料 (1科目につき3,000円。但し、1親等以内の忌引の場合は免除します。)**

○**試験日**

- 別途連絡します。

(2) 試験実施上の注意事項

受験できる科目は、「履修登録」をして許可を受けた科目に限ります。受験に際して次のことに留意してください。

- 1 試験会場は講義が行われる講義室とは異なるので注意すること。
- 2 講義が行われる曜日・時限とは異なるので注意すること。
- 3 科目によっては講義室を2教室以上使用して試験を行うので、指示された講義室を間違えないように注意すること。
- 4 受験の際は、学生証を必ず持参し、試験中は机上の右上に置くこと。
- 5 学生証を持参しない場合は受験することはできない。但し仮学生証の交付を受けた場合は 受験を認める。
- 6 答案には学部、学科、学籍番号、氏名を明瞭に記入すること。記入してない答案は無効となる。
- 7 受験中、机上におくことのできる物品は、学生証のほかには次のとおり。
 - (1) 筆記用具(ボールペン、万年筆、鉛筆、鉛筆削り、消しゴム)
 - (2) 時計(ただし計算機、辞書機能付きは除く)
 - (3) 目薬・ティッシュペーパー
 - (4) 当該科目の持込許可条件で許可されたもの
- 8 試験会場には、携帯電話を持ち込まないこと。もし持参している場合は電源を必ず切りカバンの中に入れてしまうこと。
- 9 荷物は床もしくは隣のイスの上に置くこと(机の中には入れないこと)。本やノート等は必ずカバンの中に入れてしまうこと。
- 10 遅刻は試験開始後20分までであれば、認める。この際、遅刻した学生の席は各教室毎に指定されているので監督者の指示に従うこと。
- 11 その他、監督者の指示に従うこと。
- 12 試験時間中に不正行為をした者は、事実を確認の上多摩大学学則、多摩大学履修規程第8条及び多摩大学学生懲戒規程により処罰される。

不正行為とは

- ① 替え玉受験すること(依頼すること、引き受けること)。
- ② 答案や他人が所持する持込可能指定物を交換すること(双方)。
- ③ カンニングペーパー(器具)を使用すること
(机上・机の中・衣服の中であって、たとえ使用していなくても不正行為とする)。
- ④ 机、その他(壁、床、手など)に記入し、これを利用しようとする事。
- ⑤ 他人の答案や他人が所持する持込可能指定物を見て写すこと及び故意に他人に見せること。
- ⑥ 試験中に携帯で話すこと。試験時間中に電話が鳴動した場合、理由にかかわらず、不正行為とみなす。
- ⑦ 「解答はじめ。」の指示の前に問題冊子を開き解答を始めること。
- ⑧ 「解答やめ。鉛筆を置いてください。」の指示に従わず、鉛筆を持ち解答を続けること。
- ⑨ その他上記①～⑧に類似する行為。
- ⑩ 監督者の指示に理由なく従わないこと。

9. 成績

(1) 成績評価

成績評価は、学期末試験(定期試験・授業内試験)、レポート及び平常点等を総合的に考慮して絶対評価で判定します。

	一般講義科目		演習科目	
	成績通知書	成績証明書	成績通知書	成績証明書
合格	A +	A +	P	P
	A	A		
	B	B		
	C	C		
不合格	F	表示しない	F	表示しない
認定※	N	N	N	N

※認定科目の単位認定、又編入学における単位認定等の場合のみ付与します。

認定科目 ※2020年度入学生適用分		
インターンシップ I・II	AP 数学	Study Abroad I～VIII
アクティブ・ラーニング実践 I～VIII	単位互換科目	

(2) 成績発表

成績は、T-NEXT で発表します。

なお、保証人宛に「成績通知書」を発送します。

春学期「成績通知書」発送予定・・・9月中旬頃

秋学期「成績通知書」発送予定・・・3月中旬頃

(3) 成績評価に関する問合せ(成績照会)

当該学期の成績評価について確認をしたい場合は、次学期授業開始日より14日間以内の窓口受付時間に、教務課に申し出てください。

(4) 評定平均(GPA)

成績評価方法の一種として授業科目毎の成績評価を5段階 (A+又はP、A、B、C、F) で評価し、それぞれに対して4.0、3.0、2.0、1.0、0のグレードポイントを付与し、この単位当たり平均(GPA、グレード・ポイント・アベレージ)を出します。認定(N)はGPA計算に算入しません。

GPAは成績優秀者奨学金や、早期卒業、退学勧告、学科選択の学生選考、ホームゼミ選抜、教職課程の履修許可など幅広く活用されます。

GPA除外科目 ※2020年度入学生適用分		
インターンシップⅠ・Ⅱ	AP数学	Study AbroadⅠ～Ⅷ
アクティブ・ラーニング実践Ⅰ～Ⅷ	教職に関する科目	単位互換科目

(5) 褒賞制度

本学では学業や社会活動において優れた業績を挙げた学生を褒賞する制度を設けています。

褒賞名	褒賞内容
最優秀学生賞 (Best Academic Achievement Award)	大学在学中4年間を通じて総合的に最も優秀な成績を収めた卒業予定者5名及び本学学生として模範的行為のあった者若干名
成績優秀学生賞 (Academic Achievement Award of the semester)	成績優秀者奨学金受給学生に該当する者
優秀学生賞 (Academic Achievement Award)	各講義科目において顕著に優れた成績を収めた学生(各科目1名) 教育補助(SA)として著しい功績があった者 成績向上が顕著な者(GPAの向上等を基準) 学業に対する取組みが真摯で他の模範となる者
社会・研究活動賞 (Outstanding Achievement Award in Research and Social Activities)	コンテスト等において優秀な成果を収めた者又は団体 課外活動で全国大会に出場する等顕著な成績をおさめた者又は団体 在籍期間を通じて学生会等の活動にて特に貢献のあった者 優れた研究成果又は論文を発表した者又は団体
学長賞及び学部長賞 (President's Award, Dean's Award)	本学学生として模範的行為のあった者又は団体

(6) 成績優秀者奨学金制度

学費減免を目的として各学期の評定平均(GPA)上位者20名に対して奨学金を付与します。

- ・区分1…各学期分の授業料
- ・区分2…5万円

(1) 評定平均算出方法

$$\frac{4.0 \times ([A+] \text{と} [P] \text{の修得単位数}) + 3.0 \times ([A] \text{の修得単位数}) + 2.0 \times ([B] \text{の修得単位数}) + 1.0 \times ([C] \text{の修得単位数})}{\text{総履修登録単位数}([F] \text{の単位数を含む})}$$

(2) 選定要領

- ・入試合格時に選定され奨学金を支給されている者(1年次生)及び、支給日当日に在籍していない者は対象外とする。

- ・ 区分1の奨学生候補者数の選定
 - ア、教職に関する授業科目を除く5科目以上を履修していて評定平均が3.2以上の者とする。
 - イ、複数名が対象となった場合は、評定平均最上位の者とする。
 - ウ、評定平均最上位の者が複数名の場合は、修得単位の多い者、修得単位数が同一の場合は、その者全員を区分1とし、奨学金は、区分1の定員(1名)を超える人数分については区分2の支給額を加え、均等に分配することとする。なお、均等に分配できない場合は、小数点を切り捨てる。
- ・ 区分2の奨学生候補者数は、教職に関する授業科目を除く5科目以上を履修している者とし、区分1と併せて各学期20名以内とする。

(7)成績不良者

下記のとおり「望ましい学年・学期別の単位修得目安(累積)※2020年度入学生適用分」を定めています。よって、本目安に到達できなかった場合は、成績不良者として保証人にご報告します。

年次	学期	各学期修得単位数	望ましい学年・学期別の単位修得目安(累積)	成績不良者の基準
1年次生	春学期	各学期16単位から20単位修得してください。 なお、各学期20単位(前期のGPAが2.8以上の場合は、各学期24単位)まで履修登録することができます。	16単位～20単位	16単位未満
	秋学期		32単位～40単位	32単位未満
2年次生	春学期		48単位～60単位	48単位未満
	秋学期		64単位～80単位	64単位未満
3年次生	春学期		80単位～100単位	—
	秋学期		96単位～120単位以上	—
4年次生	春学期	112単位～124単位以上	—	
	秋学期	124単位以上	—	

(8)成績不振者

「各学期の修得単位数が4単位未満の学生」を成績不振者として定義しています。

成績不振者は教員と今後の就学に関して面談を実施する場合があります。

(例)

- ・ 1つの学期で3単位修得→成績不振者として面談実施の可能性がります。
- ・ 1つの学期で4単位修得→成績不振者として面談は実施しません。

(9)退学勧告について

多摩大学成績評価規程により、在籍期間やGPA、修得単位数、修学的意思に応じて退学勧告を行っています。

10. 学科選択

(1) 学科選択とは

経営情報学部において入学後の1年間は、学生は学科には所属せず経営情報学部の学生として広く経営情報の素養を身につけることが期待されます。学生の皆さんは、2年進級時に経営情報学科もしくは事業構想学科に所属する事になり、これを学科選択と言います。学科選択においては学生の志望が優先されますが、志望者数が定員を超えた場合は、GPAによる選抜が行われます。

(2) 選抜方法

基本的に1年次の成績（1年間の※評定平均（GPA））をもとに選抜を行います。不本意な結果を招かないために、1年次に努力を払うようにしてください。

※評定平均(GPA)算出方法

$$\frac{4.0 \times ([A+] \text{と} [P] \text{の修得単位数}) + 3.0 \times ([A] \text{の修得単位数}) + 2.0 \times ([B] \text{の修得単位数}) + 1.0 \times ([C] \text{の修得単位数})}{\text{総履修登録単位数}([F] \text{の単位数を含む})}$$

(3) 申請手続きの流れ

仮選択

プレゼミ I で詳細を連絡します。

学科説明会

プレゼミ II で詳細を連絡します。

申請期間

プレゼミ II で詳細を連絡します。

所属学科発表

2021年3月にT-NEXTにて通知します。

11.進級・卒業要件、履修上限、認定科目

(1)平成31(2019)年度・令和2(2020)年度入学生

1.『進級要件』

<3年次から4年次への進級>

3年次終了時点で88単位以上修得していなければ、4年次に進級できません。

2.『卒業要件』

卒業要件単位数については、以下の表のとおり単位を修得する必要があります。

科目群		必修	特別選択必修 ^{※1}	選択必修 ^{※1}		選択	合計
産業社会	教養	6	2	10	(語学) 4	60	124
	ビジネス			6			
問題解決学	学科専門	4		16 ^{※2}			
	演習 ^{※3}	16					
合計		26	2	36		60	124

※1 「特別選択必修」「選択必修」区分の科目のうち、卒業要件単位を超えて履修した科目は、「選択」区分に算入されます。

※2 所属している学科以外の「選択必修」区分の科目を履修した場合は、「選択」区分に算入されます。

※3 演習科目群の卒業要件として算入される単位数の上限は36単位までとします。

3.『履修上限』

各学期20単位まで履修登録することができます。ただし、前期のGPAが2.8以上の場合は、各学期24単位まで履修登録することができます。

履修上限外科目は以下とします。

履修上限外科目		
インターンシップ I・II	AP数学	Study Abroad I～VIII
アクティブ・ラーニング実践 I～VIII	教職に関する科目	立志特講 I～III
問題解決学特講 I～III	単位互換科目	ホームゼミ I～VIII

履修上限外科目のうち立志特講 I～III・問題解決学特講 I～III・ホームゼミ I～VIII以外はGPA除外科目とします。

4.『認定科目』

認定科目		
インターンシップ I・II	AP数学	Study Abroad I～VIII
アクティブ・ラーニング実践 I～VIII	単位互換科目	

(2)平成30(2018)年度入学生

1.『進級要件』

＜3年次から4年次への進級＞

3年次終了時点で88単位以上修得していなければ、4年次に進級できません。

2.『卒業要件』

卒業要件単位数については、以下の表のとおり単位を修得する必要があります。

科目群		必修	特別選択必修 ^{※1}	選択必修 ^{※1}		選択	合計
産業社会	教養	6	2	10	(語学) 4	72	124
	ビジネス						
問題解決学	学科専門	4		16 ^{※2}			
	演習 ^{※3}	6		4			
合計		16	2	34		72	124

※1 「特別選択必修」「選択必修」区分の科目のうち、卒業要件単位を超えて履修した科目は、「選択」区分に算入されます。

※2 所属している学科以外の「選択必修」区分の科目を履修した場合は、「選択」区分に算入されます。

※3 演習科目群の卒業要件として算入される単位数の上限は36単位までとします。

3.『履修上限』

各学期24単位まで履修登録することができます。

履修上限外科目は以下とします。

履修上限外科目		
インターンシップⅠ・Ⅱ	キャリア・デザインⅡ～Ⅳ	AP数学
Study AbroadⅠ～Ⅶ	アクティブ・ラーニング実践Ⅰ～Ⅶ	教職に関する科目
立志特講Ⅰ～Ⅲ	問題解決学特講Ⅰ～Ⅲ	単位互換科目

履修上限外科目のうち立志特講Ⅰ～Ⅲ・問題解決学特講Ⅰ～Ⅲ以外はGPA除外科目とします。

4.『認定科目』

認定科目		
インターンシップⅠ・Ⅱ	キャリア・デザインⅡ～Ⅳ	AP数学
Study AbroadⅠ～Ⅶ	アクティブ・ラーニング実践Ⅰ～Ⅶ	単位互換科目

(3)平成29(2017)年度・平成28(2016)年度入学生**1.『進級要件』**

<3年次から4年次への進級>

3年次終了時点で88単位以上修得していなければ、4年次に進級できません。

2.『卒業要件』

卒業要件単位数については、以下の表のとおり単位を修得する必要があります。

科目群		必修	特別選択必修 ^{*1}	選択必修 ^{*1}		選択	合計
産業社会	教養	4	2	10	(語学) 4	74	124
	ビジネス						
問題解決学	学科専門	4		16 ^{*2}			
	演習 ^{*3}	6		4			
合計		14	2	34		74	124

※1 「特別選択必修」「選択必修」区分の科目のうち、卒業要件単位を超えて履修した科目は、「選択」区分に算入されます。

※2 所属している学科以外の「選択必修」区分の科目を履修した場合は、「選択」区分に算入されます。

※3 演習科目群の卒業要件として算入される単位数の上限は36単位までとします。

3.『履修上限』

各学期24単位まで履修登録することができます。

履修上限外科目は以下とします。

履修上限外科目		
インターンシップⅠ・Ⅱ	キャリア・デザインⅡ～Ⅳ	AP数学
Study AbroadⅠ～Ⅶ	アクティブ・ラーニング実践Ⅰ～Ⅶ	教職に関する科目
立志特講Ⅰ～Ⅲ	問題解決学特講Ⅰ～Ⅲ	単位互換科目

履修上限外科目のうち立志特講Ⅰ～Ⅲ・問題解決学特講Ⅰ～Ⅲ以外はGPA除外科目とします。

4.『認定科目』

認定科目		
インターンシップⅠ・Ⅱ	キャリア・デザインⅡ～Ⅳ	AP数学
Study AbroadⅠ～Ⅶ	アクティブ・ラーニング実践Ⅰ～Ⅶ	単位互換科目

(4)平成27(2015)年度入学生

1.『進級要件』

<3年次から4年次への進級>

3年次終了時点で88単位以上修得していなければ、4年次に進級できません。

2.『卒業要件』

卒業要件単位数については、以下の表のとおり単位を修得する必要があります。

科目群		必修	特別選択必修 ^{*1}	選択必修 ^{*1}		選択	合計
産業社会	教養	4	2	10	(語学) 4	74	124
	ビジネス						
問題解決学	学科専門	4		16 ^{*2}			
	演習 ^{*3}	6		4			
合計		14	2	34		74	124

※1 「特別選択必修」「選択必修」区分の科目のうち、卒業要件単位を超えて履修した科目は、「選択」区分に算入されます。

※2 所属している学科以外の「選択必修」区分の科目を履修した場合は、「選択」区分に算入されます。

※3 演習科目群の卒業要件として算入される単位数の上限は36単位までとします。

3.『履修上限』

各学期24単位まで履修登録することができます。

なお、在学期間が36ヶ月以上の者は、24単位以上履修登録することができます。

※在学期間には、多摩大学学則第22条 3に基づき休学期間を含まないものとします。

履修上限外科目は以下とします。

履修上限外科目		
インターンシップⅠ・Ⅱ	キャリア・デザインⅡ～Ⅳ	AP数学
Study Abroad Ⅰ～Ⅷ	アクティブ・ラーニング実践Ⅰ～Ⅷ	教職に関する科目
立志特講Ⅰ～Ⅲ	問題解決学特講Ⅰ～Ⅲ	単位互換科目

履修上限外科目のうち立志特講Ⅰ～Ⅲ・問題解決学特講Ⅰ～Ⅲ以外はGPA除外科目とします。

4.『認定科目』

認定科目		
インターンシップⅠ・Ⅱ	キャリア・デザインⅡ～Ⅳ	AP数学
Study Abroad Ⅰ～Ⅷ	アクティブ・ラーニング実践Ⅰ～Ⅷ	単位互換科目

(5)平成26(2014)年度入学生

1.『進級要件』

<3年次から4年次への進級>

3年次終了時点で88単位以上修得していなければ、4年次に進級できません。

2.『卒業要件』

卒業要件単位数については、以下の表のとおり単位を修得する必要があります。

科目群	必修	特別選択 必修科目	選択必修 ^{※1}		選択科目	合計
基本科目	14	2	A区分	10	68	124
			B区分			
			C区分			
			E区分	4		
			D区分			
基礎科目						
専門科目				16		
演習科目 ^{※2}	6			4		
合計	20	2		34	68	124

※1 基本科目、専門科目、演習科目「選択必修」区分の科目のうち、卒業要件単位を超えて履修した科目は、「選択」区分に算入されます。

※2 演習科目群の卒業要件として算入される単位数の上限は36単位までとします。

3.『履修上限』

各学期24単位まで履修登録することができます。

なお、在学期間が36ヶ月以上の者は、24単位以上履修登録することができます。

※在学期間には、多摩大学学則第22条 3に基づき休学期間を含まないものとします。

履修上限外科目は以下とします。

履修上限外科目		
インターンシップⅠ・Ⅱ	キャリア・デザインⅡ～Ⅳ	AP数学
Study Abroad Ⅰ～Ⅶ	アクティブ・ラーニング実践Ⅰ～Ⅶ	教職に関する科目
立志特講Ⅰ～Ⅲ	問題解決学特講Ⅰ～Ⅲ	単位互換科目

履修上限外科目のうち立志特講Ⅰ～Ⅲ・問題解決学特講Ⅰ～Ⅲ以外はGPA除外科目とします。

4.『認定科目』

認定科目		
インターンシップⅠ・Ⅱ	キャリア・デザインⅡ～Ⅳ	AP数学
Study Abroad Ⅰ～Ⅶ	アクティブ・ラーニング実践Ⅰ～Ⅶ	単位互換科目

(6)平成25(2013)年度入学生

1.『進級要件』

<3年次から4年次への進級>

3年次終了時点で88単位以上修得していなければ、4年次に進級できません。

2.『卒業要件』

卒業要件単位数については、以下の表のとおり単位を修得する必要があります。

科目群	必修	特別選択 必修	選択必修 ^{*1}		選択科目	合計
基本科目	14	2	A区分	10	68	124
			B区分			
			C区分			
			E区分			
			D区分	4 ^{*2}		
基礎科目						
専門科目				16		
演習科目 ^{**3}	6			4		
合計	20	2		34	68	124

※1 基本科目、専門科目、演習科目「選択必修」区分の科目のうち、卒業要件単位を超えて履修した科目は、「選択」区分に算入されます。

※2 基本科目群D区分の4単位は、同一言語で満たすものとします。

※3 演習科目群の卒業要件として算入される単位数の上限は36単位までとします。

3.『履修上限』

各学期24単位まで履修登録することができます。

なお、在学期間が36ヶ月以上の者は、24単位以上履修登録することができます。

※在学期間には、多摩大学学則第22条 3に基づき休学期間を含まないものとします。

履修上限外科目は以下とします。

履修上限外科目		
インターンシップⅠ・Ⅱ	キャリア・デザインⅡ～Ⅳ	AP数学
Study AbroadⅠ～Ⅷ	アクティブ・ラーニング実践Ⅰ～Ⅷ	教職に関する科目
立志特講Ⅰ～Ⅲ	問題解決学特講Ⅰ～Ⅲ	単位互換科目

履修上限外科目のうち立志特講Ⅰ～Ⅲ・問題解決学特講Ⅰ～Ⅲ以外はGPA除外科目とします。

4.『認定科目』

認定科目		
インターンシップⅠ・Ⅱ	キャリア・デザインⅡ～Ⅳ	AP数学
Study AbroadⅠ～Ⅷ	アクティブ・ラーニング実践Ⅰ～Ⅷ	単位互換科目

12. 教職課程

教員の免許状を取得したい学生は、教職課程を履修して必要な単位を修得してください。

(1) 多摩大学経営情報学部にて取得可能な免許状

学部	学科	種類	教科
経営情報学部	※1) 経営情報学科	高等学校教諭(一種)	情報・※2) 数学

※1) 事業構想学科を学科選択した学生は、多摩大学では高等学校教諭(一種)情報の教職免許を取得することはできません。

※2) 明星大学での数学科教員免許取得について

高等学校教諭(一種)数学の教員免許は、明星大学通信教育部の科目等履修生として取得することができますが、多摩大学で高等学校教諭(一種)情報の教員免許を取得することが必須条件になります。数学科教員免許取得を希望する学生は、1年生の秋学期授業終了までに教務課へお問い合わせください。基本的には2~4年生で科目履修をすることとなります。

(2) 最低修得単位数(教育職員免許法で定められている最低単位数)

大学において修得することを必要とする科目の最低単位数				
教育職員免許法 施行規則 第66条の6に 定める科目	教科及び 教科の指導法に 関する科目	教科の基礎的理解に 関する科目	道徳、総合的な学習 の時間等の指導法 及び生徒指導、 教育相談等に 関する科目	教育実践に 関する科目
8	24	10	8	5

(3) 教育職員免許法施行規則第66条の6に定める科目(基礎教育科目)

(◎：必修科目、○：選択必修科目)

免許法施行規則に定める科目及び単位数		左記に対応する開設授業科目
科目	単位数	科目
日本国憲法	2	◎法学(憲法)
※1) 体育	2	○スポーツⅠ
		○スポーツⅡ
※2) 外国語コミュニケーション	2	○English Expression Ⅱ
		○韓国語Ⅱ
		○中国語Ⅱ
※3) 情報機器の操作	2	◎IT活用法Ⅱ

※1) スポーツⅠまたはスポーツⅡより1科目選択必修

※2) English Expression Ⅱ、韓国語Ⅱ、中国語Ⅱの3科目より1科目選択必修

※3) 2014年度入学生及び2015年度入学生は、「業界研究Ⅰ」を履修してください。「IT活用法Ⅱ」は基礎教育科目としてカウントされません。

2016年度以降入学生は、「IT活用法Ⅱ」を履修してください。「業界研究Ⅰ」は基礎教育科目としてカウントされません。

(4)教職に関する科目

<2019・2020年度入学生>

(◎：必修科目)

免許法施行規則に定める科目区分	本学で開講している科目名	配当年次・開講学期	単位数
教育の基礎的理解に関する科目	◎教育原理	1-秋	2
	◎教職概論	1-秋	2
	◎教育制度論	2-春	2
	◎教育心理学	3-春	2
	◎特別支援教育概論	2-集中(春学期)	1
	◎教育課程総論	2-春	1
道徳、総合的な学習の時間の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目	◎特別活動・総合的な学習の時間の指導法	2-秋	2
	◎教育方法	2-秋	2
	◎生徒指導・進路指導論	2-秋	2
	◎教育相談	3-秋	2
教育実践に関する科目	◎教育実習	4-集中(春秋学期)	3
	◎教職実践演習	4-集中(秋学期)	2
合計			23

※ 教職に関する科目及び教科に関する科目のうち「情報科教育法Ⅰ・Ⅱ」は、卒業要件単位に含まれません。(教育心理学、教育相談を除く。)

<2018年度入学生>

(◎：必修科目)

免許法施行規則に定める科目区分	本学で開講している科目名	配当年次・開講学期	単位数
教職の意義等に関する科目	◎教職概論	1-秋	2
教育の基礎理論に関する科目	◎教育原理	1-秋	2
	◎教育心理学	3-春	2
	◎特別支援教育概論	2-春	1
	◎教育制度論	2-春	2
教育課程及び指導法に関する科目	◎情報科教育法Ⅰ	3-春	2
	◎情報科教育法Ⅱ	3-秋	2
	◎特別活動・総合的な学習の時間の指導法	2-秋	2
	◎教育課程総論	2-春	1
	◎教育方法	2-秋	2
生徒指導、教育相談及び進路指導等に関する科目	◎生徒指導・進路指導論	2-秋	2
	◎教育相談	3-秋	2
教職実践演習	◎教職実践演習	4-秋	2
教育実習	◎教育実習	4-集中(春又は秋)	3
合計			27

※ 教職に関する科目は、卒業要件単位には含まれません。(教育心理学、教育相談を除く。)

(5)教科に関する科目

[◎印は必修科目、○印は選択必修科目]

本学で開講している科目名

免許法施行規則に定める科目区分	2015年度開講科目	単位	2016年度開講科目	単位	2017年度開講科目	単位	2018年度開講科目	単位	配当年次	2019年度開講科目	単位	配当年次	2020年度開講科目	単位	配当年次
基礎教育科目 (66条の6に定める科目)	◎法学(憲法)	2	◎法学(憲法)	2	◎法学(憲法)	2	◎法学(憲法)	2	1-秋	◎法学(憲法)	2	1-秋	◎法学(憲法)	2	1-秋
	◎スポーツ I	2	◎スポーツ I	2	◎スポーツ I	2	◎スポーツ I	2	1-春秋	◎スポーツ I	2	1-春秋	◎スポーツ I	2	1-春秋
	◎English Expression II	2	◎English Expression II	2	◎English Expression II	2	◎English Expression II	2	1-秋	◎English Expression II	2	1-秋	◎English Expression II	2	1-秋
	◎韓国語 II	2	◎韓国語 II	2	◎韓国語 II	2	◎韓国語 II	2	1-秋	◎韓国語 II	2	1-秋	◎韓国語 II	2	1-秋
	◎中国語 II	2	◎中国語 II	2	◎中国語 II	2	◎中国語 II	2	1-秋	◎中国語 II	2	1-秋	◎中国語 II	2	1-秋
◎ビジネスコミュニケーション入門 I	2	◎ビジネスコミュニケーション入門 I	2	◎ビジネスコミュニケーション入門 I	2	◎ビジネスコミュニケーション入門 I	2	2-春	◎ビジネスコミュニケーション入門 I	2	2-春	◎ビジネスコミュニケーション入門 I	2	2-春	
◎IT活用法 II	2	◎IT活用法 II	2	◎IT活用法 II	2	◎IT活用法 II	2	2-春	◎IT活用法 II	2	2-春	◎IT活用法 II	2	2-春	
情報社会及び情報倫理	◎情報通信と社会	2	◎情報倫理	2	◎情報倫理	2	◎情報倫理	2	2-春	◎情報倫理	2	2-春	◎情報倫理	2	2-春
	○データフィクション I	2	◎経営とセキュリティ	2	◎経営とセキュリティ	2	◎経営とセキュリティ	2	3-秋	◎経営とセキュリティ	2	3-秋	◎経営とセキュリティ	2	3-秋
	◎情報法	2	◎情報法	2	◎情報法	2	◎情報法	2	2-秋	◎情報法	2	2-秋	◎情報法	2	2-秋
コンピュータ及び情報処理(実習を含む)	◎ビジネス数学基礎	2	◎ビジネス数学基礎	2	◎ビジネス数学基礎	2	◎ビジネス数学基礎	2	1-春	◎ビジネス数学基礎	2	1-春	◎ビジネス数学基礎	2	1-春
	◎Webサービス開発	2	◎Webサービス開発	2	◎Webサービス開発	2	◎Webサービス開発	2	3-秋	◎Webサービス開発	2	3-秋	◎Webサービス開発	2	3-秋
	◎Webプログラミング	2	◎Webプログラミング	2	◎Webプログラミング	2	◎Webプログラミング	2	3-春	◎Webプログラミング	2	3-春	◎Webプログラミング	2	3-春
	◎デザインワークショップ I	2	◎デザインワークショップ I	2	◎デザインワークショップ I	2	◎デザインワークショップ I	2	2-春	◎デザインワークショップ I	2	2-春	◎デザインワークショップ I	2	2-春
	◎デザインワークショップ II	2	◎コンピュータ概論	2	◎コンピュータ概論	2	◎コンピュータ概論	2	1-秋	◎コンピュータ概論	2	1-秋	◎コンピュータ概論	2	1-秋
情報システム(実習を含む)	◎データフィクション II	2	◎データフィクション II	2	◎データベース II	2	◎データベース II	2	2-秋	◎データベース II	2	2-秋	◎データベース II	2	2-秋
	◎システムデザイン	2	◎データベース I	2	◎データベース I	2	◎データベース I	2	2-春	◎データベース I	2	2-春	◎データベース I	2	2-春
	◎システム分析概論	2	◎データフィクション I	2	◎情報工学概論	2	◎情報工学概論	2	3-秋	◎情報工学概論	2	3-秋	◎情報工学概論	2	3-秋
	◎ITデザイン II	2	◎情報工学概論	2	◎情報工学概論	2	◎情報工学概論	2	3-秋	◎情報工学概論	2	3-秋	◎情報工学概論	2	3-秋
	◎ITデザイン I	2	◎コンピュータネットワーク活用	2	◎コンピュータネットワーク活用	2	◎コンピュータネットワーク活用	2	3-春	◎コンピュータネットワーク活用	2	3-春	◎コンピュータネットワーク活用	2	3-春
マルチメディア表現及び技術(実習を含む)	◎クリエイティブデザイン II	2	◎クリエイティブデザイン II	2	◎クリエイティブデザイン II	2	◎クリエイティブデザイン II	2	2-秋	◎クリエイティブデザイン II	2	2-秋	◎クリエイティブデザイン II	2	2-秋
	◎ITデザイン I	2	◎情報ネットワーク	2	◎情報ネットワーク	2	◎情報ネットワーク	2	3-春	◎情報ネットワーク	2	3-春	◎情報ネットワーク	2	3-春
	◎クリエイティブデザイン I	2	◎クリエイティブデザイン I	2	◎クリエイティブデザイン I	2	◎クリエイティブデザイン I	2	2-春	◎クリエイティブデザイン I	2	2-春	◎クリエイティブデザイン I	2	2-春
	◎Webデザイン I	2	◎Webデザイン I	2	◎Webデザイン I	2	◎Webデザイン I	2	2-春	◎Webデザイン I	2	2-春	◎Webデザイン I	2	2-春
	◎Webデザイン II	2	◎Webデザイン II	2	◎Webデザイン II	2	◎Webデザイン II	2	2-秋	◎Webデザイン II	2	2-秋	◎Webデザイン II	2	2-秋
情報と職業	◎経営情報論 I	2	◎経営情報論 I	2	◎経営情報論 I	2	◎経営情報論 I	2	2-春	◎経営情報論 I	2	2-春	◎経営情報論 I	2	2-春
	◎情報と職業	2	◎情報と職業	2	◎情報と職業	2	◎情報と職業	2	3-春	◎情報と職業	2	3-春	◎情報と職業	2	3-春
各教科の指導法(情報教員対象の科目を含む)	◎情報科教育法 I	2	◎情報科教育法 I	2	◎情報科教育法 I	2	◎情報科教育法 I	2	3-春	◎情報科教育法 I	2	3-春	◎情報科教育法 I	2	3-春
	◎情報科教育法 II	2	◎情報科教育法 II	2	◎情報科教育法 II	2	◎情報科教育法 II	2	3-秋	◎情報科教育法 II	2	3-秋	◎情報科教育法 II	2	3-秋

・選択必修科目のうち14単位以上修得すること。

※1 2016年度以降入学生は、「IT活用法 II」を履修してください。「業界研究 I」は2014・2015年度入学生用の科目のため、教科に関する科目としてカウントされません。

※2 2018年度以前入学生は、「教職に関する科目」に「情報科教育法 I・II」が含まれています。

(6)教科に関する科目における新旧対照表

	2015年度開講科目	2016年度開講科目	2017年度開講科目	2018年度開講科目	2019年度開講科目	2020年度開講科目	備考	
変更科目一覧	スポーツ I	→ スポーツ I	→ スポーツ I スポーツ II	→ スポーツ I スポーツ II	→ スポーツ I スポーツ II	→ スポーツ I スポーツ II		
	English Expression II	→ English Expression II	→ English Expression II	→ English Expression II	→ English Expression II	→ English Expression II		
	韓国語 II	→ 韓国語 II	→ 韓国語 II	→ 韓国語 II	→ 韓国語 II	→ 韓国語 II		
	中国語 II	→ 中国語 II	→ 中国語 II	→ 中国語 II	→ 中国語 II	→ 中国語 II		
	ビジネスコミュニケーション入門 I	→ ビジネスコミュニケーション入門 I	→ ビジネスコミュニケーション入門 I	→ 業界研究 I	→ 業界研究 I	→ 業界研究 I		
	情報通信と社会	→ 廃止	→ 廃止	→ 廃止	→ 廃止	→ 廃止	廃止	
	データフィクション I (区分:情報社会及び情報倫理)	→ 廃止	→ 廃止	→ 廃止	→ 廃止	→ 廃止	廃止	
	デザインワークショップ I	→ デザインワークショップ I	→ デザインワークショップ I	→ プログラミング入門 I	→ プログラミング入門 I	→ プログラミング入門 I	→ プログラミング入門 I	
	デザインワークショップ II	→ 廃止	→ 廃止	→ 廃止	→ 廃止	→ 廃止	廃止	
	コンピュータサイエンス	→ 廃止	→ 廃止	→ 廃止	→ 廃止	→ 廃止	廃止	
	情報探査法	→ 廃止	→ 廃止	→ 廃止	→ 廃止	→ 廃止	廃止	
				→ データベース II	→ データベース II	→ データベース II	→ データベース II	
				→ データベース I	→ データベース I	→ データベース I	→ データベース I	
				→ 廃止	→ 廃止	→ 廃止	→ 廃止	廃止
				→ 廃止	→ 廃止	→ 廃止	→ 廃止	廃止
			→ データフィクション I (区分:情報システム(実習を含む))	→ 廃止	→ 廃止	→ 廃止	廃止	
			→ ITデザイン II	→ 情報工学概論	→ 情報工学概論	→ 情報工学概論		
			→ ITデザイン I	→ 情報ネットワーク	→ 情報ネットワーク	→ 情報ネットワーク		
			→ 経営とセキュリティ	→ 経営とセキュリティ	→ 経営とセキュリティ	→ 経営とセキュリティ		
			→ 廃止	→ 廃止	→ 廃止	→ 廃止	廃止	
			→ 廃止	→ 廃止	→ 廃止	→ 廃止	廃止	

(7) 教職課程の履修について

- ①教職課程の履修要件は原則として、教員採用試験の受験を1年次で希望していること。
 - ②教職課程の履修が認められる者。
 - ・1年次終了時
2年次に進級する際に、原則として、1年次中に修得した単位が40単位以上で、かつその成績の評定平均が2.1以上に達した者。
- 評定平均の算出方法
- $$\frac{4.0 \times (\text{「A+」と「P」の修得単位数}) + 3.0 \times (\text{「A」の修得単位数}) + 2.0 \times (\text{「B」の修得単位数}) + 1.0 \times (\text{「C」の修得単位数})}{\text{総履修登録単位数(「F」の単位数を含む)}}$$
- ・2年次終了時
 - ・80単位以上（教職に関する科目は除く）修得していること。
 - ・3年次終了時
 - ・110単位以上（教職に関する科目は除く）修得していること。
 - ・原則として、教職に関する科目の必修科目（教育実習と教職実践演習を除く）をすべて修得していること。
 - ・原則として、必修科目34単位全てと、選択必修科目の内14単位以上修得していること。
- ③「教育実習」3単位のうち1単位は「事前・事後指導」とし、これに出席しなければ教育実習の単位は認定されない。

(8) 教育実習について

- ①教育実習の目的
教育実習は、学校教育の実状や教員の実務を理解し、これまで大学で身につけた知識や理論を基に、実習校において、教育職員として必要な現場の知識や技術、態度等を身につけるための実地修練の場です。
- ②教育実習の実施時期
教育実習の実施時期は4年次の6月を原則としますが、実習校(基本的に母校実習)の都合により、他の時期に行うこともあります。
- ③教育実習の説明会
4年次の教育実習履修有資格者を対象に、4月に教育実習説明会を実施し、教育実習申込書、教育実習日誌等を配布します。
- ④教育実習手数料
教育実習手数料は、教育実習申込みの際に教務課窓口にて納入してください。
→ 教育実習手数料 20,000円
- ⑤実習校との事前打ち合わせ
教育実習開始前に、教育実習についての打ち合わせが実習校で行われます。実習に際しての指導を受けたり、実習生の準備状況の報告を行ったりするもので、実習に欠かせない重要なものです。必ず出席してください。日時は実習校の教員と調整をして決定します。(2年次終了頃～3年次)

(9) 教員免許状の申請について

- 大学から東京都教育庁へ教員免許の一括申請を行います。
- 教員免許状申請料は、案内が教務課から届きますので、それに従って所定の料金を教務課窓口にて納入してください。(4年次1月～2月頃)
- 教員免許状申請料 3,700円

13. オフィスアワー制度について

【オフィスアワーとは】

多摩大学経営情報学部では、オフィスアワーを実施しています。オフィスアワーとは、本学の経営情報学部の学生が受講する授業科目に関し、担当の教員に直接質問等をし、教員が返答するために行う面談の時間のことです。1週間の中に必ず90分以上設定し、公表した上で、学生からの相談を受けられるように待機しています。予約は不要です。

※担当授業科目には、ホームゼミを含みます。

※上記「学生」とは、経営情報学部生に加え、経営情報学部の科目を受講している科目等履修生と聴講生を含みます。

※非常勤教員については、授業後の時間及び随時電子メールで質問を受け付けています。詳細はT-NEXTの掲示で確認してください。

【基本原則】

- ・面談内容は授業内容に関することとします。
- ・面談場所は3階教育サポート室奥のラウンジを使用します。
- ・オフィスアワー情報(曜日、時間)については、教育サポート室とホームページで公表します。
URL : <https://www.tama.ac.jp/student/smis/support.html>
- ・1人の面談時間単位は、15分です。

【予約希望の場合】

面談は、予約なしでも可ですが、事前に予約することもできます。希望する学生は、3階教育サポート室カウンターにて、面談予約希望の旨を申し出てください。また申し込む場合は、申込用紙を受け取り、必要事項を記入して提出してください。

※予約申込時間：月曜日～金曜日午前9:30～午後4:30

※直接教員と約束をした場合でも、該当する時間に予約があった場合には予約した学生を優先します。

※曜日や時間、面談場所が変更になる場合があります。

※予約可能な時間は15分間を限度とします。

予約した場合には、面談当日指定された場所に遅れない様に直接行ってください。もしも予約時間定刻に予約した学生がいない場合、他の学生が優先されます。

14. 授業評価アンケート(VOICE)について

全ての講義科目について、学生による授業評価アンケート(VOICE)を実施しています。よりよい講義の実施のために、学生から真面目で率直な意見を聞くマークシートによる無記名式アンケートです。詳細は掲示にてお知らせしますので、積極的に回答してください。

なお、過去の授業評価アンケート(VOICE)結果については、3階図書館にて公開しています。履修する授業を選択する際などに参考にしてください。

15. 単位互換科目について

● 申請資格

多摩大学経営情報学部に在学する学生

● 履修期間・履修単位制限

1. ネットワーク多摩単位互換制度によって開講されている他大学の科目(産学連携科目を含む)を履修することが出来ます。開講科目の詳細については、T-NEXTにて確認してください。
2. 単位互換制度により他大学の科目を履修し、単位を修得できるのは在学中30単位までとし、各学期の履修単位数上限に含みます。また、修得した単位は「単位互換科目」の単位として卒業要件に含みます。

● 履修申請

1. 履修登録は当該科目受講の翌学期に行い、単位認定されます。つまり、他大学の春学期開講科目を受講した場合、多摩大学で秋学期に履修登録し、秋学期の成績となります。
2. 履修申請は、春学期は3月下旬～4月中旬、秋学期は8月下旬～9月中旬(決定次第T-NEXTで発表します)までに「履修申請書」を顔写真添付のうえ教務課に提出してください。申請期間内であっても、開設大学の受付期間が終了している場合には受付が出来ません。原則として、受付期間外の受付は出来ませんので、申請は余裕を持って行ってください。
3. 「履修申請書」を提出し、開設大学より許可を受けた科目は成績等にかかわらず必ず履修することとします。
4. 履修許可者の発表はT-NEXTにて行います。

● 履修上の注意

1. 履修科目は、ネットワーク多摩単位互換制度により開講されている、単位互換科目及び産学連携事業科目のうち、半期完結の科目に限ります。
2. 在籍年次よりも上級年次に配当されている科目を履修することは出来ません。
3. 履修に当たっては移動時間を考慮し、他大学科目を履修する前後の時間に配置された多摩大学科目又は他大学科目を履修することは出来ません。ただし、昼休みを挟む場合はこの限りではありません。

● 授業

1. 休講・補講等の授業及び試験日程等に関する通知は、開設大学が通常所属大学の学生に対する通知方法により行われますので、各自の責任において確認してください。
2. 出席状況によっては、学期の途中であっても開設大学から履修の許可を取り消されたり、試験の受験資格が取り消されることがあります。
3. 学年暦の差異により、多摩大学と開設大学での授業・補講(代講)の日時が重複した場合、どちらの授業に出席するかは自身で判断してください。

● 試験

- 1.開設大学の試験と多摩大学の試験の日時が重複した場合は、その事実が判明したら直ちに 本学の教務課に相談してください。相談が無い場合、対応措置を講じることができません。
- 2.病気等により開設大学の試験を欠席したときは、追試験の受験を認められることがあります。その場合の手続き等は開設大学の定めに従います。
- 3.開設大学における授業及び試験の詳細については、開設大学が配布する資料などで確認してください。

● 成績

- 1.成績評価は開設大学の基準及び表示方法により行い、多摩大学の基準及び表示方法に置き換えて認定します。
- 2.成績の質問は、開設大学の定めるところによるものとします。

● 特別聴講学生証

- 1.特別聴講学生証は、開設大学において交付されます。
- 2.有効期限は開設大学が必要と定める期間とします。また、有効期限内であってもこれを必要としなくなったとき、又は有効期限が満了したときは特別聴講学生証を多摩大学教務課まで返却してください。

● その他

- 1.ネットワーク多摩単位互換制度を利用して履修する授業科目の聴講料は免除されます。ただし、教材費や実習費が必要な授業科目については、実費を徴収されることがあります。
- 2.開設大学における図書館等の施設・設備の利用範囲、自転車・バイクの利用、開設大学で特に注意する事項などについては、開設大学が配布する資料等で確認してください。
- 3.開設大学において急病になった、又は事故にあった場合など、急を要する治療が必要な場合は、開設大学の診療施設を利用することが出来ます。また、直ちに救急措置を講じる必要がある場合、本学の判断により保険情報を含めた個人情報開設大学の診療施設に提供することがあります。
なお、通学及び授業中に事故にあった場合、「学生教育研究災害傷害保険」の適用を受けることが出来る場合がありますので本学の学生課に問い合わせてください。

16.アセスメント

アセスメントとは、専攻・専門にかかわらず、大卒者として社会で求められる汎用的な能力・態度・志向を測定するためのプログラムです。1年生と3年生の4月のオリエンテーション等でアセスメントテストを実施します。外部の一般化された試験を用いて社会で求められる一般的な能力等を測定し、自身の現状を客観的に把握することが出来ます。また、1年生と3年生の両方で受験することで、カリキュラムによる学修成果を、大学の成績とは異なる視点で確認できます。

アセスメントでの気づきを通して、大学での学びをより主体的なものにする原動力としてください。

17.TOEIC 試験補助について

大学から補助を受けて、無料で学内TOEICを受けることができます。

就職や留学に行く際の目安、また自分の英語の実力がどの程度伸びたかを見るよいチャンスです。積極的に活用して、自身の成長の指標にしてください。申し込みの詳細については随時更新しますので、教育サポート室で最新情報を確認してください。

18.多摩大学 学則(抜粋)

第1章 総則

(目的)

第1条 多摩大学(以下「本学」という。)は、永年に及ぶ産業教育における経験を基盤とし、国際化・情報化時代に即応して、学生に高度な外国語能力と世界に通用する教養・最新の経営知識及び的確な情報処理能力を修得せしめ、国際的ビジネスの場で活躍できる人材の育成を目指すとともに、わが国の産業社会の健全たる発展に寄与する指導的人材を育成することを目的とする。

(自己点検及び評価)

第2条 本学は、その教育研究水準の向上を図り、大学の目的及び社会的使命を達成するため、大学における教育研究活動等の状況について自ら点検及び評価を行う。

2 自己点検及び評価について必要な事項は、別に規程で定める。

(個人情報保護)

第3条 本学は、教育・研究活動等の適正かつ円滑な運営を図り、個人情報の有用性に配慮するため、個人の権利及び利益を保護する。

2 個人情報保護について必要な事項は、別に規程で定める。

(ハラスメントの防止)

第4条 本学は、ハラスメントの防止及びハラスメントに起因する問題が生じた場合に、適切な対応を行うための措置を講じ、学生、教育職員及び事務職員等の快適な環境を作り、教育、研究及び就業の機会と権利を保障する。

2 ハラスメントの防止について必要な事項は、別に規程で定める。

第3章 修業年限、在学年限、学年、学期及び休業日

(修業年限)

第10条 本学の修業年限は、4年とする。ただし、第38条の規定により卒業を認められた者については、この限りでない。

(在学年限)

第11条 学生は、8年を超えて在学することができない。

2 編入学、転入学及び再入学の許可を得た者の在学年限は、第20条第2項に定める。

(学年)

第12条 学年は、4月1日に始まり、翌年3月31日に終る。ただし、秋学期入学生については、10月1日に始まり、翌年9月30日に終る。

(学期)

第13条 学年を次の2学期に分ける。

(1)春学期 4月1日から 9月30日まで

(2)秋学期 10月1日から翌年3月31日まで

(休業日)

第14条 授業を行わない日(以下「休業日」という。)は、次のとおりとする。ただし、学長が必要と認めるときは、休業日を変更又は臨時に休業日を定めることができる。

(1)日曜日

(2)国民の祝日に関する法律(昭和23年法律第178号)に規定する休日

(3)本学の開学記念日 10月20日

(4)メモリアルデー 1月16日

- (5)夏季休業 8月10日から9月20日まで
(6)冬季休業 12月25日から 翌年1月5日まで
(7)春季休業 翌年2月10日から3月31日まで
- 2 休業日の変更又は臨時の休業日については、その都度公示する。

第4章 学籍

(入学の時期)

第15条 入学の時期は、学年の始めとする。ただし、再入学及び転入学については、学期の始めとすることができる。

(入学資格)

第16条 本学に入学することができる者は、次の各号の一に該当する者とする。

- (1)高等学校若しくは中等教育学校を卒業した者
- (2)通常の課程による12年の学校教育を修了した者又は通常の課程以外の課程により、これに相当する学校教育を修了した者
- (3)外国において、学校教育における12年の課程を修了した者又はこれに準ずる者で、文部科学大臣の指定した者
- (4)文部科学大臣が高等学校の課程と同等の課程を有するものとして認定した在外教育施設の当該課程を修了した者
- (5)専修学校の高等課程（修業年限が3年以上であることその他の文部科学大臣が定める基準を満たすものに限る。）で文部科学大臣が別に指定するものを文部科学大臣が定める日以後に修了した者
- (6)文部科学大臣の指定した者
- (7)高等学校卒業程度認定試験規則による高等学校卒業程度認定試験に合格した者（旧規程による大学入学資格検定に合格した者を含む。）
- (8)学校教育法第90条第2項の規定により大学に入学した者であって、本学において、大学における教育を受けるにふさわしい学力があると認めたる者
- (9)本学において、個別の入学資格審査により高等学校を卒業した者と同等以上の学力があると認めたる者で、18歳に達した者

(入学の出願)

第17条 本学に入学を志願する者は、入学願書に所定の入学検定料及び別に定める書類を添えて願出しなければならない。

(入学者の選考)

第18条 前条の入学志願者に対しては、試験を行いその成績等により選考する。

(入学手続き及び入学許可)

第19条 入学者の選考に合格した者は、所定の期日までに入学誓約書その他所定の書類を提出し、第42条に規定する、所定の学費を納付しなければならない。

2 学長は、正当な事由なくして期日までに前項の手続きを完了しない者の合格を取消することができる。

3 学長は、第1項の入学手続きを完了した者に入学式において入学を許可し、学生証を交付する。

(編入学、転入学及び再入学)

第20条 次の各号の一に該当し、本学に入学を志願する者は、次のとおりとする。

- (1)大学を卒業した者又は退学した者
 - (2)短期大学又は高等専門学校を卒業した者
 - (3)専修学校専門課程を卒業した者
 - (4)他の大学に在学中の者で、現に在学する大学の学長による転学の承認を得たる者
また、学長は次の各号の一において、入学を許可することができる
- (1)編入学については、編入学定員内において、選考の上、入学を許可することができる。

(2) 転入学及び再入学については、定員に欠員のある場合に限り、選考の上、相当年次に入学を許可することができる。

2 前項の規定により入学を許可された者の既に履修した授業科目及び単位数の取扱い並びに在学すべき年数については、教授会の議を経て学長が決定する。

3 前3条の各規定は、第1項の入学に準用する。

(休学)

第21条 疾病その他特別の事由により修学することができない者は、1学期又は1年間(2学期)を区分として、様式第1に規定する休学願を提出し学長の許可を得て休学することができる。

2 学長は、疾病その他特別の事由により修学することが適当でないと認めるときに、教授会の議を経て、休学を命ずることができる。

(休学の期間)

第22条 休学期間は、1年以内とする。ただし、特別の事由があるときは、1年を限度として休学期間の延長を認めることができる。

2 休学期間は、通算して4年を超えることができない。

3 休学期間は、第10条の修業年限及び第11条の在学年限に算入することができない。

(復学)

第23条 休学期間中にその事由が消滅したときは、様式第2に規定する復学願を提出し学長の許可を得て復学することができる。

(転学)

第24条 他の大学又は短期大学に入学又は転入学を志願しようとする者は、様式第3に規定する転学願を提出し学長の許可を得なければならない。

(転学部)

第25条 転学部を願い出る者は、選考し各教授会の議を経て、学長がこれを許可する。

2 転学部について必要な事項は、別に規程で定める。

(留学)

第26条 外国の大学又は短期大学で修学することを志願する者は、様式第4に規定する留学願を提出し学長の許可を得なければならない。

2 第36条の規定は、前項の留学の場合に準用する。

3 第1項の許可を得て留学した期間は、第11条に定める在学年限に含めることができる。

(願い出による退学)

第27条 病気その他の事由により退学しようとする者は、様式第5に規定する退学願を提出し学長の許可を得なければならない。

(除籍)

第28条 次の各号の一に該当する者は、教授会の議を経て、学長が除籍する。

(1) 第11条に定める在学年限を超えた者

(2) 第22条第2項に定める休学期間を超えてなお修学できない者

(3) 長期間にわたり行方不明の者

(4) 学費の納付を怠り、催促してもなお納付しない者

第5章 教育課程及び履修方法等

(授業科目)

第29条 授業科目は、基礎教育科目及び専門教育科目とする。

2 授業科目の種類及び単位数等は、別表第1及び第5のとおりとする。

(単位の計算方法)

第30条 各授業科目の単位は、1単位の授業科目を45時間の学修を必要とする内容をもって構成すること

を標準とし、次の基準により計算する。

- (1) 講義及び演習については、15時間の授業をもって1単位とする。
 - (2) 実験、実習及び実技については、30時間の授業をもって1単位とする。
- 2 各授業科目の授業は、15週にわたる期間を単位として行う。ただし、学長が本学で教育上特別の必要があると認められるときは、教授会の議を経て、これらの期間より短い特定の期間において授業を行うことができる。

(履修方法)

第31条 学生は、所属する学部及び学科の所定の授業科目を履修しなければならない。

- 2 学生は、当該年度又は当該学期に履修する授業科目を選択し、指定期間内に所定の方法により履修科目を届出なければならない。
- 3 履修について必要な事項は、別に規程で定める。

(単位修得等の認定)

第32条 単位修得の認定その他授業科目履修の認定は、試験その他の審査により行う。

- 2 試験及び審査の方法について必要な事項は、別に規程で定める。

(第1年次に入学した者の既修得単位の認定)

第33条 本学の第1年次に入学した者が大学又は短期大学を卒業又は中途退学している場合、本学で教育上有益と認めるときは、教授会の議を経て、学長が既に修得した単位から、一般教育科目、外国語科目、保健体育科目について、合計30単位を超えない範囲において、本学で修得したものとして認定することができる。

(成績の評価)

第34条 授業科目の成績は、一般講義科目は、A+、A、B、C、Fの5段階、ゼミナール科目はP、Fの2段階の評語をもって表示する。

- 2 表示した成績は、Fを不合格としその他を合格とする。
- 3 第33条、第35条及び第36条により認定された授業科目の成績は、認定(N)の評語をもって表示する。
- 4 成績評価について必要な事項は、別に規程で定める。

(他学部科目の履修)

第35条 学生は、他の学部開設されている授業科目のうち定められた科目を、24単位を超えない範囲において履修することができる。ただし、履修を希望する者は、あらかじめ学部長の許可を得なければならない。

- 2 前項の履修により修得した単位は、卒業に必要な修得単位数に算入することができる。

(他の大学の授業科目の履修)

第36条 学生は、他の大学、短期大学又は外国の大学との協議に基づき、授業科目を履修又は外国の大学に留学することができる。

- 2 前項の規定により履修した授業科目について修得した単位は、教授会の議を経て、学長が60単位を限度として認定することができる。
- 3 本学を休学時に他の大学、短期大学又は外国の大学で修得した単位の認定については、別表第2に掲げる単位認定料を徴収する。

(教育職員免許状取得のための課程)

第37条 本学に教育職員免許状取得のための課程を置く。

- 2 本学において資格の取得できる教育職員免許状の種類及び免許教科は、別表第3のとおりとする。
- 3 教育職員免許状を得ようとする者は、別表第4に定める「教科に関する基礎及び専門科目」及び別表第5に定める「教職に関する科目」を履修しなければならない。
- 4 別表第5に定める「教職に関する科目」は、卒業に必要な単位数に算入することができない。

第6章 卒業及び学位

(卒業)

第38条 本学に4年以上在学し、別表第1に定める所定の単位数以上を修得した者は、教授会の議を経て、学長が卒業を認める。

2 当該学部の学生として3年以上在学した者が、別表第1に定める所定の単位数以上を優秀な成績で修得したと認めるとき、前項の規定にかかわらず教授会の議を経て、学長が早期卒業として認めることができる。

3 早期卒業について必要な事項は、別に規程で定める。

(学位)

第39条 学長は、卒業を認めた者に次の学位を授与し、「卒業証書・学位記」を交付する。

(1) 経営情報学部 学士(経営学)

(2) グローバルスタディーズ学部 学士(グローバルスタディーズ学)

第7章 賞罰

(表彰)

第40条 人物及び学業の優秀な者又は本学の学生として表彰に値する功績があった場合は、教授会の議を経て、学長が表彰する。

(懲戒)

第41条 本学則若しくは本学で定める諸規則に違反した者又はその他学生としての本分に反する行為があった場合は、教授会の議を経て、学長が懲戒する。

2 前項の懲戒の種類は、退学、停学及び訓告とする。

3 懲戒について必要な事項は、別に規程で定める。ただし、定めた規程は、本学則と同様の取扱で公開する。

第8章 学費

(学費の種類及び額)

第42条 学生は、学年毎に授業料その他所定の学費を納付しなければならない。

2 学費の種類及びその額は、別表第2のとおりとする。

(学費の納付)

第43条 授業料は、年額の二分の一ずつを次の2学期に分けて納付しなければならない。

(1) 春学期(4月から9月まで)：納期4月中

(2) 秋学期(10月から翌年3月まで)：納期10月中

2 施設費(維持費)及び図書教材費は、学年始めの月に一括して納付しなければならない。

(復学等の場合の学費)

第44条 春学期又は秋学期の中途において復学又は入学した者は、復学又は入学した月から当該期末までの授業料並びに当学年度分の施設費(維持費)及び図書教材費が未納の場合は、これ等を含め一括して復学又は入学した月に納付しなければならない。

(退学等の場合の学費)

第45条 春学期又は秋学期の途中で退学又は除籍された者の当該学期分の学費は、徴収する。

2 停学期間中の学費は、徴収する。

(休学の場合の学費)

第46条 休学を許可された者又は命ぜられた者は、休学期間が1学期以上にわたる場合においてその学期分の授業料を免除する。ただし、休学在籍料として別表第2に定める額を納付しなければならない。

(研究生等の学費)

第47条 研究生、聴講生及び特別聴講学生の入学検定料、入学金及び授業料等の学費については、別に定める。

(既納の学費)

第48条 既納の入学検定料、入学金及び授業料等の学費は、返還しない。ただし、入学式までに入学を辞退した場合には、既納した入学手続納付金のうち、入学金を除く金額を返還する。

第9章 奨学

(奨学)

第49条 能力があるにもかかわらず経済的理由によって就学が困難な者及び特に学力が優れている者に対して、奨学の方法を講ずることができる。

2 奨学の方法は、奨学金の給付又は貸与とする。

3 奨学について必要な事項は、別に規程で定める。

第10章 研究生、特別聴講学生、科目等履修生、聴講生及び外国人留学生

(研究生)

第50条 本学の特定の専門事項について、研究することを志願する者がいるときは、教育研究に支障のない場合に限り、選考し学長が研究生として入学を許可することができる。

2 研究生について必要な事項は、別に規程で定める。

(特別聴講学生)

第51条 他の大学又は外国の大学の学生で、協議に基づき本学の特定の授業科目を履修することを志願する者がいるときは、学長が特別聴講学生として入学を許可することができる。

2 特別聴講学生について必要な事項は、別に規程で定める。

(科目等履修生)

第52条 本学の特定の授業科目を履修することを志願する者がいるときは、教育研究に支障のない場合に限り、選考し学長が科目等履修生として入学を許可することができる。

2 科目等履修生について必要な事項は、別に規程で定める。

(聴講生)

第53条 本学の特定の授業科目を聴講することを志願する者がいるときは、教育研究に支障のない場合に限り、選考し学長が聴講生として入学を許可することができる。

2 聴講生について必要な事項は、別に規程で定める。

(外国人留学生)

第54条 外国人であって、外国において通常の過程による12年の学校教育課程を修了した者又はこれと同等以上の資格ある者が、本学に入学を志願するときは、日本政府、日本政府の承認した外国政府若しくは日本駐在の外国公館の発行した身分証明書又はこれに準ずる証明書のある者に限り、選考し学長が入学を許可することができる。

2 外国人留学生について必要な事項は、別に規程で定める。

第11章 公開講座

(公開講座)

第55条 地域社会の発展に寄与し、社会人の教養を高め、文化の向上に資するため、本学に公開講座を開設することができる。

2 公開講座について必要な事項は、別に規程で定める。

第12章 寄付講座

(寄付講座)

第56条 学外の機関等から授業科目の運営に必要な経費の寄付を受け、本学の教育研究に資するため、本学に寄付講座を開設することができる。

2 寄付講座について必要な事項は、別に規程で定める。

19. 多摩大学学生懲戒規程

(目的)

第1条 この規程は、多摩大学学則(以下「学則」という。)第41条の規定に基づき学生の懲戒について必要な事項を定めることを目的とする。

(懲戒の定義)

第2条 懲戒対象者は、学則に規定する学部学生、研究生、特別聴講生、科目等履修生、聴講生及び外国人留学生(以下「学生」という。)とする。

2 懲戒は、本学で学生の本分を全うさせるために、学校教育法及び学校教育法施行規則に基づき行う。

3 懲戒は、総合的に検討し教育的見地に基づき行う。

4 懲戒により学生に科す不利益は、懲戒目的を達成するため必要最小限とする。

(懲戒の種類)

第3条 学則第41条第2項で規定した懲戒の種類は、次の各号の一に該当する内容とする。

(1)退学は、学生としての身分を奪う事。

(2)停学は、無期又は有期としその期間の登校を禁止する事。

ア 停学の期間は、在学年限に含め修業年限に含めない。

イ 停学の期間が1ヶ月以下でかつ特別の事情がある場合は、学生委員会で審議し第7条に規定する学長の決定において修業年限に含めることができる。

ウ 有期停学は6ヶ月以下とする。

(3)訓告は、口頭及び文書により嚴重な注意を行い、期限を定めて反省文の提出をさせる事。

(懲戒の基準)

第4条 前条に定める懲戒の基準は、次の各号の一に該当する内容とする。

(1)退学

ア 本学及び社会秩序を乱し、本学の教育研究活動を妨げる行為を行った場合で特に悪質と判断した場合

イ 学内又は学外において重大な非違行為を行った場合で特に悪質と判断した場合

ウ 本学の規則等又は命令に違反する行為を行った場合で特に悪質と判断した場合

エ 本学が実施する試験等において、不正行為を行った場合で特に悪質と判断した場合

オ その他退学を受けた者の行為を教唆若しくは幫助した場合

(2)停学

ア 本学及び社会秩序を乱し、本学の教育研究活動を妨げる行為を行った場合

イ 学内又は学外において悪質な非違行為を行った場合

ウ 本学の規則等又は命令に違反する行為を行った場合で悪質と判断した場合

エ 本学が実施する試験等において、悪質な不正行為を行った場合

オ その他懲戒処分をしても改善の見込みがない場合

(3)訓告

ア 学内又は学外において非違行為を行った場合

イ 本学の規則等又は命令に違反する行為を行った場合

ウ 本学が実施する試験等において、不正行為を行った場合

(審議)

第5条 学部長は、学生が懲戒の対象となりうる事項があったと認められるとき、学生委員会に調査を命ずる。

2 学生委員会は、事実関係の調査及び懲戒の種類を審議を行い、結果を教授会へ報告する。

(調査)

- 第6条 学生委員会は、当該学生及び関係者等から資料の提出を求め、事情及び意見を聴くことができる。
- 2 学生委員会は、当該学生に弁明の機会を与える。
 - 3 当該学生は、弁明の場において必要な証拠を提出し証人の喚問を求めることができる。また、当該学生は、補佐人を指名し補佐を受けることができる。
 - 4 当該学生が、弁明の場を正当な理由なく欠席したとき、弁明の権利を放棄したものとす。
 - 5 学生委員会は、懲戒処分決定前に謹慎を命ずることができる。ただし、謹慎の期間は、3ヶ月以内とする。
 - 6 謹慎は、当該学生の行為が第4条で定める懲戒基準に該当するとき行うことができる。
 - 7 謹慎期間は、停学期間に通算することができる。
 - 8 謹慎期間中は、本学の教育課程の履修登録、履修、試験等の受験及び課外活動へ参加することはできない。ただし、学部長が教育指導上必要と認めた場合は、参加ができる。
 - 9 謹慎期間中に休学又は退学を申し出た場合は、これを認めない。

(懲戒の決定及び解除)

- 第7条 懲戒は、教授会の議を経て、学長が行う。
- 2 懲戒は、様式第1に定める懲戒通知書に理由も添えて当該学生に通知する。ただし、有期停学の場合は、停学解除日も通知する。
 - 3 無期停学の解除を行う場合は、教授会の議を経て、学長が行う。学長は、決定により停学解除を当該学生に文書で通知する。

(再審査)

- 第8条 懲戒を受けた学生は、事実誤認、新事実の発見又はその他正当な理由があるとき、それらを示す資料を添えて文書にし、学長に再審査の申請を行うことができる。
- 2 再審査の申請は、懲戒通知書の決定日から1ヶ月以内とする。
 - 3 学長は、再審査を行うかどうか判断し教授会の議を経て決定する。
 - 4 学長は、再審査の必要があると決定したとき、学部長に再審査を命じる。
 - 5 学長は、再審査の必要がないと決定したとき、当該学生に文書で通知する。
 - 6 再審査の申請を行い学長が教授会の議を経て、懲戒の決定又は解除行うまでは、すでに決定された懲戒内容の変更はできない。
 - 7 再審査の調査は、第6条の規定を準用する。

(停学期間中の措置)

- 第9条 停学期間中は、当該学生が本学の教育課程の履修登録、履修、試験等の受験、及び課外活動へ参加することはできない。ただし、学部長が教育指導上必要と認めた場合は、この限りではない。
- 2 停学期間中は、当該学生に対して定期的な面談及び指導を行う。
 - 3 停学期間中に休学又は退学を申し出た場合は、これを認めない。

(事務)

- 第10条 学生課は、学生の懲戒についての庶務を担当する。

(規程の公開)

- 第11条 本規程は、学生の不利益等につながる重要な規程であることから、本学のホームページ、学生ハンドブック等に学則と同様の取扱で公開する。

20. 多摩大学履修規程(抜粋)

(目的)

第1条 この規程は、多摩大学学則(以下「学則」という。)第31条、第32条及び第34条の規定に基づき、授業科目(以下「科目」という。)の履修、試験及び成績評価について必要な事項を定めることを目的とする。

(科目の履修)

第2条 学生は、学則第31条第2項の履修科目届により、履修しようとする科目を登録しなければならない。

2 登録した科目の変更又は追加は認めない。

3 学科・年次・クラスが指定された科目については、その指定に従い履修するものとする。ただし、科目担当者が特に認めた場合はこの限りでない。

4 同一科目を同一年度に重複して履修することはできない。ただし、教育課程表及び授業時間割表において指示する特定の科目についてはこの限りでない。

5 すでに単位を修得した科目を履修することはできない。

6 履修に関するその他の事項については、教育課程表、講義要綱及び時間割表に定める方法によるものとする。

(定期試験)

第3条 定期試験は、学期末に行う。

2 定期試験を受験することができる者は、履修科目届けを提出したものに限る。

3 受験できる科目は、登録した科目とする。

4 授業料その他の納付金の未納者は、受験することができない。

(追試験)

第4条 追試験は、定期試験を実施した科目(レポートにより実施した科目を除く。)を、病気その他やむを得ない理由により受験できなかった者に対し、本学が指定する日にこれを行うことができる。

2 追試験を希望する者は、医師の診断書等理由を証明するに足る書類を添え、原則として当該科目の試験日を含む3日以内(ただし、日曜日、祝日は除く。)にその申請をし、教務委員会の許可を得なければならない。

3 追試験を許可された者は、所定の期日までに追試験料を納付しなければならない。

(再試験)

第5条 卒業年次の学生及び進級年次の学生が、履修登録した科目のうち不合格になった科目に対し、再試験を実施することがある。

2 再試験についての必要な事項は、別に定める。

3 再試験を許可された者は、所定の期日までに再試験料を納付しなければならない。

(試験の実施)

第6条 第3条、第4条及び第5条の試験に関する事項は別に定める。

(臨時試験)

第7条 臨時試験は、各科目担当者が随時これを行うことがある。

(不正行為)

第8条 第3条、第4条及び第5条に定める試験において、不正行為を行なった者は多摩大学学生懲戒規程に基づき処分する。

2 受験中に答案を持ち出した者については、その受験科目を不合格とする。

(成績照会)

第10条 成績評価について疑問がある場合は、成績の照会を申出ることができる。

2 成績照会は、次学期授業開始後2週間以内に事務局担当窓口に申出なければならない。

21. 多摩大学経営情報学部履修細則

(目的)

第1条 この規程は、多摩大学履修規程第11条の規定に基づき、経営情報学部における授業科目の履修について必要な事項を定めることを目的とする。

(履修上限)

第2条 各学期の履修上限単位数及び履修上限外科目は、別表第1のとおりとする。

(認定科目)

第3条 認定科目は、別表第2のとおりとする。

(細則の改廃)

第4条 この細則の改廃は、教務委員会の議を経て委員長が行う。

附 則

この細則は、令和2年4月1日から施行する。

別表第1

履修上限単位数・履修上限外科目【経営情報学部】

(1) 令和2(2020)年度入学生

各学期20単位まで履修登録することができる。ただし、前期のGPAが2.8以上の場合は、各学期24単位まで履修登録することができる。

履修上限外科目は以下とします。

履修上限外科目		
インターンシップⅠ・Ⅱ	AP 数学	Study Abroad Ⅰ～Ⅷ
アクティブ・ラーニング実践Ⅰ～Ⅷ	教職に関する科目	立志特講Ⅰ～Ⅲ
問題解決学特講Ⅰ～Ⅲ	単位互換科目	ホームゼミⅠ～Ⅷ

履修上限外科目のうち立志特講Ⅰ～Ⅲ・問題解決学特講Ⅰ～Ⅲ・ホームゼミⅠ～Ⅷ以外はGPA除外科目とする。

(2) 平成31(2019)年度入学生

各学期20単位まで履修登録することができる。ただし、前期のGPAが2.8以上の場合は、各学期24単位まで履修登録することができる。

履修上限外科目は以下とする。

履修上限外科目		
インターンシップⅠ・Ⅱ	AP 数学	Study Abroad Ⅰ～Ⅷ
アクティブ・ラーニング実践Ⅰ～Ⅷ	教職に関する科目	立志特講Ⅰ～Ⅲ
問題解決学特講Ⅰ～Ⅲ	単位互換科目	ホームゼミⅠ～Ⅷ

履修上限外科目のうち立志特講Ⅰ～Ⅲ・問題解決学特講Ⅰ～Ⅲ・ホームゼミⅠ～Ⅷ以外はGPA除外科目とする。

(3) 平成30(2018)年度入学生

各学期24単位まで履修登録することができる。

履修上限外科目は以下とする。

履修上限外科目		
インターンシップⅠ・Ⅱ	キャリア・デザインⅡ～Ⅳ	AP 数学
Study Abroad Ⅰ～Ⅷ	アクティブ・ラーニング実践Ⅰ～Ⅷ	教職に関する科目
立志特講Ⅰ～Ⅲ	問題解決学特講Ⅰ～Ⅲ	単位互換科目

履修上限外科目のうち立志特講Ⅰ～Ⅲ・問題解決学特講Ⅰ～Ⅲ以外はGPA除外科目とする。

(4) 平成29(2017)年度入学生

各学期24単位まで履修登録することができる。

履修上限外科目は以下とする。

履修上限外科目		
インターンシップⅠ・Ⅱ	キャリア・デザインⅡ～Ⅳ	AP 数学
Study Abroad Ⅰ～Ⅷ	アクティブ・ラーニング実践Ⅰ～Ⅷ	教職に関する科目
立志特講Ⅰ～Ⅲ	問題解決学特講Ⅰ～Ⅲ	単位互換科目

履修上限外科目のうち立志特講Ⅰ～Ⅲ・問題解決学特講Ⅰ～Ⅲ以外はGPA除外科目とする。

(5)平成28(2016)年度入学生

各学期24単位まで履修登録することができる。

履修上限外科目は以下とする。

履修上限外科目		
インターンシップⅠ・Ⅱ	キャリア・デザインⅡ～Ⅳ	AP数学
Study AbroadⅠ～Ⅶ	アクティブ・ラーニング実践Ⅰ～Ⅶ	教職に関する科目
立志特講Ⅰ～Ⅲ	問題解決学特講Ⅰ～Ⅲ	単位互換科目

履修上限外科目のうち立志特講Ⅰ～Ⅲ・問題解決学特講Ⅰ～Ⅲ以外はGPA除外科目とする。

(6)平成27(2015)年度入学生

各学期24単位まで履修登録することができる。

なお、在学期間が36ヶ月以上の者は、24単位以上履修登録することができる。

※在学期間には、多摩大学学則第22条3項に基づき休学期間を含まない。

履修上限外科目は以下とする。

履修上限外科目		
インターンシップⅠ・Ⅱ	キャリア・デザインⅡ～Ⅳ	AP数学
Study AbroadⅠ～Ⅶ	アクティブ・ラーニング実践Ⅰ～Ⅶ	教職に関する科目
立志特講Ⅰ～Ⅲ	問題解決学特講Ⅰ～Ⅲ	単位互換科目

履修上限外科目のうち立志特講Ⅰ～Ⅲ・問題解決学特講Ⅰ～Ⅲ以外はGPA除外科目とする。

(7)平成26(2014)年度入学生

各学期24単位まで履修登録することができる。

なお、在学期間が36ヶ月以上の者は、24単位以上履修登録することができる。

※在学期間には、多摩大学学則第22条3項に基づき休学期間を含まない。

履修上限外科目は以下とする。

履修上限外科目		
インターンシップⅠ・Ⅱ	キャリア・デザインⅡ～Ⅳ	AP数学
Study AbroadⅠ～Ⅶ	アクティブ・ラーニング実践Ⅰ～Ⅶ	教職に関する科目
立志特講Ⅰ～Ⅲ	問題解決学特講Ⅰ～Ⅲ	単位互換科目

履修上限外科目のうち立志特講Ⅰ～Ⅲ・問題解決学特講Ⅰ～Ⅲ以外はGPA除外科目とする。

(8)平成25(2013)年度入学生

各学期24単位まで履修登録することができる。

なお、在学期間が36ヶ月以上の者は、24単位以上履修登録することができる。

※在学期間には、多摩大学学則第22条3項に基づき休学期間を含まない。

履修上限外科目は以下とする。

履修上限外科目		
インターンシップⅠ・Ⅱ	キャリア・デザインⅡ～Ⅳ	AP数学
Study AbroadⅠ～Ⅶ	アクティブ・ラーニング実践Ⅰ～Ⅶ	教職に関する科目
立志特講Ⅰ～Ⅲ	問題解決学特講Ⅰ～Ⅲ	単位互換科目

履修上限外科目のうち立志特講Ⅰ～Ⅲ・問題解決学特講Ⅰ～Ⅲ以外はGPA除外科目とする。

別表第2

認定科目【経営情報学部】

(1)平成31(2019)年度以降入学生

認定科目		
インターンシップ I・II	AP 数学	Study Abroad I～VIII
アクティブ・ラーニング実践 I～VIII	単位互換科目	

(2)平成30(2018)年度以前入学生

履修上限外科目		
インターンシップ I・II	キャリア・デザイン II～IV	AP 数学
Study Abroad I～VIII	アクティブ・ラーニング実践 I～VIII	単位互換科目

以上

22. 多摩大学早期卒業規程(抜粋)

(対象学生)

第2条 早期卒業の対象学生は、学則第38条第2項に規定する者とする。ただし、再入学、編入学及び転入学した学生又は教職課程科目の履修者は、対象とならない。

(早期卒業要件)

第5条 早期卒業の要件は、3年又は3年半在学して所定の科目を履修し、多摩大学履修規程に規定する卒業要件単位数以上を修得しなければならない。ただし、休学した期間は在学期間に含まれない。

2 早期卒業要件について必要な事項は、別に細則で定める。

(申請の取下げ)

第6条 早期卒業希望者は、卒業の1ヶ月前までに早期卒業申請を取下げることができる。

(卒業の時期)

第7条 早期卒業の時期は、春季入学生にあつては3年次の3月以降、秋季入学生にあつては3年次の9月以降とする。

23.多摩大学経営情報学部早期卒業細則(抜粋)

(認定要件)

第2条 早期卒業の認定要件は、早期卒業規程第3条第1項に定めるもののほか、2年次終了時において、以下のすべての要件を満たしていなければならない。

(1)以下の単位を修得していること。

卒業に必要な必修・特別選択必修科目の単位の全てと卒業に必要な合計単位数の75%以上。(小数点以下の端数は切り上げとする)

(2)GPAが3.2以上であること。

(3)ホームゼミナールに所属し、担当教員の推薦を得ていること。ホームゼミナールに所属しない場合は専任教員2名の推薦状を得ていること。

(4)早期卒業の意志及び理由が明確であること。

(学習指導体制)

第3条 学習指導体制として、ホームゼミナール担当教員、教務委員長及びホームゼミナール担当教員が指名した教員1名(合計3名)又はホームゼミナール未所属の場合は教務委員長及び学生を推薦した専任教員2名(計3名)を配置する。

(早期卒業要件)

第4条 早期卒業の要件は、早期卒業規程第5条第1項に定めるもののほか、以下のすべての要件を満たしていなければならない。

(1)GPAが3.2以上であること。

(2)本学大学院の入学許可を得ていること。

(GPA)

第5条 成績評価の評定平均値(GPA)は、次の方法で算出する。

$$\{(4.0 \times A + P \text{の修得単位数}) + (3.0 \times A \text{の修得単位数}) + (2.0 \times B \text{の修得単位数}) + (1.0 \times C \text{の修得単位数})\} \div \text{総履修登録単位数} ([F] \text{の単位数を含む})$$

24. 多摩大学成績評価規程

(目的)

第1条 この規程は、多摩大学学則第34条に基づき、成績評価について必要な事項を定めることを目的とする。

(GPA)

第2条 成績評価の評定平均値(GPA)は、次の方法で算出する。

$$\{(4.0 \times A + P \text{の修得単位数}) + (3.0 \times A \text{の修得単位数}) + (2.0 \times B \text{の修得単位数}) + (1.0 \times C \text{の修得単位数})\} \div \text{総履修登録単位数(「F」の単位数を含む)}$$

(卒業)

第3条 卒業判定にGPAを使用する場合、多摩大学早期卒業規程による。

(面談の実施)

第4条 成績不振者の基準は、各学期の修得単位数が4単位未満の者とし、成績不振者に対する履修指導面談、就学的意思確認面談は、各年度に1回以上行い、3月31日までに実施する。

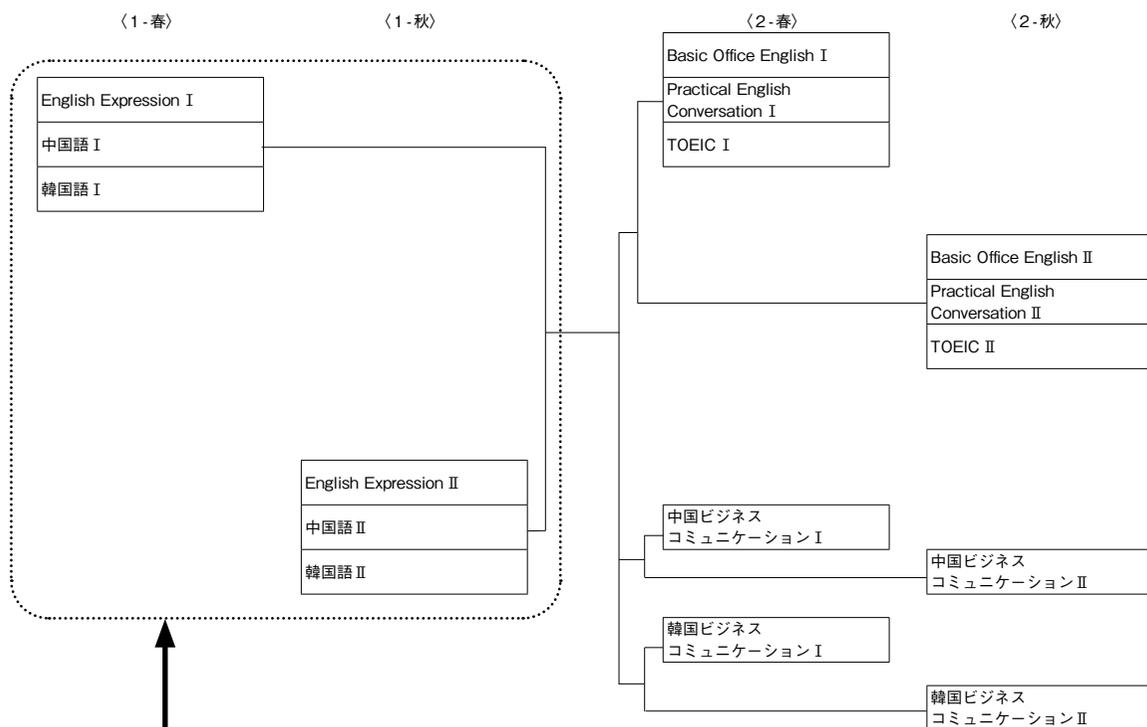
(退学勧告)

第5条 5年を超えて在籍し、GPAが1.0以下、かつ修得単位数が60単位未満の学生については、就学的意思確認面談を実施し、必要に応じて退学勧告を行うものとする。

25. 前提科目一覧

2020年度 前提科目一覧

【語学系】



※2013年度入学生は同一言語にて4単位修得してください。
2014～2020年度入学生は、同一言語にこだわらず、4単位修得してください。

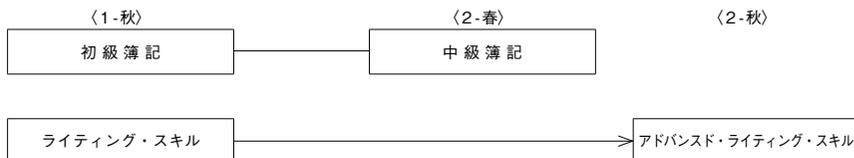
※既に2013年度までに上記の2年次以降に配当されている科目を履修した学生の皆さん

2014年度より上記ルールに則り履修登録が必要となるものであり2013年度までに履修された科目が取り消されることはありません。

(例：中国語 I を履修していない学生が2013年度に中国ビジネスコミュニケーション I の単位を修得した場合、

2014年度以降もその単位が取り消されることはない。)

【その他】



※既に「文章伝達入門」(2018年度以前開講)の単位を修得している学生は、「アドバンスド・ライティング・スキル」を履修できます。

※上記科目以外に関しては、前提科目として特に定めておりませんが、単位修得を前提として講義を進めていく場合があります。シラバスをよく参照してください。



26. カリキュラム表(科目一覧)・
カリキュラムマップ・
カリキュラムマトリックス

多摩大学経営情報学部 2020 年度カリキュラム表

科目群	区分	1 年		2 年		
		春学期	秋学期	春学期	秋学期	
産業 社会 科目群	必修	スタディースキル入門	ビジネススキル入門			
		多摩学 I				
	特別選択必修			特別講座 I	特別講座 II	
	選択必修	グローバルヒストリー I	ITコミュニケーション入門(1年生専用)	アントレプレナーシップ論	アドバンスド・ライティング・スキル	
		ビジネス数学基礎	グローバルヒストリー II	グローバルヒストリー III	グローバルヒストリー IV	
			スポーツ・マネジメント論	サブカルチャー論	立身人物伝	
			多摩学 II	哲学入門		
	選択必修 (語学)	English Expression I	English Expression II	Basic Office English I	Basic Office English II	
		韓国語 I	韓国語 II	English Expression I (再履修用)	English Expression I (再履修用)	
		中国語 I	中国語 II	English Expression II (再履修用)	English Expression II (再履修用)	
		日本語講座(初級): 留学生用	日本語講座(中級 II): 留学生用	Practical English Conversation I	Practical English Conversation II	
		日本語講座(中級 I): 留学生用	日本語講座(上級): 留学生用	TOEIC I	TOEIC II	
				韓国ビジネスコミュニケーション I	韓国ビジネスコミュニケーション II	
				中国ビジネスコミュニケーション I	中国ビジネスコミュニケーション II	
				ドイツ語 I	ドイツ語 I	
				ドイツ語 II	ドイツ語 II	
				フランス語 I	フランス語 I	
			フランス語 II	フランス語 II		
	ビジネス	選択必修		キャリア・デザイン入門	キャリア・デザイン I	キャリア・デザイン II
		選択	AP 数学	Study Abroad I~VII	インターンシップ I	インターンシップ I
IT 活用法 I			アクティブ・ラーニング実践 I~VII	業界研究 I	業界研究 II	
Study Abroad I~VII			コンピュータ概論	スポーツ II	経営シミュレーションゲーム	
アクティブ・ラーニング実践 I~VII			産業社会特講(企業とは?—総合商社の事例から—)	スポーツと健康	社会心理	
産業社会特講(世界が迎える大きな曲がり角-2020年)			スポーツ I	ビジネスコミュニケーション I	スポーツ II	
産業社会特講(地域の偉人から生き方を学ぶ)			単位互換科目 I~V		ビジネスコミュニケーション II	
産業社会特講(人間・メディア・社会の構造と未来)			法学(憲法)		ビジネス法	
産業社会特講(ビジョン・マネジメント論 2020春)			マーケティングマネジメント論			
スポーツ I			マクロ経済学			
単位互換科目 I~V			余暇マネジメント			
マーケティング入門						
ミクロ経済学						
ライフ・デザイン						
経営 情報 学 科 専 門 科 目	必修			経営情報論 I	経営情報論 II	
	選択必修	グローバルビジネス入門	ITビジネス入門	IT概論 I	IT概論 II	
		地域ビジネス入門	グローバルビジネス入門	IT 活用法 II	Web デザイン II	
			初級簿記	IT パスポート	クリエイティブデザイン II	
			地域ビジネス入門	Web デザイン I	クリエイティブデザイン III	
				クリエイティブデザイン I	経営科学	
				経営学概論	経営思想史	
				情報法	原価計算	
				情報倫理	財務会計	
				中級簿記	データサイエンス II	
				データサイエンス I	データベース II	
				データベース I	ビジネス数学 II	
				ビジネス数学 I	プログラミング入門 III	
				プログラミング入門 I	ベンチャー企業論	
				プログラミング入門 II	マーケティング・データ分析	
				マーケティング・リサーチ		
				リーダーシップ論		
		事業 構 想 学 科 専 門 科 目	必修			事業構想論 I
選択必修	グローバルビジネス入門		ITビジネス入門	IT概論 I	IT概論 II	
	地域ビジネス入門		グローバルビジネス入門	IT パスポート	NPO・NGO 論	
			初級簿記	経営学概論	金融論	
			地域ビジネス入門	国際経営入門	グローバルマーケティング	
				国際経済学	経営思想史	
				地域スポーツ論	原価計算	
				地域ビジネスプランニング	財務会計	
				中級簿記	消費心理	
				リーダーシップ論	地域政策プランニング	
			ビジネス戦略			
演習 科目	必修	プレゼミ I	プレゼミ II	ホームゼミ I	ホームゼミ II	
	選択		インターゼミ I~VII	インターゼミ I~VII	インターゼミ I~VII	
教職専門科目群		教育原理	教育課程総論	教育方法		
		教職概論	教育制度論	生徒指導・進路指導論		
			特別支援教育概論	特別活動・総合的な学習の時間の指導法		

*経営情報学科学科専門科目の「選択必修科目」は事業構想学科学科専門科目の「選択科目」、事業構想学科学科専門科目の「選択必修科目」は経営情報学科学科専門科目の「選択科目」となります。

*「IT 活用法 II」は、経営情報学科学科所属学生は必ず履修してください。

3 年		4 年		区 分	科目群
春学期	秋学期	春学期	秋学期		
				必 修	教 養 産 業 社 会 科 目 群
				特別選択必修	
	立志特講Ⅰ(2月集中)			選 択 必 修	
	立志特講Ⅱ(2月集中)				
	立志特講Ⅲ(2月集中)				
				選 択 必 修 (語学)	
キャリア・デザインⅢ	キャリア・デザインⅣ			選 択	ビ ジ ネ ス
インターンシップⅡ	インターンシップⅡ				
教育心理学	教育相談				
業界研究Ⅲ	業界研究Ⅳ				
サービス産業論	認知心理				
ビジネスコミュニケーションⅢ	ビジネスコミュニケーションⅣ				
				必 修	経 営 情 報 学 科 専 門 科 目 群
Webプログラミング	Webサービス開発			選 択 必 修	
経営と意思決定	経営とセキュリティ				
コンピュータネットワーク活用	情報工学概論				
情報と職業	データサイエンスⅣ				
情報ネットワーク					
データサイエンスⅢ					
データ分析実践					
	問題解決学特講Ⅰ(2月集中)				
	問題解決学特講Ⅱ(2月集中)				
	問題解決学特講Ⅲ(2月集中)				
				選 択	事 業 構 想 学 科 専 門 科 目
アジア経済論Ⅰ	アジア経済論Ⅱ				
経営組織	韓国経済論				
国際公共政策	経済統計学				
事業デザイン論Ⅰ	現代メディア論				
地域観光論	事業デザイン論Ⅱ				
地域金融論	人材マネジメント論				
地域産業論	多国籍企業				
中国経済論	ビッグデータ活用法				
日本経営論	ブランドマネジメント				
日本経済論	ロシア経済論				
	問題解決学特講Ⅰ(2月集中)				
	問題解決学特講Ⅱ(2月集中)				
	問題解決学特講Ⅲ(2月集中)				
ホームゼミⅢ	ホームゼミⅣ	ホームゼミⅤ	ホームゼミⅥ	必 修	演 習 科 目
インターゼミⅠ～Ⅶ	インターゼミⅠ～Ⅶ	インターゼミⅠ～Ⅶ	インターゼミⅠ～Ⅶ	選 択	
ホームゼミⅦ～Ⅷ	ホームゼミⅦ～Ⅷ	ホームゼミⅦ～Ⅷ	ホームゼミⅦ～Ⅷ		教 職 専 門 科 目 群
教育心理学	教育相談	教育実習	教育実習		
情報科教育法Ⅰ	情報科教育法Ⅱ		就職実践演習		

経営情報学部ディプロマ・ポリシー

中教審の答申（「学士課程教育の構築に向けて」2008年3月25日）において示された「学士力」の項目に準拠している

DP1	知識と理解【グローバル社会に対する理解】 基礎的な学力を養い、グローバルとローカルの関係性を意識しながら産業社会で発生する様々な問題に対処している専門的能力を体系的に修得する。
DP2	思考と判断【考え抜く力】 現状を分析して課題を明らかにできる課題発見力、課題解決に向けたプロセスを明らかにして準備できる計画力、課題に対して新たな価値や解決方法を生み出せる創造力を
DP3	関心と意欲【社会の発展に貢献する力】 物事に積極的に取り組む主体性や目的に向かって周囲の人を動かしている巻き込み力、失敗を恐れずに粘り強く行動している実行力を身につけ、国際的ビジネスの場となる。



3つの人材像

グローバルビジネス

アジアダイナミズムに真正面から向き合える、プロジェクトマネジメント人材

地域ビジネス

地域の抱える課題を創造的に解決できる、地域イノベーション人材

ビジネスICT

顧客視点とマーケティング感覚を身につけた、ビジネスICT人材

DP4	表現と技能【役割 自分の意思をわ る状況把握力や
DP5	高い志【環境対応 社会における多 する。

専門領域

事業構想学科専門

学科共通

経営情報学科専門

	グローバル	ローカル	経営情報	情報デザイン	データサイエンス
4 年次					
3 年次	<ul style="list-style-type: none"> 日本経済論 経済統計学 アジア経済論Ⅰ・Ⅱ 中国経済論 韓国経済論 ロシア経済論 国際公共政策 多国籍企業 現代メディア論 	<ul style="list-style-type: none"> 地域観光論 地域産業論 地域金融論 事業デザイン論Ⅰ 事業デザイン論Ⅱ 	<ul style="list-style-type: none"> 経営組織 ブランドマネジメント 経営と意思決定 サービス産業論 日本経営論 認知心理 人材マネジメント論 	<ul style="list-style-type: none"> 情報ネットワーク 情報工学概論 経営とセキュリティ コンピュータネットワーク活用 Webサービス開発 Webプログラミング 情報と職業 	<ul style="list-style-type: none"> ビッグデータ活用法 データサイエンスⅢ・Ⅳ データ分析実践
2 年次	<ul style="list-style-type: none"> 国際経済学 金融論 グローバルヒストリーⅢ グローバルヒストリーⅣ アメリカ経済論 ヨーロッパ経済論 サブカルチャー論 	<ul style="list-style-type: none"> 地域政策プランニング 地域ビジネスプランニング 地域スポーツ論 NPO・NGO論 	<ul style="list-style-type: none"> ビジネス戦略 国際経営入門 経営思想史 リーダーシップ論 グローバルマーケティング ITパスポート マーケティング・リサーチ 中級簿記 原価計算 財務会計 消費心理 社会心理 	<ul style="list-style-type: none"> IT概論Ⅰ・Ⅱ WebデザインⅠ・Ⅱ クリエイティブデザインⅠ・Ⅱ・Ⅲ データベースⅠ・Ⅱ プログラミング入門Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ 情報倫理 情報法 	<ul style="list-style-type: none"> ビジネス数学Ⅰ・Ⅱ データサイエンスⅠ・Ⅱ マーケティング・データ分析 経営科学
	<p>専門コア科目</p> <ul style="list-style-type: none"> 事業構想論Ⅰ・Ⅱ 経営情報論Ⅰ・Ⅱ 特別講座Ⅰ・Ⅱ ホームゼミⅠ・Ⅱ・Ⅲ 				
	<p>専門基礎科目</p> <ul style="list-style-type: none"> ビジネス法 マーケティング入門 グローバルビジネス入門 ITビジネス入門 ミクロ経済学 経営学概論 地域ビジネス入門 経営シミュレーションゲーム マクロ経済学 IT活用法Ⅰ・Ⅱ 多摩学Ⅱ 				
1 年次	<ul style="list-style-type: none"> グローバルヒストリーⅠ グローバルヒストリーⅡ 		<ul style="list-style-type: none"> 初級簿記 マーケティングマネジメント論 	<ul style="list-style-type: none"> コンピュータ概論 	
	<p>特別選択科目</p> <ul style="list-style-type: none"> アクティブ・ラーニング実践Ⅰ～Ⅷ Study AbroadⅠ～Ⅷ 				
	<p>教養基礎科目</p> <ul style="list-style-type: none"> 多摩学Ⅰ ビジネス数学基礎(AP数学含) スポーツマネジメント論 English ExpressionⅠ・Ⅱ ビジネススキル入門 スタディースキル入門 プレゼミⅠ・Ⅱ 法学(憲法) 				

学士力とディプロマ・ポリシーの関連について

- DP1：学士力「知識・理解」
専攻する特定の学問分野における基本的な知識を体系的に理解
- DP2：学士力「統合的な学習経験と創造的思考力」
自らが立てた新たな課題を解決する能力
- DP3：学士力「態度・志向性」
自己管理能力、チームワーク・リーダーシップ、倫理観、市民としての社会的責任、生涯学習力
- DP4：学士力「汎用的技能」
知的活動でも職業生活や社会生活でも必要な技能
- DP5：学士力「態度・志向性」

修得する。
活躍するとともに、わが国の産業社会の健全たる発展に貢献できるように

分担により組織目標の達成に貢献する力)
 かりやすく伝えることができる発信力や、聞き上手になって積極的に相手の意見を受け止められるようになる傾聴力、組織の中で自分がどのような役割を果たすべきなのかを理解でき協調性を身につけることで、コミュニケーション能力を高め、所属する組織や社会の活動に貢献できるようにする。

能力と先進性]
 様な価値観や文化的な背景に対する理解や配慮ができる多様性や、社会のルールや約束を守ることができる規律性を身につけ、社会の発展に積極的に関与していくという高い志を確立

学科共通		共通領域		教職に関する科目	
ゼミ	コミュニケーション (語学・メディア・方法)	キャリア・志	教職		
・ホームゼミⅤ・Ⅵ ・インターゼミⅥ・Ⅶ			・教育実習 ・教職実践演習	4 年 次	
・ホームゼミⅣ ・インターゼミⅣ・Ⅴ	・ビジネスコミュニケーションⅢ ・ビジネスコミュニケーションⅣ	・キャリア・デザインⅢ・Ⅳ ・インターンシップⅡ ・業界研究Ⅲ ・業界研究Ⅳ	・教育心理学 ・情報科教育法Ⅰ・Ⅱ ・教育相談	3 年 次	
・インターゼミⅡ・Ⅲ	・韓国ビジネスコミュニケーションⅠ・Ⅱ ・中国ビジネスコミュニケーションⅠ・Ⅱ ・ドイツ語Ⅰ・Ⅱ ・フランス語Ⅰ・Ⅱ ・TOEICⅠ・Ⅱ ・Practical English ConversationⅠ・Ⅱ ・Basic Office EnglishⅠ・Ⅱ ・ビジネスコミュニケーションⅠ ・ビジネスコミュニケーションⅡ ・アドバンス・ライティング・スキル	・アントレプレナーシップ論 ・立志人物伝 ・ベンチャー企業論 ・キャリア・デザインⅠ・Ⅱ ・インターンシップⅠ ・スポーツと健康 ・業界研究Ⅰ ・業界研究Ⅱ	・教育制度論 ・特別活動・総合的な学習の時間の指導法 ・教育課程総論 ・教育方法 ・生徒指導・進路指導論 ・特別支援教育概論	2 年 次	
・インターゼミⅠ	・ライティング・スキル	・キャリア・デザイン入門 ・ライフデザイン ・余暇マネジメント	・教職概論 ・教育原理	1 年 次	
・産業社会特講(5科目)					
・中国語Ⅰ・Ⅱ ・スポーツⅠ・Ⅱ	・韓国語Ⅰ・Ⅱ ・哲学入門(2年次)	・ITコミュニケーション入門 ・日本語講座初級・中級・上級			

◎:ディプロマ・ポリシーとの対応で最も身につけられる事項
○:ディプロマ・ポリシーとの対応で2番目に身につけられる事項

科目群	区分	授業科目の名称	年次	単位数	DP1 知識と理解【グローバル社会に対する理解】	DP2 思考と判断【考え抜く力】	DP3 関心と意欲【社会に貢献する力】	DP4 表現と技能【役割分担により組織目標の達成に貢献する力】	DP5 高い志【環境対応能力と先進性】	
産業社会科目群	必修科目	スタディスキル入門	1	2	◎			○		
		多摩学I	1	2	◎	○				
	特別選択必修科目	ビジネススキル入門	1	2	◎			○		
		特別講座I	2	2	◎		○			
	選択必修科目	特別講座II	2	2	◎		○			
		ITコミュニケーション入門	1	2	◎			○		
		アドバンスド・ライティング・スキル	2	2				◎	○	
		アントレプレナーシップ論	2	2			○		◎	
		グローバルヒストリーI	1	2	◎	○				
		グローバルヒストリーII	1	2	◎	○				
		グローバルヒストリーIII	2	2	◎	○				
		グローバルヒストリーIV	2	2	◎	○				
		サブカルチャー論	2	2	◎		○			
		スポーツ・マネジメント論	1	2	◎		○			
		多摩学II	1	2	◎	○				
		哲学入門	2	2	◎	○				
		ビジネス数学基礎	1	2	◎	○				
		ライティング・スキル	1	2		○		◎		
		立志人物伝	2	2			○		◎	
		立志特講I	3	2			○		◎	
		立志特講II	3	2			○		◎	
		立志特講III	3	2			○		◎	
		選択必修科目(語学)	Basic Office English I	2	2	○			◎	
			Basic Office English II	2	2	○			◎	
	English Expression I		1	2	○			◎		
	English Expression II		1	2	○			◎		
	Practical English Conversation I		2	2		○		◎		
	Practical English Conversation II		2	2		○		◎		
	TOEIC I		2	2	◎			○		
	TOEIC II		2	2	◎			○		
	ドイツ語I		2	2						
	ドイツ語II		2	2						
	フランス語I		2	2						
	フランス語II		2	2						
	韓国ビジネスコミュニケーションI		2	2	○			◎		
	韓国ビジネスコミュニケーションII		2	2	○			◎		
	韓国語I		1	2	◎			○		
	韓国語II		1	2	◎			○		
	中国ビジネスコミュニケーションI		2	2				◎	○	
	中国ビジネスコミュニケーションII		2	2				◎	○	
	中国語I		1	2	◎	○				
	中国語II		1	2	◎	○				
	ビジネス	選択必修科目	キャリア・デザイン入門	1	2	○				◎
			キャリア・デザインI	2	2	◎				
			キャリア・デザインII	2	2	◎		○		
キャリア・デザインIII			3	2	◎		○			
選択科目		キャリア・デザインIV	3	2	◎		○			
		AP数学	1	2	◎	○				
		IT活用法I	1	2	○	◎				
		Study Abroad I	1	2	◎	○				
		Study Abroad II	1	2	◎	○				
		Study Abroad III	1	2	◎	○				
		Study Abroad IV	1	2	◎	○				
		Study Abroad V	1	2	◎	○				
		Study Abroad VI	1	4	◎	○				
		Study Abroad VII	2	4	◎	○				
		Study Abroad VIII	2	4	◎	○				
		アクティブ・ラーニング実践I	1	2	○	◎				
		アクティブ・ラーニング実践II	1	2	○	◎				
		アクティブ・ラーニング実践III	1	2	○	◎				
		アクティブ・ラーニング実践IV	1	2	○	◎				
		アクティブ・ラーニング実践V	1	2	○	◎				
	アクティブ・ラーニング実践VI	1	4	○	◎					
	アクティブ・ラーニング実践VII	1	4	○	◎					
	アクティブ・ラーニング実践VIII	1	4	○	◎					
	インターンシップI	2	2			○		◎		
	インターンシップII	2	2			○		◎		
	業界研究I	2	2			○		◎		
	業界研究II	2	2							
	業界研究III	3	2							
	業界研究IV	3	2							
	教育心理学	3	2	○		◎				

※「区分」は、入学年度によって異なることがありますので注意してください。

◎:ディプロマ・ポリシーとの対応で最も身につけられる事項
○:ディプロマ・ポリシーとの対応で2番目に身につけられる事項

科目群	区分	授業科目の名称	年次	単位数	DP1 知識と理解【グローバル社会に対する理解】	DP2 思考と判断【考え抜く力】	DP3 関心と意欲【社会の発展に貢献する力】	DP4 表現と技能【役割分担により組織目標の達成に貢献する力】	DP5 高い志【環境対応能力と先進性】			
産業社会科目群	ビジネス	選択科目	教育相談	3	2			◎	○			
			経営シミュレーションゲーム	2	2	○	◎					
			コンピュータ概論	1	2	◎	○					
			サービス産業論	3	2	◎	○					
			産業社会特講(ビジョン・マネジメント論2020春)	1	2		◎		○			
			産業社会特講(世界が迎える大きな曲がり角-2020年)	1	2	◎	○					
			産業社会特講(企業とは?—総合商社の事例から—)	1	2	○		◎				
			産業社会特講(地域の偉人から生き方を学ぶ)	1	2	○			◎			
			産業社会特講(人間・メディア・社会の構造と未来)	1	2		◎	○				
			社会心理	2	2	◎		○				
			スポーツI	1	2							
			スポーツII	2	2							
			スポーツと健康	2	2	◎		○				
			単位互換科目I	1	2							
			単位互換科目II	1	2							
			単位互換科目III	1	2							
			単位互換科目IV	1	2							
			単位互換科目V	1	2							
			認知心理	3	2	○	◎					
			ビジネスコミュニケーションI	2	2		○		◎			
			ビジネスコミュニケーションII	2	2				○			
			ビジネスコミュニケーションIII	3	2				◎			
			ビジネスコミュニケーションIV	3	2							
			ビジネス法	2	2	◎	○					
			法学(憲法)	1	2	◎	○					
			マーケティングマネジメント論	1	2	○	◎					
			マーケティング入門	1	2	◎			○			
			マクロ経済学	1	2	○	◎					
			ミクロ経済学	1	2	◎	○		○			
			余暇マネジメント	1	2	◎		○				
			ライフ・デザイン	1	2	◎	○					
			問題解決学科目群	経営情報学専門科目	必修科目	経営情報論I	2	2	◎		○	
						経営情報論II	2	2	◎	○		
						IT活用法I	2	2	◎	○		
						IT概論I	2	2				
						IT概論II	2	2				
						ITパスポート	2	2	◎	○		
						ITビジネス入門	1	2	◎			○
						Webサービス開発	3	2	◎	○		
						WebデザインI	2	2	◎			○
						WebデザインII	2	2	◎	○		
						Webプログラミング	3	2	◎	○		
						クリエイティブデザインI	2	2			○	◎
						クリエイティブデザインII	2	2			○	◎
						クリエイティブデザインIII	2	2	○	◎		
グローバルビジネス入門	1	2				○	◎					
経営科学	2	2				◎	○					
経営学概論	2	2				○	◎					
経営思想史	2	2				◎	○					
経営と意思決定	3	2					◎		○			
経営とセキュリティ	3	2				◎	○					
原価計算	2	2				◎	○					
コンピュータネットワーク活用	3	2				◎	○					
財務会計	2	2				○	◎					
情報工学概論	3	2				◎	○					
情報と職業	3	2				◎	○					
情報ネットワーク	3	2				◎	○					
情報法	2	2				◎	○					
情報倫理	2	2					◎		○			
初級簿記	1	2				○	◎					
地域ビジネス入門	1	2				◎	○					
中級簿記	2	4				○	◎					
データサイエンスI	2	2				◎						
データサイエンスII	2	2					◎		○			
データサイエンスIII	3	2					◎		○			
データサイエンスIV	3	2				◎	○					
データ分析実践	3	2				◎			○			
データベースI	2	2				◎			○			
データベースII	2	2				◎			○			
ビジネス数学I	2	2				◎	○					
ビジネス数学II	2	2				◎	○					
プログラミング入門I	2	2					○		◎			
プログラミング入門II	2	2				◎	○					
プログラミング入門III	2	2				◎			○			

※「区分」は、入学年度によって異なることがありますので注意してください。

◎:ディプロマ・ポリシーとの対応で最も身につけられる事項
 ○:ディプロマ・ポリシーとの対応で2番目に身につけられる事項

科目群	区分	授業科目の名称	年次	単位数	DP1 知識と理解【グローバル社会に対する理解】	DP2 思考と判断【考え抜く力】	DP3 関心と意欲【社会の発展に貢献する力】	DP4 表現と技能【役割分担により組織目標の達成に貢献する力】	DP5 高い志【環境対応能力と先進性】	
問題解決学科目群	経営情報学科専門科目	選択必修科目	ベンチャー企業論	2	2			◎	○	
		マーケティング・データ分析	2	2	◎			○		
		マーケティング・リサーチ	2	2		◎		○		
		問題解決学特講I	3	2			◎		○	
		問題解決学特講II	3	2			◎		○	
		問題解決学特講III	3	2			◎		○	
		リーダーシップ論	2	2			◎	○		
		アジア経済論I	3	2	○	◎				
		アジア経済論II	3	2	◎	○				
		アメリカ経済論	2	2	◎	○				
		NPO・NGO論	2	2	◎	○				
		韓国経済論	3	2	○	◎				
		金融論	2	2	◎		○			
		グローバルマーケティング	2	2						
		経営組織	3	2	◎	○				
	経済統計学	3	2	◎		○				
	現代メディア論	3	2	○	◎					
	国際経営入門	2	2		◎			○		
	国際経済学	2	2	◎		○				
	国際公共政策	3	2		◎			○		
	消費心理	2	2	◎	○					
	事業デザイン論I	3	2	○	◎					
	事業デザイン論II	3	2		○	◎				
	事業構想論I	2	2	◎		○				
	事業構想論II	2	2	◎		○				
	人材マネジメント論	3	2	◎	○					
	多国籍企業	3	2							
	地域観光論	3	2	◎	○					
	地域金融論	3	2	○		◎				
	地域産業論	3	2	○	◎					
	地域スポーツ論	2	2	◎		○				
	地域政策プランニング	2	2	◎	○					
	地域ビジネスプランニング	2	2	◎	○					
	中国経済論	3	2	◎	○					
	日本経営論	3	2	◎	○					
	日本経済論	3	2	○	◎					
	ビジネス戦略	2	2	○	◎					
	ビッグデータ活用法	3	2			◎	○			
	ブランドマネジメント	3	2							
	ヨーロッパ経済論	2	2							
	ロシア経済論	3	2	◎	○					
	演習科目	必修科目	ブレゼミI	1	2			◎	○	
			ブレゼミII	1	2			◎	○	
			ホームゼミI	2	2					
			ホームゼミII	2	2					
ホームゼミIII			2	2						
ホームゼミIV			2	2						
選択科目		ホームゼミV	2	2						
		ホームゼミVI	2	2						
		インターゼミI	1	2	○	◎				
		インターゼミII	1	2	○	◎				
		インターゼミIII	1	2	○	◎				
		インターゼミIV	1	2	○	◎				
		インターゼミV	1	2	○	◎				
		インターゼミVI	1	2	○	◎				
		インターゼミVII	1	2	○	◎				
ホームゼミVII	2	2								
ホームゼミVIII	2	2								
教職専門科目群	教職に関する科目	教育課程総論	2	1	◎	○			○	
		教育原理	1	2	◎					
		教育実習	4	3				◎	○	
		教育制度論	2	2	◎	○				
		教育方法	2	2	◎			○		
		教職概論	1	2	◎		○			
		教職実践演習	4	2			○	◎		
		情報科教育法I	3	2	○			◎		
		情報科教育法II	3	2	○			◎		
		生徒指導・進路指導論	2	2			◎	○		
		特別活動・総合的な学習の時間の指導法	2	2			◎	○		
		特別支援教育概論	2	1	◎	○				

※「区分」は、入学年度によって異なることがありますので注意してください。

◎:ディプロマ・ポリシーとの対応で最も身につけられる事項
○:ディプロマ・ポリシーとの対応で2番目に身につけられる事項

科目群	区分	授業科目の名称	年次	単位数	DP1 知識と理解【グローバル社会に対する理解】	DP2 思考と判断【考え抜く力】	DP3 関心と意欲【社会に貢献する力】	DP4 表現と技能【役割分担により組織目標の達成に貢献する力】	DP5 高い志【環境対応能力と先進性】	
産業社会科目群	必修科目	スタディスキル入門	1	2	◎			○		
		多摩学I	1	2	◎	○				
	特別選択必修科目	ビジネススキル入門	1	2	◎			○		
		特別講座I	2	2	◎		○			
	選択必修科目	特別講座II	2	2	◎		○			
		ITコミュニケーション入門	1	2	◎			○		
		アドバンスド・ライティング・スキル	2	2				◎	○	
		アントレプレナーシップ論	2	2			○		◎	
		グローバルヒストリーI	1	2	◎	○				
		グローバルヒストリーII	1	2	◎	○				
		グローバルヒストリーIII	2	2	◎	○				
		グローバルヒストリーIV	2	2	◎	○				
		サブカルチャー論	2	2	◎		○			
		スポーツ・マネジメント論	1	2	◎		○			
		多摩学II	1	2	◎	○				
		哲学入門	2	2	◎	○				
		ビジネス数学基礎	1	2	◎	○				
		ライティング・スキル	1	2		○			◎	
		立志人物伝	2	2				○		◎
		立志特講I	3	2				○		◎
		立志特講II	3	2				○		◎
		立志特講III	3	2				○		◎
		選択必修科目(語学)	Basic Office English I	2	2		○			◎
			Basic Office English II	2	2		○			◎
	English Expression I		1	2		○			◎	
	English Expression II		1	2		○			◎	
	Practical English Conversation I		2	2			○		◎	
	Practical English Conversation II		2	2			○		◎	
	TOEIC I		2	2		◎			○	
	TOEIC II		2	2		◎			○	
	ドイツ語I		2	2						
	ドイツ語II		2	2						
	フランス語I		2	2						
	フランス語II		2	2						
	韓国ビジネスコミュニケーションI		2	2		○			◎	
	韓国ビジネスコミュニケーションII		2	2		○			◎	
	韓国語I		1	2		◎			○	
	韓国語II		1	2		◎			○	
	中国ビジネスコミュニケーションI		2	2					◎	
	中国ビジネスコミュニケーションII		2	2					◎	
	中国語I		1	2		◎	○			
	中国語II		1	2		◎	○			
	日本語講座初級	1	2				◎	○		
	日本語講座上級	1	2				◎	○		
	日本語講座中級I	1	2				◎	○		
	日本語講座中級II	1	2				◎	○		
	選択必修科目	キャリア・デザイン入門	1	2		○			◎	
		キャリア・デザインI	2	2		◎		○		
		キャリア・デザインII	2	2		◎		○		
		キャリア・デザインIII	3	2		◎		○		
キャリア・デザインIV		3	2		◎		○			
ビジネス		AP数学	1	2		◎	○			
		IT活用法I	1	2		○	◎			
		Study Abroad I	1	2		◎	○			
		Study Abroad II	1	2		◎	○			
		Study Abroad III	1	2		◎	○			
		Study Abroad IV	1	2		◎	○			
		Study Abroad V	1	2		◎	○			
		Study Abroad VI	1	4		◎	○			
		Study Abroad VII	2	4		◎	○			
		Study Abroad VIII	2	4		◎	○			
		アクティブ・ラーニング実践I	1	2		○	◎			
		アクティブ・ラーニング実践II	1	2		○	◎			
		アクティブ・ラーニング実践III	1	2		○	◎			
		アクティブ・ラーニング実践IV	1	2		○	◎			
		アクティブ・ラーニング実践V	1	2		○	◎			
	アクティブ・ラーニング実践VI	1	4		○	◎				
	アクティブ・ラーニング実践VII	1	4		○	◎				
	アクティブ・ラーニング実践VIII	1	4		○	◎				
	インターンシップI	2	2				○		◎	
	インターンシップII	2	2				○		◎	
業界研究I	2	2				○		◎		
業界研究II	2	2								
業界研究III	3	2								
業界研究IV	3	2								
教育心理学	3	2		○		◎				

※「区分」は、入学年度によって異なることがありますので注意してください。

◎:ディプロマ・ポリシーとの対応で最も身につけられる事項
○:ディプロマ・ポリシーとの対応で2番目に身につけられる事項

科目群	区分	授業科目の名称	年次	単位数	DP1 知識と理解【グローバル社会に対する理解】	DP2 思考と判断【考え抜く力】	DP3 関心と意欲【社会に貢献する力】	DP4 表現と技能【役割分担により組織目標の達成に貢献する力】	DP5 高い志【環境対応能力と先進性】			
産業社会科目群	ビジネス	選択科目	教育相談	3	2			◎	○			
			経営シミュレーションゲーム	2	2	○	◎					
			コンピュータ概論	1	2	◎	○					
			サービス産業論	3	2	◎	○					
			産業社会特講(ビジョン・マネジメント論2020春)	1	2		◎		○			
			産業社会特講(世界が迎える大きな曲がり角-2020年)	1	2	◎	○					
			産業社会特講(企業とは?一総合商社の事例から)	1	2	○		◎				
			産業社会特講(地域の偉人から生き方を学ぶ)	1	2	○			◎			
			産業社会特講(人間・メディア・社会の構造と未来)	1	2		◎					
			社会心理	2	2	◎		○				
			スポーツI	1	2							
			スポーツII	2	2							
			スポーツと健康	2	2	◎		○				
			単位互換科目I	1	2							
			単位互換科目II	1	2							
			単位互換科目III	1	2							
			単位互換科目IV	1	2							
			単位互換科目V	1	2							
			認知心理	3	2	○	◎					
			ビジネスコミュニケーションI	2	2		○		◎			
			ビジネスコミュニケーションII	2	2				○			
			ビジネスコミュニケーションIII	3	2				◎			
			ビジネスコミュニケーションIV	3	2							
			ビジネス法	2	2	◎	○					
			法学(憲法)	1	2	◎	○					
			マーケティングマネジメント論	1	2	○	◎					
			マーケティング入門	1	2	◎			○			
			マクロ経済学	1	2	○	◎					
			ミクロ経済学	1	2	◎		○				
			余暇マネジメント	1	2	◎		○				
			ライフ・デザイン	1	2	◎	○					
			問題解決学科目群	事業構想学科専門科目	必修科目	事業構想論I	2	2	◎		○	
						事業構想論II	2	2	◎		○	
					選択必修科目	IT概論I	2	2				
						IT概論II	2	2				
						ITパスポート	2	2	◎	○		
						ITビジネス入門	1	2	◎			○
						アジア経済論I	3	2	○	◎		
						アジア経済論II	3	2	◎	○		
						アメリカ経済論	2	2	◎	○		
						NPO・NGO論	2	2	◎	○		
						韓国経済論	3	2	○	◎		
						金融論	2	2	◎		○	
						グローバルビジネス入門	1	2	○	◎		
						グローバルマーケティング	2	2				
経営学概論	2	2				○	◎					
経営思想史	2	2				◎	○					
経営組織	3	2				◎	○					
経済統計学	3	2				◎		○				
原価計算	2	2				◎	○					
現代メディア論	3	2				○	◎					
国際経営入門	2	2					◎		○			
国際経済学	2	2				◎		○				
国際公共政策	3	2					◎		○			
財務会計	2	2				○	◎					
消費心理	2	2				◎	○					
初級簿記	1	2				○	◎					
事業デザイン論I	3	2				○	◎					
事業デザイン論II	3	2					○	◎				
人材マネジメント論	3	2				◎	○					
多国籍企業	3	2										
地域観光論	3	2				◎	○					
地域金融論	3	2				○		◎				
地域産業論	3	2				○	◎					
地域スポーツ論	2	2				◎		○				
地域政策プランニング	2	2				◎	○					
地域ビジネスプランニング	2	2				◎	○					
地域ビジネス入門	1	2				◎	○					
中級簿記	2	4				○	◎					
中国経済論	3	2				◎	○					
日本経営論	3	2				◎	○					
日本経済論	3	2				○	◎					
ビジネス戦略	2	2				○	◎					
ビッグデータ活用法	3	2					◎	○				
ブランドマネジメント	3	2										

※「区分」は、入学年度によって異なることがありますので注意してください。

◎:ディプロマ・ポリシーとの対応で最も身につけられる事項
 ○:ディプロマ・ポリシーとの対応で2番目に身につけられる事項

科目群	区分	授業科目の名称	年次	単位数	DP1 知識と理解【グローバル社会に対する理解】	DP2 思考と判断【考え抜く力】	DP3 関心と意欲【社会の発展に貢献する力】	DP4 表現と技能【役割分担により組織目標の達成に貢献する力】	DP5 高い志【環境対応能力と先進性】	
問題解決学 科目群	選択必修科目	ベンチャー企業論	2	2			◎		○	
		問題解決学特講I	3	2			◎		○	
		問題解決学特講II	3	2			◎		○	
		問題解決学特講III	3	2			◎		○	
		ヨーロッパ経済論	2	2						
		リーダーシップ論	2	2			◎	○		
		ロシア経済論	3	2	◎	○				
		IT活用法I	2	2	◎	○				
		Webサービス開発	3	2	◎	○				
		WebデザインI	2	2	◎			○		
		WebデザインII	2	2	◎	○				
		Webプログラミング	3	2	◎	○				
		クリエイティブデザインI	2	2			○	◎		
		クリエイティブデザインII	2	2	○	◎		◎		
		クリエイティブデザインIII	2	2	○	◎				
	経営科学	2	2	◎	○					
	経営情報論I	2	2	◎		○				
	経営情報論II	2	2	◎	○					
	経営と意思決定	3	2	◎			○			
	経営とセキュリティ	3	2	◎	○					
	コンピュータネットワーク活用	3	2	◎	○					
	情報工学概論	3	2	◎	○					
	情報と職業	3	2	◎	○					
	情報ネットワーク	3	2	◎	○					
	情報倫理	2	2	◎	○					
	情報法	2	2	◎	○					
	データサイエンスI	2	2	◎	○					
	データサイエンスII	2	2	◎	○					
	データサイエンスIII	3	2	◎	○					
	データサイエンスIV	3	2	◎	○					
	データ分析実践	3	2	◎			○			
	データベースI	2	2	◎			○			
	データベースII	2	2	◎			○			
	ビジネス数学I	2	2	◎	○					
	ビジネス数学II	2	2	◎	○					
	プログラミング入門I	2	2	◎	○		◎			
	プログラミング入門II	2	2	◎	○					
	プログラミング入門III	2	2	◎			○			
	マーケティング・データ分析	2	2	◎			○			
	マーケティング・リサーチ	2	2	◎		○	○			
	演習科目	必修科目	プレゼミI	1	2			◎	○	
			プレゼミII	1	2			◎	○	
			ホームゼミI	2	2					
			ホームゼミII	2	2					
			ホームゼミIII	2	2					
ホームゼミIV			2	2						
ホームゼミV			2	2						
ホームゼミVI		2	2							
選択科目		インターゼミI	1	2	○	◎				
		インターゼミII	1	2	○	◎				
		インターゼミIII	1	2	○	◎				
		インターゼミIV	1	2	○	◎				
		インターゼミV	1	2	○	◎				
		インターゼミVI	1	2	○	◎				
		インターゼミVII	1	2	○	◎				
	ホームゼミVII	2	2							
ホームゼミVIII	2	2								
教職専門 科目群	教職に関する科目	教育課程総論	2	1	◎	○				
		教育原理	1	2	◎				○	
		教育実習	4	3				◎	○	
		教育制度論	2	2	◎	○				
		教育方法	2	2	◎			○		
		教職概論	1	2	◎		○			
		教職実践演習	4	2			○	◎		
		情報科教育法I	3	2	○			◎		
		情報科教育法II	3	2	○			◎		
		生徒指導・進路指導論	2	2			◎	○		
		特別活動・総合的な学習の時間の指導法	2	2			◎	○		
		特別支援教育概論	2	1	◎	○				

※「区分」は、入学年度によって異なることがありますので注意してください。

27.実務経験のある教員一覧

専任教員

担当教員	実務経験の内容	担当科目			
		春学期			
金 美德	株式会社三井物産戦略研究所にて北東アジア地域を担当・統括し、世界潮流の把握、同地域の政治経済動向とビジネストレンドの分析、地政学リスクの助言、アジア戦略の提案などを行った。具体的には、三井物産株式会社の経営幹部・各部署・各支店、二木会(三井グループ社長会)、関係省庁向けに資料・情報の提供やブリーフィングを行った。	アジア経済論 I	グローバルビジネス入門	特別講座 I	プレゼミ I
小林 英夫	日本IBM株式会社でSEおよびソリューション営業に従事後、イー・アクセス株式会社(現ソフトバンク)の創業に参画。主に組織管理や経営企画を担い東証1部上場に貢献、代表取締役副社長を務める。子会社としてイー・モバイル株式会社(現ソフトバンク・ワイモバイル事業)の創業も手掛け、経営戦略本部長・情報システム本部長、副社長を歴任。	経営組織	経営情報論 I	特別講座 I	プレゼミ I
崎濱 栄治	SPSS Japan でテクニカルサポート、みずほ第一フィナンシャルテクノロジーで金融工学コンサルティング、フランスのアムンディではクオンツファンドマネジャーとして2,000億円超の年金資産運用を経験。その後、Webマーケティングベンチャーのイルグルム、ファンコミュニケーションズでデータサイエンスチームを統括。	データ分析実践	スタディースキル入門	多摩学 I	特別講座 I
志賀 敏宏	株式会社日立製作所 家電研究所にて、世界初の半導体撮像素子によるビデオカメラの電子回路設計、半導体開発、シミュレーション、製品化に従事。特許出願10件余。株式会社三菱総合研究所にて自動車・電機企業の新規事業の開発・マーケティングコンサルティング等70件程度に従事。高精細カラープリンタ事業等を支援。	日本経営論	プレゼミ I	ホームゼミ I~VIII	
長島 剛	多摩信用金庫の価値創造事業部や地域連携支援部で、多摩市・多摩信用金庫・多摩大学の三者による「多摩市創業支援事業連携協定」締結をはじめ、地域の自治体や大学・高専等との連携や地元企業やNPO等のマッチングに多数関わる。多摩ブルー・グリーン賞、ブルームセンター、課題解決プラットフォームTAMA、創業支援センターTAMA等開設。	多摩学 I	地域金融論	地域ビジネス入門	特別講座 I
中庭 光彦	日本コンベンションサービス株式会社でPCO(Professional Congress Organizer)となり国際航路会議・多摩学長国際会議等数々のMICEの企画・運営、自治体のMICE戦略策定業務に携わる。その後、株式会社プロジェクトブレインを創業し、企画担当役員・文化事業のプランナーとして活躍。1999年のミツカン水の文化センター創立に当初から参画し、第11回(2009)日本水大賞厚生労働大臣賞を受賞。現在もアドバイザーを継続中。	地域ビジネスプランニング	地域観光論	地域ビジネス入門	特別講座 I
西村 知晃	三菱マテリアル株式会社人事部門において、東京本社および九州工場(福岡)の人事・総務を経験。給与・賞与・退職金制度の改定・実施、労組折衝のほか、新卒・中途採用、社員教育を担当。2002年社会保険労務士資格取得。神戸大学大学院にて組織行動論、人的資源管理論を学ぶ。	キャリア・デザインⅢ	リーダーシップ論	特別講座 I	プレゼミ I
バトル	株式会社三井物産戦略研究所国際情報部にて、親会社の株式会社三井物産の会長以下経営陣をはじめ、経営企画部、各商品本部(含国内・海外拠点)向けに、大中華圏におけるビジネス戦略の立案・企画と情報支援活動に参画。また、三井グループの関連企業の経営陣向けにも定期的に情報支援活動に従事した。	中国経済論	グローバルビジネス入門	特別講座 I	プレゼミ I
初見 康行	株式会社リクルートHRマーケティング(現:リクルートジョブズ)において法人営業に従事。中小企業から大手企業に対し、広告媒体を使用した採用支援活動を行う。その後、自社の人事部に異動し、主に新卒採用の企画立案・実施に携わる。	キャリア・デザイン I	スタディースキル入門	キャリア・デザインⅢ	特別講座 I
浜田 正幸	本田技研工業株式会社、株式会社本田技術研究所にて自動車レースのF1プロジェクトのマネジメントチームに参画。その後株式会社野村総合研究所で経営コンサルタント。独立して株式会社ケアブレインズ創業。共同ファウンダー。株式会社ジェイ・フィール創業。取締役副社長。	キャリア・デザイン I	業界研究 I	インターンシップ I・II	プレゼミ I
松本 祐一	株式会社シー・エンド・シーにて、国内食品・飲料メーカーの商品開発のための市場調査の企画、実査、分析等に従事、その後株式会社アイアンドディーにて、国内外のIT関連企業のマーケティング、特に顧客開発のための戦略立案・実行を担当。また、学生時代に国際NPO国境なき医師団日本事務局にて、学生NPOの立ち上げと運営を経験している。	事業構想論 I	事業デザイン論 I	地域ビジネス入門	プレゼミ I

担当科目									
春学期			秋学期						
ホームゼミ I～VII	インターゼミ I～VII	アクティブ・ラーニング実践 I～VII	韓国経済論	グローバルビジネス入門	特別講座 II	プレゼミ II	ホームゼミ I～VII	インターゼミ I～VII	アクティブ・ラーニング実践 I～VII
ホームゼミ I～VII			キャリア・デザイン入門	ベンチャー企業論	特別講座 II	プレゼミ II	ホームゼミ I～VII		
プレゼミ I	ホームゼミ(志) I～VII	インターゼミ I～VII	マーケティング・データ分析	ビジネススキル入門	多摩学 II	特別講座 II	プレゼミ II	ホームゼミ(志) I～VII	インターゼミ I～VII
			ビジネス戦略	プレゼミ II	ホームゼミ I～VII				
プレゼミ I	ホームゼミ I～VII	インターゼミ I～VII	多摩学 II	事業デザイン論 II	地域ビジネス入門	特別講座 II	プレゼミ II	ホームゼミ I～VII	インターゼミ I～VII
プレゼミ I	ホームゼミ I～VII		地域ビジネス入門	地域政策プランニング	特別講座 II	プレゼミ II	ホームゼミ I～VII		
ホームゼミ I～VII			ビジネススキル入門	人材マネジメント論	キャリア・デザイン IV	特別講座 II	プレゼミ II	ホームゼミ I～VII	
ホームゼミ I～VII	インターゼミ I～VII	Study Abroad I～VII	アジア経済論 II	グローバルビジネス入門	特別講座 II	プレゼミ II	ホームゼミ I～VII	インターゼミ I～VII	Study Abroad I～VII
プレゼミ I	ホームゼミ I～VII		キャリア・デザイン II	スタディースキル入門	キャリア・デザイン IV	特別講座 II	プレゼミ II	ホームゼミ I～VII	
ホームゼミ I～VII			キャリア・デザイン II	キャリア・デザイン入門	インターシッピ I・II	消費心理	プレゼミ II	ホームゼミ I～VII	
ホームゼミ I～VII			事業構想論 II	NPO・NGO論	地域ビジネス入門	プレゼミ II	ホームゼミ I～VII		

非常勤教員

担当教員	実務経験の内容	担当科目	
		春学期	秋学期
青木 克彦	三菱商事株式会社、三菱UFJリース株式会社で、マネジメント、経理、財務、金融関連の業務を幅広く担当。特に、数多くの企業買収分野での経験豊富。米国駐在経験も含めグローバルなビジネスに永年携わっている。		産業社会特講 (企業とは？－総合商社の事例から－)
荻阪 哲雄	警視庁、ベンチャー企業で勤務の後、組織風土改革プロフェッショナル・ファーム スコラ・コンサルティングの創業期に参画。同社パートナーを経て、独立。 職場の結束力を高めて、ビジョンを行動へ変える独自手法『バインディング・アプローチ』を開発・提唱して、株式会社 チェンジ・アーティストを設立。代表に就任。これまでに、3万時間の企業コンサルティングを展開して、1万2000名のリーダーを支援する。	産業社会特講 (ビジョン・マネジメント論 2020春)	
北川 隆文	1981年～2008年、経済産業行政に従事し、中心市街地活性化法等10本の法律の制定・改正を行った。1992年～1995年、在ロスアンゼルス総領事館経済班長として、日米通商摩擦等の実務を担当した。1999年～2002年日中経済協会北京事務所長を務めた。	アメリカ経済論	
橋川 幸夫	1972年、音楽投稿雑誌「ロッキングオン」創刊、編集室長。1978年、全面投稿雑誌「ポンプ」を創刊、編集長。その後、メディア開発、マーケティングリサーチ、企業コンサルティングなどを勤める。1996年、株式会社デジタルメディア研究所を創業。インターネット関連の業務、コンサルを行う。「暇つぶしの時代」(平凡社)「森を見る力」(晶文社)など著作多数。	産業社会特講 (人間・メディア・社会の構造と未来)	
清松 敏雄	青山監査法人(現PwCあらた有限責任監査法人)、株式会社ビジネストラストを経て、清松公認会計士事務所、清松敏雄税理士事務所を開設。公認会計士、税理士として、会計監査、会計コンサルティングに従事してきた。	ホームゼミⅡ～Ⅶ	ホームゼミⅡ～Ⅶ
久米 信行	イマジニアでゲーム企画開発と営業、日興証券(現SMBC日興証券)でAI相続診断システム開発・研修担当を経て、家業のTシャツメーカー久米繊維工業の三代目経営者(現在相談役)。いちはやくICTを活用し、日経インターネットアワード、経済産業省「IT経営百選」、東京商工会議所「勇気ある経営大賞」特別賞を受賞。APEC2010中小企業サミット日本代表。東京商工会議所墨田支部副会長、墨田区観光協会理事として観光地域づくりに邁進。墨田区文化振興財団、新日本フィルハーモニー交響楽団、日本舞台芸術振興会、日本吟剣詩舞振興会の評議員として文化振興と国際交流にも尽力。2020年開学のiU(情報経営イノベーション専門職大学)教授に就任予定。		ビジネスコミュニケーションⅡ
後藤 涼子	野村證券株式会社企業情報部を経て、ゼネラルビジネスサービス株式会社にて企業向けMS Office等各種アプリケーション、WEB制作研修等に携わる。その後ITインストラクター及びライターとして、講師活動を行うとともに、IT関連書籍の執筆多数。	データベースⅠ	
佐藤 洋行	2008年から株式会社ブレインパッドにて、データ分析事業およびwebサービス開発事業のマネジメント、データ分析関連教育事業の立ち上げを行う。2014年からは、同社とヤフー株式会社とのジョイントベンチャーである、株式会社Qubital データサイエンス取締役を兼任。	ホームゼミⅡ～Ⅶ	ホームゼミⅡ～Ⅶ
丹下 英明	株式会社日本政策金融公庫において、中小企業向け融資・審査業務に従事。その後、総合研究所に異動し、中小企業経営に関する様々な研究を行う。	ホームゼミⅡ～Ⅶ	ホームゼミⅡ～Ⅶ
久恒 啓一	日本航空入社。ロンドン空港支店、客室本部労務担当等を経て、本社広報課長、サービス委員会事務局次長を歴任。ビジネスマン時代から「知的生産の技術」研究会(現在はNPO法人)に所属し著作活動も展開。その後、新設の宮城大学教授を経て、多摩大学経営情報学部教授、副学長を歴任。100冊を超える著作や雑誌への寄稿、講演などで活躍中。	ビジネスコミュニケーションⅠ	立身人物伝
村山 貞幸	株式会社電通にて、自動車、時計、化粧品などのクライアントを担当。ヨーロッパ、アフリカ、中近東メディアキャンペーン、台湾市場参入キャンペーン、ソ連空港看板、パリVOGUEタイアップ広告、汎アジアクラシックコンサート、アジア広告企業コンベンションなどを企画・運営した。	ホームゼミⅡ～Ⅶ	ホームゼミⅡ～Ⅶ



28. シラバス

2020 年度シラバス 目次

《一般科目》

1 年生

English Expression I	1
English Expression II	2
IT コミュニケーション入門	3
IT 活用法 I	4
IT ビジネス入門	5
韓国語 I	6
韓国語 II	7
キャリア・デザイン入門	8
グローバルビジネス入門	9
グローバルヒストリー I	10
グローバルヒストリー II	11
コンピュータ概論	12
産業社会特講 (企業とは?—総合商社の事例から—)	13
産業社会特講 (世界が迎える大きな曲がり角—2020 年—)	14
産業社会特講 (地域の偉人から生き方を学ぶ)	15
産業社会特講 (人間・メディア・社会の構造と未来)	16
産業社会特講 (ビジョン・マネジメント論 2020 春)	17
初級簿記	18
スタディースキル入門	19
スポーツ・マネジメント論	20
スポーツ I (シェイプアップフィットネス)	21
スポーツ I (テニス)	22
スポーツ I (バドミントン)	23
スポーツ I (フットサル)	24
多摩学 I	25
多摩学 II	26
地域ビジネス入門	27
中国語 I X	28
中国語 I Y	29
中国語 II X	30
中国語 II Y	31
日本語講座初級	32
日本語講座中級 I	33
日本語講座中級 II	34
日本語講座上級	35
ビジネス数学基礎	36
ビジネススキル入門	37
法学 (憲法)	38
マーケティングマネジメント論	39

マーケティング入門	40
マクロ経済学	41
ミクロ経済学	42
余暇マネジメント	43
ライティング・スキル	44
ライフ・デザイン	45

2 年生

Basic Office English I	46
Basic Office English II	47
English Expression I (再履修者用)	48
English Expression II (再履修者用)	49
IT 活用法 II	50
IT パスポート	51
NPO・NGO 論	52
Practical English Conversation I	53
Practical English Conversation II	54
TOEIC I	55
TOEIC II	56
Web デザイン I	57
Web デザイン II	58
アドバンスド・ライティング・スキル	59
アメリカ経済論	60
アントレプレナーシップ論	61
韓国ビジネスコミュニケーション I	62
韓国ビジネスコミュニケーション II	63
キャリア・デザイン I	64
キャリア・デザイン II	65
業界研究 I	66
金融論	67
クリエイティブデザイン I	68
クリエイティブデザイン II	69
クリエイティブデザイン III	70
グローバルヒストリー III	71
グローバルヒストリー IV	72
経営科学	73
経営学概論	74
経営思想史	75
経営シミュレーションゲーム	76
経営情報論 I	77
経営情報論 II	78
原価計算	79

国際経営入門	80		
国際経済学	81		
財務会計	82		
サブカルチャー論	83		
事業構想論Ⅰ	84		
事業構想論Ⅱ	85		
社会心理	86		
消費心理	87		
情報法	88		
情報倫理	89		
スポーツⅡ (シェイプアップフィットネス)	90		
スポーツⅡ (世代間交流健康トレーニング)	91		
スポーツⅡ (テニス)	92		
スポーツⅡ (フットサル)	93		
スポーツと健康	94		
地域スポーツ論	95		
地域政策プランニング	96		
地域ビジネスプランニング	97		
中級簿記	98		
中国ビジネスコミュニケーションⅠ	99		
中国ビジネスコミュニケーションⅡ	100		
データサイエンスⅠ	101		
データサイエンスⅡ	102		
データベースⅠ	103		
データベースⅡ	104		
哲学入門	105		
特別講座Ⅰ・Ⅱ	106		
ビジネスコミュニケーションⅠ	107		
ビジネスコミュニケーションⅡ	108		
ビジネス数学Ⅰ	109		
ビジネス数学Ⅱ	110		
ビジネス戦略	111		
ビジネス法	112		
プログラミング入門Ⅰ	113		
プログラミング入門Ⅱ	114		
プログラミング入門Ⅲ	115		
ベンチャー企業論	116		
マーケティング・データ分析	117		
マーケティング・リサーチ	118		
リーダーシップ論	119		
立志人物伝	120		
		3年生	
		Web サービス開発	121
		Web プログラミング	122
		アジア経済論Ⅰ	123
		アジア経済論Ⅱ	124
		韓国経済論	125
		キャリア・デザインⅢ	126
		キャリア・デザインⅣ	127
		経営組織	128
		経営と意思決定	129
		経営とセキュリティ	130
		経済統計学	131
		現代メディア論	132
		国際公共政策	133
		コンピュータネットワーク活用	134
		サービス産業論	135
		事業デザイン論Ⅰ	136
		事業デザイン論Ⅱ	137
		情報工学概論	138
		情報と職業	139
		情報ネットワーク	140
		人材マネジメント論	141
		地域観光論	142
		地域金融論	143
		地域産業論	144
		中国経済論	145
		データサイエンスⅢ	146
		データサイエンスⅣ	147
		データ分析実践	148
		日本経営論	149
		日本経済論	150
		認知心理	151
		ビッグデータ活用法	152
		問題解決学特講Ⅰ	153
		問題解決学特講Ⅱ	154
		問題解決学特講Ⅲ	155
		立志特講Ⅰ	156
		立志特講Ⅱ	157
		立志特講Ⅲ	158
		ロシア経済論	159

《演習科目》

プレゼミⅠ	160
プレゼミⅡ	161
ホームゼミ 石川 晴子	162
ホームゼミ 出原 至道	163
ホームゼミ 今泉 忠	164
ホームゼミ 梅澤 佳子	165
ホームゼミ 大森 拓哉	166
ホームゼミ 加藤 みずき	167
ホームゼミ 金 美德	168
ホームゼミ 木村 太一	169
ホームゼミ 清松 敏雄	170
ホームゼミ 久保田 貴文	171
ホームゼミ 小西 英行	172
ホームゼミ 小林 昭菜	173
ホームゼミ 小林 英夫	174
ホームゼミ 齋藤 S. 裕美	175
ホームゼミ 彩藤 ひろみ	176
ホームゼミ 佐藤 洋行	177
ホームゼミ 佐藤 文平	178
ホームゼミ 椎木 哲太郎	179
ホームゼミ 志賀 敏宏	180
ホームゼミ 下井 直毅	181
ホームゼミ 杉田 文章	182
ホームゼミ 高橋 恭寛	183
ホームゼミ 丹下 英明	184
ホームゼミ 趙 佑鎮	185
ホームゼミ 中澤 弥	186
ホームゼミ 長島 剛	187
ホームゼミ 中庭 光彦	188
ホームゼミ 中村 その子	189
ホームゼミ 中村 有一	190
ホームゼミ 西村 知晃	191
ホームゼミ 野坂 美穂	192
ホームゼミ バートル	193
ホームゼミ 初見 康行	194
ホームゼミ 浜田 正幸	195
ホームゼミ 増田 浩通	196
ホームゼミ 松本 祐一	197
ホームゼミ 水盛 涼一	198
ホームゼミ 村山 貞幸	199

ホームゼミ 良峯 徳和	200
ホームゼミ (志)	201
インターゼミ	202

《認定科目》

アクティブ・ラーニング実践Ⅰ～Ⅷ	203
AP 数学	204
スタディーアブロードⅠ～Ⅷ	205
インターンシップⅠ・Ⅱ	206

《教職に関する科目》

教育課程総論	207
教育原理 (2017年度以前入学生対象)	208
教育原理 (2018年度以降入学生対象)	209
教育実習	210
教育心理学	211
教育制度論	212
教育相談	213
教育方法	214
教職概論	215
教職実践演習	216
情報科教育法Ⅰ	217
情報科教育法Ⅱ	218
生徒指導・進路指導論	219
特別活動・総合的な学習の時間の指導法	220
特別支援教育概論	221

科目名 English Expression I (English Expression I) ※2020年度入学生用**サブタイトル** 世界でそして地域で活躍するために必要な英語表現力を身に付ける**担当教員** 中村(そ)、石川、徳増、潮田、永木、吉田、田口 **対象学年** 1年生(2020年度入学生用) **区分** 春学期**■講義目的**

世界でそして地域で活躍するために必要な英語表現力を身に付け、志の実現に向かって社会に自分のアイデアや考え、意見を英語で積極的に発信し、いろいろな形のコミュニケーションを取れるようにする。

■講義分類

社会人力育成／グローバルビジネス

■到達目標

以下講義概要に述べられる学習項目について、英語でのコミュニケーションが取れるようにする。特に、留学や、国内外での研修、見学、社会的活動に最低限必要な英語表現を習得し、自分の考えやアイデアをいろいろな方法で社会に発信し、また同時に発信された他者の考えを正しく理解できるようになること。客観的指標としてTOEIC350点程度の実力をつけることを目標とする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

地域でも、また国内、海外どこであっても自分の志を実現するためにそして、産業社会で発生する様々な問題を解決し、社会をよりよいものにするために、円滑に英語コミュニケーションを行えるようになること。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

演習

- [個人] プレゼンテーション
- [ペア] ペアワーク／ロールプレイ
- [グループ] PBL
- [上記以外] なし

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

下記の各週講義内容に関して配布される教材を予習、復習し、そこに提示されている英語表現を覚えること。各講義につき事前学習に1.5時間以上、事後学習に1.5時間、合計で3時間以上の学習が必要である。

■授業の概要

- 第1講 挨拶、アイスブレイキング、友人作り、スモールトークなど
- 第2講 挨拶、アイスブレイキング、友人作り、スモールトークなど
- 第3講 ファッションや健康、スポーツなど興味があることや趣味などについて
- 第4講 ファッションや健康、スポーツなど興味があることや趣味などについて
- 第5講 ここまでの復習と性格や服装についての描写
- 第6講 性格や服装についての描写
- 第7講 性格や服装についての描写
- 第8講 天候、天気に関する表現、意見のやりとり、やってみたいことや訪れてみたい場所
- 第9講 天候、天気に関する表現、意見のやりとり、やってみたいことや訪れてみたい場所
- 第10講 天候、天気に関する表現、意見のやりとり、やってみたいことや訪れてみたい場所
- 第11講 自分の家や家庭での表現、依頼に関する表現
- 第12講 自分の家や家庭での表現、依頼に関する表現
- 第13講 自分の家や家庭での表現、依頼に関する表現
- 第14講 期末スピーキングテストと最終プレゼンテーション
- 第15講 期末ライティングテスト

■フィードバックの要領

授業内小テスト、課題、レポート類については点数と必要な場合はコメントを付けて返却

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上) : 下記の配分で得点を付け、90点以上の場合
- 評価 A (89～80点) : 下記の配分で得点を付け、80点から89点の場合
- 評価 B (79～70点) : 下記の配分で得点を付け、70点から79点の場合
- 評価 C (69～60点) : 下記の配分で得点を付け、60点から69点の場合
- 評価 F (59点以下) : 下記の配分で得点を付け、59点以下の場合

■評価方法

平常点20%、授業内小テスト20%、宿題20%、中間テストおよび期末テスト40%

■留意点

相談や質問などは sonoko-n@tama.ac.jp にメールを送っていただければいつでも対応します。必要に応じてオフィスアワーなどによって直接お話しすることも可能です。このクラスはブレスメントテストの結果に基づくクラス指定があり、1クラスあたりの人数は20人以下となります。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名

English Expression II (English Expression II) ※2020年度入学生用

サブタイトル

世界でそして地域で活躍するために必要な英語表現力を身に付ける

担当教員

中村(そ)、石川、徳増、潮田、永木、吉田、田口

対象学年

1年生(2020年度入学生用)

区分

秋学期

■講義目的

世界でそして地域で活躍するために必要な英語表現力を身に付け、志の実現に向かって社会に自分のアイデアや考え、意見を英語で積極的に発信し、いろいろな形のコミュニケーションを取れるようにする。

■講義分類

ビジネス環境理解/社会人育成/グローバルビジネス

■到達目標

以下講義概要に述べられる学習項目について、英語でのコミュニケーションが取れるようにする。特に、留学や、国内外での研修、見学、社会的活動に最低限必要な英語表現を習得し、自分の考えやアイデアをいろいろな方法で社会に発信し、また同時に発信された他者の考えを正しく理解できるようになること。客観的指標としてTOEIC350点程度の実力をつけることを目標とする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

地域でも、また国内、海外どこであっても自分の志を実現するためにそして、産業社会で発生する様々な問題を解決し、社会をよりよいものにするために、円滑に英語コミュニケーションを行えるようになること。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

演習

- [個人] プレゼンテーション/ワークシート
- [ペア] ペアワーク/相互教授法/ロールプレイ
- [グループ] PBL/KJ法
- [上記以外] なし

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

下記の各週講義内容に関して配布される教材を予習、復習し、そこに提示されている英語表現を覚えること。各講義につき事前学習に1.5時間以上、事後学習に1.5時間、合計で3時間以上の学習が必要である。

■授業の概要

- 第1講 挨拶、アイスブレイキング、友人作り、スモールトークなど
- 第2講 挨拶、アイスブレイキング、友人作り、スモールトークなど
- 第3講 人間の体の動き、健康(習慣)、病気やストレス解消、などの話題についての表現を学ぶ
- 第4講 人間の体の動き、健康(習慣)、病気やストレス解消、などの話題についての表現を学ぶ
- 第5講 人間の体の動き、健康(習慣)、病気やストレス解消、などの話題についての表現を学ぶ
- 第6講 人間の体の動き、健康(習慣)、病気やストレス解消、などの話題についての表現を学ぶ
- 第7講 ファッションや買い物に関連した表現、値段交渉、好きな場所の紹介表現など
- 第8講 ファッションや買い物に関連した表現、値段交渉、好きな場所の紹介表現
- 第9講 ファッションや買い物に関連した表現、値段交渉、好きな場所の紹介表現
- 第10講 ファッションや買い物に関連した表現、値段交渉、好きな場所の紹介表現
- 第11講 家や家庭にまつわる表現、自分の家や部屋の描写、日常生活における近所の住人との会話
- 第12講 家や家庭にまつわる表現、各部屋の描写、近所の住人との会話、依頼表現など
- 第13講 家や家庭にまつわる表現、部屋の描写、近所の住人との会話、依頼表現など
- 第14講 期末スピーキングテストと最終プレゼンテーション
- 第15講 期末ライティングテスト

■フィードバックの要領

授業内小テスト、課題、レポート類については点数と必要な場合はコメントを付けて返却

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上) : 下記の配分で得点を付け、90点以上の場合
- 評価 A (89～80点) : 下記の配分で得点を付け、80点から89点の場合
- 評価 B (79～70点) : 下記の配分で得点を付け、70点から79点の場合
- 評価 C (69～60点) : 下記の配分で得点を付け、60点から69点の場合
- 評価 F (59点以下) : 下記の配分で得点を付け、59点以下の場合

■評価方法

平常点20%、授業内小テスト20%、宿題20%、中間テストおよび期末テスト40%

■留意点

相談や質問などは sonoko-n@tama.ac.jp にメールを送っていただければいつでも対応します。必要に応じてオフィスアワーなどに会って直接お話することも可能です。このクラスはプレースメントテストの結果に基づくクラス指定があり、1クラスあたりの人数は20人以下となります。

科目名 ITコミュニケーション入門 (Introduction to IT Communication) ※2020年度入学生用

サブタイトル 「MOS Excel 2013 Specialist」対策講座

担当教員 良峯ほか

対象学年 1年生(2020年度入学生用)

区分 秋学期

■講義目的

経営情報学部において、必須かつ基礎的なスキルである「マイクロソフトオフィス-特にエクセル(表計算)」の使い方を修得する。本学が重視するアクティブ・ラーニングにおけるプレゼンテーション力に直結するスキルの向上を目指す。

■講義分類

ビジネスICT

■到達目標

MOS(マイクロソフトオフィススペシャリスト)資格のExcelのスペシャリストレベル(一般レベル)の合格。特に意欲ある者は、Excelのエキスペートレベル(上級レベル)の合格を目指して欲しい。また、これらのスキルを足がかりに、自らワード(Word)やパワーポイント(PowerPoint)の資格合格を目指すことも可能である。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

表計算ソフトの操作に関する基礎的な学力を養い、産業社会で要求されるさまざまな課題にデータサイエンスの観点から対処する能力を習得する。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義

[個人] ワークシート

[ペア] なし

[グループ] なし

[上記以外] なし

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

教科書の問題集を見ながらExcelを操作すること。予習・復習の時間はあわせて1.5時間以上。

■授業の概要

- 第1講 インタロダクション。Excelの用語・基本操作。
- 第2講 ワークシートやブックの作成と管理①
- 第3講 ワークシートやブックの作成と管理②
- 第4講 ワークシートやブックの作成と管理③ セルやセル範囲の作成①
- 第5講 セルやセル範囲の作成②
- 第6講 セルやセル範囲の作成③ テーブル①
- 第7講 テーブル② 数式や関数の適用①
- 第8講 数式や関数の適用②
- 第9講 数式や関数の適用③
- 第10講 グラフやオブジェクトの作成①
- 第11講 グラフやオブジェクトの作成②
- 第12講 グラフやオブジェクトの作成③
- 第13講 模擬試験(期末試験①)
- 第14講 模擬試験(期末試験②)
- 第15講 模擬試験(期末試験③)

■フィードバックの要領

提出された課題に対して、コメントを記入することでフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : 下記、配分により90点以上
 評価 A (89～80点) : 下記、配分により80点以上89点以下
 評価 B (79～70点) : 下記、配分により70点以上79点以下
 評価 C (69～60点) : 下記、配分により60点以上69点以下
 評価 F (59点以下) : 下記、配分により59点以下

■評価方法

基本的に「MOS Excel 2013 Specialist」検定試験を受験し、合格することを単位取得の条件とする。成績は、平常点25%、課題点25%、模擬試験や「MOS Excel 2013 Specialist」検定試験の結果を50%として、算定する。

■留意点

本講義は「MOS Excel 2013 Specialist」対策講座のため、この講座を受講する学生は原則的に「MOS Excel 2013 Specialist」試験を受験することを必須条件とする。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 IT 活用法 I (Utilizing Method of IT I)**サブタイトル** 初心者のためのプログラミング的思考法入門**担当教員** 出原、彩藤**対象学年** 1 年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

本講義の目的は、情報技術 (IT) の活用の基本となるプログラミング的思考法を身につけることである。一般に「コンピュータが使える」といったときには、文書や表計算、プレゼンテーション資料の作成能力を想定されることが多い。しかし、これらは、IT の活用全体から見ると、ごく一部に過ぎない。本来の IT 活用能力とは、コンピュータそのものの操作を超えて、プログラミングに代表される論理的思考力・説明力にある。本講義では、さまざまなプログラムに実際に触れながら、その考え方を理解し、IT の活用の基礎を鍛えることを目的とする。

■講義分類

ビジネス ICT

■到達目標

・構造化プログラミングの基礎を理解する・コンピュータ内部のデータ構造を理解する・基礎的なアルゴリズムを理解する

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ① 最も身につけられる事項 ② 2 番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ③ ①・②で選択された事項の詳細

プログラミングの実験を行いながら、論理的な思考力を身につける。また、データ構造や暗号化処理などについて学ぶ。

■授業形態 AL 手法 ※該当する項目のみ記載

講義 / 演習

[個人] プレゼンテーション

[ペア] ヘアワーク

[グループ] なし

[上記以外] 対戦

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

各講義の終了後、サンプルプログラムを理解し、理論を身につけることが期待される。(120 分)

■授業の概要

- 第 1 講 ガイダンス
- 第 2 講 構造化プログラミング
- 第 3 講 イベント駆動型プログラミング
- 第 4 講 複雑な繰り返し
- 第 5 講 プロトタイピング (1)
- 第 6 講 プロトタイピング (2)
- 第 7 講 前半プレゼンテーション
- 第 8 講 アルゴリズム入門
- 第 9 講 「情報」の理解
- 第 10 講 暗号
- 第 11 講 状態遷移
- 第 12 講 セルオートマトンと創発性
- 第 13 講 探索
- 第 14 講 再帰呼び出し
- 第 15 講 人工知能入門

■フィードバックの要領

学生は、オンラインで質問できる。レポートはルーブリックによって評価する。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 数値評価で 90 点以上
 評価 A (89 ~ 80 点) : 数値評価で 80 点以上 90 点未満
 評価 B (79 ~ 70 点) : 数値評価で 70 点以上 80 点未満
 評価 C (69 ~ 60 点) : 数値評価で 60 点以上 70 点未満
 評価 F (59 点以下) : 数値評価で 60 点未満

■評価方法

欠席理由を問わず 3 分の 2 以上の出席を前提として、講義内レポート 100% で評価する。

■留意点

・初回講義で全体解説を行うため、履修希望者は必ず初回講義に出席すること。特段の事情がある場合を除き、初回講義に出席していないものの受講を認めない。
 ・5 月以降、コンピュータを持参しない者の受講を認めない。

科目名 IT ビジネス入門 (Introduction to IT Business) ※ 2018年度以降入学生用**サブタイトル** 経営情報学科への誘い**担当教員** 小西、久保田ほか**対象学年** 1年生以上(2018年度以降入学生用) **区分** 秋学期**■講義目的**

経営情報学科では、ITを活用したビジネスについて学びます。この講義では、ITを専門に扱うIT企業はもちろん、ITを活用してビジネスを行う一般企業においても、必要不可欠な知識や技術の「きほん」を優しく解説します。そしてこの講義を通じて「経営情報学科」での学びを誘います。

■講義分類

ビジネス ICT

■到達目標

IT企業や、ITを活用してビジネスを行う一般企業で必要とされる、ITに関する基本的な用語を理解し、身の回りの具体事例を挙げるができるようになることを目標とします。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

IT企業やITを活用してビジネスを行う企業について、グローバルに展開する具体事例を挙げて説明出来るようになる。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載**講義**

[個人] ワークシート/問題作成

[ペア] なし

[グループ] なし

[上記以外] なし

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

次回授業のテキスト該当部分の予習及び、当回授業のテキスト該当部分の復習(1.5時間)

■授業の概要

- 第1講 ガイダンス、ITビジネスのきほん
- 第2講 コンピュータ構成要素
- 第3講 コンピュータ構成要素
- 第4講 ソフトウェア
- 第5講 ソフトウェア
- 第6講 ハードウェア
- 第7講 ハードウェア
- 第8講 インターフェース
- 第9講 インターフェース
- 第10講 マルチメディア
- 第11講 マルチメディア
- 第12講 データベース
- 第13講 データベース
- 第14講 ネットワーク
- 第15講 ネットワーク

■フィードバックの要領

授業内で実施する予習プリントの内容について、回答例を示します。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : ITビジネスの用語について詳しく理解し、グローバルな具体事例を挙げて説明できる。

評価 A (89～80点) : ITビジネスの用語について詳しく理解し、身の回りの具体事例を挙げて説明できる。

評価 B (79～70点) : ITビジネスの用語について理解し、身の回りの具体事例を挙げて説明できる。

評価 C (69～60点) : ITビジネスの用語について理解しているが、具体事例を挙げるできない。

評価 F (59点以下) : ITビジネスの用語について理解ができず、その具体事例を挙げることもできない。

■評価方法

平常点 (50%)、授業内ミニレポート (50%)

■留意点

毎回出席し、授業内ミニレポートを必ず提出してください。予習復習や授業内の発言によってボーナス点を付与することがあります。欠席が3分の1を超えた場合、原則として単位を付与しません。

科目名 韓国語 I (Korean I)

サブタイトル ハングルのマスター

担当教員 趙、高

対象学年 1年生以上

区分 春学期

■講義目的

多摩大学では世界潮流としてのアジアダイナミズムを体得すべく諸々の教育プログラムを提供しているが、アジアの第一関門は隣国の韓国であろう。本講義では韓国語をはじめて学ぶ学生を対象に、ハングル文字と発音、基礎的文法やコミュニケーションを学ぶことを目的とする。韓国語の単語を一つ知ること、フレーズを一つ学ぶごとに、学生の目に映る韓国や韓国人は変わってくるものである。韓国語のみならず韓国や韓流を知りたい意欲ある学生の参加を望む。本講義を1年間積極的に参加することで、中級レベルの韓国語も扱う韓国ビジネスコミュニケーションⅠ・Ⅱの学習につながることを期待するものである。

■講義分類

グローバルビジネス

■到達目標

①ハングル文字や発音を徹底してマスターした後、ハングル能力検定試験5級レベルの語彙や文法表現を学習する。②韓国ビジネスコミュニケーションⅠ・Ⅱ・韓国経済論・アジア経済論Ⅰを学ぶ際の土台づくり、③来年度の6月に行われるハングル能力検定試験5級を目指し、その実力をつけることを目標とする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

韓国語の文字であるハングルの学習することで韓国語の読み書きができるようになり、文法や語彙など基本的な表現を学習することで簡単な意思疎通ができるようになる。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義

- [個人] ワークシート
- [ペア] ペアワーク
- [グループ] マインド・マップ
- [上記以外] なし

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上) 及び具体的な内容

授業前には、その回の該当課の本文をスムーズに読めるようにすること。また、その回に小テストを行う際には、その回の授業が始まる前に教科書の練習問題を復習すること(各1.5時間学習相当)。

■授業の概要

- 第1講 オリエンテーション、韓国語について
- 第2講 2課「子音②」と3課「子音③」
- 第3講 4課「子音④」と5課「合成母音」
- 第4講 6課「パッチム」と7課「連音化」
- 第5講 8課「～는 ～입니다」/9課「～라고 합니다」/鼻音化
- 第6講 10課「～가 ～예요」/11課「～를 ～해요」/濃音化
- 第7講 12課「해요体①」/13課「해요体②」/ㅎの弱音化
- 第8講 14課「～이십니다/～이세요」/15課「～가 아니예요」
- 第9講 16課「～으십니다/～으세요」/17課「안～」
- 第10講 18課「일, 이, 삼」/19課「이것, 그것, 저것」
- 第11講 20課「있다/없다」/21課「하나, 둘, 셋」
- 第12講 22課「앞, 뒤, 옆」/23課「잘하다/못하다」/激音化
- 第13講 24課「～으세요」/25課「～을까요？」
- 第14講 26課「～쓰어요」/27課「아직 안～ 쓰어요」
- 第15講 映画鑑賞、個人面談

■フィードバックの要領

毎回学習した内容の小テストを行い、できないところをチェックし、もう一度指導する。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : ハングルの完全マスターし、文法を高度に理解し、基本ボキャブラリーが豊富である
 評価 A (89～80点) : ハングルのマスターし、基本的文法を良く理解、基本ボキャブラリーを習得している
 評価 B (79～70点) : ハングル文字や発音を一定程度マスターしており、基本的文法を一定程度理解している
 評価 C (69～60点) : ハングルの基本的にスムーズには読めて、基本的文法のいくつかを習得している
 評価 F (59点以下) : ハングルのスムーズに読めず、あるいは読めるものの欠席が多い

■評価方法

- ・授業での毎回の小テストの総計点(100%)
- ・出席を疎かにすると毎回実施する小テストを受けられないことになるので、結果的には成績に著しく不利になることを留意されたい。

■留意点

- ・語学の学習には地道さ、根気強さが必要であるため、なるべく毎回の出席を望む。これまでの経験だと、出席が良好な学生が成績も上位であり、毎回の出席こそ語学上達の近道である。一定の出席に満たない場合、学期途中においてもFになる可能性を警告する。
- ・授業では随時、筆記や発音の小テストがあるが、決して高いハードルではない。
- ・小テストに対してフィードバックを行う。

科目名 韓国語 II (Korean II)**サブタイトル** 初級単語と文法の学修**担当教員** 趙、高**対象学年** 1年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

多摩大学では世界潮流としてのアジアダイナミズムを体得すべく諸々の教育プログラムを提供しているが、アジアの第一関門は隣国の韓国であろう。本講義では韓国語をはじめて学ぶ学生を対象に、ハングル文字と発音、基礎的文法やコミュニケーションを学ぶことを目的とする。韓国語の単語を一つ知るごとに、フレーズを一つ学ぶごとに、学生の目に映る韓国や韓国人は変わってくるものである。韓国語のみならず韓国や韓流を知りたい意欲ある学生の参加を望む。本講義を1年間積極的に参加することで、中級レベルの韓国語も扱う韓国ビジネスコミュニケーションⅠ・Ⅱの学習につながることを期待するものである。

■講義分類

グローバルビジネス

■到達目標

①ハングル文字や発音を徹底してマスターした後に、ハングル能力検定試験5級レベルの語彙や文法表現を学習する。②韓国ビジネスコミュニケーションⅠ・Ⅱ・韓国経済論・アジア経済論Ⅰを学ぶ際の土台づくり。③来年度の6月に行われるハングル能力検定試験5級を目指し、その実力をつけることを目標とする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ③ ①・②で選択された事項の詳細

韓国語の文字であるハングルを学習することで韓国語の読み書きができるようになり、文法や語彙など基本的な表現を学習することで簡単な意思疎通ができるようになる。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義

- [個人] ワークシート
- [ペア] ペアワーク
- [グループ] マインド・マップ
- [上記以外] なし

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

授業前には、その回の該当課の本文をスムーズに読めるようにすること。また、その回に小テストを行う際には、その回の授業が始まる前に教科書の練習問題を復習すること (各 1.5 時間学習相当)。

■授業の概要

- 第1講 28課「〜고」/29課「〜고싶다」
- 第2講 30課「吳〜」/31課「〇変則」
- 第3講 32課「〜지요/죠」/33課「〜ㄹ」
- 第4講 34課「〜하다만」/35課「〜요/요?」
- 第5講 36課「〜하고 같다」/37・38課「模擬試験 (筆記)」
- 第6講 39・40課「模擬試験 (聞き取り)」/会話練習 (1)「自己紹介」
- 第7講 会話練習 (2)「日課」
- 第8講 会話練習 (3)「将来の夢・希望」
- 第9講 会話練習 (4)「体験・経験」
- 第10講 会話練習 (5)「お正月」
- 第11講 会話練習 (6)「番組」
- 第12講 会話練習 (7)「ショッピング」
- 第13講 会話練習 (8)「パソコンとインターネット」
- 第14講 会話練習 (9)「語学」
- 第15講 映画鑑賞、願書作成

■フィードバックの要領

毎回学習した内容の小テストを行い、できないところをチェックし、もう一度指導する。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : ハングルの完全マスターし、文法を高度に理解し、基本ボキャブラリーが豊富である
- 評価 A (89 ~ 80 点) : ハングルのマスターし、基本的文法を良く理解、基本ボキャブラリーを習得している
- 評価 B (79 ~ 70 点) : ハングル文字や発音を一定程度マスターしており、基本的文法を一定程度理解している
- 評価 C (69 ~ 60 点) : ハングルの基本的にスムーズには読めて、基本的文法のいくつかを習得している
- 評価 F (59 点以下) : ハングルのスムーズに読めず、あるいは読めるものの欠席が多い

■評価方法

- ・授業での毎回の小テストの総計点 (100%)
- ・出席を疎かにすると毎回実施する小テストを受けられないことになるので、結果的には成績に著しく不利になることを留意されたい。

■留意点

- ・語学の学習には地道さ、根気強さが必要であるため、なるべく毎回の出席を望む。これまでの経験だと、出席が良好な学生が成績も上位であり、毎回の出席こそ語学上達の近道である。一定の出席に満たない場合、学期途中においても F になる可能性を警告する。
- ・復習を重視すること
- ・授業では随時、筆記や発音の小テストがあるが、決して高いハードルではない。
- ・小テストに対してフィードバックを行う。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 キャリア・デザイン入門 (Introduction to Career Design)**サブタイトル** 自分の人生を考える**担当教員** 浜田、小林 (英)**対象学年** 1 年生以上**区分** 秋学期**実務経験のある教員による授業****■講義目的**

キャリア・デザインとは、まさに人生設計のことである。これまで大学に入学するまでは、ある程度既定路線を進んでくれば良かったが、この先は決まった線路も道路もない。自ら自分の進む方向を決めて、自らそこに道を作って、自分の足で歩いていくしかない。その方向性と道を作り始めないと、大学卒業後の生活 (人生) ができなくなってしまう。本講では、自分の将来設計の際に考えなければならない様々な事柄について現状認識するとともに、様々な人物の職業観を学ぶ。その上で、社会と自分がどう関わっていくのかを考え、大学卒業後に一社会人として、精神的・経済的に自立して、社会に貢献していく自分自身のキャリアをデザインすることを目的とする。

■講義分類

ビジネス環境理解/ビジネスマネジメント/社会人力育成

■到達目標

自身の置かれている社会環境の現状や自らの志を理解し、職業観を醸成して自分自身の将来ビジョンをイメージするとともに、そのビジョン実現に向けた方策ならびに課題や大学での学びが明確になっている。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2 番目に身につけられる事項

DP5 高い志 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

自分の将来を、自分の人生という側面と社会の中での位置づけから理解し、社会の発展に貢献する力と高い志を身につけることができる。

■授業形態 AL 手法 ※該当する項目のみ記載

講義/演習

[個人] ワークシート

[ペア] なし

[グループ] なし

[上記以外] ミニツッパーパー、質問受付 (個人)

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

授業前に、事前学習ポイントを調べ、指定図書や授業資料に目を通し疑問点を明確にする。指定時は事前課題実施 (1.5 時間)。授業後に、講義内容やノート整理、未解消疑問点は自己調査や教員質問等で解消 (1.5 時間)。

■授業の概要

- 第 1 講 イントロダクション
- 第 2 講 社会人基礎力を学ぶ
- 第 3 講 正規社員としての仕事とアルバイトの違いを学ぶ
- 第 4 講 将来必要なおカネについて学ぶ
- 第 5 講 おカネを稼ぐ方法を学ぶ
- 第 6 講 仕事の社会的意義について学ぶ
- 第 7 講 地球社会の現状と自身の就業観を考える
- 第 8 講 授業内中間試験
- 第 9 講 企業経営者の職業意識を学ぶ
- 第 10 講 企画職の職業意識を学ぶ
- 第 11 講 芸術専門職の職業意識を学ぶ
- 第 12 講 医療関係者の職業意識を学ぶ
- 第 13 講 技能職人の職業意識を学ぶ
- 第 14 講 職業従事において困難に直面する人の意識を学ぶ
- 第 15 講 授業内期末試験

■フィードバックの要領

毎回のコメントシートや課題レポートの講評、質問・意見への回答を翌講義回に行う

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 前半 (第二講～第八講) と後半 (第九講～第一五講) の合計が 90 点以上

評価 A (89～80 点) : 前半と後半の合計が 80 点以上 90 点未満

評価 B (79～70 点) : 前半と後半の合計が 70 点以上 80 点未満

評価 C (69～60 点) : 前半と後半の合計が 60 点以上 70 点未満

評価 F (59 点以下) : 前半と後半の合計が 60 点未満

■評価方法

前半 : 授業貢献点 (25 点)、中間試験 (25 点)。授業貢献点は出席点ではなく、授業を聴き自ら考えたかを評価する (下記留意点参照)。

後半 : 平常点・課題 (20 点)、期末試験 (30 点)。

■留意点

前半の授業貢献点は単なる出席点とは異なる。毎回提出のコメントシートを A (授業を聴き良い気づきがあった)、B (授業を聴いていた)、C (授業を聴いていたとは思われない) の 3 段階評価し授業貢献点とする。A は加点対象 (6 点)、B が標準 (4 点)、C は減点 (-4 点)、欠席は 0 点。授業の受講態度が悪い場合は欠席以下の評価となる。前半の授業貢献点は最大 25 点。

科目名 グローバルビジネス入門 (Introduction to Global Business)**サブタイトル** 世界と日本を知る**担当教員** 金,中村(そ),趙,バートル,下井,水盛,石川 **対象学年** 1年生以上**区分** 春・秋学期**実務経験のある教員による授業****■講義目的**

担当教員7名が、「世界から見た日本」と「日本から見た世界」という視点から、日本と世界、政治と経済、企業とビジネス、文化とマーケティングなどをテーマに最前線事例を踏まえて解説する。また、日本や世界を高度産業社会に再構築するための問題点と解決策を考察する。主な目的は、事業構想学科への誘導である。また、グローバルビジネス系科目や特別講座Ⅰ・Ⅱ(寺島学長監修リレー講座)の基礎学習や社会科学の基本的な考え方を学ぶこと。さらに、自らの立ち位置や、将来進むべき方向性を思索することである。主なキーワードは、世界潮流、時代認識、アジア・ユーラシアダイナミズム、日中韓、国際経済、国際経営、国際協力、日本企業のグローバル戦略、グローバルマーケティング、若者の文化と留学である。

■講義分類

ビジネス環境理解/ビジネス創造/グローバルビジネス

■到達目標

①グローバルビジネス系統科目の特性を理解するとともに、他の系統科目との関連性を把握する。②2年時の特別必修科目である「特別講座ⅠとⅡ(共通テーマ「世界潮流と日本の進路」)」の基礎知識を習得する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP3 関心と意欲 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

「世界から見た日本」と「日本から見た世界」の視点から政治・経済・企業・文化の問題点と解決策を考え、グローバルビジネスの場で活躍するとともにわが国の産業社会の発展に貢献できるようにする。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義

[個人] ワークシート

[ペア] なし

[グループ] なし

[上記以外] 教員7名によるオムニバス形式で授業を行う。

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

2講義修了毎にレポートを提出すること(2時間)。合計7レポート提出することとなる。

■授業の概要

- 第1講 ガイダンス
 第2講 「アジア・ユーラシアダイナミズムといかに向き合うか(1)」(金 美徳)
 第3講 「アジア・ユーラシアダイナミズムといかに向き合うか(2)」(金 美徳)
 第4講 「海外に羽ばたこう一若者留学事情を中心に」(趙 佑鎮)
 第5講 「東アジア共同体—日中韓関係をを中心に」(趙 佑鎮)
 第6講 「日本経済はどのように推移してきたか」(下井直毅)
 第7講 「貿易についての考え方は、どう変わってきたか」(下井直毅)
 第8講 「中国経済と日本企業のビジネス戦略(1)」(バートル)
 第9講 「中国経済と日本企業のビジネス戦略(2)」(バートル)
 第10講 「中国の公共投資と景気浮揚」(水盛涼一)
 第11講 「新規事業分野の開拓にみる日中ビジネス思想の比較」(水盛涼一)
 第12講 「ユニークなおもしろ海外CM—文化はCMにどのように反映されるか」(石川晴子)
 第13講 「効果的な英語コマーシャルの作り方—キャッチコピー、スローガン」(石川晴子)
 第14講 「海外テレビCMの特徴とその分析および日本のテレビCMとの比較」(中村そのこ)
 第15講 「海外での屋外PR企画および大規模イベントとテレビCMの関係」(中村そのこ)

■フィードバックの要領

各教員が、レポートに対してフィードバックを行う。

■評価基準

評価A+(90点以上)：平常点(60%)と7レポート(40%)の合算点が、90%以上であること。
 評価A(89～80点)：平常点(60%)と7レポート(40%)の合算点が、89～80%以上であること。
 評価B(79～70点)：平常点(60%)と7レポート(40%)の合算点が、79～70%以上であること。
 評価C(69～60点)：平常点(60%)と7レポート(40%)の合算点が、69～60%以上であること。
 評価F(59点以下)：平常点(60%)と7レポート(40%)の合算点が、59%以下であること。

■評価方法

平常点(60%)と合計7つのレポート(40%)に基づいて評価する。担当教員7名が、2講義ずつオムニバス形式で合計14講義を行い、それぞれレポート(A4用紙1枚以上)の提出を求める(合計7レポート：A4用紙7枚以上)。

■留意点

①第1回目のガイダンスに必ず出席すること。理由は7名の担当教員によるオムニバス形式の講義が第2回目より開始されるため受講要領を承知しておく必要があるため。②PC・携帯電話・音楽イヤホンは使用を禁止する。③私語・帽子着用・飲食は禁止する。④遅刻及び途中退室は厳禁とする。⑤レポートは、1教員の講義(2回連続講義)が終了し、1週間後の木曜日16時30分までに教務課に提出すること。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 グローバルヒストリー I (Global History I)

サブタイトル 地球規模で考えてみよう

担当教員 小林 昭菜

対象学年 1年生以上

区分 春学期

■講義目的

外国の歴史は現代の私たちの生活とは何の関連もないのか？このような問いを念頭に置き、人、集団、国家がいかなる「つながり」によって形作られ、展開してきたのかを学習し、今生きている世界や文化がどのような「つながり」によって形成されているのかを理解する。

■講義分類

社会人力育成／グローバルビジネス

■到達目標

現在生きている世界の政治、経済、社会の構造を体系的に理解できるようにする。新聞を読む習慣をつける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

社会で経験を積むためには、まず知識をつけそれを理解したのち、理解した内容に思考を重ね物事を判断していく必要がある。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義

[個人] なし
[ペア] なし
[グループ] マインド・マップ
[上記以外] なし

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

授業で指示するテキストを事前に読み、毎回感想を記入し授業に持参すること。

■授業の概要

- 第1講 イントロダクション。グローバルヒストリーとは何か。
- 第2講 地球に誕生した様々な文明。
- 第3講 ヒト・モノの大規模な移動の始まり。
- 第4講 海洋ネットワークの形成
- 第5講 神は一人なのかそれ以上いるのか。世界の宗教と宗教をめぐる戦争。
- 第6講 イスラーム・ネットワークの拡大
- 第7講 ○○人とは何で分けられるのか。国民国家とはなにか。
- 第8講 キエフ・ルーシの誕生
- 第9講 資本主義とは何か？
- 第10講 ヨーロッパの戦争
- 第11講 奴隷制度
- 第12講 ユーラシア東西の文化交流
- 第13講 開国の時代、こじ開けられるアジア
- 第14講 日露戦争と第一次世界大戦
- 第15講 これまでの講義のまとめ

■フィードバックの要領

授業の感想やコメントに対して毎回フィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上)：平常点（授業での積極的発言や学習態度が非常に良い。）、試験の出来 9 割以上。
- 評価 A (89～80 点)：平常点（授業での積極的発言や学習態度が良い。）、試験の出来 8 割。
- 評価 B (79～70 点)：平常点（授業での積極的発言や学習態度まあ良い。）、試験の出来 6—7 割。
- 評価 C (69～60 点)：平常点（授業での積極的発言や学習態度は良い。）、試験の出来 5 割。
- 評価 F (59 点以下)：平常点（授業での積極的発言や学習態度が悪い。）、試験の出来 4 割以下。

■評価方法

授業内で課す課題の出来：40%、授業への積極的態度や発言：25%、期末試験：35%。

■留意点

初回と2回目の講義は講義全体の説明をするため必ず出席すること。欠席の場合は履修許可を出さない場合がある。履修者が著しく多数になったは選抜することもある。

科目名 グローバルヒストリー II (Global History II)**サブタイトル** 地球規模で考えてみよう**担当教員** 小林 昭菜**対象学年** 1年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

春学期に引き続き社会に出るまでの教養をつけるため、本講義ではグローバルヒストリーを学ぶ。外国の歴史は現代の私たちの生活とは何の関連もないのか？このような問いを念頭に置き、人、集団、国家がいかなる「つながり」によって形作られ、展開してきたのかを学習し、今生きている世界や文化がどのような「つながり」によって形成されているのかを理解する。

■講義分類

社会人育成／グローバルビジネス

■到達目標

秋学期は近代史以降の歴史を学習する。現在生きている世界の政治、経済、社会の構造を体系的に理解できるようにし、新聞などから現代事情と繋がる歴史を学習する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

社会で経験を積むためには、まず知識をつけそれを理解したのち、理解した内容に思考を重ね物事を判断していく必要がある。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義

[個人] なし

[ペア] なし

[グループ] マインド・マップ

[上記以外] リアクションペーパーに対するフィードバックを毎週行う。

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

授業で指示するテキストを事前に読み、毎回感想を記入し授業に持参すること。

■授業の概要

- 第1講 イントロダクション。春学期までのおさらい。歴史を学ぶとは何か。
- 第2講 ソビエト社会主義共和国連邦の誕生と第一次世界大戦
- 第3講 不平等な格差社会は変えられる？社会主義、共産主義、計画経済とは。
- 第4講 もう一つの世界戦争。なぜ二つ目の戦争は起こったのか。
- 第5講 日本人将兵のシベリア抑留
- 第6講 戦後日本のはじまりと55年体制
- 第7講 兵器を作り「にらみ合う」戦争。核の戦争とイデオロギーの戦争。
- 第8講 戦後アジアの展開と日本
- 第9講 第三世界の台頭
- 第10講 世界をつなぎ合わせていく時。冷戦の終焉。
- 第11講 グローバル化とはなにか
- 第12講 90年代のアジア、新たな秩序の形成とその展開
- 第13講 冷戦後の超大国アメリカ
- 第14講 歴史的に考えるとはどういうことか。
- 第15講 これまでの講義のまとめ

■フィードバックの要領

授業の感想やコメントに対して毎回フィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 平常点 (毎週の課題の出来や学習態度が非常に良い。)、試験の出来 9 割以上。
- 評価 A (89 ~ 80 点) : 平常点 (毎週の課題の出来や学習態度が良い。)、試験の出来 8 割。
- 評価 B (79 ~ 70 点) : 平常点 (毎週の課題の出来や学習態度がまあ良い。)、試験の出来 6 ~ 7 割。
- 評価 C (69 ~ 60 点) : 平常点 (毎週の課題の出来や学習態度は良い。)、試験の出来 5 割。
- 評価 F (59 点以下) : 平常点 (毎週の課題の出来や学習態度が悪い。)、試験の出来 4 割以下。

■評価方法

授業内で課す課題の出来 : 40%、授業への積極的態度や発言 : 25%、期末試験 : 35%。

■留意点

初回と2回目の講義は講義全体の説明をするため必ず出席すること。欠席の場合は履修許可を出さない場合がある。履修者が著しく多数になったは選抜することもある。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 コンピュータ概論 (Introduction to Computers)**サブタイトル** コンピュータの仕組みを理解して有効に利用する**担当教員** 中村 有一**対象学年** 1年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

この講義では「コンピュータはどういう機械か」ということを学ぶ。受講者はコンピュータに関する知識を持たないという前提で講義する。講義の狙いは、コンピュータに親しみを持ってもらうこと。コンピュータに関する広告や新聞記事に、怖れず目を通せるようになることである。講義内容は、コンピュータとは何か、コンピュータの歴史、コンピュータの構成要素などである。最新の話題より基礎的な知識に重点を置く。この知識がないとコンピュータを使えないということではないが、コンピュータを勉強する上で必須となる知識が中心となる。文系・理系とわけると理系っぽい講義の一つであるが、文系の人にも知っておいてほしい内容がほとんどである。

■講義分類

ビジネス ICT

■到達目標

コンピュータに関する基礎的な用語が理解できていること。コンピュータの仕組みがだまかに把握できていること。2進数などの演算の仕方が理解できていること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

コンピュータに関して基礎的・教養的な知識を習得し、実社会に出てからも必要な考え方を身に着ける。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義

[個人] ワークシート
[ペア] ペアワーク
[グループ] なし
[上記以外] なし

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上)及び具体的な内容

予習：講義資料を読んでできるだけ理解し、わからない部分は整理しておく。(1.5時間) 復習：資料をもう一度読みなおし、理解できたか確認する。ミニテストなどの結果を振り返る。(1.5時間)

■授業の概要

- 第1講 「コンピュータとは何か」
- 第2講 「コンピュータの種類と構成要素」
- 第3講 「ビット、バイト、ヘルツ」
- 第4講 「コンピュータの歴史(誕生)」
- 第5講 「コンピュータの歴史(発展)」
- 第6講 「最新ハードウェアの話」：PC部品のスペックの読み方を概観する。
- 第7講 「コンピュータの歴史(利用者視点)」
- 第8講 「インターネットの話」：仕組みとその意味、発展の歴史
- 第9講 「コンピュータは0、1で勝負する(1)」：コンピュータの基礎は2進数
- 第10講 「コンピュータは0、1で勝負する(2)」：「真か偽」を扱う論理演算について学ぶ。
- 第11講 「数や文字とその表現」：数値や文字をコンピュータで扱う仕組みについて話す。
- 第12講 「マンマシンインタフェースと図形や音」
- 第13講 「人間の思想を伝えるために」：OSとプログラミング言語について取り上げる。
- 第14講 「データベースの話」：大量のデータを蓄え、整理する。
- 第15講 「近未来の話」：新しい原理のコンピュータを取り上げる

■フィードバックの要領

ミニテスト、演習などについて、答え合わせ、講評などのフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : 100点~90点
 評価 A (89~80点) : 89点~80点
 評価 B (79~70点) : 79点~70点
 評価 C (69~60点) : 69点~60点
 評価 F (59点以下) : 59点以下

■評価方法

学期末試験 70% レポートなど平常点 30%

■留意点

復習してわからない点などがあれば、できるだけ授業中に質問して解決すること。その他、授業と並行して、入門書レベルの本を数冊読むことを勧める。

科目名	産業社会特講 (企業とは? -総合商社の事例から-) (Special Lecture on Industry Society What's the Company? -Learn from General Trading Companies-)		
サブタイトル	企業、その役割、仕組みについて総合商社の事例を参考に理解を深める		
担当教員	青木 克彦	対象学年	1年生以上
実務経験のある教員による授業		区分	秋学期

■講義目的

これから社会に出て様々な挑戦をしていこうと考える時、実際の企業は何を考へて、どう運営されているのかを理解することは大変重要である。特に、企業の活動を理解するには、ファイナンスの視点が欠かせない。この講義では、講師本人が長年勤務したグローバルにビジネスを展開している総合商社の事例を参考にしながら、ファイナンスの視点を中心に、企業が何を考へ、何に挑戦しているのかについて、解りやすく理解していきたい。

■講義分類

ビジネスマネジメント／グローバルビジネス

■到達目標

企業活動の現場、そこで働く人たちの志を理解し、企業現場で様々な課題に挑戦する面白さを感じることを通じて、自らのキャリアイメージを形成する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP3 関心と意欲 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

社会、企業現場で起こっていることを幅広い視点から、自ら関心を持って理解し、卒業後のキャリアイメージを形成する

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義

- [個人] なし
- [ペア] なし
- [グループ] Buzz Group
- [上記以外] 企業の実例を学んだ後内容の振り返りをALにて議論する

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5時間以上) 及び具体的な内容

参考書、事例を中心に講義内容に即した予習と講義の際に示す課題につき考察する (1回につき1.5時間程度)

■授業の概要

- 第1講 本講義の概要、目的 (ガイダンス)
- 第2講 企業の活動目的について
- 第3講 企業の運営について (その1) =会社の組織を中心に=
- 第4講 企業の運営について (その2) =コーポレートガバナンス改革を中心に=
- 第5講 企業活動を支えるもの、ヒト、モノ、カネ、特に金融の視点から
- 第6講 =予定=現場 CFOの視点、何を考へ、何に挑戦しているのか
- 第7講 現場経営者の視点をどう捉えるのか
- 第8講 ファイナンスの考へ方を理解する
- 第9講 企業価値の向上とは何か
- 第10講 事業を評価する視点、投資の意思決定について
- 第11講 =予定=現場経営者の視点、何を考へ、何に挑戦しているのか
- 第12講 現場 CFOの視点をどう捉えるのか?
- 第13講 M&Aについて (その1) =何故M&Aを実行するのか? =
- 第14講 M&Aについて (その2) =何に留意して進めるのか? =
- 第15講 本講義のまとめ

■フィードバックの要領

講義時に提出するレポート等に対してフィードバックを行う

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上) : 企業の活動、仕組みについて深く理解し、課題を様々な局面から考察できる
- 評価 A (89 ~ 80点) : 企業の活動、仕組みについて深く理解している
- 評価 B (79 ~ 70点) : 企業の活動、仕組みについて一定の理解をしている
- 評価 C (69 ~ 60点) : 講義のいくつかのキーワードについて理解をしていく
- 評価 F (59点以下) : 講義内容への理解がない

■評価方法

ミニレポート 30%、最終レポート 40%、平常点 (講義への積極的な参加度合い等) 30%

■留意点

会計、法律関連の基礎知識を前提にした講義となるので、2年生の参加が望ましい。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 産業社会特講 (世界が迎える大きな曲がり角—2020年) (Special Lecture on Industry Society The Great Crossroads in The World in 2020)

サブタイトル 世界が迎える大きな曲がり角—2020年

担当教員 荻野 博司

対象学年 1年生以上

区分 春学期

■講義目的

心配されたとおり、トランプ大統領は内外に大きな混乱を招き、米国は内向き志向を強めている。しかし、トランプ支持層は底堅く、2020年の大統領選で再選される可能性も小さくない。難民問題に揺れ、英国が離脱を決めた欧州連合(EU)は、加盟各国でトランプ流の自国第一主義が幅を利かせ、その影響が危ぶまれる。経済力、軍事力を背景に世界秩序のリーダーを目指す中国には各国から警戒の目が向けられている。朝鮮半島も火種は少なくない。核開発を急ピッチで進める北朝鮮、徴用工問題などで日本との緊張が続く韓国。世界の各地で秩序や常識を覆す事態が進んでいる。それは、日本の企業社会にも深刻な影響を及ぼしている。こうした激動の根底にあるもの、これからの方向について、新聞やウェブなどのメディアも活用しながら探っていく。

■講義分類

ビジネス環境理解/社会人力育成/グローバルビジネス

■到達目標

大きく変わるグローバル社会の現状を理解し、自らの判断能力を高める。幅広い情報を取り込み、分析することに取り組み。具体的には次の通り。①欧米やアジアの変容について歴史的な視点で考える。②メディアの情報を鵜呑みにせず、批判的に吸収するメディアリテラシーを得る。③自らの体験を世界の歴史の変化と連動させてとらえ直し産業や社会の将来像を考える。④自ら資料を読み込み、世界各地で起きている事象への理解を深める。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ③ ①・②で選択された事項の詳細

大きく変動する世界の現状を理解し、その背景にある各地域の経済、政治、社会構造や歴史を深く理解する。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義

[個人] ワークシート
[ペア] なし
[グループ] なし
[上記以外] なし

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上) 及び具体的な内容

グローバル経済に関連する事項に関する記事を事前に読んでおくとともに、授業で返された資料を確認する。さらに次回のテーマに関する記事を必ず1本読む(1.5時間)。

■授業の概要

- 第1講 情報の取り込み方(テーマ:トランプ政権、英国のEU離脱)
- 第2講 日本経済の現況1=アベノミクス前夜
- 第3講 日本経済の現況2=アベノミクス登場
- 第4講 日本経済の現況3=悪魔のシナリオ
- 第5講 グローバル経済と日本1
- 第6講 グローバル経済と日本2
- 第7講 米国経済・政治の現況
- 第8講 米国各論=格差社会
- 第9講 米国各論=財政危機
- 第10講 欧州経済の現況
- 第11講 欧州各論=曲がり角の通貨統合
- 第12講 アジア経済の現況1=中国
- 第13講 アジア経済の現況2=韓国、ASEAN
- 第14講 日本の将来
- 第15講 補論

■フィードバックの要領

提出されたレポート、リアクションペーパー類はコメントを付して返却する。

■評価基準

評価A+(90点以上): 授業に積極的に関与し、試験においてもトップクラスの成績を上げた者。
評価A(89~80点): 上記に順ずる成績を取めた者。
評価B(79~70点): 授業における関与は物足りないものの、平均レベルの成績を取めた者。
評価C(69~60点): 最低限の知識は得たと認められる者。
評価F(59点以下): 授業への関与度、試験の成績などから判断し、履修したとは認められない者。

■評価方法

以下のような観点から判定する。1. 問題の概要を理解しているか。2. 自らの視点から論じられるか。3. 説得力のある説明ができるか。評価の配分は次の通り=授業姿勢50%、小テスト・レポート10%、期末試験:40%

■留意点

毎回、記入して提出する課題を出す。積極的に授業に参加する学生を歓迎する。

科目名	産業社会特講 (地域の偉人から生き方を学ぶ) (Special Lecture on Industry Society Learn Lifestyle from a Local Great People)		
サブタイトル	地域の歴史や偉人の教訓をいかに人生に生かすか		
担当教員	河合 敦	対象学年	1年生以上
		区分	春学期

■講義目的

史跡・遺物、史資料を用いて偉人や地域の歴史を学習することによって、志を養うとともに、問題解決の方法や実践的知識を獲得する。

■講義分類

社会人力育成

■到達目標

本講義で学習した偉人の生涯や地域の歴史的事象を、現代社会や自身の問題に置き換えてとらえ、教訓や問題解決のための理論として役立てることができるようにする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP5 高い志 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

多摩地域の詳しい歴史や偉人を学ぶことを通じて、この地域における先人の業績を知り、その遺産を多摩地域の活性化に活かそうとする意識、さらには日本全体に活用しようとするグローバルな視点を有するようにする。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義

- [個人] プレゼンテーション
- [ペア] ペアワーク
- [グループ] PBL
- [上記以外] フィールド・ワーク

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

2回にわたる学外学習の前に入念な下調べを行い、事後には小レポートを提出してもらいます。また、後半は各自がプレゼンテーションを行います。このため、各回平均 1.8 時間程度の準備学習が必須となります。

■授業の概要

- 第1講 「オリエンテーション」
- 第2講 「歴史学とは何か。なぜ人は歴史に学ばなくてはならないのか」
- 第3講 「幕末の志士の生き方から学ぶ問題解決のための理論」
- 第4講 「校外学習 地域にある資料館・博物館を見学する」
- 第5講 「実際の遺物・史料に触れてみよう」
- 第6講 「武蔵地域 (東京周辺) で活躍した人物」
- 第7講 「多摩から出た偉人たち—新撰組を中心に」
- 第8講 「次回の校外学習の事前学習」
- 第9講 「校外学習① 新撰組の活動拠点・日野を歩く」
- 第10講 「校外学習② 新撰組の活動拠点・日野を歩く」
- 第11講 「校外学習③ 新撰組の活動拠点・日野を歩く」
- 第12講 「プレゼンテーションの準備学習」
- 第13講 「学生によるプレゼンテーション①」
- 第14講 「学生によるプレゼンテーション②」
- 第15講 「学生によるプレゼンテーション③」

■フィードバックの要領

学生のレポートやプレゼンに対しコメントを記入したり述べる。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 平常点 30%、小レポート 25%、プレゼンテーション 20%、レポート 25% の総計が 90% 以上
 評価 A (89 ~ 80 点) : 平常点 30%、小レポート 25%、プレゼンテーション 20%、レポート 25% の総計 80 ~ 89%
 評価 B (79 ~ 70 点) : 平常点 30%、小レポート 25%、プレゼンテーション 20%、レポート 25% の総計 70 ~ 79%
 評価 C (69 ~ 60 点) : 平常点 30%、小レポート 25%、プレゼンテーション 20%、レポート 25% の総計 60 ~ 69%
 評価 F (59 点以下) : 平常点 30%、小レポート 25%、プレゼンテーション 20%、レポート 25% の総計 59% 以下

■評価方法

平常点 30%、小レポート 25%、プレゼンテーション 20%、レポート 25%

■留意点

校外学習の引率があるため、定員は 30 名を限度とする。定員を超えた場合は、講義の初回に選別テストをするので、必ず出席すること。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名	産業社会特講 (人間・メディア・社会の構造と未来) (Special Lecture on Industry Society Human, Media, Social Structure and Future)		
サブタイトル	あらゆるものがメディアによってつながる時代の生き方を探る。		
担当教員	橘川 幸夫	対象学年	1 年生以上
実務経験のある教員による授業		区分	春学期

■講義目的

現代社会において、メディアの役割は大きなものとなっています。本講座においては、私たちをとりまく、さまざまなメディア環境の歴史と構造を示し、最前線事例を紹介しながら、これからの社会のあり方と、実践的知識獲得を目標とします。

■講義分類

顧客理解／ビジネス環境理解／ビジネス創造

■到達目標

社会に出るにあたり、自分の役割や方向性を見出す、手がかりを見つけ出すこと。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2 番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

自分の頭で考え、自分の言葉で語ることの楽しさ。コミュニケーション能力の向上。

■授業形態 AL 手法 ※該当する項目のみ記載

講義

[個人] プレゼンテーション

[ペア] ペアワーク

[グループ] PBL

[上記以外] 独自に開発した「気分定性調査法」を実施する。

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

日ごろから接しているメディア (テレビ、ネット、新聞、雑誌、書籍など) について、自覚的にその役割を認識すること。予習、復習に各 1.5 時間をあてる。

■授業の概要

- 第 1 講 個人的メディア体験論
- 第 2 講 出版のメディア史
- 第 3 講 見ること・伝えること
- 第 4 講 映像のメディア史
- 第 5 講 人間と社会の変遷
- 第 6 講 音楽のメディア史
- 第 7 講 気分定性調査法の解説と実践
- 第 8 講 ゲームのメディア史
- 第 9 講 戦後日本の文化変遷史
- 第 10 講 放送のメディア史
- 第 11 講 メディアとしての教育
- 第 12 講 インターネットの意味
- 第 13 講 商品の文化史
- 第 14 講 シングularity とメディア
- 第 15 講 森を見る力

■フィードバックの要領

毎回の講義で提出された課題に対し、フィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 期末試験と課題の得点が 90 点以上
- 評価 A (89 ~ 80 点) : 期末試験と課題の得点が 80 点以上 90 点未満
- 評価 B (79 ~ 70 点) : 期末試験と課題の得点が 70 点以上 80 点未満
- 評価 C (69 ~ 60 点) : 期末試験と課題の得点が 60 点以上 70 点未満
- 評価 F (59 点以下) : 期末試験と課題の得点が 60 点未満

■評価方法

平常点 50%、課題 20%、試験 30%

■留意点

社会の中での自分の役割や、自分と社会の関係のとり方に関心のある学生の受講を希望します。

科目名	産業社会特講 (ビジョン・マネジメント論2020春) (Special Lecture on Industry Society Vision Management Theory 2020 Spring)		
サブタイトル	一職業の学びを「稼ぐ力」へ変える!【荻阪式「7つの成長技法」】		
担当教員	荻阪 哲雄	対象学年	1年生以上
実務経験のある教員による授業		区分	春学期

■講義目的

本特講は1年生～4年生の全学年が対象です。講義の目的は、職業の学びを「稼ぐ力」へ変える【ビジョン・マネジメント論】を学び、そのスキルを身につけることです。具体的には、あなたの【ビジョン】をテーマに、「社会」と「職業」と「人生」を、真剣に考える授業になります。教室は、履修生が「主人公」となり、自分の「志」から「職業のビジョン」を描く【研究の場】です。この15回の講義で学ぶ「荻阪式7つの成長技法」は、「飛躍の7力(ななりき)」と呼ばれています。社会に出る前に、知っておきたい!この手法は、1万2000名以上のリーダーを支援してきた組織開発コンサルタントの荻阪哲雄が、プロフェッショナル・フィードの最前線で掴み、体系化した「オリジナルの思考法」です。将来の人生で必要となる「プロのノウハウ」を全公開します!あなたが成長するための力を身につけ、最終回までに、自分の【職業ビジョン・ストーリー】を、一緒にアウトプットすることをめざしませんか?

■講義分類

ビジネス創造/社会人力育成

■到達目標

①講義を聴き、自分で考え、内省を行って【所感レポート】を書き、毎週、提出することができる ②講義で学んだ7つの技法を、相手と対話しながら【現実の行動】へ移すことができる ③講義の学びを、自らの職業ビジョンへ変えて、相手に【自分の言葉】で伝えることができる

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①②で選択された事項の詳細

①社会と自分の関わりを考えて、職業ビジョンを描き、自らが内省する力を磨く。②自分の言葉で、ビジョンを、発信できる技能を修得。③自分の表現と技能を身につけることで、社会・組織に貢献できる人材を育成。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義

- [個人] プレゼンテーション
- [ペア] ペアワーク
- [グループ] なし
- [上記以外] インプット学習法/転換思考法/アウトプット表現法

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

毎週の授業終了日から、講義の復習に1.5時間以上をかけて「所感レポート」を書き、日曜日の朝10時までに、指定の指示方法にて提出。所感レポートは(Word、A4の1枚、400字以上)で書くこと。

■授業の概要

- 第1講 職業の働き方をつくる「ビジョン・マネジメント論」の全体像を紹介する
- 第2講 職業の働き方を見つめる 第1の成長技法「熱望力」とは、何か?
- 第3講 なぜ、惹く「熱望力」が、必要なのか?
- 第4講 職業の働き方を起こす 第2の成長技法「実験力」は、何か?
- 第5講 なぜ、試す「実験力」が、必要なのか?
- 第6講 職業の働き方を高める 第3の成長技法「修業力」とは、何か?
- 第7講 なぜ、磨く「修業力」が、必要なのか?
- 第8講 職業の働き方を変える 第4の成長技法「結果力」とは、何か?
- 第9講 なぜ、生み出す「結果力」が、必要なのか?
- 第10講 職業の働き方を深める 第5の成長技法「体験力」とは、何か?
- 第11講 なぜ、身につける「体験力」が、必要なのか?
- 第12講 職業の働き方を強める 第6の成長技法「盟友力」とは、何か?
- 第13講 なぜ、支え合う「盟友力」が、必要なのか?
- 第14講 職業の働き方を省みる 第7の成長技法「好転力」とは、何で、なぜ必要なのか?
- 第15講 最終回【ビジョン・プレゼンテーション】/私の「職業ビジョン」とは、何か?

■フィードバックの要領

講義の所感レポートに対し、講師から各履修生へ助言メールでフィードバックを贈る。

■評価基準

- 評価 A+ (90 以上) : 受講姿勢、対話内容、所感レポート、最終提出物が、到達目標へ達し優れている場合。
- 評価 A (89 ~ 80 点) : 受講姿勢、対話内容、所感レポート、最終提出物が、到達目標へ達している場合。
- 評価 B (79 ~ 70 点) : 受講姿勢、対話内容、所感レポート、提出物のいずれかが到達目標へもう一歩の場合。
- 評価 C (69 ~ 60 点) : 受講姿勢、対話内容、所感レポート、提出物がもうひと踏ん張りですぐに期待する場合。
- 評価 F (59 点以下) : 低い出席率で、所感レポートが出せず、最終アウトプットを提出できない。

■評価方法

講義の平常点 (20%) 所感の提出 (20%) 対話と関係づくりの量 (20%) 課題の成果物 (40%)

■留意点

本講義は【全学年が対象】です!昨年、履修した人も継続の受講が可能です。講義を履修した多摩大生の感想には【何をしたいかが決まっていないうちに、自分がどんなことをすべきかがわかる講義】【本当に自分の成長に、繋がる講義】【実際に使える方法が、学べる講義】【高校の授業では学べなかった社会に出た後の生き方を、知ることができる講義】【新しい智恵が身につく、人生が180度、変わる講義】との評価の声があります。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 初級簿記 (Introductory Level Bookkeeping)

サブタイトル 会計学入門

担当教員 木村 太一

対象学年 1年生以上

区分 秋学期

■講義目的

私たちは普段、お金を払って物を買ったり、仕事やアルバイトをしてお金を受け取ったりする。あるいは銀行にお金を預けたり、引き出したりといったこともするだろう。このように、私たちの生活にはお金のやり取りが欠かせない。そうしたお金のやり取りを記録する方法、それが複式簿記である。そんなものを使わなくても、今やお小遣い帳はアプリでつける時代。それにもかかわらず、会社はみんな複式簿記を使ってお金のやり取りを記録している。はるか昔から、時代を超えて今なお使われているこの複式簿記という記録の方法を知る。これが本講義の目的の1つである。また、複式簿記を勉強していくと、「結構面倒くさい」ことに気づくと思う。そんなことを、なぜしているのか？経営者が会計を行う動機、そしてそんな会計によって生み出された情報を欲しがる動機について学び、現代の会計に繋がる会計の歴史にも触れながら、現代会計の「存在の理屈」を考える。これが本講義の今一つの目的である。

■講義分類

ビジネス環境理解／ビジネスマネジメント／社会人力育成

■到達目標

①複式簿記という記録方法と、財務諸表作成のプロセスを一通り理解する。②現代において会計がどのような考え方の下に行われ、どのような役割を果たしているのかを一通り理解する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

複式簿記というビジネスに不可欠な技術を習得し、これを通じて取引を2つの面から捉えるという複式簿記ならではの世界の見方に触れる。また、現代会計の「存在の理屈」について思量する。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義

[個人] ワークシート, T/Fテスト
[ペア] なし
[グループ] なし
[上記以外] なし

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

予習よりも復習に重きを置いて、その回に用いられたテキストやレジュメの数値例で何度も計算をすること。また、新聞やニュースに注意を向けてみて欲しい。きっと学んだ用語や比率を見つけることができるはずである。(各1.5時間)

■授業の概要

- 第1講 会計とは何か
- 第2講 企業情報の入手方法
- 第3講 財務諸表
- 第4講 複式簿記①(簿記一巡/資金調達/現金による商品売買)
- 第5講 複式簿記②(掛による商品売買/返品)
- 第6講 複式簿記③(小切手/手形)
- 第7講 複式簿記④(諸掛り/有形固定資産の取得)
- 第8講 複式簿記⑤(利息のやり取りを含む金銭貸借)
- 第9講 複式簿記⑥(決算整理と売れ残り)
- 第10講 複式簿記⑦(減価償却)
- 第11講 複式簿記⑧(簿記のまとめ)
- 第12講 会計理論①(会計の機能)
- 第13講 会計理論②(減価償却思考成立の背景)
- 第14講 会計理論③(発生・実現・対応)
- 第15講 まとめ

■フィードバックの要領

課題や練習問題を通じて理解度を測り、講義を進める。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : 課題および期末試験の総得点が90点以上。
 評価 A (89～80点) : 課題および期末試験の総得点が80点以上90点未満。
 評価 B (79～70点) : 課題および期末試験の総得点が70点以上80点未満。
 評価 C (69～60点) : 課題および期末試験の総得点が60点以上70点未満。
 評価 F (59点以下) : 課題および期末試験の総得点が60点未満。

■評価方法

課題10%、期末試験90%

■留意点

電卓を使用するので各自購入のこと。

科目名 ▶▶▶ **スタディースキル入門 (Introduction to Study Skills)****サブタイトル** ▶▶▶ **IT 活用と多摩大学での「学びの方法」****担当教員** ▶▶▶ 彩藤、中澤、良峯、大森、増田、中村(有)、崎濱、小西 **対象学年** ▶▶▶ 1 年生以上 **区分** ▶▶▶ 春学期**実務経験のある教員による授業****■講義目的**

本講義では、アクティブラーニングを用いて、大学での「学びの方法」を学ぶと同時に、大学生および社会人として求められる自ら学問を修めるようとする姿勢である自修力の養成を図る。具体的には、講義を整理する力であるノートテイキング能力、文章を読み解くためのリーディング能力、正確文章を書くためのライティング能力、円滑にディスカッションを行うためのコミュニケーション能力、そして自身の意見を他者に正確に伝えるためのプレゼンテーション能力の5点をスタディスキルと位置付ける。また、それらの能力を発揮するための多摩大学経営情報学部としての必須項目として、インターネットの理解、PC操作、クラウド利用等はここで身につける。今後の学修に繋げるための自修力を高めることを目的とする。

■講義分類

社会人力育成 / ビジネス ICT

■到達目標

1. 「ノートテイキング能力」。2. 「リーディング能力」。3. 「ライティング能力」。4. 「コミュニケーション能力」。5. 「プレゼンテーション能力」。これらの1～5をPCを駆使して実施できるようにする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

この授業では大学生としての思考のフレームワークを身につけると同時に、社会人として通用する思考力・判断力の基礎を養成していく。また、多摩大学生生活で活用しうるPC操作を覚える。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義 / 演習

[個人] プレゼンテーション / ワークシート

[ペア] ペアワーク

[グループ] PBL

[上記以外] なし

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

各回の講義に際して、オンライン配布される資料の該当箇所を読むこと (30分程度)。復習として資料の振り返り (15分程度)、各回の課題 (30分程度) および他の履修生に対するフィードバックを行う (25分)。

■授業の概要

- 第1講 イントロダクション / 大学アカウント確認
- 第2講 T-Next・Gメール・Gクラスルーム
- 第3講 pdf書き込み / プリンタ出力 / PCスベック / 緊急対応
- 第4講 フォルダ / ファイル管理 / 仮想デスクトップ利用
- 第5講 ドキュメント操作 (Word互換) / 図書館利用
- 第6講 レポート作成 / アウトラインの理解
- 第7講 図表・グラフの挿入
- 第8講 図形作成 (Inkscape など) / 図描画 (ペイント系ソフト)
- 第9講 スプレッドシート (Excel) / 表データ / グラフの作成
- 第10講 ヒボット分析 / 結果をみて考察する
- 第11講 進捗調整 / 基礎力テスト
- 第12講 ファイル共有と共同作業 / Googleスライド (PowerPoint互換)
- 第13講 効果的かつ魅力的な発表 / 質疑応答所作
- 第14講 スタディスキル効果測定 / 自己評価シートの作成
- 第15講 補習

■フィードバックの要領

オンラインシステムを導入し、学生同士および教員によるフィードバックを実施する。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 平常点、小課題、進捗テストのいずれもが顕著に優れており、合計が 90 点以上である。

評価 A (89 ~ 80 点) : 平常点、小課題、進捗テストが優れており、合計が 80 点以上である。

評価 B (79 ~ 70 点) : 平常点、小課題、進捗テストが十分に良く、合計が 70 点以上である。

評価 C (69 ~ 60 点) : 平常点、小課題、進捗テストの合計が 60 点以上である。

評価 F (59 点以下) : 平常点、小課題、進捗テストの合計が 60 点未満か、他の履修者の勉学を妨げている。

■評価方法

平常点 : 30% : 毎回の講義における履修状況を評価します。小課題 : 40% : 講義の内外で小課題を課します。進捗テスト : 30% スタディスキルの効果を評価します。

■留意点

1. 「履修状況に応じて、内容を変更することがある」。2. 「この授業ではパソコンを用いて授業を展開し、授業資料は web での配信を予定している。したがって、授業の際には端末を十分に充電して持参すること。なお、端末を忘れた場合には欠席扱いにするので気をつけること」。3. 「Google Classroom を用いて連絡を行うために随時確認すること」。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 スポーツ・マネジメント論 (Sports Management Theory)**サブタイトル** スポーツが現代社会にもたらす価値とは。**担当教員** 佐藤 文平**対象学年** 1年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

本講義では、スポーツが持つ価値を理解しながら、スポーツ産業社会に起きる課題を解決できる思考を養い、スポーツビジネスをマネジメントできる人材を育てる。

■講義分類

顧客理解/ビジネス創造/社会人育成

■到達目標

学生主体の調査をもとにグループで、スポーツ（人、モノ、環境）をマネジメントできる能力を身につける。多摩地域のスポーツを創造し、実践する。ケーススタディやグループディスカッションを通じて得るコミュニケーションスキルをもって、多摩大学独自のスポーツ・マネジメントを構築する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

スポーツ・マネジメントの価値、実践的理解を深め、今後のスポーツ産業課題に立ち向かえる人材育成。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載**講義**

〔個人〕 プレゼンテーション
 〔ペア〕 ペアワーク/相互教授法
 〔グループ〕 PBL/ Ball-toss
 〔上記以外〕 なし

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

各回の予習課題には最低限 1.5 時間程度の学習が必要となる。さらに毎回の講義内容で学んだ事柄については積極的に知見を広げ、問題意識を深めるための復習として、1.5～2 時間程度の復習が必要となる。

■授業の概要

- 第1講 本講義の概要、目的、意味を理解する（ガイダンス）。
- 第2講 スポーツ産業社会の傾向、仕組み、問題について。
- 第3講 スポーツ・マネジメントとはなにか。
- 第4講 オリンピックの歴史とオリンピズム。
- 第5講 スポーツビジネスマネー、勝利至上主義、ドーピングの弊害。
- 第6講 スポーツビジネスが描くビジョン。
- 第7講 Over The Top【新しいスポーツの観戦スタイル】。
- 第8講 チーム・マネジメント【リーダーシップ】。
- 第9講 アスリートのキャリア～デュアル思考～
- 第10講 eスポーツはスポーツか。
- 第11講 スタジアム・アリーナをの在り方。
- 第12講 実践的課題演習①
- 第13講 実践的課題演習②
- 第14講 実践課題演習③
- 第15講 講義のまとめ

■フィードバックの要領

講義内で提出されたレポートに対する回答等でフィードバックします。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 講義内容を理解し、講義参加意欲も十分。優れた提案・意見をレポートに反映できる。
 評価 A (89～80 点) : 授業への参加意欲も十分にあり内容を理解し、自分の意見を持てるようになった。
 評価 B (79～70 点) : 講義内容について理解している。
 評価 C (69～60 点) : 講義内容は理解しているが、積極性に欠ける。
 評価 F (59 点以下) : 講義への積極的な参加もなく、理解も乏しい。

■評価方法

平常点 70%、レポート課題 30%、絶対評価：多摩大学の評価基準に基づいて評価します。

■留意点

本講義は、授業への参加と小レポートの内容および提出率を重視しております。

科目名 スポーツ I (シェイプアップフィットネス) (Sports I-Fitness)**サブタイトル** シェイプアップフィットネス**担当教員** 梅澤 佳子**対象学年** 1 年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

スポーツの諸側面を学ぶことによって、(1) 自分の体を知り、自ら「育てる」「つくる」「維持する」ことができる知識や能力を身につけること。(2) 生涯にわたってスポーツ文化を楽しむ能力(「する」だけでなく、「みる」「よむ」などの楽しみかたもあります)を身につけること。(3) スポーツ文化を通じて、仕事生活、家庭生活、その他余暇生活など、人生全体を豊かにしていくための資質を、授業内外のさまざまな体験を通じて獲得していくこと。(4) スポーツの価値についての知見を深めることを目的としています。

■講義分類

社会人力育成

■到達目標

「講義目的」に記載されている目的に即した、個々人の発展が見られることが目標であり、学生一人ひとりの状況に応じた課題を達成することが個人の到達目標となる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2 番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

現状を分析して課題を明らかにできる課題発見力、課題解決に向けたプロセスを明らかにして準備できる計画力を身につける。

■授業形態 AL 手法 ※該当する項目のみ記載

講義

- [個人] なし
- [ペア] ヘアワーク
- [グループ] PBL
- [上記以外] 多摩地域の健康づくり講座を視察する。

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

健康、身体運動、スポーツの意義について広く理解すべく、参考文献、報道、その他の情報を十分に蒐集し理解しておくこと。(各 1.5 時間)

■授業の概要

- 第1講 本講義の目的、到達目標、受講にあたっての注意点等について説明する。
- 第2講 身体測定・体力測定
- 第3講 ストレッチと身体ほぐし①
- 第4講 ストレッチ・健康トレーニング①
- 第5講 健康トレーニング②
- 第6講 ストレッチとトレーニング③
- 第7講 ストレッチとトレーニング④
- 第8講 ストレッチとトレーニング⑤
- 第9講 有酸素運動の理論と実践
- 第10講 有酸素運動とトレーニング
- 第11講 有酸素運動を体験する
- 第12講 身体測定②
- 第13講 3日間の食生活調査表に関する説明
- 第14講 3日間の食生活調査表の作成②
- 第15講 振り返りとディスカッション

■フィードバックの要領

トレーニング日誌の確認とコメント記載によるコミュニケーション等

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 本講義の到達目標に十分達している。
- 評価 A (89 ~ 80 点) : 技能の開発が十分行われ、将来生かされる準備ができています。
- 評価 B (79 ~ 70 点) : 技能や知識、態度の形成が行われたと認められる。
- 評価 C (69 ~ 60 点) : 一定の経験とこれに対する自己理解、態度形成が行われたと認められる。
- 評価 F (59 点以下) : 講義目的に沿った活動ができなかったとみられる。

■評価方法

- ・平常点 (参加への意欲、姿勢等) : 60% (各回の講義内容と目標を理解し身体運動を行ったかを3段階で評価します。)
- ・課題の提出 : 40% (指定された内容について課題を作成し提出してもらいます。)

■留意点

①講義と実技の組み合わせになります。②受講希望者が多数の場合、学期の第1講出席者を優先し抽選となります。③欠席が3分の1を超えた場合、原則として単位を付与しません。また就職活動による欠席は考慮しませんので注意してください。今年度の講義内容については、オリンピック・パラリンピック2020関係行事により講義内容を変更する場合があります。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 スポーツ I (テニス) (Sports I-Tennis)**サブタイトル** テニスを通じて学ぶ生涯スポーツの価値。**担当教員** 佐藤 文平**対象学年** 1年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

本演習では、ラケットとボールを操作するために必要な眼と手のコーディネーショントレーニングを行いながら、テニスの基本を学んでいく。また、ゲームを通じて、マナーや他人とのコミュニケーションスキルも習得する。技術の定量化にはボール挙動測定器 TRACKMAN を用い、ボール速度やボール回転速度の理解を深める。

■講義分類

顧客理解/社会人力育成

■到達目標

テニスは、生涯スポーツとして社会人となってからも個人の体力に応じて楽しめるスポーツである。本演習の目的は、テニスの打球スキルとルールを学び、ゲーム（シングルス、ダブルス）を自らコーディネートし、楽しめるようになる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

生涯スポーツであるテニスの最低限必要な技術を習得するとともに、安全に配慮した他人とのコミュニケーション能力を養う。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載**演習**

[個人] プレゼンテーション
 [ペア] ペアワーク/相互教授法
 [グループ] PBL/ Ball-toss
 [上記以外] なし

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

テニスの基本的な歴史やルールを理解して授業に臨むことを基本とする。(1.5 時間)

■授業の概要

- 第1講 テニスで起きる傷害について予習し、予防するために必要な準備運動を学ぶ。
- 第2講 ストロークの習得①。
- 第3講 ストロークの習得②。
- 第4講 ネットプレーの習得。
- 第5講 サーブの習得。
- 第6講 ボール挙動測定器 TRACKMAN を用いてのサーブ速度測定実習①。
- 第7講 講義①。
- 第8講 ダブルス①。
- 第9講 ダブルス②。
- 第10講 ダブルス③。
- 第11講 講義②。
- 第12講 テニスにおけるメンタルトレーニング。
- 第13講 スキルテスト①。
- 第14講 ボール挙動測定器 TRACKMAN を用いてのサーブ速度測定実習②。
- 第15講 まとめ。

■フィードバックの要領

スキルテストやレポート課題に対してコメントフィードバックを行なう。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 練習等のコーディネート能力が高く授業参加意欲、技術習得レベルともに高い。
 評価 A (89 ~ 80 点) : 平常点および授業参加意欲があり、テニスの基本技術が備わっている。
 評価 B (79 ~ 70 点) : テニスの技術習得レベルは平均だが、平常点および授業参加意欲が不十分。
 評価 C (69 ~ 60 点) : 平常点、授業参加意欲、テニスの技術習得レベルが低い。
 評価 F (59 点以下) : 平常点、授業参加意欲、テニスの技術を習得する意欲がない。

■評価方法

技術テスト 80%、レポート 20%。

■留意点

個人でラケットを所有している学生は、各々のラケット、テニスシューズで授業に参加することが好ましい。安全面配慮のため、運動着・運動靴の着用は必須。

科目名 スポーツ I (バドミントン) (Sports I-Badminton)**サブタイトル** はじめてのバドミントン**担当教員** 船越 大介**対象学年** 1年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

体を動かすことや競技スポーツの楽しさ、また「できた」ときの喜びや達成感を味わい、さらにはスポーツが素晴らしいコミュニケーションツールの1つであることを認識することで、各個人が自らのスポーツの価値を考え、生涯スポーツ実現のためのモチベーションを獲得すること。

■講義分類

ビジネスマネジメント/社会人力育成

■到達目標

生涯を通してバドミントンを楽しむための基礎的な知識・技能を身に付けること。競技スポーツとしてのバドミントンを通して課題解決、目標達成の経験をする。バドミンントンの試合や練習において他者との交流を積極的に行い、コミュニケーション能力を育成すること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

本授業ではバドミンントンの技術習得やパフォーマンス改善のために自ら考えること、加えて練習や試合において他者と協力して取り組むことが必要とされる。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義/演習

[個人] なし

[ペア] ペアワーク/相互教授法

[グループ] なし

[上記以外] なし

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上)及び具体的な内容

スポーツに関する文献や報道などを意識的に確認し、現代社会でのスポーツの在り方や役割について考えること。また、授業で習得を試みた技術やストレッチなどについて、再度自宅で確認、実施すること。(各 1.5時間)

■授業の概要

- 第1講 スポーツが担う役割、バドミンントンの基礎知識
- 第2講 バドミントンを行うための準備について
- 第3講 アンダーハンドストロークの練習
- 第4講 スマッシュの練習①
- 第5講 スマッシュの練習②
- 第6講 様々なストロークの練習①
- 第7講 様々なストロークの練習②
- 第8講 様々なストロークの練習③
- 第9講 ダブルス練習(ルールの理解と試合運営)
- 第10講 ダブルス練習(ダブルスの試合に慣れる)
- 第11講 ダブルス実践
- 第12講 ダブルス団体戦①
- 第13講 ダブルス団体戦②
- 第14講 ダブルス団体戦③
- 第15講 自己分析とまとめ

■フィードバックの要領

必要に応じて講義内、講義前後に担当教員から直接アドバイスをを行う。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : スキル開発と同時にその社会的意義の理解がなされていること。

評価 A (89～80点) : 技能の開発が十分行われ、将来生かされる準備ができていること。

評価 B (79～70点) : 技能や知識、態度の形成が行われたと認められること。

評価 C (69～60点) : 一定の経験とこれに対する自己理解、態度形成が行われたと認められること。

評価 F (59点以下) : 「スポーツ」の講義目的に沿った活動ができなかったとみられる場合、F評価とします。

■評価方法

平常点(授業への積極的な参加等)(60%)、最終レポート(40%)

■留意点

①本授業ではバドミントン未経験者や初心者に向けた内容を実施するが、経験者も歓迎する。②受講希望者が多い場合は、学期の第1講の出席者を優先し抽選を行う。③欠席が3分の1を超えた場合、原則として単位を付与しない。

科目名 スポーツ I (フットサル) (Sports I-Futsal)**サブタイトル** フットサルと出会い、その奥深さをしるための入門スクール**担当教員** 福角 有紘**対象学年** 1 年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

①人生を豊かにするためのスポーツ教養の一つとして、フットサルの知識と技能を身に着けること。②フットサルを実践することを通じて、社会人として求められる基礎能力であるコミュニケーションや判断力、実行力、協同する力などを育成すること。③フットサルを通じて、競技者へのシンパシーを獲得し、観戦する（応援する）価値について知ること。

■講義分類

顧客理解／ビジネスマネジメント／社会人力育成

■到達目標

競技のルールやマナーの概要を知り、その面白さ、楽しさについて十分理解し他人にもそれを伝えることができる。フットサルゲームに参加し協同者と協力して楽しむことができる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

フットサル競技の特性は、そのスピード感であり、判断力、決断力、実行力がきわめて大切であり、社会人力育成につながる。

■授業形態 AL 手法 ※該当する項目のみ記載

演習

【個人】 なし
【ペア】 ペアワーク
【グループ】 なし
【上記以外】 なし

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

スキル開発だけでなく、スポーツの意義や社会的な存在価値について理解するべく、スポーツに関する文献、報道、その他の情報を十分に収集し、理解しておくこと。(1.5 時間)

■授業の概要

- 第1講 クラスメンバーの決定
- 第2講 フットサルに出会う！
- 第3講 フットサル競技に必要な基礎的技術の習得①
- 第4講 フットサル競技に必要な基礎的技術の習得②
- 第5講 フットサル競技に必要な基礎的技術の習得③
- 第6講 フットサルの応用技術・戦術を学ぶ①
- 第7講 フットサルの応用技術・戦術を学ぶ②
- 第8講 フットサルの応用技術・戦術を学ぶ③
- 第9講 フットサルの応用技術・戦術を学ぶ④
- 第10講 フットサル競技の実践①
- 第11講 フットサル競技の実践②
- 第12講 フットサル競技の実践③
- 第13講 フットサル競技の実践④
- 第14講 フットサル競技の実践⑤
- 第15講 全体の振り返り

■フィードバックの要領

担当教員から学びの状況と今後の方向性について直接アドバイスします。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : スキル開発と同時にその社会的意義の理解がなされていること。
 評価 A (89 ~ 80 点) : 技能の開発が十分行われ、将来行かされる準備ができていないこと。
 評価 B (79 ~ 70 点) : 技能や知識、態度の形成が行われたと認められること。
 評価 C (69 ~ 60 点) : 一定の経験とこれに対する自己理解、態度形成が行われたと認められること。
 評価 F (59 点以下) : 「スポーツ」の講義目的に沿った活動ができなかったとみられる場合、F 評価とします。

■評価方法

平常点 100%

■留意点

高い競技レベルを前提としてはいない。むしろ、初心者や、スポーツ未経験者にスポーツ体験をしてもらうことを重視している。経験者には、これまでの経験を踏まえて、初心者受講生へのコーチングなどを通じてよりスポーツへの理解を深めてもらうことを期待する。

科目名 多摩学 I (Tama Study I)**サブタイトル** 多摩・神奈川の地理・交通・歴史・産業・文化を理解する**担当教員** 野坂、長島、加藤、崎濱、増田、高橋**対象学年** I 年生以上**区分** 春学期**実務経験のある教員による授業****■講義目的**

本講義の目的は、私たちの大学が立地している多摩地域にも、地域なりの「力」がある。その「力」と可能性について考えることが、この地域の活性化と発展につながる。「多摩学 I」は多摩圏（多摩・神奈川）の来歴を探り、多摩の現代について考え、未来を構想する学問である。その地歴を探り、この地域の持つ意味と可能性を多角的・学際的に探求していく。本講義では、多摩圏（多摩・神奈川）の地理・交通・歴史・産業・文化に関する基本的な知識を習得することが目的である。

■講義分類

ビジネス環境理解／社会人力育成／地域ビジネス

■到達目標

多摩・神奈川の地理・交通・歴史・産業・文化についての基本的な知識を習得する。知識を身につけたうえで、多摩における強みや課題を発見し、自分なりの課題解決方法を見つけることができるようになる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2 番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

DP1：多摩・神奈川の地理・交通・歴史・産業・文化に関する基本的な知識を学び、それらの特徴を理解する。DP2：基本的な知識を身につけたうえで、多摩・神奈川の特徴や強みおよび課題を自分なりに見つけ出す。

■授業形態 AL 手法 ※該当する項目のみ記載

講義／演習

[個人] プレゼンテーション／ワークシート／問題作成

[ペア] ペアワーク

[グループ] PBL／Buzz Group／KJ 法

[上記以外] 反転授業の実施（事前学習として動画を視聴する）

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

予習：自宅学習として動画（講義等 20 分）を視聴し、その内容について毎回テストを実施することで理解を深めます（反転授業）。（1.5 時間）

■授業の概要

第1講 オリエンテーション：本講義の目的および学習内容についての説明

第2講 【自校教育①】 多摩大学についての関心を高め、理解を深める

第3講 【自校教育②】 多摩大学についての関心を高め、理解を深める

第4講 反転授業の方法および多摩の概要について

第5講 多摩の地理・地形・交通

第6講 ブログ返却及び解説

第7講 多摩の歴史 (1) 江戸

第8講 多摩の歴史 (2) 明治・大正

第9講 多摩の歴史 (3) 昭和

第10講 多摩の産業 (1)

第11講 多摩の産業 (2)

第12講 多摩の文化 (1)

第13講 多摩の文化 (2)

第14講 テスト

第15講 これまでのまとめ

■フィードバックの要領

提出課題における質問等については、フィードバックを次回の授業にて行う。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上)：多摩圏について十分に理解し、自分の考えや意見の記述内容が非常に優れている。

評価 A (89～80 点)：多摩圏について十分に理解し、自分の考えや意見の記述内容が優れている。

評価 B (79～70 点)：多摩圏について理解し、自分の考えや意見が記述されている。

評価 C (69～60 点)：多摩圏についてあまり理解しておらず、自分の考えや意見の記述内容がやや不十分。

評価 F (59 点以下)：多摩圏についてほとんど理解しておらず、自分の考えや意見の記述が不十分。

■評価方法平常点 60%、テスト 40%、さらに発言ポイント + α として加味する。**■留意点**

必修科目のため、必ず出席をすること

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 多摩学Ⅱ (Tama StudyⅡ)**サブタイトル** 多摩地域の産業・企業について学ぶ**担当教員** 野坂、長島、加藤、崎濱、増田、高橋**対象学年** 1年生以上**区分** 秋学期**実務経験のある教員による授業****■講義目的**

私たちの大学が立地している多摩地域には、多種多様な企業が存在する。それら企業の方を外部講師として招き、企業の沿革、事業内容および現在取り組んでいる活動等に関する話を聞くことで、多摩地域の企業・産業への理解を深めることを目的とする。また、ゲストスピーカーとしてお話いただく企業には具体的な課題を出していただき、その課題解決に向けた提案をグループワークにより取り組む。グループワークによる提案された内容について、プレゼンテーションを行う。このような課題解決実習により、「課題解決力」を身につけることも本講義の目的の一つである。

■講義分類

顧客理解／ビジネス環境理解／地域ビジネス

■到達目標

多摩地域の産業における現状と課題を把握・分析することができ、課題解決に向けたアイデアの提案など、自分なりの解決策を論理的に導くことができる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

DP1：多摩学Ⅰで学んだ多摩地域の産業への理解を前提とし、多摩地域の産業・企業の特徴や優位性を把握する。
DP2：多摩地域の課題解決に向けて自分なりに提案を行うことができる。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義／演習

[個人] プレゼンテーション／ワークシート

[ペア] ペアワーク／ピア・レビュー

[グループ] PBL／Buzz Group

[上記以外] なし

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

課題を行うこと。(1.5 時間)

■授業の概要

- 第1講 オリエンテーション
- 第2講 多摩地域の企業について学ぶ (1) ゲストスピーカーによる講義
- 第3講 企業から提示された課題の解決策を考え、提案する：グループワーク
- 第4講 企業の課題解決に向けた提案：プレゼンテーション (各教室)
- 第5講 プレゼンテーション全体会 (001 教室) + 企業からのフィードバック
- 第6講 多摩地域の企業について学ぶ (2) ゲストスピーカーによる講義 (001 教室)
- 第7講 企業から提示された課題の解決策を考え、提案する：グループワーク (各教室)
- 第8講 企業の課題解決に向けた提案：プレゼンテーション (各教室)
- 第9講 プレゼンテーション全体会 + 企業からのフィードバック (001 教室)
- 第10講 多摩地域の企業について学ぶ (3) ゲストスピーカーによる講義
- 第11講 企業から提示された課題の解決策を考え、提案する：グループワーク
- 第12講 企業の課題解決に向けた提案：プレゼンテーション (各教室)
- 第13講 プレゼンテーション全体会 + 企業からのフィードバック (001 教室)
- 第14講 多摩大グッズ提案についてのグループワーク (各教室)
- 第15講 多摩大グッズの提案：プレゼンテーション (各教室)

■フィードバックの要領

授業内での質問および課題等についてコメントを行う

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上)：講義メモの十分。記述および自分の意見や考えがしっかりと明確に書かれている。
- 評価 A (89 ～ 80 点)：講義メモの記述が十分。自分の意見や考えが明確に書かれている。
- 評価 B (79 ～ 70 点)：講義メモの記述ができていて、自分の意見や考えが書かれている。
- 評価 C (69 ～ 60 点)：講義メモの記述がやや不十分。自分の意見や考えが明確に記述されていない。
- 評価 F (59 点以下)：講義メモの記述が不十分。自分の意見や考えが示されていない。

■評価方法

平常点 60%、課題および成果物 40%、+発言は加点します。

■留意点

ゲストスピーカーの都合により、シラバスに記載されている予定の講義の回が変更となることがあります。

科目名 地域ビジネス入門 (Introduction to Region Business)**サブタイトル** ～地域課題解決の基本を考える～**担当教員** 松本、梅澤、中庭、中澤、野坂、長島**対象学年** 1年生以上**区分** 春・秋学期**実務経験のある教員による授業****■講義目的**

多摩大学における地域ビジネス論では日本・世界各地に、地域・歴史特有の事業があると考え、事業(=ビジネス)を課題解決手法としてとらえる。事業内、事業間の多様な差異を比較し、課題解決手法としての事業を考えるため、対象は多様な地域とし、国内と海外の区別をしない。地域・歴史毎に特徴のある事業をとらえるために、本講義では政治・経済・社会・文化の側面から、現場・事例の課題を観察し、分析し、事業としての解決策を立案・評価し解決の実現に導くための考え方、方法論、事例について学ぶ。

■講義分類

ビジネス環境理解/ビジネス創造/地域ビジネス

■到達目標

地域ビジネスに関する基礎知識、基礎的な考え方を習得すること

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

地域ビジネスに関する基本的な学力を養い、その視点から国内外の地域・歴史特有の課題を理解し、解決方法を生み出す能力の基礎を習得する。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義

- [個人] ワークシート
- [ペア] 相互教授法
- [グループ] なし
- [上記以外] なし

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上)及び具体的な内容

オリエンテーションをもとに各授業の事前学習で30分、授業のレジュメ・ノートを使用した講義のポイント整理で1時間。

■授業の概要

- 第1講 オリエンテーション「地域ビジネスとは何か？」(担当:全員)
- 第2講 個人と社会(担当:中庭)
- 第3講 会社の基本(担当:長島)
- 第4講 政府、制度とは(担当:中庭)
- 第5講 産業・企業とは(担当:野坂)
- 第6講 「事業」とは何か?(担当:松本)
- 第7講 生活者の視点から地域ビジネス(事業)を考える(担当:梅澤)
- 第8講 コンテンツ産業と地域(担当:中澤)
- 第9講 地域活性化入門(担当:中庭)
- 第10講 第二次産業への理解(担当:長島)
- 第11講 第一次産業への理解(担当:野坂)
- 第12講 地域ビジネスの事業開発演習(担当:松本)
- 第13講 レジャー(余暇)産業と地域ビジネス(担当:梅澤)
- 第14講 コンテンツ・ツーリズムと現代(担当:中澤)
- 第15講 ふりかえりと総括(担当:全員)

■フィードバックの要領

レポートへのフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上) : 各講義について深く理解し、地域ビジネスに対する考えを明確に示すことができる。
- 評価 A (89～80点) : 各講義について深く理解し、地域ビジネスに対する考えを示すことができる。
- 評価 B (79～70点) : 各講義について深く理解し、地域ビジネスの可能性を考えることができる。
- 評価 C (69～60点) : 各講義について深く理解し、地域ビジネスの重要性を把握している。
- 評価 F (59点以下) : 各講義についての理解が不十分であり、地域ビジネスの重要性をつかんでいない。

■評価方法

平常点40%、各講義に関するレポート60%

■留意点

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 中国語 I X (Chinese IX)

サブタイトル 中国語へのいざない

担当教員 水盛 涼一

対象学年 1年生以上

区分 春学期

■講義目的

中国、台湾、香港、澳門、シンガポール。いわゆる大中華圏で中国語を母語とする人々は14億人を超えます。これは英語(6億人)、インドのヒンディー語(5億人)、スペイン語(4億5千万人)、アラビア語(3億人)、そして日本語(1億3千万人)の母語話者をおさえ、世界で最大の話者人口です。しかも大中華圏は日本に近く、観光に貿易にと交流は益々密接になっています。すでに日本と切っても切り離せない関係の大中華圏について、最新の教科書を使い、社会や文化の話題を中心に、すぐに役立つ実践的な中国語を習得していきます。※母語が中国語ではない学生のみ履修できます。2年次以上の学生の履修可否は面接のうえ決定します。

■講義分類

グローバルビジネス

■到達目標

①中国・大中華圏の社会や文化について理解を深め、異文化との接触時に戸惑わず積極的に自己主張できるようにする。②中国語による自己紹介をはじめ、会話や表現への基礎力を身につける。③客観的指標として、中国語検定試験四級程度の実力をつけることを目標とする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

「表現と技能」が中心です。また語学はその言葉を母国語とする文化を知るものですから「知識と理解」となります。突き詰めれば「高い志」における「社会における多様な価値観」への関与という志に結びつくでしょう。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

演習

- [個人] ワークシート
- [ペア] 相互教授法
- [グループ] なし
- [上記以外] なし

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上)及び具体的な内容

講義前には必ず該当範囲を読み、CDを聞いておいてください。また毎週にわたり簡単な確認テストを実施します。そのため、講義前にはおよそ二時間弱の予習復習が必要となるでしょう。

■授業の概要

- 第1講 オリエンテーション
- 第2講 中国語の発音について
- 第3講 教科書：第一課
- 第4講 教科書：第二課
- 第5講 教科書：第三課
- 第6講 教科書：第四課
- 第7講 教科書：第一課から第四課までの復習
- 第8講 教科書：第五課
- 第9講 教科書：第六課
- 第10講 教科書：第七課
- 第11講 教科書：第八課
- 第12講 教科書：第九課
- 第13講 教科書：第十課
- 第14講 期末試験に備えて
- 第15講 期末試験

■フィードバックの要領

毎週の小テストなどは当然ながら返却しますのでご意見をお書きください。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上)：評価点 100点 (下記“配分”参照)のうち90点以上。
- 評価 A (89～80点)：評価点 100点 (下記“配分”参照)のうち89～80点。
- 評価 B (79～70点)：評価点 100点 (下記“配分”参照)のうち79～70点。
- 評価 C (69～60点)：評価点 100点 (下記“配分”参照)のうち69～60点。
- 評価 F (59点以下)：評価点 100点 (下記“配分”参照)のうち59点以下。

■評価方法

期末試験(60%)、授業に取り組む姿勢・積極性および講義内小テスト(40%)。なお期末試験は自己紹介(30%)および文法に關する筆記試験(30%)によります。

■留意点

科目名 中国語 I Y (Chinese IY)

サブタイトル 中国語 I Y

担当教員 田 園

対象学年 1 年生以上

区分 春学期

■講義目的

授業は主にリーディングとスピーキングより構成され、中国語の発音と基礎文法を習得したうえで、「すぐに使える」ことに重きをおく。リーディングは、主に基礎文法を習得する。スピーキングは、発音と簡単な日常会話を学習した後、本文の暗唱やロールプレイング形式で、応用練習を行い、知識やスキルの定着をはかる。全体的には中国語の「聞く」「話す」「読む」「書く」の4つの技能を伸ばし、異文化理解を深めるためのコミュニケーション能力向上を目指す。※母国語が中国語ではない学生のみ履修できる。

■講義分類

ビジネス環境理解／グローバルビジネス

■到達目標

①中国語リーディングとスピーキングの基礎知識とスキルの習得、②異文化理解を深めるためのコミュニケーション能力向上。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

中国語に関する基礎的な学力を養い、異文化理解を深めるためのコミュニケーション能力を向上させる。

■授業形態 AL 手法 ※該当する項目のみ記載

講義

[個人] ワークシート
[ペア] ロールプレイ
[グループ] なし
[上記以外] なし

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

授業前には CD を聞き、単語、文法、本文の予習をしておく。(1.5 時間) 授業後には CD を繰り返して聞き、本文の読む練習・暗唱をし、練習問題を解く。(1.5 時間)

■授業の概要

第1講 ガイダンス及び中国語概説
第2講 第1課
第3講 第2課
第4講 第3課
第5講 第4課
第6講 第1課から第4課までの復習及び小テスト
第7講 実践：自分の名前の発音及び簡単な挨拶語
第8講 第5課
第9講 第6課
第10講 第7課
第11講 第8課
第12講 第9課
第13講 第10課
第14講 期末テスト
第15講 翻訳の練習

■フィードバックの要領

宿題に対し、添削を記入してフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 特に優れているもの
評価 A (89 ~ 80 点) : 優れているもの
評価 B (79 ~ 70 点) : 一応の努力が認められるもの
評価 C (69 ~ 60 点) : 合格と認められる最低限の水準を満たしているもの
評価 F (59 点以下) : C の水準に達しないもの

■評価方法

期末テスト (60 点)、平常点 (授業態度や小テストなど、20 点)、授業中の会話力 (20 点) による総合評価

■留意点

授業の進行具合によって、授業内容や授業の進度が多少変更となる場合がある。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 中国語 II X (Chinese IIX)

サブタイトル 中国語 II X

担当教員 田 園

対象学年 1 年生以上

区分 秋学期

■講義目的

授業は主にリーディングとスピーキングより構成され、「すぐに使える」ことに重きをおく。リーディングは、主に基礎文法を習得する。スピーキングは、本文を習った後、暗唱やロールプレイング形式で、応用練習を行い、知識やスキルの定着をはかる。全体的には中国語 I に引き続き、中国語の「聞く」「話す」「読む」「書く」の 4 つの技能を伸ばし、異文化理解を深めるためのコミュニケーション能力を向上させる。※母国語が中国語ではない学生のみ履修できる。

■講義分類

ビジネス環境理解／グローバルビジネス

■到達目標

①中国語リーディングとスピーキングの基礎知識とスキルの習得、②異文化理解を深めるためのコミュニケーション能力向上。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

中国語に関する基礎的な学力を養い、異文化理解を深めるためのコミュニケーション能力を向上させる。

■授業形態 AL 手法 ※該当する項目のみ記載

講義

[個人] ワークシート
[ペア] ロールプレイ
[グループ] なし
[上記以外] なし

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

授業前には CD を聞き、単語、文法、本文の予習をしておく。(1.5 時間) 授業後には CD を繰り返して聞き、本文の読む練習・暗唱をし、練習問題を解く。(1.5 時間)

■授業の概要

第 1 講 テキスト前半の復習
第 2 講 第 11 課
第 3 講 第 12 課
第 4 講 第 13 課
第 5 講 第 14 課
第 6 講 第 15 課
第 7 講 第 11 課から第 15 課までの復習
第 8 講 第 16 課
第 9 講 第 17 課
第 10 講 第 18 課
第 11 講 第 19 課
第 12 講 第 20 課
第 13 講 第 16 課から第 20 課までの復習
第 14 講 総復習
第 15 講 期末テスト

■フィードバックの要領

宿題に対し、添削を記入してフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 特に優れているもの
評価 A (89 ~ 80 点) : 優れているもの
評価 B (79 ~ 70 点) : 一応の努力が認められるもの
評価 C (69 ~ 60 点) : 合格と認められる最低限の水準を満たしているもの
評価 F (59 点以下) : C の水準に達しないもの

■評価方法

期末テスト (60 点)、平常点 (授業態度や小テストなど、20 点)、授業中の会話力 (20 点) による総合評価

■留意点

授業の進行具合によって、授業内容や授業の進度が多少変更となる場合がある。

科目名 中国語 II Y (Chinese ILY)**サブタイトル** 中国語さらに一步**担当教員** 水盛 涼一**対象学年** 1年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

中国、台湾、香港、澳門、シンガポール。いわゆる大中華圏で中国語を母語とする人々は14億人を超えます。これは英語(6億人)、インドのヒンディー語(5億人)、スペイン語(4億5千万人)、アラビア語(3億人)、そして日本語(1億3千万人)の母語話者をおさえ、世界で最大の話者人口です。しかも大中華圏は日本に近く、観光に貿易にと交流は益々密接になっています。すでに日本と切っても切り離せない関係の大中華圏について、春学期に引き続き、最新の教科書を使い、社会や文化の話題を中心に、すぐに役立つ実践的な中国語を習得していきます。※母語が中国語ではない学生のみ履修できます。基本的に「中国語 I」の履修が必要です。二年次以上の学生の履修可否は筆記試験および面接のうえ決定します。

■講義分類

グローバルビジネス

■到達目標

①中国・大中華圏の社会や文化について理解を深め、異文化との接触時に戸惑わず積極的に自己主張できるようにする。②中国語による自己紹介をはじめ、会話や表現への基礎力を身につける。③客観的指標として、中国語検定試験四級程度の実力をつけることを目標とする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ③ ①・②で選択された事項の詳細

「表現と技能」が中心です。また語学はその言葉を母国語とする文化を知るものですから「知識と理解」となります。突き詰めれば「高い志」における「社会における多様な価値観」への関与という志に結びつくでしょう。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

演習

- [個人] ワークシート
- [ペア] 相互教授法
- [グループ] なし
- [上記以外] なし

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上) 及び具体的な内容

講義前には必ず該当範囲を読み、CDを聞いておいてください。また毎週にわたり簡単な確認テストを実施します。そのため、講義前にはおよそ二時間弱の予習復習が必要となるでしょう。

■授業の概要

- 第1講 オリエンテーション
- 第2講 中国語での自己紹介
- 第3講 教科書：第十一課
- 第4講 教科書：第十二課
- 第5講 教科書：第十三課
- 第6講 教科書：第十四課
- 第7講 教科書：第十五課
- 第8講 教科書：第十六課
- 第9講 教科書：第十七課
- 第10講 教科書：第十八課
- 第11講 教科書：第十九課
- 第12講 教科書：第二十課
- 第13講 教科書総復習
- 第14講 期末試験に備えて
- 第15講 期末試験

■フィードバックの要領

試験に対してフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上) : 評価点 100点 (下記“配分”参照) のうち 90点以上。
- 評価 A (89～80点) : 評価点 100点 (下記“配分”参照) のうち 89～80点。
- 評価 B (79～70点) : 評価点 100点 (下記“配分”参照) のうち 79～70点。
- 評価 C (69～60点) : 評価点 100点 (下記“配分”参照) のうち 69～60点。
- 評価 F (59点以下) : 評価点 100点 (下記“配分”参照) のうち 59点以下。

■評価方法

期末試験(60%)、授業に取り組む姿勢・積極性および講義内小テスト(40%)

■留意点

試験に対してフィードバックを行う。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 日本語講座初級 (Japanese Language Beginners Course)**サブタイトル** 日本語会話、文法、語彙**担当教員** TIJ 東京日本語研修所**対象学年** 1年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

留学生が日本で生活するための日常会話、友だちと交流するための会話、また大学の職員、教師とコミュニケーションするための会話、社会から情報を得るための会話能力をつけると同時に、そのために必要な文法、語彙、表現を学ぶ。

■講義分類

ビジネス環境理解／社会人育成／地域ビジネス

■到達目標

(1) 日常生活や大学生活の中で話されている会話がほぼ理解できる。(2) 日常生活や大学生活の中で自分が言いたいことを大体伝えることができる。(3) 自分の経験や夢、希望などをスピーチ形式で発表できる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP3 関心と意欲 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

社会に関心を持ち、社会生活の中で必要な表現や語彙を学び、コミュニケーション力を身に付けて主体的に行動できるようにする。発信力、傾聴力、状況把握力、協調性を養う。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義／演習

[個人] プレゼンテーション／ワークシート

[ペア] ペアワーク／ピア・レビュー

[グループ] PBL／Buzz Group

[上記以外] なし

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

予習として、教科書や新聞記事等の漢字の読みや語彙を調べてくること。スピーチを考えてくること。復習・宿題として、短文作文やスピーチ原稿を提出すること。必要時間は各 90 分。

■授業の概要

- 第1講 プレースメントテスト、作文・作文発表・漢字
- 第2講 テキスト第1課本文について話しあい、内容確認、Q & A をする。
- 第3講 文型練習 1 回目。2 回目。
- 第4講 グラフを見て話し合う。聴解。テーマ関連の語彙を増やす。発表準備をする。
- 第5講 スピーチ発表、フィードバック、質疑応答
- 第6講 テキスト第2課本文について話しあい、内容確認、Q & A をする。
- 第7講 文型練習 1 回目。2 回目。
- 第8講 グラフを見て話し合う。聴解。テーマ関連の語彙を増やす。発表準備をする。
- 第9講 スピーチ発表、フィードバック、質疑応答
- 第10講 テキスト第3課本文について話しあい、内容確認、Q & A をする。
- 第11講 文型練習 1 回目。2 回目。
- 第12講 グラフを見て話し合う。聴解。テーマ関連の語彙を増やす。発表準備をする。
- 第13講 スピーチ発表、フィードバック、質疑応答
- 第14講 修了スピーチ準備、発表練習。
- 第15講 修了スピーチ発表。期末テスト (文法・漢字)

■フィードバックの要領

期末テスト終了後に即座にフィードバックを行い、今学期の学習の総括をする。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : テーマについて、自分が考えたことが積極的に、論理的に発表できる。

評価 A (89 ~ 80 点) : テーマについて、自分の考えたことが分かりやすく発表できる。

評価 B (79 ~ 70 点) : テーマについて、自分が考えたことが発表できる。

評価 C (69 ~ 60 点) : テーマについて、自分が考えたことが短く発表できる。

評価 F (59 点以下) : 平常点・期末テストで基準を満たさなかった。

■評価方法

平常点 (授業態度・授業参加度)・毎回のミニテスト・宿題 : 80%、 期末テスト・修了スピーチ : 20%

■留意点

本講座は外国人留学生のための講座です。日本人学生が履修しても単位は授与されません。週二日の両日あわせて一講座となりますので、両方を履修してください。

科目名 日本語講座中級 I (Japanese Language Intermediate Course I)**サブタイトル** 日本語講座中級会話**担当教員** TIJ 東京日本語研修所**対象学年** 1 年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

留学生在日本で生活するための日常会話だけでなく、大学の授業を聞くため、また授業に積極的に参加するために必要な力を付ける。さらに、社会から情報を得るため、また社会に参加し問題解決するための日本語会話能力、聴解能力をつけると同時に、そのために必要な文法、語彙、表現を学ぶ。

■講義分類

ビジネス環境理解／社会人力育成／地域ビジネス

■到達目標

(1) 社会生活や大学生活の中で話されている会話がほぼ理解できる。(2) 社会生活や大学生活の中で、自分が言いたいことをほぼ伝えることができる。(3) 社会の問題について、自分が考えたことを論理的に発表できる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2 番目に身につけられる事項

DP3 関心と意欲 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

日本語を通じて人間関係を構築し、社会を学ぶ過程で遭遇するさまざまな課題に対処できる力を付ける。チームワークを大切に、リーダーシップを取れるように積極性を修得する。

■授業形態 AL 手法 ※該当する項目のみ記載

講義／演習

[個人] プレゼンテーション／ワークシート

[ペア] ヘアワーク／ピア・レビュー

[グループ] PBL／Buzz Group

[上記以外] なし

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

予習として、新聞記事やニュース等の漢字の読みや語彙を調べてくること。スピーチ原稿を考えてくること。復習・宿題として、短作文やスピーチ原稿、ディベート原稿を提出すること。必要時間は各 100 分。

■授業の概要

- 第1講 プレースメントテスト、作文、作文発表、聴解
 第2講 資料1 背景知識共有・意見交換・本文・まとめ・語彙練習、短文作文、聴解・要約
 第3講 資料1 発表のための原稿作成、推敲、スピーチ発表、質疑応答。
 第4講 資料1 発表、フィードバック 資料2 について話し合い
 第5講 資料2 背景知識共有・意見交換・本文・まとめ・語彙練習、短文作文、聴解・要約
 第6講 資料2 発表のための原稿作成、推敲、スピーチ発表、質疑応答。
 第7講 資料2 発表、フィードバック
 第8講 資料3 背景知識共有・意見交換・本文・まとめ・語彙練習、短文作文、聴解・要約
 第9講 資料3 発表のための原稿作成、推敲、スピーチ発表、質疑応答。
 第10講 資料3 発表、フィードバック
 第11講 資料4 背景知識共有・意見交換・本文・まとめ・語彙練習、短文作文、聴解・要約
 第12講 資料4 発表のための原稿作成、推敲、スピーチ発表、質疑応答。
 第13講 資料4 発表、フィードバック
 第14講 修了プレゼンテーション準備
 第15講 修了プレゼンテーション、質疑応答、フィードバック

■フィードバックの要領

課題や発表の後には即座にフィードバックを行ない、内容の定着と理解の深化を図る。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 会話や発表がほぼ理解でき、言いたいことや社会問題を積極的に的確に発表できる。
 評価 A (89 ~ 80 点) : 会話がだいたい理解でき、社会問題について、自分が考えたことがしっかり発表できる。
 評価 B (79 ~ 70 点) : 会話が理解でき、社会の問題について、自分が考えたことが発表できる。
 評価 C (69 ~ 60 点) : やさしい会話が理解でき、社会問題について考えたことが短く発表できる。
 評価 F (59 点以下) : 平常点・授業中の活動・修了プレゼンテーションが基準を満たさなかった。

■評価方法

平常点 (授業態度・授業参加度・毎回のテスト・宿題) : 80%、修了プレゼンテーション : 20%

■留意点

本講座は外国人留学生のための講座です。日本人学生が履修しても単位は授与されません。週二日の両日あわせて一講座となりますので、両方を履修してください。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名

日本語講座中級Ⅱ (Japanese Language Intermediate Course Ⅱ)

サブタイトル

日本語会話、文法、語彙

担当教員

TIJ 東京日本語研修所

対象学年

1年生以上

区分

秋学期

■講義目的

留学生が日本で生活するための日常会話、友だちと交流するための会話、また大学の職員、教師とコミュニケーションするための会話、社会から情報を得るための会話能力をつけると同時に、そのために必要な文法、語彙、表現を学ぶ。

■講義分類

ビジネス環境理解／社会人育成／地域ビジネス

■到達目標

(1) 日常生活や大学生活の中で話されている会話がほぼ理解できる。(2) 日常生活や大学生活の中で自分が言いたいことを大体伝えることができる。(3) 自分の経験や夢、希望などをスピーチ形式で発表できる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP3 関心と意欲 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

社会に関心を持ち、社会生活の中で必要な表現や語彙を学び、コミュニケーション力を身に付けて主体的に行動できるようにする。発信力、傾聴力、状況把握力、協調性を養う。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義／演習

[個人] プレゼンテーション／ワークシート

[ペア] ペアワーク／ピア・レビュー

[グループ] PBL／Buzz Group

[上記以外] なし

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

予習として、教科書や新聞記事等の漢字の読みや語彙を調べてくること。スピーチを考えてくること。復習・宿題として、短文作文やスピーチ原稿、ディベート原稿を提出すること。必要時間は各 90 分。

■授業の概要

- 第1講 プレゼンテーションテスト、作文・作文発表・漢字
- 第2講 テキスト第6課本文について話しあい、内容確認、Q & A をする。
- 第3講 文型練習 1 回目。2 回目。
- 第4講 グラフを見て話し合う。聴解。テーマ関連の語彙を増やす。発表準備をする。
- 第5講 スピーチ発表、フィードバック、質疑応答
- 第6講 テキスト第7課本文について話しあい、内容確認、Q & A をする。
- 第7講 文型練習 1 回目。2 回目。
- 第8講 グラフを見て話し合う。聴解。テーマ関連の語彙を増やす。発表準備をする。
- 第9講 ディベート、ジャッジ、フィードバック
- 第10講 テキスト第8課本文について話しあい、内容確認、Q & A をする。
- 第11講 文型練習 1 回目。2 回目。
- 第12講 グラフを見て話し合う。聴解。テーマ関連の語彙を増やす。発表準備をする。
- 第13講 ディベート、ジャッジ、フィードバック
- 第14講 修了スピーチ準備、発表練習。
- 第15講 修了スピーチ発表。期末テスト (文法・漢字)

■フィードバックの要領

期末テスト終了後に即座にフィードバックを行い、今学期の学習の総括をする。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : テーマについて、自分が考えたことが積極的に、論理的に発表できる。
- 評価 A (89 ~ 80 点) : テーマについて、自分の考えたことが分かりやすく発表できる。
- 評価 B (79 ~ 70 点) : テーマについて、自分が考えたことが発表できる。
- 評価 C (69 ~ 60 点) : テーマについて、自分が考えたことが短く発表できる。
- 評価 F (59 点以下) : 平常点・期末テストで基準を満たさなかった。

■評価方法

平常点 (授業態度・授業参加度)・毎回のミニテスト・宿題 : 80%、 期末テスト・修了スピーチ : 20%

■留意点

本講座は外国人留学生のための講座です。日本人学生が履修しても単位は授与されません。週二日の両日あわせて一講座となりますので、両方を履修してください。

科目名 日本語講座上級 (Japanese Language An Upper Course)**サブタイトル** 日本語講座上級会話**担当教員** TIJ 東京日本語研修所**対象学年** 1年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

留学生が日本で生活するための日常会話だけでなく、大学の授業に積極的に参加するため、プレゼンテーションや討論に必要な力を付ける。さらに、社会から情報を得るため、また社会に参加し問題解決するための日本語会話能力、聴解能力をつけると同時に、そのために必要な文法、語彙、表現を学ぶ。

■講義分類

ビジネス環境理解／社会人力育成／地域ビジネス

■到達目標

(1) 社会生活や研究発表で買われる会話がほぼ理解できる。(2) 社会生活や大学生活の中で、自分が言いたいことをほぼ伝えることができる。(3) 社会問題について、自分の意見を論理的に発表できる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP3 関心と意欲 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

日本語を通じて人間関係を構築し、社会を学ぶ過程で遭遇するさまざまな課題に対処できる力を付ける。チームワークを大切に、リーダーシップを取れるように積極性を修得する。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義／演習

[個人] プレゼンテーション／ワークシート

[ペア] ヘアワーク／ピア・レビュー

[グループ] PBL／Buzz Group

[上記以外] なし

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

予習は、新聞記事やニュース等の語彙を調べ、要約や例文を作成し、関連記事を調べてくること。復習・宿題として、短文作文やスピーチ原稿、ディベート原稿を提出すること。必要時間は各 120 分。

■授業の概要

- 第1講 プレースメントテスト、作文、作文発表、聴解。
- 第2講 資料1 背景知識共有・意見交換・まとめ・語彙練習、短文作文、聴解・要約
- 第3講 資料1 ディベートのための原稿作成、推敲、立論、質疑、反論項目策定。
- 第4講 資料1 ディベート試合
- 第5講 資料2 背景知識共有・意見交換・まとめ・語彙練習、短文作文、聴解・要約
- 第6講 資料2 ディベートのための原稿作成、推敲、立論、質疑、反論項目策定。
- 第7講 資料2 ディベート試合
- 第8講 資料3 背景知識共有・意見交換・まとめ・語彙練習、短文作文、聴解・要約
- 第9講 資料3 ディベートのための原稿作成、推敲、立論、質疑、反論項目策定。
- 第10講 資料3 発表、フィードバック
- 第11講 資料4 背景知識共有・意見交換・まとめ・語彙練習、短文作文、聴解・要約
- 第12講 資料4 ディベートのための原稿作成、推敲、立論、質疑、反論項目策定。
- 第13講 資料4 発表、フィードバック
- 第14講 修了ディベート準備
- 第15講 修了ディベート、質疑応答、審査、フィードバック

■フィードバックの要領

課題やディベートの後には即座にフィードバックを行ない、理解の深化を図る。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 会話や発表がほぼ理解でき、言いたいことや社会問題を積極的に的確に発表できる。
- 評価 A (89 ~ 80 点) : 会話がだいたい理解でき、社会問題について、自分が考えたことがしっかり発表できる。
- 評価 B (79 ~ 70 点) : 会話が理解でき、社会の問題について、自分が考えたことが発表できる。
- 評価 C (69 ~ 60 点) : やさしい会話が理解でき、社会問題について考えたことが短く発表できる。
- 評価 F (59 点以下) : 平常点・授業中の活動・修了プレゼンテーションが基準を満たさなかった。

■評価方法

平常点 (授業態度・授業参加度・毎回のテスト・宿題) : 80%、修了ディベート : 20%

■留意点

本講座は外国人留学生のための講座です。日本人学生が履修しても単位は授与されません。週二日の両日あわせて一講座となりますので、両方を履修してください。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ビジネス数学基礎 (Practical Mathematics)**サブタイトル** 実社会に必要な数学スキル基礎**担当教員** 大森、良峯、久保田、日本数学検定協会 **対象学年** 1年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

経営情報学部においては、複合領域での知識や技術の修得が必要となる。このような複合領域を対象とする分野で必要になるデータを扱う数学的手法の基礎について、演習と講義により身につけることが本講義の目的である。この講義は選択必修科目である。演習の積み重ねを通して技術が身に付く構成になっているので、欠席しないこと。本講義では、課題を解決するためにどのようなデータの取り扱いをするとよいか、中学から高校1年程度の数学を基点として、問題解決方法の理解とそれを応用した問題解決演習を行い、産業社会において必要な数理技能の基礎を完全習得する。

■講義分類

社会人力育成/ビジネス ICT

■到達目標

経営情報学部で学ぶ上での最低限の数学の能力が身につけているか。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

データを扱う技法の基礎を身につけることにより、その分析技能と結果の表現方法を習得する。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義/演習

[個人] プレゼンテーション/問題作成

[ペア] ヘアワーク/相互教授法

[グループ] PBL

[上記以外] なし

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

中学・高校数学の最も基礎的な知識を必要とするので、各回で取り扱う単元の事前学習 (0.5 時間) を行うこと。各回で完答できなかった問題を中心に、課題の復習 (1 時間) を行うこと。

■授業の概要

第1講 知識レベルの再評価

第2講 「把握力」

第3講 「分析力」

第4講 「選択力」

第5講 「予測力」

第6講 「表現力」

第7講 まとめ

第8講 中間テスト

第9講 「把握力」を養うグループワークとプレゼンテーション

第10講 「分析力」を養うグループワークとプレゼンテーション

第11講 「選択力」を養うグループワークとプレゼンテーション

第12講 「予測力」を養うグループワークとプレゼンテーション

第13講 「表現力」を養うグループワークとプレゼンテーション

第14講 総合課題

第15講 まとめ

■フィードバックの要領

毎回の授業内課題演習のチェック、中間・期末テストのフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : ビジネス数学検定 Lite において 90 点以上およびそれに相当する成績を取ったもの

評価 A (89 ~ 80 点) : ビジネス数学検定 Lite において 80 点以上およびそれに相当する成績を取ったもの

評価 B (79 ~ 70 点) : ビジネス数学検定 Lite において 70 点以上およびそれに相当する成績を取ったもの

評価 C (69 ~ 60 点) : ビジネス数学検定 Lite において 60 点以上およびそれに相当する成績を取ったもの

評価 F (59 点以下) : 上記以外

■評価方法

試験 (90%)、平常点 (10%) により評価する。

■留意点

①クラスは自分が割り当てられたクラスを確認の上、そのクラスで履修する。②学期途中でクラス替えがあるので注意する。③電車の遅延や病欠などの際には、遅延証明書・診断書を提出する。

科目名 ビジネススキル入門 (Introduction to Business Skills)**サブタイトル** ビジネス能力検定ジョブパス 3級**担当教員** 小西、高橋、西村(知)、加藤、葛本、崎濱 **対象学年** 1年生以上**区分** 秋学期**実務経験のある教員による授業****■講義目的**

この講義では、卒業後に期待される社会人・職業人になるために、学生時代に身につけておくべき基本的な事柄を学びます。具体的には、①規則正しい生活習慣、②コミュニケーション能力、③日常生活のマナー、④学が楽しさ、⑤情報リテラシー等について、文部科学省後援「ビジネス能力検定ジョブパス3級」の公式テキストを用いて学びます。

■講義分類

ビジネス環境理解／ビジネスマネジメント／社会人力育成

■到達目標

文部科学省後援「ビジネス能力検定ジョブパス3級」合格を到達目標とします。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

ビジネスパーソンとして必要な様々な知識を理解し、社会人基礎力を身につける。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義／演習

[個人] プレゼンテーション／ワークシート

[ペア] ペアワーク

[グループ] なし

[上記以外] なし

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

事前に配布する予習用サブノートを用いて、毎回 1.5 時間以上の予習が必要。さらに、授業終了時に配布する復習用ワークシートを用いて、毎回 1.5 時間以上の復習が必要。

■授業の概要

- 第1講 ビジネス能力検定ジョブパス3級について
 第2講 第1編：ビジネスとコミュニケーションの基本 第1章：キャリアと仕事へのアプローチ
 第3講 第2章：仕事の基本となる8つの意識
 第4講 第3章：コミュニケーションとビジネスマナーの基本
 第5講 第4章：指示の受け方と報告、連絡・相談 第5章：話し方と聞き方のポイント
 第6講 第6章：来客対応と訪問の基本マナー 第7章：会社関係でのつき合い
 第7講 模擬問題演習①
 第8講 第2編：仕事の実践とビジネスツール 第1章：仕事への取り組み方
 第9講 第2章：ビジネス文書の基本
 第10講 第3章：電話対応 第4章：統計・データの読み方・まとめ方
 第11講 第5章：情報収集とメディアの活用 第6章：会社を取り巻く環境と経済の基本
 第12講 模擬問題演習②
 第13講 模擬問題演習③
 第14講 模擬問題演習④
 第15講 模擬問題演習⑤

■フィードバックの要領

授業に関するコメント（ミニッツペーパー）にコメントを付して返却

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上)：ジョブパス 3 級検定試験に、成績優秀で合格する。
 評価 A (89～80 点)：ジョブパス 3 級検定試験に合格する。
 評価 B (79～70 点)：ジョブパス 3 級模擬試験に合格する。
 評価 C (69～60 点)：ジョブパス 3 級合格に準ずる知識を有する。
 評価 F (59 点以下)：ジョブパス 3 級合格に準ずるレベルに達していない。

■評価方法

ジョブパス 3 級検定試験、又はジョブパス 3 級模擬試験に合格すること。(100%) ただし、出席率が 3 分の 2 以上であることを必要とする。

■留意点

教科書は毎回使用しますので、受講者は全員購入の上、毎回持参してください。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 法学（憲法）（Jurisprudence（including Constitution Law））**サブタイトル** 生活と憲法**担当教員** 樋笠 堯士**対象学年** 1年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

日本国憲法は我が国の最高法規であり、私たちの生活とは切り離せない重要な法律です。日本国憲法は、大きく分けると人権に関する規定、国の統治に関する規定に分けられますが、その双方をバランス良く学び、最低限の憲法の知識・素養・思考方法を身に付けることが目的です。

■講義分類

ビジネス環境理解／社会人力育成

■到達目標

私たちの周りの様々な問題と憲法が深く関わっていることを理解し、今後活かせる知識・素養・思考方法を得ることが目標です。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

人権に関する知識を学び、統治機構の役割を理解する（DP1 知識と理解）。裁判所がどのような理由・根拠で憲法上の権利を違憲・合憲とするのかの判断過程を学び、法的な思考力を養う（DP2 思考と判断）。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載**講義**

[個人] ワークシート, T/Fテスト

[ペア] ペアワーク

[グループ] PBL

[上記以外] なし

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

事前に教科書の指定範囲を読んでから講義に参加する（1 時間）。講義後には、レジュメの内容と教科書の該当ページを照らし合わせ、学んだ情報を補う（0.5 時間）。

■授業の概要

第1講 オリエンテーション

第2講 外国人の人権

第3講 プライバシー権

第4講 法の下での平等

第5講 信教の自由

第6講 表現の自由

第7講 営業の自由

第8講 生存権

第9講 教育権

第10講 人身の自由

第11講 財産権、労働基本権、参政権など諸権利

第12講 天皇制・平和主義・国会①

第13講 国会②・内閣

第14講 裁判所

第15講 地方自治・憲法改正

■フィードバックの要領

リアクションペーパーを適宜配布し、記入後提出してもらい、学生の質問等に答える。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 講義内容に関して、完全に近い理解度に達している。

評価 A (89 ~ 80 点) : 講義内容に関して、優れた理解度に達している。

評価 B (79 ~ 70 点) : 講義内容に関して、平均的な理解度に達している。

評価 C (69 ~ 60 点) : 講義内容に関して、最低限の理解度に達している。

評価 F (59 点以下) : 講義内容に関して、最低限の理解度に達していない。

■評価方法

平常点 (30%)、期末試験 (70%) 期末試験は、指定された (手書きの) 持ち込みペーパーのみ持ち込み可能。

■留意点

特になし。

科目名 マーケティングマネジメント論 (Marketing Management)**サブタイトル** マーケティング論とマネジメント論の統合**担当教員** 趙 佑嶺**対象学年** 1年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

マーケティングとは「売れる仕組みづくり」である。そして、マーケティングマネジメント論とは、マーケティングをマネジメントの観点から捉える「システムの」、[全体最適]思考からの論である。そして、問題解決における手段と思考の多くが、マーケティングに通じるものである。この講義では、マーケティングマネジメントを行う人にとって必要な知識、概念、理論、手法、発想、技術、思考などの「基礎」を学ぶことで、その実行と問題解決の手がかりを得ることを目的とする。実際のマーケティングにおける企業を中心とした最前線事例をできるだけとりあげて、現実のマネジメントに適用可能になるよう説明する。担当教員としてメリハリがあり、分かり易い講義を常に心がけたい。

■講義分類

顧客理解／ビジネス創造／ビジネスマネジメント

■到達目標

マーケティング・マネジメント・プロセスの基本を理解し、マーケティング企画・マーケティングマネジメントを行う際の重要概念の修得をめざす。中小企業診断士試験レベルの問題解説を目指す。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

ビジネスの中で最低限必要な基礎的なマーケティングの思考力を基に、組織と個人の課題解決に向けたマーケティングとマネジメントの統合のプロセスを理論的に理解する。

■授業形態 AL 手法 ※該当する項目のみ記載

講義

[個人] ワークシート
[ペア] ペアワーク
[グループ] なし
[上記以外] なし

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

配布資料には翌週講義回の内容が記載しており、講義終了間際に教員が示す事前学習ポイントを中心に、それらを授業前に読んで上で (各 1.5 時間以上) 講義に臨み、授業後には WORD を用いてレポートを提出する。

■授業の概要

- 第1講 オリエンテーション、マーケティングマネジメントの概要
- 第2講 戦略とは？ 戦略の構想、ビジョン策定
- 第3講 マーケティング環境分析 (1)、マーケティング環境の性格
- 第4講 マーケティング環境分析 (2)、SWOT 分析
- 第5講 STP (1) - 市場細分化するための基準
- 第6講 STP (2) - ポジショニング成功の鍵
- 第7講 コンセプトメイキング
- 第8講 サービス (プロダクト)
- 第9講 価格 (プライシング)
- 第10講 チャネル (流通経路)
- 第11講 コミュニケーション (プロモーション)
- 第12講 マーケティングマネジメントの実際と日本企業のマーケティング
- 第13講 マーケティングマネジメントに必要な発想法と思考法
- 第14講 実社会のブランドマーケティングの専門家、またはマーケティングマネジャーのゲスト講義
- 第15講 総括

■フィードバックの要領

レポートに対し、コメントを記入してフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : マーケティング・プロセスの基本を高度に理解し、中小企業診断士試験を勧めたいレベル
 評価 A (89 ~ 80 点) : マーケティング・プロセスの主要概念をかなり理解し、販売士試験を勧めたいレベル
 評価 B (79 ~ 70 点) : マーケティングマネジメントを行う際の重要概念の修得がある程度に達している。
 評価 C (69 ~ 60 点) : マーケティング・プロセスの基本知識を一部有している
 評価 F (59 点以下) : マーケティング・マネジメント・プロセスの基本を理解していない結果として不合格

■評価方法

期末試験・筆記試験 (80%) + 平常点 (20%)、詳細はオリエンテーション時に提示

■留意点

①講義の順序は、学生の理解度と進捗度によって前後変更する場合がある ②私語、携帯電話、本授業と無関係のパソコン使用、途中退室は絶対不可であり、熾烈に厳しく注意する。学生の社会人としての常識涵養のための注意と授業態度を静粛に保つ教員の姿勢がいやであれば、本講義の履修は勧められない。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 マーケティング入門 (Marketing Principle)

サブタイトル 経営資源（ヒト、モノ、カネ、情報）を活用したマーケティングの理論と実践

担当教員 小西、加藤、野坂

対象学年 1年生以上

区分 春学期

■講義目的

マーケティングは、企業や組織の経営資源（ヒト、モノ、カネ、情報）を全社的に活用するための考え方（マーケティング・フィロソフィー）と、製品戦略・価格戦略・流通戦略・プロモーション戦略といった、様々な方法論（マーケティング・ミックス）の2つの側面がある。本講義では、まず経営資源（ヒト、モノ、カネ、情報）の特徴を理解し、これらの経営資源を活用したマーケティング戦略の方法論と、全社的に活用するための考え方を理論的に学ぶ。さらに、模擬会社による製品開発を中心としたグループワークを実践として行う。そして理論と実践のキャッチボールを通じて、マーケティングの意義を学ぶことを目的とする。

■講義分類

顧客理解／ビジネスマネジメント

■到達目標

1. 経営資源（ヒト、モノ、カネ、情報）の特徴を、具体例を挙げて説明出来る。2. 経営資源の特徴を生かしたマーケティング戦略を、理論と実践の両面から説明できる。3. 模擬会社を通じたグループワークにより、理論と実践のキャッチボールができる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

・経営資源（ヒト、モノ、カネ、情報）の特徴と、それらを活かしたマーケティング戦略の理論に関する知識と理解
・理論と実践のキャッチボールに基づいたグループワークによる、表現や技能

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義／演習

[個人] プレゼンテーション／ワークシート
[ペア] ペアワーク
[グループ] PBL
[上記以外] なし

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

・事前に教科書と連動した予習課題の配布（毎週 1 時間程度）
・授業内で取り組んだワークシートの復習（毎週 1 時間程度）
・授業外の時間でグループメンバーが集まって行うグループワーク（毎週 1 時間程度）

■授業の概要

第1講 オリエンテーション
第2講 経営資源とは
第3講 ヒトのマーケティング
第4講 グループワーク1（組織づくり）
第5講 モノのマーケティング①
第6講 カネのマーケティング
第7講 グループワーク1（製品開発）
第8講 グループワーク2-1（損益分岐点分析）
第9講 情報のマーケティング
第10講 グループワーク3-1（SWOT分析）
第11講 グループワーク3-2（プロモーション戦略）
第12講 全体ワーク4（新製品発表会&販売会）
第13講 グループワーク5（決算書作成）
第14講 全体ワーク5（成果発表会）
第15講 まとめ

■フィードバックの要領

・ゲーグルクラスルーム等を利用した課題の提出・返却

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：経営資源ごとのマーケティング戦略の特徴を、具体例を挙げて詳細に説明出来る
評価 A（89～80 点）：経営資源ごとのマーケティング戦略の特徴を、具体例を挙げて説明出来る
評価 B（79～70 点）：経営資源ごとのマーケティング戦略の特徴を説明出来る
評価 C（69～60 点）：経営資源ごとのマーケティング戦略の特徴を簡単に説明出来る
評価 F（59 点以下）：経営資源ごとのマーケティング戦略の特徴を簡単に説明出来ない

■評価方法

プレゼンテーション資料（30%）、プレゼンテーション実技評価（30%）、プレゼンテーション成果評価（30%）、平常点（10%）

■留意点

予習・復習及び、授業外でのグループワーク活動が必要です。

科目名 マクロ経済学 (Macroeconomics)**サブタイトル** 初級 (入門) 篇**担当教員** 椎木 哲太郎**対象学年** 1年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

〔(高度)産業社会〕のメカニズムを解明するために不可欠なマクロ経済学の原理を学び、「状況認識の学」として実態経済への適用を志向する。そして、マクロ経済の動向が市民生活と深い結びつきを持っていることを理解し、その健全な運営・制御に努める「問題解決の学」としての活用方法を身に付ける。さらに、双方向性を重視し、マクロ経済ニュースが理解できるよう、平易な解説に努める。

■講義分類

ビジネス環境理解／社会人力育成／グローバルビジネス

■到達目標

初級レベルのマクロ経済学の理論を学び、企業活動の前提となるマクロ経済、諸変数の意味する所、その動向と因果関係、さらに日々生起するグローバルなマクロ経済ニュースに関する理解を深め、考え抜く力を高めることで、生活者・市民として望ましいマクロ経済政策を構想・評価することができる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

マクロ経済学の基礎的な学力を習得し、失業、インフレ・デフレ等の(マクロ)経済問題に対して、生活者・市民として必要な分析能力、政策提言能力の獲得をめざす。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義

〔個人〕 ワークシート
〔ペア〕 なし
〔グループ〕 なし
〔上記以外〕 小テストの実施と解説

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5時間以上) 及び具体的な内容

講義概要・事前学習ポイントに従って、必ず教科書の該当部分を読み、理解した上で(質問を持つ)講義に臨むこと。そのために毎週最低1.5時間以上は読み込むことが必要となる。さらに毎週1.5時間の事後学習を行うこと。

■授業の概要

- 第1講 マクロ経済学とはいかなる学問か 「経世済民」の学、問題解決の学として
- 第2講 経済体制 経済体制・経済制度の概念とその変化について
- 第3講 「資本主義」の変貌とマクロ経済学の進化 第二次大戦後の資本主義と経済学
- 第4講 重要マクロ変数とマクロ経済ニュース 経済指標の見方について
- 第5講 SNA・GDP・国際収支 GDPの「支出」面を中心として
- 第6講 消費と投資 消費関数と投資関数
- 第7講 政府支出と財政政策
- 第8講 有効需要の原理、国民所得の決定、45度線モデル
- 第9講 経済成長理論と労働市場
- 第10講 金融(貨幣)市場 貨幣の需給と金融政策
- 第11講 IS-LMモデル(1) IS-LM曲線の導出とモデルの位置づけ
- 第12講 IS-LMモデル(2) IS-LMモデルと安定化政策
- 第13講 物価とインフレ・デフレ AD-AS分析
- 第14講 国際版IS-LMモデル マンデル＝フレミング・モデルと安定化政策
- 第15講 マクロ経済学の有効性 *授業時間内最終試験の可能性

■フィードバックの要領

小テストを採点して返却し、解説する。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : マクロ経済学の基礎的理解を示す試験の成績、通常の実績とともに顕著に優れている
 評価 A (89～80点) : 試験の成績、通常の実績とともに優れている
 評価 B (79～70点) : 試験の成績、通常の実績とともに良い
 評価 C (69～60点) : 試験の成績、通常の実績とともに普通
 評価 F (59点以下) : 試験の成績、通常の実績とともに不十分

■評価方法

期末試験〔持込不可〕の結果(70%)、平常点(レポート提出等)(30%)

■留意点

①予習・復習の積み重ねが不可欠な科目であり、一度欠席すると講義についていけなくなる危険性が高い。②第4講から教科書を使用するので、あらゆる手立てを駆使して入手し、必要箇所を読んでおかねばならない。③講義は教科書を読んでいることを前提として行う。連続して出席せずして、或いは教科書を購入せずして、単位を取得することは不可能であろう。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ミクロ経済学 (Microeconomics)

サブタイトル ミクロ経済学 (Microeconomics)

担当教員 下井 直毅

対象学年 1年生以上

区分 春学期

■講義目的

この講義ではミクロ経済学について学ぶ。ミクロ経済学は、産業社会の中で資源配分がどのように行われているのか、あるいはないのかといった、メカニズムを明らかにすることを主たる目的にしている。限られた生産資源である労働や資本などをいかに効率的に生産にまわすのか（配分するのか）という問題を扱う。また、企業や産業を取り巻く社会問題についても経済学の発想で分析し、問題把握を行う。

■講義分類

グローバルビジネス

■到達目標

できるだけ現実の産業社会における経済現象に関心を持ち、それを分析するための枠組みとしての経済学を学び、その基本的な知識の修得をめざす。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

ビジネスの中で最低限必要な基礎的な数学的思考力を基に、課題解決に向けたプロセスを明確にすることが出来る。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義

[個人] ワークシート

[ペア] なし

[グループ] なし

[上記以外] なし

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

授業前には、前回の講義内容について十分に理解しておくこと。講義内容の復習と次回講義の準備には、1.5 時間以上の取組が必要です。

■授業の概要

- 第1講 需要と供給—需要と供給の関係について理解する
- 第2講 需要曲線の構造と消費者の行動—需要曲線と消費者の行動について理解する
- 第3講 費用曲線と企業の行動—費用曲線と企業の行動について理解する
- 第4講 企業の利潤最大化行動と供給曲線—企業の最適行動について理解する
- 第5講 消費者行動の理論—消費者行動について理解する
- 第6講 消費者行動理論の展開—様々な財について理解する
- 第7講 企業の生産関数と費用最小化行動—様々な生産関数を理解する
- 第8講 一般均衡と資源配分—一般均衡の概念を理解する
- 第9講 独占の理論—独占とは何かを理解する
- 第10講 独占競争の理論—独占競争とは何かを理解する
- 第11講 ゲームの理論—戦略的思考について理解する
- 第12講 市場の失敗Ⅰ—市場の失敗の事例を理解する
- 第13講 市場の失敗Ⅱ—市場の失敗の身近な事例について理解する
- 第14講 不確実性と経済現象—不確実性とは何かを理解する
- 第15講 まとめ—これまでの内容を復習する

■フィードバックの要領

レポートに対してコメントを記入して、フィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 授業の平常点と試験の得点の合計 100 点満点中 90 点以上
 評価 A (89 ~ 80 点) : 授業の平常点と試験の得点の合計 100 点満点中 80 点以上 89 点以下
 評価 B (79 ~ 70 点) : 授業の平常点と試験の得点の合計 100 点満点中 70 点以上 79 点以下
 評価 C (69 ~ 60 点) : 授業の平常点と試験の得点の合計 100 点満点中 60 点以上 69 点以下
 評価 F (59 点以下) : 授業の平常点と試験の得点の合計 100 点満点中 59 点以下

■評価方法

授業の平常点 (30%)、試験 (70%)。合計 100% で 100 点満点。

■留意点

出欠を確認する際に、本人の学生証が無い場合は、欠席扱いとする。

科目名	余暇マネジメント (Management of Leisure Life & Society)		
サブタイトル	文化やレジャーから社会を洞察する		
担当教員	杉田 文章	対象学年	1年生以上
		区分	秋学期

■講義目的

(1) 以下三点について知り、自分なりの知見を有することに資する ①「余暇」の概念、歴史、現状、意義 ②「余暇市場」の構造、現状、背景 ③「余暇製品」産業の使命、マーケティング方法の中核 (2)「余暇をマネジメントする」概念を理解することによって、問題発見・解決の切り口を与えること。

■講義分類

顧客理解／ビジネス創造

■到達目標

本講義における「余暇」「レジャー」の概念と意義について十分理解し、たとえばあるレジャー製品（財もしくはサービス）について、そのマーケティングの在り方について論じることができるようになること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

余暇の在り方と余暇をめぐる産業市場の在り方について知り、課題を洞察したうえで解決策を探る。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義

【個人】 T/Fテスト

【ペア】 なし

【グループ】 Buzz Group

【上記以外】 文献研究／課題への取り組み

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5時間以上）及び具体的な内容

①「余暇」「余暇市場産業」に関する諸情報、②今日の余暇市場動向や観光・レジャー政策の動向に関する情報を、講義内で示される諸資料等より、把握してもらいたい。(2～3時間程度)

■授業の概要

第1講 イントロダクション～余暇を考察することの意義～

第2講 「余暇」を定義する

第3講 社会の移り変わり余暇～ダニエル・ベルのモデルから考える～

第4講 新たなステージのレジャーを考える～ヨゼフ・ピーパーと「スコレー」概念を手掛かりに～

第5講 欲求充足と幸福

第6講 「あそび」とは何か

第7講 スポーツ現象に見る、「遊び」の制度化と商品化

第8講 レジャー市場の推移・現状と課題

第9講 レジャー産業の市場構造

第10講 プロスポーツの現状と課題

第11講 産業政策から見たレジャー産業の市場構造

第12講 産業政策から見たレジャー産業の市場構造

第13講 レジャー産業市場の課題

第14講 レジャー普及モデルを考える

第15講 レジャー産業における製品と製品政策

■フィードバックの要領

毎回の講義毎に受講者からのコメントを集め、これに対して公開返答を実施する。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : 余暇の社会・歴史的背景と余暇の在り方の関係を理解していること。

評価 A (89～80点) : 講義で扱われた諸理論について深く理解していること。

評価 B (79～70点) : 余暇の概念について理解できていること。

評価 C (69～60点) : 余暇をめぐる理論、現状について、最低限理解していること

評価 F (59点以下) : 上記のいずれも達成されていない場合、F評価とする。

■評価方法

期末試験6割、講義中のミニレポート等を含めた受講態度などの参加状況によって4割を評価することとする。

■留意点

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ライティング・スキル (Writing Skill)**サブタイトル** 知的な文章を自在に書く力をつける**担当教員** 樋口 裕一**対象学年** 1年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

ビジネスパーソンとして、社会人として、産業社会で活躍し、問題発見、問題解決、論理的思考、他者の説得をするために不可欠なライティングスキルを養成する

■講義分類

顧客理解／ビジネス環境理解／社会人力育成

■到達目標

社会に対しての関心と意欲を持ち、的確に思考し、判断し、それを他者に伝える力をつける。また、文章を書くスキルを身に着けることによって、自分の高い志を持てるようにする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

社会に対しての関心と意欲を持ち、的確な思考と判断を培い、それを他者に伝える力表現力と技能を身に着ける。それによって、自分の高い志を持てるようにする。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

演習

[個人] プレゼンテーション／ワークシート

[ペア] ペアワーク／ロールプレイ

[グループ] なし

[上記以外] 学生同士、自分の書いた文章を交換して添削し合う

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

2時間以上かけて、書籍、インターネットを用いて、予定されている授業内容について情報を整理する。

■授業の概要

- 第1講 オリエンテーション 文章の書き方の基本
- 第2講 第1回課題答案作成 (200字～300字程度の文章)
- 第3講 文法的に正しい文・文原稿用紙の使い方・間違いやすい表現
- 第4講 よい文章と悪い文章の違い 論理の展開
- 第5講 第2回課題答案作成 (300字程度の文章)
- 第6講 様々な文体への対応 (日常の文体、新聞の文体、ビジネス文体)
- 第7講 第3回課題 (600字程度の文章)
- 第8講 第3回課題解説 鋭い視点で論を展開する方法
- 第9講 鋭い視点で論を展開する方法・その2
- 第10講 文章を読んで論じる方法
- 第11講 第4回課題答案作成 (文章を読んで、それについて論じる)
- 第12講 第4回課題解説 グラフ・表の読みとり
- 第13講 リアリティのある文章の書き方
- 第14講 第5回課題答案作成 (エントリーシート)
- 第15講 第5回課題解説・これからの勉強法

■フィードバックの要領

提出した文書についてコメントを付してフィードバックを行なう。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上) : ほぼ全出席。全答案平均が A 相当以上 (書き直し、発言による加点を含める)
- 評価 A (89～80点) : 全答案平均が B 相当以上 (書き直し、発言による加点を含める)
- 評価 B (79～70点) : 全答案平均が C 相当以上 (書き直し、発言による加点を含める)
- 評価 C (69～60点) : 全答案平均が D 相当以上 (書き直し、発言による加点を含める)
- 評価 F (59点以下) : 全答案平均が D 未満 (書き直し、発言による加点を含める)

■評価方法

提出文章 (80 パーセント)、平常点 (20 パーセント)

■留意点

授業中の私語禁止。そのほか、飲食 (ただし飲みものの摂取は許す)・ガム・帽子着用 (宗教などの理由のある学生は許可する)・寝る姿勢を整えての居眠り・無断退出・イヤホンの着用・教員に対する暴言など、授業を害する行為についても禁止する。目に余るものは退出させ、欠席とみなす。

科目名 ライフ・デザイン (Life Design)**サブタイトル** クオリティ・オブ・ライフについて考える**担当教員** 梅澤 佳子**対象学年** 1年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

生活環境が整備され、日本人の平均寿命は80歳を超えるようになりました。さらに皆さんは人生100時代を前提にライフ・デザインを考えなければなりません。これまでと異なるライフ・デザインを描くために、少子化、高齢化、人口減少、グローバル化、産業構造の変化、ICT、科学技術の進歩を生活者の視点から学びます。そして、これからの生き方、社会のあり方に、一人ひとりが真剣に向き合い、考え、行動するための実践的知識の獲得を目指します。

■講義分類

ビジネス創造／社会人力育成／地域ビジネス

■到達目標

1. 社会学的なものの見方、考え方を理解すること。2. 暮らし、地域に興味と関心を向けることができるようになる。3. 暮らし、地域の課題をみつけ解決のためのデザインを考える習慣がつくこと。4. 自分自身のライフデザインを考える。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

生活全般に関する基礎的な知識を養い、グローバルな視点から社会現象の実態、現象の起こる原因に関係するメカニズムを解明するための手法を学びます。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義

- [個人] ワークシート
- [ペア] ペアワーク
- [グループ] PBL
- [上記以外] なし

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

事前に予習のための用語やポイントを説明しますので、予習しておいてください。講義後は、配布資料、ノートを元に必要な情報を自ら収集し深い学びを行ってください。(各 1.5 時間)

■授業の概要

- 第1講 ライフ・デザインってなに？
- 第2講 今、なぜ、ライフデザインが必要なの？
- 第3講 アルバイトから働くことについて考えてみよう
- 第4講 「これが当たり前」の働き方って？
- 第5講 ワーク・ライフ・バランスの国際比較
- 第6講 日本人のワーク・ライフ・バランスはどうなってる？
- 第7講 中間試験または課題の作成
- 第8講 生活文化を楽しみ、生活文化を継承する
- 第9講 戦後の暮らしとコミュニティ
- 第10講 共に考える、これからのライフデザイン①
- 第11講 協働型社会を考える、これからのライフデザイン②
- 第12講 優れたデザインの先事例調査①
- 第13講 優れたデザインの先事例調査②
- 第14講 講義のまとめ
- 第15講 授業内試験

■フィードバックの要領

講義内で提出されたミニ・レポートに対する回答等でフィードバックします。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 授業内容を十分に理解し、優れた意見を持っている。
- 評価 A (89 ~ 80 点) : 授業内容を理解し、自分の意見を持てるようになった。
- 評価 B (79 ~ 70 点) : 授業内容について理解している。
- 評価 C (69 ~ 60 点) : 不十分な点もあるが授業内容を理解している。
- 評価 F (59 点以下) : 著しく理解が不十分である。

■評価方法

提出物 (60%)、最終課題または試験 (40%)。絶対評価：多摩大学の評価基準に基づいて評価します。

■留意点

出席は評価のための前提条件です。欠席が3分の1を超えた場合、原則として単位を付与しません。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 Basic Office English I (Basic Office English I)**サブタイトル** 世界でそして地域で活躍するために必要な英語表現力を身に付ける**担当教員** 中村(そ)、永木**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

世界でそして地域で活躍するために必要なビジネス英語表現力を身に付け、志の実現に向かって主にビジネスの現場、オフィスで積極的に情報をやり取りし、いろいろな形のコミュニケーションに対応できるようにする。

■講義分類

ビジネス環境理解／社会人育成／グローバルビジネス

■到達目標

以下講義概要に述べられる学習項目について、英語でのコミュニケーションが取れるようにする。特に、留学や、国内外での研修、見学、社会的活動に最低限必要な英語表現を習得し、自分の考えやアイデアをいろいろな方法で社会に発信し、また同時に発信された他者の考えを正しく理解できるようになること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

地域でも、また国内、海外どこであっても自分の志を実現するためにそして、産業社会で発生する様々な問題を解決し、社会をよりよいものにするために、円滑に英語コミュニケーションを行えるようになること。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

演習

[個人] プレゼンテーション、ワークシート、T/Fテスト

[ペア] ペアワーク／相互教授法／ロールプレイ

[グループ] Buzz Group／KJ法

[上記以外] なし

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

下記の各週講義内容に関して配布される教材を1.5時間程度予習、復習し、そこに提示されている英語表現を覚えること。

■授業の概要

- 第1講 挨拶、アイスブレイキング、友人作り、スモールトークなど
- 第2講 オフィスやビジネス現場での自己紹介
- 第3講 自己紹介と他人紹介
- 第4講 会社、業務、商品紹介
- 第5講 電話のやりとり
- 第6講 電話での確認や依頼
- 第7講 その他の電話表現
- 第8講 これまでの総復習と中間テスト
- 第9講 英語メールの様式
- 第10講 メールでの確認、依頼
- 第11講 メールでのあいさつとお知らせ
- 第12講 アポイントメントを取る
- 第13講 日時や場所を決める
- 第14講 約束の変更やキャンセル 押さえておきたい経済用語
- 第15講 期末テスト

■フィードバックの要領

授業内小テスト、課題、レポート類については点数と必要な場合はコメントを付けて返却

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上) : 下記の配分で得点を付け、90点以上の場合
- 評価 A (89～80点) : 下記の配分で得点を付け、80点から89点の場合
- 評価 B (79～70点) : 下記の配分で得点を付け、70点から79点の場合
- 評価 C (69～60点) : 下記の配分で得点を付け、60点から69点の場合
- 評価 F (59点以下) : 下記の配分で得点を付け、59点以下の場合

■評価方法

平常点20%、授業内小テスト20%、宿題20%、中間テストおよび期末テスト40%

■留意点

科目名 Basic Office English II (Basic Office English II)**サブタイトル** 世界でそして地域で活躍するために必要な英語表現力を身に付ける**担当教員** 中村 (そ)、永木**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

世界でそして地域で活躍するために必要なビジネス英語表現力を身に付け、志の実現に向かって主にビジネスの現場、オフィスで積極的に情報をやり取りし、いろいろな形のコミュニケーションに対応できるようにする。

■講義分類

ビジネス環境理解／社会人育成／グローバルビジネス

■到達目標

地域でも、また国内、海外どこであっても自分の志を実現するためにそして、産業社会で発生する様々な問題を解決し、社会をよりよいものにするために、円滑に英語コミュニケーションを行えるようになること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

地域でも、また国内、海外どこであっても自分の志を実現するためにそして、産業社会で発生する様々な問題を解決し、社会をよりよいものにするために、円滑に英語コミュニケーションを行えるようになること。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

演習

[個人] プレゼンテーション、ワークシート、T/Fテスト

[ペア] ペアワーク／相互教授法／ロールプレイ

[グループ] Buzz Group/KJ法

[上記以外] なし

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

下記の各週講義内容に関して配布される教材を1.5時間程度予習、復習し、そこに提示されている英語表現を覚えること。

■授業の概要

第1講 挨拶、アイスブレイキング、友人作り、スモールトークなどその2

第2講 会議の準備

第3講 会議の進行

第4講 会議の進行およびまとめ

第5講 商品やサービスの説明

第6講 価格や納期の交渉

第7講 商談の成否に関する表現

第8講 これまでの総復習と中間テスト

第9講 クレームを伝える

第10講 クレームに対応する

第11講 OA機器のトラブル、その他のトラブル

第12講 求人についての問い合わせ

第13講 面接での質疑応答

第14講 会社の制度や人事情報 外国での採用事情

第15講 期末テスト

■フィードバックの要領

授業内小テスト、課題、レポート類については点数とコメントを付けて返却

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : 下記の配分で得点を付け、90点以上の場合

評価 A (89～80点) : 下記の配分で得点を付け、80点から89点の場合

評価 B (79～70点) : 下記の配分で得点を付け、70点から79点の場合

評価 C (69～60点) : 下記の配分で得点を付け、60点から69点の場合

評価 F (59点以下) : 下記の配分で得点を付け、59点以下の場合

■評価方法

平常点20%、授業内小テスト20%、宿題20%、中間テストおよび期末テスト40%

■留意点

相談や質問などは sonoko-n@tama.ac.jp にメールを送っていただければいつでも対応します。必要に応じてオフィスアワーなどによって直接お話しすることも可能です。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名

English Expression I (English Expression I) ※再履修者用

サブタイトル

自習型再履修専用クラス

担当教員

中村 その子

対象学年

2年生以上

区分

春・秋学期

■講義目的

この授業は教室では開講されず、別途掲示されるテキストを大学コンビニエンスストアで購入、自習して、各学期の期末試験期間内に実施される試験を受け、その点数によって単位が認定される形式です。最初は自己紹介、自由時間の過ごし方と好きなこと、自分の長所や短所、成功体験、失敗談などを語るころから始め、スモールトークや日常会話を円滑に行えるようにする。徐々に、アルバイトやボランティア活動、自分の住んでいる町の特徴などについて話す練習、ものごとの起源やプロセスを説明する練習に移り、英語力の社会的な幅を広げて行きたい。

■講義分類

社会力育成／グローバルビジネス

■到達目標

経営と情報に関係した様々な社会的活動に英語をどう活かしていくかを常に追求し、自分をとりまく情報を的確に処理しながら、自分の考えやアイデアを正しく伝えて、相手との効率的なコミュニケーションを図れるようにする。以下がこの授業のゴールとなる。客観的指標として TOEIC350 点程度の実力をつけることを目標とする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2 番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

地域でも、また国内、海外どこであっても自分の志を実現するためにそして、産業社会で発生する様々な問題を解決し、社会をよりよいものにするために、円滑に英語コミュニケーションを行えるようになること。

■授業形態 AL 手法 ※該当する項目のみ記載

講義

- [個人] 問題作成
- [ペア] ノートテイキング＝ペア
- [グループ] Buzz Group
- [上記以外] なし

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

指定されたテキストを学期を通して十分に自習し期末試験に備えること。各講義につき事前学習に 1.5 時間以上、事後学習に 1.5 時間、合計で 3 時間以上の学習が必要である。

■授業の概要

- 第1講 アイスブレイキング、自己紹介、自分を語る
- 第2講 キャンパスライフ、買い物、娯楽などの日常生活について語る
- 第3講 自分の住んでいる町やふるさとを語る
- 第4講 食生活や外食、レストランなどに関係する表現を学ぶ
- 第5講 職業にまつわる英語表現を学ぶ
- 第6講 留学に関連した英語表現を学ぶ
- 第7講 プレゼンテーション技術について学ぶ
- 第8講 体の調子や病院での会話を学ぶ
- 第9講 ここまで学習した事項の復習 1
- 第10講 ここまで学習した事項の復習 2
- 第11講 ここまで学習した事項の復習 3
- 第12講 ここまで学修した事項の復習 4
- 第13講 これまでの総復習
- 第14講 スクーリングおよび期末試験準備
- 第15講 スクーリングおよび期末試験準備

■フィードバックの要領

学期中のスクーリング時に学修アドバイスをする

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : テストの点数が 90 点以上
- 評価 A (89 ~ 80 点) : テストの点数が 80 点から 89 点
- 評価 B (79 ~ 70 点) : テストの点数が 70 点から 79 点
- 評価 C (69 ~ 60 点) : テストの点数が 60 点から 69 点
- 評価 F (59 点以下) : テストの点数が 59 点以下

■評価方法

テストの点数が 100%

■留意点

このクラスは、学生番号が 219... を含んでそれより以前の入学年度の学生番号を持っている学生だけが履修できません。基本は再履修クラスです。教室での授業は行われず、指定のテキストを購入して自習、期末試験期間内に実施される試験を受けて、その点数によって単位が認定されます。1 学期に 2 回程度 T-next に予告掲示をしてスクーリング（教室での学習相談）を行います。

科目名 English Expression II (English Expression II) ※再履修者用**サブタイトル** 自習型再履修専用クラス**担当教員** 中村 その子**対象学年** 2年生以上**区分** 春・秋学期**■講義目的**

この授業は教室では開講されず、別途掲示されるテキストを大学コンビニエンスストアで購入、自習して、各学期の期末試験期間内に実施される試験を受け、その点数によって単位が認定される形式です。最初は自己紹介、自由時間の過ごし方と好きなこと、自分の長所や短所、成功体験、失敗談などを語るころから始め、スモールトークや日常会話を円滑に行えるようにする。徐々に、アルバイトやボランティア活動、自分の住んでいる町の特徴などについて話す練習、ものごとの起源やプロセスを説明する練習に移り、英語力の社会的な幅を広げて行きたい。

■講義分類

社会力育成／グローバルビジネス

■到達目標

経営と情報に関係した様々な社会的活動に英語をどう活かしていくかを常に追求し、自分をとりまく情報を的確に処理しながら、自分の考えやアイデアを正しく伝えて、相手との効率的なコミュニケーションを図れるようにする。以下がこの授業のゴールとなる。客観的指標として TOEIC350 点程度の実力をつけることを目標とする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ① 最も身につけられる事項 ② 2 番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ③ ①・②で選択された事項の詳細

地域でも、また国内、海外どこであっても自分の志を実現するためにそして、産業社会で発生する様々な問題を解決し、社会をよりよいものにするために、円滑に英語コミュニケーションを行えるようになること。

■授業形態 AL 手法 ※該当する項目のみ記載

講義

- [個人] 問題作成
- [ペア] ノートテイキング＝ペア
- [グループ] Buzz Group
- [上記以外] なし

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

指定されたテキストを学期を通して十分に自習し期末試験に備えること。各講義につき事前学習に 1.5 時間以上、事後学習に 1.5 時間、合計で 3 時間以上の学習が必要である。

■授業の概要

- 第1講 パーティーに関連する表現やビジネスの場でのスモールトーク
- 第2講 ビジネスの場でのスモールトーク
- 第3講 映画やエンターテイメントに関連した表現
- 第4講 旅行、出張、レストラン、ホテルなどに関連した表現
- 第5講 娯楽産業、レジャー産業に関連した表現
- 第6講 ビジネスでの接待やオフィスでの会話表現、接客表現
- 第7講 プレゼンテーション技術について学ぶ。引き続きオフィスでの表現
- 第8講 オフィスでの表現と自分の生活や趣味に関する表現
- 第9講 ここまで学習した事項の復習 1
- 第10講 ここまで学習した事項の復習 2 アートや芸術、ビジネスパーソンとしての教養と素養
- 第11講 ここまで学習した事項の復習 3
- 第12講 ここまで学修した事項の復習 4 健康やスポーツについての表現
- 第13講 これまでの総復習 ニュース、社会問題について語る
- 第14講 スクーリングおよび期末試験準備
- 第15講 スクーリングおよび期末試験準備

■フィードバックの要領

学期中のスクーリング時に学修アドバイスをする

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : テストの点数が 90 点以上
- 評価 A (89 ~ 80 点) : テストの点数が 80 点から 89 点
- 評価 B (79 ~ 70 点) : テストの点数が 70 点から 79 点
- 評価 C (69 ~ 60 点) : テストの点数が 60 点から 69 点
- 評価 F (59 点以下) : テストの点数が 59 点以下

■評価方法

テストの点数が 100%

■留意点

このクラスは、学生番号が 219... を含んでそれより以前の入学年度学生番号を持っている学生だけが履修できません。基本は再履修クラスです。教室での授業は行われず、指定のテキストを購入して自習、期末試験期間内に実施される試験を受けて、その点数によって単位が認定されます。1 学期に 2 回程度 T-next に予告掲示をしてスクーリング (教室での学習相談) を行います。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 IT 活用法 II (Utilizing Method of IT II)**サブタイトル** リポジトリ管理システムを利用した協業**担当教員** 出原、彩藤**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

近年、情報技術スキルの証明には、公開リポジトリサービス上での活動が求められるようになってきた。本講義では、リポジトリ管理システムを利用したクラウド上でのチーム協業の演習を基盤として、情報技術を用いた新しいビジネス（ゲームなどを含むサービス全般）の発想と提案を行うことができるようになることを目的とする。本講義の到達点である、マーケティング視点に基づくものづくりの発想法と、リポジトリへの蓄積、および、チーム協業は、社会において大きな競争力になる。受講者の到達レベルに応じて、講義内容を変更することができる。

■講義分類

ビジネス ICT

■到達目標

新しい情報サービスについて、そこで使用されている情報技術が理解できる。また、新しい情報技術を用いて、新たなサービスが提案できる。その過程で、戦略的な発想方法を身につける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

情報技術を用いた新しいビジネス（ゲームなどを含むサービス全般）の発想と提案を行うことができるようになる。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義 / 演習

[個人] プレゼンテーション

[ペア] 相互教授法

[グループ] PBL

[上記以外] なし

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

各回に示す内容について、チームごとに事後学習 3 時間の議論を行い、記録する。（一部個人課題）

■授業の概要

- 第1講 ガイダンス・チーム決定
- 第2講 環境設定
- 第3講 クラウドを利用した共同作業
- 第4講 チーム Wiki の設置
- 第5講 チームウェブページの設置
- 第6講 サービスと要素技術
- 第7講 サービスと要素技術
- 第8講 制限要素発想法
- 第9講 要素制限法による独自サービスの考案
- 第10講 プレゼンテーション
- 第11講 ウェブ技術を利用したサービス
- 第12講 ウェブ技術を利用したサービス
- 第13講 サービス立案
- 第14講 ミニプレゼンテーション
- 第15講 プレゼンテーション

■フィードバックの要領

プレゼンテーションに対するコメント

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 数値評価で 90 点以上
- 評価 A (89 ~ 80 点) : 数値評価で 80 点以上 90 点未満
- 評価 B (79 ~ 70 点) : 数値評価で 70 点以上 80 点未満
- 評価 C (69 ~ 60 点) : 数値評価で 60 点以上 70 点未満
- 評価 F (59 点以下) : 数値評価で 60 点未満

■評価方法

欠席理由を問わず 3 分の 2 以上の出席を前提として、平常点 60 点、個人レポート 40 点で評価する。

■留意点

- ・第 1 回目の講義で全体のオリエンテーションを行うので必ず出席すること。特段の事情がある場合を除き、第 1 回講義に欠席した場合、受講を認めない。
- ・PC は必須である。PC を持参しない者の受講を、認めない。
- ・受講者の到達レベルに応じて、講義内容を変更することができる。

科目名 ITパスポート (IT Passport)**サブタイトル** ITパスポート試験対策を含む**担当教員** 小西 英行**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

国家試験である「ITパスポート試験」は、「ビジネスICT」の分野で「問題解決のための理論や方法」についての実践的知識を問うものであり、具体的には「ストラテジー系」分野と「マネジメント系」分野、そして「テクノロジー系」分野があります。本講義では、この「ITパスポート試験」を受験しようとする学生を対象に、合格に必要な知識を得ることを目的とします。

■講義分類

ビジネスマネジメント/ビジネスICT

■到達目標

本講義は、グローバル社会に対する理解を深めるために必要な、ビジネスICTに関する専門知識について、①専門用語についての定義や用例などを理解し、②具体例を挙げて説明出来ることを学修目標とします。そしてこれらの学修成果の定着を図るために、授業に対する「予習」「復習」を習慣化することを目標とします。そしてこれらの学修を通じて最終的には「ITパスポート試験」合格を目指します。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

「ビジネスICT」の分野で「問題解決のための理論や方法」についての実践的知識を習得する。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義/演習

[個人] プレゼンテーション/ワークシート

[ペア] ペアワーク

[グループ] なし

[上記以外] クリッカーによる問題演習

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

事前に配布する予習用サブノートを用いて、毎回1時間以上の予習が必要。さらに、授業終了時に配布する復習用ワークシートを用いて、毎回1時間以上の復習が必要。

■授業の概要

第1講 国家試験「ITパスポート試験」について

第2講 1-1 企業活動①

第3講 1-1 企業活動②

第4講 1-1 企業活動③

第5講 2-1 経営戦略マネジメント①

第6講 2-1 経営戦略マネジメント②

第7講 2-1 経営戦略マネジメント③

第8講 授業内中間試験

第9講 2-3 ビジネスインダストリ

第10講 3-1 システム戦略①

第11講 3-1 システム戦略②

第12講 8-1 コンピュータ構成要素

第13講 8-2 システム構成要素①

第14講 8-2 システム構成要素②

第15講 授業内期末試験

■フィードバックの要領

チャトルカードで毎回コメントバック。択一式期末試験で、解答公開による自己採点。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : ITパスポート試験シラバスに記載の用語について、具体例を挙げて詳細に説明できる。

評価 A (89~80点) : ITパスポート試験シラバスに記載の用語について、具体例を挙げて説明できる。

評価 B (79~70点) : ITパスポート試験シラバスに記載の用語について、詳細に説明できる。

評価 C (69~60点) : ITパスポート試験シラバスに記載の用語について、大まかに説明できる。

評価 F (59点以下) : ITパスポート試験シラバスに記載の用語について、ほとんど理解していない。

■評価方法

授業内期末試験(100%)ただし、予習・復習・発言等に応じて、ボーナスポイントを付加する。また、単位を取得するためには、出席率が3分の2以上であることが必要。

■留意点

①授業時に教科書及び、ノートパソコン又はタブレット等を使用するので、必ず持参してください。②授業毎に「予習」と「復習」の履行状況を確認しますので、毎回必ず行ってください。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 NPO・NGO論 (NPO・NGO Theory)**サブタイトル** ソーシャルセクター入門**担当教員** 松本 祐一**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**実務経験のある教員による授業****■講義目的**

社会的な問題の解決の主体である NPO や NGO (以下、2つの概念を合わせて便宜上 NPO と表記) などのソーシャルセクターが登場した歴史的背景、現代における存在意義、経営の特徴を学び、ソーシャルイノベーションを生み出す組織原理について理解する。

■講義分類

ビジネス環境理解/ビジネス創造/ビジネスマネジメント

■到達目標

NPO 特有の組織原理を理解すること

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

企業や行政とは違う NPO 独自の組織のあり方を理解する。

■授業形態 AL 手法 ※該当する項目のみ記載

講義

[個人] ワークシート

[ペア] ペアワーク

[グループ] なし

[上記以外] なし

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

最低 1.5 時間以上の興味のある NPO の事例の収集

■授業の概要

第1講 講義の目的と内容を共有する。(オリエンテーション)

第2講 NPO という組織を学ぶ意味を考える。

第3講 NPO がなぜ必要かを考える。

第4講 NPO がなぜ必要かを考える。第2回

第5講 NPO の組織的特色を理解する。

第6講 NPO と他の組織の違いを総括する。

第7講 NPO の成果とは何かを考える。

第8講 NPO に必要なマーケティング志向を理解する。

第9講 NPO マーケティングの枠組みとプロセスを理解する。

第10講 NPO の資源動員について考える。

第11講 NPO に関わる「人」について考える。

第12講 NPO の経営の特徴について、総括する。

第13講 社会的事業の開発を考える。

第14講 社会的事業の開発を考える。第2回目。

第15講 授業のふりかえりを行う。

■フィードバックの要領

2回のセッションレポートについて、中間的な評価をフィードバックする。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : ワークシートを全て提出し内容を理解している。セッションレポートが 2 回とも A

評価 A (89 ~ 80 点) : ワークシートを全て提出し内容を理解。セッションレポートのうち 2 回とも B 以上。

評価 B (79 ~ 70 点) : ワークシートを 8 割以上提出し、内容を理解。セッションレポートのうち、1 回以上 B

評価 C (69 ~ 60 点) : ワークシートを 6 割以上提出し、内容をある程度理解。

評価 F (59 点以下) : ワークシートの提出が 5 割以下。またはセッションレポートが 2 回とも D

■評価方法

授業中提出のワークシート(ミニテスト・セッションレポート) 40% 中間レポート 20% 最終レポート 40%

■留意点

① 10 分以上の遅刻は欠席として扱う。② 中間レポートと最終レポートの提出が単位修得の最低限の条件で、授業内で 2 回行うセッションレポートで 2 回とも D を取った場合、単位修得できない。

科目名 Practical English Conversation I (Practical English Conversation I)**サブタイトル** 世界でそして地域で活躍するために必要な英語表現力を身に付ける**担当教員** 中村 その子**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

世界でそして地域で活躍するために必要な英語表現力を身に付け、志の実現に向かって社会に自分のアイデアや考え、意見を英語で積極的に発信し、いろいろな形のコミュニケーションを取れるようにする。

■講義分類

社会人力育成／グローバルビジネス

■到達目標

以下講義概要に述べられる学習項目について、英語でのコミュニケーションが取れるようにする。特に、留学や、国内外での研修、見学、社会的活動に最低限必要な英語表現を習得し、自分の考えやアイデアをいろいろな方法で社会に発信し、また同時に発信された他者の考えを正しく理解できるようになること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

地域でも、また国内、海外どこであっても自分の志を実現するためにそして、産業社会で発生する様々な問題を解決し、社会をよりよいものにするために、円滑に英語コミュニケーションを行えるようになること。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

演習

[個人] プレゼンテーション／ワークシート／問題作成

[ペア] ヘアワーク／相互教授法／ロールプレイ

[グループ] PBL／Buzz Group／KJ法

[上記以外] なし

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

下記の各週講義内容に関して配布される教材を予習、復習し、そこに提示されている英語表現を覚えること。各講義につき事前学習に 1.5 時間以上、事後学習に 1.5 時間、合計で 3 時間以上の学習が必要である。

■授業の概要

- 第1講 挨拶、アイスブレイキング、友人作り、スモールトークなどその1
- 第2講 電話での会話やPC (SNS) に関連した表現、アポイントメントに関連した表現その1
- 第3講 家族や結婚、自分の生活や趣味、ショッピングやデート、スポーツその1
- 第4講 アニメーション、映画やテレビ番組、メディア関連その1
- 第5講 人物、製品、サービスなどを魅力的に描写その1
- 第6講 食品販売、レストラン、料理など、食に関連した英語表現その1
- 第7講 比較対照、提案、オファー、選択決定、意見やアドバイスのやりとりその1
- 第8講 自由時間、週末の楽しみ方、趣味、旅行、特技その1
- 第9講 的確な指示の与え方と説明の仕方その1
- 第10講 アルバイト、インターンシップ、就職活動、ボランティア活動などについてその1
- 第11講 因果関係、同意不同意、将来計画、予想予測、論理思考その1
- 第12講 ファッション、音楽、および音楽関連産業に関する英語表現その1
- 第13講 地球にやさしい英語表現 = 環境問題その1
- 第14講 期末スピーキングテストと最終プレゼンテーション 世界に発信すべき日本の伝統と文化
- 第15講 期末ライティングテスト

■フィードバックの要領

授業内小テスト、課題、レポート類については点数と必要な場合はコメントを付けて返却

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 下記の配分で得点を付け、90 点以上の場合
- 評価 A (89 ~ 80 点) : 下記の配分で得点を付け、80 点から 89 点の場合
- 評価 B (79 ~ 70 点) : 下記の配分で得点を付け、70 点から 79 点の場合
- 評価 C (69 ~ 60 点) : 下記の配分で得点を付け、60 点から 69 点の場合
- 評価 F (59 点以下) : 下記の配分で得点を付け、59 点以下の場合

■評価方法

平常点 20%、授業内小テスト 20%、宿題 20%、中間テストおよび期末テスト 40%

■留意点

相談や質問などは sonoko-n@tama.ac.jp にメールを送っていただければいつでも対応します。必要に応じてオフィスアワーなどに会って直接お話しすることも可能です。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名

Practical English Conversation II (Practical English Conversation II)

サブタイトル

世界でそして地域で活躍するために必要な英語表現力を身に付ける

担当教員

中村 その子

対象学年

2年生以上

区分

秋学期

■講義目的

世界でそして地域で活躍するために必要な英語表現力を身に付け、志の実現に向かって社会に自分のアイデアや考え、意見を英語で積極的に発信し、いろいろな形のコミュニケーションを取れるようにする。

■講義分類

社会人力育成／グローバルビジネス

■到達目標

以下講義概要に述べられる学習項目について、英語でのコミュニケーションが取れるようにする。特に、留学や、国内外での研修、見学、社会的活動に最低限必要な英語表現を習得し、自分の考えやアイデアをいろいろな方法で社会に発信し、また同時に発信された他者の考えを正しく理解できるようになること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

地域でも、また国内、海外どこであっても自分の志を実現するためにそして、産業社会で発生する様々な問題を解決し、社会をよりよいものにするために、円滑に英語コミュニケーションを行えるようになること。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

演習

[個人] プレゼンテーション／ワークシート／問題作成

[ペア] ヘアワーク／相互教授法／ロールプレイ

[グループ] PBL／Buzz Group／KJ法

[上記以外] なし

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

下記の各週講義内容に関して配布される教材を予習、復習し、そこに提示されている英語表現を覚えること。各講義につき事前学習に 1.5 時間以上、事後学習に 1.5 時間、合計で 3 時間以上の学習が必要である。

■授業の概要

- 第1講 挨拶、アイスブレイキング、友人作り、スモールトークなどその2
- 第2講 電話での会話やPC (SNS) に関連した表現、アポイントメントに関連した表現その2
- 第3講 家族や結婚、自分の生活や趣味、ショッピングやデート、スポーツその2
- 第4講 アニメーション、映画やテレビ番組、メディア関連その2
- 第5講 人物、製品、サービス内容などを魅力的に描写その2
- 第6講 食品販売、レストラン、料理など、食に関連した英語表現その2
- 第7講 比較対照、提案、オファー、選択決定、意見やアドバイスのやりとりその2
- 第8講 自由時間、週末の楽しみ方、趣味、旅行、特技その2
- 第9講 的確な指示の与え方と説明の仕方その2
- 第10講 アルバイト、インターンシップ、就職活動、ボランティア活動などについてその2
- 第11講 因果関係、同意不同意、将来計画、予想予測、論理思考その2
- 第12講 ファッション、音楽、および音楽関連産業に関する英語表現その2
- 第13講 地球にやさしい英語表現 = 環境問題その2
- 第14講 期末スピーキングテストと最終プレゼンテーション 世界に発信すべき日本の伝統と文化
- 第15講 期末ライティングテスト

■フィードバックの要領

授業内小テスト、課題、レポート類については点数とコメントを付けて返却

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 下記の配分で得点を付け、90 点以上の場合
- 評価 A (89 ~ 80 点) : 下記の配分で得点を付け、80 点から 89 点の場合
- 評価 B (79 ~ 70 点) : 下記の配分で得点を付け、70 点から 79 点の場合
- 評価 C (69 ~ 60 点) : 下記の配分で得点を付け、60 点から 69 点の場合
- 評価 F (59 点以下) : 下記の配分で得点を付け、59 点以下の場合

■評価方法

平常点 20%、授業内小テスト 20%、宿題 20%、中間テストおよび期末テスト 40%

■留意点

相談や質問などは sonoko-n@tama.ac.jp にメールを送っていただければいつでも対応します。必要に応じてオフィスアワーなどに会って直接お話しすることも可能です。

科目名 TOEIC I (TOEIC I)**サブタイトル** 特に英語検定試験受験を必要とする海外活動のために**担当教員** 石川 晴子**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

English Expression と並行してまたはその後、英語力を継続的に高め、TOEIC の点数アップをめざす学生のための授業である。英語の総合的な力が上がれば TOEIC の点数も、もちろん上がって行くはずであるが、特徴のある能力資格試験なので、どのような傾向の問題がどんな形で出題されるのか、といった予備知識や技術的な訓練、慣れも大切な要素となる。この講義では TOEIC の得点を少なくとも現在の自分の点数から 100 点は上げることをめざし、リスニング・リーディングの両セクションで確実に点数を取ることに加えて、語彙、文法、読解力の増強をはかる。ただ、TOEIC の点数を上げるだけが英語を学ぶ目的ではないので、単なるノウハウに終わらせることなく、最後には、TOEIC の勉強をしたことが一人一人の英語コミュニケーション能力を総合的に高める結果につなげたい。

■講義分類

顧客理解／社会人力育成／グローバルビジネス

■到達目標

授業履修前の TOEIC 得点より 100 点アップした実力をつける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2 番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

TOEIC に必要な英語力と受験スキルを身に着ける。

■授業形態 AL 手法 ※該当する項目のみ記載

講義／演習

- [個人] ワークシート
- [ペア] ペアワーク
- [グループ] なし
- [上記以外] なし

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

TOEIC 受験へ向けての準備 (各 1.5 時間)

■授業の概要

- 第1講 授業の進め方と TOEIC の概要について
- 第2講 TOEIC の各パートの概要、出題形式、傾向について
- 第3講 Part 1 演習：写真問題 人物の動作と状態
- 第4講 Part 1 演習：物の状態と位置
- 第5講 Part 2 演習：疑問詞を使った疑問文
- 第6講 Part 2 演習：基本構文 (依頼／提案・勧誘／申し出) と応答の決まり文句
- 第7講 Part 2 演習：Yes No 疑問文
- 第8講 Part 5 演習：品詞問題
- 第9講 Part 5 演習：動詞
- 第10講 Part 5 演習：代名詞・関係代名詞
- 第11講 Part 5 演習：接続詞・前置詞
- 第12講 Part 3 演習：日常場面での会話
- 第13講 Part 3 演習：電話での会話
- 第14講 期末試験対策
- 第15講 期末試験および総括

■フィードバックの要領

課題・試験等に対して行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上)：評価方法により計算された総合点が 90% 以上の場合
- 評価 A (89～80 点)：評価方法により計算された総合点が 80～89% 以上の場合
- 評価 B (79～70 点)：評価方法により計算された総合点が 70～79% の場合
- 評価 C (69～60 点)：評価方法により計算された総合点が 60～69% の場合
- 評価 F (59 点以下)：評価方法により計算された総合点が 59% 以下の場合

■評価方法

平常点 20%、授業内活動 (小テスト、課題、宿題含む) 40%、授業内試験 40%

■留意点

①事前履修科目について：【2011～2013 年度入学生適用】同一言語にて 4 単位 (English Expression I と II、中国語 I と II、韓国語 I と II、もしくは IT 活用法 I と II) を修得していること。【2014 年度以降入学生適用】同一言語にこだわらず D 区分 4 単位を修得していること。②履修定員について：本科目は原則 30 人の人数制限がある。初回の授業の出席者の履修を優先する。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 TOEIC II (TOEIC II)**サブタイトル** 特に英語検定試験受験を必要とする海外活動のために**担当教員** 石川 晴子**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

English Expression と並行してまたはその後、英語力を継続的に高め、TOEIC の点数アップをめざす学生のための授業である。英語の総合的な力が上がれば TOEIC の点数も、もちろん上がって行くはずであるが、特徴のある能力資格試験なので、どのような傾向の問題がどんな形で出題されるのか、といった予備知識や技術的な訓練、慣れも大切な要素となる。この講義では TOEIC の得点を少なくとも現在の自分の点数から 100 点は上げることをめざし、リスニング・リーディングの両セクションで確実に点数を取ることに加えて、語彙、文法、読解力の増強をはかる。ただ、TOEIC の点数を上げるだけが英語を学ぶ目的ではないので、単なるノウハウに終わらせることなく、最後には、TOEIC の勉強をしたことが一人一人の英語コミュニケーション能力を総合的に高める結果につなげたい。

■講義分類

顧客理解／社会力育成／グローバルビジネス

■到達目標

授業履修前の TOEIC 得点より 100 点アップした実力をつける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2 番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

TOEIC に必要な英語力と受験スキルを身に着ける。

■授業形態 AL 手法 ※該当する項目のみ記載

講義／演習

- [個人] ワークシート
- [ペア] ペアワーク
- [グループ] なし
- [上記以外] なし

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

TOEIC 受験へ向けての準備（各 1.5 時間）

■授業の概要

- 第1講 授業の進め方と TOEIC の概要について
- 第2講 TOEIC の各パートの概要、出題形式、傾向について
- 第3講 Part 3 演習：オフィスでの会話①
- 第4講 Part 3 演習：オフィスでの会話②
- 第5講 Part 4 演習：アナウンス・ツアー
- 第6講 Part 4 演習：ラジオ放送・宣伝
- 第7講 Part 4 演習：留守番電話
- 第8講 Part 4 演習：トーク・スピーチ・会議の一部
- 第9講 Part 7 演習：表・用紙
- 第10講 Part 7 演習：広告
- 第11講 Part 7 演習：チャット
- 第12講 Part 7 演習：手紙・Eメール
- 第13講 Part 7 演習：ダブルパッセージ・トリプルパッセージ
- 第14講 期末試験対策
- 第15講 期末試験および総括

■フィードバックの要領

課題・試験等に対して行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上)：評価方法により計算された総合点が 90% 以上の場合
- 評価 A (89 ～ 80 点)：評価方法により計算された総合点が 80 ～ 89% 以上の場合
- 評価 B (79 ～ 70 点)：評価方法により計算された総合点が 70 ～ 79% の場合
- 評価 C (69 ～ 60 点)：評価方法により計算された総合点が 60 ～ 69% の場合
- 評価 F (59 点以下)：評価方法により計算された総合点が 59% 以下の場合

■評価方法

平常点 20%、授業内活動（小テスト、課題、宿題含む）40%、授業内試験 40%

■留意点

①事前履修科目について：【2011～2013 年度入学生適用】同一言語にて 4 単位（English Expression I と II、中国語 I と II、韓国語 I と II、もしくは IT 活用法 I と II）を修得していること。【2014 年度以降入学生適用】同一言語にこだわらず D 区分 4 単位を修得していること。②履修定員について：本科目は原則 30 人の人数制限がある。初回の授業の出席者の履修を優先する。

科目名 Webデザイン I (Web Design I)**サブタイトル** ソースコード (HTML、CSS) を用いてホームページを作成する**担当教員** 良峯 徳和**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

この授業では、ウェブサイト（ホームページ）の構築、登録、更新を行うために必要な基本的な概念、技術の習得を目指す。インターネットが始まった当初から今日に至るまでのウェブサイトのデザインおよびその技術的変遷について学ぶと同時に、「ハイパーテキスト」という概念がもたらしたインターネット上の情報を構造的かつ動的に表現するための理論的な方法論について学習する。具体的には、HTML、CSS（スタイルシート）といったウェブページ構築に必要な基本的な言語および具体的手法等を、実習を通じて習得する。

■講義分類

ビジネス創造/ビジネス ICT

■到達目標

① HTML および CSS を用いて、ウェブページを作成・編集するための知識、スキルの習得 ・ウェブページのソースファイルの意味や機能の理解、把握 ②ウェブページを構成するさまざまなファイルを、サーバー側の要求に合わせて、アップロードしたり、アップデートする方法の習得③ウェブデザインに関するさまざまな概念や知識の習得

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ③ ①・②で選択された事項の詳細

HTML、CSS を用いてウェブページを作成・編集するための基本知識を習得し、社会でウェブページが果たしているさまざまな役割とその重要性について理解する。

■授業形態 AL 手法 ※該当する項目のみ記載

講義

[個人] T/F テスト

[ペア] なし

[グループ] なし

[上記以外] 個人対象の4択テスト、Web ページ作成など

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上） 及び具体的な内容

毎回の授業に先がけテキストに記載してある練習問題を行うこと。（この作業に 1.5 時間以上必要）授業の開始時に毎回前回の授業の内容を確認するための小テストを行う。その準備として 1.5 時間以上の復習を行うこと。

■授業の概要

- 第1講 インターネットの歴史、WWW の概念
- 第2講 Web ページのソースファイル; フォントとフォーマットのための HTML タグ
- 第3講 画像表示; ハイパーリンク
- 第4講 表の作成; デザインテーブル
- 第5講 フレームを使ったホームページ
- 第6講 リスト、フォーム、ボタン
- 第7講 HTML 全般の復習と練習問題
- 第8講 CSS の基本的文法; ホームページの背景を設定、画像表示
- 第9講 CSS によるテキストの設定、各種テキストスペースの設定; フォントの設定
- 第10講 アプリケーションを使ってスタイルシートを設定する方法; ボーダースタイルの設定
- 第11講 マージン、パディングの設定; イメージフロート
- 第12講 CSS 疑似クラス
- 第13講 CSS 全般の復習と練習問題
- 第14講 オリジナルホームページの作成
- 第15講 オリジナルホームページの作成、アップロード

■フィードバックの要領

提出された課題に対して、修正点やコメントを記入してフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 講義内容を十分に理解し、目的に応じて学んだ内容を応用、発展させることができる。
- 評価 A (89 ~ 80 点) : 講義内容を理解し、目的に応じて学んだ内容をある程度柔軟に活用することができる。
- 評価 B (79 ~ 70 点) : 講義内容をほぼ理解し、目的に応じて学んだ内容をある程度活用することができる。
- 評価 C (69 ~ 60 点) : 講義内容の基本的事柄を理解し、簡単なことであれば、応用ができる。
- 評価 F (59 点以下) : 講義内容について基本的な知識も理解も有していない。

■評価方法

課題提出 : 40%、小テスト : 40%、学期末課題 : 20%。ただし、授業参加は全体の 2/3 以上、課題提出および小テストも全体の 2/3 以上を単位取得のための最低条件とする。

■留意点

①本授業は Web デザイン II を履修する際の必須要件となっている。Web デザイン II も継続的に履修したい学生は必ず本授業を履修すること。②毎週の課題提出および小テスト正解率が全体で 2/3 を越えない学生、出席が全体の 2/3 に満たない学生は、単位を取得することができない。③就職活動に伴う欠席については活動していたという証明書がある場合に限り、これを正当な理由として考慮する。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 WebデザインII (Web Design II)**サブタイトル** javascriptを学んで、動的、インタラクティブなWebページをデザインする**担当教員** 良峯 徳和**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

この授業は、HTMLやCSSの基本をマスターした学生を対象に、より高度な表現力、よりインタラクティブなコミュニケーションを可能とするWebページ制作技術の習得を目的とする。具体的には、HTML、CSSの基礎に加えて、javascriptと呼ばれるクライアントサイドのWebプログラミングの技法をWebページに組み込むための基礎知識ならびに制作技術を学ぶ。

■講義分類

ビジネス創造/ビジネスICT

■到達目標

①プログラミングの基本となるアルゴリズム、構文ルールを理解・習得し、プログラムを構築する基礎能力を身に着ける。②Webデザインに有効なさまざまなメソッドの使い方を理解・習得し、必要に応じて使いこなす技術力を身に着ける。③Webのユーザビリティやアクセシビリティについての理解を深めるとともに、著作権への配慮やセキュリティの問題についても関心を持てるようにする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

自分が意図するWeb上の表現内容を読み手が見やすく、アクセスしやすく、プログラミング技術を使って実現する技能を養う

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載**講義**

[個人] T/Fテスト

[ペア] なし

[グループ] なし

[上記以外] 個人対象の四択テスト、Webページ作成

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

毎回の授業に先がけテキストに記載してある練習問題を行うこと。(この作業に1.5時間以上必要) 授業の開始時に毎回回の授業の内容を確認するための小テストを行う。その準備として1.5時間以上の復習を行うこと。

■授業の概要

- 第1講 javascriptとは何か；javascriptはWebの世界でどのように利用されているか。
- 第2講 javascriptの基本構文1
- 第3講 javascriptの基本構文2
- 第4講 javascriptの基本構文3
- 第5講 ポップアップウインドウを使ったプログラミング技法を習得。
- 第6講 ループ(繰り返し)処理を使って、作業を大量かつ高速に行わせるプログラミングの技法
- 第7講 ループ(繰り返し)処理を具体的な課題に応用
- 第8講 イベント処理を伴うダイナミックWebページの作成方法
- 第9講 文字列オブジェクトを対象としたさまざまな操作や処理
- 第10講 日時に関するオブジェクトや行列を対象とした操作や処理
- 第11講 行列(array)や数オブジェクトを対象としたさまざまな操作や処理
- 第12講 HTML要素をオブジェクトとしたさまざまな操作や処理
- 第13講 最終課題作成実習
- 第14講 最終課題作成実習
- 第15講 最終課題作成実習

■フィードバックの要領

提出された課題に対して、修正点やコメントを記入することでフィードバックを行う。

■評価基準

評価A+ (90点以上)：講義内容を十分に理解し、目的に応じて学んだ内容を応用、発展させることができる。
 評価A (89～80点)：講義内容を理解し、目的に応じて学んだ内容をある程度柔軟に応用することができる。
 評価B (79～70点)：講義内容をほぼ理解し、目的に応じて学んだ内容をある程度応用することができる。
 評価C (69～60点)：講義内容の基本的事柄を理解し、簡単なことであれば、応用ができる。
 評価F (59点以下)：講義内容について基本的な知識も理解も有していない。

■評価方法

課題提出：40%、小テスト：40%、学期末課題：20%。ただし、授業参加、課題提出、小テストのいずれにおいても全体の2/3以上を単位取得のための最低条件とする。

■留意点

小テストは毎回の授業の開始時に実施するため、遅刻・欠席の場合は受験できない。忌引き、就職の面接試験、インターンシップなどの理由で欠席した場合のみ、該当小テスト後の1週間以内に限り、追試を受けることができる。詳細については、最初の授業で説明する。

科目名 アドバンスド・ライティング・スキル (Advanced Writing Skill)**サブタイトル** 文章の達人になる!**担当教員** 樋口 裕一**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

産業社会で活躍し、問題発見、問題解決、論理的思考、他者の説得をするためのライティングスキルをマスターして文章の達人になることをめざす。

■講義分類

顧客理解／ビジネス環境理解／社会人育成

■到達目標

社会に対しての関心と意欲を持ち、的確に思考し、判断し、それを他者に伝える力をつける。また、文章を書くスキルを身に着けることによって、自分の高い志を持てるようにする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP5 高い志

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

社会に対しての関心と意欲を持ち、的確な思考と判断を培い、それを他者に伝える力表現力と技能を身に着ける。それによって、自分の高い志を持てるようにする。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

演習

[個人] プレゼンテーション／ワークシート

[ペア] ペアワーク／相互教授法／ロールプレイ

[グループ] なし

[上記以外] 学生同士、自分の書いた文章を交換して添削し合う

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

2時間以上かけて、書籍、インターネットを用いて、予定されている授業内容について情報を整理する。

■授業の概要

- 第1講 オリエンテーション 論理的文章の書き方の基礎を復習
- 第2講 第1回課題答案作成 (600字～800字の文章)
- 第3講 第1回課題解説 論を深めるテクニック
- 第4講 文章について論じるテクニック
- 第5講 第2回課題答案作成 (文章について800字程度で論じる)
- 第6講 文章を正確に読み取るテクニック
- 第7講 説得力を高めるテクニック
- 第8講 第3回課題 (エッセイ)
- 第9講 魅力的な文章を書くテクニック
- 第10講 リアリティを作り出すテクニック
- 第11講 第4回課題答案作成 (エッセイ)
- 第12講 文章にメリハリをつけるテクニック
- 第13講 引き締まった文体にするテクニック
- 第14講 第5回課題答案作成 (自己PR・レポート・宣伝文)
- 第15講 第5回課題解説・これからの勉強法

■フィードバックの要領

提出した文書についてコメントを付してフィードバックを行なう。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上) : 全答案平均が A 相当以上 (書き直し、発言による加点を含める)
- 評価 A (89～80点) : 全答案平均が B 相当以上 (書き直し、発言による加点を含める)
- 評価 B (79～70点) : 全答案平均が C 相当以上 (書き直し、発言による加点を含める)
- 評価 C (69～60点) : 10回以上出席。全答案平均が D 相当以上 (書き直し、発言による加点を含める)
- 評価 F (59点以下) : 全答案平均が D 未満 (書き直し、発言による加点を含める)

■評価方法

提出文章 (80パーセント)、平常点 (20パーセント)

■留意点

授業中の私語禁止。そのほか、飲食 (ただし飲みものの摂取は許す)・ガム・帽子着用 (宗教などの理由のある学生は許可する)・寝る姿勢を整えての居眠り・無断退出・イヤホンの着用・教員に対する暴言など、授業を害する行為についても禁止する。目に余るものは退出させ、欠席とみなす。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 アメリカ経済論 (America Economy)

サブタイトル トランプ政権の経済政策の内容を把握する

担当教員 北川 隆文

対象学年 2 年生以上

区分 春学期

実務経験のある教員による授業

■講義目的

本講義の目的は、アメリカ政府が毎年公表する大統領経済報告 (ERP) と日本政府が毎年公表する「世界経済の潮流」(内閣府) 及び「通商白書」(経済産業省) を通じて現在のトランプ政権の経済政策及びその意図を把握することにある。(いずれも 2019 年刊行版) 本講義では、これらの政府観光資料を読み解くために必要な基礎知識の習得から始める。講義前半では、高校までに習得してきたアメリカの歴史、地理、文化に関する内容を復習した上で、現在のアメリカの政治・経済の概況を確認する。講義公判では、政府観光資料にて詳細に分析されているトランプ政権の経済政策の政策意図及びその背景について、分かりやすく解説する。本講義の最終目標は、最新のアメリカ経済のニュースの内容を理解し、独力で最前線事例にふれられるようになること及びグローバルビジネスに不可欠なアメリカ経済に関する情報を修得することである。

■講義分類

ビジネス環境理解/社会人力育成/グローバルビジネス

■到達目標

①アメリカをより深く理解するための基礎知識の習得 ②日米両国政府が刊行する経済関係資料を通じて、アメリカ経済に関連する最前線事例に触れ、課題発見のための素地を養う ③トランプ政権の経済政策の内容及び政策意図を理解する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ① 最も身につけられる事項 ② 2 番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ③ ①・②で選択された事項の詳細

DP1: 政府刊行資料を十分に読み解くために必要な基礎知識 (歴史、地理、文化、政治、経済) を習得する。
DP2: 映像資料等により最前線事例にふれることにより、課題の発見、問題解決のための場を提供する。

■授業形態 AL 手法 ※該当する項目のみ記載

講義

[個人] プレゼンテーション/問題作成

[ペア] なし

[グループ] なし

[上記以外] なし

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

(予習) 政府刊行資料の通読、サマリーの通読も可。(復習) 配布資料や講義ノートを使った復習 (1.5 時間)

■授業の概要

- 第1講 イントロダクション
- 第2講 アメリカ経済を知るための基礎知識 (1)
- 第3講 アメリカ経済を知るための基礎知識 (2)
- 第4講 アメリカ経済を知るための基礎知識 (3)
- 第5講 アメリカ経済を知るための基礎知識 (4)
- 第6講 世界経済の潮流から見たアメリカ経済 (1)
- 第7講 世界経済の潮流から見たアメリカ経済 (2)
- 第8講 世界経済の潮流から見たアメリカ経済 (3)
- 第9講 トランプ政権の経済政策 (1)
- 第10講 トランプ政権の経済政策 (2)
- 第11講 トランプ政権の経済政策 (3)
- 第12講 トランプ政権の経済政策 (4)
- 第13講 米中貿易摩擦 (1)
- 第14講 米中貿易摩擦 (2)
- 第15講 米中貿易摩擦 (3)

■フィードバックの要領

定期試験では知識を問う問題を出题するため、原則フィードバックは行わない。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 評価方法配分の要素を合算した 100% を 100 点に換算し、90 ~ 100 点
評価 A (89 ~ 80 点) : 評価方法配分の要素を合算した 100% を 100 点に換算し、80 ~ 89 点
評価 B (79 ~ 70 点) : 評価方法配分の要素を合算した 100% を 100 点に換算し、70 ~ 79 点
評価 C (69 ~ 60 点) : 評価方法配分の要素を合算した 100% を 100 点に換算し、60 ~ 69 点
評価 F (59 点以下) : 評価方法配分の要素を合算した 100% を 100 点に換算し、59 点以下

■評価方法

定期試験 (70%)、平常点 (授業内の課題の取り組みなど) (30%)

■留意点

① 出欠確認を兼ねた課題・小テストにきちんと対応すること、講義中の携帯端末の使用禁止を受講の条件とする。② 課題への対応姿勢を基に加点評価・減点評価を行う。

科目名 アントレプレナーシップ論 (Entrepreneurship)**サブタイトル** 立志起業家論**担当教員** 趙 佑嶺**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

将来にビジネスを起こしたいと考えている学生がその実践に生かせる手がかりを学ぶことを科目の目的とする。この場合の「手がかり」とは、起業家に必要な最低限の「初歩的知識」すなわち、ビジネス・プラン、戦略、組織、マーケティング等のことであり、さらにはビジネスを立ち上げようという「志」、「やる気、思い」である。本講義においては知識以上に「志」、「やる気、思い」は重要なキーワードである。この授業では、理論を中心とした部分と共に志・実践に役立つ部分を強化している。趙が講義した内容と対応するかたちで、外部講師として本学に招いたベンチャー業界の実務家（産業社会で活躍し名声を得ている起業家、インキュベーター、メンター）は、起業経営の現実と最前線事例のダイナミクスさを学生諸君に感じさせるであろう。将来何をしたいのか漠然としている学生にとっても実務家の体験談を交えた講義は志・キャリア設計の参考のうえでも有意義であると思われる。

■講義分類

ビジネス創造／ビジネスマネジメント／社会人力育成

■到達目標

①ビジネスの立ち上げとビジネスプラン作成に必要な知識習得、②起業経営特有の戦略、組織、ファイナンス、マーケティングを理解する、③自分にとって経営（学）を勉強する意味を含む志・人生設計及び問題解決を考えさせるきっかけづくり。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP5 高い志 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ③ ①・②で選択された事項の詳細

ベンチャー企業を巡る社会問題に関連する経営環境と問題解決への手がかりと関心を理論的に理解させ、先進的な問題解決に関わる実務者の講演を通じて、社会変革に関与していこうという学生の高い志の確立につなげる。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義

【個人】 ワークシート
【ペア】 なし
【グループ】 なし
【上記以外】 なし

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

配布資料には翌週講義回の内容が記載しており、講義終了間際に教員が示す事前学習ポイントを中心に、それらを授業前に読んで上で（各 1.5 時間以上）当該回の講義に臨み、授業後には WORD を用いてレポートを提出する

■授業の概要

- 第1講 ベンチャー企業とは何か、アントレプレナーシップとは何か
- 第2講 個人事業と会社設立における手順とルール
- 第3講 起業家としての志と勇気ある生き方（外部講師講演）
- 第4講 世界各地域の地域振興の事例とイノベーションの関係
- 第5講 ベンチャー企業経営論のフレームワーク
- 第6講 インキュベーター事業経験からみた成功する起業家、失敗する起業家（外部講師講演）
- 第7講 事業機会の発見・評価とビジネスモデル構築
- 第8講 ベンチャー企業の組織のマネジメント
- 第9講 ベンチャー企業の新価値創出と組織のあり方（外部講師講演）
- 第10講 限りある自社資源の限界を超えるための他社の経営資源活用
- 第11講 ベンチャー企業のグローバル化の意義
- 第12講 ベンチャー・ファイナンスー日本の銀行とベンチャーキャピタル
- 第13講 起業家・ベンチャー企業のマーケティング
- 第14講 日本の起業家・志ある経営（外部講師講演）
- 第15講 総括

■フィードバックの要領

レポートに対し、評価あるいはコメントを記入してフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 起業経営特有の戦略、組織、ファイナンス、マーケティングを大変良好に理解している
 評価 A (89 ~ 80 点) : 起業経営特有の戦略、組織、マーケティングをかなり理解している
 評価 B (79 ~ 70 点) : 起業に必要な知識を良好に習得、レポートでは自分の考えが良く述べられている
 評価 C (69 ~ 60 点) : 起業に必要な知識をある程度習得、レポートでは自分の考えが一定部分述べられている
 評価 F (59 点以下) : ベンチャー経営の基本を理解しておらず、レポートも未提出

■評価方法

- ・期末定期試験 (40%) + レポート (3本・30%) + 平常点 (30%)
- ・期末試験は趙の講義内容、レポート 3本は外部講師の内容を中心に行う
- ・レポート 3本は、MS Office word を用いた課題作成提出

■留意点

①講義の順序は、学生の理解度と進捗度によって前後変更する場合がある。②外部講師の講義日もスケジュール状況によって変更になる場合もある。③私語、携帯電話、本授業と無関係のパソコン使用、途中退室は絶対不可であり、熾烈に厳しく注意する。学生の社会人としての常識涵養のための注意と授業態度を静粛に保つ教員の姿勢がいやであれば、本講義の履修は勧められない。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 韓国ビジネスコミュニケーション I (Korean Business Communication I)**サブタイトル** 中級韓国語 (ハングル能力検定試験 4 級取得を目指す)**担当教員** 高 昌弘**対象学年** 2 年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

この講義では、1 年間初級韓国語を学習した学生 (2 年生以上) を対象に、次のステップである中級韓国語 (ハングル検定 4 級レベルの文法や語彙など) を学び、ハングル能力検定試験 4 級レベルの実力を身につけることを目的としている。

■講義分類

グローバルビジネス

■到達目標

春学期の前半は 2020 年 6 月に行われる予定のハングル能力検定試験 5 級の合格を目指し、過去問を使って模擬試験を行うなど試験対策をし、後半では 2021 年 6 月にあるハン検 4 級に向けて「ハングル」検定の公式テキストを使い、4 級レベルの語彙や文法表現を学習していく。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2 番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

様々な韓国語表現を学習することでコミュニケーション能力を高め、より明確な意思疎通ができるようになる。

■授業形態 AL 手法 ※該当する項目のみ記載**講義**

- [個人] ワークシート
- [ペア] ペアワーク
- [グループ] マインド・マップ
- [上記以外] なし

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

復習に必要な時間は 2 時間以上。前回に学んだ内容をしっかり覚えているかどうかを確認するために毎回小テストを行う。

■授業の概要

- 第 1 講 オリエンテーション及び自己紹介
- 第 2 講 試験対策 (1) 「発音の変化」
- 第 3 講 試験対策 (2) 「語彙①」
- 第 4 講 試験対策 (3) 「語彙②」
- 第 5 講 試験対策 (4) 「語彙③」
- 第 6 講 試験対策 (5) 「語彙④」
- 第 7 講 試験対策 (6) 「文法」と「挨拶表現」
- 第 8 講 試験対策 (7) 「模擬試験 (聞き取り・筆記)」
- 第 9 講 1 課「ㄷ変格動詞」/2 課「~처럼・같이」
- 第 10 講 3 課「~네요」/4 課「안~ / ~지 않다」
- 第 11 講 5 課「못~ / ~지 못하다」/6 課「~니까」
- 第 12 講 7 課「~하십시오」/8 課「~잡아요」
- 第 13 講 9 課「~르까요」/10 課「~르게요」
- 第 14 講 11 課「~르 거예요」/12 課「~기 전에」
- 第 15 講 映画鑑賞・面談

■フィードバックの要領

毎回学習した内容の小テストを行い、できないところをチェックし、もう一度指導する。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 平常点と小テストの合計が 90 点以上であること。
- 評価 A (89 ~ 80 点) : 平常点と小テストの合計が 89 点から 80 点の間であること。
- 評価 B (79 ~ 70 点) : 平常点と小テストの合計が 79 点から 70 点の間であること。
- 評価 C (69 ~ 60 点) : 平常点と小テストの合計が 69 点から 60 点の間であること。
- 評価 F (59 点以下) : 平常点と小テストの合計が 59 点以下であること。

■評価方法

平常点 50% 小テスト 50%

■留意点

韓国語 I・II を履修していなくてもハングルが読めて初級レベルの単語や文法表現を知っていれば受講できる。すでにハングル検定 5 級を持っている人は試験対策をやっている間 (4 月・5 月) は作文 (会話練習) を書く時間にする。

科目名 韓国ビジネスコミュニケーション II (Korean Business Communication II)**サブタイトル** 中級韓国語 (ハングル能力検定試験 4 級取得を目指す)**担当教員** 高 昌弘**対象学年** 2 年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

この講義では、1 年間初級韓国語を学習した学生 (2 年生以上) を対象に、次のステップである中級韓国語 (ハングル検定 4 級レベルの文法や語彙など) を学び、ハングル能力検定試験 4 級レベルの実力を身につけることを目的としている。

■講義分類

グローバルビジネス

■到達目標

2021 年 6 月に行われる予定のハングル能力検定試験 4 級を受けるために春学期に引き続き「ハングル」検定の公式テキストを使い、4 級レベルの語彙や文法表現を学習していく。秋学期ではテキストの中後半を学習した上で過去問を使って実際に模擬試験を行うなど試験対策をし、できるだけ試験問題に慣れるようにしていく。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ① 最も身につけられる事項 ② 2 番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ③ ①・②で選択された事項の詳細

様々な韓国語表現を学習することでコミュニケーション能力を高め、より明確な意思疎通ができるようになる。

■授業形態 AL 手法 ※該当する項目のみ記載**講義**

[個人] ワークシート
[ペア] ペアワーク
[グループ] マインド・マップ
[上記以外] なし

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

復習に必要な時間は 2 時間以上。前回に学んだ内容をちゃんと覚えているかどうか毎回テストを行うのでしっかり復習してくること。

■授業の概要

第 1 講 オリエンテーション
第 2 講 13 課 「～는 중이다」/14 課 「～으십시오」
第 3 講 15 課 「否定の連体形」/16 課 「～고 있다」
第 4 講 17 課 「～지 않다」/18 課 「～가/이 되다」
第 5 講 19 課 「～ㄴ 사이에」/20 課 「～해 보다」
第 6 講 21 課 「～ㄴ 생각이다」/22 課 「～ㄴ 결과」
第 7 講 23 課 「～서」/24 課 「～해하다」
第 8 講 25 課 「～으면」/26 課 「～해도 되다」
第 9 講 27 課 「～해야 되다」/28 課 「～ㄴ 데」
第 10 講 29 課 「～으려고」/30 課 「～라고 하면」
第 11 講 31 課 「～지 말아야 되다/하다」/32 課 「～도 아닌데」
第 12 講 33 課 「～ㄴ 가운데」/34 課 「～ㄴ 끝에」
第 13 講 35 課 「～으시겠어요?」/36 課 「～ㄴ 것처럼」
第 14 講 模擬試験 (聞き取り・筆記) と解説
第 15 講 映画鑑賞・面談・願書作成

■フィードバックの要領

毎回学習した内容の小テストを行い、できないところをチェックし、もう一度指導する。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 平常点と小テストの合計が 90 点以上であること。
評価 A (89 ~ 80 点) : 平常点と小テストの合計が 89 点から 80 点の間であること。
評価 B (79 ~ 70 点) : 平常点と小テストの合計が 79 点から 70 点の間であること。
評価 C (69 ~ 60 点) : 平常点と小テストの合計が 69 点から 60 点の間であること。
評価 F (59 点以下) : 平常点と小テストの合計が 59 点以下であること。

■評価方法

平常点 50% 小テスト 50%

■留意点

韓国語 I・II と韓国ビジネスコミュニケーション I を履修していなくてもハングルが読めて初級レベルの単語や文法表現を知っていれば受講できる。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 キャリア・デザイン I (Career Design I)**サブタイトル** 社会の変化を知る、自己を知る、業界・企業を知る**担当教員** 初見、浜田、葛本**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**実務経験のある教員による授業****■講義目的**

本講義を通して、自己の将来を考え、卒業後の職業生活（キャリア）の方向性を検討する。具体的には、(1) 社会の変化を理解する、(2) 自己を理解する、(3) 企業・仕事を理解することの3点を通して、将来のキャリアデザインを設計していく。キャリア・デザインIでは、特に社会の変化について学習していく。

■講義分類

ビジネス環境理解／社会人力育成

■到達目標

(1) 社会の変化を理解する、(2) 自己を理解する、(3) 企業・仕事を理解する、の3点を通して、自己のキャリアに対する知識と理解、関心と意欲を養っていく。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ③ ①・②で選択された事項の詳細

(1) 社会の変化、(2) 自己理解、(3) 業界・企業の分析を通して、職業観の育成を図ると共に、自己のキャリアに対する知識と理解、関心と意欲を養っていく。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義

- [個人] ワークシート
- [ペア] ペアワーク
- [グループ] なし
- [上記以外] なし

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

講義テーマに対する事前学習（1.5 時間）。講義後の振り返りシート（本日の学び）の作成と内容の復習、指定図書の読書など（1.5 時間）。

■授業の概要

- 第1講 キャリア・デザインI ガイダンス
- 第2講 社会の変化を知る①
- 第3講 社会の変化を知る②
- 第4講 社会の変化を知る③
- 第5講 社会の変化を知る④
- 第6講 社会の変化を知る⑤
- 第7講 社会の変化を知る⑥
- 第8講 社会の変化を知る⑦
- 第9講 フィールドワーク準備①
- 第10講 フィールドワーク準備②
- 第11講 フィールドワーク（振り返り）③
- 第12講 キャリア・デザインI まとめ
- 第13講 予備日（振り替え休講①）
- 第14講 予備日（振り替え休講②）
- 第15講 キャリア・デザインI まとめ②

■フィードバックの要領

各講義で「本日の学び」の小レポート提出を行い、評価・フィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : フィールドワークに参加し、提出物について大変優れている場合
- 評価 A (89 ~ 80 点) : フィールドワークに参加し、提出物について十分な到達度に達している場合
- 評価 B (79 ~ 70 点) : フィールドワークに参加し、提出物について一定の到達度に達している場合
- 評価 C (69 ~ 60 点) : フィールドワークに参加し、提出物について十分な到達度に達していない場合
- 評価 F (59 点以下) : フィールドワークに不参加、もしくは提出物について最低限の到達度に達していない場合

■評価方法

①「本日の学び」等の提出物（50%） ②フィールドワークへの参加（50%）

■留意点

本講義は主に2年生を対象とした科目である。本科目と共にキャリア・デザインII（秋学期）を必ず履修すること。合わせて、インターンシップIの履修を推奨する。また、本科目ではフィールドワーク（6月下旬予定）への参加が必須となる。土日に開催される予定のため、事前のスケジュール調整を行うこと。

科目名 キャリア・デザイン II (Career Design II)**サブタイトル** 社会の変化を知る、自己を知る、業界・企業を知る**担当教員** 初見、浜田、葛本**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**実務経験のある教員による授業****■講義目的**

本講義を通して、自己の将来を考え、卒業後の職業生活（キャリア）の方向性を検討する。具体的には、(1) 社会の変化を理解する、(2) 自己を理解する、(3) 企業・仕事を理解することの3点を通して、将来のキャリアデザインを設計していく。キャリア・デザインIIでは、特に業界・企業分析の手法について学習していく。

■講義分類

ビジネス環境理解／社会人力育成

■到達目標

(1) 社会の変化を理解する、(2) 自己を理解する、(3) 企業・仕事を理解する、の3点を通して、自己のキャリアに対する知識と理解、関心と意欲を養っていく。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

(1) 社会の変化、(2) 自己理解、(3) 業界・企業の分析を通して、職業観の育成を図ると共に、自己のキャリアに対する知識と理解、関心と意欲を養っていく。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義

[個人] ワークシート
[ペア] ヘアワーク
[グループ] なし
[上記以外] なし

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

講義テーマに対する事前学習（1.5時間）。講義後の振り返りシートの作成と内容の復習、推薦図書の読書など（1.5時間）。

■授業の概要

第1講 キャリア・デザインIIガイダンス
第2講 業界・企業分析①
第3講 業界・企業分析②
第4講 業界・企業分析③
第5講 業界・企業分析④
第6講 自己を知る
第7講 業界・企業分析⑤
第8講 業界・企業分析⑥
第9講 業界・企業分析⑦
第10講 業界・企業分析⑧
第11講 フィールドワーク準備①
第12講 フィールドワーク準備②
第13講 キャリア・デザインIIまとめ
第14講 予備日（振り替え休講①）
第15講 予備日（振り替え休講②）

■フィードバックの要領

講義内容に関する小レポートについて、評価・フィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : フィールドワークに参加し、提出物について大変優れている場合
評価 A (89 ~ 80 点) : フィールドワークに参加し、提出物について十分な到達度に達している場合
評価 B (79 ~ 70 点) : フィールドワークに参加し、提出物について一定の到達度に達している場合
評価 C (69 ~ 60 点) : フィールドワークに参加し、提出物について十分な到達度に達していない場合
評価 F (59 点以下) : フィールドワークに不参加、もしくは提出物について最低限の到達度に達していない場合

■評価方法

①「本日の学び」等の提出物 (50%) ②フィールドワークへの参加 (50%)

■留意点

本講義は主に2年生を対象とした科目である。また、本科目ではフィールドワークへの参加が必須となる。土日に開催される可能性が高いため、事前のスケジュール調整を行うこと。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 業界研究 I (Industry Research I)**サブタイトル** 産業界・経済界の構造を知る**担当教員** 浜田 正幸**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**実務経験のある教員による授業****■講義目的**

世界にはいろいろな産業・ビジネスがあり、経済や政治が回っている。どれひとつとして不要な業界などなく、その業界がなくなれば、現在の経済社会は停止してしまう。ならばどのような産業や業界があり、それが社会の中でどのような役割を担っているのかを知る必要がある。それを自ら探索し、分析できるようになることが、本講の目的である。興味・関心のある業界を調査し、将来の就職につながることを期待する。

■講義分類

ビジネス環境理解／ビジネス創造／グローバルビジネス

■到達目標

どのような業界であっても、どのような新規のビジネスや企業であっても、それを自ら、グローバルな視点で捉え、分析できることが目標である。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP5 高い志 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

産業界の構造を自ら調べる能力を習得する。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義

- [個人] プレゼンテーション
- [ペア] 相互教授法
- [グループ] PBL
- [上記以外] なし

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

自ら担当する業界について深掘りし、何を聞かれても答えられるよう準備する(1.5h)。各回で取り上げる業界についてリサーチし、わからないこと(質問)を明確にし、のちにそれらを整理する(1.5h)。

■授業の概要

- 第1講 本講の進め方とルールの説明
- 第2講 調査チームでのグループワーク
- 第3講 1. 小売業界 2. アパレル業界
- 第4講 3. 流通業界 4. 商社業界
- 第5講 5. フードサービス(飲食)業界 6. 食品業界
- 第6講 7. 自動車業界 8. 重工業界
- 第7講 9. 電子・電気機器業界 10. 通信・ソフトウェア業界
- 第8講 11. 不動産業界 12. 建設業界
- 第9講 13. 金融業界 14. 保険業界
- 第10講 15. ホテル・旅行業界 16. 運輸・物流業界
- 第11講 17. エネルギー業界 18. プラント業界
- 第12講 19. 生活・公共サービス業界 20. 人材サービス業界
- 第13講 21. 医療機器業界 22. 製薬業界
- 第14講 23. 化粧品業界 24. 広告業界
- 第15講 達成度確認テスト

■フィードバックの要領

業界について調査・発表したものについて、都度授業内でフィードバックする。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上) : 発表の有無と内容、質問の回数、確認テスト、全てにおいて優れた成果を出したものの。
- 評価 A (89～80点) : 発表の有無と内容、質問の回数、確認テスト、全てにおいて評価点に到達したものの。
- 評価 B (79～70点) : 発表の有無と内容、質問の回数、確認テスト、全てにおいて評価点に到達したものの。
- 評価 C (69～60点) : 発表の有無と内容、質問の回数、確認テスト、全てにおいて評価点に到達したものの。
- 評価 F (59点以下) : 発表回数、質問回数、確認テストの合計点が59点以下のもの。

■評価方法

チーム得点50点(発表1回につき10～20点、質問点1回1点) 個人得点50点(レポート1回につき2点、最終確認テスト30点)

■留意点

この授業はチームで進め、チームが獲得した得点で成績評価が決まる。チームは第1講で決定し、以降チームで授業に参加することが必須となる。業界研究(調査)をするため、毎回PC、タブレットを持参のこと。スマホは禁止。

科目名 金融論 (Finance)

サブタイトル 金融論 (Finance)

担当教員 下井 直毅

対象学年 2年生以上

区分 秋学期

■講義目的

この講義では、金融の理論と仕組みの基礎知識について学ぶ。また、産業社会にとっても重要である金融の役割を理解する。

■講義分類

グローバルビジネス

■到達目標

日本の金融の現状と課題についての基本的な知識の修得をめざす。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

ビジネスの中で最低限必要な基礎的な数学的思考力を基に、課題解決に向けたプロセスを明確にすることが出来る。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義

[個人] ワークシート

[ペア] なし

[グループ] なし

[上記以外] なし

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

授業前には、前回の講義内容について十分に理解しておくこと。講義内容の復習と次回講義の準備には、1.5 時間以上の取組が必要です。

■授業の概要

- 第1講 金融の基本的な機能—金融の基本的な機能を理解する
- 第2講 企業と政府のファイナンス—企業と政府のファイナンスを理解する
- 第3講 日本の金融機関と金融市場—日本の金融機関や金融市場について理解する
- 第4講 貨幣とインフレ—貨幣とインフレについて理解する
- 第5講 金融政策の運営—金融政策の運営について理解する
- 第6講 債券市場と金利—債券市場と金利について理解する
- 第7講 株式市場と株価—株式市場と株価について理解する
- 第8講 金融規制の課題と仕組み—金融規制の課題と仕組みについて理解する
- 第9講 金融危機の発生—金融危機の発生について理解する
- 第10講 国際金融—国際金融について理解する
- 第11講 金融派生商品とリスク・ヘッジ—金融派生商品とリスク・ヘッジについて理解する
- 第12講 日本の金融をめぐる諸問題（Ⅰ）—日本の金融をめぐる諸問題を理解する
- 第13講 日本の金融をめぐる諸問題（Ⅱ）—日本の金融をめぐる諸問題を理解する
- 第14講 講義前半の復習—金融の基本的な機能や金融市場について復習する
- 第15講 講義後半の復習—金融規制の課題や金融危機発生メカニズムを復習する

■フィードバックの要領

レポートに対してコメントを記入して、フィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 日本の金融の現状と課題についての基本的な知識をほぼすべて修得できている。
- 評価 A (89 ~ 80 点) : 日本の金融の現状と課題についての基本的な知識をかなり修得できている。
- 評価 B (79 ~ 70 点) : 日本の金融の現状と課題についての基本的な知識を十分に修得できている。
- 評価 C (69 ~ 60 点) : 日本の金融の現状と課題についての基本的な知識をある程度修得できている。
- 評価 F (59 点以下) : 日本の金融の現状と課題についての基本的な知識を修得できていない。

■評価方法

授業の平常点 (30%)、試験 (70%)。合計 100% で 100 点満点。

■留意点

出欠を確認する際に、本人の学生証が無い場合は、欠席扱いとする。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 クリエイティブデザイン I (Creative Design I)**サブタイトル** マルチメディア実践/デジタル図形の描き方、動画制作ほか**担当教員** 彩藤 ひろみ**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

動画を作成する機会が増えてきた。動画編集について基本的な知識を習得する。その周辺で、デジタル図形の描き方、使い方、色の仕組み、著作権への配慮、著作権フリーの映像や音楽の探し方、使い方を理解する。また、魅力的なシナリオ構築の方法を身につける。特に、2つのものを比較してどちらを選択するか、という問題解決をコンピュータを使って考える。具体的には、家具の配置図などをデジタル作画して比較する。

■講義分類

ビジネス ICT

■到達目標

動画編集について基本的な知識を習得する。その周辺で、デジタル図形の描き方、使い方、色の仕組み、著作権への配慮、著作権フリーの映像や音楽の探し方、使い方を理解する。シナリオの作り方、それを実現する方法についても演習を通じて理解する。目的・情報の受信者の状況に応じた情報の表現方法や情報機器の選択について理解する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

課題に対して新たな価値や解決方法を生み出せる創造力を修得する。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義/演習

[個人] プレゼンテーション

[ペア] ペアワーク

[グループ] PBL

[上記以外] なし

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

好きな映画やアニメ、CMなどをよく見て、どこが面白いポイントなのか、自分なりに分析してみる。準備に1.5時間以上、復習作業に1.5時間以上かかる。

■授業の概要

- 第1講 6秒ムービーの鑑賞
- 第2講 gifアニメーションの作成
- 第3講 ムービー編集はじめの一步
- 第4講 ムービーの特殊効果について
- 第5講 音楽やサウンド効果について
- 第6講 第1作品 6秒ムービーの完成と鑑賞
- 第7講 イラスト作成方法の習得
- 第8講 ベクトルデータの活用
- 第9講 3DCGの活用
- 第10講 第2作品の構想
- 第11講 第2作品 イラストと実写の組み合わせ、または、3DCGと実写の組み合わせ
- 第12講 動画編集基礎知識確認
- 第13講 グループ作品シナリオ作り
- 第14講 作品中間チェックと仕上げのための作業
- 第15講 作品発表会

■フィードバックの要領

全3回の課題を順番にクリアしないとイケない。各回で、結果をフィードバックする。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上) : 動画編集の基本的知識習得および各課題での技術点と芸術点が特に優れているもの。
- 評価 A (89～80点) : 動画編集の習得および各課題での技術点と芸術点が優れているもの。
- 評価 B (79～70点) : 普通程度の動画編集知識があり、作品づくりが出来たもの。
- 評価 C (69～60点) : 頑張ったことがわかる作品を作れたもの。
- 評価 F (59点以下) : 課題の放棄、修正を行わなかったもの。

■評価方法

授業内基礎知識テスト (20%) 作品の技術点 (40%) と芸術点 (40%) 3課題とも提出は必須。

■留意点

最初からPCは必須になる。マウスを準備するほうがよい。外部を撮影する場合は、肖像権などに充分配慮すること。

科目名	クリエイティブデザイン II (Creative Design II)		
サブタイトル	クリエイティブデザイン II ～3DCG 制作とその社会的浸透		
担当教員	彩藤 ひろみ	対象学年	2 年生以上
		区分	秋学期

■講義目的

3DCG を利用した CM, アニメ、映画、ポスターなどが増えてきた。立体をそのまま 3D プリンターで印刷することも簡単になってきた。3DCG を制作体験しながら、これからの社会のどのような方面に応用できるか考察し、具体的に提案できるようにする。情報伝達・発信のひとつの表現方法として、3DCG を身につける。個々人の技術習得も狙うが、問題発見、解決の糸口として、グループワーク、プレゼンテーションを実施する。

■講義分類

ビジネス ICT

■到達目標

3DCG ソフトの種類、3DCG ソフトの利用、グループワーク、プレゼンテーションを通じてのプロジェクトの推進、3DCG の社会的価値の考察と成果発信

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2 番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

課題に対して新たな価値や解決方法を生み出せる創造力を修得する。

■授業形態 AL 手法 ※該当する項目のみ記載

講義 / 演習

- [個人] プレゼンテーション
- [ペア] ヘアワーク
- [グループ] PBL
- [上記以外] なし

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

オープンソースソフトウェア <http://blender.org> の練習に、予習、復習とも 1.5 時間以上かかる。

■授業の概要

- 第 1 講 イントロダクション：3DCG が当たり前になってきた世界
- 第 2 講 Blender の使い方・基本オブジェクトの操作
- 第 3 講 Blender の使い方・オブジェクトの編集
- 第 4 講 ロケットの 3DCG モデル作成練習その 1
- 第 5 講 ロケットの 3DCG モデル作成練習その 2
- 第 6 講 3DCG 基礎知識の確認
- 第 7 講 キャラクター 3DCG の仕上げまでの流れ
- 第 8 講 ゲームと 3DCG
- 第 9 講 AR・VR と 3DCG
- 第 10 講 キャラクタモデリングその 1 顔
- 第 11 講 キャラクタモデリングその 2 ボディ
- 第 12 講 キャラクタモデリングその 3 手指、髪の毛
- 第 13 講 キャラクタモデリングその 4 仕上げ
- 第 14 講 キャラクタアニメーションの流れ
- 第 15 講 作品鑑賞会

■フィードバックの要領

課題に対する努力と成果に対して、フィードバックをする。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上)：技術の著しい伸びと 3DCG に対する深い理解
 評価 A (89～80 点)：技術の伸びと 3DCG に対する理解
 評価 B (79～70 点)：技術が一定レベルを超えたもの、およびレポート普通評価。
 評価 C (69～60 点)：基本をおさえたと評価できるもの。
 評価 F (59 点以下)：基準に達しないもの。

■評価方法

授業内での平常点 (20%) と作品課題 (60%)、レポート (20%)

■留意点

PC は最初から必要。マウスを用意してほしい。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 クリエイティブデザイン III (Creative Design III)**サブタイトル** バーチャルリアリティ技術の習得とインタラクティブアプリケーション制作**担当教員** 出原 至道**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

学生にとって、新しいアイデアを出し、協業によってそれを実現していく能力を鍛えることは、極めて重要である。本講義は、コンピュータを用いたバーチャルリアリティアプリケーションのチーム開発の演習を通して、各種のアルゴリズムの実装とユーザ視点のものづくりを行うことを目的とする。

■講義分類

ビジネス ICT

■到達目標

①スクラムによるアジャイル開発手法を実践する、② github を利用した共同開発手法に熟練する、③実用的なアルゴリズムの実装がC# ができるようになる、⑤コンピュータを利用したシミュレーションを理解し、実装できるようになる

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2 番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

コンピュータを利用したシミュレーション技法について、独自の実装を考案・実施できる。

■授業形態 AL 手法 ※該当する項目のみ記載

講義 / 演習

[個人] プレゼンテーション

[ペア] ペアワーク

[グループ] PBL

[上記以外] なし

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

講義後、各チームで独自に実装研究を 90 分程度行い、記録すること。プロジェクト管理システム上で、作業時間の報告を行うこと。作業成果は、github 上に随時反映させること。

■授業の概要

- 第1講 ガイダンス
- 第2講 環境整備
- 第3講 github の利用（復習）
- 第4講 ゲームエンジン入門
- 第5講 インタクション
- 第6講 プロジェクトゴールの設定
- 第7講 実現しようとするコンセプトの確定
- 第8講 ユーザインタフェースの設計
- 第9講 実装演習
- 第10講 実装演習
- 第11講 実装演習
- 第12講 実装演習
- 第13講 実装演習
- 第14講 プレゼンテーション準備
- 第15講 プレゼンテーション

■フィードバックの要領

プレゼンテーションに対してコメントをフィードバックする。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 数値評価 90 点以上
- 評価 A (89 ~ 80 点) : 数値評価 80 点以上 90 点未満
- 評価 B (79 ~ 70 点) : 数値評価 70 点以上 79 点未満
- 評価 C (69 ~ 60 点) : 数値評価 60 点以上 70 点未満
- 評価 F (59 点以下) : 数値評価 60 点未満

■評価方法

平常点 (github 上での寄与) 50%、最終プレゼンテーション 40%、最終プレゼンテーション相互評価 10%

■留意点

①全体の講義では、モデリングはほとんど行わない。意欲のある学生は、自主的にモデリング技術を探求すること ②毎回、コンピュータを持参すること ③特段の事情がある場合を除き、第1回の講義に出席していないものの受講は認めない ④ github 上に個人リポジトリを用意しておくことが望ましい ⑤外付けのマウスを持参することが望ましい、

科目名 グローバルヒストリー III (Global History III)**サブタイトル** 現代社会に根ざす歴史的背景を探る**担当教員** 水盛 涼一**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

現代社会はグローバル化の著しい世の中です。日本も世界各国との交流なしには存続できません。そして世界各国と関係を構築するためには相互理解が欠かせません。その相互理解の近道こそが歴史です。現代社会はみな歴史を経て形成されたものですから、過去を知らば現在の理解に繋がります。しかも歴史の過程は各地で多様なので、彼我の比較を通して文化の相対性を学び自らを客観視できるようにになります。そこで、本講義では、アクティブラーニング技法を取り入れ、通史ではなくテーマごとに、主体的に現代社会の歴史的背景を知ることを目指します。なお講義では「自調自考」(自ら調査し自ら考察する)を身につけるべく、毎週にわたって次週テーマに関する調査報告の提出を行い、講義中にも相互討論を通して表現力を向上していきます。

■講義分類

社会人力育成／グローバルビジネス

■到達目標

グローバル化の時代において、情報の海に飲み込まれることなく自ら思考して異文化を理解するスタンスを涵養する。その格好の題材として、各国の心性を把握し、日本や諸外国への相対的な視点を獲得する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

世界の歴史は諸文化を知るものですから「知識と理解」となります。突き詰めれば「高い志」における「社会における多様な価値観」への関与という志に結びつくでしょう。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義／演習

[個人] プレゼンテーション

[ペア] ペアワーク／相互教授法

[グループ] KJ法

[上記以外] 受講者はコメントペーパーを執筆、講師は適宜内容に触れ活用する

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上)及び具体的な内容

各週、配当テーマについて書籍あるいは論文により、①その文章の趣旨の要約、②参照論文3点の情報、③参照資料3点の情報、④日本と比較して考察した事についてレポートを作成する(添付ファイル参照、1.5時間)。

■授業の概要

- 第1講 ガイダンス
- 第2講 序論——東洋と西洋
- 第3講 すめらみこと——王朝と王室、王統と王位継承について
- 第4講 あきつみかみ——再び王朝と王室、王統と王位継承について
- 第5講 かみがたり——建国神話について
- 第6講 みやこ・ひな——都市の成り立ちや環境について
- 第7講 あやふみ——標準語と方言および出版文化について
- 第8講 いくさびと——軍隊や兵士について
- 第9講 ぜにかね——商慣行・流通や貨幣制度について
- 第10講 つかさびと——官僚制度について
- 第11講 わざすべ——技術革新や暦法について
- 第12講 ことくに・まれびと——国際関係や在留外国人について
- 第13講 のり・つみ——法律や刑罰制度について
- 第14講 うますべ——美術・芸術・工芸について
- 第15講 いえびと——家族制度について

■フィードバックの要領

受講者は講義後コメントペーパー「本日の振り返りレビュー」を執筆、講師と対話を行う

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上) : 評価点 100点 (下記「配分」参照) のうち 90点以上。
- 評価 A (89～80点) : 評価点 100点 (下記「配分」参照) のうち 89～80点。
- 評価 B (79～70点) : 評価点 100点 (下記「配分」参照) のうち 79～70点。
- 評価 C (69～60点) : 評価点 100点 (下記「配分」参照) のうち 69～60点。
- 評価 F (59点以下) : 評価点 100点 (下記「配分」参照) のうち 59点以下。

■評価方法

毎週提出の「歴史論文調査報告」の内容(50%)、講義中の発言(5名は調査概略を5分発表、また受講生は講義中に積極的な質問を求める)および講義後のコメントペーパーに対する姿勢・積極性(50%)

■留意点

受講希望者多数の場合は第1回講義で抽籤銓衡を行うことがある。第2回までに重要不可欠な点を説明いたします。連続性を重視した講義のため、第1回・第2回の講義に全く出席しなかった者、また途中で「歴史論文調査報告」未提出が続く者は本講座の履修を認めない。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 グローバルヒストリーⅣ (Global HistoryⅣ)**サブタイトル** グローバル近現代史：世界と日本（西洋の世界を中心に）**担当教員** 椎木 哲太郎**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

本講座は、史学科学的な歴史研究ではなく、諸君が確固たる歴史（時代）認識を持つとともに、現代の世界が直面する諸課題とその歴史的背景を探り、複雑な相互連関の中にある国際関係や経済問題を考察するための共通認識を深め、未来への選択につなげていけるような歴史的教訓を得ることをねらいとしている。グローバル化の中を生き抜くためには、他者を知らねばならない。歴史を扱う際の時代的制約（現代の価値基準で評価することの危険性、等）を十分意識しつつ、地域統合や持続可能性、ポピュリズムといった現代の問題意識に沿って、通史よりもテーマ中心の大胆なアプローチを試みたい。前半で歴史を動かす諸要因について検討し、後半では欧州、米国、アジア、イスラーム世界等々、そして日本の近現代史について概観する。配布資料の事前の読解を前提に、ディスカッションを交えた密度の濃い講座となるよう心がけたい。

■講義分類

ビジネス環境理解／社会人育成／グローバルビジネス

■到達目標

世界と日本の相互作用、光と影に満ちた近現代史を学ぶことを通じて、現代社会の直面する諸課題の解決につながる豊富な示唆を獲得し、学問としての社会研究の基盤と、グローバル社会に生き、グローバルビジネスを円滑に進めるために有効な視座（歴史観）を構築し、多様な価値観や文化的背景を理解して、社会の発展に貢献することができる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

世界と日本の近現代史を広く学ぶことを通じて、世界潮流を認識するための視座を構築し、現代社会の諸課題の解決に貢献することができる。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義

[個人] ワークシート

[ペア] なし

[グループ] なし

[上記以外] 小テストの実施と解説

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

毎回週週分の講義資料を配布。必ず 1.5 時間読了し、受講すること。読んでいない者の参加は認めない。各回の報告担当者は、必ず当該資料に関連した質問と問題提起を行い、さらに毎週 1.5 時間の事後学習を行うこと。

■授業の概要

- 第1講 近現代史と現代社会 現代とのつながりを意識し、近現代史を学ぶ意義を考える。
- 第2講 近現代通史を紐解く 近代の始まりから時系列的に近現代史の流れを跡づける。
- 第3講 歴史からの教訓 第一次世界大戦後のドイツ、「ヴァイマル共和政」を例に考える。
- 第4講 リーダーシップの役割 歴史の動向を決定つけたリーダーたちの決断について考える。
- 第5講 近代経済成長と社会経済思想の役割 経済成長の軌跡と社会経済思想の影響。
- 第6講 欧州の近現代 EU 統合に至る二度の世界大戦を経たヨーロッパの近現代史について。
- 第7講 アメリカの近現代 自由と民主主義、孤立主義は、200 年でどう変貌を遂げたか。
- 第8講 ロシアの近現代 世界初の共産主義革命、大ロシアの集権制の背景を探る。
- 第9講 中国の近現代 帝国主義の侵略、辛亥革命、人民共和国の建国以後の歴史を考察する。
- 第10講 日本の近現代 (1) 後発近代化の歩みと日本人の世界認識の変遷を辿る。
- 第11講 日本の近現代 (2) アジア・太平洋戦争の惨禍と復興・高度経済成長から学ぶ。
- 第12講 アジア・アフリカの近現代 独立運動とその後の国家経営の軌跡を辿る。
- 第13講 イスラーム世界の近現代 「復興・改革運動史」と中東紛争を軸に展望する。
- 第14講 20 世紀から 21 世紀へ 20 世紀とは？ 21 世紀は何を解決すべきかを考える。
- 第15講 再び、近現代史と現代産業社会 我々は近現代史から何を学んだのか。

■フィードバックの要領

小テストを採点して返却する。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上)：試験の成績、質疑の内容、ともに顕著に優れている
- 評価 A (89 ～ 80 点)：試験の成績、質疑の内容、ともに優れている
- 評価 B (79 ～ 70 点)：試験の成績、質疑の内容、ともに良い
- 評価 C (69 ～ 60 点)：試験の成績、質疑の内容、ともに普通
- 評価 F (59 点以下)：試験の成績、質疑の内容、ともに不十分

■評価方法

期末試験 (70%)、平常点 (レポート提出等) (30%)

■留意点

①講義は毎回、前週に配布した資料を読み込んでいることを前提として進行する。資料の持参を忘れた者、読んでこなかった者は、原則として当日の受講を認めない。②第2回の講義までに全く出席しなかった者、さらに途中で連続欠席3回となった者は、本講座の履修を認めない。③グローバルヒストリーⅡの単位取得者は履修登録できない。

科目名 経営科学 (Management Science)**サブタイトル** Management Science**担当教員** 増田 浩通**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

この授業では高校で習った数学の数列の単元を、エクセルを用いて学び直します。エクセルを使うのでパソコンは毎時間もって来る。エクセルの内容としては初心者的内容。

■講義分類

ビジネス ICT

■到達目標

数列および複利計算の考えを身につけその上、エクセルの基本が身につくことを到達目標とします。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

ビジネスの中で最低限必要な複利計算と EXCEL の知識を身に着けることが出来る。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義/演習

- [個人] ワークシート
- [ペア] なし
- [グループ] なし
- [上記以外] なし

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上)及び具体的な内容

この授業では、EXCELの基礎知識が必要です。各講義につき事前学習に1.5時間以上、事後学習に1.5時間、合計で3時間以上の学習が必要です。また、ITコミュニケーション入門の復習をしてください。

■授業の概要

- 第1講 ガイダンスとアンケート記入
- 第2講 エクセル：基本から学ぶ Excel 入門 1 文字や数字を入力して表を作る
- 第3講 エクセルの相対参照、絶対参照、複合参照を理解する。
- 第4講 経営科学に使われる数学の復習1：数列とは エクセル：縦棒グラフ
- 第5講 経営科学に使われる数学の復習2：等差数列① エクセル：オートフィルの使い方
- 第6講 経営科学に使われる数学の復習3：等差数列② エクセルで演習し、課題提出。
- 第7講 経営科学に使われる数学の復習4：等比数列①
- 第8講 経営科学に使われる数学の復習5：等比数列②
- 第9講 経営科学に使われる数学の復習6：等比数列③：複利計算
- 第10講 エクセルの演習 エクセル関数 SUM 関数 エクセルで演習、T-NEXT で課題を提出する。
- 第11講 単利計算 エクセルで演習、T-NEXT で課題を提出する。
- 第12講 複利計算 エクセルで演習、T-NEXT で課題を提出する。
- 第13講 エクセルの演習 エクセル関数 IF 関数 エクセルで演習、T-NEXT で課題を提出する
- 第14講 期末課題 作成日
- 第15講 期末課題 提出期限

■フィードバックの要領

課題提出状況に対してフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上)：毎週配布する提出課題と中間レポート及び期末レポートの総合評価が90点以上の場合。
- 評価 A (89～80点)：毎週配布する提出課題と中間レポート及び期末レポートの総合評価が89～80点の場合。
- 評価 B (79～70点)：毎週配布する提出課題と中間レポート及び期末レポートの総合評価が79～70点の場合。
- 評価 C (69～60点)：毎週配布する提出課題と中間レポート及び期末レポートの総合評価が69～60点の場合。
- 評価 F (59点以下)：中間レポートおよび期末レポートの両方の提出がないと評価はFとする。

■評価方法

毎週配布する課題 50%、中間レポート 25%、期末レポート 25%

■留意点

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 経営学概論 (Introduction to Management)**サブタイトル** 経営とは何か、企業とは何か、戦略と組織を理解する (経営学の初級レベル)**担当教員** 野坂 美穂**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

日頃の私達の生活と企業は、密接な関わりがある。本講義では、経営学とは何か、企業とは何かを理解し、「経営学」という学問を身近に感じ、関心を高めてもらうことを目的とする。経営学という学問の二本柱である戦略論と組織論の導入科目と位置づけ、企業とは何であるのか、その全体像を理解する。より理解を深めるために、実際の事例の紹介や学生自らがケース分析を行う。

■講義分類

顧客理解/ビジネス環境理解/ビジネスマネジメント

■到達目標

(1)「グローバル社会に対する理解」:企業の全体的なイメージを持つとともに、国内外で活動を行う企業の実態を理解する。(2)「社会の発展に貢献する力」:様々な企業の特徴や強みおよび課題を自分なりに見つけ出すこと。(3)「役割分担により組織目標の達成に貢献する力」:企業のケースについて、自分の言葉で説明することができ、プレゼンテーション能力を高めること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

企業内での様々な問題がなぜ生じるのかについて、因果関係(原因と結果)を明らかにし、理論を用いて説明することができる。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義

[個人] プレゼンテーション/ワークシート/問題作成

[ペア] ヘアワーク/ピア・レビュー

[グループ] PBL/Ball-toss/ジグソー法/マインド・マップ

[上記以外] なし

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

毎回の講義では、ワークシート等を配布します。そのワークシートを埋める形で、予習・復習を行ってください。(1.5時間) 予習復習について提出を求める場合、成績評価に反映します。

■授業の概要

第1講 イントロダクション:経営学とは何か、日常生活と企業との関わり

第2講 企業を取り巻く環境①企業を取り巻く様々な市場

第3講 企業を取り巻く環境②プレゼンテーション

第4講 経営資源の流れを学ぶ①

第5講 経営資源の流れを学ぶ②

第6講 企業の戦略について学ぶ①企業戦略と事業戦略

第7講 企業の戦略について学ぶ②競争戦略

第8講 CSRとCSV

第9講 理論やフレームワークの復習ゲーム

第10講 企業の境界

第11講 企業の成長 事業構造と事業の多角化

第12講 組織とは何か①組織デザインと組織構造

第13講 組織とは何か②組織のインセンティブシステム

第14講 テスト

第15講 これまでのまとめと課題

■フィードバックの要領

プレゼンテーションに対する評価を返却する。

■評価基準

評価A+ (90点以上): 戦略と組織の全体像を的確に捉え、自分の言葉で十分に説明することができる。

評価A (89~80点): 戦略と組織の全体像を捉え、自分の言葉で十分に説明することができる。

評価B (79~70点): 戦略と組織の全体像をある程度捉えることができ、自分の言葉で説明することができる。

評価C (69~60点): 戦略と組織の全体像をある程度捉えているが、自分の言葉での説明が不十分。

評価F (59点以下): 戦略と組織の全体像をほとんど捉えておらず、自分の言葉で説明もできていない。

■評価方法

平常点40%、レポート30%、テスト30%

■留意点

なし

科目名	経営思想史 (History of Management Thought)		
サブタイトル	江戸時代から戦後日本社会に至るまでの日本のマネジメント		
担当教員	高橋 恭寛	対象学年	2年生以上
		区分	秋学期

■講義目的

現代社会における経営思想は、マネジメントにせよ戦略論にせよイノベーションにせよ、グローバルビジネスの時代において、様々な角度から語られており、それ自体経営学として体系的に学ぶものだと思います。ただ、それらを教科書的に学ぶだけでは机上の空論で終わってしまうのです。日本における商活動がどのようなものであり、ビジネスに対してどのような態度で臨んでいたのかを理解しなければ、知識も実地で活用する効果が薄まるに相違ありません。そこで本本義では、江戸時代から近現代に至るまでの日本における独特な経営思想を唱えた人物を中心に学んでいきます。昔の経営理念とはいえ、その特色を知ること、どこかしら現代のビジネス環境にも引き継がれている文化的土壌が見えてくることもあると思われます。そのような日本の経営に関する風土の伝統を知ることが出来れば、ビジネスマネジメントについてもより深い理解を得られることでしょう。

■講義分類

ビジネス環境理解／社会人育成／グローバルビジネス

■到達目標

商活動のハンドルの操作に関する日本独特の多彩な考え方があったことを理解する。それによって、現代の様々な経営思想に関わる知識が日本の風土でどのように活かせるのかを自分なりに考えることが出来るようになる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

ビジネス環境、そしてビジネスマネジメントへの知識を深めることになり、今後実社会で自らが活動する際、自らが置かれた環境の背景を理解したうえで積極的に行動する高い志を養います

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義

〔個人〕 ワークシート
〔ペア〕 なし
〔グループ〕 なし
〔上記以外〕 なし

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

1.5時間。各講義で取り上げる人物やテーマについて、授業最初に予習復習ペーパーを提出してもらう予定です。本時予習のチェックテストも行う予定です。前もってメモ作成等の準備をしてきてください。

■授業の概要

- 第1講 イントロダクション—経営についての考えを、歴史的に見ることは出来るのか
- 第2講 江戸時代の武家社会には経営感覚がなかったのか
- 第3講 江戸時代の経営コンサル—荻生徂徠と海保青陵—
- 第4講 石田梅岩と通俗道徳
- 第5講 井原西鶴と元禄時代
- 第6講 江戸時代の商家の経営理念
- 第7講 二宮尊徳の思想
- 第8講 幕末維新期にかけての組織改革
- 第9講 福沢諭吉とその門下生
- 第10講 渋沢栄一の「道徳経済同一説」
- 第11講 三井と明治の企業運営
- 第12講 20世紀の近代工業と企業運営
- 第13講 戦後復興と経営思想
- 第14講 現代に目を向ける—ドラッカーやマイケル・ポーターなど—
- 第15講 まとめ—前近代～近代の日本型経営思想の着眼点おさらい—

■フィードバックの要領

授業中書いてもらうミニツペーパーはコメントを付してフィードバックを行う

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 評価点 100 点のうち 90 点以上
 評価 A (89 ~ 80 点) : 評価点 100 点のうち 89 点 ~ 80 点
 評価 B (79 ~ 70 点) : 評価点 100 点のうち 79 点 ~ 70 点
 評価 C (69 ~ 60 点) : 評価点 100 点のうち 69 点 ~ 60 点
 評価 F (59 点以下) : 評価点 100 点のうち 59 点以下

■評価方法

評価点 100 点は、期末テスト (40%)、中間レポート (10%)、ミニツペーパー・ワークシートによる授業の理解度 (50%) の合計点で換算する。

■留意点

授業中における制限事項：(1) 授業中の食事は厳禁。(2) 無断でスマートフォン、タブレット、ノートPC等を使用することは禁止。(3) 20分以上の遅刻、不要不急の途中退席は認めない。(4) 不必要な私語は控えること。(5) 座席指定に対して無断で席の移動は禁止。以上の違反に対し教員による注意を受けても是正されない場合、退室を求められることがある。また、授業単位の取得に対してペナルティを付けることがある。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 経営シミュレーションゲーム (Management Simulation Game)**サブタイトル** 経営シミュレーションゲームを通じたアクティブラーニング経営体験プログラム**担当教員** 出原 至道**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

多摩大学式経済経営シミュレーションゲームを通して企業経営の基本を理解する。ゲームでは、ゲーム上の仮定の市場で、企業経営を経験する。講義では、ゲームをベースに、経営の基本および企業経営の計数的理解を深めることを目指す。

■講義分類

ビジネス環境理解／ビジネスマネジメント／ビジネス ICT

■到達目標

企業経営の基本を理解すること。企業経営の計数的理解を深めること。コンピュータを使用しての学習経験を深めること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

本講義では、シミュレーションゲームを通じた会計の実践的な知識の獲得と戦略決定を通じて、企業経営の基本を理解し、実践できるようにする。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義／演習

[個人] ワークシート, T/Fテスト

[ペア] なし

[グループ] PBL

[上記以外] なし

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

講義外の時間で、シミュレータは継続的に動作する。常に市場動向に気を配り、競合製品の価格や消費者の動きに対して対応し、それを記録すること(15分×6日)。最終レポートに、この記録が重要である。

■授業の概要

- 第1講 オリエンテーション・経営シミュレーションゲームの説明
- 第2講 お試し1・2期
- 第3講 お試し3・4期
- 第4講 お試し5・6期
- 第5講 お試し7・8期
- 第6講 ゲーム第1期
- 第7講 ゲーム第2期
- 第8講 ゲーム第3期
- 第9講 ゲーム第4期
- 第10講 ゲーム第5期
- 第11講 ゲーム第6期
- 第12講 ゲーム第7期
- 第13講 ゲーム第8期
- 第14講 ゲーム第9期
- 第15講 講義内でのテスト、理解のみきわめを行う。

■フィードバックの要領

課題や試験等に対するフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上) : ゲームへの参与・レポート・試験で最低条件を満たした上で、数値評価で90点以上
- 評価 A (89～80点) : ゲームへの参与・レポート・試験で最低条件を満たした上で、数値評価で80点以上
- 評価 B (79～70点) : ゲームへの参与・レポート・試験で最低条件を満たした上で、数値評価で70点以上
- 評価 C (69～60点) : ゲームへの参与・レポート・試験で最低条件を満たした上で、数値評価で60点以上
- 評価 F (59点以下) : ゲームへの参与・レポート・試験で最低条件に達しない。または、数値評価で60点未満。

■評価方法

(1) 平常点(講義中の課題への取り組み、ゲームへの参加度等) 35% (2) レポート 15% (3) 最終試験 50%

■留意点

初回講義出席者の中から履修許可者(上限90名)を選抜する。講義開始後、受講生の理解や興味・関心に応じて、講義内容を変更する場合がある。変更も含む講義内容や進行予定の詳細は、講義開始後指示する。

科目名 経営情報論 I (Management Information Systems I)**サブタイトル** 経営情報の基本を学ぶ**担当教員** 小林 英夫**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**実務経験のある教員による授業****■講義目的**

経営情報学科の共通リテラシーの内容として、論理的思考とプログラミングの基本的事項、および、企業・社会が何を目的として情報システムを活用するのか、どんな情報システムを活用しているのか、経営情報システムはどのように発展してきたのか、今後の情報社会がどのようになっていくのかを理解する。

■講義分類

顧客理解/ビジネスマネジメント/ビジネス ICT

■到達目標

①企業や社会が、何を目的として情報システムを利用しているのかを、具体的に理解する。②企業や社会が目的達成のために利用している情報システムのポイント・核心を知る。その結果、ICTに関する基礎的な学力、課題発見力等を修得する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

経営情報を事例を知り理解することにより、経営情報の学びの関心を高め、より深く知る意欲を喚起する。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義

[個人] ワークシート
[ペア] なし
[グループ] なし
[上記以外] ミニツッパパー (個人)

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

授業前に、事前学習ポイントを調べ、T-NEXT 上の授業資料に目を通し疑問点を明確にする (1.5 時間)。授業後に、事前学習の疑問点解消を確認し、未解消の項目は自己調査や教員質問等で解消する (1.5 時間)。

■授業の概要

第1講 インTRODククション
第2講 アルゴリズム
第3講 アルゴリズム 2
第4講 プログラミング 1 Scratch の ID 登録と基本操作
第5講 プログラミング 2 おにごっこゲームの作成
第6講 プログラミング 3 スターキャッチ・ゲームの作成
第7講 プログラミング 4 自分で工夫して作ってみる
第8講 IT の活用と開発
第9講 IT エンジニアの仕事
第10講 IT 系キャリアと通信システム
第11講 経営情報システムの歴史
第12講 人工知能
第13講 ビッグデータと第4次産業革命
第14講 授業のまとめと振り返り
第15講 期末レポート提出

■フィードバックの要領

毎回提出のコメントシートの講評と、質問・意見への回答、コメントを翌回講義で行う。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 授業貢献点、プログラミング課題、最終レポートの合計が 90 点以上
評価 A (89 ~ 80 点) : 授業貢献点、プログラミング課題、最終レポートの合計が 80 点以上 90 点未満
評価 B (79 ~ 70 点) : 授業貢献点、プログラミング課題、最終レポートの合計が 70 点以上 80 点未満
評価 C (69 ~ 60 点) : 授業貢献点、プログラミング課題、最終レポートの合計が 60 点以上 70 点未満
評価 F (59 点以下) : 授業貢献点、プログラミング課題、最終レポートの合計が 60 点未満

■評価方法

授業貢献点 30%、プログラミング課題 20%、期末レポート 50%。プログラミング基礎を既に習得していると考えられる者は、自分のスキル説明文書提出と第7講課題の提出を以て第4～7講の出席の代替とすることを認める。

■留意点

授業貢献点は単なる出席点とは異なる。毎回の授業での受講態度や提出物の品質を、A (授業を聴き良い気づきがあった)、B (授業を聴いていた)、C (授業を聴いていたとは思われない) の3段階評価する。A は加点対象 (3 点)、B が標準 (2 点)、C は減点 (-2 点)、欠席は 0 点。受講態度が悪い場合は欠席以下の評価となる。授業貢献点は最大 30 点。プログラミング課題は第4～7講の成果を Scratch 上で公開することを評価する。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 経営情報論 II (Management Information Systems II)**サブタイトル** 最新の情報技術サービスの理解**担当教員** 出原、増田**対象学年** 2 年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

企業活動を効果的に行うには顧客嗜好や社会動向をタイムリーかつ的確につかむ必要がある。IoT、Web システム、ビッグデータ、人工知能、シミュレーションなどの技術の発達によって、人間の行動や感情、意見を企業活動に活かすことが可能となってきた。実例を通じて、これらの技術と応用について学ぶ。また、思考を整理し伝達するための手法として、さまざまな図化技術をまなび、局面によって適切に使い分けられるようになる。

■講義分類

ビジネス ICT

■到達目標

最先端の情報処理技術について学び、次の 4 点を理解する。(1) 最新技術の動向を理解する。(2) 活用方法をしているかを理解する。(3) 社会全体の変化を理解する。(4) 企業と顧客の関係について理解する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2 番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

経営情報学科の学生として必要な知識を広く身につけ、専門教育の基礎とする。

■授業形態 AL 手法 ※該当する項目のみ記載

講義

[個人] ワークシート
[ペア] ペアワーク
[グループ] なし
[上記以外] なし

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

講義外の時間で、最先端の情報技術の動向を継続的に捉えることが求められる。情報技術サイトの巡回 (15 分 * 4 回)、講義で説明した技術や手法の復習 (30 分) 程度の講義外の学習を求める。

■授業の概要

- 第 1 講 ガイダンス
- 第 2 講 センサ技術
- 第 3 講 フローチャート
- 第 4 講 発想法
- 第 5 講 シミュレーション
- 第 6 講 人工知能
- 第 7 講 位置情報システムとデータベース
- 第 8 講 状態遷移図 (1)
- 第 9 講 状態遷移図 (2)
- 第 10 講 IoT とビッグデータ
- 第 11 講 スポーツと情報技術
- 第 12 講 セル・オートマトン
- 第 13 講 セル・オートマトン・シミュレーション
- 第 14 講 歩行シミュレーション (避難)
- 第 15 講 まとめ

■フィードバックの要領

提出されたレポートに対して、コメントの形でフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 総合評価で 90 点以上
 評価 A (89 ~ 80 点) : 総合評価で 80 点以上
 評価 B (79 ~ 70 点) : 総合評価で 70 点以上
 評価 C (69 ~ 60 点) : 総合評価で 60 点以上
 評価 F (59 点以下) : 総合評価 59 点以下

■評価方法

講義中の理解度確認テストおよびレポート課題 (60%)、期末レポート (40%)

■留意点

- ・先端事例を紹介するため、各回の講義内容は、適宜変更する場合がある。
- ・パソコンを持参しないものの受講を認めない場合がある。

科目名 原価計算 (Cost Accounting)**サブタイトル** 管理会計入門**担当教員** 木村 太一**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

製品を製造する場合、その製品がいくらで作られたのかを把握することは、経営を行う上で不可欠である。本講義では、どのような計算を行えば、製品がいくらで作られたのかを精確に計算できるのかを考える。また、製品がいくらで作られたのかに関する情報が、どのような形で経営に活かされているのかも考える。

■講義分類

ビジネス環境理解／ビジネスマネジメント／社会人力育成

■到達目標

①大量生産を前提とする総合原価計算の方法を理解する。②原価計算の結果を経営に活かす、管理会計の考え方に触れる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ③ ①・②で選択された事項の詳細

原価計算手法に関しての理解と、それを経営の場面でどのように活かすかを考える。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載**講義**

[個人] ワークシート, T/Fテスト
 [ペア] なし
 [グループ] なし
 [上記以外] なし

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

予習よりも復習に重きを置いて、その回に用いられたテキストやレジュメの数値例で何度も計算をすること (各 1.5 時間)。

■授業の概要

- 第1講 原価計算とは／原価計算の流れ①
- 第2講 原価計算の流れ②
- 第3講 費目別計算
- 第4講 製造間接費の配賦
- 第5講 部門別計算
- 第6講 総合原価計算①
- 第7講 総合原価計算②
- 第8講 総合原価計算③
- 第9講 総合原価計算④
- 第10講 原価計算のまとめ
- 第11講 標準原価計算と原価差異分析①
- 第12講 標準原価計算と原価差異分析②
- 第13講 直接原価計算とCVP分析①
- 第14講 直接原価計算とCVP分析②
- 第15講 管理会計のまとめ

■フィードバックの要領

練習問題をほぼ毎週解き、それを基にした指導を行う。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 期末試験の総得点が 90 点以上。
 評価 A (89 ~ 80 点) : 期末試験の総得点が 80 点以上 90 点未満。
 評価 B (79 ~ 70 点) : 期末試験の総得点が 70 点以上 80 点未満。
 評価 C (69 ~ 60 点) : 期末試験の総得点が 60 点以上 70 点未満。
 評価 F (59 点以下) : 期末試験の総得点が 60 点未満。

■評価方法

期末試験 100%

■留意点

電卓を使用するので各自購入のこと。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 国際経営入門 (Introduction to International Management)**サブタイトル** 国際関係論から読み解く**担当教員** 小林 昭菜**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

グローバル化が進み益々国の境なしに経済活動ができる世の中になったが、国際的な舞台で経済活動を行うにはカントリー・リスクはつきものである。本講義はカントリー・リスクとはなにか？どのようなカントリー・リスクがあるのかについて学習する。

■講義分類

社会人力育成／グローバルビジネス

■到達目標

国際ビジネスに対するリスク、不可抗力の危険性を理解し、社会人としてそのような世界に飛び込むための知識をつけていく。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP5 高い志

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

国際関係がどのようなスキームで動いているのか、国際関係とは何かを理解し、グローバル化時代を生き抜くための教養をつける。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義

[個人] なし

[ペア] ノートテイキング＝ペア

[グループ] なし

[上記以外] なし

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

NHKの経済ニュース、日本経済新聞やその他の新聞を毎日読む習慣をつけること。授業で課す課題を論理的に考察しレポートとして提出すること。

■授業の概要

- 第1講 イントロダクション
- 第2講 カントリー・リスクとはなにか
- 第3講 撤退例から学ぶ
- 第4講 国際関係とはなにか
- 第5講 冷戦その1
- 第6講 冷戦その2
- 第7講 リアリズム
- 第8講 リベラリズム
- 第9講 EU
- 第10講 人権と国際規範
- 第11講 近代化論と世界システム論
- 第12講 国際関係の中で経済を問直す
- 第13講 国際関係の中で政治を問直す
- 第14講 エネルギー地政学
- 第15講 これまでの講義のまとめ

■フィードバックの要領

毎回の授業で課す課題や授業のコメントに対して毎週フィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上)：平常点(毎週の課題の出来や学習態度が非常に良い。)、試験の出来9割以上。
- 評価 A (89～80点)：平常点(毎週の課題の出来や学習態度が良い。)、試験の出来8割。
- 評価 B (79～70点)：平常点(毎週の課題の出来や学習態度がまあ良い。)、試験の出来6—7割。
- 評価 C (69～60点)：平常点(毎週の課題の出来や学習態度は良い。)、試験の出来5割。
- 評価 F (59点以下)：平常点(毎週の課題の出来や学習態度が悪い。)、試験の出来4割以下。

■評価方法

授業内で課す課題の出来：40%、授業への積極的態度や発言：25%、期末試験：35%

■留意点

講義は国際関係論に軸を置いたものである。初回と2回目の講義は講義全体の説明をするため必ず出席すること。欠席の場合は履修許可を出さない場合がある。やる気のある学生を求める。初回の授業で履修者の選抜を行う。

科目名 国際経済学 (Global Economy)**サブタイトル** 国際経済 (International Economics)**担当教員** 下井 直毅**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

この講義では、最前線事例を紹介しつつ、国際経済をめぐる問題をとりあげる。国際経済は日本経済に大きな影響を及ぼしている。グローバル化という言葉をよく耳にするが、世界の経済状況がめまぐるしく変わる中で、その動きを理解することはとても大切である。日頃、目や耳にしている出来事や現象を通して、日本や世界を取り巻く産業社会における経済動向の仕組みやメカニズムについて学んでほしい。

■講義分類

グローバルビジネス

■到達目標

世界経済の現状と課題についての基本的な知識の修得をめざす。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

ビジネスの中で最低限必要な基礎的な数学的思考力を基に、課題解決に向けたプロセスを明確にすることが出来る。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載**講義**

[個人] ワークシート
[ペア] なし
[グループ] なし
[上記以外] なし

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

授業前には、前回の講義内容について十分に理解しておくこと。講義内容の復習と次回講義の準備には、1.5 時間以上の取組が必要です。

■授業の概要

- 第1講 国際化の中の日本—日本経済の状況を概観する
- 第2講 戦後の国際経済体制の流れについて—戦後の国際経済体制の流れをおさえる
- 第3講 貿易の基本的メカニズムについて (1) 一貿易の基本的メカニズムについて理解する
- 第4講 貿易の基本的メカニズムについて (2) 一貿易の基本的メカニズムについて理解する
- 第5講 保護貿易や自由貿易の功罪—保護貿易や自由貿易について理解する
- 第6講 外国為替について—外国為替について理解する
- 第7講 為替レートの決定理論 (1) 一短期の為替レートの決定理論について理解する
- 第8講 為替レートの決定理論 (2) 一長期の為替レートの決定理論について理解する
- 第9講 為替相場制度について—様々な為替相場制度について理解する
- 第10講 国際収支表の見方 (1) 一国際収支表の見方を理解する
- 第11講 国際収支表の見方 (2) 一国際収支表の見方を理解する
- 第12講 貿易摩擦について—貿易摩擦の歴史を振り返る
- 第13講 GATT/WTO の原則と例外について—GATT/WTO の原則と例外について理解する
- 第14講 開放経済における経済政策について—開放経済における経済政策について理解する
- 第15講 まとめ—これまでの復習

■フィードバックの要領

レポートに対してコメントを記入して、フィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 世界経済の現状と課題についての基本的な知識をほぼすべて修得できている。
 評価 A (89 ~ 80 点) : 世界経済の現状と課題についての基本的な知識をかなり修得できている。
 評価 B (79 ~ 70 点) : 世界経済の現状と課題についての基本的な知識を十分に修得できている。
 評価 C (69 ~ 60 点) : 世界経済の現状と課題についての基本的な知識をある程度修得できている。
 評価 F (59 点以下) : 世界経済の現状と課題についての基本的な知識を修得できていない。

■評価方法

授業の平常点 (30%)、試験 (70%)。合計 100% で 100 点満点。

■留意点

「マクロ経済学」を履修していることが望ましい。出欠を確認する際に、本人の学生証が無い場合は、欠席扱いとする。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 財務会計 (Principle of Accounting)**サブタイトル** 財務諸表の読み方**担当教員** 木村 太一**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

貸借対照表、損益計算書、キャッシュ・フロー計算書といった財務諸表の存在を知り、これらにどのような情報が記載されているのかを知る。また、財務諸表に記載されている情報を通じて、企業がどのような状態なのかを読み取ることを目的とする。財務諸表は企業の活動をまとめたものであるから、今の企業の情報が豊富に載っている。そうした財務諸表に対して苦手意識を持たずに触れ、少しでも情報を汲み取れるようになることが、この授業の目的である。

■講義分類

ビジネス環境理解／ビジネスマネジメント／社会人力育成

■到達目標

①企業に関する情報を入手する方法を理解する。②財務指標についての計算と、それら指標の意味を理解する。③日本経済新聞の投資情報欄を比較的スムーズに読めるようになる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

財務諸表分析の手法を習得し、これを通じて個々の企業の強みと弱みを定量的に発見する能力を養い、客観的なデータを基に判断を下す能力を育てる。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義

[個人] ワークシート, T/Fテスト
 [ペア] なし
 [グループ] なし
 [上記以外] なし

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

予習よりも復習に重きを置いて、その回に用いられたテキストやレジュメの数値例で何度も計算をすること。また、新聞やニュースに注意を向けてみて欲しい。きっと学んだ用語や比率をみつかることができるはずである。(各1.5時間)

■授業の概要

- 第1講 企業情報の入手方法
- 第2講 財務諸表
- 第3講 財務諸表分析の基本
- 第4講 収益性分析①(総資産利益率)
- 第5講 収益性分析②(売上高に対する各比率)
- 第6講 収益性分析③(資産回転率)
- 第7講 安全性分析
- 第8講 キャッシュ・フロー計算書とその利用
- 第9講 ROE
- 第10講 連結財務諸表
- 第11講 セグメント情報
- 第12講 成長性分析
- 第13講 現実の財務諸表を分析する①
- 第14講 現実の財務諸表を分析する②
- 第15講 現実の財務諸表を分析する③

■フィードバックの要領

練習問題をほぼ毎週解き、それを基にした指導を行う。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : 課題および期末試験の総得点が90点以上。
 評価 A (89～80点) : 課題および期末試験の総得点が80点以上90点未満。
 評価 B (79～70点) : 課題および期末試験の総得点が70点以上80点未満。
 評価 C (69～60点) : 課題および期末試験の総得点が60点以上70点未満。
 評価 F (59点以下) : 課題および期末試験の総得点が60点未満。

■評価方法

課題 20%、期末試験 80%

■留意点

電卓を使用するので各自購入のこと。

科目名 サブカルチャー論 (Subculture Theory)**サブタイトル** 日本のサブカルチャーについて**担当教員** 中澤 弥**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

海外からも注目される日本のサブカルチャー。マンガやアニメを通して日本に興味を持つ外国人も多く、日本へのツーリズムの目玉ともなっている。本講義では、日本のサブカルチャーの歴史をひもとくとともに、その問題点をすくい取り、今後の可能性を探っていく。

■講義分類

ビジネス環境理解／社会人力育成

■到達目標

日本のサブカルチャーの流れを理解するとともに、メディアに対する思考力・判断力を得て、課題を解決する能力を身に付ける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

日本のサブカルチャーの歴史を理解し、現代のメディアにおけるサブカルチャーの位置を修得する。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義

[個人] ワークシート
 [ペア] なし
 [グループ] なし
 [上記以外] なし

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

日本のサブカルチャーの歴史について調べておく。各回の講義に備えて 1.5 時間程度の学習が必要となる。さらに問題意識を深めるための復習として 1.5 時間程度の学習を課す。

■授業の概要

- 第1講 サブカルチャーとは何か？
- 第2講 サブカルチャーを通して見る世界の中の日本
- 第3講 欧米文化におけるサブカルチャー
- 第4講 カウンターカルチャーとしてのマンガ
- 第5講 〈おたく〉から〈オタク〉へ
- 第6講 怪獣映画と日本の戦後
- 第7講 「シンゴジラ」とオタクのナショナリズム
- 第8講 寺山修司 虚構の自伝
- 第9講 オーガナイザーとしての寺山修司
- 第10講 戦う少女たち
- 第11講 アウトサイダーアートと戦う少女たち
- 第12講 人形とサブカルチャー
- 第13講 〈2・5次元〉の舞台
- 第14講 サブカルチャーの現状
- 第15講 サブカルチャーの可能性

■フィードバックの要領

各回のミニ・レポートにフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 日本のサブカルチャーについて理解し、課題を自ら発見し、説明することができる。
 評価 A (89 ~ 80 点) : 日本のサブカルチャーについて理解し、課題を自ら発見することができる。
 評価 B (79 ~ 70 点) : 日本のサブカルチャーについて理解し、その課題を説明することができる。
 評価 C (69 ~ 60 点) : 日本のサブカルチャーについて、その流れを理解している。
 評価 F (59 点以下) : 日本のサブカルチャーの流れと課題について理解することができていない。

■評価方法

各回の講義内容に基づく小レポート、小テスト 50%、OFFICE (Word) を使用した課題レポート 50%

■留意点

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 事業構想論 I (Business Concept Theory I)**サブタイトル** 創造的問題解決の理論・事例紹介**担当教員** 松本ほか**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**実務経験のある教員による授業****■講義目的**

事業構想とは、社会の不条理に立ち向かい問題解決するためのビジネスにあって、様々な障壁、ルールによる制約、環境変化などの困難を克服するために行われる取り組みを含む事業活動全般のことをいう。本学ではこれを「創造的問題解決」と呼び、問題解決力、事業構想力を身に付けるために本講義を開講している。学生の「事業を構想する力」が育まれることにつながるよう、本講義においては、「事業構想（創造的問題解決）とは何か」「どのようにしてそれは起こるのか」について、基本的な考え方や方法を本学教員が講義するとともに、実際の「事業構想事例」を、その実践者から直接聞くことによって幅広く知り、自分の将来を構想する糧としてもらうことを意図している。

■講義分類

ビジネス環境理解／ビジネス創造／ビジネスマネジメント

■到達目標

毎回異なる教員とゲストの話聞き、多摩大学における「事業構想とは何か」を説明できるようになる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

事業構想の理論（考え方）と実践事例から事業構想とは何かという基礎的な認識と知識について理解する。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義

[個人] ワークシート
 [ペア] ペアワーク
 [グループ] なし
 [上記以外] なし

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

前回に話された内容を自分のメモを元にまとめ、講演者にとっての事業構想とは何か、事業構想に関わる考え方の重要な論点、事例における成功ポイントについて整理しておく（90分程度）

■授業の概要

第1講 オリエンテーション
 第2講 多摩大学卒業生の起業家による講演
 第3講 外部講師による講演①
 第4講 事業構想の考え方・理論①
 第5講 外部講師による講演②
 第6講 事業構想の考え方・理論②
 第7講 外部講師による講演③
 第8講 事業構想の考え方・理論③
 第9講 外部講師による講演④
 第10講 事業構想の考え方・理論④
 第11講 外部講師による講演⑤
 第12講 事業構想の考え方・理論⑤
 第13講 講義のふりかえり
 第14講 最終試験
 第15講 課題レポート

■フィードバックの要領

ふりかえりの回を設けて、フィードバックする。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 事業構想について特筆すべき説明をすることができる。
 評価 A (89 ~ 80 点) : 事業構想についてよく説明することができる。
 評価 B (79 ~ 70 点) : 事業構想について一定の説明をすることができる。
 評価 C (69 ~ 60 点) : 事業構想について拙いが断片的な説明はできる。
 評価 F (59 点以下) : 事業構想についてほとんど説明することができない。

■評価方法

平常点 40%、ミニレポート 30%、最終試験 30%

■留意点

科目名 事業構想論 II (Business Concept Theory II)**サブタイトル** 創造的問題解決の理論・事例紹介**担当教員** 松本ほか**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**実務経験のある教員による授業****■講義目的**

事業構想とは、社会の不条理に立ち向かい問題解決するためのビジネスにあって、様々な障壁、ルールによる制約、環境変化などの困難を克服するために行われる取り組みを含む事業活動全般のことをいう。本学ではこれを「創造的問題解決」と呼び、問題解決力、事業構想力を身に付けるために本講義を開講している。学生の「事業を構想する力」が育まれることにつながるよう、本講義においては、「事業構想（創造的問題解決）とは何か」「どのようにしてそれは起こるのか」について、基本的な考え方や方法を本学教員が講義するとともに、実際の「事業構想事例」を、その実践者から直接聞くことによって幅広く知り、自分の将来を構想する糧としてもらうことを意図している。

■講義分類

ビジネス環境理解／ビジネス創造／ビジネスマネジメント

■到達目標

毎回異なる教員とゲストの話の聞き、多摩大学における「事業構想とは何か」を説明できるようになる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

事業構想の理論（考え方）と実践事例から事業構想とは何かという基礎的な認識と知識について理解する。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義

[個人] ワークシート
 [ペア] ペアワーク
 [グループ] なし
 [上記以外] なし

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

前回に話された内容を自分のメモを元にまとめ、講演者にとっての事業構想とは何か、事業構想に関わる考え方の重要な論点、事例における成功ポイントについて整理しておく（90分程度）

■授業の概要

- 第1講 オリエンテーション
- 第2講 外部講師による講演①
- 第3講 事業構想の考え方・理論①
- 第4講 外部講師による講演②
- 第5講 事業構想の考え方・理論②
- 第6講 外部講師による講演③
- 第7講 事業構想の考え方・理論③
- 第8講 外部講師による講演④
- 第9講 事業構想の考え方・理論④
- 第10講 外部講師による講演⑤
- 第11講 事業構想の考え方・理論⑤
- 第12講 外部講師による講演⑥
- 第13講 事業構想の考え方・理論⑥
- 第14講 講義のふりかえり
- 第15講 最終試験

■フィードバックの要領

ふりかえりの回を設けて、フィードバックする。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 事業構想について特筆すべき説明をすることができる。
 評価 A (89 ~ 80 点) : 事業構想についてよく説明することができる。
 評価 B (79 ~ 70 点) : 事業構想について一定の説明をすることができる。
 評価 C (69 ~ 60 点) : 事業構想について拙いが断片的な説明はできる。
 評価 F (59 点以下) : 事業構想についてほとんど説明することができない。

■評価方法

平常点 40%、ミニレポート 30%、最終試験 30%

■留意点

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 社会心理 (Social Psychology)**サブタイトル** 歴史に残るさまざまな心理学実験を通じ、人間の本質について考える**担当教員** 良峯 徳和**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

人間は「社会的動物である」と言われるように、私たちの意識や行動は、家族、学校、職場、地域、国など、さまざまな集団・社会を抜きにしては考えられない。この授業では、個人と社会の関わり合いについて実証的に研究する社会心理学の成果を、具体的な事例や有名な実験などを紹介しつつ、社会的な存在としての人間の行動や認知、他者と共に生活することの意味やその影響について、理解を深める。

■講義分類

顧客理解／社会人育成

■到達目標

①社会心理学の方法論や実証研究の成果について理解し、基本的な知識を身に付けること。②自分の考え方や周りの人達の生き方や行動が、さまざまな社会的要因の影響を受けていることを理解できるようになる。③この授業で学んだことを、よりよい自分の生き方、他者への理解、対人関係や集団、社会のなかでの活動のあり方に活かせるようにする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ③ ①・②で選択された事項の詳細

心理学に関する基礎的な学力を養い、社会生活で発生するさまざまな問題に心理学の観点から対処する能力を習得する。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義

[個人] T/Fテスト

[ペア] なし

[グループ] なし

[上記以外] 個人対象の4択テストなど

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

授業の開始時に毎回内容理解を確認する復習テストを行う。その準備として、1.5 時間以上の復習を行ってこよう。

■授業の概要

- 第1講 社会心理学とは何か。この授業での学習内容の全体像、授業方針を示す。
- 第2講 ミルグラムのアイヒマン実験
- 第3講 傍観者効果とは何か。キティ・ジェノビーズ事件から学ぶ。
- 第4講 集団の手抜きとは何か。リンゲルマンが行った実験をもとに、原因と対策を考える。
- 第5講 認知的不協和によって生じる「不合理」な行動はどのように説明されるか
- 第6講 スタンフォード監獄実験：権力がいかにひとを変えてしまうのか
- 第7講 協力と裏切りの心理：「囚人のジレンマ」ゲーム実際にやってみる
- 第8講 ひとを説得する技術とその心理
- 第9講 同調行動とそれを成立させる心理的メカニズム
- 第10講 集団意思決定とリスクシフト
- 第11講 ひととは感情を隠すことができるか。「微表情」と感情の関係
- 第12講 人間の心の能力をどのように測るか。
- 第13講 悲観的な性格の人と楽観的な性格の人の違いは何か
- 第14講 悲観脳のメカニズムと改善方法
- 第15講 心と脳：「自由意志」という幻想？

■フィードバックの要領

復習テスト、レポートに対し、コメントを記入してフィードバックを行う

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上)：社会心理学に関する理論をよく理解し、具体的な状況でそれを応用することができる。
- 評価 A (89 ～ 80 点)：社会心理学に関する理論をよく理解し、授業への取り組みが熱心で、積極的である。
- 評価 B (79 ～ 70 点)：社会心理学に関する理論をおおまかに理解しており、授業への取り組みもまじめである。
- 評価 C (69 ～ 60 点)：社会心理学に関する基本的な知識を有しているが、授業への取り組みがやや不足。
- 評価 F (59 点以下)：社会心理学に関する基本的な知識も理解十分でなく、授業への取り組みが不真面目。

■評価方法

小テストおよび期末試験 50%、レポート 30%、平常点 20%。ただし、授業参加は全体の 2/3 以上、小テストも全体の 2/3 以上を単位取得のための最低条件とする。

■留意点

小テストは毎回の授業の開始時に実施するため、遅刻・欠席の場合は受験できない。忌引き、就職の面接試験、インターンシップなどの理由で欠席した場合のみ、復習テスト実施後の 1 週間以内に限り、追試を受けることができる。詳細については、授業内で説明する。

科目名 消費心理 (Consumer Psychology)**サブタイトル** 消費者理解とそれを仕掛ける企業側の心理学**担当教員** 浜田 正幸**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**実務経験のある教員による授業****■講義目的**

① 消費者の心理を理解するための、消費者行動分析ができるようになる ② 商品やその価格づけ、広告などで、消費者の心理と購買行動を動かすことができるようになる ③ ビジネスの世界で、心理学を応用することができるようになる。新しい価値を創造できるようになる

■講義分類

顧客理解/ビジネスマネジメント

■到達目標

① 消費心理に関する一般的テーマや理論を把握する ② 消費心理を把握する方法を身につける ③ 消費心理や消費行動の分析方法を知り、応用できるようにする

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

産業社会で発生する消費購買行動に関する専門知識を体系的に修得、これを持って産業社会の発展に創造的に貢献する能力を修得する。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義

- [個人] ワークシート
- [ペア] ペアワーク
- [グループ] Buzz Group
- [上記以外] なし

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

事前にキーワードについて調べて整理する。フィールド (店舗など) 調査を行う (1.5 時間)。事後にワークシートの完成、あるいはレポートを提出する (1.5 時間)

■授業の概要

- 第1講 「消費心理」とは何が説明する
- 第2講 消費者心理を知るための購買プロセスモデル
- 第3講 流行の心理。ロジャーズのイノベーション普及学
- 第4講 消費者の行動分析
- 第5講 消費者の行動分析 ID-POS データの分析
- 第6講 消費者行動の総合的分析
- 第7講 消費者行動分析に関する小テスト
- 第8講 装いの心理学
- 第9講 おカネの心理
- 第10講 おカネの心理
- 第11講 おカネの心理に関する小テスト
- 第12講 サービスの心理学
- 第13講 小売店の心理学
- 第14講 サービスと小売に関する理解到達度小テスト
- 第15講 これまでの全体の振り返りと到達度確認テスト

■フィードバックの要領

毎回の課題レポートに対し、フィードバックを行い、理解を促進する。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 得点合計が 90 点以上。
- 評価 A (89 ~ 80 点) : 得点合計が 80 ~ 89 点。
- 評価 B (79 ~ 70 点) : 得点合計が 70 ~ 79 点。
- 評価 C (69 ~ 60 点) : 得点合計が 60 ~ 69 点。
- 評価 F (59 点以下) : 得点合計が 60 点未満。

■評価方法

毎回の課題レポート 30 点。達成度確認テスト 10 点 × 3 回、最終確認テスト 40 点。

■留意点

指示した時以外は、私語やスマホは禁止。指定席になる予定である。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 情報法 (Information Law)**サブタイトル** インターネット上で扱われる情報をめぐる権利関係**担当教員** 佐藤 恵太**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

情報社会で生き抜くために必須の法律知識を説明する。

■講義分類

ビジネス環境理解

■到達目標

情報のインターネットにおける利用に関連する法律問題に直面した時に、どの法律にかかわる問題かを見抜き、解決策の方向性を考える力を養うこと。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

産業社会で発生する問題に対処する専門的能力を養う

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義

- [個人] ワークシート
- [ペア] ペアワーク
- [グループ] なし
- [上記以外] なし

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

授業内容 (特に適宜行われるワークシート、小テスト) を復習して理解すること (各 1.5 時間)

■授業の概要

- 第1講 【導入】 SNS・ウェブサイトの利用時の注意事項を眺めてみよう
- 第2講 プライバシーを入口に、法律と裁判の世界を、のぞいてみよう
- 第3講 個人情報の漏洩は、なぜ問題になるの？
- 第4講 プロバイダを訴えてやる！は、うまくいくか
- 第5講 文化祭で他人の楽曲をコピーバンドで演奏していいの？
- 第6講 自分の SNS にアップロードしていた自撮り写真が他人のサイトに勝手に掲載された
- 第7講 大学に提出するレポートを作成する時、他人のサイトに掲載された写真を使ってもいいの？
- 第8講 自分のブログにタレントの写真を貼ったら、事務所から警告状が来た！
- 第9講 自分のブログに、人気映画を無料公開している YouTube サイトのリンクを貼ってよいのか
- 第10講 Facebook の「いいね」数を増やすため、投稿者にだけ値引き販売をする店舗
- 第11講 ブログのタイトルに、「広瀬すずの部屋」「サマンサタバサ・ファンの部屋」
- 第12講 ネット・オークションに出品するとき、自分で撮影した商品の写真を貼っても大丈夫？
- 第13講 ドメイン名、メタタグ、ハッシュタグと商標権
- 第14講 いけないバクリと許される模倣を、どのように区別するか
- 第15講 【授業のまとめと情報法の将来】 ロボット検索、AI 技術の革新的発展に伴う問題

■フィードバックの要領

小テストは、実施直後に解説する。期末試験については模範解答等を提供する予定。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 講義内容を正確に理解し、積極的に掘り下げた調査を行って、成果をあげている。
- 評価 A (89 ~ 80 点) : 講義内容を正確に理解している。
- 評価 B (79 ~ 70 点) : 講義内容をほぼ理解できているが、一部に理解できていない点がある。
- 評価 C (69 ~ 60 点) : 講義された事項について、基礎的な最低限の事項を理解している。
- 評価 F (59 点以下) : 講義内容の理解が不十分である。

■評価方法

期末試験 (80%)、小テストまたはワークシート (合計 20%、実施回数は、開講後に説明します)

■留意点

授業の進行によってシラバスを修正することがあり、授業中に変更後内容を説明します。また、配布物は原則として配布回の次の回までしか保管しません。

科目名 情報倫理 (Information Ethics)**サブタイトル** 情報社会における諸問題と倫理**担当教員** 齋藤 S. 裕美**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

本講義は、情報通信技術と人々の倫理観についての関わり、社会生活における情報の価値、情報通信技術の役割や影響力などを理解し、情報社会における望ましい態度やあり方、情報倫理の必要性を理解することを目的とする。現代の社会において、情報通信技術は必要不可欠な存在である。情報通信技術の進展によって生じた諸問題について把握するとともに、それらの問題を解決するひとつの緒として情報倫理という考え方やその必要性について考える。また、情報関連の法律や規制、最前線事例についても学習する。

■講義分類

ビジネス環境理解／ビジネス ICT

■到達目標

次の①～④を説明できる、⑤を身につける。①個人情報やプライバシー、②知的財産や著作権、③コミュニケーションの変化、④情報通信技術の発達による生活や社会の変化、⑤情報社会における倫理観

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

情報倫理に関わる問題に対し、その原因を分析し、問題解決に向けた自己の考えを他者に対して説明し、説得する能力、他者の考えを汲み取り、互いの意見を擦り合わせて新たな考えや解決方法を生み出せる能力を養う。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義

- [個人] ワークシート
- [ペア] ペアワーク
- [グループ] Buzz Group
- [上記以外] なし

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

前講までの資料をよく読んでおくこと。また、講義資料に記載されているデータの出所を確認し、当該データや関連のデータにもあたっておくこと。必要な予習・復習時間は各 1.5 時間程度 (合計 3 時間程度) である。

■授業の概要

- 第1講 情報通信技術の進展と情報社会
- 第2講 個人情報と個人情報保護法
- 第3講 マイナンバー制度と個人情報の価値
- 第4講 表現の自由とプライバシー
- 第5講 インターネットとコミュニケーション
- 第6講 SNS とその功罪
- 第7講 SNS とプライバシー
- 第8講 知的財産と知的財産制度
- 第9講 著作権制度
- 第10講 著作権と TPP
- 第11講 身近な生活における情報
- 第12講 社会生活における情報
- 第13講 労働環境の変化
- 第14講 匿名性の問題と対策
- 第15講 情報社会における倫理観

■フィードバックの要領

各講義において Google クラウドルームを用いてフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 到達目標①～④を関連づけ、自分の考察を含めて的確に説明できる。⑤が十分である。
- 評価 A (89 ～ 80 点) : 到達目標①～④を個別に、自分の考察を含めて説明できる。⑤が十分である。
- 評価 B (79 ～ 70 点) : 到達目標①～④のうち 2 つ以上を説明できる。⑤が十分である。
- 評価 C (69 ～ 60 点) : 到達目標①～④のうち 1 つ以上を説明できる。⑤が十分である。
- 評価 F (59 点以下) : 講義内容について著しく理解が不足している。

■評価方法

レポート 40%、授業内の課題 60%に授業への参加態度を加味する。

■留意点

- ①著作権検定、個人情報保護法検定の内容に一部対応。②状況によって、講義内容や扱う回の入替えを行う場合がある。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 スポーツ II (シェイプアップフィットネス) (Sports II-Fitness)**サブタイトル** シェイプアップフィットネス**担当教員** 梅澤 佳子**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

スポーツの諸側面を学ぶことによって、(1)自分の体を知り、自ら「育てる」「つくる」「維持する」ことができる知識や能力を身につけること。(2)生涯にわたってスポーツ文化を楽しむ能力(「する」だけでなく、「みる」「よむ」などの楽しみかたもあります)を身につけること。(3)スポーツ文化を通じて、仕事生活、家庭生活、その他余暇生活など、人生全体を豊かにしていくための資質を、授業内外のさまざまな体験を通じて獲得していくこと。(4)スポーツの価値についての知見を深めることを目的としています。

■講義分類

社会人力育成

■到達目標

「講義目的」に記載されている目的に即した、個々人の発展が見られることが目標であり、学生一人ひとりの状況に応じた課題を達成することが個人の到達目標となる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

現状を分析して課題を明らかにできる課題発見力、課題解決に向けたプロセスを明らかにして準備できる計画力を身につける。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義

[個人] なし

[ペア] ヘアワーク

[グループ] PBL

[上記以外] 多摩地域の健康づくり講座を視察する。

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

健康、身体運動、スポーツの意義について広く理解すべく、参考文献、報道、その他の情報を十分に蒐集し理解しておくこと。(各1.5時間)

■授業の概要

第1講 本講義の目的、到達目標、受講にあたっての注意点等について説明する。

第2講 身体測定・体力測定

第3講 ストレッチと身体ほぐし①

第4講 ストレッチ・健康トレーニング①

第5講 健康トレーニング②

第6講 ストレッチとトレーニング③

第7講 ストレッチとトレーニング④

第8講 ストレッチとトレーニング⑤

第9講 有酸素運動の理論と実践

第10講 有酸素運動とトレーニング

第11講 有酸素運動を体験する

第12講 身体測定②

第13講 3日間の食生活調査表に関する説明

第14講 3日間の食生活調査表の作成②

第15講 振り返りとディスカッション

■フィードバックの要領

トレーニング日誌の確認とコメント記載によるコミュニケーション等

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : 本講義の到達目標に十分達している。

評価 A (89～80点) : 技能の開発が十分行われ、将来生かされる準備ができています。

評価 B (79～70点) : 技能や知識、態度の形成が行われたと認められる。

評価 C (69～60点) : 一定の経験とこれに対する自己理解、態度形成が行われたと認められる。

評価 F (59点以下) : 講義目的に沿った活動ができなかったとみられる。

■評価方法

・平常点(参加への意欲、姿勢等) : 60% (各回の講義内容と目標を理解し身体運動を行ったかを3段階で評価します。)

・課題の提出 : 40% (指定された内容について課題を作成し提出してもらいます。)

■留意点

①講義と実技の組み合わせになります。②受講希望者が多数の場合、学期の第1講出席者を優先し抽選となります。③欠席が3分の1を超えた場合、原則として単位を付与しません。また就職活動による欠席は考慮しませんので注意してください。今年度の講義内容については、オリンピック・パラリンピック2020関係行事により講義内容を変更する場合があります。

科目名 スポーツ II (世代間交流健康トレーニング) (Sports II-Intergenerational health training)**サブタイトル** 筋力トレーニング、ストレッチ、体力測定**担当教員** 大澤 拓也**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

大学周辺地域在住の方々とともに、筋力トレーニング、ストレッチなどを行い、自身の体を動かすとともに、他の世代との交流をはかります。また、体力測定を行い、自身や他の学生、そして他の世代の体力や健康を理解します。これらは自身の身体理解につながるだけでなく、家族のように自分の周りの方々と、そして、将来の自分を考える新しい視点を持てるようになります。体力に自信のある学生は自分よりも年長の方々と引っ張っていく経験、体力に自身のない学生は地域の方々と共に体をつくる経験を積んでもらいたいと思います。

■講義分類

社会人力育成

■到達目標

体を動かすことにより、自身の体を理解すること、そして同世代や他世代の方との交流により、他者との関わり方を向上させることを目標とする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP3 関心と意欲 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

運動を通じて、他の世代と交流することにより、自身が他者に興味を持ち、他者を理解できるようになるだけでなく、他者に自身の興味を持たせ、自身を理解してもらえる能力を養える。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

演習

- [個人] なし
- [ペア] 相互教授法
- [グループ] なし
- [上記以外] 他の学生や地域在住者との交流、相互教授

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

予習としては、体に関するテレビや雑誌を見るように心がける。また、復習としては、講義内で実施する筋力トレーニングやストレッチ等、また体力測定の方法を自宅で実施する。(各 1.5 時間)

■授業の概要

- 第1講 オリエンテーション
- 第2講 体力測定の理解と実践①
- 第3講 体力測定の理解と実践②
- 第4講 世代間交流①：地域在住者の体力測定会
- 第5講 世代間交流②：自体重筋力トレーニング 1-1、体づくり講座 1
- 第6講 世代間交流③：自体重筋力トレーニング 1-2、体づくり講座 2
- 第7講 世代間交流④：自体重筋力トレーニング 2-1、体づくり講座 3
- 第8講 世代間交流⑤：自体重筋力トレーニング 2-2、体づくり講座 4
- 第9講 世代間交流⑥：自体重筋力トレーニング 3-1、体づくり講座 5
- 第10講 世代間交流⑦：自体重筋力トレーニング 3-2、体づくり講座 6
- 第11講 世代間交流⑧：自体重筋力トレーニング 4-1、体づくり講座 7
- 第12講 世代間交流⑨：自体重筋力トレーニング 4-2、体づくり講座 8
- 第13講 世代間交流⑩：学生と地域在住者の体力測定会
- 第14講 体力測定結果のまとめと考察①
- 第15講 体力測定結果のまとめと考察②

■フィードバックの要領

レポートに対して、コメントを記入してフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上)：スキル開発と同時にその社会的意義の理解がなされていること。
- 評価 A (89 ~ 80 点)：技能の開発が十分行われ、将来生かされる準備ができていること。
- 評価 B (79 ~ 70 点)：技能や知識、態度の形成が行われたと認められること
- 評価 C (69 ~ 60 点)：一定の経験とこれに対する自己理解、態度形成が行われたと認められること
- 評価 F (59 点以下)：「スポーツ」の講義目的に沿った活動ができなかったとみられる場合、F 評価とします。

■評価方法

平常点 60%、レポート 40%

■留意点

①高校までの「体育」とコンセプトが異なることに留意して履修してもらいたい。②各講義において、指示が異なるので、これによく留意して受講してもらいたい。③原則として、受講希望者は、学期の第1講の日時に、指定された教室に集合しなければならない。(T-NEXT にて指示する)

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 スポーツ II (テニス) (Sports II-Tennis)**サブタイトル** テニスを通じて学ぶ生涯スポーツの価値。**担当教員** 佐藤 文平**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

本演習では、ラケットとボールを操作するために必要な眼と手のコーディネーショントレーニングを行いながら、テニスの基本を学んでいく。また、ゲームを通じて、マナーや他人とのコミュニケーションスキルも習得する。技術の定量化にはボール挙動測定器 TRACKMAN を用い、ボール速度やボール回転速度の理解を深める。

■講義分類

顧客理解/社会人力育成

■到達目標

テニスは、生涯スポーツとして社会人となってからも個人の体力に応じて楽しめるスポーツである。本演習の目的は、テニスの打球スキルとルールを学び、ゲーム（シングルス、ダブルス）を自らコーディネートし、楽しめるようになる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

生涯スポーツであるテニスの最低限必要な技術を習得するとともに、安全に配慮した他人とのコミュニケーション能力を養う。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

演習

[個人] プレゼンテーション
 [ペア] ペアワーク/相互教授法
 [グループ] PBL/ Ball-toss
 [上記以外] なし

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

テニスの基本的な歴史やルールを理解して授業に臨むことを基本とする。(1.5 時間)

■授業の概要

- 第1講 テニスで起きる傷害について予習し、予防するために必要な準備運動を学ぶ。
- 第2講 ストロークの習得①。
- 第3講 ストロークの習得②。
- 第4講 ネットプレーの習得。
- 第5講 サーブの習得。
- 第6講 ボール挙動測定器 TRACKMAN を用いてのサーブ速度測定実習①。
- 第7講 講義①。
- 第8講 ダブルス①。
- 第9講 ダブルス②。
- 第10講 ダブルス③。
- 第11講 講義②。
- 第12講 テニスにおけるメンタルトレーニング。
- 第13講 スキルテスト①。
- 第14講 ボール挙動測定器 TRACKMAN を用いてのサーブ速度測定実習②。
- 第15講 まとめ。

■フィードバックの要領

スキルテストやレポート課題に対してコメントフィードバックを行なう。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 練習等のコーディネート能力が高く授業参加意欲、技術習得レベルともに高い。
 評価 A (89 ~ 80 点) : 平常点および授業参加意欲があり、テニスの基本技術が備わっている。
 評価 B (79 ~ 70 点) : テニスの技術習得レベルは平均だが、平常点および授業参加意欲が不十分。
 評価 C (69 ~ 60 点) : 平常点、授業参加意欲、テニスの技術習得レベルが低い。
 評価 F (59 点以下) : 平常点、授業参加意欲、テニスの技術を習得する意欲がない。

■評価方法

技術テスト 80%、レポート 20%。

■留意点

個人でラケットを所有している学生は、各々のラケット、テニスシューズで授業に参加することが好ましい。安全面配慮のため、運動着・運動靴の着用は必須。

科目名 スポーツ II (フットサル) (Sports II-Futsal)**サブタイトル** フットサルと出会い、その奥深さをしるための入門スクール**担当教員** 福角 有祐**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

①人生を豊かにするためのスポーツ教養の一つとして、フットサルの知識と技能を身に着けること。②フットサルを実践することを通じて、社会人として求められる基礎能力であるコミュニケーションや判断力、実行力、協同する力などを育成すること。③フットサルを通じて、競技者へのシンパシーを獲得し、観戦する(応援する)価値について知ること

■講義分類

顧客理解/ビジネスマネジメント/社会人力育成

■到達目標

競技のルールやマナーの概要を知り、その面白さ、楽しさについて十分理解し他人にもそれを伝えることができる。フットサルゲームに参加し協同者と協力して楽しむことができる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

フットサル競技の特性は、そのスピード感であり、判断力、決断力、実行力がきわめて大切であり、社会人力育成につながる

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

演習

[個人] なし
[ペア] ペアワーク
[グループ] なし
[上記以外] なし

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上)及び具体的な内容

スキル開発だけでなく、スポーツの意義や社会的な存在価値について理解するべく、スポーツに関する文献、報道、その他の情報を十分に収集し、理解しておくこと。(1.5時間)

■授業の概要

- 第1講 クラスメンバーの決定
- 第2講 フットサルに出会う!
- 第3講 フットサル競技に必要な基礎的技能の習得①
- 第4講 フットサル競技に必要な基礎的技能の習得②
- 第5講 フットサル競技に必要な基礎的技能の習得③
- 第6講 フットサルの応用技術・戦術を学ぶ①
- 第7講 フットサルの応用技術・戦術を学ぶ②
- 第8講 フットサルの応用技術・戦術を学ぶ③
- 第9講 フットサルの応用技術・戦術を学ぶ④
- 第10講 フットサル競技の実践①
- 第11講 フットサル競技の実践②
- 第12講 フットサル競技の実践③
- 第13講 フットサル競技の実践④
- 第14講 フットサル競技の実践⑤
- 第15講 全体の振り返り

■フィードバックの要領

担当教員から学びの状況と今後の方向性について直接アドバイスします。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : スキル開発と同時にその社会的意義の理解がなされていること。
 評価 A (89～80点) : 技能の開発が十分行われ、将来行かされる準備ができていないこと。
 評価 B (79～70点) : 技能や知識、態度の形成が行われたと認められること。
 評価 C (69～60点) : 一定の経験とこれに対する自己理解、態度形成が行われたと認められること。
 評価 F (59点以下) : 「スポーツ」の講義目的に沿った活動ができなかったとみられる場合、F評価とします。

■評価方法

平常点 100%

■留意点

高い競技レベルを前提としてはいない。むしろ、初心者や、スポーツ未経験者にスポーツ体験をしてもらうことを重視している。経験者には、これまでの経験を踏まえて、初心者受講生へのコーチングなどを通じてよりスポーツへの理解を深めてもらうことを期待する。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 スポーツと健康 (Sports and Health)

サブタイトル スポーツ文化と健康に関する基礎知識を学ぶ

担当教員 梅澤 佳子

対象学年 2年生以上

区分 春学期

■講義目的

健康の保持増進のために身体運動は不可欠である。身体との関わり方を間違えると逆効果となり、健康を損ねてしまうことになりかねない。人生100年時代を迎える学生の皆さんが、健康に関する知識やスポーツ文化を学び、実践することで充実した生活を送ってくれるよう願っている。講義では、①健康の保持増進のための3大条件(身体運動・栄養・休養)に関する基本的な知識、②身体運動やスポーツを安全に効果的に行うための基本的知識、③産業社会における健康やスポーツの意味や価値等々、幅広い知識を学ぶことを目的としている。

■講義分類

ビジネス創造/社会人力育成

■到達目標

1. 現代社会における健康課題を理解し自ら対策に取り組める能力を身につける。2. 健康管理方法、身体運動、スポーツとの関わり方を正しく理解する。4. 運動、スポーツ、レジャー、レクリエーションの享受能力を高める。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

社会の発展に積極的に関与し問題解決に向かう姿勢。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義

- [個人] ワークシート
- [ペア] ペアワーク
- [グループ] なし
- [上記以外] なし

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

事前に予習のための用語やポイントを説明するので指定図書等で予習すること。講義後は、講義資料とノートを参考に復習を行うこと。(各1.5時間)

■授業の概要

- 第1講 講義の目的、内容、予習・復習の仕方、評価基準、評価の方法等についての説明
- 第2講 世界保健機構(WHO)の健康定義、健康問題、問題解決の現状
- 第3講 日本国内の健康課題と取り組み、健康産業、健康ビジネスについて
- 第4講 ライフステージにあった身体運動と健康管理①
- 第5講 ライフステージにあった身体運動と健康管理②
- 第6講 ライフステージにあった身体運動、健康管理③
- 第7講 ライフステージにあった身体運動、健康管理④
- 第8講 ライフステージにあった身体運動、健康管理⑤食の重要性について
- 第9講 身体運動・トレーニングの基礎理論①
- 第10講 身体運動・スポーツの起源、文化としてのスポーツ
- 第11講 スポーツとは何か・近代・現代社会とスポーツ
- 第12講 社会的からだについて
- 第13講 まとめ
- 第14講 授業内テスト
- 第15講 全体のまとめ、試験の解答と解説

■フィードバックの要領

次の講義での回答、メールでの対応。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上) : 講義内容について十分に理解し、オリジナリティが発揮されている。
- 評価 A (89～80点) : 授業の内容について十分に理解し、自分の考えもまとめて表現できている。
- 評価 B (79～70点) : 授業の内容について理解しているが、その内容の表現が不十分である。
- 評価 C (69～60点) : 学んだ内容について理解していない。
- 評価 F (59点以下) : 著しく理解が不十分である。

■評価方法

講義内の課題提出による評価が40%、試験または課題が60%を基本とします。絶対評価方法にて評価します。

■留意点

出席は評価のための前提条件です。欠席が3分の1を越えた場合、原則として単位を付与しません。就職活動による欠席は考慮しませんので、3年までに履修してください。

科目名 地域スポーツ論 (Local Sports Theory)**サブタイトル** スポーツが現代の地域社会にもたらす価値とは。**担当教員** 佐藤 文平**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

本講義では、スポーツが地域社会にもたらす価値を理解しながら、高齢化社会に寄与できることは何かを考えられる視点を育む。スポーツ(する・みる・ささえる)をもってQOLの向上を考える。

■講義分類

顧客理解/社会人力育成

■到達目標

学生主体の調査をもとにグループで多摩地域の地域スポーツを創造し、実践する。ケーススタディやグループディスカッションを通じて得るコミュニケーションスキルをもって、幅広い年齢層との地域スポーツを構築する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

地域スポーツの価値を理解し、実践的理解を深め、今後の地域社会に寄与できるアイデアを創造する能力を育む。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載**講義**

[個人] プレゼンテーション
[ペア] ペアワーク/相互教授法
[グループ] PBL/Ball-toss
[上記以外] なし

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上)及び具体的な内容

各回の予習課題には最低限 1.5 時間程度の学習が必要となる。さらに毎回の講義内容で学んだ事柄について積極的に知見を広げ、問題意識を深めるための復習として、1.5～2時間程度の復習が必要となる。

■授業の概要

- 第1講 本講義の概要、目的、意味を理解する(ガイダンス)。
- 第2講 現代社会の傾向、仕組み、問題について学ぶ。
- 第3講 地域スポーツとはなにか①
- 第4講 地域における“する”スポーツがもたらす価値を考える。
- 第5講 地域における“みる”スポーツとは何か。
- 第6講 地域における“ささえる”スポーツとは何か。
- 第7講 スポーツウェルネス、スポーツSDGsの在り方を考える。
- 第8講 ジェロントロジーとスポーツとの融合。
- 第9講 北欧に学ぶジェロントロジー。
- 第10講 総合型地域スポーツクラブ。
- 第11講 Jリーグから学ぶ地方創生。
- 第12講 スポーツを活用した、現代社会におけるコミュニティと街づくりを学ぶ。
- 第13講 実践的課題演習①
- 第14講 実践的課題演習②
- 第15講 講義のまとめ。

■フィードバックの要領

講義内で提出されたレポートに対する回答等でフィードバックする。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 出席も十分にあり内容を理解している。優れた提案・意見をレポートに反映できる。
 評価 A (89～80 点) : 出席も十分にあり内容を理解し、自身の意見を持てるようになった。
 評価 B (79～70 点) : 講義に積極的に参加し、内容を理解している。
 評価 C (69～60 点) : 講義に出席し、内容を理解している。
 評価 F (59 点以下) : 講義への出席もなく、理解も乏しい。

■評価方法

平常点 (70%)、レポート課題 (30%) を絶対評価: 多摩大学の評価基準に基づいて評価します。

■留意点

やむを得ず欠席の場合は、証明するものを提出し、考慮を考える。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 地域政策プランニング (Regional Policy Planning)**サブタイトル** 都市・地域活性化の政治経済学・公共政策論**担当教員** 中庭 光彦**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**実務経験のある教員による授業****■講義目的**

地域の課題解決には、市場を中心とする手法だけではなく、政府・企業・市民等が連携して課題対策を立案する公共政策による方法がある。地域政策プランニングでは主に国や地方政府が中心となる課題解決手法を取り扱う。この場合、問題を捉えるフレームと因果関係の理解が重要なため、本講義では政治学の側面から地域活性化の課題・フレーム・政策立案について事例と理論の両面から考える。

■講義分類

顧客理解／ビジネス環境理解／地域ビジネス

■到達目標

- ・知識、考え方を覚え理解できる。
- ・知識、考え方を言葉で説明でき、自分で長文情報を調査できる。
- ・知識、考え方を社会の中で他の事例に応用できる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

- ・知識、考え方を覚え理解できたか。
- ・知識、考え方を言葉で説明できるか。自分で長文情報を調査できるか。
- ・知識、考え方を社会の中で他の事例に応用できるか。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義

[個人] ワークシート、T/Fテスト

[ペア] なし

[グループ] KJ法

[上記以外] なし

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

講義内容のまとめ直しと次回レジュメを調べ、予習復習を行う(3時間)。次回、テストを行う。

■授業の概要

- 第1講 政治から政策へー公共政策とは何か
- 第2講 原因が明確な政策と不確実な政策
- 第3講 政策過程とフレーミング
- 第4講 都市・地域活性化とは何か
- 第5講 課題発見と社会システム①—空き家問題の因果関係図をつくる
- 第6講 課題発見と社会システム②—情報の非対称性
- 第7講 課題発見と社会システム③—社会保障
- 第8講 課題発見と社会システム④—環境問題と囚人のジレンマ
- 第9講 国土計画と地域政策の推移
- 第10講 政策失敗学①—中心市街地活性化
- 第11講 政策失敗学②—選挙制度、小選挙区制
- 第12講 政策失敗学③—東日本大震災復興
- 第13講 政策失敗学④—地方の人口減少
- 第14講 政策評価
- 第15講 到達度テスト・応用力レポート

■フィードバックの要領

ミニレポート、文献レポートについては講評を行う。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : キーワードをつなげ多様な問題を理解し、客観的に他例の応用説明と意見を表現できる。

評価 A (89～80点) : キーワードを元に問題を理解し、客観的に他例を理解し応用説明ができる。

評価 B (79～70点) : キーワードを理解し、説明ができ、他例を理解し応用説明ができる。

評価 C (69～60点) : キーワードは書けるが理解が不十分で、他例の理解と応用説明も不十分。

評価 F (59点以下) : キーワードが書けず、他例も説明できない。

■評価方法

前回授業についてのミニテスト：30％／到達度テスト・応用力レポート：50％／文献レポート：20％（テーマを設定し関連文献を3冊読み、レポート作成し7回目までにT-Nextで提出。）

■留意点

1. 第1回目は必ず出席すること。

科目名 地域ビジネスプランニング (Regional Business Planning)**サブタイトル** 都市・地域活性化の経営戦略論**担当教員** 中庭 光彦**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**実務経験のある教員による授業****■講義目的**

地域ビジネス論では日本・世界各地に、地域・歴史特有の事業（ビジネス）があると考える。そして、事業を課題解決手法として捉え、事業内、事業間の多様な差異を比較し、国内外の課題解決手法として事業を考える。地域・歴史毎に特徴のある事業を捉えるために、地域ビジネスプランニングでは、企業活動を主体とした課題解決戦略について理論と事例の両面から解説する。

■講義分類

顧客理解／ビジネス環境理解／地域ビジネス

■到達目標

- ・知識、考え方を覚え理解できる。
- ・知識、考え方を言葉で説明でき、自分で長文情報を調査できる。
- ・知識、考え方を社会の中で他の事例に応用できる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

- ・知識、考え方を覚え理解できたか。
- ・知識、考え方を言葉で説明できるか。自分で長文情報を調査できるか。
- ・知識、考え方を社会の中で他の事例に応用できるか。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義

[個人] ワークシート, T/Fテスト

[ペア] なし

[グループ] KJ法

[上記以外] なし

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5時間以上）及び具体的な内容

講義内容のまとめ直しと次回レジュメを調べ、予習復習を行う（3時間）。次回、テストを行う。

■授業の概要

- 第1講 地域ビジネスのフレーム①課題・ビジネスモデル・外部環境
 第2講 地域ビジネスのフレーム②便益とリスクのバランス
 第3講 地域ビジネスのフレーム③差別化、比較指標、解釈
 第4講 地域ビジネスで取り組む課題①
 第5講 地域ビジネスで取り組む課題②
 第6講 立地戦略
 第7講 ビジネスモデル①基本的サプライチェーン
 第8講 ビジネスモデル②プラットフォームビジネスモデル
 第9講 ビジネスモデル③シェアリングビジネスモデル
 第10講 移動と交通のイノベーション
 第11講 都市再開発
 第12講 観光地づくり
 第13講 水ビジネス
 第14講 企業による課題解決の限界
 第15講 到達度テスト・応用レポート

■フィードバックの要領

ミニレポート、文献レポートについては全体的な講評を行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上) : キーワードをつなげ多様な問題を理解し、客観的に他例の応用説明と意見を表現できる。
 評価 A (89～80点) : キーワードを元に問題を理解し、客観的に他例を理解し応用説明ができる。
 評価 B (79～70点) : キーワードを理解し、説明ができ、他例を理解し応用説明ができる。
 評価 C (69～60点) : キーワードは書けるが理解が不十分で、他例の理解と応用説明も不十分。
 評価 F (59点以下) : キーワードが書けず、他例も説明できない。

■評価方法

前回授業についてのミニテスト：30％／到達度テスト・応用力レポート：50％／文献レポート：20％（テーマを設定し関連文献を3冊読み、レポート作成し7回目までにT-Nextで提出。）

■留意点

1. 第1回目に必ず出席すること。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 中級簿記 (Intermediate Level Bookkeeping)**サブタイトル** 複式簿記の基礎と会計理論**担当教員** 木村 太一**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

本講義では、「初級簿記」取り扱った会計処理に加えて、種々の取引に対する会計処理を学んでいく。前半は「初級簿記」の内容を補うような位置付けであり、「初級簿記」の内容に加えて本講義の内容を学ぶことで、基礎的な取引を一通りマスターすることになる。また、講義の後半は発展的な会計処理を学びこれを題材とした会計理論を取り扱う。「初級簿記」や本講義の前半で取り扱うような取引や事象の場合、考え方に応じて会計処理が変化することは減多にないが、現代会計が取り扱う多くの取引や事象は、考え方に応じてその処理が変化するのが多くある。こうした取引や事象を取り扱い、会計を取り巻く様々な問題を考えていきたい。

■講義分類

ビジネス環境理解／ビジネスマネジメント／社会力育成

■到達目標

①「初級簿記」に引き続いて、複式簿記において取引をどのように記録していくかを学んでいく。なお、本講義前半にて扱う会計処理は、東京商工会議所が主催する日商簿記検定試験3級の内容をカバーしている。②現代会計がどのような考え方の下に成立しているのか、どのような問題を抱え、解決が模索されているのかを理解する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

商業簿記に関する一通りの知識を得るとともに、企業が行う様々な取引や企業を取り巻く経済事象に関する理解を得ることや簿記の構造に関する理解を得る。また、現代会計の「存在の理屈」について思量する。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義

[個人] ワークシート, T/Fテスト
 [ペア] なし
 [グループ] なし
 [上記以外] なし

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上) 及び具体的な内容

予習よりも復習に重きを置いて、その回に用いられたテキストやレジュメの数値例で何度も計算をすること。また、新聞やニュースに注意を向けてみて欲しい。きっと学んだ用語や比率をみつけることができるはずである。(各 1.5時間)

■授業の概要

- 第1講 商品売買①
- 第2講 商品売買②/現金・預金
- 第3講 小口現金/クレジット売掛金/電子債権債務
- 第4講 金銭貸借/固定資産
- 第5講 仮払金・仮受金/給与/訂正仕訳/現金過不足
- 第6講 貯蔵品・当座借越/貸倒れ
- 第7講 減価償却/経過勘定
- 第8講 資本取引/税金/商品有高帳
- 第9講 これまでのまとめ
- 第10講 有価証券の評価①
- 第11講 有価証券の評価②/固定資産の減損①
- 第12講 固定資産の減損②
- 第13講 組織再編と連結財務諸表①
- 第14講 組織再編と連結財務諸表②
- 第15講 まとめ

■フィードバックの要領

練習問題を解き、それを基にした指導を行う。

■評価基準

評価 A+ (90点以上)：期末試験の総得点が90点以上。
 評価 A (89～80点)：期末試験の総得点が80点以上90点未満。
 評価 B (79～70点)：期末試験の総得点が70点以上80点未満。
 評価 C (69～60点)：期末試験の総得点が60点以上70点未満。
 評価 F (59点以下)：期末試験の総得点が60点未満。

■評価方法

期末試験 100%

■留意点

本講座は「初級簿記」の単位を有する者のみを対象とする。電卓を使用するので各自購入のこと。また、教科書は指定した本の最新の版を用いるので、表記に関わらず最新版を用意すること。

科目名 中国ビジネスコミュニケーション I (Chinese Business Communication I)**サブタイトル** 中国人と中国の最新ビジネス事情について**担当教員** 田 園**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

中国人の行動上の特徴、思考様式を理解し、簡単なビジネス文書を作成し、変化しつつある新しい中国ビジネス事情を知ることを通して、異文化理解を深めるためのコミュニケーション能力向上を目指す。

■講義分類

グローバルビジネス

■到達目標

①ビジネスに特化したスキルと知識の習得、②異文化理解を深めるためのコミュニケーション能力を向上する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP5 高い志

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

現代中国の社会と経済の現状を理解した上で、ビジネス場面におけるコミュニケーションの能力を向上する。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義

[個人] ワークシート
[ペア] なし
[グループ] Buzz Group
[上記以外] なし

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

授業前に、キーワードとなっている専門用語を事前に調べて、理解しておく。授業後、中国経済に関連する記事を日本経済新聞などで目を通す。(各 1.5 時間)

■授業の概要

- 第1講 ガイダンス
- 第2講 中国人について：①メンツを重んじる
- 第3講 中国人について：②輪の文化
- 第4講 中国人について：③年功序列
- 第5講 中国人について：④「80後」の中国人
- 第6講 中国ビジネステーブルマナー
- 第7講 実践：ビジネス連絡文書の書き方
- 第8講 中国の産業について：①その展開
- 第9講 中国の産業について：②産業構造の変化
- 第10講 事例研究：アリババの事業展開
- 第11講 中国の企業
- 第12講 日本企業の中国進出
- 第13講 中国ビジネスのリスクとチャンス
- 第14講 筆記テスト
- 第15講 課題の作成

■フィードバックの要領

課題に対し、添削を記入してフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上)：特に優れているもの
 評価 A (89～80 点)：優れているもの
 評価 B (79～70 点)：一応の努力が認められるもの
 評価 C (69～60 点)：合格と認められる最低限の水準を満たしているもの
 評価 F (59 点以下)：C の水準に達しないもの

■評価方法

期末テスト 60%、課題達成状況 20%、平常点 20% による総合評価

■留意点

実際の状況により、授業内容や授業の進度が多少変更となる場合がある。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 中国ビジネスコミュニケーション II (Chinese Business Communication II)**サブタイトル** 中国人と中国の最新ビジネス事情について**担当教員** 田 園**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

中国ビジネスコミュニケーション I に続き、中国人の行動上の特徴、思考様式を理解し、変化しつつある新しい中国ビジネス事情を知ったうえで、異文化理解を深めるためのコミュニケーション能力向上を目指す。

■講義分類

グローバルビジネス

■到達目標

①ビジネスに特化したスキルと知識の習得、②異文化理解を深めるためのコミュニケーション能力を向上する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP5 高い志

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

現代中国の社会と経済の現状を理解したうえで、ビジネス場面におけるコミュニケーションの能力を向上する。

■授業形態 AL 手法 ※該当する項目のみ記載

講義

[個人] プレゼンテーション／ワークシート
 [ペア] なし
 [グループ] Buzz Group
 [上記以外] なし

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

授業前に、キーワードとなっている専門用語を事前に調べて、理解しておく。授業後、中国経済に関連する記事を日本経済新聞などで目を通す。(各 1.5 時間)

■授業の概要

- 第1講 ガイダンス及び春学期に習った内容を顧みる
- 第2講 中国人の伝統的な消費意識
- 第3講 「80 後」たちの消費意識
- 第4講 中国人は最も気前よく金をかけるもの
- 第5講 中国人の金銭感覚
- 第6講 中国人の資産運用と投資について
- 第7講 実践：中国に関する新しいビジネス事情——「11. 11」について
- 第8講 プレゼンテーションの作成について
- 第9講 中国の越境 EC によるショッピング
- 第10講 モバイル決済の事例研究：①配車サービス
- 第11講 モバイル決済の事例研究：②自転車シェアリング
- 第12講 モバイル決済の事例研究：③シェアリングエコノミー
- 第13講 中国ビジネスの在り方
- 第14講 復習及び総括
- 第15講 プレゼンテーションの発表

■フィードバックの要領

課題に対し、添削を記入してフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上)：特に優れているもの
 評価 A (89～80 点)：優れているもの
 評価 B (79～70 点)：一応の努力が認められるもの
 評価 C (69～60 点)：合格と認められる最低限の水準を満たしているもの
 評価 F (59 点以下)：C の水準に達しないもの

■評価方法

プレゼンテーションの発表の成績 60%、課題達成状況・レポート 20%、平常点 20%による総合評価

■留意点

授業の進行具合によって、授業内容や授業の進度が多少変更となる場合がある。

科目名	データサイエンス I (Data Science I)		
サブタイトル	データ利活用の基礎的スキル		
担当教員	久保田 貴文	対象学年	2年生以上
		区分	春学期

■講義目的

ビジネスのインターネット化、ハードウェアの低廉化、デバイスやセンサーの多様化 (IoT 含む) により、データの利活用は現在のビジネスに欠くべからざるものとなっている。本講義では、データ利活用の基礎力の習得を目指し、データ分析の入門を取り扱う。具体的には、データ分析プロセスについていくつかのフレームワークを学び、データの要約と可視化、データの比較と関係性の分析、因果関係の検証の実際的手法についての知識習得と実践を行ってもらう。このようなスキルは現在のビジネスでは会社のどの部署でも必要とされるものであるため、受講をお勧めする。

■講義分類

ビジネス環境理解

■到達目標

データを活用して、データの加工・変換、特徴の解明、関係性の把握、グループ間の差異の検出、複数の変数感の傾向を説明など、基礎的な考え方やスキルの修得を目標とする。学修の内容としては統計検定 3 級程度を目標とする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ① 最も身につけられる事項 ② 2 番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ③ ①・②で選択された事項の詳細

データ分析の基礎技術の学習により、産業界における課題に数理的にアプローチする技能を習得する

■授業形態 AL 手法 ※該当する項目のみ記載

講義

[個人] ワークシート
[ペア] なし
[グループ] なし
[上記以外] なし

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

統計的な考え方について該当する項目をあらかじめ調べる (1.5 時間)。

■授業の概要

- 第 1 講 データの種類、グラフ表現、統計資料の整理
- 第 2 講 量的変数の要約方法
- 第 3 講 1 変数データの分析
- 第 4 講 2 変数データの分析
- 第 5 講 回帰直線と予測
- 第 6 講 確率、確率変数と確率分布
- 第 7 講 データの収集：実験・観察・調査
- 第 8 講 統計的な推測
- 第 9 講 場合の数と確率
- 第 10 講 演習 1：場合の数
- 第 11 講 確率
- 第 12 講 データ分析の基本
- 第 13 講 標準偏差の変化
- 第 14 講 相関係数
- 第 15 講 総合演習・追加課題

■フィードバックの要領

レポートにコメントを付けて返却する。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上)：課題解決のためのデータ分析を行い、結果を正しく表現して価値ある考察ができる
 評価 A (89 ~ 80 点)：データ分析プロセスのフレームワークに従って分析を実践することができる
 評価 B (79 ~ 70 点)：データ分析プロセスのフレームワークと、統計の基礎を理解している
 評価 C (69 ~ 60 点)：データ分析プロセスのフレームワークと、統計の基礎をある程度身に付けている
 評価 F (59 点以下)：データ分析プロセスのフレームワークの要点について説明できない

■評価方法

平常点 50% (ミニレポートが 20%、確認テストが 30%)、レポート (演習) 50% (統計検定試験に合格した場合は、成績の一部として評価する)

■留意点

①必ず PC を持参すること。②本講義は毎回、前回講義の内容を理解していることを前提として行う。また、グループワークとしてデータ分析やレポート作成などのアクティブラーニングを行うので、1 回目の講義から欠席せずに受講すること。社会調査士科目のため、第 1 ~ 8 講には、「基本的な資料とデータの分析」の内容を含む (詳細を参照)

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 データサイエンス II (Data Science II)**サブタイトル** 実践統計学入門**担当教員** 今泉 忠**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

ビジネスでの高度情報化により、情報が数量として扱われるデータを扱う必要性はますます高まっている。本講義では、データに基づく課題解決や問題解決に必須の統計学に関して、その基礎概念の理論的な理解を深め、社会現象を確率モデル・統計モデルとして扱うために必要な統計的方法を利活用できることを目標としている。

■講義分類

社会人力育成/ビジネス ICT

■到達目標

(1) 基礎的な確率分布について理解し、適用できる (2) 標本抽出について理解できる (3) 平均の推定問題が理解でき、適用できる (4) 検定問題が理解でき、適用できる

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

DP2 思考と判断：ビジネス環境で必須の統計的思考力と課題解決のための統計分析プロセスを計画実行することができる。
DP3 実践的統計モデルを用いて、周りの人々とともに問題を解決できる

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義/演習

[個人] プレゼンテーション/ワークシート

[ペア] なし

[グループ] PBL/KJ法/マインド・マップ

[上記以外] なし

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

統計学に関する知識の理解だけではなく、実際の問題解決を求める。実際のデータから解を求めるので1.5時間程度の復習時間を必要とするので余裕を持ってあたること。

■授業の概要

- 第1講 統計学の基礎
- 第2講 データの整理：統計グラフ
- 第3講 統計量によるデータ要約
- 第4講 相関関係と相関係数
- 第5講 質的変数と量的変数の関係
- 第6講 正規分布の活用
- 第7講 2つの確率変数の和と差
- 第8講 母集団の平均値と分散の推定
- 第9講 平均値の区間推定と仮説検定
- 第10講 平均値の差の検定
- 第11講 因果分析のための単回帰モデル
- 第12講 単回帰分析での決定係数
- 第13講 単回帰での係数の検定
- 第14講 残差分析
- 第15講 まとめ

■フィードバックの要領

リフレクションシートにより行う

■評価基準

評価 A+ (90点以上)：到達目標 (4) 検定問題が理解でき、適用できる
 評価 A (89～80点)：到達目標 (3) 平均の推定問題が理解でき、適用できる
 評価 B (79～70点)：到達目標 (2) 標本抽出と平均の性質について理解している
 評価 C (69～60点)：到達目標 (1) 基礎的な分布の性質を理解している
 評価 F (59点以下)：上記のいずれも理解しておらず、適用もできない

■評価方法

講義中のレポート提出 (50%)、最終期レポート (50%) により行う。統計的なものの考え方・データをもとにした統計処理の仕方ができているかどうかを評価する。統計検定試験の結果を成績評価の一部として評価する。

■留意点

本講義は、毎回の講義の内容を前提として講義を行う。また、講義ではチーム毎のデータ収集、レポート提出のアクティブラーニングを行うので、1回目の講義から欠席せずに受講すること。「データサイエンスⅢ」、「データサイエンスⅣ」、「経営科学Ⅰ」、「経営と意思決定」の履修には本講義を履修しておくことが望ましい。

科目名 データベース I (DataBase System I)**サブタイトル** データベースの作成と管理**担当教員** 後藤 涼子**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**実務経験のある教員による授業****■講義目的**

データベースシステムは、実社会のあらゆる組織の基幹業務や意思決定にとって必要不可欠なものとなっている。本講義では、大量データを効率よく管理し必要な情報を簡単かつ高速に検索するデータベース管理システムに関し、データ構造、データ操作、データ管理法、データ分析法などの基盤技術を講述する。リレーショナルデータベース管理システム (RDBMS: Relational DataBase Management System) について、Microsoft Access を使用した演習により経験を重ねることで、リレーショナルデータベースの構築やデータ管理についてのビジネス ICT および社会人力育成を目的とする。

■講義分類

ビジネス環境理解 / 社会人力育成 / ビジネス ICT

■到達目標

データベースに関する基礎知識、リレーショナルデータベース設計の基本概念、およびリレーショナルデータベースの基本となる「テーブル」「クエリ」「フォーム」「レポート」の4つのオブジェクトによるデータベースの作成について、Microsoft Access を通じて理解する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

データベースに関する基礎知識を養い、演習により作成・構築における技能的手法とその応用となるデータベース管理システムの基盤技術について修得する。

■授業形態 AL 手法 ※該当する項目のみ記載

講義 / 演習

[個人] ワークシート

[ペア] なし

[グループ] なし

[上記以外] 授業中の気づきや疑問点などをまとめ授業の振り返りを行う。

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

授業前に前講までの学習内容を理解しておくこと。毎授業後には練習問題を行い提出すること。(90分)

■授業の概要

- 第1講 データベースの概要
- 第2講 リレーショナルデータベース管理システムと Access の基本操作
- 第3講 データベースとテーブルの作成
- 第4講 データのインポート、エクスポート
- 第5講 リレーションシップの作成
- 第6講 テーブルの正規化
- 第7講 クエリの作成、データの並べ替え
- 第8講 データの抽出 (1) 単一条件、複合条件、部分一致条件
- 第9講 データの抽出 (2) Between ~ And 演算子、パラメータクエリ
- 第10講 フォームの作成と編集
- 第11講 フォームによるデータの入力、コントロールの編集
- 第12講 レポートの作成と編集
- 第13講 各種帳票と宛名ラベルの作成と編集
- 第14講 試験課題 「得意先売上情報管理」データベースの作成
- 第15講 総合演習 「会員管理管理」データベースの作成

■フィードバックの要領

課題に対し、処理条件に従って正しく処理されているか採点してフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 数値評価で 90 点以上
 評価 A (89 ~ 80 点) : 数値評価で 80 点以上 90 点未満
 評価 B (79 ~ 70 点) : 数値評価で 70 点以上 80 点未満
 評価 C (69 ~ 60 点) : 数値評価で 60 点以上 70 点未満
 評価 F (59 点以下) : 数値評価で 60 点未満

■評価方法

平常点: 20%、課題: 20%、授業内試験: 60%

■留意点

授業には毎回各自のノート PC を必ず持ってくる。課題に対して積極的に取り組み、Access の操作に慣れること。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 データベース II (DataBase System II)**サブタイトル** SQLを用いたデータベースの作成と管理**担当教員** 齋藤 S. 裕美**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

データベースは、大量データを管理し、容易にデータの検索や更新などを行うための技術である。本講義は、データベース管理の概念やしくみについて、データベース管理システム (DBMS : DataBase Management System) の操作を通じて学習することを目的とする。

■講義分類

ビジネスマネジメント/ビジネス ICT

■到達目標

リレーショナルデータベース管理システム (RDBMS : Relational DataBase Management System) を使って、SQL (Structured Query Language) による①データ検索、②テーブルへの行の追加・削除・更新、③データベース作成やテーブルの追加・設定変更・削除、テーブル間の関係の定義・削除、④データベースを問題解決の手段として利用できることを目指す。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

RDB の操作や管理に関する技能をもとに、RDB を活用して問題解決する力を身につける。

■授業形態 AL 手法 ※該当する項目のみ記載

講義/演習

[個人] ワークシート

[ペア] なし

[グループ] なし

[上記以外] RDBMS の操作演習

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

前講までの学習内容を理解しておくこと。また、ほぼ毎時課題を出すので、その課題作成を通じて SQL の記述方法について必ず復習すること。必要な予習・復習時間は各 1.5 時間程度 (合計 3 時間程度) である。

■授業の概要

- 第1講 データベースの概念
- 第2講 リレーショナルデータベースと SQL の概要
- 第3講 SELECT 文を利用したデータ検索 (1) 検索、並び替え
- 第4講 SELECT 文を利用したデータ検索 (2) 集合関数
- 第5講 SELECT 文を利用したデータ検索 (3) 条件による抽出
- 第6講 SELECT 文を利用したデータ検索 (4) 述語を用いた抽出
- 第7講 行の集約
- 第8講 副問合せの基本と集合関数の利用
- 第9講 表結合の基本と集合関数の利用
- 第10講 データ操作文 行の追加、更新
- 第11講 データ定義文 (1) 表の作成
- 第12講 データ定義文 (2) 制約、ビューの作成
- 第13講 データベースを用いた問題解決演習 (1)
- 第14講 データベースを用いた問題解決演習 (2)
- 第15講 データベースを用いた問題解決演習 (3)

■フィードバックの要領

第3講以降、各講義回で全体に対してフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 到達目標①～③が全てできる。④の考え方を理解し、合目的に実践できる。
- 評価 A (89 ～ 80 点) : 到達目標①～③が全てできる。④の考え方を理解し、実践できる。
- 評価 B (79 ～ 70 点) : 到達目標①ができ、②と③のどちらかができる。④の考え方を理解し、実践できる。
- 評価 C (69 ～ 60 点) : 到達目標①ができる。④の考え方を理解し、実践できる。
- 評価 F (59 点以下) : 講義内容について著しく理解が不足している。

■評価方法

期末試験 50%、課題 50%に授業への参加態度などを加味する。

■留意点

- ・「データベース I」で習得した知識と技能をもとに行われる講義であるため、「データベース I」は必ず履修しておくこと。
- ・各回の講義は、前回の講義内容を下敷きになっているため、第1講から欠席せずに履修すること。
- ・特に初回は教科書の指示と受注、必要なアプリケーションのインストールと設定を行うので必ず出席すること。

科目名 哲学入門 (Introduction to Philosophy)**サブタイトル** 東洋思想と西洋思想の多様性**担当教員** 高橋 恭寛**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**講義目的**

グローバルビジネスへのアプローチには、様々な考え方を理解することが大切です。そのために、まず足下の「日本」における伝統的な思想を知ることで自らの立ち位置を知ることが必要ではないでしょうか。また東アジアの思想的立ち位置が分からずに「世界」を知ることは出来ません。日本において、どのような哲学があったのか、そして道徳・思想が重んぜられてきたのかを見る事は、日本の経済思想にも直結します。さらに、伝統的な道徳・思想が、現代日本における商活動やマネジメントの背後にも、どこか残っていることにも気付かされ、実践的知識獲得の基礎となることでしょう。以上のことから本講義では、日本・西洋・アジアの哲学・宗教・思想の世界をそれぞれみてゆきます。さまざまな古典思想や文化事象が、現代社会のビジネスやマネジメントの要諦にも繋がっている点を自らの手で見出してください。

講義分類

ビジネス環境理解／社会人育成／グローバルビジネス

到達目標

今後、実社会で様々な人と交流するとき、誰もがそれぞれの背景を背負っており、価値観にも多様性が存在していることに思いをさせることが出来るようになる。また、是非判断や自己決定をせねばならないときに、自らの考えを自分なりに説明出来るようになる。

【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ③ ①・②で選択された事項の詳細

実社会に出て多くの人と交流する際、他者理解ひいては顧客理解には様々な材料が必要です。まずはそのための知識を身に付け、問題解決のための理論を学び、自らの発想力へと活かすことを求めます。

授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義

【個人】 ワークシート
【ペア】 なし
【グループ】 なし
【上記以外】 なし

準備学習の時間 (予習・復習等 1.5時間以上) 及び具体的な内容

1.5時間。各講義で取り上げる人物やテーマについて、授業最初に予習復習ペーパーを提出してもらう予定です。本時予習のチェックテストも行う予定です。前もってメモ作成等の準備をしてきてください。

授業の概要

- 第1講 イントロダクションー「哲学」・「思想」とは何かー
- 第2講 日本に「哲学」はあるのか？ー西田幾多郎ー
- 第3講 ギリシア哲学の世界
- 第4講 「正直」と「誠実さ」
- 第5講 キリスト教の登場とギリシア哲学との出会い
- 第6講 イスラーム世界の誕生
- 第7講 I.カントと〈動機の純粋性〉
- 第8講 J.S.ミルと〈結果の重視〉
- 第9講 自由主義と自己決定権
- 第10講 哲学の世界では「正義」とはどのような意味で使われているのか
- 第11講 現代哲学の応用その1ー「人間」・「生命」の理解ー
- 第12講 儒・仏・神と伝統的な死生観
- 第13講 哲学の応用その1ー環境思想ー
- 第14講 哲学の応用その2ー経済思想の一端ー
- 第15講 まとめー現代哲学のゆくえー

フィードバックの要領

授業中書いてもらうミニッツペーパーはコメントを付してフィードバックを行う

評価基準

評価 A+ (90点以上) : 評価点 100点のうち 90点以上
 評価 A (89～80点) : 評価点 100点のうち 89点～80点
 評価 B (79～70点) : 評価点 100点のうち 79点～70点
 評価 C (69～60点) : 評価点 100点のうち 69点～60点
 評価 F (59点以下) : 評価点 100点のうち 59点以下

評価方法

評価点 100点は、期末テスト (40%)、中間レポート (10%) 及びミニッツペーパー・予習復習ペーパーによる授業の理解度 (50%) の合計点で換算する。

留意点

授業中における制限事項：(1) 授業中の食事は厳禁。(2) 無断でスマートフォン、タブレット、ノートPC等を使用することは禁止。(3) 20分以上の遅刻、不要不急の途中退席は認めない。(4) 不必要な私語は控えること。(5) 座席指定に対して無断で席の移動は禁止。以上の違反に対し教員による注意を受けても是正されない場合、退室を求められることがある。また、授業単位の取得に対してペナルティを付けることがある。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 特別講座 I・II (Consideration Revolution I・II)

サブタイトル 寺島実郎学長監修リレー講座

担当教員 湯見、金、小池(英)、ハートル、中根、中西、鳥養、小西、水橋、野坂、湯見、湯見、湯見、佐藤(文)、西村(節)、木村、小森(節)、高橋、崎原 対象学年 2年生以上

区分 春・秋学期

実務経験のある教員による授業

■講義目的

寺島実郎学長が提唱してきた「世界潮流と日本の進路」を軸に、国際情勢、経済、歴史、社会、AI、IoT など各分野における精鋭の専門家を講師として招き、通年の体系的なプログラムを開催する。現代世界は、単なる同時不況、経済危機を超え、本質的な意味での構造転換に直面している。「外は広く、内は深い」、このことを知るだけで人間の重心は下がる。鈴木大拙の言葉のごとく、より広い視野で世界を見渡し、より深く自らの立脚点を見つめる視座が求められている。この連続講義では、我々が生きている時代を的確に把握し認識するために、世界から見た日本、また日本国内の諸問題について複数回にわたり多面的に取り上げることで、問題意識の提起と深化を目指す。時代に発信する識者の生の声を聞いて現代世界を生きるヒントを得てもらいたい。

■講義分類

グローバルビジネス／ビジネス ICT／地域ビジネス

■到達目標

自分自身が生きている時代を把握し認識するために、連続講座を通じて提起される数々の問題や課題について自身なりの解決策を考える。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

国際情勢、経済、歴史、日本社会、企業、AI、IoT、多摩地域などグローバルとローカルの関係性を意識しながら産業社会で発生する様々な問題に対処していける専門的能力を体系的に修得する。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義

[個人] ワークシート

[ペア] なし

[グループ] なし

[上記以外] なし

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

授業前に、パンフレットのテーマに従いキーワードを調べる（1 時間）。\n 授業後に、講義において生じた疑問、感じた問題点について調べた上で、気付きや自分なりの意見を専用ノートの右側のページに記述する（2 時間）。

■授業の概要

- 第1講 ガイダンス
- 第2講 外部講師による講演
- 第3講 外部講師による講演
- 第4講 外部講師による講演
- 第5講 外部講師による講演
- 第6講 外部講師による講演
- 第7講 外部講師による講演
- 第8講 前半6講演の内容を基に中間レポートを作成
- 第9講 外部講師による講演
- 第10講 外部講師による講演
- 第11講 外部講師による講演
- 第12講 外部講師による講演
- 第13講 外部講師による講演
- 第14講 外部講師による講演
- 第15講 後半6講演の内容を基に最終レポートを作成する。

■フィードバックの要領

講義専用ノートに対してコメントを記入してフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上)：平常点、講義専用ノート、中間および最終レポートの合算点が、90% 以上であること。
- 評価 A (89 ～ 80 点)：平常点、講義専用ノート、中間および最終レポートの合算点が、89 ～ 80% であること。
- 評価 B (79 ～ 70 点)：平常点、講義専用ノート、中間および最終レポートの合算点が、79 ～ 70% であること。
- 評価 C (69 ～ 60 点)：平常点、講義専用ノート、中間および最終レポートの合算点が、69 ～ 60% であること。
- 評価 F (59 点以下)：平常点、講義専用ノート、中間および最終レポートの合算点が 59% 以下は不合格とする。

■評価方法

平常点 (40%)、講義専用ノート (30%)、中間および最終レポート (30%) の割合で評価する。

■留意点

- ①第1回目のガイダンスに出席しない場合履修できない。尚、履修希望者が多い場合（座席数が限られている為）履修者を選抜する。
- ②地域住民をはじめとする一般参加者 430 名と一緒に外部講師の講演を聴講するため、受講ルールを厳守すること。③ 001 教室の座席は、事前に指定された席に着席すること。④講義内容及び講義内容に関する自分の意見は、特別講座専用ノートに整理して記入すること。

科目名 ビジネスコミュニケーション I (Business Communication I)**サブタイトル** 図解表現**担当教員** 久恒 啓一**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**実務経験のある教員による授業****■講義目的**

どのような経営体にも経営資源がある、その経営資源をコミュニケーション活動によって活性化し、新しい商品やサービスを創り出すのが経営である。この講義では、上述の観点からビジネスにおけるコミュニケーションと情報に焦点をあて、今までの文章と箇条書きを中心とした情報処理の欠陥を克服するため、産業社会、世界潮流、顧客理解、ビジネス創造などをテーマに、図を用いたコミュニケーションの理論と技術を学ぶ。毎回、産業社会の現場の最前線のテーマを題材に実習を行い「図解コミュニケーション」という新しい問題解決の武器を身につけてもらう。

■講義分類

ビジネスマネジメント／グローバルビジネス

■到達目標

①新聞社説等による個人ワーク、グループでのプレゼンテーションやディスカッションをふまえ、「日本の論点」(文春)の中の一流論者の時事論文をパワーポイントを用いて一枚の図に要約する技術を身につける。又、二枚以上の感想をワードで書く技術を身につける。②自身で作成した図解を用いて大人数を対象に自信を持ってプレゼンテーションができるようになる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

グローバル社会に対する理解、考え抜く力、コミュニケーション能力を高め、組織目標の達成に貢献する力を養う。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義／演習

[個人] プレゼンテーション

[ペア] ペアワーク／相互教授法／ピア・レビュー

[グループ] KJ法

[上記以外] 図解コミュニケーション

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

目についた新聞・雑誌の記事、他の先生の講義内容を努めて図解する。(90分)、毎回の授業で作った図解をブラッシュアップする。(90分)

■授業の概要

- 第1講 講義「マネジメントと図解コミュニケーション」
- 第2講 講義「ビジネスと経営」・実習
- 第3講 講義「コミュニケーションと情報」・実習
- 第4講 講義と実習「ビジネスに関するトピックス」
- 第5講 講義と実習「ビジネスに関するトピックス」
- 第6講 講義と実習「ビジネスに関するトピックス」
- 第7講 講義と実習「コミュニケーションに関するトピックス」
- 第8講 講義と実習「コミュニケーションに関するトピックス」
- 第9講 講義と実習「コミュニケーションに関するトピックス」
- 第10講 講義と実習「経営情報に関するトピックス」
- 第11講 講義と実習「経営情報に関するトピックス」
- 第12講 講義と実習「商品に関するトピックス」
- 第13講 講義と実習「時事に関するトピックス」
- 第14講 講義と実習「時事に関するトピックス」
- 第15講 講義「経営情報とビジネスコミュニケーション」

■フィードバックの要領

毎回提出させるアンケートのまとめを、次回授業で提示し、疑問などに答えしていく。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : 極めて高い平常点。レポートが特に優れている。

評価 A (89～80点) : 非常に高い平常点。レポートが優れている。

評価 B (79～70点) : 高い平常点。レポートが良い。

評価 C (69～60点) : 高い平常点。レポートの提出あり。

評価 F (59点以下) : 低い平常点。レポート提出なし。

■評価方法

1. 平常点 50点、2. 毎回の授業に関するレポート 25点、3. 最終レポート(パワーポイント) 25点

■留意点

毎回実習(作図・プレゼン・ディスカッション)を行うことで力をつけていくので、毎回出席することが望ましい。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ビジネスコミュニケーション II (Business Communication II)**サブタイトル** 多摩や地元の魅力を発信して自己プロデュース。地域要人と SNS で交流する実践法**担当教員** 久米 信行**対象学年** 2 年生以上**区分** 秋学期**実務経験のある教員による授業****■講義目的**

現代はチャンスに満ちています。SNS 活用で、無名の個人が一夜にして有名になり、世界中から観光客が押し寄せることさえあるのです。私は中小国産 T シャツメーカーの経営者ですが、SNS で人生が好転して、各界で活躍する数千人のネット友達ができました。おかげさまで本業以外にも、全国の観光地域づくりやブランディング、企業経営者・NPO リーダー向けの研修講師、ビジネス書や記事の執筆、美術館・オーケストラ・バレエ団の支援などで、学生時代には想像しなかった楽しい毎日を送っています。多摩大生にも同じように予想を超えるような明るくて楽しい未来を切り開いて欲しいのです。この講義では SNS を友人との連絡だけでなく、有用な情報を広く発信して縁を広げる技術を学びます。多摩のお薦め情報を発信＝勝手に観光協会しながら自分と地域をプロデュースします。

■講義分類

顧客理解／社会力育成／ビジネス ICT

■到達目標

日々のインスタグラムで次の 3 大スキルを磨き「友達」と「いいね」を増やしてネット上の評価を高めます。1) 毎日ひとつは SNS でシェアしたくなるモノ・店・風景などを発見する「脳のパラボラカ×心のズーム力」2) 記事を見た人が思わず「いいね」を押したくなる「写真撮影・加工×キャッチコピー作成センス」3) シェアしたお店の店主など地元キーパーソンと楽しいご縁を結ぶ「友達申請×名刺活用×メール術」

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2 番目に身につけられる事項

DP5 高い志 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

ビジネスコミュニケーションを円滑にする SNS 活用法として、プロフィール作成、記事投稿時の写真撮影・文章作成、友達申請・フォロー、コメント・メッセージ・メール・名刺作成交換の技術や作法を学ぶ。

■授業形態 AL 手法 ※該当する項目のみ記載

講義／演習

- [個人] プレゼンテーション
- [ペア] なし
- [グループ] なし
- [上記以外] SNS 発信 (個人)

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

毎週の課題 (例: 通学路の美味しいパン屋) に合わせ、講義前にインスタグラムで魅力的な写真と短い文章で投稿します。講義や優秀投稿記事からの学び (数行程度) を講義ブログや Facebook にコメントします。(1.5 時間)

■授業の概要

- 第 1 講 講師紹介とガイダンス：インスタグラムの開設 & 活用、講義ブログ & Facebook への投稿
- 第 2 講 教科書「すぐやる人だけがチャンスを手に入れる」感想発表と SNS 開設 & 投稿講座
- 第 3 講 スマホでお気に入りのお店やスポットを見つけるコツ
- 第 4 講 インスタグラム映えする写真の撮り方と加工法
- 第 5 講 記事で紹介した店主などへのメッセージの出し方つながり方
- 第 6 講 多くの人の興味を惹くタイトルやキャッチコピーの付け方
- 第 7 講 多くの人に検索され見ってもらえるハッシュタグの付け方
- 第 8 講 Facebook で目立って信用される自己紹介文の作り方
- 第 9 講 Facebook 向きのプロフィール写真とカバー写真の撮り方選び方
- 第 10 講 自分らしさをアピールする独自のこだわりテーマの見つけ方
- 第 11 講 リアルなおつきあいから SNS へと導く個人名刺の作り方と活用法
- 第 12 講 就活にも生きる SNS 記事の蓄積法とアピール法
- 第 13 講 最終レポートと全員 1 分プレゼンテーションの準備
- 第 14 講 最終レポート提出と全員 1 分プレゼンテーション 1
- 第 15 講 最終レポート提出と全員 1 分プレゼンテーション 2

■フィードバックの要領

講義レポートに寄せられた質問については講義とブログで回答する

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 下記、配分により 90 点以上
- 評価 A (89 ~ 80 点) : 下記、配分により 80 点以上 89 点以下
- 評価 B (79 ~ 70 点) : 下記、配分により 70 点以上 79 点以下
- 評価 C (69 ~ 60 点) : 下記、配分により 60 点以上 69 点以下
- 評価 F (59 点以下) : 下記、配分により 59 点以下

■評価方法

毎回講義中の 5 分間レポート (20%) 毎回の事前課題：インスタグラム投稿 (20%) 毎回の事後課題：講義ブログへのコメント (20%) 期末レポートと課題ページ作成 (20%) 最終プレゼンテーション (20%)

■留意点

〈受講の条件〉 1) インスタグラムや Facebook を活用できるスマートフォンを所有していること 2) SNS に自分の顔写真やプロフィールを公開して、記事を発信して自分をブランド化する覚悟があること 3) 多摩地域のおいしいお店やおもしろスポットを探して発信する覚悟があること

科目名 ビジネス数学 I (Business mathematics I)**サブタイトル** 行列の演算とそのビジネス利用**担当教員** 久保田 貴文**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

ビジネスの現場で使える数学の基礎的な実力、特に、数学で物事を考える力を養います。

■講義分類

ビジネス ICT

■到達目標

ビジネスに活用できる数的処理力、またグループワークを通して協業力や情報収集力を養う。また、関数等を活用したエクセルのスキルやそれをレポートとしてまとめるためのスキルを養う。データ分析を用いてマーケティング戦略の立案と提案するための数学の基礎力をつけ、自ら問題を設定し数的処理により解決できるように学修する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

ビジネスの中で最低限必要な基礎的な数学の思考力を基に、課題解決に向けたプロセスを明確にすることが出来る。

■授業形態 AL 手法 ※該当する項目のみ記載

講義

[個人] ワークシート
[ペア] なし
[グループ] なし
[上記以外] なし

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

初回までに、四則演算、割合の計算等、特に、ビジネス数学基礎の内容を復習のこと。また各授業においては、内容についての復習(1.5時間)、次回内容について予習(1.5時間)を実行すること。

■授業の概要

- 第1講 オリエンテーション、行列の和・差
- 第2講 行列の和・差の演習
- 第3講 行列の積
- 第4講 行列の積の演習
- 第5講 エクセル演習①行列演算
- 第6講 正方向列と逆行列
- 第7講 正方向列と逆行列の演習
- 第8講 連立1次方程式
- 第9講 連立1次方程式の演習
- 第10講 エクセル演習②
- 第11講 行列式
- 第12講 行列式の演習
- 第13講 エクセル演習③
- 第14講 授業内期末試験
- 第15講 期末試験のフィードバック・総合演習・追加課題

■フィードバックの要領

課題や試験等に対してフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 期末試験の点数とミニレポート点の合計点で 90 点以上
 評価 A (89 ~ 80 点) : 期末試験の点数とミニレポート点の合計点で 80 点以上 89 点以下
 評価 B (79 ~ 70 点) : 期末試験の点数とミニレポート点の合計点で 70 点以上 79 点以下
 評価 C (69 ~ 60 点) : 期末試験の点数とミニレポート点の合計点で 60 点以上 69 点以下
 評価 F (59 点以下) : 期末試験の点数とミニレポート点の合計点で 59 点以下

■評価方法

期末試験 50 点、ミニレポート 50 点 (5 点×10 回)。10 回以上出席した者 (もしくは欠席回数が 5 回未満の者) に対して評価を行う。

■留意点

エクセルを用いた演習を実施するため、PC を持参してください。(第 05 回目、第 10 回目、第 13 回目)

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ビジネス数学Ⅱ (Business mathematics II)

サブタイトル ビジネスのための微分・積分入門

担当教員 今泉 忠

対象学年 2年生以上

区分 秋学期

■講義目的

経営上では、情報を活用して、未来の状態を予測し、そこで発生する問題を事前に対応できるようにすることは重要である。本講義では、ビジネス課題の解決のために数学的知識を用いたモデル構築のための基礎としての、数学的な考察およびモデルの構築を目指す。関数の概念とその応用、微分積分の概念と応用について、基礎的な概念についての理解と実際の計算方法についての習得を目指す。できるだけ、実際での問題解決のための数学と位置づけて講義を行う。

■講義分類

ビジネス ICT

■到達目標

(1) 初等関数について微分積分を理解して行える (2) 多変数関数の微分を理解して行える (3) 関数近似について理解して行える

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

DP1 知識と理解：ビジネスの中で必要な基礎的な学力を養い、産業社会での問題を数学モデルを用いて理解する
DP2 実際の問題から数理モデルを構築でき、それを用いて課題解決を図れる

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義

[個人] ワークシート
[ペア] なし
[グループ] なし
[上記以外] なし

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

各講義回において出される経営に関する実際の問題を次回までに解いて整理しておくことが求められる。問題の理解と解を求め整理する時間としては、1.5 時間以上必要となるので余裕も持って準備すること。

■授業の概要

第1講 グラフから学ぶ
第2講 グラフから学ぶⅡ
第3講 微分の基本となる差分について講義するⅠ
第4講 微分の基本となる差分について講義するⅡ 基本的な関数の微分法
第5講 1次関数と2次関数の微分
第6講 関数の和や差の部分
第7講 置換微分について
第8講 関数の積の微分Ⅰ
第9講 関数の積Ⅱ
第10講 微分 演習
第11講 不定積分の基本
第12講 不定積分の基本 Ⅱ
第13講 置換積分と部分積分
第14講 偏微分入門
第15講 まとめ

■フィードバックの要領

リフレクションシートにより行う

■評価基準

評価 A+ (90 点以上)：学習した内容について理解して実際の問題に適用し、解を求めることができる。
評価 A (89～80 点)：学習した内容について理解して解を求めることができる。
評価 B (79～70 点)：学習した内容について理解して少なくとも2つの内容に関する解を求めることができる。
評価 C (69～60 点)：学習した内容について理解して少なくとも1つの内容に関する解を求めることができる。
評価 F (59 点以下)：学習した内容について理解が不十分で解を求めることができない。

■評価方法

通常の課題等による平常点 (60%) と学期末の試験結果 (40%) により総合評価

■留意点

科目名 ビジネス戦略 (Business Strategy)**サブタイトル** 「徹底したグループワーク」で、ビジネスの基本戦略とイノベーション戦略を学ぶ**担当教員** 志賀 敏宏**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**実務経験のある教員による授業****■講義目的**

①ビジネス戦略の基本（事業成功のための必須事項）を学ぶ ②イノベーションを理解しその成功のために必要なことを学ぶ ③事例研究、グループワーク、プレゼンテーションというアクティブラーニング手法を通じて学ぶ
本シラバスの最後にある【留意点】を守る人のみ受講できます。

■講義分類

顧客理解/ビジネス環境理解/ビジネス創造

■到達目標

グループワークでの資料作成、プレゼン、質疑応答を通じて、ビジネス戦略とイノベーション戦略の基本的理解を得る。合せて課題発見力、論理的思考力、討論する力を身につける。就活の強力な武器となる。この目標に共感し、【努力することを強く約束できる人】のみ履修登録、受講して下さい。本シラバス最後の【留意点】を必ず読んで守れる人のみ受講可。初回と2回目の両方に出席しないと履修不可（グループワークのため）。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ③ ①・②で選択された事項の詳細

ビジネスの成功要因とイノベーション成功に関する知識と理解を得る。思考力を高め、成功要因に関する判断力養う。下記AL手法ではグループワークはなしですが、グループワークでのプレゼンは必須です。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義

[個人] ワークシート

[ペア] なし

[グループ] なし

[上記以外] グループワークでのプレゼンテーション（本授業の最重要課題）。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5時間以上）及び具体的な内容

グループワークでの資料収集と発表資料作成、授業中のノートでの復習が必須です。全員が、どこかのグループメンバーとなり、最少二回の発表を担当します。各回平均1.5時間程度の予習・復習が必須です。

■授業の概要

- 第1講 【履修のために1、2講両方の出席必須】 オリエンテーション。グループ発表テーマ決定。
第2講 【履修のために1、2講両方の出席必須】 事例研究の説明。グループ、担当テーマの確定。
第3講 概要「テーマ：カフェビジネス」の「プレゼンテーション」
第4講 「テーマ：コンビニビジネス」の「プレゼンテーション」
第5講 「テーマ：ネット通販ビジネス」の「プレゼンテーション」
第6講 「テーマ：乗用車ビジネス」の「プレゼンテーション」
第7講 「テーマ：テマパークビジネス」の「プレゼンテーション」
第8講 「テーマ：スマホビジネス」の「プレゼンテーション」
第9講 テーマ：ネット系サービスのイノベーション」の「プレゼンテーション」
第10講 「テーマ：機械系の大型イノベーション」の「プレゼンテーション」
第11講 「テーマ：一芸家電のプチイノベーション」の「プレゼンテーション」
第12講 概要「テーマ：ニーズ対応のプチイノベーション」の「プレゼンテーション」
第13講 「テーマ：大型ハイテクイノベーション」の「プレゼンテーション」
第14講 「テーマ：ソーシャルイノベーション」の「プレゼンテーション」
第15講 最終試験

■フィードバックの要領

口頭（授業中コメント）、ノート・ワークシートへのコメントで行います。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上) : 下記の評価方法と配分に従って90点以上
評価 A (89～80点) : 下記の評価方法と配分に従って80点以上、89点以下
評価 B (79～70点) : 下記の評価方法と配分に従って70点以上、79点以下
評価 C (69～60点) : 下記の評価方法と配分に従って60点以上、69点以下
評価 F (59点以下) : 下記の評価方法と配分に従って59点以下

■評価方法

平常点25点。プレゼンテーション35点。授業中の発言等15点。テスト結果を上記に加点し100点満点。本科目の到達目標に照らして評価。私語等によっては減点、受講停止を求めます。

■留意点

初回と2回目の両方に出席しないと履修不可（グループワーク準備）。1. 次の3点を守る人が履修して下さい。①グループワークで努力する人 ②私語・遅刻等で迷惑をかけない人 ③他グループの発表を真剣に聞きノートをとる人。守れない場合は受講停止を求めます。2. T-NEXTの連絡を見落とした場合は成績に関する異議を受け付けません。3. 受講を停止する際は必ず履修削除して下さい。就活時に成績で不利にならないため。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ビジネス法 (Business Law)**サブタイトル** 企業における法務およびビジネスを取り巻く法**担当教員** 樋笠 堯士**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

本講義は、ビジネス活動に関わる法律の中で、会社法、民法、労働法、独占禁止法、著作権法、不正競争防止法、景品表示法、刑法等に触れることによって、法的観点から企業の行うさまざまな活動とそのリスクを把握することを目的とする。そして、企業目的の実現を阻害する「リスク」に対応するためのリスクマネジメント体制について学習する。また、企業活動においては、仕入先・消費者・行政などの多様な相手方との関係が発生するため、企業として最低限度守るべき法令ないし義務がある。法令を遵守し、適切な企業経営を行うために、実務に携わるうえで知る必要がある法律の基礎知識や法律の趣旨・目的などを大局的な視点で学習し、法令違反リスクを察知できる力を養う。

■講義分類

ビジネス環境理解／ビジネスマネジメント／社会人力育成

■到達目標

企業における経営者と機関の関係から、適切な経営の仕組みを学習する。そして、組織に属する人間として内部統制の意義を理解し、リスクマネジメント体制の構築ができるような知見を身に付ける。企業の実務に携わるうえで知る必要がある法律の基礎知識や法律の趣旨・目的などを大局的な視点で学習し、法令違反リスクを察知するために必要な知見を身に付ける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

企業活動に内在するリスクや、企業を取り巻く法規制の趣旨を理解し (DP1 知識と理解)、具体的な事案・事件を介して、犯罪発生を回避する力・リスクを管理する力を身に付ける (DP2 思考と判断)。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義

- [個人] ワークシート, T/Fテスト
- [ペア] ペアワーク
- [グループ] PBL
- [上記以外] なし

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

事前に指定される「事件・法律」について調べてから講義に参加する (1 時間)。講義後には、レジュメと、ワークで書いた内容で学んだ情報を補う (0.5 時間)。

■授業の概要

- 第1講 ビジネス法ガイダンス～コンプライアンス～
- 第2講 貸したお金はどうなる?～民法・民事訴訟法～
- 第3講 自動車事故を起こしてしまったら?～民法上の損害賠償責任～
- 第4講 労働法～「雇用契約」と「三六協定」～
- 第5講 会社法～株式会社とは～
- 第6講 会社法～取締役の義務～
- 第7講 絶対痩せるサプリって本当?～景品表示法～
- 第8講 類似商品って大丈夫?～不正競争防止法～
- 第9講 勝手に音源を使って良い?～著作権～
- 第10講 会社の経費を使い込んだら?～刑法～
- 第11講 不正融資って?～刑法～
- 第12講 カルテル～独占禁止法～
- 第13講 私的独占～独占禁止法～
- 第14講 不公正な取引方法～独占禁止法～
- 第15講 講義のまとめ

■フィードバックの要領

適宜ペーパーを配布し、質問を募り、次の講義で答える。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 講義内容に関して、完全に近い理解度に達している。
- 評価 A (89 ～ 80 点) : 講義内容に関して、優れた理解度に達している。
- 評価 B (79 ～ 70 点) : 講義内容に関して、平均的な理解度に達している。
- 評価 C (69 ～ 60 点) : 講義内容に関して、最低限の理解度に達している。
- 評価 F (59 点以下) : 講義内容に関して、最低限の理解度に達していない。

■評価方法

平常点 (30%)、期末試験 (70%) 期末試験には、指定された (手書きの) 持ち込みペーパーのみ持ち込み可能。

■留意点

特になし。

科目名 プログラミング入門 I (Introduction to Programming Language I)**サブタイトル** Unity を使って覚える C#プログラミング**担当教員** 彩藤 ひろみ**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

本講義は、ゲームエンジン Unity で採用されている C# 言語を中心に、プログラミング言語を学ぶ。基礎からきちんと積み上げることでいずれゲーム作成などの実力となって跳ね返ってくる。コンピュータにどうやってこちらの考えを伝えるのか、そのアルゴリズムを学び、実践する。

■講義分類

ビジネス ICT

■到達目標

アルゴリズムの理解、プログラミングの組み立て、結果の予測とバグフィックス。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

課題解決に向けたプロセスを明らかにして準備できる計画力、課題に対して新たな価値や解決方法を生み出せる創造力を修得する。

■授業形態 AL 手法 ※該当する項目のみ記載

講義 / 演習

- [個人] ワークシート
- [ペア] 相互教授法
- [グループ] PBL
- [上記以外] なし

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

教科書を順番に学ぶ。オンラインチュートリアルも利用する。予習に 1.5 時間以上、復習に 1.5 時間以上かかる。

■授業の概要

- 第1講 Unity と C#
- 第2講 C# の基本形 クラスと計算
- 第3講 クラスの理解
- 第4講 メソッドの定義
- 第5講 アルゴリズムの理解その1 条件分岐
- 第6講 アルゴリズムの理解その2 繰り返し
- 第7講 配列変数 複数のデータを扱う
- 第8講 前半まとめ ミニテスト
- 第9講 Unity でゲーム作成その1
- 第10講 Unity でゲーム作成その2
- 第11講 物理パズルゲームをつくる その1
- 第12講 物理パズルゲームをつくる その2
- 第13講 物理パズルゲームをつくる その3
- 第14講 成果で遊ぶ
- 第15講 期末テスト準備

■フィードバックの要領

毎回の演習の進捗を確認し、正しい解法や考え方をフィードバックする。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : C# プログラミングの基礎を深く理解し、応用問題を自力で解答できる
- 評価 A (89 ~ 80 点) : 解説書がある状態で C# プログラムを正しく組むことができる
- 評価 B (79 ~ 70 点) : 授業で習う範囲で C# プログラムを組むことができる
- 評価 C (69 ~ 60 点) : チュートリアル通りに C# プログラムを組んで動かすことができる
- 評価 F (59 点以下) : C# プログラミングで何ができるのか理解しない

■評価方法

学期末試験 50% レポートなど平常点 50%

■留意点

①プログラミング言語の学習においては、面倒がらずに自分でプログラムを打ち、実行して確認していくことが重要である。いろいろなエラーを経験すること、つまり失敗することが、成功すること以上に意味を持っている。わからないことは、できるだけ授業中に質問して解決するように心がけよう。②授業には毎回各自のノート PC を必ず持ってくる。③課題や試験等に対してはフィードバックを行うので、確認すること。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ▶▶▶ プログラミング入門Ⅱ (Introduction to Programming Language II)

サブタイトル ▶▶▶ Java 言語によるプログラミング入門

担当教員 ▶▶▶ 中村 有一

対象学年 ▶▶▶ 2年生以上

区分 ▶▶▶ 春学期

■講義目的

本講義は、Java 言語によるプログラミングの入門コースである。将来 SE などを目指し、職業的なプログラミング技術を身につけたい学生には、この科目を受講することを強く勧める。Java 言語は、最近広く普及しているプログラミング言語であり、この言語を一通り習得していると、さまざまな場面で役に立つ。また「情報処理技術者試験」などの資格試験を受ける場合にも有効である。授業は、基礎的なプログラミングの構造の説明と、その演習の繰り返しで行っていく。単元ごとにレポートの提出を求めるため、各自、空き時間にはしっかりと復習をすることが必要である。

■講義分類

ビジネス ICT

■到達目標

Java 言語を一通り使いこなせるようになることが最終目標である。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2 番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

Java 言語を基礎から学ぶことにより、プログラミング言語に特有の知識を身につけ、将来 SE などの職種で活躍できるようにする。

■授業形態 AL 手法 ※該当する項目のみ記載

講義

[個人] ワークシート
[ペア] ペアワーク
[グループ] なし
[上記以外] なし

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

予習：講義資料を読んでできるだけ理解し、わからない部分は整理しておく。(1.5 時間)

復習：資料をもう一度読みなおし、理解できたか確認する。ミニテストなどの結果を振り返る。(1.5 時間)

■授業の概要

- 第1講 Java 言語入門：プログラム・プログラミング・プログラミング言語
- 第2講 開発環境の整備：Java の開発環境を整備し、使い方を学ぶ。
- 第3講 入出力と変数：変数名のつけ方、変数の型
- 第4講 四則演算と代入：計算式の書き方
- 第5講 枝分かれ：if 文と switch 文の違い
- 第6講 for 文による繰り返し：回数が決まっている繰り返し、漸化式
- 第7講 while 文、do while 文による繰り返し：条件が成り立っているあいだ繰り返しを行う構文
- 第8講 配列：規則的に並んだデータを扱う場合に用いられるデータ構造
- 第9講 関数：ひとまとまりの処理に名前を付け部品として呼び出す
- 第10講 GUI の利用：GUI 機能を使ったプログラミング手法
- 第11講 乱数とグラフィクス：Java における乱数生成とグラフィクス機能
- 第12講 タイマーとサウンド：Java におけるタイマーとサウンド出力の機能
- 第13講 イベント処理：Java におけるイベント処理の機能を取り上げる。
- 第14講 レポート作成：ある程度の大きさの実用的なプログラムを作成する。
- 第15講 レポート作成：ある程度の大きさの実用的なプログラムを作成する。

■フィードバックの要領

ミニテスト、演習などについて、答え合わせ、講評などのフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上)：100 点～90 点
 評価 A (89～80 点)：89 点～80 点
 評価 B (79～70 点)：79 点～70 点
 評価 C (69～60 点)：69 点～60 点
 評価 F (59 点以下)：59 点以下

■評価方法

学期末試験 50% レポートなど平常点 50%

■留意点

①プログラミング言語の学習においては、面倒がらずに自分でプログラムを打ち、実行して確認していくことが重要である。いろいろなエラーを経験すること、つまり失敗することが、成功すること以上に意味を持っている。わからないことは、できるだけ授業中に質問して解決するように心がけよう。②授業には、毎回各自のノート PC を必ず持ってくる。

科目名 ▶▶ **プログラミング入門 III (Introduction to Programming Language III)****サブタイトル** ▶▶ Python プログラム入門**担当教員** ▶▶ 今泉 忠**対象学年** ▶▶ 2年生以上**区分** ▶▶ 秋学期**■講義目的**

この講義ではビジネス ICT で必須のプログラム言語【Python】について学ぶ。Python は、オブジェクト指向、命令型、手続き型、関数型などのスタイルでプログラムを書くことができる。開発効率が高く、フリーの優秀なフレームワークや開発環境が揃っている。何らかのプログラミング言語で、自ら構想したアルゴリズムの実装が可能になりたいなどの将来 SE などを目指し、職業的なプログラミング技術を身につけたい学生やには、この科目を受講することを強く勧める。本講義の前半では順次処理、分岐処理、繰り返し処理について学び、Python のコーディングスキルを確かなものにする。後半では、データの作成や集計、並び替えのプログラミングを実践して、データを処理するアルゴリズムの基礎について理解を深める。自分の頭で考えて、アイデアを表現する力を身につける。

■講義分類

ビジネス ICT

■到達目標

Python のプログラミングと、アルゴリズムの基礎を身につけることを目指す。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2 番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

DP1：アルゴリズムを実現できるための論理力などを習得する

DP4：ビジネス環境で必須の課題解決のためのプログラミング力を修得する

■授業形態 AL 手法 ※該当する項目のみ記載

講義／演習

[個人] ワークシート

[ペア] なし

[グループ] なし

[上記以外] なし

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

講義で課されたプログラム課題について次回までに実行し確認しておくこと。プログラムの説明なども記入するので復習時間として 1.5 時間以上必要となるので余裕を持って行うこと。

■授業の概要

- 第 1 講 開発環境の確認と入出力
- 第 2 講 Google Drive のセットアップと復習
- 第 3 講 四則演算と余りの復習
- 第 4 講 if 文について
- 第 5 講 if 文の復習と計算機の開発
- 第 6 講 関数入門
- 第 7 講 関数応用
- 第 8 講 乱数の生成と繰り返しと配列を復習して、検索アルゴリズムを学ぶ
- 第 9 講 乱数の生成と繰り返しと配列を復習して、検索アルゴリズムを学ぶ
- 第 10 講 ファイルの入出力と合計、平均を学ぶ
- 第 11 講 ファイルの入出力と合計、平均を学ぶ
- 第 12 講 最小値、最大値を探すプログラムの開発
- 第 13 講 並び替えプログラムの開発
- 第 14 講 並び替えプログラムの開発
- 第 15 講 学期末レポート

■フィードバックの要領

リフレクションシートにより行う

■評価基準

評価 A+ (90 点以上)：平常点、課題、テストを総合して、90%以上の高得点を獲得している。

評価 A (89～80 点)：Python の応用的なプログラムを書くことができる。

評価 B (79～70 点)：Python の簡単なプログラムを書くことができる。

評価 C (69～60 点)：Python のプログラムを読んで理解することができる。

評価 F (59 点以下)：プログラミングへの意欲が足りない。あるいは、基本的な Python の文法が理解できていない。

■評価方法

日常課題 50%、期末テスト 50%。出席が 80%を満たさない場合は減点する。

■留意点

- ・デザインワークショップ I の内容を理解していることを前提とする。
- ・講義と日常の課題を通して、Python を身につける努力をしたかを学期末レポートで問う。出席や日常課題だけでは単位はとれません。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ベンチャー企業論 (Venture Company Theory)**サブタイトル** 企業家精神の習得**担当教員** 小林 英夫**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**実務経験のある教員による授業****■講義目的**

付加価値や雇用の創出においてベンチャー企業の果たす役割は非常に大きい。また、ベンチャー企業を興し発展させていくことを司る精神—企業家精神—は、創業に携わるかどうかにかかわらず、創造的なビジネス活動を行っていく上で重要なものである。本講義では、組織のマネジメントとそれを支える行動規範としての企業家精神について包括的に学ぶとともに、現在活躍中の企業家や事業家の生き方を知ることを通じて、ベンチャー企業の経営やベンチャー企業への参画について学び、自らのライフマネジメントについて考える。

■講義分類

ビジネス創造/ビジネスマネジメント/グローバルビジネス

■到達目標

①ベンチャーと企業家精神とは何かを理解することを通して、自らのキャリアデザインを考えられるようになる、②事業立ち上げや発展に必要な知識を習得し、事業創業や急成長時に特有の課題や戦略を理解する、③ベンチャー企業創造につながるアイデアを発見し、それを具体化させられるようになる、の3点を到達目標とする。これを通じ、社会発展に貢献する力や高い志を身につける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP3 関心と意欲 DP5 高い志

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ③ ①・②で選択された事項の詳細

起業家精神を持ち新しいことに取り組むことを促して、ベンチャー参画を通じキャリアを築いていくことを自らの選択肢とすることができる。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義

[個人] ワークシート

[ペア] なし

[グループ] なし

[上記以外] ミニッツペーパー (個人)

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

授業前に、事前学習ポイントを調べ、T-NEXT 上の授業資料に目を通し疑問点を明確にする (1.5 時間)。授業後に、事前学習の疑問点解消を確認し、未解消の項目は自己調査や教員質問等で解消する (1.5 時間)。

■授業の概要

- 第1講 イントロダクション—ベンチャーの概念と意義
- 第2講 ベンチャーの定義と事例
- 第3講 ベンチャーの歴史
- 第4講 キャリア形成手段としてのベンチャー
- 第5講 起業プロセス—楽天
- 第6講 事業計画書
- 第7講 リンスタートアップ
- 第8講 資本政策
- 第9講 創業支援
- 第10講 学生起業
- 第11講 就業後起業
- 第12講 世界の起業家
- 第13講 連続起業家
- 第14講 まとめ—ベンチャーへの転換
- 第15講 学習成果の確認—授業内期末試験

■フィードバックの要領

毎回提出のミニッツペーパーの講評と質問・意見への回答・コメントを翌回講義で行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 授業貢献点と期末試験の合計が 90 点以上
- 評価 A (89 ~ 80 点) : 授業貢献点と期末試験の合計が 80 点以上 90 点未満
- 評価 B (79 ~ 70 点) : 授業貢献点と期末試験の合計が 70 点以上 80 点未満
- 評価 C (69 ~ 60 点) : 授業貢献点と期末試験の合計が 60 点以上 70 点未満
- 評価 F (59 点以下) : 授業貢献点と期末試験の合計が 60 点未満

■評価方法

授業貢献点 (59%)、期末試験 (41%)。授業貢献点は、ミニッツペーパーから、授業を聴き自ら考えたかを評価する。期末試験は、ベンチャー企業に関する知識と、企業家精神を通じた事業構想活動の理解度を評価する。

■留意点

授業貢献点は単なる出席点とは異なる。毎回の授業においてミニッツペーパーの提出を求め、その内容を A (授業を聴き良い気づきがあった)、B (授業を聴いていた)、C (授業を聴いていたとは思われない) の3段階評価し授業貢献点とする。A は加対象 (6 点)、B が標準 (4 点)、C は減点 (-4 点)、欠席は 0 点。授業の受講態度が悪い場合は欠席以下の評価となる。授業貢献点は最大 59 点。

科目名 マーケティング・データ分析 (Marketing Data Analysis)**サブタイトル** Rを用いた統計分析の基礎**担当教員** 崎濱 栄治**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**実務経験のある教員による授業****■講義目的**

ICT技術の発展を背景として、企業活動では多種多様なデータが蓄積されている。現代のビジネスパーソンには、それらデータから価値ある情報を読み取り、活用する能力が求められている。本講義では、データの種類、加工方法、集計やグラフ化による基本的なデータの特徴の捉え方、データ間の関連性を統計的に明らかにする方法を学ぶ。同時に、世界中で広く利用されている統計解析ソフトRStudioの操作方法を身につける。可能な限り他の受講者とのディスカッションや共同作業によって行う。

■講義分類

社会人力育成/ビジネス ICT

■到達目標

データの入力・加工方法、集計やグラフ化による基本的なデータの特徴の捉え方、データ間の関連性を統計的に明らかにする方法を習得する。同時に、企業で広く導入されている専門的な統計解析ソフトRStudioの操作方法を身につける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

データ分析に関わる基礎的な知識を理解した上で、正しくデータを分析し、他者に説明する能力を身につける。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義/演習

[個人] プレゼンテーション

[ペア] なし

[グループ] PBL

[上記以外] なし

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

3回の課題提出を予定。(各1.5時間)

■授業の概要

- 第1講 オリエンテーション
- 第2講 データハンドリング技術
- 第3講 データ分析の基本
- 第4講 相関分析
- 第5講 クラスタ分析によるセグメンテーション①
- 第6講 クラスタ分析によるセグメンテーション②
- 第7講 回帰分析
- 第8講 セグメントの特徴を把握する①
- 第9講 セグメントの特徴を把握する②
- 第10講 セグメントの特徴を把握する③
- 第11講 RFM分析と決定木分析①
- 第12講 RFM分析と決定木分析②
- 第13講 RFM分析と決定木分析③
- 第14講 2値データの予測モデル(ロジスティック回帰)①
- 第15講 2値データの予測モデル(ロジスティック回帰)②

■フィードバックの要領

Googleクラウドサービス上でフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上) : 顕著にすぐれた水準に達している
- 評価 A (89～80点) : 到達すべき水準を十分に超えている
- 評価 B (79～70点) : 到達すべき水準に達している
- 評価 C (69～60点) : 十分とは言えないが最低限の水準を満たしている
- 評価 F (59点以下) : 本講義で到達すべき水準に達していない

■評価方法

平常点30% : 授業への貢献(発言、サポート等) 課題70%

■留意点

- ・履修状況に応じて、内容を変更することがある。
- ・パソコンを用いた実習授業を行うため、十分に充電して持参すること。
- ・本講義は、社会調査士取得のための認定科目(C分野)に該当する。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 マーケティング・リサーチ (Marketing Research)**サブタイトル** 基礎からはじめるマーケティングリサーチ**担当教員** 加藤 みずき**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

初めてマーケティングリサーチに関して学ぶ人を主な対象とし、消費(者)行動に焦点を当てながら、マーケティングリサーチの重要性、活用の仕方を理解する。また、統計の基礎的な知識および分析法(具体的には、データの数値要約、サンプリング法、相関、t検定など)や質問紙の作成法を修得した上で、それらの統計的手法を用いたマーケティングリサーチの調査計画の立て方を学ぶ。

■講義分類

顧客理解/ビジネス環境理解

■到達目標

基礎的な統計の知識を活用し、身近な消費行動を数値で表すための適切なデータ収集計画を立てることができる。収集したデータについて適切な手法を用いて分析し、結果を正しく解釈した上で、報告書の形でわかりやすくまとめることができる。授業で学んだ統計手法を組み合わせて応用的な調査計画を立てることができる。授業で扱う知識や技能の修得において、班のメンバーと協同し、メンバー全員の理解度を高めることに貢献できる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

提示されたデータについて、目的に沿った分析方法を考え、解釈することができるようになる。またその結果をわかりやすく表現することができるようになる。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義/演習

- [個人] ワークシート
- [ペア] ペアワーク
- [グループ] PBL
- [上記以外] なし

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

予習と復習合わせて1.5時間。事前、事後学習ポイントの詳細については前の授業で指示するので事前に調べてくること。その他、各班が作成した調査に回答し、得られたデータを集計する作業も必要に応じ行う。

■授業の概要

- 第1講 ガイダンス・代表値の使い分け方
- 第2講 代表値の使い分け方・平均値と標準偏差、正規分布の理解
- 第3講 様々な調査方法と実施における注意点
- 第4講 二つの平均値には差があると言えるか①：統計的検定の基本的な考え方
- 第5講 二つの平均値には差があると言えるか②：t検定の実施と解釈
- 第6講 二つの平均値には差があると言えるか③：班で調査計画案を考える
- 第7講 二つの変数間の関連を見る①：相関分析の実施と結果の解釈
- 第8講 二つの変数間の関連を見る②：相関分析の実施と結果の解釈
- 第9講 二つの変数間の関連を見る③：班で調査計画案を考える
- 第10講 二つの変数間の関連を見る④：データの分析と結果の解釈
- 第11講 これまでの分析を使って模擬データを分析しよう①：分析方針の決定と分析
- 第12講 これまでの分析を使って模擬データを分析しよう②：結果の解釈とまとめ
- 第13講 調査計画案を作ろう①：与えられたテーマから班で調査計画を立てる
- 第14講 調査計画案を作ろう②：個人で問いから調査計画を立て、最終計画書を作成
- 第15講 統括とまとめ

■フィードバックの要領

翌週の授業で配付する授業通信の中で回答することでフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上)：各評価対象において、顕著にすぐれた水準に達している
- 評価 A (89～80点)：各評価対象において、到達すべき水準を十分に超えている
- 評価 B (79～70点)：各評価対象において、到達すべき水準に達している
- 評価 C (69～60点)：各評価対象において、十分とは言えないが最低限の水準を満たしている
- 評価 F (59点以下)：いずれの評価対象においても得点が十分ではなく、到達すべき水準に達していない

■評価方法

平常点(30%)：授業内課題への記入・提出などを含めた参加点 小テスト(20%)：統計の運用に関する正しい理解の確認のために実施 調査計画書作成課題(50%)：班で練った調査計画案をシートにまとめる。

■留意点

- ・到達目標にも示したように、グループワークを通して理解を深めることを目指しているため、授業中・授業外ともに積極的な参加を行うことが望ましい。
- ・本講義は社会調査士取得のための認定科目(B分野)に該当する。

科目名 リーダーシップ論 (Leadership Theory)**サブタイトル** リーダーシップ理論の学習とその実践**担当教員** 西村 知見**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**実務経験のある教員による授業****■講義目的**

経営者や管理者のリーダーシップは、企業の成果をあげるために不可欠である。しかしながら、「リーダー＝凄い人」というイメージのために、自分自身のリーダーシップに気付いていない人も多い。実際、リーダーシップは決して遠い存在ではなく、あなたの身近に存在する。本講義では、そのようにイメージを変えながら、理論や事例を学び実践することで、「私なりのリーダーシップ」を見つけ出すことを目指す。

■講義分類

ビジネスマネジメント／社会人育成

■到達目標

理論・事例学習とグループゲームやワークを通じて、自分自身の得意な、あるいは出来そうなリーダーシップを発見することを目指すとする。就職面接において、しばしば「リーダーシップを発揮した出来事」を質問されることもあり、これにしっかりと対応できるようにする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP3 関心と意欲 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

グループゲームやワークの中で、他者と協力しながら目標を達成することに挑戦しつつ、理論や事例を学習していく。他の意見を傾聴しながらも物事をまとめ上げ、それを発信していくことも授業内で経験する。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義

[個人] プレゼンテーション／ワークシート

[ペア] なし

[グループ] なし

[上記以外] VTR 学習

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

授業前に、事前学習ポイントを調べ、T-NEXT 上の授業資料に目を通し疑問点を明確にする (1.5 時間)。授業後に、事前学習の疑問点解消を確認し、未解消の項目は自己調査や教員質問等で解消する (1.5 時間)。

■授業の概要

- 第1講 イン트로ダクション：リーダーシップとは何か？を考える
- 第2講 リーダーシップに対するイメージを考える I (グループゲーム①)
- 第3講 リーダーシップに対するイメージを考える II (VTR 学習①)
- 第4講 リーダーシップの基礎的理論 I
- 第5講 リーダーシップの基礎的理論 II
- 第6講 リーダーシップの基礎的理論 III (VTR 学習②)
- 第7講 リーダーシップの基礎的理論 IV & 中間テストに関する説明
- 第8講 中間テスト
- 第9講 ディスカッション・リーダーシップ I (グループゲーム②)
- 第10講 ディスカッション・リーダーシップ II (VTR 学習③)
- 第11講 リーダーシップ・スピーチ I
- 第12講 リーダーシップ・スピーチ II
- 第13講 リーダーシップ・スピーチ III
- 第14講 リーダーシップ・スピーチ IV (グループワーク振り返り)
- 第15講 総まとめ (期末レポートについて)

■フィードバックの要領

ワークシートの回答に対する講評、質問・意見に対するコメントを翌回の講義で実施する。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 授業貢献点・中間テスト・期末レポートの合計が 90 点以上
- 評価 A (89 ~ 80 点) : 授業貢献点・中間テスト・期末レポートの合計が 80 ~ 89 点
- 評価 B (79 ~ 70 点) : 授業貢献点・中間テスト・期末レポートの合計が 70 ~ 79 点
- 評価 C (69 ~ 60 点) : 授業貢献点・中間テスト・期末レポートの合計が 60 ~ 69 点
- 評価 F (59 点以下) : 授業貢献点・中間テスト・期末レポートの合計が 59 点以下

■評価方法

授業貢献点 (40 点)、中間テスト (30 点)、期末レポート (30 点) 授業貢献点は、ワークシート+プレゼンテーション等グループワークでの貢献を総合して評価する。

■留意点

およそ毎回の授業においてワークシートの提出を求め、その内容を A (授業を聴き良い気づきがあった、2 点)、B (授業を聴いていた、1 点)、C (授業を聴いていたとは思われない、0 点) の 3 段階で評価し授業貢献点とする。プレゼンテーション等グループワークの貢献度は 10 点の範囲で評価する。欠席は 0 点となる。授業の受講態度が悪い場合は、欠席以下の評価となる。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 立志人物伝 (Ambitious Person Theory)

サブタイトル ライフマネジメントを考える

担当教員 久恒 啓一

対象学年 2年生以上

区分 秋学期

実務経験のある教員による授業

■講義目的

ビジネスはコミュニケーション活動によって成り立っており、その活動を担うのは人である。経営資源を束ねる人的資源の重要性はますます高まっている。今後はキャリア形成を含むライフマネジメントの視点から人的資源の活性化を考えながら、組織や経営やビジネスについて考察することが求められる。この講義においては、近代日本を作った明治期を中心とするわが国の志を実現した偉人の生涯（経営者・政治家・芸術家・作家・ジャーナリスト）の資料やYouTubeの映像を題材に、いくつかの切り口—仰ぎ見る師匠の存在、敵との切磋・友との拓磨、持続する志、怒涛の仕事量、修養・鍛錬・研鑽、飛翔する構想力、日本への回帰—を用いて今日の産業社会で生きるための問題解決の知恵について学び、自らの志とキャリアマネジメント、ライフマネジメントについて深く考える力を養う。

■講義分類

ビジネスマネジメント／グローバルビジネス

■到達目標

自身のロールモデルを発見し、最終レポートとしてパワーポイントを用いて「私のロールモデル〇〇〇〇の人生鳥瞰図」を作成し、ワードを用いて「私のロールモデル〇〇〇〇から学んだこと」をレポートできる力を身につける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP5 高い志 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

社会の発展に寄与してきた過去の偉人たちの業績と志、そして生き方を知り、自身のキャリア意識の向上を図る。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義／演習

[個人] プレゼンテーション／ワークシート

[ペア] ペアワーク／ピア・レビュー

[グループ] なし

[上記以外] 性格タイプ別グループワーク

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

次回に取り上げる予定の偉人について自分なりに調べておくこと。(90分)、毎回の授業で紹介したYouTube映像を見る。(90分)

■授業の概要

- 第1講 講義 「近代日本のわが国の偉人たちのライフマネジメント」
- 第2講 講義 「仰ぎ見る師匠の存在Ⅰ」
- 第3講 講義 「仰ぎ見る師匠の存在Ⅱ」
- 第4講 講義 「敵との切磋、友との拓磨Ⅰ」
- 第5講 講義 「敵との切磋、友との拓磨Ⅱ」
- 第6講 講義 「持続する志」
- 第7講 講義 「怒涛の仕事量Ⅰ」
- 第8講 講義 「怒涛の仕事量Ⅱ」
- 第9講 講義 「修養・鍛錬・研鑽」
- 第10講 講義 「飛翔する構想力」
- 第11講 講義 「日本への回帰」
- 第12講 講義 「人物モデルの人生鳥瞰図作成Ⅰ」
- 第13講 講義 「人物モデルの人生鳥瞰図作成Ⅱ」
- 第14講 講義 「人物モデルの人生鳥瞰図作成Ⅲ」
- 第15講 講義 「人物モデルの人生鳥瞰図作成Ⅳ」

■フィードバックの要領

毎回提出させるアンケートのまとめを、次回授業で提示し、疑問などに答えていく。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 極めて高い平常点。レポートが特に優れている。

評価 A (89 ~ 80 点) : 非常に高い平常点。レポートが優れている。

評価 B (79 ~ 70 点) : 高い平常点。レポートが良い。

評価 C (69 ~ 60 点) : 高い平常点。レポートの提出あり。

評価 F (59 点以下) : 低い平常点。レポートの提出なし。

■評価方法

平常点 50 点、毎回の提出レポート 25 点、最終レポート (パワーポイント) 25 点

■留意点

次回に取り上げる予定の偉人について、自分なりに調べておくことを心がけてもらいたい。講義で興味を持った人物の自伝や伝記を読んでほしい。

科目名 Web サービス開発 (Web Service Building)**サブタイトル** JavaScript + Web API**担当教員** 出原 至道**対象学年** 3 年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

本講義は、「Web プログラミング」と並んで、開発系科目の最上位に位置づけられる。開発の分野を志す学生にとって、大きな武器となる科目である。「Web プログラミング」がサーバサイドのアプリケーション開発を行うのに対し、本講義では、Web ページに埋め込まれる形で実行されるクライアントサイドアプリケーション開発を実践する。具体的には、ウェブ上で提供されている様々なデータを API (Application Programming Interface) を通してリアルタイムで自動的に収集し、それに基づいたサービスを利用者に提供するアプリケーションを開発する。講義では、最先端の API を実装実験するため、実際に取り上げる API は変更される場合がある。

■講義分類

ビジネス ICT

■到達目標

- ・クライアントサイドアプリケーションが実装できるようになる。
- ・XML 形式のデータ構造が理解できる。
- ・Web API の概念を理解し、自力で自由に使える。
- ・新しい Web サービス提案ができる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ① 最も身につけられる事項 ② 2 番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ③ ①・②で選択された事項の詳細

Web API の概念を理解し、自力で自由に使えるようになることで、新しい Web サービス提案ができるようになる。

■授業形態 AL 手法 ※該当する項目のみ記載

講義 / 演習

- [個人] プレゼンテーション
- [ペア] ペアワーク / 相互教授法
- [グループ] PBL
- [上記以外] なし

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

講義内では、API の概要を説明し、簡単な実験を行う。実験は、各自が次回講義までに行い、課題として提出すること。(事後学習 3 時間) この課題提出がない場合、単位の取得を認めない。

■授業の概要

- 第1講 イントロダクション (基本技術の確認・開発環境の整備)
- 第2講 JavaScript 入門
- 第3講 API に関する基礎知識
- 第4講 Google API を使ってみる
- 第5講 Google Maps API を使う
- 第6講 Graph を使う
- 第7講 ストリートビューの利用
- 第8講 画像 SNS が提供している API を利用する
- 第9講 中間課題作業日
- 第10講 中間作品発表日
- 第11講 その他の API の利用
- 第12講 その他の API の利用
- 第13講 作品準備作業日
- 第14講 最終作品発表会
- 第15講 全講義の復習とまとめ

■フィードバックの要領

試験の模範解答を受講生に公開する。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 数値評価で 90 点以上
- 評価 A (89 ~ 80 点) : 数値評価で 80 点以上 90 点未満
- 評価 B (79 ~ 70 点) : 数値評価で 70 点以上 80 点未満
- 評価 C (69 ~ 60 点) : 数値評価で 60 点以上 70 点未満
- 評価 F (59 点以下) : 数値評価で 60 未満

■評価方法

10 回以上の出席、かつ、中間発表・最終発表を前提として、以下の配分で評価する。授業内レポート (30%)、作品 (20%)、試験 (50%)

■留意点

ウェブデザイン・プログラミングの能力を当然に要求する科目である。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 Webプログラミング (Web Programming)**サブタイトル** サーバサイドプログラミング**担当教員** 出原 至道**対象学年** 3年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

この講義は、ビジネスICTの開発系スキルの集大成として、実践を通じて、Webプログラミング環境構築、HTML、CSS、PHPプログラミング、データベースシステムとの連携を習得し、Webプログラミングの全体像を理解することを目的とする。これにより、受講生は、さまざまなシーンで高度にWebを活用して問題解決に資する能力を得ることができ、実社会で高く評価される。講義にはPCを持参すること。受講生の技術レベル・進度に応じて、講義内容を調整することがある。

■講義分類

ビジネスICT

■到達目標

(1) Webプログラミング環境を構築できる (2) HTMLを使ったWebページを作成できる (3) HTMLにCSSを組み込んでWebページを作成できる (4) PHPプログラムを作成できる (5) PHPプログラムによりHTMLのフォームを作成し処理できる (6) PHPプログラムによりウェブデータベースシステムが構築できる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

さまざまなシーンで高度にWebを活用して問題解決に資する能力を得る。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義 / 演習

[個人] プレゼンテーション

[ペア] なし

[グループ] PBL

[上記以外] なし

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

各回の講義では、実習時間が不十分であるので、各回90分程度の実習を通して、説明した要素技術について習熟を深めること。

■授業の概要

- 第1講 Webの基礎と環境構築
- 第2講 HTMLの基礎(復習)
- 第3講 HTMLの基礎(アンカー)
- 第4講 CSS
- 第5講 PHPの基礎の習得
- 第6講 FORMによるデータの送信・PHP側での受信
- 第7講 二重配列
- 第8講 データベースの基礎
- 第9講 PHPとデータベース
- 第10講 サニタイズ
- 第11講 セッション管理
- 第12講 メッセージングソフト
- 第13講 掲示板の実装
- 第14講 独自機能の実装
- 第15講 試験

■フィードバックの要領

試験結果の講評をウェブ上で行う。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : 数値評価で90点以上
 評価 A (89～80点) : 数値評価で80点以上90点未満
 評価 B (79～70点) : 数値評価で70点以上80点未満
 評価 C (69～60点) : 数値評価で60点以上70点未満
 評価 F (59点以下) : 数値評価で60点未満

■評価方法

講義内で複数回出題される課題提出(60%)、試験(40%)。試験は講義の最終回に実施する予定。

■留意点

・コンピュータを持参すること。前提知識として、①Webの使い方、②基礎的なプログラミングの知識・能力を持っていること。扱う内容が多岐にわたり(HTML、CSS、PHPなど)、それらの知識を積み上げていく必要があるため、理解が難しいと感じた場合は自らWebや参考書籍などで調べてフォローする必要がある。

科目名 アジア経済論Ⅰ (Asia EconomyⅠ)**サブタイトル** アジアビジネスと企業戦略、そして起業家精神**担当教員** 金 美徳**対象学年** 3年生以上**区分** 春学期**実務経験のある教員による授業****■講義目的**

21世紀は、アジアダイナミズムの時代である。換言すれば「ビジネス＝アジア」、「人生＝アジア」の時代と言っても過言でない。今や日本企業は、アジアの成長やエネルギーを取り込むため躍りになっている。本授業では、アジア経済の体系的な知識・理論やアジアの企業・産業・市場・情勢に関する情報の収集・分析方法を学ぶ。また、「アジア」をキーワードにして、日本企業の経営戦略・商品開発・経営企画・ビジネスモデルや日本経済の課題を考察する。さらに、アジア経済論Ⅰで学んだことを就活・ビジネス・起業に活かす方法を考える。本授業のキーワードは、アジア・ユーラシアダイナミズム、グローバルビジネス、アジアビジネス、アジアマーケティング、インバウンド（外国人観光客）、新興国ビジネスモデル、アジアの知恵と日本の知恵の融合、地政学的知と地政学的戦略、アジアマインド、アジアセンスである。

■講義分類

ビジネス環境理解／ビジネス創造／グローバルビジネス

■到達目標

①アジアの政治外交・経済ビジネス・文化社会に関する基礎的な知識・理論を習得する。②アジア発のビジネス情報の収集力・分析力・発信力を身に付ける。③アジアの潮流・論理・視点に基づく経営戦略力、ビジネスモデル構築力、起業力を身に付ける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

アジア・ユーラシアダイナミズムに向き合う姿勢や勇気を育み、グローバルビジネスの場で活躍すると共にわが国の産業社会の健全たる発展に貢献できるようになる。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義／演習

【個人】 プレゼンテーション

【ペア】 なし

【グループ】 なし

【上記以外】 なし

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

アジア情勢やアジアビジネスに関するニュースやネット情報を調べる（1.5時間）。授業開始時に2～3名の学生に報告してもらう（30分）。

■授業の概要

- 第1講 アジア経済論Ⅰガイダンス
- 第2講 アジア・ユーラシアダイナミズムといかに向き合うか (1)
- 第3講 アジア・ユーラシアダイナミズムといかに向き合うか (2)
- 第4講 アジア・ユーラシアダイナミズムといかに向き合うか (3)
- 第5講 ビジネスに重要な平和に対する敏感さ (1)
- 第6講 ビジネスに重要な平和に対する敏感さ (2)
- 第7講 ビジネスに重要な平和に対する敏感さ (3)
- 第8講 日本企業の現状と課題 (1)
- 第9講 日本企業の現状と課題 (2)
- 第10講 アジア市場とアジア戦略 (1)
- 第11講 アジア市場とアジア戦略 (2)
- 第12講 アジア市場とアジア戦略 (3)
- 第13講 アジア市場とアジア戦略 (4)
- 第14講 アジア戦略レポートのテーマ発表①
- 第15講 アジア戦略レポートのテーマ発表②

■フィードバックの要領

レポートのテーマや設定理由について、フィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 毎回提出の講義メモなど平常点と最終レポートの合算点が、90%以上であること。
 評価 A (89 ~ 80 点) : 毎回提出の講義メモなど平常点と最終レポートの合算点が、89 ~ 80%であること。
 評価 B (79 ~ 70 点) : 毎回提出の講義メモなど平常点と最終レポートの合算点が、79 ~ 70%であること。
 評価 C (69 ~ 60 点) : 毎回提出の講義メモなど平常点と最終レポートの合算点が、69 ~ 60%であること。
 評価 F (59 点以下) : 平常点と最終レポートの合算点が、59%以下の場合は、不合格とする。

■評価方法

評価は、毎回提出の講義メモなど平常点 (70%) と最終レポート (30%) の割合で行う。①講義メモは、採点后、講義の最終段階で返却する。②最終レポートは、A4 用紙 3 枚以上とする。

■留意点

①携帯電話・パソコンは、使用を禁止する。②私語、帽子着用、飲食は、禁止する。③遅刻および途中退室は、厳禁とする。途中退室は、必ず入退室を記録（日付・時間・学籍番号・氏名）すること。④就職活動による欠席は、公平性を保つため欠席扱いとする。⑤講義メモの不正提出は、即刻、不合格とする。⑥最終レポートの不正提出は、不合格とする。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 アジア経済論Ⅱ (Asia EconomyⅡ)**サブタイトル** 日本とアジアの架け橋となる人材を目指そう**担当教員** パートル**対象学年** 3年生以上**区分** 秋学期**実務経験のある教員による授業****■講義目的**

時代は今、「知」が重要視される知識情報社会となっており、膨大な情報の中から必要な情報を抽出して分析し、未来を洞察していくことが求められている。本講義では、世界経済の牽引役として、また政治や外交面でも国際的プレゼンスの高まりを見せている中国を中心としながら、大中華圏（中国・台湾・香港・シンガポール）や中国の「一帯一路」構想の最新動向を踏まえ中国の辺境経済圏を立体的かつ複眼的な視点で理解するための基礎知識の習得と知見の広がり、そして日本をめぐる世界潮流、日本企業のビジネス環境を「読む」力の養成を目指す。具体的には最前線事例を取りあげながら産業界が求める問題発見能力と問題解決能力及び高度なコミュニケーション能力を備えた人材育成を念頭に置いた講義を行う。受講生は、本講義を通じて修得した知識を自分の将来に向けて活用できるようにすることが求められる。

■講義分類

ビジネス環境理解／社会人育成／グローバルビジネス

■到達目標

①中国・大中華圏・中国辺境経済圏のビジネスに関する基礎的な知識の修得。②中国・大中華圏・中国辺境経済圏の特徴と関連企業の経営戦略を分析し、日本企業の新たな経営戦略・ビジネスモデルの立案、企業間の協力の可能性について考える。③講義で修得した知見を就職活動で活用できるようにする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ③ ①・②で選択された事項の詳細

中華圏・中国辺境経済圏に関する基礎的な学力を養い、グローバル（中華圏・中国辺境経済圏）とローカル（日本）の関係を意識しながら産業界に発生する様々な問題に対処している専門的能力を体系的に修得する。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載**講義**

- [個人] プレゼンテーション
- [ペア] ヘアワーク／相互教授法
- [グループ] PBL
- [上記以外] 海外留学参加者による報告会を実施する。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

大中華圏や中国の辺境地域に関する時事問題をはじめ、講義内容の中で自分自身に関心をもつ分野についての情報の収集、分析、調査を行う習慣をつけること。予習復習に要する時間は各 1.5 時間以上とする。

■授業の概要

- 第1講 ガイダンス、講義目的、内容、受講上の心得について解説。
- 第2講 大中華圏 (1) ～台湾編：台湾の歴史、文化、経済状況
- 第3講 大中華圏 (2) ～香港編：香港の歴史、文化、華人財閥
- 第4講 大中華圏 (3) ～シンガポール編：シンガポールの歴史、文化、経済状況
- 第5講 中国の「辺境経済圏」(1)：「新シルクロード経済圏」
- 第6講 中国の「辺境経済圏」(2)：「グレーターメコン経済圏」
- 第7講 中国の「辺境経済圏」(3)：「東北アジア経済圏」
- 第8講 中国の「辺境経済圏」(4)：「ヒマラヤ経済圏」
- 第9講 中国企業の対外投資の現状と課題：中国企業の海外進出の目的と成果
- 第10講 中国の対外関係 (1) ～米中関係
- 第11講 中国の対外関係 (2) ～中露関係：中国とロシア両国の経済・外交関係、SCO
- 第12講 中国の対外関係 (3) 中国と中東・アフリカ関係：中国と中東アフリカ関係の現状
- 第13講 中国の対外関係 (4) ～中国と欧州関係：中国と欧州関係の現状
- 第14講 日中経済関係の現状と課題：日中経済関係の最新状況
- 第15講 秋学期の総括：大中華圏・中国の辺境経済圏・「一帯一路」・AIIBの最新動向。

■フィードバックの要領

毎回の講義レポートに対しコメントをつけてフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上)：100 点満点中 90 点以上。
- 評価 A (89 ～ 80 点)：100 点満点中 89 ～ 80 点。
- 評価 B (79 ～ 70 点)：100 点満点中 79 ～ 70 点。
- 評価 C (69 ～ 60 点)：100 点満点中 69 ～ 60 点。
- 評価 F (59 点以下)：100 点満点中 59 点以下。

■評価方法

毎回の講義レポート 60 点 (15 回×4 点＝60 点)、最終レポート 30 点、質問 10 点 (1～10 点) の 100 点満点で絶対評価。

■留意点

毎回提出する講義レポートを重視 (15 回×4 点＝60 点) する。最終レポート (30 点) は、A4 用紙 2 枚以内。講義内の質問・意見 (10 点) は、講義への積極的な参加・貢献として評価し、発言回数に基づいて 1 点～10 点の評価を加える。講義レポートは、講義内容を理解し、かつ独自の問題意識を持ち、問題解決へ向けての取り組み姿勢が顕著に表れているのかを重視する。採点后、最後に返却してフィードバックを行う。

科目名 韓国経済論 (Korean Economy)**サブタイトル** 日韓ビジネス**担当教員** 金 美徳**対象学年** 3年生以上**区分** 秋学期**実務経験のある教員による授業****■講義目的**

一つは、韓国企業について学ぶ。日本企業(中小・ベンチャー企業含む)が韓国進出するか否か、韓国企業をライバルにするかパートナーにするか、韓国人観光客や韓国企業の日本への誘致策を考える。また、韓国企業と日本企業の経営スタイルやグローバル戦略を比較研究することにより、新たな経営戦略やビジネスモデルを考察する。さらに、韓国企業を通じて、アジア企業やアジアビジネスについて学ぶことである。もう一つは、朝鮮半島情勢を知る。朝鮮半島は、韓国と北朝鮮、南北に分断されており、緊迫かつ不安定な情勢である。そのため、日本の平和や企業のリスクマネジメントを考える上で、朝鮮半島の情勢分析は必要不可欠である。本講義のキーワードは、日韓ビジネスと日韓企業連携、韓国企業とアジア企業、韓流マーケティングとアジアマーケティング、アジアビジネスと新興国ビジネス、激動する朝鮮半島とアジアダイナミズムである。

■講義分類

ビジネス環境理解/ビジネス創造/グローバルビジネス

■到達目標

①韓国と北朝鮮の政治外交・経済ビジネス・文化社会に関する基礎知識を習得する。②韓国企業の経営スタイルやグローバル戦略などの特徴を分析し、日本企業の新たな経営戦略やビジネスモデルを立案する。または日韓ビジネスのアイデアを考える。③朝鮮半島問題に対する問題意識の向上を図り、国際情勢や平和に敏感になる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP3 関心と意欲 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

平和に敏感なビジネスパーソンや経済人として、日韓ビジネスの場で活躍するとともにわが国の産業社会の健全たる発展に貢献できるようにする。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義

[個人] プレゼンテーション/ワークシート
[ペア] なし
[グループ] なし
[上記以外] なし

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上)及び具体的な内容

朝鮮半島情勢や日韓ビジネスに関するニュースやネット情報を調べること(1.5時間)。授業開始時に3～5名の学生に報告してもらう(30分)。

■授業の概要

- 第1講 韓国経済論ガイダンス
- 第2講 韓国政治の基礎(1)
- 第3講 韓国政治の基礎(2)
- 第4講 韓国政治の基礎(3)
- 第5講 韓国政治の基礎(4)
- 第6講 韓国経済の基礎(1)
- 第7講 韓国経済の基礎(2)
- 第8講 韓国経済の基礎(3)
- 第9講 韓国経済の基礎(4)
- 第10講 北朝鮮の政治・経済の基礎(1)
- 第11講 北朝鮮の政治・経済の基礎(2)
- 第12講 北朝鮮の政治・経済の基礎(3)
- 第13講 北朝鮮の政治・経済の基礎(4)
- 第14講 最終レポートのテーマ、設定理由、目次の発表①
- 第15講 最終レポートのテーマ、設定理由、目次の発表②

■フィードバックの要領

レポートのテーマと設定理由は、フィードバックする。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : 平常点、毎回提出の講義メモ、最終レポートの合算点が、90%以上であること。
 評価 A (89～80点) : 平常点、毎回提出の講義メモ、最終レポートの合算点が、89～80%であること。
 評価 B (79～70点) : 平常点、毎回提出の講義メモ、最終レポートの合算点が、79～70%であること。
 評価 C (69～60点) : 平常点、毎回提出の講義メモ、最終レポートの合算点が、69～60%であること。
 評価 F (59点以下) : 平常点、講義メモ、最終レポートの合算点が59%以下の場合は、不合格とする。

■評価方法

①平常点(35%)、毎回提出の講義メモ(35%)、最終レポート(30%)の割合で評価する。②講義メモは、最低限の記述内容が記載されていない場合は、減点する。③最終レポート(30%)は、A4用紙3枚以上とする。

■留意点

①携帯電話・パソコンは、使用を禁止する。②私語、帽子着用、飲食は、禁止する。③遅刻および途中退室は、厳禁とする。④就職活動による欠席は、公平性を保つため欠席扱いとする。⑤講義メモの不正提出は、即刻、不合格とする。⑥最終レポートの不正提出は、不合格とする。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 キャリア・デザイン III (Career Design III)**サブタイトル** 社会の変化を知る・自己を知る・業界と企業を知る**担当教員** 初見、西村**対象学年** 3年生以上**区分** 春学期**実務経験のある教員による授業****■講義目的**

本講義を通して、自己の将来を考え、卒業後の職業生活（キャリア）の方向性を検討する。具体的には、(1) 社会の変化を理解する、(2) 自己を理解する、(3) 企業・仕事を理解することの3点を通して、将来のキャリアデザインを設計していく。キャリア・デザインⅢでは、特に履歴書・エントリーシートの書き方を学習していく。

■講義分類

ビジネス環境理解／社会人力育成

■到達目標

(1) 社会の変化を理解する、(2) 自己を理解する、(3) 企業・仕事を理解する、の3点を通して、自己のキャリアに対する知識と理解、関心と意欲を養っていく。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ③ ①・②で選択された事項の詳細

(1) 社会の変化、(2) 自己理解、(3) 業界・企業の分析を通して、職業観の育成を図ると共に、自己のキャリアに対する知識と理解、関心と意欲を養っていく。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義

[個人] ワークシート
[ペア] ペアワーク
[グループ] なし
[上記以外] なし

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

講義テーマに対する事前学習（1.5 時間）。講義後の振り返りシート（本日の学び）の作成と内容の復習、指定図書の読書など（1.5 時間）。

■授業の概要

- 第1講 キャリア・デザインⅢガイダンス
- 第2講 自己を知る①：PROG テスト
- 第3講 自己を知る②：PROG テスト
- 第4講 履歴書・エントリーシート①
- 第5講 履歴書・エントリーシート②
- 第6講 筆記試験について
- 第7講 自己を知る③：PROG テスト解説会
- 第8講 履歴書・エントリーシート③
- 第9講 フィールドワーク準備①
- 第10講 フィールドワーク準備②
- 第11講 フィールドワーク（振り返り）③
- 第12講 キャリア・デザインⅢまとめ
- 第13講 予備日（振り替え休講①）
- 第14講 予備日（振り替え休講②）
- 第15講 キャリア・デザインⅢまとめ②

■フィードバックの要領

「本日の学び」や履歴書・エントリーシート等に対し、評価・フィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上)：フィールドワークに参加し、提出物について大変優れている場合
 評価 A (89～80 点)：フィールドワークに参加し、提出物について十分な到達度に達している場合
 評価 B (79～70 点)：フィールドワークに参加し、提出物について一定の到達度に達している場合
 評価 C (69～60 点)：フィールドワークに参加し、提出物について十分な到達度に達していない場合
 評価 F (59 点以下)：フィールドワークに不参加、もしくは提出物について最低限の到達度に達していない場合

■評価方法

①「本日の学び」・履歴書・エントリーシート等の提出物（50%）②フィールドワークへの参加（50%）

■留意点

本講義は主に3年生を対象とした科目である。本科目と共にキャリア・デザインⅣ（秋学期）を必ず履修すること。合わせて、インターンシップⅠ・Ⅱの履修を推奨する。また、本科目ではフィールドワーク（6月下旬予定）への参加が必須となる。土日に開催される予定のため、事前のスケジュール調整を行うこと。

科目名 キャリア・デザインⅣ (Career DesignⅣ)**サブタイトル** 社会の変化を知る、自己を知る、業界・企業を知る**担当教員** 初見、西村**対象学年** 3年生以上**区分** 秋学期**実務経験のある教員による授業****■講義目的**

本講義を通して、自己の将来を考え、卒業後の職業生活（キャリア）の方向性を検討する。具体的には、(1) 社会の変化を理解する、(2) 自己を理解する、(3) 企業・仕事を理解することの3点を通して、将来のキャリアデザインを設計していく。キャリア・デザインⅣでは、特に面接・グループディスカッションの手法について学習していく。

■講義分類

ビジネス環境理解／社会人力育成

■到達目標

(1) 社会の変化を理解する、(2) 自己を理解する、(3) 企業・仕事を理解する、の3点を通して、自己のキャリアに対する知識と理解、関心と意欲を養っていく。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

(1) 社会の変化、(2) 自己理解、(3) 業界・企業の分析を通して、職業観の育成を図ると共に、自己のキャリアに対する知識と理解、関心と意欲を養っていく。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義

[個人] ワークシート
[ペア] ペアワーク
[グループ] なし
[上記以外] なし

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

講義テーマに対する事前学習（1.5時間）。講義後の振り返りシートの作成と内容の復習、推薦図書の読書など（1.5時間）。

■授業の概要

- 第1講 キャリア・デザインⅣガイダンス
- 第2講 履歴書・エントリーシートの復習①
- 第3講 履歴書・エントリーシートの復習②
- 第4講 筆記試験の復習
- 第5講 グループディスカッション①
- 第6講 グループディスカッション②
- 第7講 面接について①
- 第8講 面接について②
- 第9講 面接について③
- 第10講 マナー講座
- 第11講 フィールドワーク準備①
- 第12講 フィールドワーク準備②
- 第13講 キャリア・デザインⅣまとめ
- 第14講 予備日（振り替え休講①）
- 第15講 予備日（振り替え休講②）

■フィードバックの要領

講義内容に関する小レポートについて、評価・フィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : フィールドワークに参加し、提出物について大変優れている場合
 評価 A (89 ~ 80 点) : フィールドワークに参加し、提出物について十分な到達度に達している場合
 評価 B (79 ~ 70 点) : フィールドワークに参加し、提出物について一定の到達度に達している場合
 評価 C (69 ~ 60 点) : フィールドワークに参加し、提出物について十分な到達度に達していない場合
 評価 F (59 点以下) : フィールドワークに不参加、もしくは提出物について最低限の到達度に達していない場合

■評価方法

①「本日の学び」等の提出物 (50%) ②フィールドワークへの参加 (50%)

■留意点

本講義は主に3年生を対象とした科目である。また、本科目ではフィールドワークへの参加が必須となる。土日に開催される可能性が高いため、事前のスケジュール調整を行うこと。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 経営組織 (Management Organization)**サブタイトル** 組織理論の理解と実践**担当教員** 小林 英夫**対象学年** 3年生以上**区分** 春学期**実務経験のある教員による授業****■講義目的**

企業は最も重要な経営資源である人を一つの組織としてまとめあげ、直面する内外の課題を解決し、成果をあげ続けることを目指す存在である。時代とともに変貌する組織のあり方、組織を構成する人的資源を最大に発揮する方法などを考える科目である。この問題に対してこれまでの学術的成果を踏まえ理論的側面からの検討を行うとともに、理論を実務に適用する際の考慮点を学び、実践的行動ができる能力を獲得する。

■講義分類

ビジネス環境理解／ビジネスマネジメント／グローバルビジネス

■到達目標

①組織とは何で企業組織はどのように運営されているのかを理解し説明できる、②組織の主要構成要素である人的資源が組織の中でどのように活かされているのかを理解し説明できる、③自らが組織を通じてキャリアを築き産業社会へ貢献するイメージを描くことができる、の3点を到達目標とする。これらを通じ、社会に貢献していくための知識や意欲、および組織の中で役割分担により組織目標の達成に貢献する力を身につける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

組織理論を体系的に学び理論を用いて実務的な問題解決方法を考えることができるとともに、組織的課題への対処を事例から学び、思考力や判断力、状況対応力を習得する。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義

[個人] ワークシート

[ペア] なし

[グループ] なし

[上記以外] ミニッツペーパー (個人)

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

授業前に、事前学習ポイントを調べ、T-NEXT 上の授業資料に目を通し疑問点を明確にする (1.5 時間)。授業後に、事前学習の疑問点解消を確認し、未解消の項目は自己調査や教員質問等で解消する (1.5 時間)。

■授業の概要

- 第1講 イントロダクション
- 第2講 モチベーション
- 第3講 古典的管理論
- 第4講 新古典派組織論
- 第5講 近代組織論
- 第6講 行動科学的管理論
- 第7講 事例からの組織理論体系の確認 1
- 第8講 事例からの組織理論体系の確認 2
- 第9講 組織構造と分業
- 第10講 リーダーシップ
- 第11講 企業理念と組織文化
- 第12講 組織社会化
- 第13講 組織とキャリア
- 第14講 キャリアマネジメント
- 第15講 学習成果の確認ー授業内期末試験

■フィードバックの要領

毎回提出のミニッツペーパーの講評と質問・意見への回答・コメントを翌回講義で行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 授業貢献点と期末試験の合計が 90 点以上
- 評価 A (89 ~ 80 点) : 授業貢献点と期末試験の合計が 80 点以上 90 点未満
- 評価 B (79 ~ 70 点) : 授業貢献点と期末試験の合計が 70 点以上 80 点未満
- 評価 C (69 ~ 60 点) : 授業貢献点と期末試験の合計が 60 点以上 70 点未満
- 評価 F (59 点以下) : 授業貢献点と期末試験の合計が 60 点未満

■評価方法

授業貢献点 (59%)、期末試験 (41%)。授業貢献点は、ミニッツペーパーから授業を聴き自ら考えたかを評価する。期末試験は、経営組織の知識、組織理論の理解、組織を通じた自らのキャリア形成への理解を評価する。

■留意点

授業貢献点は単なる出席点とは異なる。毎回の授業においてミニッツペーパーの提出を求め、その内容を A (授業を聴き良い気づきがあった)、B (授業を聴いていた)、C (授業を聴いていたとは思われない) の 3 段階評価し授業貢献点とする。A は加対象 (6 点)、B が標準 (4 点)、C は減点 (-4 点)、欠席は 0 点。授業の受講態度が悪い場合は欠席以下の評価となる。授業貢献点は最大 59 点。

科目名 経営と意思決定 (Decision Making for Management Sciences)**サブタイトル** 量的意思決定支援の方法**担当教員** 今泉 忠**対象学年** 3年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

ビジネス環境を含めた経営には、競争があり、そこではさまざまな問題解決のためには戦略的なアプローチが必要である。それは、これらがリスク下での意思決定問題として表現できることからわかる。本講義では、さまざまな状況下で適切に判断できる能力や技法などの意思決定の基礎について合理的な解決に活用しうる定量的方法について例を交えながら学ぶ。いくつかの課題については、グループ課題として行う。1. 意思決定とは、2. 確実性のもとでの意思決定、3. 不確実性のもとでの意思決定、4. ベイズ意思決定。

■講義分類

社会人力育成/ビジネス ICT

■到達目標

ビジネス環境での意思決定に関して次の項目について講義する。1. 意思決定とは、2. 確実性のもとでの意思決定、3. 不確実性のもとでの意思決定、4. ベイズ意思決定。特に次の習得を目標とする。(1) 定量的意思決定 (2) Decision Tree について理解している、(3) ベイズ意思決定について理解している。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ③ ①・②で選択された事項の詳細

DP2: 思考と判断 意思決定に関して、その問題や課題での状況と目的に応じてモデル化できる能力を修得する。また、DP4: 意思決定をわかりやすく伝え、相手の意見をもとによりよい意思決定を実践できるようになる

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義/演習

[個人] ワークシート
[ペア] なし
[グループ] PBL
[上記以外] なし

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

講義での課題を次の演習時間に提出することを想定している。課題を解くには、1時間程度、レポートとしてまとめるのに 0.5 時間ほど必要と考えられるので十分余裕をもっておくこと

■授業の概要

- 第1講 意思決定を考える：何故定量的な意思決定が必要かについて講義する
- 第2講 確実性のもとでの意思決定
- 第3講 確実性のもとでの意思決定 機会費用とサンクコスト
- 第4講 確実性のもとでの意思決定 代替案の選択Ⅰ 選択基準
- 第5講 確実性のもとでの意思決定 演習
- 第6講 選択基準 (効用を評価する)
- 第7講 選択基準 期待値
- 第8講 期待値による意思決定
- 第9講 不確実性での意思決定 演習
- 第10講 分岐型の意思決定Ⅰ
- 第11講 不確実性のもとでの意思決定 ディジションツリーⅠ
- 第12講 不確実性のもとでの意思決定 ディジションツリーⅡ
- 第13講 ディジションツリーとベイズ意思決定Ⅰ
- 第14講 ディジションツリーとベイズ意思決定Ⅱ
- 第15講 まとめ

■フィードバックの要領

講義をもとに提出されたリフレクションシートをもとに行う

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 学習した方法を理解して、問題解決に適用し提案できるか。
 評価 A (89 ~ 80 点) : 学習した方法を理解して、問題解決に適用できるか
 評価 B (79 ~ 70 点) : 学習した手法のうち、すくなくとも 2 つの手法について問題解決に適用できるか
 評価 C (69 ~ 60 点) : 学習した手法のうち、1 つの手法について問題解決に適用できるか
 評価 F (59 点以下) : 学習した手法について、理解不十分で問題解決に適用できない

■評価方法

平常点 20%、講義内レポート 40%、最終課題 40%

■留意点

この講義では定量的意思決定を扱うので、数理的処理に関する科目 (データサイエンス、経営科学) などの事前履修が必要となる。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 経営とセキュリティ (Management and Security)**サブタイトル** 情報化社会に対応する企業活動の変化と情報セキュリティ**担当教員** 齋藤 S. 裕美**対象学年** 3年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

本講義は、情報化社会の現在と今後の方向性を理解した上で、情報セキュリティ技術の重要性を認識し、それに対応できる情報セキュリティの知識の習得と情報セキュリティに関連する問題を解決する能力を身につけることを目標とする。インターネット技術の急速な発展に伴い、企業や組織においてもインターネットを前提とした情報収集・利用やそれに基づくサービス提供が当たり前となっている。情報セキュリティ上の脅威が経営に与える影響や情報セキュリティ対策の導入が新たな付加価値の創造へ繋がることを理解し、社会の変化に対応するために必要な情報セキュリティとは何を理解することを目指す。

■講義分類

ビジネス環境理解／ビジネス ICT

■到達目標

①情報セキュリティ上の脅威が経営に与える影響、②情報セキュリティの導入と付加価値の創造、③情報セキュリティの重要性、④情報セキュリティ対策の4点を説明できる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ③ ①・②で選択された事項の詳細

企業経営にとっての情報セキュリティとは何かを理解し、情報セキュリティ対策の必要性について理解する。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載**講義**

- [個人] ワークシート, T/Fテスト
- [ペア] ペアワーク
- [グループ] Buzz Group/KJ法
- [上記以外] なし

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上)及び具体的な内容

前講までの資料をよく読んでおくこと。また、講義資料に記載されているデータの出所を確認し、当該データや関連のデータにもあたっておくこと。必要な予習・復習時間は各1.5時間程度(合計3時間程度)である。

■授業の概要

- 第1講 情報の特徴
- 第2講 ビジネスシステムの変化
- 第3講 企業と情報処理システム
- 第4講 経営資源としての情報資産
- 第5講 情報資産に対する脅威1
- 第6講 情報資産に対する脅威2
- 第7講 リスクマネジメント
- 第8講 情報セキュリティマネジメント
- 第9講 情報セキュリティ対策1
- 第10講 情報セキュリティ対策2
- 第11講 リスクマネジメントと情報セキュリティ対策1
- 第12講 リスクマネジメントと情報セキュリティ対策2
- 第13講 リスクマネジメントと情報セキュリティ対策3
- 第14講 リスクマネジメントと情報セキュリティ対策4
- 第15講 経営と情報セキュリティ

■フィードバックの要領

T/Fテスト、発表に対するコメント等による。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : 到達目標①～④に関連づけ、自分の考察を含めてそれらの内容を的確に説明できる。
 評価 A (89～80点) : 到達目標①～④を個別に、自分の考察を含めてそれらの内容を的確に説明できる。
 評価 B (79～70点) : 到達目標①～④について、いずれか3つ以上の内容を的確に説明できる。
 評価 C (69～60点) : 到達目標①～④について、いずれか2つ以上の内容を的確に説明できる。
 評価 F (59点以下) : 講義内容について著しく理解が不足している。

■評価方法

期末試験 60%、グループワークへの参加度や発表資料 40%。

■留意点

- ①情報セキュリティマネジメント試験の内容に一部対応。
- ②状況によって、講義内容や扱う回の入れ替えを行う場合がある。

科目名 経済統計学 (Economic Statistics)**サブタイトル** 経済統計学 (Economic Statistics)**担当教員** 下井 直毅**対象学年** 3年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

産業社会を分析する上では多種多様な問題が提起される。経済成長の見通しはどうか、中高年層の雇用の予想はどうか、為替相場の動向はどう予想されるのか、等々である。こうした問題について経済理論はもちろん必要だが、経済統計データもあわせてみる必要がある。この講義では、日本経済の現状および日本経済が抱える課題について学び、最前線事例を紹介しつつ、その際に必要なデータについての基礎知識を身につけることを目的としている。

■講義分類

グローバルビジネス

■到達目標

日本経済の現状と課題についての基本的な知識や経済データに関する必要な知識の修得をめざす。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

ビジネスの中で最低限必要な基礎的な数学的思考力を基に、課題解決に向けたプロセスを明確にすることが出来る。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載**講義**

[個人] ワークシート
[ペア] なし
[グループ] なし
[上記以外] なし

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

授業前には、前回の講義内容について十分に理解しておくこと。講義内容の復習と次回講義の準備には、1.5時間以上の取組が必要です。

■授業の概要

- 第1講 日本経済の全体像—日本経済の全体像を把握する
- 第2講 戦後日本の経済成長—戦後日本の経済成長の推移を理解する
- 第3講 景気循環の姿とそのとらえ方—景気循環について理解する
- 第4講 ストックから見た日本経済—ストック面から日本経済を概観する
- 第5講 雇用の変動と日本型雇用慣行の行方—雇用環境について理解する
- 第6講 企業行動と日本型企業経営の行方—日本の企業行動について理解する
- 第7講 産業構造の変化と将来—産業構造の変化や将来のリーディング産業について考える
- 第8講 物価の変動とデフレ問題—物価の変動とデフレの問題について理解する
- 第9講 円レートの変動と日本経済—為替相場の変動や日本経済に及ぼす影響について理解する
- 第10講 貿易と国際収支の姿—貿易と国際収支の姿を概観する
- 第11講 直接投資と空洞化をめぐる議論—直接投資と空洞化をめぐる議論を概観する
- 第12講 財政をめぐる諸問題—財政をめぐる諸問題について考える
- 第13講 経済再生の鍵を握る金融—経済再生の鍵を握る金融について考える
- 第14講 講義前半の復習
- 第15講 講義後半の復習

■フィードバックの要領

レポートに対してコメントを記入して、フィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : 100点満点中90点以上
 評価 A (89～80点) : 授業の内容を十分に理解し、応用できるようになる。
 評価 B (79～70点) : 授業の内容は十分に理解できたものの、応用にまでは至らないというもの。
 評価 C (69～60点) : 授業の内容について、ほぼ理解できているというもの。
 評価 F (59点以下) : 授業の内容が理解できていない。

■評価方法

授業の平常点 (30%)、試験 (70%)。合計100%で100点満点。

■留意点

①出欠を確認する際に、本人の学生証が無い場合は、欠席扱いとする。②試験に対してフィードバックを行う。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 現代メディア論 (Contemporary Media Studies)**サブタイトル** メディアを読む、世界を読む**担当教員** 中澤 弥**対象学年** 3年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

メディアは変化の時代を迎えている。現代社会を生きるためには、情報を読み解き、判断していく力が求められている。そのためには、情報の受け手として、メディアを批判的にとらえていく必要がある。その出発点は、それぞれのメディアの成り立ちを知り、その成長の跡をたどることである。その上立って未来のメディアのありようを想像し、さらには SNS など新しいメディアに対処していく知見を得なくてはならない。

■講義分類

ビジネス環境理解／社会人力育成／グローバルビジネス

■到達目標

現在のメディア状況を理解し、深い問題意識を持つことができる。問題発見能力、問題解決能力を身に付け、自分の言葉で語るができる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

大量の情報のなかから正しい情報を選び取り、読み解く思考力を鍛え、自らの判断と決断でビジネスや暮らしに活かしていく力、メディアとのかかわりが不可欠な現代社会における生きる力を修得する。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義

[個人] ワークシート
[ペア] なし
[グループ] なし
[上記以外] なし

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

毎回の予習課題には最低限 1.5 時間程度の学習が不可欠となる。さらに教室で学んだ事柄について知見を広げ、問題意識を深めるための復習として 1.5～2 時間程度の学習を課す。

■授業の概要

- 第1講 現代メディアの風景—活字からデジタルへ
- 第2講 新聞の歴史と展望
- 第3講 放送メディアについて（ラジオ・テレビ）
- 第4講 スポーツとメディア 1—メディアスポーツ
- 第5講 スポーツとメディア 2—オリンピックと映像
- 第6講 スポーツとメディア 3—スポーツと物語
- 第7講 映画とプロパガンダ 1—ナチス、ソビエト連邦を例に
- 第8講 映画とプロパガンダ 2—日本の国策映画
- 第9講 現代とプロパガンダ
- 第10講 デジタル時代のメディア 1—雑誌の世界
- 第11講 デジタル時代のメディア 2—音楽メディア
- 第12講 デジタル時代のメディア 3—映画産業
- 第13講 デジタル・メディアの展望
- 第14講 歴史意識とメディアリテラシー
- 第15講 まとめ

■フィードバックの要領

ミニ・レポートの内容についてコメント、疑問点などへの回答を行う。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 講義による知見をもとに、メディアについてオリジナリティーに富む考えを提示できる。
 評価 A (89～80 点) : レポートから自分の視点、発想で考ようとする努力がうかがえる。
 評価 B (79～70 点) : 講義を真摯に聴講し、知見の獲得に努力したことがうかがえる水準に達してる。
 評価 C (69～60 点) : 最低限の知見の獲得努力はうかがえるが、それを表現する水準に到達できていない。
 評価 F (59 点以下) : レポート不提出をはじめ、講義による知見獲得への真摯さと努力がうかがえない。

■評価方法

学期末の課題レポート：40%、それぞれのテーマに対するミニレポート：40%、講義における発言など 20%

■留意点

科目名 国際公共政策 (International Public Policy)**サブタイトル** 地球規模の諸課題と、新しいグローバルな公共政策**担当教員** 椎木 哲太郎**対象学年** 3年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

「世界全体が幸福にならないうちは、個人の幸福はあり得ない」(宮沢賢治『農民芸術概論綱要』) というのは少し極端としても、我々の生活が地球社会全体の在りようと密接に関連していることは、紛れもない。国際公共政策とは、平和、安全保障、開発、人権、基本的自由といった国際的共通価値、「国際公益」を実現するための政策の総称 [高阪章編 (2008) 『国際公共政策学入門』大阪大学出版会 p.1] である。本講座は2014年度まで開講されてきた「社会経済政策」を引き継ぎ、幅広く先端研究を援用してグローバルな視点からの「総合政策論」的發展を企図している。「ポスト産業社会」を生きる市民の生活の質を高めていくためにも、成熟した「持続可能な社会」につながる体系的な公共政策が不可欠である。国際機関、政府、NGO、企業等が協力し合い新たな制度、政策を創出して地球規模での社会問題の解決に取り組んでいく試みに、多少なりとも参加していきたいものである。

■講義分類

ビジネス環境理解／社会人育成／グローバルビジネス

■到達目標

先進国、途上国双方を視野に入れた幅広い国際公共政策、社会経済政策を学ぶことによって、成熟した「持続可能な社会」を実現するための総合的な視座、政策論的問題解決技法を身に付け、高い志を持って地球市民、主権者たる日本国民として連帯し、積極的にグローバルな行動ができるようになる。企業で働く際にも、国際ルールを遵守し、よき「企業市民」として、ビジネスを通じた問題解決、社会の発展に貢献することが容易となる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP5 高い志

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ③ ①・②で選択された事項の詳細

成熟した「持続可能な社会」を実現するための(価値を含めた)総合的な視座、(プロセスを明確にした)政策論的問題解決技法、(よりよいビジネスのための)新たな国際公共財創出につながる構想力を修得する。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義

[個人] ワークシート

[ペア] なし

[グループ] なし

[上記以外] 双方向授業、課題・小テストの実施と解説

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

初回講義時に配布する講義計画に従って、毎週1.3時間を目標に必ず予習すること。課題と小テスト(復習)は、それぞれ約30分を使って次の講義までに必ず仕上げる。さらに毎週1.5時間の事後学習を行うこと。

■授業の概要

- 第1講 国際公共政策と社会経済政策
- 第2講 経済と社会
- 第3講 経済成長と生活の質、幸福度
- 第4講 経済成長政策
- 第5講 産業政策、貿易(通商)政策
- 第6講 貿易政策・農業政策
- 第7講 開発援助政策
- 第8講 人権、民主主義—政府・多国籍企業・NGO
- 第9講 平和、人間の安全保障
- 第10講 地球環境政策
- 第11講 国際通貨制度とブルーデンス政策、グローバル・タックス
- 第12講 労働政策
- 第13講 社会保障政策
- 第14講 少子化対策・人口政策・教育文化政策
- 第15講 国際公共政策：総括

■フィードバックの要領

小テストを採点して返却する。最終レポート完成に向けた指導を随時行う。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : 試験の成績、通常の見組みとともに顕著に優れている
 評価 A (89～80点) : 試験の成績、通常の見組みともに優れている
 評価 B (79～70点) : 試験の成績、通常の見組みともに良い
 評価 C (69～60点) : 試験の成績、通常の見組みともに普通
 評価 F (59点以下) : 試験の成績、通常の見組みともに不十分

■評価方法

期末試験 [または最終レポート] の結果 (70%)、平常点 (レポート・課題提出等) (30%)

■留意点

①本講座は連続性を重視した積み重ね型の講義であり、最初に重要な点を概説する。これらの理解なくしてその後の学習は困難である。②長期的に取り組んで頂くための課題を提示する可能性がある。したがって、第3回目までに全く出席しなかった者は原則として履修を許可しない。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 コンピュータネットワーク活用 (Utilization of Computer Network)**サブタイトル** インターネットの仕組みを理解し活用する**担当教員** 中村 有一**対象学年** 3年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

ネットワーク技術は、いま世の中でもっとも必要とされる技術の1つである。単に概念を理解するだけでなく、具体的にネットワークにコンピュータを接続し、システムとして機能するようにならなければならない。さらに安定してネットワークを利用するには、セキュリティや信頼性の面にも配慮しておく必要がある。これらのことを、1つ1つ意味を理解しながらできるようにしていくのがこの講義の目的である。受講にあたっては、基本的な用語とその概念を理解し、実習を通して、具体的なネットワーク構築に必要な知識を習得する。

■講義分類

ビジネス ICT

■到達目標

現在主流として使われているネットワーク技術 TCP/IP の基礎的な仕組みを理解し、実際にネットワークを利用したり、トラブルに対処したりできるように、知識とスキルを身につける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

コンピュータネットワークの基礎的な用語を理解し、実際に活用するために演習を通して経験を深める。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義

[個人] ワークシート
[ペア] ペアワーク
[グループ] なし
[上記以外] なし

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

予習：講義資料を読んでできるだけ理解し、わからない部分は整理しておく。(1.5 時間) 復習：資料をもう一度読みなおし、理解できたか確認する。ミニテストなどの結果を振り返る。(1.5 時間)

■授業の概要

- 第1講 ネットワークとプロトコルの話
- 第2講 物理層の話
- 第3講 無線ネットワークとデータリンク層の話
- 第4講 インターネット層の話 (1)：IP アドレス、2進数や16進数
- 第5講 インターネット層の話 (2)：CIDR とネットワークの分割
- 第6講 インターネット層の話 (3)：インターネット層における補完的なプロトコル
- 第7講 トランスポート層の話：TCP と UDP の違い、ポート番号
- 第8講 ドメイン名と DNS の話：アプリケーション層、ホスト名・ドメイン名、DNS
- 第9講 DHCP と文字端末の話：DHCP、TELNET、SSH
- 第10講 ウェブとファイル転送の話：HTTP、FTP
- 第11講 電子メールとネットワーク管理の話：SMTP、POP、IMAP、SNMP、NTP
- 第12講 ルーティングとアドレス変換の話：ルーティングプロトコル、アドレス変換
- 第13講 インターネットセキュリティの話：プロキシサーバ、ファイアウォール
- 第14講 パケットキャプチャの話：パケットキャプチャツール
- 第15講 暗号と認証の話：公開鍵暗号の基本的な仕組み

■フィードバックの要領

ミニテスト、演習などについて、答え合わせ、講評などのフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上)：100 点～90 点
 評価 A (89～80 点)：89 点～80 点
 評価 B (79～70 点)：79 点～70 点
 評価 C (69～60 点)：69 点～60 点
 評価 F (59 点以下)：59 点以下

■評価方法

学期末試験 70% レポートなど平常点 30%

■留意点

コンピュータを使った演習については、自分で必ず実際に動かしてみることを。単に本を読むだけでは得られない知識が得られるはずである。

科目名 サービス産業論 (Service Industry)**サブタイトル** サービスの市場創造とマネジメント**担当教員** 杉田 文章**対象学年** 3年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

「サービス」のプロダクトとしての本質を理解するとともに、狭義の「サービス」製品のみならず、サービス化したといわれるあらゆる産業分野におけるサービスの側面にも着目し、「サービス」産業経済の成長に資する知見を身につける。

■講義分類

顧客理解/ビジネス環境理解/ビジネスマネジメント

■到達目標

① 産業経済におけるサービス産業の必要性和有効性について理解していること。② プロダクトとしてのサービスの概念について深く理解すること。③ ①②をふまえて、サービス産業のマネジメントの課題を知り、これを解決する方法論を論じることができること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ③ ①・②で選択された事項の詳細

サービス産業分野が、国際競争力の確保の上からも、国内市場の成長の観点からも重要な課題であることを深く理解した上で、今後のサービス市場分野の発展に対する知見を説明できる

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義

[個人] ワークシート

[ペア] ヘアワーク

[グループ] なし

[上記以外] 例えばカスタマーハラスメントに対する疑似的な対応にトライする

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

提示されたテキスト、参考書を中心に、講義内容に即した予習と、講義後に示された課題を講義ごとに行うこと。(1回につき合計1.5時間程度以上)

■授業の概要

- 第1講 本講義の概要、目的、意味を理解する (ガイダンス)
- 第2講 製品 (product) としての「サービス」について学ぶ
- 第3講 社会の「サービス化」と産業の「サービス化」
- 第4講 サービスと「おもてなし」～グローバル市場における日本文化と産業のマッチング～
- 第5講 サービスを含んだプロダクト分析
- 第6講 サービス製品の構成要素について知る
- 第7講 サービス・エンカウンターについて学ぶ
- 第8講 サービスエンカウンターにおける、従業員の役割
- 第9講 カスタマー・ハラスメントを考える
- 第10講 サービス製品市場のマーケティング① サービス製品の「構成要素」
- 第11講 サービスの品質
- 第12講 顧客満足と顧客価値
- 第13講 サービスシステムの経営と革新① サービス産業のマーケティングミックス
- 第14講 サービス価値向上のためのSPCを学ぶ
- 第15講 まとめと振り返り (授業内テスト)

■フィードバックの要領

講義時に提出するミニレポート等に対して、フィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : サービス市場を深く理解し、問題解決を提案できる
- 評価 A (89 ~ 80 点) : サービス産業や市場、製品について深く理解している
- 評価 B (79 ~ 70 点) : サービス産業や市場、製品について一定の理解をしている
- 評価 C (69 ~ 60 点) : サービス業と製造業の違いやそれぞれの特徴について説明できる
- 評価 F (59 点以下) : 「サービス産業」「サービス製品」について説明できない

■評価方法

平常点および講義内で課されるミニレポート 3 割、最終レポート 3 割、講義内試験 4 割 の割合で評価する。

■留意点

サービス業に従事しようと考えている学生を想定し、そのキャリア形成に資することを意図して講義を行う予定です。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 事業デザイン論 I (Business Design Theory I)**サブタイトル** 事業開発 (business creation) の方法論**担当教員** 松本 祐一**対象学年** 3年生以上**区分** 春学期**実務経験のある教員による授業****■講義目的**

企業、行政、NPO等、様々な組織が行う営みを、「事業」という同じ枠組みでとらえ、その歴史や特徴を理解し、自分で事業をデザインするための方法論を学ぶ。

■講義分類

顧客理解/ビジネス創造/ビジネスマネジメント

■到達目標

事業開発に関する理論と方法を理解し、自分で事業をデザインできるようになること

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

具体的な事業開発の方法を習得し、自分でプランを構想することができる。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義

[個人] プレゼンテーション/ワークシート

[ペア] ペアワーク/相互教授法

[グループ] なし

[上記以外] なし

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上) 及び具体的な内容

最低 1.5時間以上のビジネスプランを立案するための情報収集等

■授業の概要

- 第1講 オリエンテーション
- 第2講 「事業」とは何か?
- 第3講 「事業」とは何か?②
- 第4講 「事業開発」のメカニズム
- 第5講 「事業開発」の枠組み
- 第6講 「事業開発」の枠組み②
- 第7講 環境: どうなるべきか?
- 第8講 環境: どうなるべきか?②
- 第9講 使命: どうなりたいか?
- 第10講 能力: どうなれるか?
- 第11講 価値: コンセプト
- 第12講 仕組み: どうやるか?
- 第13講 プロトタイピング
- 第14講 プロトタイピング②
- 第15講 まとめ

■フィードバックの要領

各授業において、各グループのアウトプットに対する評価・アドバイスを実施する。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : ワークシートをすべて提出し、自分でビジネスプランを組み立てられて独自性がある。
 評価 A (89~80点) : ワークシートをすべて提出し、自分でビジネスプランを組み立てることができる。
 評価 B (79~70点) : ワークシートを8割以上提出し、ビジネスプランももれなく作成できる。
 評価 C (69~60点) : ワークシートを6割以上提出し、要求されていることにある程度答えられている。
 評価 F (59点以下) : ワークシートの提出が5割以下で、要求されていることに答えられていない。

■評価方法

授業中提出のワークシート40%、中間レポート20%、最終レポート40%

■留意点

履修生を2~3人のグループに分かれて、ビジネスプランを企画するアクティブラーニング形式の演習的な講義となります。履修希望者はかならず第1回、第2回を受講してください。

科目名 事業デザイン論 II (Business Design Theory II)**サブタイトル** 多摩大学の先輩が就職した会社を研究して、将来の自分の仕事や就職に役立たせよう**担当教員** 長島 剛**対象学年** 3年生以上**区分** 秋学期**実務経験のある教員による授業****■講義目的**

昨年の就職先データから、会社概要を調べ会社案内を作成する。互いに会社を紹介しあい、普段なじみのない地域の会社やBtoBの会社を理解する。活きた情報を利用することで、現場感覚を養うと同時に、事業デザインの重要性を体感する。ピクト図やビジネスモデルキャンバスを学び、ディスカッション、プレゼンを通じて事業デザインへの理解を深める。

■講義分類

ビジネス創造／社会人力育成／地域ビジネス

■到達目標

①会社の経営情報を自分の言葉で説明できるようにする ②会社のビジネスモデルをピクト図で描けるようになる ③会社のビジネスモデルキャンバスを書けるようになる ④質問力をつける

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP3 関心と意欲 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

様々な会社の事例から、いま直面している課題解決の現状を理解し、課題に対処できる専門的能力の修得のきっかけにする。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義／演習

[個人] プレゼンテーション／ワークシート

[ペア] ペアワーク／相互教授法

[グループ] PBL

[上記以外] なし

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

講義中に説明した事前学習を 1.5 時間以上行い、講義後は、配布資料、映写資料をもとに 1.5 時間以上の事後学習を行ってください。

■授業の概要

第1講 オリエンテーション・確認アンケート

第2講 会社分析の手法① 会社を比較するための項目を検討する

第3講 会社分析の方法② 経営情報をどう捉えるか ビジネスモデルをピクト図で描いてみる

第4講 研究する会社を選ぶ 地域金融機関や調査会社（帝国データバンク等）の調査方法

第5講 まとめ

第6講 会社研究①（概要を調べる） 選んだ会社の会社案内を作成する

第7講 会社研究①（概要を調べる） 選んだ会社の会社案内を作成する

第8講 質問力① たくさんの会社を知る

第9講 質問力② たくさんの会社を知る

第10講 ビジネスモデル① ピクト図を描いてみよう

第11講 ビジネスモデル② ビジネスモデルキャンバスを書いてみよう

第12講 会社研究ワーク① 会社に対して提案する事業企画書を作成する

第13講 会社研究ワーク② 会社に対して提案する事業企画書を作成する

第14講 ゲストスピーカーへの事業企画提案

第15講 まとめ

■フィードバックの要領

提出されたレポートに対し講義内で特徴的なものや疑問点などのフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 様々な事例を学び、事業デザインの重要性を理解し、自分の事業アイデアを立案できる。

評価 A (89 ~ 80 点) : 様々な事例を学び、事業デザインのツールを深く理解している。

評価 B (79 ~ 70 点) : 様々な事例を学び、事業デザインのツールについて一定の理解をしている。

評価 C (69 ~ 60 点) : 一部不十分な点はあるものの、事業デザインのツールについて理解している。

評価 F (59 点以下) : 事業デザインのツールについて理解していない。

■評価方法

A 課題シート（講義終了時提出するシート）30%、C 宿題シート 30%、D 確認テスト 30%、平常点 10% で評価します。

■留意点

現場のヒアリングを行いながら講義を作る予定。ヒアリングへの同席も可。積極的な対応を期待する。授業の内容はヒアリングの進捗状況により変更の可能性がある。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 情報工学概論 (Information Engineering)**サブタイトル** 情報技術と情報社会**担当教員** 中村 有一**対象学年** 3年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

20世紀後半からコンピュータや通信の技術が急速に発達し、情報技術が社会や産業に大きなインパクトを与えるようになってきた。さらに21世紀になって、それまで予測されていたことがほぼ現実のものとなり、本格的な情報社会が到来した。これに伴って、これまでの工業社会とは異なる考えかたやモラルが必要とされる時代となった。また個人の生活の中にもパソコンなどの情報機器が普及し、それらの原理や役割を正しく把握し、うまく利用することが求められるようになってきた。この講義の目的は、現代の情報社会で必要とされる知識やモラルを身につけ、情報産業などの分野で活躍できる基礎をつくることである。また、本講義によって情報通信の分野に、より興味をもってもらい、将来の就職にも参考になるようにしたい。

■講義分類

ビジネスICT

■到達目標

情報技術の概略を理解すること。情報化にともなう社会変化、産業構造の変化など、大きな流れを把握した上で、さまざまな課題を自分の頭で考えられるような能力を身につける。また情報社会で生きていくうえで必要なモラルについても習得する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ③ ①・②で選択された事項の詳細

情報技術と情報社会の分野で、広く重要な用語を理解し、新たな知識を身につけるための基礎とする。また最近のトピックを通して、社会の現状を把握できるようにする。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義

[個人] ワークシート
[ペア] ペアワーク
[グループ] なし
[上記以外] なし

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上) 及び具体的な内容

予習：講義資料を読んでできるだけ理解し、わからない部分は整理しておく。(1.5時間)

復習：資料をもう一度読みなおし、理解できたか確認する。ミニテストなどの結果を振り返る。(1.5時間)

■授業の概要

- 第1講 情報とは？：情報とは何か、さまざまな視点から考察する。
- 第2講 ハードウェア：マイクロな仕組みとマクロな設計思想について学ぶ。
- 第3講 ソフトウェアの基礎：OSの仕組みと代表的なアプリケーションソフト
- 第4講 ワードプロセッサ：仕組みと役割、関連する用語について取り上げる。
- 第5講 表計算ソフト：仕組み、使い方、MOS試験対策
- 第6講 データベース：データベースの仕組み、役割などについて話す。
- 第7講 ネットワーク技術の基礎：インターネット、携帯電話
- 第8講 インターネット：インターネットとは何か？さまざまな視点から考察する。
- 第9講 情報化と社会生活の変化：通信手段の発達史、社会変化と問題点
- 第10講 情報産業の発展：産業構造の変化、新しい情報産業の発展
- 第11講 情報産業と政策：通信放送分野の自由化・規制緩和について考える。
- 第12講 情報社会におけるモラル：情報化によって新しいモラルの考え方が必要になった。
- 第13講 暗号と認証の話：情報社会の基盤として公開鍵暗号の仕組みを理解する。
- 第14講 人工知能の話：トピック的に人工知能の技術を展望する。
- 第15講 ロボットの話：その現状と問題点を考察する。

■フィードバックの要領

ミニテスト、演習などについて、答え合わせ、講評などのフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90点以上)：100点～90点
評価 A (89～80点)：89点～80点
評価 B (79～70点)：79点～70点
評価 C (69～60点)：69点～60点
評価 F (59点以下)：59点以下

■評価方法

学期末試験 70% レポートなど平常点 30%

■留意点

①スライドの資料は、概略を示したもので、これだけを読んでも理解できないだろう。復習するときに、内容を整理するために使う。②授業中に適宜紹介する参考文献を読むことにより、授業内容をより深く理解できるようにすることが望ましい。

科目名 情報と職業 (Information and Profession)**サブタイトル** 情報社会における職業人に求められる勤労観と職業倫理**担当教員** 齋藤 S. 裕美**対象学年** 3年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

本講義は、情報と職業についての関わり、情報に関する職業人（情報処理技術者、ネットワーク技術者など）の役割と責任について理解することを目的とする。現代の社会において、IT（情報技術）は必要不可欠な存在である。情報技術の進展によって生まれた産業の特徴や情報システムが一般社会生活のなかでどのように使われているかなど、情報技術の現状を把握するとともに、私たちの生活や既存の産業が受けた情報化の影響などについても学習する。また、情報システムを構築し運用する上で、情報処理技術者やネットワーク技術者が果たすべき役割や責任について理解し、情報技術の専門家に求められる勤労観や職業観を身につけることも目的のひとつである。さらに本講義によって、将来、情報に関する職業人を目指す高校生に対して、適切な教育指導が出来るようになることを目指す。

■講義分類

ビジネス環境理解／社会人育成／ビジネス ICT

■到達目標

次の①～④を説明できる、⑤を身につける。①産業社会の変遷、②人々の勤労観や職業観の変化、③情報産業の特徴、④リスクマネジメント・CSR、⑤職業人としての責任感、倫理観

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

情報と職業の関わり、情報化の影響、情報に関わる職業人の役割と責任について理解する。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載**講義**

- [個人] ワークシート, T/Fテスト
- [ペア] ペアワーク
- [グループ] なし
- [上記以外] なし

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

前講までの資料をよく読んでおくこと。また、講義資料に記載されているデータの出所を確認し、当該データや関連のデータにもあたっておくこと。必要な予習・復習時間は各 1.5 時間程度（合計 3 時間程度）である。

■授業の概要

- 第1講 情報社会までの歴史的変遷
- 第2講 戦後の産業構造の変化
- 第3講 情報社会における職業観 1
- 第4講 情報社会における職業観 2
- 第5講 情報社会と職業教育
- 第6講 情報産業における職業教育と資格
- 第7講 情報産業の誕生と発展
- 第8講 情報産業の実像
- 第9講 企業における情報化
- 第10講 情報技術とリスクマネジメント
- 第11講 リスクマネジメントの背景
- 第12講 リスクマネジメントと CSR
- 第13講 CSR と企業の取り組み
- 第14講 職業人として必要な倫理観
- 第15講 職業人として必要な倫理観

■フィードバックの要領

T/Fテスト及び最終講義で全体に対するフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 到達目標①～④を関連づけ、自分の考察を含めて的確に説明できる。⑤が十分である。
- 評価 A (89 ～ 80 点) : 到達目標①～④を個別に、自分の考察を含めて説明できる。⑤が十分である。
- 評価 B (79 ～ 70 点) : 到達目標①～④のうち 2 つ以上を説明できる。⑤が十分である。
- 評価 C (69 ～ 60 点) : 到達目標①～④のうち 1 つ以上を説明できる。⑤が十分である。
- 評価 F (59 点以下) : 講義内容について著しく理解が不足している。

■評価方法

期末試験 60%、レポートや課題 40%に参加態度を加味する。

■留意点

状況によって、講義内容や扱う回の入替えを行う場合がある。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 情報ネットワーク (Networking System)**サブタイトル** information network**担当教員** 増田 浩通**対象学年** 3年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

情報ネットワークの概念と役割、基礎技術、インターネットの概要について学ぶ。

■講義分類

ビジネスICT

■到達目標

ビジネスパスポート試験の問題を解くことができるレベルに到達することを目標とする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

ビジネスの中で最低限必要な基礎的なネットワークの知識を身に着けることが出来る。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義

[個人] ワークシート
 [ペア] なし
 [グループ] なし
 [上記以外] なし

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

この授業の資料はパワーポイント形式で T-NEXT 上にアップロードします。各自予習 1.5 時間以上、授業後パワーポイント資料を見ながら、復習に 1.5 時間以上費やしてください。

■授業の概要

- 第1講 ガイダンスとアンケート記入
- 第2講 情報化時代のルールとマナー
- 第3講 通信ネットワークとは
- 第4講 情報通信ネットワークの基礎知識
- 第5講 情報格差について
- 第6講 コンピュータの原理
- 第7講 個人情報保護
- 第8講 中間レポートの作成
- 第9講 画像圧縮
- 第10講 通信技術の概要
- 第11講 携帯電話・スマートフォンの歴史について学ぶ。
- 第12講 情報ネットワークの使い方
- 第13講 インターネットの仕組み
- 第14講 ネットワークセキュリティ
- 第15講 期末レポート

■フィードバックの要領

課題や試験等に対してフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 毎週配布する提出課題と中間レポート及び期末レポートの総合評価が 90 点以上の場合。
 評価 A (89 ~ 80 点) : 毎週配布する提出課題と中間レポート及び期末レポートの総合評価が 89 ~ 80 点の場合。
 評価 B (79 ~ 70 点) : 毎週配布する提出課題と中間レポート及び期末レポートの総合評価が 79 ~ 70 点の場合。
 評価 C (69 ~ 60 点) : 毎週配布する提出課題と中間レポート及び期末レポートの総合評価が 69 ~ 60 点の場合。
 評価 F (59 点以下) : 中間レポートおよび期末レポートの両方の提出がないと評価は F とする。

■評価方法

毎週配布する課題 50%、中間レポート 25%、期末レポート 25%

■留意点

科目名 人材マネジメント論 (Human Resources Management Theory)**サブタイトル** 人材のマネジメント、人事管理**担当教員** 西村 知兄**対象学年** 3年生以上**区分** 秋学期**実務経験のある教員による授業****■講義目的**

人材という貴重な資源を企業はどのようにマネジメントしているのか、基礎的知識を体系的に把握する授業である。もちろん、それぞれの人材マネジメントには、論理的な背景や歴史、法律への対応などが存在するため、そこをしっかりと理解する。企業側のマネジメント動向を把握することで、働く上での自分自身の身の振り方や思考・判断のための学びとしてほしい。

■講義分類

ビジネス環境理解／ビジネスマネジメント／社会人力育成

■到達目標

学生の皆さんが就職活動時や入社後に、企業の人事施策・方針を捉えることができるようになるとともに、人事パーソンを目指す人にも、人事職の役割や基本原理が理解できるようになることを到達目標とする。起業をする場合にも、従業員のマネジメントにおいてどのようなポイントを大切にすべきか、その視点を獲得してほしい。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

企業の人材マネジメントに関する基礎的な知識と様々な問題への対応を理解する。その理解を通じて、働く上での思考力や判断力、状況対応力を育む。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義

[個人] ワークシート

[ペア] なし

[グループ] なし

[上記以外] VTR学習

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上)及び具体的な内容

授業前に、事前学習ポイントを調べ、T-NEXT上の授業資料に目を通し疑問点を明確にする(1.5時間)。授業後に、事前学習の疑問点解消を確認し、未解消の項目は自己調査や教員質問等で解消する(1.5時間)。

■授業の概要

- 第1講 イントロダクション：人的資源管理の概要
- 第2講 雇用Ⅰ(会社づくりゲーム)
- 第3講 雇用Ⅱ
- 第4講 雇用Ⅲ(VTR学習①)
- 第5講 報酬と人事制度Ⅰ
- 第6講 報酬と人事制度Ⅱ
- 第7講 報酬と人事制度Ⅲ(VTR学習②)
- 第8講 中間テスト
- 第9講 人事異動Ⅰ(VTR学習③)
- 第10講 人事異動Ⅱ
- 第11講 労働時間・休日の管理(VTR学習④)
- 第12講 労働組合
- 第13講 人的資源管理の課題Ⅰ
- 第14講 人的資源管理の課題Ⅱ、この授業の総まとめ
- 第15講 期末テスト：学習成果の確認

■フィードバックの要領

ワークシートの回答に対する講評、質問・意見に対するコメントを翌回の講義で実施する。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上)：授業貢献点・中間テスト・期末レポートの合計が90点以上
- 評価 A (89～80点)：授業貢献点・中間テスト・期末レポートの合計が80～89点
- 評価 B (79～70点)：授業貢献点・中間テスト・期末レポートの合計が70～79点
- 評価 C (69～60点)：授業貢献点・中間テスト・期末レポートの合計が60～69点
- 評価 F (59点以下)：授業貢献点・中間テスト・期末レポートの合計が59点以下

■評価方法

授業貢献点(40点)、中間テスト(30点)、期末レポート(30点) 授業貢献点は、ワークシートの解答状況+平常点を基に算出する。

■留意点

毎回の授業においてワークシートの提出を求め、その内容をA(授業を聴き良い気づきがあった、2点)、B(授業を聴いていた、1点)、C(授業を聴いていたとは思われない、0点)の3段階で評価し、これに平常点1点を加点して授業貢献点とする。欠席は平常点も0点となる。授業の受講態度が悪い場合は、欠席以下の評価になることもある。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 地域観光論 (Regional Tourism Theory)**サブタイトル** 持続可能な観光地マネジメント**担当教員** 中庭 光彦**対象学年** 3年生以上**区分** 春学期**実務経験のある教員による授業****■講義目的**

都市・地域政策の手段として観光は大きな期待を集めてきた。しかし、一方で人気観光地に容量を超える観光客が押し寄せ住民が不利益を被っている事例もある。ここ数年で、観光は集客産業という枠組を超え、サステイナブルな地域形成の手法という考え方が世界的に広がっている。それに伴い、多様なツーリズムが生まれている。地域観光論では、年々変わる観光地経営の事例、マネジメントの考え方を紹介し、地域のサステナビリティと文化のつながりについて考える。

■講義分類

顧客理解／ビジネス環境理解／地域ビジネス

■到達目標

- ・知識、考え方を覚え理解できる。
- ・知識、考え方を言葉で説明でき、自分で長文情報を調査できる。
- ・知識、考え方を社会の中で他の事例に応用できる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

- ・知識、考え方を覚え理解できたか。
- ・知識、考え方を言葉で説明できるか。自分で長文情報を調査できるか。
- ・知識、考え方を社会の中で他の事例に応用できるか。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義

[個人] ワークシート, T/Fテスト

[ペア] なし

[グループ] KJ法

[上記以外] なし

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

講義内容のまとめ直しと次回レジュメを調べ、予習復習を行う(3時間)。次回、テストを行う。

■授業の概要

- 第1講 観光まちづくりの入り口
- 第2講 観光のビジネスモデル①
- 第3講 観光のビジネスモデル②
- 第4講 MICE ビジネス
- 第5講 観光立国の推移と課題
- 第6講 ホテル、ホスピタリティビジネス
- 第7講 テーマパークと観光地の関係
- 第8講 ポストマスツーリズムからサステイナブルツーリズムへ
- 第9講 観光地ブランド化①
- 第10講 観光地ブランド化②
- 第11講 世界遺産、エコツーリズム
- 第12講 まなざしの重要性
- 第13講 DMOによる観光地経営
- 第14講 メディアイベントと都市の賑わいについて
- 第15講 達成度テスト・応用力レポート

■フィードバックの要領

ミニレポート、文献レポートについては、講評を行う。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : キーワードをつなげ多様な問題を理解し、客観的に他例の応用説明と意見を表現できる。

評価 A (89～80点) : キーワードを元に問題を理解し、客観的に他例を理解し応用説明ができる。

評価 B (79～70点) : キーワードを理解し、説明ができ、他例を理解し応用説明ができる。

評価 C (69～60点) : キーワードは書けるが理解が不十分で、他例の理解と応用説明も不十分。

評価 F (59点以下) : キーワードが書けず、他例も説明できない。

■評価方法

前回授業についてのミニテスト: 30%/到達度テスト・応用力レポート: 50%/文献レポート: 20% (テーマを設定し関連文献を3冊読み、レポート作成し7回目までにT-Nextで提出。)

■留意点

1. 第1回目の講義に必ず出席すること。

科目名 地域金融論 (Local Finance)**サブタイトル** お金と地域の基礎講座 地域金融機関のつなぐ力**担当教員** 長島 剛**対象学年** 3年生以上**区分** 春学期**実務経験のある教員による授業****■講義目的**

お金と地域を学ぶ基礎講座。前半では自分のお金のことを考えながら、金融と地域の現状と課題を考察する。後半では、地域金融機関について学び、国・自治体・商工団体・支援機関の課題解決、共創の最新事例を理解する。地域を構成する様々な主体の仕組みと現状を理解することで、地域の未来を創造する。過去の分析や推移をたどることは最小限として、今をみて、今後を考えていく。必要に応じて、FP技能検定の試験範囲である、ローンの計算方法や税金、年金等にも触れる。

■講義分類

ビジネス環境理解／社会人力育成／地域ビジネス

■到達目標

①自分のお金について関心を持ち、具体的な取扱いについて知識を持つ ②地域を構成する様々な主体の課題解決について、関心を持つ ③地域における課題解決の現状を検証、地域の未来を考察する

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP3 関心と意欲 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

たくさんの事例から、お金や地域に関心を持ち、現在起きている課題解決や共創の現状を理解し、課題に対処できる専門的能力の修得のきっかけにする。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義／演習

[個人] プレゼンテーション／問題作成

[ペア] ペアワーク／相互教授法／ロールプレイ

[グループ] なし

[上記以外] 「生活設計・マネープランゲーム」や「地域金融機関かるた」など

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

講義中に説明した事前学習を1.5時間以上行い、講義後は、配布資料、映写資料をもとに1.5時間以上の事後学習を行ってください。

■授業の概要

- 第1講 オリエンテーション・確認テスト
- 第2講 金融とは
- 第3講 サラリーマンと金融①
- 第4講 サラリーマンと金融②
- 第5講 サラリーマンと金融③
- 第6講 中小企業と金融
- 第7講 中間まとめ
- 第8講 地域金融機関とは①
- 第9講 地域金融機関とは②
- 第10講 地域金融機関とは(ゲストスピーカー)
- 第11講 国や県庁とつなぐ力
- 第12講 自治体とつなぐ力
- 第13講 商工団体とつなぐ力
- 第14講 支援機関とつなぐ力
- 第15講 まとめ

■フィードバックの要領

提出されたレポートに対し講義内で特徴的なものや疑問点などのフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上) : 事例をよく学び、課題解決の現状を理解し、地域の未来を考察することができる。
- 評価 A (89～80点) : 事例をよく学び、課題解決の現状について深く理解している。
- 評価 B (79～70点) : 事例をよく学び、課題解決の現状について一定の理解をしている。
- 評価 C (69～60点) : 一部不十分な点はあるものの、課題解決の現状について理解している。
- 評価 F (59点以下) : 課題解決の現状について理解していない。

■評価方法

A 課題シート(講義終了時提出するシート)30%、C 宿題シート30%、D 確認テスト30%、平常点10%で評価します。

■留意点

現場のヒアリングを行いながら講義を作る予定(第一講目に発表)。ヒアリングへの同席も可。積極的な対応を期待する。授業の内容はヒアリングの進捗状況により変更の可能性はある。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 地域産業論 (Local Industry Theory)**サブタイトル** 地域と共に生きる中小企業の役割と地域産業の発展に向けた方策を考える**担当教員** 野坂 美穂**対象学年** 3年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

本講義では、地域経済を支える地域産業の意義、地域産業の主な担い手である中小企業の役割について理解することを目的とする。本授業では、地域経済における地域産業の重要性についての理解を深め、課題解決に向けた自分なりの考えや具体的な方策を示すことができるようになることを目指す。将来的な地域産業の一担い手として、自身のあるべき姿（どのような形で地域産業に貢献する人材になりたいかというビジョン）を描けるようにする。

■講義分類

ビジネス環境理解／ビジネス創造／地域ビジネス

■到達目標

(1) 二次資料（官公庁の報告書や統計データ等、新聞記事・雑誌等）の活用による分析を行い、情報リテラシーと数量スキルを身につける。(3) ケース・スタディを通じて、論理的思考力および問題解決力を身につける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

地域の課題を発見し、その課題に対して自分なりの解決策を提案できると、「課題解決力」の養成とともに、基本となる知識を身につけ適切に理解することができる。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義

- [個人] プレゼンテーション／問題作成
- [ペア] ペアワーク／ピア・レビュー
- [グループ] PBL／ジグソー法／KJ法
- [上記以外] なし

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

新聞（or 雑誌）記事やケース等を読み、ワークシートに穴埋めするまたは要約するなど（1.5 時間）

■授業の概要

- 第1講 イントロダクション：地域経済における地域産業の意義と役割
- 第2講 地域産業の担い手としての中小企業の役割
- 第3講 中小企業が直面する様々な課題
- 第4講 中小企業におけるイノベーションの意義
- 第5講 中小企業のケース分析のパワーポイントの作成＋個別質問タイム
- 第6講 中小企業のケース分析に関する成果発表（プレゼンテーション）
- 第7講 産業集積と地域イノベーション（1）
- 第8講 産業集積と地域イノベーション（2）
- 第9講 伝統的地場産業の衰退と再生（1）
- 第10講 伝統的地場産業の衰退と再生（2）
- 第11講 一次産業に着目した地域産業の在り方（1）
- 第12講 一次産業に着目した地域産業の在り方（2）被災地の産業復興
- 第13講 グループワークによる課題解決
- 第14講 テスト
- 第15講 これまでのまとめと課題

■フィードバックの要領

提出したレポートに対して、コメントを添えて返却する。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上)：基礎的な知識の習得が十分かつ、理論の応用及び二次資料に基づく分析が十分にできる。
- 評価 A (89 ～ 80 点)：基礎的な知識の習得が十分かつ、理論の応用及び二次資料に基づく分析ができる。
- 評価 B (79 ～ 70 点)：基礎的な知識を習得しており、理論の応用及び二次資料に基づく分析ができる。
- 評価 C (69 ～ 60 点)：基礎的な知識の習得がやや不十分、理論の応用・二次資料に基づく分析が不十分。
- 評価 F (59 点以下)：基礎的な知識の習得が不十分、理論の応用及び二次資料に基づく分析も不十分。

■評価方法

平常点 40%、レポート 30%、定期試験 30%

■留意点

日常生活において出来る限り、新聞記事（できれば日本経済新聞）や雑誌記事（できれば東洋経済、日経ビジネス等）を読み、中小企業の動向を把握するようにしてください。

科目名 中国経済論 (Chinese Economy)**サブタイトル** 日本と中国・大中華圏の架け橋となる人財を目指す**担当教員** パートル**対象学年** 3年生以上**区分** 春学期**実務経験のある教員による授業****■講義目的**

時代は今、「知」が重要視される知識情報社会となっており、膨大な情報の中から必要な情報を抽出して分析し、未来を洞察していくことが求められている。本講義では、国際的プレゼンスの高まりを見せている中国を立体的かつ複眼的な視点で理解を深めるための基礎的な知識の修得と知見を広げると共に日本をめぐる世界潮流、日本企業のビジネス環境を正しく「読む」力の養成を目指す。具体的には、中国や日中間のビジネスの最前線事例を取りあげながら産業社会が求める問題発見能力及び高度なコミュニケーション能力を備えた人材育成を念頭に置いた講義を行う。受講生は、本講義を通じて修得した知識や得た知見を自分の就職や将来に向けて活用できるようにすることが求められる。

■講義分類

ビジネス環境理解／社会人力育成／グローバルビジネス

■到達目標

①中国経済に関する基本的な知識を修得し知見を広げ、中国の実像を把握できるようにする。②中国経済の現状と課題を分析し、中国における日本企業のビジネス戦略・ビジネスモデルの構想、日中間の協力の可能性について、履修者が独自の問題意識を持てるようにする。③講義で修得した知見を就職活動で利活用できるようにする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ③ ①・②で選択された事項の詳細

中国経済に関する基礎的な知識を吸収し、グローバル（中国）とローカル（日本）の関係を意識しながら産業社会で発生する様々な問題に対処していける専門的能力を体系的に修得する。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義

- [個人] プレゼンテーション
- [ペア] ペアワーク／相互教授法
- [グループ] PBL
- [上記以外] 海外留学参加者による報告会を実施する。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

中国や日中経済関係に関する時事問題を始め、講義内容の中で自分自身が関心を持つ分野に関する情報を収集、分析、調査する習慣をつけることが必須。予習復習時間は各 1.5 時間以上とする。

■授業の概要

- 第1講 「中国」とは～ガイダンス 講義の目的・内容の説明、受講上の心得
- 第2講 「世界の工場」と「世界市場」の両方の視点から「中国像」を提示する。
- 第3講 毛沢東時代の中国の政治、経済、社会体制と鄧小平時代の改革開放政策の成果と課題
- 第4講 高度成長の「光」と「影」(1) 一エネルギー需給状況、環境問題をを中心に
- 第5講 高度成長の「光」と「影」(2) 一食料問題をを中心に～中国の食料需給状況と今後の見通し～
- 第6講 高度成長の「光」と「影」(3) 一格差問題をを中心に～中国の格差問題の現状と対策～
- 第7講 高度成長の「光」と「影」(4) 一人口問題をを中心に～中国の人口構造の現状と今後の見通し
- 第8講 高度成長の「光」と「影」(5) 一戸籍制度と「農民工」問題をを中心に
- 第9講 高度成長の「光」と「影」(6) 一民族問題の歴史的背景と現状、今後の展望を中心に
- 第10講 高度成長の「光」と「影」(7) 一中国の政治体制と中国共産党を中心に
- 第11講 中国の地域開発戦略 (1) 「東北振興」戦略
- 第12講 中国の地域開発戦略 (2) 「西部大開発」戦略
- 第13講 中国の地域開発戦略 (3) ～「中部掘起」戦略～
- 第14講 日中経済関係の現状と課題～日中経済関係の最新状況～
- 第15講 中国経済の最新動向と春学期の講義内容についての総まとめ

■フィードバックの要領

毎回の講義レポートのフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 100 点満点中 90 点以上。
- 評価 A (89 ～ 80 点) : 100 点満点中 89 ～ 80 点。
- 評価 B (79 ～ 70 点) : 100 点満点中 79 ～ 70 点。
- 評価 C (69 ～ 60 点) : 100 点満点中 69 ～ 60 点。
- 評価 F (59 点以下) : 100 点満点中 59 点以下。

■評価方法

毎回講義レポート 60 点 (15 回×4 点=60 点)、最終レポート 30 点、質問・コメント 10 点 (1～10 点) の 100 点満点で絶対評価。

■留意点

毎回の講義レポートを重視 (15 回×4 点=60 点) する。最終レポート (30 点) は、A4 用紙 3 枚以内。講義内の質問・意見 (10 点) は、講義への積極的な参加・貢献として評価し、発言回数に基づいて 1 点～10 点の評価を加える。講義メモは、講義内容を理解し、かつ独自の問題意識を持ち、問題解決へ向けての取り組み姿勢が顕著に表れているのかを重視する。採点后、最後に返却してフィードバックを行う。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 データサイエンス III (Data Science III)**サブタイトル** 経営情報のための統計学 / Applied Statistics for Management & Information Sciences**担当教員** 今泉 忠**対象学年** 3年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

「IoT」に代表されるような高度情報化社会となり、問題解決のためにはデータを収集して、それをもとに考えることが当然となった。この講義では、データサイエンスの枠組みから経営情報におけるデータを活用するための基本力の習得を目指し、統計的データ分析を取り扱う。具体的には、データの要約と因果関係の検証のためのデータ分析を内容とする。このようなスキルは、共通のスキルであるので、受講しておくことをすすめる。なお、講義では実際に検討し、理解を深める事が重要であるので、コンピュータソフトを用いてデータ分析の基礎をも習得する。適宜、グループレポートなどを作成する。

■講義分類

ビジネス ICT

■到達目標

(1) 基礎的な離散分布と連続分布について理解し、統計的思考をもとに実際の場面で活用できる。(2) 平均の区間推定や仮説が行える。実際の問題解決問題を、統計的な枠組みで表現し分析できる。(3) 分散分析や重回帰モデルを適切に活用できる。因果関係について推測できる。(4) 意思決定に役立つ表現ができる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ③ ①・②で選択された事項の詳細

DP2 思考と判断および DP3 関心と意欲：ビジネス環境で必須の課題解決のためのプロセスとデータをもとにした統計的分析力とを学修し、他者ともに社会や企業での課題を解決する力を修得する

■授業形態 AL 手法 ※該当する項目のみ記載

講義 / 演習

[個人] ワークシート

[ペア] なし

[グループ] PBL / マインド・マップ

[上記以外] なし

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

各回の最後に課される課題について、データを用いて分析すること、データを整備や分析やレポート作成などに 1.5 時間を費やされるので十分余裕を持ち完了して、指定した期限までに提出すること。

■授業の概要

- 第1講 二項分布再入門
- 第2講 幾何分布とポアソン分布
- 第3講 正規分布再入門
- 第4講 χ^2 分布と F 分布
- 第5講 一元配置分散分析 I
- 第6講 一元配置分散分析 II
- 第7講 分散分析モデル 演習
- 第8講 重回帰モデル
- 第9講 重回帰モデルでのパラメータの推定
- 第10講 回帰分析 モデルの選択
- 第11講 重回帰分析 残差の評価
- 第12講 重回帰モデル 演習
- 第13講 二元配置分散分析
- 第14講 二元配置分散分析 演習 二元配置分散分析に関する演習を行う
- 第15講 まとめ

■フィードバックの要領

提出されたリフレクションシートにもとづき、LMS 上で対応する

■評価基準

評価 A+ (90 点以上)：目的に応じた統計モデルを選択して、分析を実施、その結果を評価できる。
 評価 A (89 ~ 80 点)：因果関係に関するモデルを適切に適用できる
 評価 B (79 ~ 70 点)：確率分布をもとにしたモデルを適用できる
 評価 C (69 ~ 60 点)：統計モデルを適用できる。
 評価 F (59 点以下)：評価 A+ ~ C までのいずれもできない。

■評価方法

通常課題提出 60% 期末課題提出 40% 統計検定 2 級または 3 級合格については評価で加点する

■留意点

本講義は、毎回の講義の内容を前提として講義を行う。また、講義では各回各人のワークシートの提出やチーム毎のデータ収集、レポート提出のアクティブラーニングを行うので、1 回目の講義から欠席せずに受講すること。PC などを利用するので、その準備をすること。データサイエンス II を履修していること

科目名 データサイエンス IV (Data Science IV)**サブタイトル** ビジネスで活かすための多変量解析・分類**担当教員** 久保田 貴文**対象学年** 3年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

さまざまな問題解決のために必要なデータ解析の基礎的な内容を習得し、さらに自ら問題を考えそれを解決できる能力を養います。講義のなかでは、実際のデータを用い、Rにより解析を行いワード等でレポートを作成します。

■講義分類

ビジネス ICT

■到達目標

データ解析の考え方と手法を十分に理解し様々な問題に対して実際に解析を行い解決につなげることが出来る。手法については、具体的に次の4つの項目について習得していること。1. 多変量データを用いて、単純集計・クロス集計ができる。2. 回帰分析。3. 主成分分析。4. クラスター分析さらに、自ら問題を設定し、本講義で学んだ手法によってそれを解決できることがさらに望ましい。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

データ分析に関する基礎的な学力を養い、産業社会で発生する問題にデータサイエンスの観点から対処する能力を習得する。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義

[個人] ワークシート

[ペア] なし

[グループ] なし

[上記以外] なし

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

事前：内容についてあらかじめデータを思い浮かべてイメージする。事後：授業でやった内容を復習する。事前1.5時間、事後1.5時間程度。

■授業の概要

- 第1講 オリエンテーション
- 第2講 重回帰分析1
- 第3講 重回帰分析2
- 第4講 重回帰分析3
- 第5講 レポート(1)
- 第6講 ロジスティック回帰分析1
- 第7講 ロジスティック回帰分析2
- 第8講 ロジスティック回帰分析3
- 第9講 レポート(2)
- 第10講 主成分分析1
- 第11講 主成分分析2
- 第12講 レポート(3)
- 第13講 クラスター分析1
- 第14講 クラスター分析2
- 第15講 まとめとレポート(4)

■フィードバックの要領

課題に対してフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上) : レポート点で90点以上
- 評価 A (89～80点) : レポート点で80点以上89点以下
- 評価 B (79～70点) : レポート点で70点以上79点以下
- 評価 C (69～60点) : レポート点で60点以上69点以下
- 評価 F (59点以下) : レポート点で59点以下

■評価方法

レポート4回(各10点)、毎回のミニレポート(各4点)。10×4+4×15=40+60=100

■留意点

PCは必携である。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 データ分析実践 (Data Analysis Practice)**サブタイトル** ビジネス分野でのデータ活用**担当教員** 崎濱 栄治**対象学年** 3年生以上**区分** 春学期**実務経験のある教員による授業****■講義目的**

ICT技術の発展を背景として、企業活動では多種多様なデータが蓄積されている。現代のビジネスパーソンには、それらデータから価値ある情報を読み取り、活用する能力が求められている。本講義では実際のECサイトのログデータを題材として、分析の企画からプレゼンテーション資料の作成と発表まで、一連の過程における実践知識とスキルを学ぶ。

■講義分類

ビジネス創造／社会人力育成／ビジネスICT

■到達目標

データの入力・加工方法、集計やグラフ化による基本的なデータの特徴の捉え方、データ間の関連性を統計的に明らかにする方法を習得する。同時に、企業で広く導入されている専門的な統計解析ソフトRStudioの操作方法を身につける。また、本講義は「社会調査士G科目」として申請することも可能である。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

データ分析の基礎技術の学習により、産業社会における課題に対応する技能を習得しグループワークを通じて組織目標の達成に貢献する力を養う。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義／演習

[個人] プレゼンテーション

[ペア] なし

[グループ] PBL

[上記以外] なし

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

各グループの進捗次第では、最終プレゼン資料の作成に学外学習が必要となる可能性がある。(各1.5時間)

■授業の概要

- 第1講 オリエンテーション
- 第2講 ベンチャー企業におけるデータ活用
- 第3講 データハンドリング技術
- 第4講 データから価値を生み出すとは
- 第5講 分析テーマ設定とプレゼンテーション①
- 第6講 分析テーマ設定とプレゼンテーション②
- 第7講 データの加工と可視化①
- 第8講 データの加工と可視化②
- 第9講 データの加工と可視化③
- 第10講 データ分析手法①
- 第11講 データ分析手法②
- 第12講 データ分析手法③
- 第13講 データ分析手法④
- 第14講 プレゼンテーション資料の作成
- 第15講 報告会の実施

■フィードバックの要領

Google クラウドサービス上でフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上) : 顕著にすぐれた水準に達している
- 評価 A (89～80点) : 到達すべき水準を十分に超えている
- 評価 B (79～70点) : 到達すべき水準に達している
- 評価 C (69～60点) : 十分とは言えないが最低限の水準を満たしている
- 評価 F (59点以下) : 本講義で到達すべき水準に達していない

■評価方法

平常点40% : 授業、グループへの貢献(発言、サポート等) 最終発表60%

■留意点

- ・履修状況に応じて、内容を変更することがある。
- ・パソコンを用いた実習授業を行うため、十分に充電して持参すること。
- ・本講義は、社会調査士取得のための認定科目(G分野)に該当する。

科目名 日本経営論 (Japanese Management)**サブタイトル** 高度成長とその後を中心に日本の企業経営を学ぶ**担当教員** 志賀 敏宏**対象学年** 3年生以上**区分** 春学期**実務経験のある教員による授業****■講義目的**

第二次大戦後の日本の「良い経営・経営者とその経営環境」を事例から学びます。受講生の皆さんが環境を活かした「良い仕事」ができるようになるための歴史的な理解と思考力を身につけることを目指します。この目的のために【努力することを強く約束できる人】が履修登録、受講して下さい。本シラバスの最後にある【留意点】を守れる人のみ受講できます。

■講義分類

ビジネス環境理解/ビジネスマネジメント

■到達目標

人の特長と経営環境を活かした良い経営に関して、知識と思考力を身につけること。最後の【留意点】を必ず読んで下さい。それを守れない受講を認めません。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

良い経営・経営者と経営環境に関する知識を身につけ、「経営と環境、経営と人との関係」を理解する。経営環境に応じた経営課題を思考し、経営課題を克服する思考・判断力を学ぶ。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義

- [個人] ワークシート
- [ペア] なし
- [グループ] なし
- [上記以外] なし

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上)及び具体的な内容

各講義前に、講義対象の経営者について情報収集して50文字程度の「人物紹介」を作成する。講義後に、気づきをまとめ、疑問点を調べる。100文字程度の「人物紹介」を仕上げる(各講義について1.5時間)。

■授業の概要

- 第1講 オリエンテーション。本講義の趣旨、全体構成、受講生の目標と課題の説明。
- 第2講 復興期の代表的な経営者：復興から世界ヘーソニー創業者盛田昭夫
- 第3講 復興期の代表的な経営者：復興から世界ヘーソニーのトランジスタラジオ開発と輸出
- 第4講 戦後日本経済論(講義)
- 第5講 復興期の代表的な経営者：志と伝統を世界へ：キッコーマン醤油米国進出
- 第6講 高度成長前期の代表的な経営者：志と技術蓄積で先進国への輝きを—東海道新幹線
- 第7講 高度成長前期の代表的な経営者：企業家の志—スバル 360
- 第8講 高度成長前期の代表的な経営者：志と技術で世界をリード—ホンダ CVCC(低公害)エンジン
- 第9講 高度成長後期、経済のサービス化、日本のサービスの開花①—コンビニ(セブンイレブン)
- 第10講 高度成長後期、経済のサービス化、日本のサービスの開花②—宅配便
- 第11講 バブル期：覇者の交代—アサヒスーパードライブール
- 第12講 長期低迷期：ポスト産業資本主義時代の志①—ソニー ヘットロボット アイボ
- 第13講 長期低迷期：ポスト産業資本主義時代の志②—iPS細胞
- 第14講 本講義のまとめ(期末テスト準備も兼ねる)
- 第15講 最終試験

■フィードバックの要領

口頭(授業中コメント)、ノート・ワークシートへのコメントで行います。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上)：下記の評価方法と配分に従って90点以上
- 評価 A (89～80点)：下記の評価方法と配分に従って80点以上、89点以下
- 評価 B (79～70点)：下記の評価方法と配分に従って70点以上、79点以下
- 評価 C (69～60点)：下記の評価方法と配分に従って60点以上、69点以下
- 評価 F (59点以下)：下記の評価方法と配分に従って59点以下

■評価方法

平常点30点。事前・事後課題、授業中のワークシート作成・提出と発言等29点。授業全回の理解を前提とした期末テスト結果を上記に加点し100点満点。

■留意点

1. 次の3つの約束を守れる人のみ履修して下さい。①私語・遅刻等で他の受講生と授業の進行に迷惑をかけない。②映像教材、講義内容に集中しノートを作り、ワークシートを記入する。③事前・事後課題を実行する。以上を守れない場合は受講停止を求めます。
2. T-NEXTの連絡を見落とした場合は成績に関する異議を受け付けません。
3. 受講を停止する際は必ず履修削除して下さい。就活時に成績で不利にならないために重要です。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 日本経済論 (Japanese Economy)**サブタイトル** グローバル視点を踏まえた日本経済論：プレゼンと討論による学び**担当教員** 椎木 哲太郎**対象学年** 3年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

日本経済を分析対象とし、経済学的視点、歴史的視点、社会経済システム論的視点からアプローチする。さらに産業、貿易、労働、金融、財政、社会保障といった各分野毎の切り口からも接近を試みる。それによって、日本経済の現状と課題をトータルに把握したい。その上で、経済政策の果たした役割についても具体的事例に即して検討し、日本経済を取り巻く大きな環境変化に対応して、国民生活の質を高めていくための「問題解決策」として、制度改革も含めた経済政策のあり方を考える。グループワークによる調査・報告（プレゼンテーション）と討論（ディスカッション）を中心に、双方向のアクティブラーニング実践として進めていく予定である。

■講義分類

ビジネス環境理解／社会人育成／グローバルビジネス

■到達目標

経済学の理論を援用し、グローバルな視点に立って日本経済の現状・因果連関を分析し、環境変化に伴って生じる解決すべき諸課題を明確にする中で、日本経済に対するトータルな認識を深め、一市民として、主権者たる日本国民として、経済成長の意味を問いつつ国民生活の質を高めていくための「問題解決策」として、制度改革も含めた望ましい経済政策を構想（評価）することができるようになる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

日本経済の現状、全体像と課題をグローバルな視点から分析・考察し、各分野の課題を明確にした上で、全体知を活用し、プレゼンを通じて解決に向けたプロセス、政策提言を広く発信できるような創造力を修得する。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義

[個人] プレゼンテーション
[ペア] なし
[グループ] なし
[上記以外] なし

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

最低 20 分の報告のために、シラバス・参考図書を参照し、2冊以上の専門書を 8 時間以上読み、PPT 作成と報告準備に 40 時間以上、最終レポートに 5 時間以上費やすこと。コメンテーターは、必ず 2 点の論点提起を用意すること。

■授業の概要

- 第1講 日本経済論の課題
- 第2講 日本経済へのアプローチ
- 第3講 世界経済の中の日本経済
- 第4講 高度成長とその終焉
- 第5講 バブル経済とその崩壊
- 第6講 長期デフレ不況といわゆる「構造改革」
- 第7講 日本の貿易と直接投資
- 第8講 日本の産業構造
- 第9講 日本の労働市場
- 第10講 日本の金融
- 第11講 日本の財政
- 第12講 日本の税制 日本の税制の現状と、制度改革の方向性を考える。
- 第13講 日本の社会保障と経済 社会保障制度の概要と政策の特質を明らかにする。
- 第14講 日本経済の近未来 2030 年の日本経済を考える。
- 第15講 日本経済の全体像 歴史的分析和各論から、日本経済の全体像、将来像を考える。

■フィードバックの要領

報告翌週にフィードバック用紙を全員に返却し、最終レポートに向け改善点を告知する。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 文献が参照され、最終レポート、発表・討論ともに極めて優秀である
 評価 A (89 ~ 80 点) : 文献が参照され、最終レポート、発表・討論ともに優秀である
 評価 B (79 ~ 70 点) : 文献が参照され、最終レポート、発表・討論ともに良い
 評価 C (69 ~ 60 点) : 文献が参照され、最終レポート、発表・討論ともに普通
 評価 F (59 点以下) : 最終レポート、発表・討論ともに不十分。文献参照、データの分析ともに不十分

■評価方法

最終レポート (60%)、平常点 (報告・討論 [メモ] 等) (40%)

■留意点

①報告（プレゼン）に際しては、何冊かの参考文献・図書を読んで頂く。②第1～第3回の講義で分担（各回の報告者とコメンテーター）を決定するので、(予め希望回を明確にして) 必ず出席すること。この間の講義に出席しなかった（分担決定に参加しなかった）諸君には、履修を許可しない。③プレゼン、最終レポート作成にあたっては、MS Office、Excel を使いこなすことを目標とする。

科目名 認知心理 (Cognitive Psychology)**サブタイトル** 個人の認識と問題解決・意思決定**担当教員** 大森 拓哉**対象学年** 3年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

認知心理学は、人間の心のしくみを学ぶ心理学の一分野である。人間が外部の環境や刺激をどう感じ、どう理解しているのかといったしくみを様々な角度から考察する。講義中に自分自身についても当てはめ、実験演習も行う。

■講義分類

顧客理解／ビジネス創造／ビジネス ICT

■到達目標

この授業で学んだことを日常世界の中においても理解・応用できるか、経済・経営活動においてこの知識を応用・適用できるか。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

人間の思考を個人の視点から学び、問題解決や意思決定に生かす。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義／演習

[個人] T/Fテスト

[ペア] なし

[グループ] なし

[上記以外] なし

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

毎回のトピックスに関して、参考図書等の当該部分を事前に読しておくこと (1.5 時間)。また、授業内で取り扱った内容について、自分自身の経験を踏まえた考察をまとめておくこと (1.5 時間)。

■授業の概要

- 第1講 概論
- 第2講 記憶と忘却
- 第3講 知覚と認識
- 第4講 顔表情の認識と感情表出
- 第5講 概念と言語
- 第6講 知識と表象
- 第7講 イメージと空間の情報処理
- 第8講 認知の制御過程
- 第9講 文章理解
- 第10講 推論
- 第11講 問題解決
- 第12講 意思決定
- 第13講 日常世界と認知心理学 (1)
- 第14講 日常世界と認知心理学 (2)
- 第15講 まとめ

■フィードバックの要領

授業中に調査や心理実験を実施し、即座に結果を示し、個人の思考の評価を行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 講義内容を完全に理解できている
- 評価 A (89 ~ 80 点) : 講義内容を理解できている
- 評価 B (79 ~ 70 点) : 講義内容をおおよそ理解できている
- 評価 C (69 ~ 60 点) : 最低限の理解ができている
- 評価 F (59 点以下) : 講義科目の履修目標に達していない

■評価方法

出席を前提とし、期末定期試験 (100%) により評価する。

■留意点

- ①本講義は、幅広い心理学のうちの一分野である。「消費心理」、「社会心理」等の他の心理学の講義も聴講するとより理解が深まる。
- ②「経営と意思決定」の講義にも関連がある。③講義途中で心理実験やそのレポート提出を求めることがあるので、毎回の出席及び PC の持参は必須。④私語、飲食、授業と関係のない PC 操作、携帯電話操作、帽子・サングラス着用等禁止する。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ビッグデータ活用法 (Utilizing Method of Big Data)**サブタイトル** ビッグデータの理解と具体的な活用法を企業に提案する**担当教員** 西村 公児**対象学年** 3年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

自分で問題解決の仮説・検証できる実践力を身につける

■講義分類

顧客理解／ビジネス創造／ビジネス ICT

■到達目標

ビッグデータの理論とビッグデータを活かしたビジネスへの実践学習

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

ビジネスの中で最低限必要な基礎的な数学的思考力を基に、問題解決に向けたプロセスを明確にすることが出来る。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義

[個人] プレゼンテーション

[ペア] ペアワーク

[グループ] PBL

[上記以外] トピックについてデータや資料を分析し仮説検証のシナリオを作る

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

毎授業後にはレポートを提出すること（各授業毎 1.5 時間以上の予習・復習） 1) 本日のキーワードを調べる 2) プレゼンテーション用の資料作成

■授業の概要

第1講 概要・イントロダクション 平常点・キーワード・プレゼンする資料の内容

第2講 AI（人工知能）とは

第3講 AI（人工知能）を実際に活用するには

第4講 ビッグデータとは

第5講 ビッグデータがあるから AI は学習できるとは？

第6講 顕在化した需要に応えるためのプロセスの概要とは

第7講 分析・プランニングを支える基盤とは

第8講 「知ってもらおう」ためのビッグデータの活用法

第9講 「興味を持ってもらう」ためのビッグデータの活用法

第10講 「調べてもらう」ためのビッグデータの活用法とは

第11講 「買ってもらおう」ためのビッグデータの活用法とは

第12講 「ファンになってもらう」ためのビッグデータ活用法とは

第13講 ビッグデータ活用を支える知識（ツール&分析手法）

第14講 企業に提案するプレゼンテーション（個人立案）

第15講 企業に提案するプレゼンテーション（個人立案）

■フィードバックの要領

レポートに対し、コメントを記入してフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 知識・応用力 (置換能力)・洞察力 (展開力) を身に着けている (実践への応用が可能)

評価 A (89 ~ 80 点) : 知識・応用力 (置換能力) を身に着けている。(実践に向けた取り組みが可能)

評価 B (79 ~ 70 点) : 最低限の知識を身に着けている。(勉強レベル)

評価 C (69 ~ 60 点) : 最低限の知識をつけるには取り組み姿勢の改善が必要である

評価 F (59 点以下) : C に達しない程度的大幅な改善を要する

■評価方法

1) 理解習得・平常点…15% (15 点)

2) 課題図書から選定したキーワードを 300 字で説明する…15% (15 点)

3) プレゼンする資料作成…70% (70 点)

■留意点

科目名 問題解決学特講 I (Complex Problem Solving Lecture on a Special Topic I)**サブタイトル** 「問題解決能力」を鍛える**担当教員** 久保田 貴文**対象学年** 3年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

これまでの多摩大学での様々な学びの中で、問題解決の様々な手法を学んできた。卒業の前に、これまでの学びで得た問題解決能力を実社会で発揮していくための準備をして、社会人としての活躍につなげていかなければならない。そこで、これまでの学びを振り返り、学びのなかで得てきた「問題解決能力」を教員による個別指導の下でブラッシュアップして、実社会での問題解決能力の発揮につなげていく。この講義では、正解のない問題によりよい答えを導き出せるスキルを確実なものとするため、教員が設定した「問題」に対して、課題の分析、解決策の探索、評価、解決策の選択という問題解決の実践演習を行うことを通じて、社会人として要求される「社会人基礎力」を高めていくことを目指す。

■講義分類

社会人力育成

■到達目標

実社会で使える「問題解決能力」を身につける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP3 関心と意欲 DP5 高い志

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

社会人として活躍するための問題解決について学ぶことで、社会における多様な価値観や文化的な背景に対する理解や配慮ができるようになる。また、ルールや約束を守ることができる規律性を身につけることができる。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義/演習

【個人】 プレゼンテーション

【ペア】 ヘアワーク/ピア・レビュー/ロールプレイ

【グループ】 ジグソー法/Buzz Group/KJ法/マインド・マップ

【上記以外】 複数教員によって実施するため、AL技法が異なることがある。

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

講義を受講するにあたっては、教員から個別指導された内容を調べ、次の講義の際にその内容を報告することが必要で、毎回、概ね1時間30分程度の事後学習が必要。

■授業の概要

第1講	1	大学生生活の振り返り (1)
第2講	1	大学生生活の振り返り (2)
第3講	2	問題解決の実践演習 (1)
第4講	2	問題解決の実践演習 (2)
第5講	2	問題解決の実践演習 (3)
第6講	2	問題解決の実践演習 (4)
第7講	2	問題解決の実践演習 (5)
第8講	2	問題解決の実践演習 (6)
第9講	2	問題解決の実践演習 (7)
第10講	2	問題解決の実践演習 (8)
第11講	2	問題解決の実践演習 (9)
第12講	2	問題解決の実践演習 (10)
第13講	2	問題解決の実践演習 (11)
第14講	2	問題解決の実践演習 (12)
第15講	3	今後も問題解決能力を高めていくための方策を考える

■フィードバックの要領

課題やレポートに対しフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : 革新性を持った確実性のある解決策を提案できた。

評価 A (89～80点) : 革新性はないものの確実性のある解決策を提案できた。

評価 B (79～70点) : 実現可能性に疑義があるが、概ね問題解決策をとりまとめることができた。

評価 C (69～60点) : 解決策はまとめられたものの、問題の解決に結びつく蓋然性が低い。

評価 F (59点以下) : 考察能力の不足から、有効な問題解決策を提案できていない。

■評価方法

講義への参加度(評価割合50%)と問題解決の実習でとりまとめた問題解決策の評価(評価割合50%)の成績により評価する。

■留意点

この講義は、卒業判定で卒業に必要な単位が6単位以内の不足であったことから卒業判定が保留になった者を対象に行う特別講義のため、秋学期の成績がとりまとまった後に発表されるこの科目の履修許可者として指名された者しか履修することができない。シラバスの内容に加えて、担当教員からあらたな内容を教授することがある。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 問題解決学特講 II (Complex Problem Solving Lecture on a Special Topic II)**サブタイトル** 「問題解決能力」を鍛える**担当教員** 久保田 貴文**対象学年** 3年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

これまでの多摩大学での様々な学びの中で、問題解決の様々な手法を学んできた。卒業の前に、これまでの学びで得た問題解決能力を実社会で発揮していくための準備をして、社会人としての活躍につなげていかなければならない。そこで、これまでの学びを振り返り、学びのなかで得てきた「問題解決能力」を教員による個別指導の下でブラッシュアップして、実社会での問題解決能力の発揮につなげていく。この講義では、正解のない問題によりよい答えを導き出せるスキルを確実なものとするため、教員が設定した「問題」に対して、課題の分析、解決策の探索、評価、解決策の選択という問題解決の実践演習を行うことを通じて、社会人として要求される「社会人基礎力」を高めていくことを目指す。

■講義分類

社会人力育成

■到達目標

実社会で使える「問題解決能力」を身につける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP3 関心と意欲 DP5 高い志

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

社会人として活躍するための問題解決について学ぶことで、社会における多様な価値観や文化的な背景に対する理解や配慮ができるようになる。また、ルールや約束を守ることができる規律性を身につけることができる。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義/演習

[個人] プレゼンテーション

[ペア] ヘアワーク/ピア・レビュー/ロールプレイ

[グループ] ジグソー法/Buzz Group/KJ法/マインド・マップ

[上記以外] 複数教員によって実施するため、AL技法が異なることがある。

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

講義を受講するにあたっては、教員から個別指導された内容を調べ、次の講義の際にその内容を報告することが必要で、毎回、概ね1時間30分程度の事後学習が必要。

■授業の概要

- | | | |
|------|---|--------------------------|
| 第1講 | 1 | 大学生生活の振り返り (1) |
| 第2講 | 1 | 大学生生活の振り返り (2) |
| 第3講 | 2 | 問題解決の実践演習 (1) |
| 第4講 | 2 | 問題解決の実践演習 (2) |
| 第5講 | 2 | 問題解決の実践演習 (3) |
| 第6講 | 2 | 問題解決の実践演習 (4) |
| 第7講 | 2 | 問題解決の実践演習 (5) |
| 第8講 | 2 | 問題解決の実践演習 (6) |
| 第9講 | 2 | 問題解決の実践演習 (7) |
| 第10講 | 2 | 問題解決の実践演習 (8) |
| 第11講 | 2 | 問題解決の実践演習 (9) |
| 第12講 | 2 | 問題解決の実践演習 (10) |
| 第13講 | 2 | 問題解決の実践演習 (11) |
| 第14講 | 2 | 問題解決の実践演習 (12) |
| 第15講 | 3 | 今後も問題解決能力を高めていくための方策を考える |

■フィードバックの要領

課題やレポートに対しフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : 革新性を持った確実性のある解決策を提案できた。

評価 A (89～80点) : 革新性はないものの確実性のある解決策を提案できた。

評価 B (79～70点) : 実現可能性に疑義があるが、概ね問題解決策をとりまとめることができた。

評価 C (69～60点) : 解決策はまとめられたものの、問題の解決に結びつく蓋然性が低い。

評価 F (59点以下) : 考察能力の不足から、有効な問題解決策を提案できていない。

■評価方法

講義への参加度(評価割合50%)と問題解決の実習でとりまとめた問題解決策の評価(評価割合50%)の成績により評価する。

■留意点

この講義は、卒業判定で卒業に必要な単位が6単位以内の不足であったことから卒業判定が保留になった者を対象に行う特別講義のため、秋学期の成績がとりまとまった後に発表されるこの科目の履修許可者として指名された者しか履修することができない。シラバスの内容に加えて、担当教員からあらたな内容を教授することがある。

科目名 問題解決学特講 III (Complex Problem Solving Lecture on a Special Topic III)**サブタイトル** 「問題解決能力」を鍛える**担当教員** 久保田 貴文**対象学年** 3年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

これまでの多摩大学での様々な学びの中で、問題解決の様々な手法を学んできた。卒業の前に、これまでの学びで得た問題解決能力を実社会で発揮していくための準備をして、社会人としての活躍につなげていかなければならない。そこで、これまでの学びを振り返り、学びのなかで得てきた「問題解決能力」を教員による個別指導の下でブラッシュアップして、実社会での問題解決能力の発揮につなげていく。この講義では、正解のない問題によりよい答えを導き出せるスキルを確実なものとするため、教員が設定した「問題」に対して、課題の分析、解決策の探索、評価、解決策の選択という問題解決の実践演習を行うことを通じて、社会人として要求される「社会人基礎力」を高めていくことを目指す。

■講義分類

社会人力育成

■到達目標

実社会で使える「問題解決能力」を身につける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP3 関心と意欲 DP5 高い志

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

社会人として活躍するための問題解決について学ぶことで、社会における多様な価値観や文化的な背景に対する理解や配慮ができるようになる。また、ルールや約束を守ることができる規律性を身につけることができる。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義/演習

[個人] プレゼンテーション

[ペア] ヘアワーク/ピア・レビュー/ロールプレイ

[グループ] ジグソー法/Buzz Group/KJ法/マインド・マップ

[上記以外] 複数教員によって実施するため、AL技法が異なることがある。

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

講義を受講するにあたっては、教員から個別指導された内容を調べ、次の講義の際にその内容を報告することが必要で、毎回、概ね1時間30分程度の事後学習が必要。

■授業の概要

第1講	1	大学生生活の振り返り (1)
第2講	1	大学生生活の振り返り (2)
第3講	2	問題解決の実践演習 (1)
第4講	2	問題解決の実践演習 (2)
第5講	2	問題解決の実践演習 (3)
第6講	2	問題解決の実践演習 (4)
第7講	2	問題解決の実践演習 (5)
第8講	2	問題解決の実践演習 (6)
第9講	2	問題解決の実践演習 (7)
第10講	2	問題解決の実践演習 (8)
第11講	2	問題解決の実践演習 (9)
第12講	2	問題解決の実践演習 (10)
第13講	2	問題解決の実践演習 (11)
第14講	2	問題解決の実践演習 (12)
第15講	3	今後も問題解決能力を高めていくための方策を考える

■フィードバックの要領

課題やレポートに対しフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : 革新性を持った確実性のある解決策を提案できた。

評価 A (89～80点) : 革新性はないものの確実性のある解決策を提案できた。

評価 B (79～70点) : 実現可能性に疑義があるが、概ね問題解決策をとりまとめることができた。

評価 C (69～60点) : 解決策はまとめられたものの、問題の解決に結びつく蓋然性が低い。

評価 F (59点以下) : 考察能力の不足から、有効な問題解決策を提案できていない。

■評価方法

講義への参加度(評価割合50%)と問題解決の実習でとりまとめた問題解決策の評価(評価割合50%)の成績により評価する。

■留意点

この講義は、卒業判定で卒業に必要な単位が6単位以内の不足であったことから卒業判定が保留になった者を対象に行う特別講義のため、秋学期の成績がとりまとまった後に発表されるこの科目の履修許可者として指名された者しか履修することができない。シラバスの内容に加えて、担当教員からあらたな内容を教授することがある。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 立志特講Ⅰ (Aspiration Lecture on a Special Topic I)**サブタイトル** 「志」の実現のためのロードマップづくり**担当教員** 久保田 貴文**対象学年** 3年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

実社会で活躍する大人たちは、様々な経験を積み重ねて、自らを成長させ、社会において必要な存在になることで、安定した生活を確保している。大学での4年間は、大人となって実社会に飛び立つための滑走路であり、この4年間に、まず卒業後の進路を見いだし、それらにむかって加速をして、社会人として飛び立っていかなければならないのである。この講義では、多摩大学で学びのなかで醸成してきた「志」について、卒業を前に整理をして、教員による個別指導の下、その実現のための経路を「ロードマップ」としてとりまとめしていく。このとりまとめを通じて、社会人として飛躍していくために、自らの可能性と向き合い、「成長する自分」を創り上げるために、大学の卒業を前に、自分の「人格」を子どもモードから大人モードに切り替えを行うことを目指していく。

■講義分類

社会人力育成

■到達目標

「志」を実現するためのロードマップをとりまとめる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP5 高い志 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

多摩大学で醸成した志の実現のためのロードマップをまとめ成長する自分を創り上げるために人格形成させる

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義 / 演習

[個人] プレゼンテーション

[ペア] ペアワーク / ピア・レビュー / ロールプレイ

[グループ] Buzz Group / KJ法 / マインド・マップ

[上記以外] 複数教員によって実施するため、教員によってAL技法は異なる。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5時間以上）及び具体的な内容

講義を受講するにあたっては、教員から個別指導された内容を調べ、次回の講義の際にその内容を報告することが必要で、毎回、概ね1時間30分程度の事後学習が必要。

■授業の概要

- 第1講 1 大学生生活の振り返り (1)
- 第2講 1 大学生生活の振り返り (2)
- 第3講 2 自分の可能性と向き合う (1)
- 第4講 2 自分の可能性と向き合う (2)
- 第5講 2 自分の可能性と向き合う (3)
- 第6講 2 自分の可能性と向き合う (4)
- 第7講 2 自分の可能性と向き合う (5)
- 第8講 2 自分の可能性と向き合う (6)
- 第9講 2 自分の可能性と向き合う (7)
- 第10講 2 自分の可能性と向き合う (8)
- 第11講 2 自分の可能性と向き合う (9)
- 第12講 2 自分の可能性と向き合う (10)
- 第13講 2 自分の可能性と向き合う (11)
- 第14講 2 自分の可能性と向き合う (12)
- 第15講 3 ロードマップをとりまとめる

■フィードバックの要領

課題やレポートに対しフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上) : 実現可能性の高いロードマップが完成できた。
- 評価 A (89～80点) : 成長の道筋が概ねまとまったロードマップが作成できた。
- 評価 B (79～70点) : さらなる考察が必要だが、一応、今後の目標が発見できた。
- 評価 C (69～60点) : 今後、具体性を伴うように見直しが必要だが、一応、目標は発見できた。
- 評価 F (59点以下) : 明確な目標の記載があるロードマップが完成できていない。

■評価方法

講義への参加度（評価割合50%）と完成したロードマップの評価（評価割合50%）の成績により評価する。

■留意点

この講義は、卒業判定で卒業に必要な単位が6単位以内の不足であったことから卒業判定が保留になった者を対象に行う特別講義のため、秋学期の成績がとりまとまった後に発表されるこの科目の履修許可者として指名された者しか履修することができない。

科目名 立志特講Ⅱ (Aspiration Lecture on a Special Topic Ⅱ)**サブタイトル** 「志」の実現のためのロードマップづくり**担当教員** 久保田 貴文**対象学年** 3年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

実社会で活躍する大人たちは、様々な経験を積み重ねて、自らを成長させ、社会において必要な存在になることで、安定した生活を確保している。大学での4年間は、大人となって実社会に飛び立つための滑走路であり、この4年間に、まず卒業後の進路を見いだし、それらにむかって加速をして、社会人として飛び立っていかなければならないのである。この講義では、多摩大学で学びのなかで醸成してきた「志」について、卒業を前に整理をして、教員による個別指導の下、その実現のための経路を「ロードマップ」としてとりまとめしていく。このとりまとめを通じて、社会人として飛躍していくために、自らの可能性と向き合い、「成長する自分」を創り上げるために、大学の卒業を前に、自分の「人格」を子どもモードから大人モードに切り替えを行うことを目指していく。

■講義分類

社会人力育成

■到達目標

「志」を実現するためのロードマップをとりまとめる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP5 高い志 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

多摩大学で醸成した志の実現のためのロードマップをまとめ成長する自分を創り上げるために人格形成させる

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義 / 演習

[個人] プレゼンテーション

[ペア] ペアワーク/ピア・レビュー/ロールプレイ

[グループ] Buzz Group/KJ法/マインド・マップ

[上記以外] 複数教員によって実施するため、教員によってAL技法は異なる。

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

講義を受講するにあたっては、教員から個別指導された内容を調べ、次回の講義の際にその内容を報告することが必要で、毎回、概ね1時間30分程度の事後学習が必要。

■授業の概要

- 第1講 1 大学生生活の振り返り(1)
- 第2講 1 大学生生活の振り返り(2)
- 第3講 2 自分の可能性と向き合う(1)
- 第4講 2 自分の可能性と向き合う(2)
- 第5講 2 自分の可能性と向き合う(3)
- 第6講 2 自分の可能性と向き合う(4)
- 第7講 2 自分の可能性と向き合う(5)
- 第8講 2 自分の可能性と向き合う(6)
- 第9講 2 自分の可能性と向き合う(7)
- 第10講 2 自分の可能性と向き合う(8)
- 第11講 2 自分の可能性と向き合う(9)
- 第12講 2 自分の可能性と向き合う(10)
- 第13講 2 自分の可能性と向き合う(11)
- 第14講 2 自分の可能性と向き合う(12)
- 第15講 3 ロードマップをとりまとめる

■フィードバックの要領

課題やレポートに対しフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : 実現可能性の高いロードマップが完成できた。

評価 A (89～80点) : 成長の道筋が概ねまとまったロードマップが作成できた。

評価 B (79～70点) : さらなる考察が必要だが、一応、今後の目標が発見できた。

評価 C (69～60点) : 今後、具体性を伴うように見直しが必要だが、一応、目標は発見できた。

評価 F (59点以下) : 明確な目標の記載があるロードマップが完成できていない。

■評価方法

講義への参加度(評価割合50%)と完成したロードマップの評価(評価割合50%)の成績により評価する。

■留意点

この講義は、卒業判定で卒業に必要な単位が6単位以内の不足であったことから卒業判定が保留になった者を対象に行う特別講義のため、秋学期の成績がとりまとまった後に発表されるこの科目の履修許可者として指名された者しか履修することができない。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 立志特講 III (Aspiration Lecture on a Special Topic III)

サブタイトル 「志」の実現のためのロードマップづくり

担当教員 久保田 貴文

対象学年 3年生以上

区分 秋学期

■講義目的

実社会で活躍する大人たちは、様々な経験を積み重ねて、自らを成長させ、社会において必要な存在になることで、安定した生活を確保している。大学での4年間は、大人となって実社会に飛び立つための滑走路であり、この4年間に、まず卒業後の進路を見いだし、それに向かって加速をして、社会人として飛び立っていかなければならないのである。この講義では、多摩大学で学びのなかで醸成してきた「志」について、卒業を前に整理をして、教員による個別指導の下、その実現のための経路を「ロードマップ」としてとりまとめていく。このとりまとめを通じて、社会人として飛躍していくために、自らの可能性と向き合い、「成長する自分」を創り上げるために、大学の卒業を前に、自分の「人格」を子どもモードから大人モードに切り替えを行うことを目指していく。

■講義分類

社会人力育成

■到達目標

「志」を実現するためのロードマップをとりまとめる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP5 高い志 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

多摩大学で醸成した志の実現のためのロードマップをまとめ成長する自分を創り上げるために人格形成させる

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義 / 演習

[個人] プレゼンテーション

[ペア] ペアワーク / ピア・レビュー / ロールプレイ

[グループ] Buzz Group / KJ法 / マインド・マップ

[上記以外] 複数教員によって実施するため、教員によってAL技法は異なる。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5時間以上）及び具体的な内容

講義を受講するにあたっては、教員から個別指導された内容を調べ、次回の講義の際にその内容を報告することが必要で、毎回、概ね1時間30分程度の事後学習が必要。

■授業の概要

- 第1講 1 大学生生活の振り返り (1)
- 第2講 1 大学生生活の振り返り (2)
- 第3講 2 自分の可能性と向き合う (1)
- 第4講 2 自分の可能性と向き合う (2)
- 第5講 2 自分の可能性と向き合う (3)
- 第6講 2 自分の可能性と向き合う (4)
- 第7講 2 自分の可能性と向き合う (5)
- 第8講 2 自分の可能性と向き合う (6)
- 第9講 2 自分の可能性と向き合う (7)
- 第10講 2 自分の可能性と向き合う (8)
- 第11講 2 自分の可能性と向き合う (9)
- 第12講 2 自分の可能性と向き合う (10)
- 第13講 2 自分の可能性と向き合う (11)
- 第14講 2 自分の可能性と向き合う (12)
- 第15講 3 ロードマップをとりまとめる

■フィードバックの要領

課題やレポートに対しフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上) : 実現可能性の高いロードマップが完成できた。
- 評価 A (89～80点) : 成長の道筋が概ねまとまったロードマップが作成できた。
- 評価 B (79～70点) : さらなる考察が必要だが、一応、今後の目標が発見できた。
- 評価 C (69～60点) : 今後、具体性を伴うように見直しが必要だが、一応、目標は発見できた。
- 評価 F (59点以下) : 明確な目標の記載があるロードマップが完成できていない。

■評価方法

講義への参加度（評価割合50%）と完成したロードマップの評価（評価割合50%）の成績により評価する。

■留意点

この講義は、卒業判定で卒業に必要な単位が6単位以内の不足であったことから卒業判定が保留になった者を対象に行う特別講義のため、秋学期の成績がとりまとまった後に発表されるこの科目の履修許可者として指名された者しか履修することができない。

科目名 ロシア経済論 (Russian Economy)**サブタイトル** 外国の経済システムを理解しよう**担当教員** 小林 昭葉**対象学年** 3年生以上**区分** 秋学期**■講義目的**

日本の隣国であり、BRICsのうちの一国であるロシアについて経済の側面から学習する。日本と異なり天然資源が豊富なロシアは、国の根幹を担う経済に特別な「配慮」をしている。外国の経済システムや経済の流れを学習し、今後のアジア、ユーラシアにおける経済のダイナミズムについて想像を凝らしていくことを目的とする。

■講義分類

ビジネス創造／社会人力育成／グローバルビジネス

■到達目標

日本と異なる海外の経済事情について学習し、日本の見方・視点から脱し相手の国の立場に立って出来事を理解できるようにする。ロシアと日本との経済協力が可能なのか、ロシアとアジア諸国との経済協力は可能なのか、何ができて何が困難かを理解できるようにする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

ロシアの経済システムを理解することは、他国、異文化理解である。社会で経験を積むためには、まず知識をつけそれを理解したのち、理解した内容に思考を重ね物事を判断していく必要がある。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義

[個人] ワークシート

[ペア] なし

[グループ] なし

[上記以外] 毎回講義で課す課題を論理的にまとめ提出。

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

ロシアに関するニュースを定期的に収集すること。授業で指示するプリントや新聞記事を事前に読み、感想を1000字程度で記入し授業に持参すること。

■授業の概要

- 第1講 イントロダクション ロシアってどんな国
- 第2講 ロシア経済の位置づけ①
- 第3講 ロシア経済の位置づけ②
- 第4講 ロシア経済の歴史と政治システム①
- 第5講 ロシア経済の歴史と政治システム②
- 第6講 ロシアの財政制度
- 第7講 中央アジア、コーカサスの市場経済化
- 第8講 ロシアと中国との経済関係
- 第9講 ロシアの労働人口
- 第10講 ゲスト講師による講演(ロシア経済、石油、天然ガスについて)(予定)
- 第11講 マクロ経済・産業構造
- 第12講 民営化と企業システム
- 第13講 国民の暮らし
- 第14講 開発と環境
- 第15講 ロシア極東地域、これまでの講義のまとめ

■フィードバックの要領

授業内で課す課題の回答は毎回授業で回収。翌週の授業で複数名の回答を紹介する。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : 平常点 (毎週の課題の出来や学習態度が非常に良い)。中間レボと試験の出来 9割以上。

評価 A (89～80点) : 平常点 (毎週の課題の出来や学習態度が良い)。期末試験の出来 8割。

評価 B (79～70点) : 平常点 (毎週の課題の出来や学習態度がまあ良い)。期末試験の出来 6—7割。

評価 C (69～60点) : 平常点 (毎週の課題の出来や学習態度は良い)。期末試験の出来 5割。

評価 F (59点以下) : 平常点 (毎週の課題の出来や学習態度が悪い)。期末試験の出来 4割以下。

■評価方法

授業内で毎回課す課題(プリントを読んだ感想): 40%、授業への積極的態度や発言: 25%、期末試験: 35%。

■留意点

初回及び第2回目の授業は、本講義の目的、目標、今後の方針について説明するため、その説明を理解した者に履修してもらいたい。従って、初回と第2回目の講義に欠席した場合は履修登録から削除する場合がある。本講義では毎回課題を課すが、その課題に対してきちんと論理的にまとめることができている、回答になっていない提出物はその回の出席の取消しを検討することもある。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 プレゼミ I (Pre-seminar I)**サブタイトル** ホームルーム & ホームゼミ選択**担当教員** 専任教員、高瀬**対象学年** 1年生以上**区分** 春・秋学期**実務経験のある教員による授業****■講義目的**

多摩大学経営情報学部の学びの特徴は、4年間ゼミと、アクティブラーニングにある。プレゼミにおいては、2年生からのホームゼミで本格的に展開されるアクティブラーニングの学びを、より効果・効率的に進められるように、ホームゼミでの学びを体験する模擬ホームゼミを一つの柱とする。同時に、ホームゼミ選択のための情報源としての多摩大教員名鑑を作成する。また、1年生で学ぶ、他の科目での基礎的な学びが、しっかりと身に付いているかどうかを、プレゼミ生相互やプレゼミ担当教員と確認するための、ホームルームももう一つの大きな柱とする。さらに、各プレゼミ担当教員によって提供されるコンテンツにより、幅広い教養を身につけられることもまた、プレゼミの特徴のひとつである。

■講義分類

社会人力育成

■到達目標

ホームルーム：通学習慣と、学習習慣を継続し、4年間の体系的学びの基礎とする。
 模擬ホームゼミ：多くのホームゼミを体験することにより、ホームゼミ選択のマッチングを高める。
 担当教員によるコンテンツ：各プレゼミの学生の興味関心を、さらに広げることを目標とする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP3 関心と意欲 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

多摩大学経営情報学部で、主体的に学ぶための、関心や意欲を育むことを目標とする。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義/演習

[個人] プレゼンテーション/ワークシート

[ペア] ペアワーク

[グループ] PBL

[上記以外] 協働作業

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

ホームルーム・模擬ホームゼミ・各教員によるコンテンツ、いずれも事前の予習と、事後の復習が重要である。グループワークにおいては、授業間の空きコマに集まって、予・復習をすることが求められる。(1.5時間)

■授業の概要

- 第1講 オリエンテーション&ガイダンス
- 第2講 入学前教育の振り返り
- 第3講 多摩大生未来夢日記の作成
- 第4講 スポーツフェスティバル(又は、初年次合同プログラム)の実施
- 第5講 ホームルーム&模擬ホームゼミ(1・2)
- 第6講 ホームルーム&模擬ホームゼミ(3)
- 第7講 ホームルーム&模擬ホームゼミ(4・5)
- 第8講 ホームルーム&模擬ホームゼミ(6)
- 第9講 ホームルーム&模擬ホームゼミ(7・8)
- 第10講 多摩祭模擬店・研究発表検討
- 第11講 ホームルーム&模擬ホームゼミ(9)
- 第12講 ホームルーム&模擬ホームゼミ(10・11)
- 第13講 ホームルーム&模擬ホームゼミ(12)
- 第14講 ホームルーム
- 第15講 ホームルーム

■フィードバックの要領

オフィスアワーによる面談やメール等によって、フィードバックを行う。

■評価基準

評価P(合格)：総合評価が60点以上であり、この講義の到達目標に達したと認められる場合。

評価F(不合格)：総合評価が60点未満で、この講義の到達目標に達していない場合。

■評価方法

①平常点(50%) ②課題提出(50%)

■留意点

(1) 講義の中で課題を課す場合が多くあり、その課題提出が成績評価に結びつくため、講義を欠席しないこと。(2) かならず各自が用意したパソコンを持参すること。それ以外の持参物や、予習等については、各担当教員の指示に従うこと。

科目名 プレゼミ II (Pre-seminar II)**サブタイトル** ホームルーム & ホームゼミ選択**担当教員** 専任教員、高瀬**対象学年** 1年生以上**区分** 春・秋学期**実務経験のある教員による授業****■講義目的**

多摩大学経営情報学部の学びの特徴は、4年間ゼミと、アクティブラーニングにある。プレゼミにおいては、2年生からのホームゼミで本格的に展開されるアクティブラーニングの学びを、より効果・効率的に進められるように、ホームゼミでの学びを体験する模擬ホームゼミを一つの柱とする。同時に、ホームゼミ選択のための情報源としての多摩大教員名鑑を作成する。また、1年生で学ぶ、他の科目での基礎的な学びが、しっかりと身に付いているかどうかを、プレゼミ生相互やプレゼミ担当教員と確認するための、ホームルームももう一つの大きな柱とする。さらに、各プレゼミ担当教員による提供されるコンテンツにより、幅広い教養を身につけることもまた、プレゼミの特徴のひとつである。

■講義分類

社会人力育成

■到達目標

ホームルーム：通学習慣と、学習習慣を継続し、4年間の体系的学びの基礎とする。
 模擬ホームゼミ：多くのホームゼミを体験することにより、ホームゼミ選択のマッチングを高める。
 担当教員によるコンテンツ：各プレゼミの学生の興味関心を、さらに広げることを目標とする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP3 関心と意欲 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

多摩大学経営情報学部で、主体的に学ぶための、関心や意欲を育むことを目標とする。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義/演習

[個人] プレゼンテーション/ワークシート

[ペア] ペアワーク

[グループ] PBL

[上記以外] 協働作業

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

ホームルーム・模擬ホームゼミ・各教員によるコンテンツ、いずれも事前の予習と、事後の復習が重要である。グループワークにおいては、授業間の空きコマに集まって、予・復習をすることが求められる。(1.5時間)

■授業の概要

- 第1講 ホームルーム&模擬ホームゼミ (13)
- 第2講 ホームルーム&模擬ホームゼミ (14)
- 第3講 ホームルーム&模擬ホームゼミ (15)
- 第4講 ホームルーム&模擬ホームゼミ (16)
- 第5講 ホームルーム&模擬ホームゼミ (17)
- 第6講 ホームルーム&模擬ホームゼミ (18)
- 第7講 ホームゼミ合同説明会①
- 第8講 ホームゼミ合同説明会②
- 第9講 学園祭に参加する
- 第10講 ホームルーム
- 第11講 ホームルーム
- 第12講 ホームルーム
- 第13講 学科選択説明会
- 第14講 ホームルーム
- 第15講 ホームルーム

■フィードバックの要領

オフィスアワーによる面談やメール等によって、フィードバックを行う。

■評価基準

評価P(合格)：総合評価が60点以上であり、この講義の到達目標に達したと認められる場合。

評価F(不合格)：総合評価が60点未満で、この講義の到達目標に達していない場合。

■評価方法

①平常点(50%)、②課題提出(50%)

■留意点

(1) 講義の中で課題を課す場合が多くあり、その課題提出が成績評価に結びつくため、講義を欠席しないこと。(2) かならず各自用意したパソコンを持参すること。それ以外の持参物や、予習等については、各担当教員の指示に従うこと。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ホームゼミ (Seminars) 石川 晴子

サブタイトル 英語・異文化コミュニケーション・地域社会活動

担当教員 石川 晴子

対象学年 2年生以上

区分 春・秋学期

■講義目的

石川ゼミは、英語、異文化コミュニケーション、地域社会活動をテーマに、自分の個性や持ち味を生かしながら地域社会、国際社会で社会貢献ができる人材を育てることを目標に活動しています。活動内容は、地域小学校の放課後子ども教室での英語活動、地域・国際交流イベント、学内イベントの企画・運営、英語スピーチ、プレゼンテーション、グループディスカッション、ムービー制作など多岐にわたります。学生はこれらの活動を通して体験的にチームワーク、コミュニケーション力、自主性を磨き、そこで生じる様々な問題の解決に取り組んでいます。また、そこで出会う子どもから社会人まで様々な背景を持つ人々との交流を通して、社会と自らの在り方について学んでいます。

■講義分類

社会人力育成／グローバルビジネス

■到達目標

ゼミで行う学内、学外の様々な活動を通して、社会人に必要なスキルおよびマナーを身に着けます。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

学外・学内活動、グループワークを通して、対人間力および状況を的確にとらえ適切な行動をとることのできる力を身に着ける。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

演習

[個人] プレゼンテーション／ワークシート

[ペア] ペアワーク

[グループ] PBL

[上記以外] グループワーク

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

レポートの提出、発表準備、資料の作成、小学校訪問の準備等、その都度指示する。（各 1.5 時間）

■授業の概要

- 第1講 オリエンテーション（ゼミの目標の確認と共有、活動内容・ルール説明等）
- 第2講 小学校放課後子ども教室におけるゼミ活動についてのオリエンテーション
- 第3講 効果的なプレゼンテーションの作り方
- 第4講 プレゼンテーション実践
- 第5講 発表用パワーポイント資料作成時に気を付けること
- 第6講 英語（自己紹介、初対面の人へのアプローチ法について学ぶ）
- 第7講 英語（英語を読む力を身に着ける）
- 第8講 英語（一分間スピーチの作り方、例、実践）
- 第9講 英語（TOEICの概要と演習）
- 第10講 英語（スモールトーク）
- 第11講 国際交流イベント準備（グループでイベント企画のアイデアを出す）
- 第12講 国際交流イベント準備（アイデアをより具体的にする、資料等の作成）
- 第13講 英語によるプレゼンテーション準備
- 第14講 英語によるプレゼンテーション
- 第15講 まとめと振り返り

■フィードバックの要領

課題等に対して行う。

■評価基準

評価 P（合格）：課題への取り組みの総合点が 60%以上である。

評価 F（不合格）：課題への取り組みの総合点が 59%以下である。

■評価方法

毎回の出席を前提とし、課題への取り組み（100%）で評価します。

■留意点

上記の授業概要、学習のポイント、詳細は暫定的なものであり、履修する学生の興味や目標に応じて授業内容、活動内容は変えていく予定です。

科目名 ホームゼミ (Seminars) 出原 至道**サブタイトル** 実装技術の習得**担当教員** 出原 至道**対象学年** 2年生以上**区分** 春・秋学期**■講義目的**

このゼミナールは、社会に出て通用するシステム構築能力を身につけることを目的とする。ゼミナール開始時のスキルは特に必要としないが、未知の領域に対する旺盛な好奇心、自発的学習能力、平均的な社会性・コミュニケーション能力については既に身につけていることを求める。2年次では、まず、手法を指定して機能を実現する練習を行い、その後、オリジナルなアイデアを自力で組み上げる段階に進む。講義時間は週1回であるが、この時間は基本的に、それまでに行った研究の発表の場である。作業時間は各自が別に確保すること。発表の場では、成果を全体で共有し、次回までの目標を明確にすることが求められる。作業はそれ以外の時間に各自行うことになる。積極的に外部に成果を応募・発表することを奨励する。目標とする代表的な場として、IVRC (日本)、Laval Virtual (フランス)、SIGGRAPH (アメリカ)、SIGGRAPH ASIA (日中韓など)がある。

■講義分類

社会人力育成/ビジネス ICT

■到達目標

プロジェクトベースでシステム開発能力を持つ社会人として、社会性・人間性を含めて評価される。「大学で何を勉強したか」ではなく「大学で何を生み出したか」を語ることができる。共通の目的を持つ他国の学生との交流を通じて、単なる言語や文化的興味にとどまらない、高いレベルの国際意識を身につける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

大学において実現する目標の計画を立て、必要なスキルを明確化する。

■授業形態 AL 手法 ※該当する項目のみ記載

演習

- [個人] プレゼンテーション
- [ペア] ペアワーク/相互教授法
- [グループ] PBL/KJ法
- [上記以外] なし

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

講義時間 (原則週1回) は基本的に、それまでに行った研究の発表の場である。作業時間 (毎回 1.5 時間以上) は各自が別に確保すること。発表の場では、成果を全体で共有し、次回までの目標を明確にすること。

■授業の概要

- 第1講 研究計画の発表と議論を行う。
- 第2講 研究発表と議論
- 第3講 研究発表と議論
- 第4講 研究発表と議論
- 第5講 研究発表と議論
- 第6講 研究発表と議論
- 第7講 研究発表と議論
- 第8講 研究発表と議論
- 第9講 研究発表と議論
- 第10講 研究発表と議論
- 第11講 研究発表と議論
- 第12講 研究発表と議論
- 第13講 研究発表と議論
- 第14講 研究発表と議論
- 第15講 研究発表と議論

■フィードバックの要領

毎週、次週への課題を支持する。期末には、休暇期間中の目標を指示する。

■評価基準

評価 P (合格) : F 以外

評価 F (不合格) : 以下のいずれかの場合: ・数値基準で 60 点未満・無断欠席・その他信義に反する場合

■評価方法

平常点 (60%)・期末レポート (40%) (絶対基準)。ただし、期末レポートへの取り組みに応じて、期末レポートの評価の一部を平常点によって評価することがある。

■留意点

学生の到達レベル・意欲によって、別の課題を与えることがある。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ホームゼミ (Seminars) 今泉 忠

サブタイトル データ分析

担当教員 今泉 忠

対象学年 2年生以上

区分 春・秋学期

■講義目的

近年、ビジネスにおける問題解決において、データにもとづく解決案提案は必須になってきている。また、当然、コンピュータを利用する場面が多くなってきている。本演習では、これを、「データ(もの)」という観点から見た場合のデータ分析法やモデル構成法について学ぶ。定量的データ処理能力および統計的分析手法を習得することを目標とする。統計的データ解析やデータマイニングや意思決定問題についても学ぶ。最終的には卒論の提出を行う。基礎知識の習得については履修者全員に必須とする。

■講義分類

社会人力育成/ビジネス ICT

■到達目標

ビジネス環境における課題・問題についてデータに基づいて問題解決を行えるようになることが目標である。
 ・統計的データ解析 主として、多変量解析の分野での手法を学ぶ。回帰分析、主成分分析、判別分析について習得する。
 ・データプレゼンテーション 解決案提案のためのプロセスにおいて、グラフ、チャート、センテンスを利活用して提案できるようになる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

産業界での出来事に関心を持ち、そこで発生するであろう問題や課題を発見したり、解決案をデータにもとづいて提案できる能力を修得する。そのために特に DP2 思考と判断と DP4 表現と技能に関して学修する

■授業形態 AL 手法 ※該当する項目のみ記載

演習

[個人] プレゼンテーション/ワークシート
 [ペア] なし
 [グループ] PBL/KJ法/マインド・マップ
 [上記以外] なし

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

表計算ソフトを使用するので、EXCEL のピボット計算を利用できるように、予習復習すること。(各 1.5 時間以上) また、統計ソフト R をインストールし、ゼミナールで使用できるようにすること。

■授業の概要

第1講 基礎知識の習得・学習するのに必要と考えられる基礎を学習する。
 第2講 基礎知識の習得・学習するのに必要と考えられる基礎を学習する。
 第3講 統計分析の基礎Ⅰ
 第4講 統計分析の基礎Ⅱ
 第5講 統計分析の基礎
 第6講 統計分析の基礎
 第7講 統計分析
 第8講 統計分析
 第9講 統計分析
 第10講 データの分析
 第11講 データの分析
 第12講 データの分析
 第13講 データの分析
 第14講 データの分析
 第15講 データの分析

■フィードバックの要領

ゼミ中でのリフレクションシートをもとにフィードバックを行う。

■評価基準

評価 P (合格) : 統計的データ分析の基礎を理解して、実際のデータを分析できるかどうか
 評価 F (不合格) : 上記要件を満たしていない場合

■評価方法

平常点 50%、演習レポートや発表 50%

■留意点

データコンペティションなど外部とのコンペティションに参加する

科目名 ホームゼミ (Seminars) 梅澤 佳子**サブタイトル** 課題解決型地域活動を通じて生活者の視点を磨き、実践知を鍛える**担当教員** 梅澤 佳子**対象学年** 2年生以上**区分** 春・秋学期**■講義目的**

本ゼミは文献研究とフィールドワーク、地域活動を3つの柱としています。3年間のゼミ活動を通じて、人生100年を豊かに生きるためのライフ・デザインの考え方を身につけ生活者としての視点、グローバルな視点を養い、課題解決能力を身につけることを目的としています。

■講義分類

ビジネス創造／社会人力育成／地域ビジネス

■到達目標

①文章の読解力、理解力、表現力、②コミュニケーション能力、③実践知、④社会力、⑤コミュニティデザイン、プロジェクトマネジメントの手法を身につけること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

社会の発展に貢献する力

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

演習

[個人] プレゼンテーション／ワークシート

[ペア] ペアワーク／ロールプレイ

[グループ] PBL

[上記以外] 上記以外なし

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5時間以上) 及び具体的な内容

地域・企業・行政・教育機関等と連携して活動を行っている為、PJチーム毎にミーティング、外部団体との打合せ、事前準備、事前・事後の活動(企画書・報告書・議事録等の作成)の時間(各回1.5時間以上)を必要とします。

■授業の概要

- 第1講 ホームゼミナールの目的、目標、仕組みの理解
- 第2講 ゼミ生による地域プロジェクト紹介
- 第3講 プロジェクトマネジメントの手法について学ぶ
- 第4講 今年度の各地域プロジェクト活動計画の立案
- 第5講 プロジェクトの進捗状況報告
- 第6講 多摩ニュータウンについて学ぶ①
- 第7講 多摩ニュータウンについて学ぶ②
- 第8講 各プロジェクトの活動報告、次回の企画内容の検討、ディスカッション
- 第9講 各プロジェクトの活動報告、次回の企画内容の検討、ディスカッション
- 第10講 各プロジェクトの活動報告、次回の企画内容の検討、ディスカッション
- 第11講 各プロジェクトの活動報告、次回の企画内容の検討、ディスカッション
- 第12講 各プロジェクトの活動報告、次回の企画内容の検討、ディスカッション
- 第13講 休暇中の地域活動に関する打合せ①
- 第14講 休暇中の地域活動に関する打合せ②
- 第15講 休暇中の地域活動についての最終確認

■フィードバックの要領

地域PBL型ALを通じて、常時、フィードバックを行います。

■評価基準

評価P (合格) : 地域連携型PLBへ積極的に参加し、積極的に役割を果たしていること。

評価F (不合格) : ゼミや地域活動の参加状況が著しく悪い。

■評価方法

- ・時間割におけるゼミの出席は前提条件です。
- ・平常点 (学内外におけるゼミ活動への意欲的な姿勢等) 50%
- ・課題提出 50%

■留意点

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ▶ ホームゼミ (Seminars) 大森 拓哉

サブタイトル ▶ 心理情報学

担当教員 ▶ 大森 拓哉

対象学年 ▶ 2年生以上

区分 ▶▶▶ 春・秋学期

■講義目的

生活する社会の中で、情報を的確に収集・分析することは必要不可欠である。本講義では人間行動の調査の方法の習得・データの収集・分析といった一連の流れを経験し、体得することを目的とする。同時に、人間行動のシミュレーションを各自がプログラムを作成することによって行う。最終的には、心理学、統計学、プログラミングの知識と技法を体得し、人間行動の理解とモデリング全般が行えることを目標とする。

■講義分類

ビジネス創造／社会人力育成／ビジネス ICT

■到達目標

人間行動全般の理解と、情報の処理方法、および物事の客観的な判断・意思決定ができること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

人間の情報処理の過程と仕組みを学び、高度な思考と判断能力を備える。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義／演習

- [個人] プレゼンテーション、ワークシート、T/Fテスト、問題作成
- [ペア] ペアワーク／相互教授法／ロールプレイ
- [グループ] PBL／ジグソー法／Buzz Group／KJ法／マインド・マップ
- [上記以外] なし

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

心理学・統計学の学習（各授業毎 1.5 時間以上の予習・復習）

■授業の概要

- 第1講 実験により、認知心理学・統計学を学ぶ。
- 第2講 実験により、認知心理学・統計学を学ぶ。
- 第3講 実験により、認知心理学・統計学を学ぶ。
- 第4講 実験により、認知心理学・統計学を学ぶ。
- 第5講 実験により、認知心理学・統計学を学ぶ。
- 第6講 実験により、認知心理学・統計学を学ぶ。
- 第7講 実験により、認知心理学・統計学を学ぶ。
- 第8講 実験により、認知心理学・統計学を学ぶ。
- 第9講 実験により、認知心理学・統計学を学ぶ。
- 第10講 実験により、認知心理学・統計学を学ぶ。
- 第11講 実験により、認知心理学・統計学を学ぶ。
- 第12講 実験により、認知心理学・統計学を学ぶ。
- 第13講 実験により、認知心理学・統計学を学ぶ。
- 第14講 実験により、認知心理学・統計学を学ぶ。
- 第15講 実験により、認知心理学・統計学を学ぶ。

■フィードバックの要領

毎回の授業内において、すべての課題等に対し個別にフィードバックを行う。

■評価基準

評価 P（合格）：各回のゼミ活動における課題の完成、および学期末での総合課題の完成・発表を行うこと
評価 F（不合格）：上記以外

■評価方法

平常点および各回の課題 50%、学期ごとの最終課題 50%

■留意点

SRC、ゼミ合宿への参加は必須である。

科目名	ホームゼミ (Seminars) 加藤 みずき		
サブタイトル	心理学をベースとした研究法を学ぶ		
担当教員	加藤 みずき	対象学年	2年生以上
		区分	春・秋学期

■講義目的

心理学の基礎的な知識や、データのとり方・分析法など、研究活動に必要な基礎的な知識を習得する。また、先行研究を参考にしながら個人あるいはグループで研究計画を立て、調査を実施しデータを実際に取って分析し、結果を解釈しまとめることを目指す。

■講義分類

社会人力育成

■到達目標

基礎的な心理学の知識に触れながら、主に調査法について学び、それらを活用した先行研究について理解できるようになる。統計的な分析法について学び、先行研究を参考にした調査計画に沿って調査データを収集し、適切に分析して結果を導き出すことができるようになる。得られた結果について解釈し、それをわかりやすく資料にまとめ他者に伝えることができるようになる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

自分の興味・関心に沿った研究計画を立案できるようになる。得られたデータについて目的に沿って分析し、結果を解釈できるようになる。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義/演習

[個人] プレゼンテーション/ワークシート

[ペア] ヘアワーク/相互教授法

[グループ] PBL

[上記以外] なし

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

予習+復習1.5時間。シラバス記載の事前、事後学習ポイントや授業で指示ことについては調べてくることが望ましい。また、調査実施や分析・発表準備などは授業時間外でも行うこと。

■授業の概要

- 第1講 ガイダンス
- 第2講 心理学における調査①
- 第3講 心理学における調査②
- 第4講 調査法について学ぶ①
- 第5講 調査法について学ぶ②
- 第6講 先行研究を参照し調査計画を立てる①
- 第7講 先行研究を参照し調査計画を立てる②
- 第8講 調査準備と分析方法の確認
- 第9講 調査実施と進捗状況報告①
- 第10講 調査実施と進捗状況報告②
- 第11講 調査データの分析と解釈①
- 第12講 調査データの分析と解釈②
- 第13講 調査結果の最終報告準備
- 第14講 最終報告会
- 第15講 振り返りと総括

■フィードバックの要領

基本的に授業内、もしくは翌週授業においてフィードバックを行う。

■評価基準

評価P(合格):各評価対象において、到達すべき水準に達している。

評価F(不合格):本講義で到達すべき水準に達していない。

■評価方法

平常点(50%):授業内課題への記入・提出など含めた参加点 発表(50%):研究結果の発表点(研究の実施とデータ分析、結果の解釈などを含む)

■留意点

グループでの活動を予定しているため、授業には積極的な参加を行うことが望ましい。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ホームゼミ (Seminars) 金 美徳**サブタイトル** 「経営・起業」と「情報・戦略」**担当教員** 金 美徳**対象学年** 2年生以上**区分** 春・秋学期**実務経験のある教員による授業****■講義目的**

①経営の知識や企業・業界・情勢の情報の収集・分析を通じて、就活力・働く力・経営戦略力・起業力を身に付ける。②学生が興味のあるテーマについて調べたり、関心をもてそうなテーマを探し出し、それを自らの専門・得意・強みとする。③プレゼン力、ディスカッション力、コミュニケーション力などのスキルを習得する。④ゼミ合宿、企業訪問、社会人との交流などの学外学習や国内外のフィールドワーク（現地調査）を通じて、多くの社会体験やネットワーク作りを行う。

■講義分類

ビジネス環境理解／ビジネス創造／社会人力育成

■到達目標

2年時は、各自の関心のあるテーマ・キーワード・業界・企業を探し出す過程を通じて、情報収集力や現地調査力を身に付ける。3年時は、各自のテーマについて分析力やグループディスカッション力を身に付ける。4年時は、各自のテーマについて伝える・表現する・プレゼンする力を身に付ける。また、得意や強みを明確にし、専門分野を確立する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

学生が設定したテーマにしたがって課題を発見し、その課題を体系的かつ実践的に解決できる課題解決力を修得する。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

演習

[個人] プレゼンテーション

[ペア] なし

[グループ] なし

[上記以外] インタビューと他己紹介

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5時間以上）及び具体的な内容

各自のテーマにしたがって書籍・資料・ニュース・時事情報の収集や現地調査を行う。（各授業毎 1.5時間以上の予習・復習）

■授業の概要

- 第1講 ガイダンス
- 第2講 各学生が興味・関心のあるテーマに関する情報を収集し、報告する。
- 第3講 各学生が興味・関心のあるテーマに関する情報を収集し、報告する。
- 第4講 各学生が興味・関心のあるテーマに関する情報を収集し、報告する。
- 第5講 各学生が興味・関心のあるテーマに関する情報を収集し、報告する。
- 第6講 各学生が興味・関心のあるテーマに関する情報を収集し、報告する。
- 第7講 各学生が興味・関心のあるテーマに関する情報を収集し、報告する。
- 第8講 各学生が興味・関心のあるテーマに関する情報を収集し、報告する。
- 第9講 各学生が興味・関心のあるテーマに関する情報を収集し、報告する。
- 第10講 各学生が興味・関心のあるテーマに関する情報を収集し、報告する。
- 第11講 各学生が興味・関心のあるテーマに関する情報を収集し、報告する。
- 第12講 各学生が興味・関心のあるテーマに関する情報を収集し、報告する。
- 第13講 各学生が興味・関心のあるテーマに関する情報を収集し、報告する。
- 第14講 各学生が興味・関心のあるテーマに関する情報を収集し、報告する。
- 第15講 各学生が興味・関心のあるテーマに関する情報を収集し、報告する。

■フィードバックの要領

レポートの報告や論文作成の進捗状況にしたがってフィードバックを行う。

■評価基準

評価P（合格）：平常点40%、報告30%、ディスカッション30%の合算点が60%以上の場合、合格とする。
評価F（不合格）：平常点40%、報告30%、ディスカッション30%が59%以下の場合、不合格とする。

■評価方法

平常点40%、報告30%、ディスカッション30%の割合で評価する。また、学外学習に参加した場合に加点する。

■留意点

ホームゼミでは、3年間、大学生活、学修、専門教育、留学、進路・就職・人生などの指導を行う。

科目名	ホームゼミ (Seminars) 木村 太一		
サブタイトル	会計学演習		
担当教員	木村 太一	対象学年	2年生以上
		区分	春・秋学期

■講義目的

議論の基本的な形に習熟し、会計学の基本的な考え方を理解する。

■講義分類

ビジネス環境理解

■到達目標

議論の基本的な形に習熟し、会計学の基本的な考え方を理解する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

輪読やディスカッションを通じて、「論理的」といわれる文章を読み、書くことができるように訓練する。会計学の基本的な考え方について、自らの意見を持てるようになる。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

演習

- [個人] プレゼンテーション
- [ペア] 相互教授法
- [グループ] マインド・マップ
- [上記以外] なし

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

輪読やディスカッションの準備

■授業の概要

- 第1講 輪読とディスカッション
- 第2講 輪読とディスカッション
- 第3講 輪読とディスカッション
- 第4講 輪読とディスカッション
- 第5講 輪読とディスカッション
- 第6講 輪読とディスカッション
- 第7講 輪読とディスカッション
- 第8講 輪読とディスカッション
- 第9講 輪読とディスカッション
- 第10講 輪読とディスカッション
- 第11講 輪読とディスカッション
- 第12講 輪読とディスカッション
- 第13講 輪読とディスカッション
- 第14講 輪読とディスカッション
- 第15講 輪読とディスカッション

■フィードバックの要領

輪読やディスカッションの状況を見て、適宜指導する。

■評価基準

評価 P (合格) : 毎回、輪読やディスカッションに積極的に参加した者を合格とする。

評価 F (不合格) : 輪読やディスカッションの参加に消極的な者を不合格とする。

■評価方法

輪読とディスカッション : 100%

■留意点

特になし

一般科目 1年生以上

一般科目 2年生以上

一般科目 3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ▶ ホームゼミ (Seminars) 清松 敏雄

サブタイトル ▶ 企業の会計情報の作成と利用

担当教員 ▶ 清松 敏雄

対象学年 ▶ 2年生以上

区分 ▶ 春・秋学期

実務経験のある教員による授業 ▶

■講義目的

ホームゼミナールでは、①就職までの間の自己の成長計画、その修正を繰り返し行う習慣付け、②会計情報の作成方法の理解と実践(日商簿記検定の受験)、③会計情報の利用方法の習得、④海外ゼミ合宿などを通じた視野の拡大、の4点を目的としている。

■講義分類

ビジネス環境理解/ビジネスマネジメント/社会人力育成

■到達目標

①自己の成長計画、その実践、その修正を繰り返し行う習慣を付けること、②会計情報の作成方法を理解し、日商簿記検定などに積極的にチャレンジすること、③会計情報の利用方法を習得すること、④海外ゼミ合宿などを通じて視野を拡大すること

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

簿記学習や会計情報の分析を通じて、現実の企業行動における課題の発見能力や、その対処に必要な思考能力を習得する。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

演習

[個人] ワークシート
[ペア] ペアワーク
[グループ] なし
[上記以外] なし

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

授業には前回授業時に示した課題をおこなった上で参加すること。(1.5時間以上)

■授業の概要

第1講 会計情報の作成と利用
第2講 会計情報の作成と利用
第3講 会計情報の作成と利用
第4講 会計情報の作成と利用
第5講 会計情報の作成と利用
第6講 会計情報の作成と利用
第7講 会計情報の作成と利用
第8講 会計情報の作成と利用
第9講 会計情報の作成と利用
第10講 会計情報の作成と利用
第11講 会計情報の作成と利用
第12講 会計情報の作成と利用
第13講 会計情報の作成と利用
第14講 会計情報の作成と利用
第15講 会計情報の作成と利用

■フィードバックの要領

毎回のゼミの中でディスカッションにおける発言等についてフィードバックを行う。

■評価基準

評価P(合格):到達目標に示した①~④について実践していること
評価F(不合格):授業に参加していない場合及び到達目標に示した①~④を実践していない場合

■評価方法

平常点(積極的に議論に参加していること等)100%。その他(ゼミ継続の条件)はゼミの時間内に説明する。

■留意点

科目名	ホームゼミ (Seminars) 久保田 貴文		
サブタイトル	データサイエンティストの養成		
担当教員	久保田 貴文	対象学年	2年生以上
		区分	春・秋学期

■講義目的

世の中にある様々な課題をビッグデータの解析により、さらに統計的に思考することにより解決することを目的とするデータサイエンスのゼミである。手法としては、以下を想定する。

- ・データの視覚化
- ・空間データと地図との連携による可視化
- ・SNS データを用いたネットワーク分析
- ・スマホアプリや Web アプリの作成

■講義分類

ビジネス ICT

■到達目標

自らデータ解析を行うことにより、世の中のさまざまな問題について解決を行うことが出来る。さらに、その方法について説明し、データやデータ解析の結果もしくは作成したアプリケーションによってその正当性を説明し説得することが出来る。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2 番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

データサイエンスに関する基礎的な学力を養い、グローバルとローカルの関連性を意識しながら産業社会で発生する様々な問題にデータ分析の結果をエビデンスとして対処してける専門的能力を体系的に修得する。

■授業形態 AL 手法 ※該当する項目のみ記載

講義

- [個人] プレゼンテーション／ワークシート
- [ペア] ペアワーク
- [グループ] なし
- [上記以外] なし

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

毎授業後には学修した内容をまとめ、また次回の学修内容についてデータ解析の準備を進めること。(1.5 時間+ 1.5 時間)

■授業の概要

- 第1講 オリエンテーション
- 第2講 データ分析のスキル
- 第3講 データ分析のスキル
- 第4講 データ分析のスキル
- 第5講 データ分析のスキル
- 第6講 データ分析のスキル
- 第7講 データ分析のスキル
- 第8講 中間の報告会
- 第9講 データ分析の結果をプレゼン
- 第10講 データ分析の結果をプレゼン
- 第11講 データ分析の結果をプレゼン
- 第12講 データ分析の結果をプレゼン
- 第13講 データ分析の結果をプレゼン
- 第14講 データ分析の結果をプレゼン
- 第15講 最終報告

■フィードバックの要領

ゼミの内容について、プレゼンや報告書のフィードバックを行う。

■評価基準

評価 P (合格) : データ解析により、さまざまな問題について解決できる。
 評価 F (不合格) : データ解析により、さまざまな問題について解決できない。データ解析すらできない。

■評価方法

ゼミ活動により作成した文書もしくはプレゼン資料。なお 15 回の出席 (もしくはそれと同等の活動) および次のいずれか 1 つを必須とする。統計グラフコンクールに出展もしくはデータ解析コンペへで発表。SRC で報告

■留意点

2 年生春学期はグラフコンクールへの出展 2 年生秋学期はデータ解析コンペへの参加・報告 3 年生春学期は SRC での報告 3 年生秋学期はデータ解析コンペへの参加・報告 4 年生春学期は卒業研究のテーマ決めと外部発表 (学会の大会・シンポジウム) 4 年生秋学期は卒論を最終到達目標とする。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ホームゼミ (Seminars) 小西 英行**サブタイトル** マーケティング基礎**担当教員** 小西 英行**対象学年** 2年生以上**区分** 春・秋学期**■講義目的**

本ゼミでは、マーケティングの基本をしっかりと学び、各種プロジェクトを通じて学んだマーケティングの実践を通じて、応用力を養います。小西ゼミの3つの柱 = ①ビジネス系資格取得、②社会人基礎力、③ゼミ生の親睦⇒就職活動に役立つスキルを磨きます!!
 ①ビジネス系資格取得：日商流通マーケティング（販売士）検定・日商簿記検定・秘書検定・ITパスポート、宅地建物取引士、⇒合格に向けサポートします!! ②社会人基礎力（ア）商工会議所等主催の、まちづくりコンペティションへの参加→企業とのタイアップによる、製品企画、販売実習など（イ）大学祭模擬店参加 ③ゼミ生の親睦（ア）春・夏のゼミ合宿（イ）各種親睦会：新ゼミ生歓迎会、忘年会、新年会、カラオケ、ボーリング etc

■講義分類

ビジネスマネジメント／社会人力育成／地域ビジネス

■到達目標

マーケティングに関する文献を毎年1冊以上読破して「マーケティング基礎知識」を理解するとともに、まちづくりコンペや大学祭模擬店等を通じて「マーケティング実践力」を身につけることを目標とします。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP3 関心と意欲 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

マーケティングの基礎知識に基づいて、ビジネス環境を理解し、判断することができる。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義／演習

- [個人] プレゼンテーション／ワークシート
- [ペア] ペアワーク
- [グループ] なし
- [上記以外] クリッカーによる問題演習

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

テキスト学習及びフィールドワークそれぞれにおいて、予習1時間以上、復習1時間以上が必要

■授業の概要

- 第1講 マーケティングとは何か
- 第2講 顧客価値と顧客満足
- 第3講 マーケティング戦略の構図
- 第4講 マーケティング環境の分析
- 第5講 消費者情報処理
- 第6講 購買行動
- 第7講 マーケティング・リサーチ
- 第8講 製品戦略
- 第9講 ブランド戦略
- 第10講 価格戦略
- 第11講 流通戦略
- 第12講 マーケティング・コミュニケーション
- 第13講 サービスマーケティング
- 第14講 リレーションシップ・マーケティング
- 第15講 ソーシャル・マーケティング

■フィードバックの要領

メールや個人面談にてフィードバックを行います。

■評価基準

評価 P（合格）：講義・合宿・模擬店等の全員活動への100%参加（欠席分はレポート等の課題）
 評価 F（不合格）：講義・合宿・模擬店等の全員活動への参加が100%未満（欠席はレポート等の課題）

■評価方法

平常点（100%）

■留意点

- ・私のゼミでは、これまでの成績は不問です。
- ・よく遊びよく学ぶ、個性的な学生の参加を期待します。
- ・3年間の大学生活を、とことん充実させましょう!!

科目名	ホームゼミ (Seminars) 小林 昭菜		
サブタイトル	海外の経済事情に強くなろう		
担当教員	小林 昭菜	対象学年	2年生以上
		区分	春・秋学期

■講義目的

グローバル化の時代を生き抜くための知識、教養をつけ海外の経済事情に強くなる。

■講義分類

顧客理解／社会人力育成／グローバルビジネス

■到達目標

本ホームゼミは、①社会生活を豊かに生きていける知識、教養を養う、②データ処理、分析能力をつける、③問題解決能力を身に着けるためのトレーニングを行う。ゼミ生には沢山のデータ、資料、本を読み、大事なところを自分の力で見つけ分析することを推奨する。研究は、各自で丁寧にしあげる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP5 高い志

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

各自の能力を最大限に発揮できるような環境を整える。学生同士のフィードバックを行う。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

演習

[個人] プレゼンテーション

[ペア] ペアワーク／相互教授法

[グループ] マインド・マップ

[上記以外] 教員とのディスカッションを実施し、研究考察を深めていく。

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上) 及び具体的な内容

2020年度のテーマは「年金」について。ゼミ生各自の関心のある国を一つ取り上げ、1年間その国の事情を毎週調査し、授業で発表、調査内容を積み上げていき資料の完成を目指す。

■授業の概要

- 第1講 オリエンテーション
- 第2講 研究計画の発表、研究の進捗状況の確認その1
- 第3講 研究計画の発表、研究の進捗状況の確認その2
- 第4講 研究計画の発表、研究の進捗状況の確認その3
- 第5講 研究計画の発表、研究の進捗状況の確認その4
- 第6講 研究計画の発表、研究の進捗状況の確認その5
- 第7講 研究計画の発表、研究の進捗状況の確認その6
- 第8講 研究計画の発表、研究の進捗状況の確認その7
- 第9講 研究計画の発表、研究の進捗状況の確認その8
- 第10講 研究計画の発表、研究の進捗状況の確認その9
- 第11講 研究計画の発表、研究の進捗状況の確認その10
- 第12講 研究計画の発表、研究の進捗状況の確認その11
- 第13講 研究計画の発表、研究の進捗状況の確認その12
- 第14講 研究計画の発表、研究の進捗状況の確認その13
- 第15講 これまでのまとめ。

■フィードバックの要領

学生同士、学生と教員とのディスカッションを通してフィードバックを毎週実施する。

■評価基準

評価P (合格)：総合評価が8割以上、課題の出来、発表態度、ゼミへの貢献。

評価F (不合格)：総合評価が50%未満、上記目的を達成できていない場合。

■評価方法

平常点：50%、発表：20%、課題：30%

■留意点

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ホームゼミ (Seminars) 小林 英夫**サブタイトル** 組織マネジメントと企業家精神**担当教員** 小林 英夫**対象学年** 2年生以上**区分** 春・秋学期**実務経験のある教員による授業****■講義目的**

本ゼミの目的は、ゼミ活動を通じゼミ生のキャリアの礎を築いていくことである。本ゼミは「組織マネジメント」を対象領域とする。その中で、「組織行動」と「企業家精神」の2つの分野を基本の研究対象としているが、人が社会で生きていく限り様々な組織との繋がりには欠かせないものであり、何らかの創造的活動を行っている。従って研究テーマはゼミ生の関心に応じて幅広く設定することを可能とするが、設定したテーマに対しては真剣に取り組むことを要求する。また、大学時代は人格形成においても人間関係形成においても非常に重要な時期である。ゼミはコミュニティとしての役割を果たすものであり、社会活動を学ぶ場としても位置付けられる。大学生活、ゼミ活動、設定したテーマに対する取り組みを通じて、良き人生を送るための土台を築くことを本ゼミの狙いとする。

■講義分類

ビジネス創造/ビジネスマネジメント/社会人力育成

■到達目標

- ・社会人としての仕事をしていく際に大切な常識と物事に対する真摯な取り組み姿勢を身に付ける。
- ・社会人として、課題を発見し問題解決を行っていくための方法、理論、科学を身に付ける。
- ・キャリア選択の判断基準ともなり、その選択肢を広げることに役立つ知識を身に付ける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP3 関心と意欲 DP5 高い志

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

知識獲得や問題解決の前提となる取り組み姿勢としての真摯さを重視して習得する。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義/演習

[個人] プレゼンテーション

[ペア] なし

[グループ] PBL

[上記以外] なし

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上)及び具体的な内容

事前アサインされた課題項目に対し学習してくるとともに、発表資料を準備してくること。ゼミ後には、発表内容への教員および他ゼミ教員からのコメントを取りまとめ、次回発表資料改善に活かすこと。(1.5時間以上の予習・復習)

■授業の概要

- 第1講 ゼミ活動の計画策定とメンバーの相互理解
- 第2講 研究計画書の立案と更新
- 第3講 ゼミ研究活動
- 第4講 前講に同じ
- 第5講 前講に同じ
- 第6講 前講に同じ
- 第7講 前講に同じ
- 第8講 前講に同じ
- 第9講 前講に同じ
- 第10講 前講に同じ
- 第11講 前講に同じ
- 第12講 前講に同じ
- 第13講 前講に同じ
- 第14講 前講に同じ
- 第15講 前講に同じ

■フィードバックの要領

ゼミナール活動全般に対し毎回のクラス内でコメントを行う。

■評価基準

評価 P (合格): 下記配点で 60 点以上を合格とする。

評価 F (不合格): 下記配点で 60 点未満を不合格とする。

■評価方法

平常点(ゼミ活動への積極的な取組姿勢と建設的意見や質問によるゼミの品質向上への貢献)、ゼミにおける発表内容や提出物の質を評価する。平常点(30%)、ゼミ活動への貢献(30%)、ゼミ発表、提出物(40%)

■留意点

木曜 5 時限に 4 時限にリレー講座を受講した近隣高齢者との交流を T-Studio2 階にてサロン形式で行う際の会場運営や近隣高齢者との交流を、ゼミ活動の一環として実施する場合がある。

科目名 ホームゼミ (Seminars) 齋藤 S. 裕美

サブタイトル 情報社会における倫理観やメディアリテラシー

担当教員 齋藤 S. 裕美

対象学年 2年生以上

区分 春・秋学期

■講義目的

現代社会において、情報倫理にかかわる問題の解決は急務の課題となっている。このゼミでは、情報モラルやセキュリティ、メディアについて、知識の修得、問題意識の醸成と問題の発見・分析、問題解決方法の考察を行うことを通じて、各個人の知的な判断に基づいて内的規制・自己統制が行なえるようにすること、すなわち知的論理に基づく判断能力を習得できること、情報社会に必要な倫理的態度とは何かを理解することを目標とする。また、ゼミを進めていく際に用いるグループディスカッションやブレインストーミング、KJ法、アンケート調査、資料調査、データ分析、レポート作成などを通じて、社会に出て必要となる基礎的理論や考える手法、文章力を身につけることも目標のひとつである。また、2月にはゼミ内研究発表会において、2、3年生はグループ研究の成果を、4年生は卒業研究の成果を発表する。

■講義分類

ビジネス環境理解/社会人育成/ビジネス ICT

■到達目標

①情報倫理の分野に関する知識の習得 ②情報倫理の分野に関する問題意識の醸成、問題発見・分析、問題解決方法の考察 ③グループディスカッション、ディベート、ブレインストーミング、KJ法、アンケート調査、資料調査、データ分析、論理的文章の論述ができる

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

情報倫理に関わる問題に対し、問題を発見し、その原因を分析し、問題解決に向けた自己の考えを他者に対して説明する能力を養う。また他者との意見交換を通じて新たな考えや解決方法を生み出せる能力を養う。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

演習

- [個人] プレゼンテーション
- [ペア] なし
- [グループ] Buzz Group/KJ法
- [上記以外] ディベート

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

報告準備、レジュメ作成、発表資料作成等適宜指示する課題について取り組むこと。(授業前後併せて3時間以上学習)

■授業の概要

- | | | |
|------|--------------------------------------|--|
| 第1講 | ゼミで学修する内容、到達目標など | |
| 第2講 | テキストの輪読やグループでのデータ分析、ディベート、個人研究などを行う。 | |
| 第3講 | テキストの輪読やグループでのデータ分析、ディベート、個人研究などを行う。 | |
| 第4講 | テキストの輪読やグループでのデータ分析、ディベート、個人研究などを行う。 | |
| 第5講 | テキストの輪読やグループでのデータ分析、ディベート、個人研究などを行う。 | |
| 第6講 | テキストの輪読やグループでのデータ分析、ディベート、個人研究などを行う。 | |
| 第7講 | テキストの輪読やグループでのデータ分析、ディベート、個人研究などを行う。 | |
| 第8講 | テキストの輪読やグループでのデータ分析、ディベート、個人研究などを行う。 | |
| 第9講 | テキストの輪読やグループでのデータ分析、ディベート、個人研究などを行う。 | |
| 第10講 | テキストの輪読やグループでのデータ分析、ディベート、個人研究などを行う。 | |
| 第11講 | テキストの輪読やグループでのデータ分析、ディベート、個人研究などを行う。 | |
| 第12講 | テキストの輪読やグループでのデータ分析、ディベート、個人研究などを行う。 | |
| 第13講 | テキストの輪読やグループでのデータ分析、ディベート、個人研究などを行う。 | |
| 第14講 | テキストの輪読やグループでのデータ分析、ディベート、個人研究などを行う。 | |
| 第15講 | テキストの輪読やグループでのデータ分析、ディベート、個人研究などを行う。 | |

■フィードバックの要領

活動の単元ごとに個別または全体に対するフィードバックを行う。

■評価基準

評価 P (合格) : ・積極的参加、意欲的取組み ・課題、レポートの内容、記述方法上記で60点以上
 評価 F (不合格) : 上記評価で評価点60点未満

■評価方法

期末レポート40%、期中のゼミ活動の状況、レポートや課題、発表など60%に参加態度などを加味して総合的に評価する。

■留意点

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名	ホームゼミ (Seminars) 彩藤 ひろみ		
サブタイトル	3DCG ゼミ		
担当教員	彩藤 ひろみ	対象学年	2年生以上
		区分	春・秋学期

■講義目的

3DCG をメインに、マルチメディアのスキルを高め、自己表現の手段として使えるようにする。また、プロジェクトを企画実践することにチャレンジする。個人発表もグループ発表も恐れなく、こなせるようになってもらいたい。キーワードは次のとおり。
問題解決のための科学 ビジネス ICT クリエイティブデザイン ユーザエクスペリエンス アプリ開発 IoT (INTERNET OF THINGS)

■講義分類

社会人力育成/ビジネス ICT

■到達目標

3DCG 技術以外の何らかの「スペシャリスト」になること。資格試験はいろいろあるので、各自目標をもって精進すること。3DCG 検定、色彩検定、マルチメディア検定

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2 番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

課題に対して新たな価値や解決方法を生み出せる創造力を修得する。

■授業形態 AL 手法 ※該当する項目のみ記載

演習

- [個人] プレゼンテーション
- [ペア] ヘアワーク
- [グループ] PBL
- [上記以外] なし

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

授業前には、Blender ソフトウェアを起動し、使い方に習熟してくること授業後は、プロジェクトの完成のために自ら努力すること (授業前後併せて 1.5 時間以上学習)

■授業の概要

- 第1講 アイスブレイク
- 第2講 プロジェクト発表
- 第3講 プロジェクト進行
- 第4講 プロジェクト進行
- 第5講 モーションコントロール
- 第6講 ポーズづくりと物理演算シミュレーション
- 第7講 キネクトと3DCG の関係を理解する
- 第8講 プロジェクト中間成果会の準備
- 第9講 プロジェクト中間発表
- 第10講 データ変換
- 第11講 プロジェクト進行
- 第12講 Unity ゲームアプリの作成
- 第13講 プロジェクト成果報告会
- 第14講 最終発表会準備
- 第15講 成果発表会

■フィードバックの要領

ゼミ活動については、すべての努力と成果に対してフィードバックを行う。

■評価基準

評価 P (合格): 目標に沿って、よく努力したかどうか
評価 F (不合格): 無断欠席の積み重ね。目標に到達できない。

■評価方法

平常の取り組み態度 50%、課題や発表など定められたアウトプット 50%程度の割合で、総合的に評価する。学期ごとに 2 回の発表会があり、そこでの作品発表を重視する。

■留意点

・普段から積極的にパソコンに親しみ、表現することが好きな人。使う楽しみを知っている人を求める。

科目名 ホームゼミ (Seminars) 佐藤 洋行**サブタイトル** クラウドサービスとデジタルマーケティング**担当教員** 佐藤 洋行**対象学年** 2年生以上**区分** 春・秋学期**実務経験のある教員による授業****■講義目的**

この先、企業のマーケティング活動で必ず重要なテーマとなってくる「クラウドサービス」と「デジタルマーケティング」。本ゼミでは、これら2つに関する知識と経験を得るべく、座学と実践を行う。グーグル・アマゾン・マイクロソフト、これら3社のクラウドサービスには、名前は違えども同じような機能が揃っているため、まずはそれらの機能を理解するところから始める。その後、実際に小売企業からデータを受託し、クラウド環境で分析を行い、施策を提言する機会をもらう。最終的には、これらの学習を通して、クラウドサービスとデジタルマーケティングに関するレポートをまとめてもらう。

■講義分類

顧客理解／社会人力育成／ビジネス ICT

■到達目標

物事に積極的に取り組む主体性や目的に向かって周囲の人を動かしていける巻き込み力、失敗を恐れずに粘り強く行動していける実行力を身につけ、国際的ビジネスの場で活躍するとともに、わが国の産業社会の健全たる発展に貢献できるようになるため、クラウドサービスとデジタルマーケティングについて実践的知識を獲得する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

マーケティングデータ分析に必要な知識を獲得するとともに、その結果のプレゼンテーションにより、データによる周囲の人々の説得に関する能力を習得する。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

演習

[個人] プレゼンテーション

[ペア] なし

[グループ] なし

[上記以外] 教員との1 on 1による研究進捗管理を行う

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

2年生:課題として与えられるSQLパズルを解く(各授業毎1.5時間以上の予習・復習)

3年生:クラウドサービスを利用した作業を宿題として課す(週3~4時間)

4年生:卒業論文の作成(各授業毎1.5時間以上の予習・復習)

■授業の概要

第1講	デジタルマーケティングの基礎①	概要編	1/2
第2講	デジタルマーケティングの基礎①	概要編	2/2
第3講	デジタルマーケティングの基礎②	広告編	1/2
第4講	デジタルマーケティングの基礎②	広告編	2/2
第5講	デジタルマーケティングの基礎③	CRM編	1/2
第6講	デジタルマーケティングの基礎③	CRM編	2/2
第7講	クラウドサービスの基礎①	概要編	1/2
第8講	クラウドサービスの基礎①	概要編	2/2
第9講	クラウドサービスの基礎②	実践編	1/2
第10講	クラウドサービスの基礎②	実践編	2/2
第11講	データ分析の基礎①	SQL基礎知識編	
第12講	データ分析の基礎②	SQL実践編	1/2
第13講	データ分析の基礎②	SQL実践編	2/2
第14講	まとめと復習		1/2
第15講	まとめと復習		2/2

■フィードバックの要領

授業中に適宜フィードバックを行う。

■評価基準

評価P(合格):クラウドサービスとデジタルマーケティングについて、意見をまとめられる

評価F(不合格):クラウドサービスとデジタルマーケティングについて、理解できていない

■評価方法

平常点50%、授業内で作成するレポート30%、授業外で課す課題20%

■留意点

必ずPCを持参すること。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ▶▶ ホームゼミ (Seminars) 佐藤 文平

サブタイトル ▶▶ スポーツを通じて社会を学ぶ。

担当教員 ▶▶ 佐藤 文平

対象学年 ▶▶ 2 年生以上

区分 ▶▶ 春・秋学期

■講義目的

スポーツマネジメント学び、スポーツの持つ力を活かせる人材育成。

■講義分類

顧客理解／ビジネスマネジメント／社会人力育成

■到達目標

自身の興味をビジネスに転換する力を養う。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2 番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

スポーツの価値を理解し、実践的理解を深め、今後の地域社会に寄与できるアイデアを創造する能力を育む。

■授業形態 AL 手法 ※該当する項目のみ記載

講義／演習

[個人] プレゼンテーション

[ペア] ペアワーク／相互教授法／ロールプレイ

[グループ] PBL／Ball-toss

[上記以外] なし

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

各回の予習課題には最低限 1.5 時間程度の学習が必要となる。さらに毎回の講義内容で学んだ事柄について積極的に知見を広げ、問題意識を深めるための復習として、1.5～2 時間程度の復習が必要となる。

■授業の概要

第 1 講 オリエンテーション

第 2 講 グループディスカッション①

第 3 講 調査①

第 4 講 調査②

第 5 講 発表①

第 6 講 調査③

第 7 講 調査④

第 8 講 フィールドワーク①

第 9 講 フィールドワーク②

第 10 講 調査⑤

第 11 講 発表②

第 12 講 論文執筆①

第 13 講 論文執筆②

第 14 講 論文執筆③

第 15 講 まとめ

■フィードバックの要領

毎講義における口頭でのフィードバック、論文に対するコメントのフィードバック。

■評価基準

評価 P (合格)：チームマネジメントができ、ゼミへの参加意欲がある。

評価 F (不合格)：ゼミへの参加意欲がない。

■評価方法

平常点 60%、フィールドワークおよび発表への参加 40%。

■留意点

本ゼミでは、チームワークの重要性を重じる。

科目名	ホームゼミ (Seminars) 椎木 哲太郎		
サブタイトル	社会経済政策 公共政策 歴史		
担当教員	椎木 哲太郎	対象学年	2年生以上
		区分	春・秋学期

■講義目的

社会経済政策、グローバル近現代史の視点から現代の社会・経済を分析し、直面する諸課題の解決に向けての方途を考究する。毎週のゼミでは、経済、産業・企業分析、時事・政治問題を中心として、プレゼンテーションと討論を通じたコミュニケーション能力の向上に主眼を置き、小レポートの添削による文章表現力強化を図る。そして、歴史を研究する。

*詳細は2016年度春学期、「ホームゼミⅢ」を参照

■講義分類

ビジネス環境理解／ビジネス創造／グローバルビジネス

■到達目標

ソシオ・エコノミストの眼と、企画・構想力を身に付ける。グローバルな視点とローカルな視座を合わせ持ち、(地球)社会の動向に対する理解を深め、考え抜く力を涵養し、諸課題に対して新たな価値や解決方法を生み出せる創造力、組織目標の達成に貢献する力を培い、高い志を抱いて社会の発展に積極的に関与していくことができるようにしたい。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

幅広い社会的関心を持ち、課題解決に向けた政策論的能力を修得することができる。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義／演習

[個人] プレゼンテーション

[ペア] なし

[グループ] なし

[上記以外] グループ討論 展示物作成の共同作業

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

毎週 1.5 時間以上の課題に副った十分な予習・復習を必要とする

■授業の概要

- 第1講 年間計画を立てる
- 第2講 研究計画書の検討
- 第3講 事業環境としての社会・経済 (1)
- 第4講 事業環境としての社会・経済 (2)
- 第5講 事業環境としての社会・経済 (3)
- 第6講 歴史研究
- 第7講 問題解決のための社会経済政策 (1)
- 第8講 問題解決のための社会経済政策 (2)
- 第9講 問題解決のための社会経済政策 (3)
- 第10講 中間発表
- 第11講 文献研究 (1)
- 第12講 文献研究 (2)
- 第13講 事例研究 (1)
- 第14講 事例研究 (2)
- 第15講 最終報告

■フィードバックの要領

レポート等を添削し、返却する。

■評価基準

評価 P (合格): ゼミへの取り組みが優れている、良い

評価 F (不合格): ゼミへの取り組みが不十分

■評価方法

平常点 80%、最終報告 20%

■留意点

欠席する場合は、当日昼休みまでに必ずメールで連絡すること

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ▶ ホームゼミ (Seminars) 志賀 敏宏

サブタイトル ▶ ホームゼミ

担当教員 ▶ 志賀 敏宏

対象学年 ▶ 2年生以上

区分 ▶ 春・秋学期

実務経験のある教員による授業 ▶

■講義目的

イノベーションで志を実現し、自分とまわりの人々を幸せにする人間となる。キャリアを考える。そのために、「イノベーション＝創新」を良く理解し、実現するための知識、意欲を身につける。結果として、自然に就職力、社会力の高い人材となる。

■講義分類

顧客理解／ビジネス環境理解／社会人力育成

■到達目標

①面白いと思えるテーマを見つける。②それについて、調べ、課題をみつけて、解決のアイデアを出す。③調べたこと、アイデアを、「社会人レベル」でプレゼンテーションする。以上により基礎学力、課題発見力、問題解決力、コミュニケーション力を高める。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP3 関心と意欲 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ③ ①・②で選択された事項の詳細

イノベーションに関する関心を高め、イノベーションに関する情報理解を深め、イノベーションに取り組む意欲を高める。イノベーションテーマの課題を発見し、解決のための創造力を養う。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

演習

[個人] プレゼンテーション

[ペア] 相互教授法

[グループ] KJ法

[上記以外] なし

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

毎回の活動記録、次回に向けての「調べもの」、プレゼン資料等の準備。時間の目安は 1.5 時間。課題に対してはフィードバックを行う。

■授業の概要

- 第1講 ガイダンス：当学期活動の基本方針や留意点について講義と意見交換
- 第2講 班・人ごとの活動計画立案と、ゼミ全体での「情報収集・処理・発表方法」等の学習 1
- 第3講 班・人ごとの活動計画立案と、ゼミ全体での「情報収集・処理・発表方法」等の学習 2
- 第4講 活動計画立案と全体学習
- 第5講 活動計画立案と全体学習
- 第6講 学外学習（そのための手配含む）と学習結果のまとめ
- 第7講 学外学習（そのための手配含む）と学習結果のまとめ
- 第8講 学外学習（そのための手配含む）と学習結果のまとめ
- 第9講 学外学習（そのための手配含む）と学習結果のまとめ
- 第10講 学外学習（そのための手配含む）と学習結果のまとめ
- 第11講 活動のまとめとプレゼン準備
- 第12講 活動のまとめとプレゼン準備
- 第13講 活動のまとめとプレゼン準備
- 第14講 活動のまとめとプレゼン準備
- 第15講 期末プレゼン

■フィードバックの要領

フィードバックは、口頭（授業中）、文書添削等（レポート、ノート）で行います。

■評価基準

評価 P（合格）：下記評価方法・配分で 60 点以上

評価 F（不合格）：下記評価方法・配分で 59 点以下

■評価方法

平常点 50 点。日常活動の努力と期末プレゼンへの貢献・成果（到達目標への達成度で評価）50 点。

■留意点

意欲、好奇心、行動力を最優先し、その上で工夫を大切にせるゼミです。面白いことのためなら「努力を惜しまない人」を求めます。そういう人が立派な社会人として羽ばたけるようになることを約束します。

科目名	ホームゼミ (Seminars) 下井 直毅		
サブタイトル	経済学を学ぶ		
担当教員	下井 直毅	対象学年	2年生以上
		区分	春・秋学期
■講義目的	この講義では、産業社会における基礎的な政治経済について学ぶ。その際、時事的な経済問題を取りあげ、経済学的に捉えて理解することをめざす。この演習を通じて、経済の表面的な動きに惑わされることなく、変化の本質を見る目が育ち、物事を考える力がついて問題解決ができるようになることをめざす。		
■講義分類	グローバルビジネス		
■到達目標	経済学的なものの考え方の修得をめざす。Word、Excel (マクロ関数を含めて) 等のソフトを活用できるようになることをめざす。		
■【ディプロマ・ポリシーとの対応】	① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項		
DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲			
■【ディプロマ・ポリシーとの対応】	③ ①・②で選択された事項の詳細		
ビジネスの中で最低限必要な基礎的な数学の思考力を基に、課題解決に向けたプロセスを明確にすることが出来る。			
■授業形態	AL手法	※該当する項目のみ記載	
演習	[個人] プレゼンテーション [ペア] 相互教授法 [グループ] KJ法 [上記以外] なし		
■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容	指定する書籍や論文を事前に読んでおくこと。その内容の復習と次回の準備には、1.5 時間以上の取組が必要です。		
■授業の概要	第1講 日本経済の歩み (I) 第2講 日本経済の歩み (II) 第3講 日本経済の成長 (I) 第4講 日本経済の成長 (II) 第5講 日本の経済政策 (I) 第6講 日本の経済政策 (II) 第7講 世界経済の歩み (I) 第8講 世界経済の歩み (II) 第9講 世界経済の成長 (I) 第10講 世界経済の成長 (II) 第11講 演習 (発表) (I) 第12講 演習 (発表) (II) 第13講 演習 (発表) (III) 第14講 演習 (発表) (IV) 第15講 演習 (発表) (V)		
■フィードバックの要領	レポートに対してコメントを記入して、フィードバックを行う。		
■評価基準	評価 P (合格) : ゼミに積極的に参加して発言し、経済学的なものの考え方を修得できている。 評価 F (不合格) : ゼミへの参加意欲が乏しく、経済学的なものの考え方が修得できていない。		
■評価方法	ゼミへの参加 (100%)		
■留意点			

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ▶▶▶ ホームゼミ (Seminars) 杉田 文章

サブタイトル ▶▶▶ スポーツやレジャーのマネジメントを通じて、社会に貢献する方法を模索する

担当教員 ▶▶▶ 杉田 文章

対象学年 ▶▶▶ 2年生以上

区分 ▶▶▶ 春・秋学期

■講義目的

この演習の目的として、2つのことをかかげたい。第1は、レジャーやスポーツ分野の職業を志望する学生を前提に、これらの分野で提供される製品（財やサービス）のうちの何を大切にすべきか、またそのためには、レジャー産業に関わるためにはどのような能力や知識が必要かについての全体的認識を育ててもらうことである。第2は、レジャー産業分野における経営を一つの社会現象と捉え、経済現象の一つのケーススタディとして、学習していくことである。これらの目的を達成するために、以下のような方法、内容によって演習を行う。

■講義分類

顧客理解／社会人力育成

■到達目標

ビジネスに従事する人として社会に対する行為的な態度と理解を持ち、社会に貢献する意欲や能力を持って社会に出ることが、最終的な到達目標である。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

社会への理解、洞察と、これに基づく意見表明、他者との調整などの力をはぐくむことを強く意図します。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

演習

- [個人] プレゼンテーション／ワークシート
- [ペア] ペアワーク／ノートテイキング＝ペア
- [グループ] PBL／Buzz Group
- [上記以外] なし

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

自分のメインテーマとなるものを発見し、課題を構造化し、他者にこれを説明できるようになるために、論理的整理と、これをプレゼンテーションする諸技法について学んでいく。（予習・復習 1.5 時間以上）

■授業の概要

- 第1講 ICE BREAK
- 第2講 研究・プロジェクト方法論①
- 第3講 研究・プロジェクト方法論②
- 第4講 研究・プロジェクト方法論③
- 第5講 研究・プロジェクト方法論④
- 第6講 研究・プロジェクト方法論⑤
- 第7講 研究・プロジェクトの実行①
- 第8講 研究・プロジェクトの実行②
- 第9講 研究・プロジェクトの実行③
- 第10講 キャリア学習①
- 第11講 キャリア学習②
- 第12講 キャリア学習③
- 第13講 プロジェクト例（フットサルのプロモーション）
- 第14講 プロジェクト例（フットサルのプロモーション）
- 第15講 外部への発表とその振り返り、総括

■フィードバックの要領

課題に対しフィードバックを行う。

■評価基準

評価 P（合格）：ゼミ内での活動を完遂し成果を上げた場合
評価 F（不合格）：上記のいずれかを満たしていない場合 F とする。

■評価方法

評価項目すべて満たした場合に P とする。総合評価となる。

■留意点

ゼミによる学習は、講義よりもより主体的、積極的な取り組みが重要となる。当事者意識を持って、同志となった他のゼミ生と互いに影響し合って成長するという強い意思を持った（またはそうなりたいたく強く望んでいる）学生の参加を希望します。

科目名	ホームゼミ (Seminars) 高橋 恭寛		
サブタイトル	日本の文化・伝統を学ぶ		
担当教員	高橋 恭寛	対象学年	2年生以上
		区分	春・秋学期

■講義目的

日本を飛び出してグローバルビジネスを手がけるにしても、地域で活躍するにしても、自分の足元について無自覚のままではいられません。日本を知るなかで自分の立ち位置に自覚することができるのではないのでしょうか。そのような学びを通過して社会人基礎力を身に付けていきましょう。

■講義分類

社会人力育成

■到達目標

資料を調べたり読んだりまとめていく資料整理と読解の力を身に付ける。また、まとめたことを言語化して理解してもらうようにする。また、資料読解をアウトプットのなかで、自らの立ち位置について考察を深めることができる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

資料を調べることで日本に関わる知識を広げ、それらアウトプット出来るようになることで、より深い学びを得ることができる。その知識を下敷きに自らを律することのできる人材となることを目指す。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義/演習

[個人] プレゼンテーション
[ペア] なし
[グループ] なし
[上記以外] なし

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上)及び具体的な内容

事前に提示した資料について内容をまとめてレジメしておく。また、指定した図書についてあらかじめ読解しておく。(各授業 1.5時間以上)

■授業の概要

- 第1講 オリエンテーション
- 第2講 文献の調べ方と選び方
- 第3講 個別事例について学ぶ①
- 第4講 個別事例について学ぶ②
- 第5講 資料調査と紹介①-1
- 第6講 資料調査と紹介①-2
- 第7講 個々のテーマについて報告①-1
- 第8講 個々のテーマについて報告①-2
- 第9講 課外調査①
- 第10講 課外調査②
- 第11講 個別事例について学ぶ③
- 第12講 個別事例について学ぶ④
- 第13講 個々のテーマについての報告②-1
- 第14講 個々のテーマについての報告②-2
- 第15講 まとめ

■フィードバックの要領

毎回提出させたものに対しての赤入れやコメントを付すかたちでフィードバックを行う。

■評価基準

評価 P (合格) : 課題として出した発表をおこない、提出物を出すこと。
評価 F (不合格) : 課題として出した発表をおこなわず、提出物も出さない。

■評価方法

課題報告 70%、提出物 30%

■留意点

なし

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ホームゼミ (Seminars) 丹下 英明**サブタイトル** 「グローバル化と地域産業・企業」研究室**担当教員** 丹下 英明**対象学年** 2年生以上**区分** 春・秋学期**実務経験のある教員による授業****■講義目的**

本ゼミでは、地域産業や中小・ベンチャーについて、研究していきます。具体的には、「グローバル化と地域産業・企業」を主なテーマとして、皆さんと学んでいきます。グローバル化が進む中で、地域産業や企業は、大きな変革を求められています。海外直接投資によって海外に進出する企業もあれば、国内からの輸出で海外市場開拓を目指す企業もいます。インバウンドによって需要が増加している地域産業もあれば、海外製品との競争激化によって、厳しい状況にある地域産業もあります。本ゼミでは、こうしたグローバル化によって、地域産業や中小・ベンチャー企業が直面する現状や課題を分析し、地域ビジネスやグローバルビジネスの今後の方向性を考えていきます。そのため、文献調査だけでなく、実際の現場に出て調査することを重視します。

■講義分類

ビジネス環境理解／グローバルビジネス／地域ビジネス

■到達目標

地域産業や中小・ベンチャー企業が直面する問題を自らの足で調べて発見し、その課題に対する解決策を提示する問題解決力を獲得することを目指します。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

ビジネスの中で最低限必要な基礎的な思考力を基に、課題解決に向けたプロセスを明確にすることが出来る。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

演習

[個人] プレゼンテーション

[ペア] ピア・レビュー

[グループ] PBL

[上記以外] なし

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

予習：ゼミで議論する企業や地域について、インターネットなどで概要を調べる（1.5時間）。復習：ゼミでの議論を踏まえて、報告書を作成する（1.5時間）

■授業の概要

第1講 オリエンテーション (1)

第2講 オリエンテーション (2)

第3講 事例研究によると地域産業、中小・ベンチャー企業の理解とPJ準備に向けたGW

第4講 事例研究によると地域産業、中小・ベンチャー企業の理解とPJ準備に向けたGW

第5講 事例研究によると地域産業、中小・ベンチャー企業の理解とPJ準備に向けたGW

第6講 事例研究によると地域産業、中小・ベンチャー企業の理解とPJ準備に向けたGW

第7講 事例研究によると地域産業、中小・ベンチャー企業の理解とPJ準備に向けたGW

第8講 フィールドワーク～地域産業・中小ベンチャー企業研究～

第9講 事例研究によると地域産業、中小・ベンチャー企業の理解とPJ準備に向けたGW

第10講 事例研究によると地域産業、中小・ベンチャー企業の理解とPJ準備に向けたGW

第11講 事例研究によると地域産業、中小・ベンチャー企業の理解とPJ準備に向けたGW

第12講 事例研究によると地域産業、中小・ベンチャー企業の理解とPJ準備に向けたGW

第13講 事例研究によると地域産業、中小・ベンチャー企業の理解とPJ準備に向けたGW

第14講 フィールドワーク～地域産業・中小ベンチャー企業研究～

第15講 まとめ

■フィードバックの要領

報告書など成果物に対して、講義内でコメントを行う。

■評価基準

評価 P (合格)：学外活動を含めたゼミ活動に主体的に参加し、問題解決力を獲得できた。

評価 F (不合格)：学外活動を含めたゼミ活動を5回以上無断欠席するなど、ゼミ活動に貢献できなかった。

■評価方法

平常点 100%

■留意点

・積極的に現場に出て、課題を自ら発見し、解決に向けて行動してください。ゼミのメンバーと一生仲良くし、人脈を築いてください。知識だけでなく、実際の問題解決力や思考力を身に付けてください。

科目名 ホームゼミ (Seminars) 趙 佑鎮**サブタイトル** 「環境と経営」の総合的理解／マーケティング知識と大局観の涵養**担当教員** 趙 佑鎮**対象学年** 2年生以上**区分** 春・秋学期**■講義目的**

本演習では「マーケティング」、「経営組織論」、「ベンチャー企業経営」、「流通」、「教養と歴史観」をテーマとして「環境と戦略」の具体的なケースを扱いながら企業経営の現実を理解することを目的とする。最前線事例としての具体的なケースをもとにグループディスカッション及び問題解決に関連するプレゼンテーションを通じて、経営における「智者は未萌にみる」とは何かを互いに意識できること（学生も教員に気づきを与える）を期待するものである。

■講義分類

顧客理解／ビジネス環境理解／ビジネスマネジメント

■到達目標

「環境と経営」の総合的理解・「マーケティング」・「ベンチャー企業経営」・「経営組織論」の3つのテーマにおける基礎知識の理解・学生と教員、ゲスト講演者（経営者等）との活発な発言、ディスカッションを通じてのコミュニケーション力の向上・教養知識と歴史観の涵養

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

マーケティング知識と大局をみる教養・歴史観の涵養を通じて、社会の問題発見と解決に関与していく高い志と社会変革への関心を確立する

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義／演習

- [個人] プレゼンテーション
- [ペア] ペアワーク
- [グループ] なし
- [上記以外] なし

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5時間以上）及び具体的な内容

ケーススタディー資料を授業前に読んでくる。授業前に同じグループの学生がゼミ時間外でミーティングし、協力してWORD,POWERPOINTを用いてレポート、プレゼン・発表資料をつくってこること（1.5時間以上学習）。

■授業の概要

- 第1講 オリエンテーション、ケーススタディー・ディベートとは
- 第2講 キャリアとは
- 第3講 やる気が出ることは、動機付け・官僚制
- 第4講 個人の自己実現とプロジェクトドライブ制度
- 第5講 松下幸之助と松下イズム
- 第6講 マーケティングコンセプトの実践
- 第7講 新製品開発のマーケティング
- 第8講 マーケティング組織論
- 第9講 流通とは何か
- 第10講 チャンネルの組織化とパワー関係
- 第11講 大規模小売業のケーススタディー
- 第12講 中小小売商業の問題
- 第13講 流通と公共政策
- 第14講 論文の書き方
- 第15講 総括

■フィードバックの要領

レポートに対し、コメントを記入してフィードバックを行う。

■評価基準

評価P（合格）：良好な受講態度とレポート・プレゼン資料提出、「環境と経営」の総合的理解
 評価F（不合格）：レポートの未提出、不誠実な受講態度の結果による不合格

■評価方法

平常点と授業態度（80%）（グループディスカッションとプレゼンテーション）＋小テスト（10%）＋レポート（10%）

■留意点

無断欠席は絶対不可

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ホームゼミ (Seminars) 中澤 弥

サブタイトル メディア研究

担当教員 中澤 弥

対象学年 2年生以上

区分 春・秋学期

■講義目的

今日の我々は多様なメディアに囲まれて生きている。本ゼミでは、特にマスメディアについて、その歴史的背景を探り、そのコンテンツ(内容)がどのような影響・効果を受容者に与えるのかを考えていく。マスメディアにおいては、我々は多くの場合受容者であるわけだが、単にコンテンツを消費するだけではなく、発信者(作者)からいかなる媒介(=これがまさにメディアである)を通して伝えられるのか、まずはそれを意識することが重要である。そしてそれぞれのメディアの特性を知り、その環境に着目することで、メディアを介したコミュニケーションの可能性を探る。

■講義分類

ビジネス環境理解/地域ビジネス

■到達目標

メディア研究の基礎をふまえ、対象となるコンテンツについて資料を読み込んだうえで課題を発見し、問題を提起できる。同時に、プレゼンテーションの方法を身に付け、自分の考えを論理的に文章化できる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP3 関心と意欲 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

メディアの特性を理解し、課題を分析した上で新たな価値や創造性を生み出す。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

演習

[個人] プレゼンテーション
[ペア] なし
[グループ] なし
[上記以外] なし

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

作品(コンテンツ)の解説。プレゼンテーション資料の作成。レポートの作成。(各授業毎1.5時間以上の予習・復習)

■授業の概要

- 第1講 メディアについて
- 第2講 メディア研究の方法1
- 第3講 メディア研究の方法2
- 第4講 メディア研究の対象を選ぶ
- 第5講 作品(コンテンツ)研究
- 第6講 個別のメディア研究
- 第7講 資料調査
- 第8講 資料調査の結果
- 第9講 フィールドワークの計画
- 第10講 フィールドワークの実施
- 第11講 プレゼンテーション資料の作成
- 第12講 プレゼンテーション
- 第13講 レポートのアウトラインの決定
- 第14講 レポートの作成
- 第15講 レポートの完成

■フィードバックの要領

レポートについて、フィードバックを行う。

■評価基準

評価P(合格):資料調査、フィールドワークを適正に行い、課題レポートが十分な内容となっている。
評価F(不合格):課題レポートが未提出、または十分な内容を備えていない。

■評価方法

資料調査・フィールドワーク 40% 課題レポート 60%

■留意点

科目名 ホームゼミ (Seminars) 長島 剛**サブタイトル** プロデュース力をつける**担当教員** 長島 剛**対象学年** 2年生以上**区分** 春・秋学期**実務経験のある教員による授業****■講義目的**

本ゼミのテーマはプロデュース力をつけること。ゼミの案内を作り、名刺作成をしたら、企業や行政の現場を回りながら、プロデュース力や課題解決力をつけていく。テーマ研究や地域研究を通して基礎を学び、イベントや企業との共同研究を通して実践力もつけていく。社会の最前線で、具体的なプロデュースをおこない企画力を試す。

■講義分類

ビジネスマネジメント／社会人力育成／地域ビジネス

■到達目標

社会に出たときに必要となるプロデュース力をつけること

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP3 関心と意欲 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

課題に対し、つなぐ力を活用したプロデュース力を習得する

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

演習

[個人] プレゼンテーション／ワークシート

[ペア] ペアワーク

[グループ] PBL

[上記以外] フィールドワーク

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5時間以上) 及び具体的な内容

企業や行政の企画案作りや事前資料づくりなど (各授業ごと2時間以上)

■授業の概要

第1講	テーマ研究、地域研究、イベント、つなぐカプロジェクトの実施
第2講	テーマ研究、地域研究、イベント、つなぐカプロジェクトの実施
第3講	テーマ研究、地域研究、イベント、つなぐカプロジェクトの実施
第4講	テーマ研究、地域研究、イベント、つなぐカプロジェクトの実施
第5講	テーマ研究、地域研究、イベント、つなぐカプロジェクトの実施
第6講	テーマ研究、地域研究、イベント、つなぐカプロジェクトの実施
第7講	テーマ研究、地域研究、イベント、つなぐカプロジェクトの実施
第8講	テーマ研究、地域研究、イベント、つなぐカプロジェクトの実施
第9講	テーマ研究、地域研究、イベント、つなぐカプロジェクトの実施
第10講	テーマ研究、地域研究、イベント、つなぐカプロジェクトの実施
第11講	テーマ研究、地域研究、イベント、つなぐカプロジェクトの実施
第12講	テーマ研究、地域研究、イベント、つなぐカプロジェクトの実施
第13講	テーマ研究、地域研究、イベント、つなぐカプロジェクトの実施
第14講	テーマ研究、地域研究、イベント、つなぐカプロジェクトの実施
第15講	テーマ研究、地域研究、イベント、つなぐカプロジェクトの実施

■フィードバックの要領

ゼミ、フィールドワーク、メール、LINEなどで都度フィードバックする

■評価基準

評価 P (合格) : ひとつでも多くの地域の人や団体をつなぎ、課題解決ができたかどうか

評価 F (不合格) : 途中で投げ出した場合

■評価方法

ゼミやフィールドワークの関わり方により総合的に判断

■留意点

特になし

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ▶ ホームゼミ (Seminars) 中庭 光彦

サブタイトル ▶ 都市・地域活性化研究

担当教員 ▶ 中庭 光彦

対象学年 ▶ 2年生以上

区分 ▶ 春・秋学期

実務経験のある教員による授業 ▶

■講義目的

都市・地域活性化、観光まちづくり等を専門的に学ぶ。地域活性化政策をリスク対策の手法と捉え、地域活性化、観光まちづくり、水文化、流通とモビリティ、大規模災害、の五領域で、課題検討、対策シナリオを政策として提案する。本ゼミでは、現地に行き、企業や行政への取材・調査を行い、リスク対応の複雑な現場を読み解き、現場に即した地域政策のシナリオプランニングを行う。

■講義分類

ビジネス環境理解／ビジネス創造／地域ビジネス

■到達目標

1. 個人研究をSRCで発表。
2. グループ研究をAL祭で発表。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

- ・知識、考え方を覚え理解できたか。
- ・知識、考え方を言葉で説明できるか。自分で長文情報を調査できるか。
- ・知識、考え方を社会の中で他の事例に応用できるか。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

演習

- [個人] プレゼンテーション
- [ペア] なし
- [グループ] PBL/KJ法
- [上記以外] なし

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

ゼミで課した課題を行う事。(1.5時間以上)

■授業の概要

- 第1講 ゼミの方針と進め方
- 第2講 研究計画書作成
- 第3講 研究計画書作成
- 第4講 グループ研究の研究計画作成
- 第5講 クリティカル・リーディング①
- 第6講 クリティカル・リーディング②
- 第7講 クリティカル・リーディング③
- 第8講 クリティカル・リーディング④
- 第9講 個人研究の発表指導①
- 第10講 個人研究の発表指導②
- 第11講 個人研究の発表指導③
- 第12講 グループテーマについて討議
- 第13講 グループテーマについて討議
- 第14講 グループテーマについて討議
- 第15講 まとめ

■フィードバックの要領

各学生に対し適時フィードバックを行う。

■評価基準

評価P (合格)：ゼミに積極的に参加し、個人研究、グループ研究の成果を残す。
評価F (不合格)：ゼミ参加が不十分で、個人研究、グループ研究の成果も不十分。

■評価方法

平常点：40％／個人研究：30％／グループ研究貢献度：30％

■留意点

科目名	ホームゼミ (Seminars) 中村 その子		
サブタイトル	地域企業と連携した 広告・宣伝・PR・情報発信ゼミナール		
担当教員	中村 その子	対象学年	2年生以上
		区分	春・秋学期

■講義目的

(活動内容) ラジオ番組企画と出演 ラジオコマーシャル研究・制作 映像・静止画コマーシャル研究・制作 ポスター、ビラやポップなどの広告印刷物研究・制作 ネーミングとキャッチコピーの手法を学ぶ 世界、そして地域をPRする=シティプロモーション、地方公共団体や非営利組織、福祉関連団体、ボランティア活動などの広報 マスコットキャラクターやアニメキャラクターによるセールスプロモーション活動 イベント活動と企業PRの関係を探る 上記に関連する懸賞やコンテストへの応募 コミュニティラジオ局やケーブルテレビ局など、広告に関連の深い企業の見学やインターンシップ その他企業や製品、サービスに関するPR活動全般に目を向ける 自分のアイデアを製品開発に結び付けるための研究とそのPR

■講義分類

顧客理解／ビジネス創造／社会人力育成

■到達目標

講義目的に書かれている項目において、関連する社会の現場で、自分の志を実現すべく、革新的で創造的な役割を果たして仕事をしていくことができるようになること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

自ら動くことのできる主体性や周囲の人を動かす巻き込み力、企画やアイデアを現実のものとする実行力をゼミ活動を通して身に付ける。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

演習

- [個人] プレゼンテーション／ワークシート
- [ペア] ペアワーク／ロールプレイ
- [グループ] PBL/KJ法
- [上記以外] なし

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5時間以上) 及び具体的な内容

毎週教員から告知される学習テーマについて基礎的な知識を検索しておくこと、また授業後は授業内容に関して自分の意見や提案、アイデアなどをまとめておくこと (プレゼンテーションできるようにしておくこと) (1.5時間以上)

■授業の概要

- 第1講 ゼミってなに？
- 第2講 コマーシャルとはそもそもなに？
- 第3講 営利活動とは関係のないコマーシャルもある
- 第4講 コマーシャルとことば力
- 第5講 世の中のすべてのものがPRになる可能性がある
- 第6講 ことば力で社会を動かせ〜キャッチコピーとネーミング
- 第7講 商品名と消費者への訴求効果
- 第8講 コマーシャルテクニックと人間力
- 第9講 人間がコマーシャルから受ける影響とその結果取る行動
- 第10講 ゼミナール活動とコンテスト、懸賞応募
- 第11講 自分のアイデアや企画、プロジェクトを効果的に情報発信する、プレゼンテーションする
- 第12講 人を引き付ける力とイベント企画運営
- 第13講 日本と海外のCM比較
- 第14講 行動経済学から見るコマーシャル
- 第15講 アイデアと商品企画

■フィードバックの要領

ゼミ活動の後には、その成果について学生と十分に話し合い、評価を伝える。

■評価基準

評価P (合格) : 上記活動項目について、十分な成果を出すこと
 評価F (不合格) : 上記活動項目について、成果が出せなかった場合

■評価方法

ゼミは毎回出席することがあたりまえである テストや授業内課題 20パーセント ゼミの教室内外での活動の成果 60パーセント レポート提出 20パーセント

■留意点

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ホームゼミ (Seminars) 西村 知晃**サブタイトル** 人材マネジメントと人事データ分析**担当教員** 西村 知晃**対象学年** 2年生以上**区分** 春・秋学期**実務経験のある教員による授業****■講義目的**

本ゼミは、人材マネジメントを通じて組織の経営に貢献するための知識・スキルを身につけることが目的のセミナーです。具体的には、人材マネジメントの理論（組織行動論・人的資源管理論）と人事データ分析の方法を習得します。まずは学内で理論とデータ分析について練習したのちに、実企業とのコラボレーションで調査・分析・プレゼンテーションのプロセスを実践していきます。

■講義分類

ビジネスマネジメント／社会人力育成

■到達目標

ホームゼミ1(2年生春学期)は、基礎的な人事データ分析を学びます。各種データ分析とその意義を理解できるようになることが到達目標です。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

- ・データを通じて、世のなかや組織のマネジメントについて多角的に捉え、何らかの示唆を見いだせるようになる。
- ・データや数値を用いて、資料作成やプレゼンテーションを行えるようになる。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

演習

- [個人] プレゼンテーション／ワークシート
- [ペア] ペアワーク
- [グループ] なし
- [上記以外] 特になし

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

使用する細かな Excel 関数については適宜指示するので、事前に予習して入力練習をしてくること。また、授業内で学んだ分析方法やデータ整形方法は必ず復習すること。

■授業の概要

- 第1講 人事データ分析①(表・グラフの作成、集計)
- 第2講 人事データ分析①(表・グラフの作成、集計)
- 第3講 人事データ分析①(表・グラフの作成、集計)
- 第4講 人事データ分析①(表・グラフの作成、集計)
- 第5講 ゲスト講義
- 第6講 ゲスト講義の復習
- 第7講 人事データ分析②(各種統計分析)
- 第8講 人事データ分析②(各種統計分析)
- 第9講 人事データ分析②(各種統計分析)
- 第10講 人事データ分析②(各種統計分析)
- 第11講 人事データ分析③(発展課題・分析編)
- 第12講 人事データ分析③(発展課題・分析編)
- 第13講 人事データ分析③(発展課題・分析編)
- 第14講 人事データ分析③(発展課題・発表編)
- 第15講 人事データ分析③(発展課題・発表編)

■フィードバックの要領

授業内または授業後に e-mail 等も利用しながら適宜フィードバックを行う。

■評価基準

評価 P (合格) : データ分析を十分に実施できる。最終報告内容が充実している。学習意欲が旺盛である。
 評価 F (不合格) : データ分析を十分にできない。最終報告内容が充実していない。学習意欲が不足。

■評価方法

①人事データ分析方法の理解度 40%、②最終プレゼンテーションの内容 30%、③授業中の学習姿勢・態度 30%

■留意点

- ・ゼミを欠席することなく、しっかりと授業の進行にキャッチアップしてください。
- ・授業内容を早々に理解できたゼミ生は、悩んでいる他のゼミ生をサポートし、ゼミ全員の理解が深まるように働きかけてください。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ホームゼミ (Seminars) 野坂 美穂**サブタイトル** 地域を元気にするための仕組みについて考え、活動する～地方創生に向けて～**担当教員** 野坂 美穂**対象学年** 2年生以上**区分** 春・秋学期**■講義目的**

本ゼミでは、フィールドでの活動と知識・理論の習得の双方を重視します。①フィールド(学外)での活動:主に地方創生をテーマとした活動、特に第一次産業(農業・林業・漁業)の振興を目指した活動を行います。活動後は、必ず「振り返り」を行います。②知識や理論の習得:基本的な経営学の文献を読み、問題を分析するための知識や枠組みを学びます。地方創生や地域活性化に関連する文献を輪読します。事例分析やディスカッションも行います。③研究手法の習得:フィールドでの調査方法の文献を読み、研究方法や現場での作法を学びます。実践として、フィールドでのインタビュー等を行います。④就職に向けた準備:働くことの意味(なぜ人は働くのか)や、基本的な社会人としてのマナー、新聞の読み方などを学びます。就職のための業界分析や企業研究も行います。

■講義分類

ビジネス環境理解/社会人力育成/地域ビジネス

■到達目標

①自ら進んで行動する「主体性」と、自分の頭で考えていることを形にする「表現力」を身につける。②ゼミの仲間や様々な地域の人々と共に活動することで、「協調性」や「対話力」を養う。③教室内で学んだ知識と教室外(地域等)で学んだ体験を結び付け、理解を深める。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP3 関心と意欲 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

地域で活動を行いながら、主体性や目的を持ち、地域の人々と共に課題解決に努める力、そしてリーダーシップや協調性を身につける。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

演習

- [個人] プレゼンテーション/問題作成
- [ペア] ペアワーク/ピア・レビュー
- [グループ] PBL
- [上記以外] なし

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

適宜、指示します。(各授業毎1.5時間以上の予習・復習)

■授業の概要

- 第1講 イントロダクション
- 第2講 フィールドで活動を行う上での心構えや注意点。振り返りについて
- 第3講 文献研究①
- 第4講 フィールドワークの方法と事前準備
- 第5講 文献研究②
- 第6講 フィールドワーク①(予定)
- 第7講 振り返り、新聞の読み方
- 第8講 地方創生に関するドキュメンタリーの視聴
- 第9講 フィールドワーク②(予定)
- 第10講 フィールドワーク③(予定)
- 第11講 振り返りと文献研究③
- 第12講 文献研究④
- 第13講 文献研究⑤
- 第14講 フィールドワーク④(予定)
- 第15講 前期の振り返り

■フィードバックの要領

提出したものについては、必ずコメント、アドバイスを添えて返却します。

■評価基準

評価P(合格):ゼミに貢献している。意欲を持って、ゼミの活動に取り組んでいる。
評価F(不合格):いかなる理由にせよ、5回休んだ場合は、不可とします。

■評価方法

平常点30%、成果物30%、グループワークやフィールドでの活動の貢献度40%

■留意点

ゼミは出席が全てです。欠席をするとチームのメンバーに迷惑がかかります。

科目名 ホームゼミ (Seminars) パートル**サブタイトル** 日本とアジアの「架け橋」になる次世代ビジネス・リーダー養成塾**担当教員** パートル**対象学年** 2年生以上**区分** 春・秋学期**実務経験のある教員による授業****■講義目的**

時代は今、「知」が重要視される知識情報社会となっており、膨大な情報の中から必要な情報を抽出して分析して、未来を洞察していくことが求められている。本ゼミでは、中国を含めた大中華圏を立体的かつ複眼的な視点で理解するための基礎的な知識の修得と産業界が求める問題発見・解決能力、高度なコミュニケーション能力を備えた「グローバル人材の育成」を念頭に置いた各種調査活動に基づいたプレゼンテーションおよびディスカッションを積極的に行う。

■講義分類

ビジネス環境理解／社会人育成／グローバルビジネス

■到達目標

春学期は、日本やアジアに関する時事問題を中心とした「Asian Weekly News (毎週)」、業界・企業研究に関する報告ができるようにし、日本をはじめ、大中華圏・アジア地域に関する知見を深める。秋学期は、グループワークを中心として各班で研究テーマを設定し、文献研究やフィールドワークを通じて情報の調査、収集、分析を行い、研究成果をAL発表祭もしくはSRCで発表できるようにする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①②で選択された事項の詳細

グローバル社会において最低限必要な基礎的なグローバルな知識と思考力を基に、現状を分析して課題の発見と解決に向けた構想力、計画力、課題に対して新たな価値や解決方法を生み出せる創造力を修得する。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

演習

[個人] プレゼンテーション

[ペア] ペアワーク／相互教授法／ピア・レビュー

[グループ] PBL

[上記以外] 学外活動 (留学・企業見学) 報告会を行う。

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

日頃から時事問題や関心を持つ特定の領域、業界や企業に関する情報の収集、分析、調査する習慣 (予習・復習に要する時間は各 1.5 時間以上) をつけ、問題の発見・解決力・コミュニケーション能力を身につける努力をすること。

■授業の概要

- 第1講 ガイダンス、個人面談。Microsoft Office の活用を強く推奨。
 第2講 ①時事問題・業界・企業研究の発表②ディカッションと総括③次回の実施事項の伝達
 第3講 ①時事問題・業界・企業研究の発表②ディカッションと総括③次回の実施事項の伝達
 第4講 ①時事問題・業界・企業研究の発表②ディカッションと総括③次回の実施事項の伝達
 第5講 ①時事問題・業界・企業研究の発表②ディカッションと総括③次回の実施事項の伝達
 第6講 ①時事問題・業界・企業研究の発表②ディカッションと総括③次回の実施事項の伝達
 第7講 ①時事問題・業界・企業研究の発表②ディカッションと総括③次回の実施事項の伝達
 第8講 ①時事問題・業界・企業研究の発表②ディカッションと総括③次回の実施事項の伝達
 第9講 ①時事問題・業界・企業研究の発表②ディカッションと総括③次回の実施事項の伝達
 第10講 ①時事問題・業界・企業研究の発表②ディカッションと総括③次回の実施事項の伝達
 第11講 ①時事問題・業界・企業研究の発表②ディカッションと総括③次回の実施事項の伝達
 第12講 ①時事問題・業界・企業研究の発表②ディカッションと総括③次回の実施事項の伝達
 第13講 ①時事問題・業界・企業研究の発表②ディカッションと総括③次回の実施事項の伝達
 第14講 ①時事問題・業界・企業研究の発表②ディカッションと総括③次回の実施事項の伝達
 第15講 ①今学期の総括②次の学期の実施方針について意見交換③個人面談の実施

■フィードバックの要領

毎回の報告に対しアドバイスを行うほか、提出されたレポートへのフィードバックも行う。

■評価基準

評価 P (合格): 総合点が 60 点以上で合格。

評価 F (不合格): 総合点が 59 点以下は不合格。

■評価方法

プレゼンテーション (30%)・ディスカッション (20%)、グループワーク (30%)、期末レポート (発表会) (20%) により行う。

■留意点

- ①ゼミのルール (課題提出期限など) を厳格に順守すること。
- ②ゼミ内での報告等はペーパーレスで行うため、Facebook と Line グループへの登録が必須。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ホームゼミ (Seminars) 初見 康行**サブタイトル** 「仕事・働くについて考える」**担当教員** 初見 康行**対象学年** 2年生以上**区分** 春・秋学期**実務経験のある教員による授業****■講義目的**

本講義の目的は、自分にとっての「仕事・働くとは何か」を探求していくことである。本目的を達成するために、主に (1) 文献調査、(2) インタビュー調査、(3) 就業体験 (インターンシップ) の3点を行っていく。これらの活動を通して、自分なりの仕事観、職業観、労働に対する姿勢 (スタンス) を養っていく。

■講義分類

ビジネス環境理解 / 社会人力育成

■到達目標

①文献調査や社会人へのインタビューを通して、「仕事・働くこと」を知る②インターンシップを通して仕事を疑似体験し、自分に合った職業選択ができる③自分にとっての「仕事・働くとは」を言語化することができる

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

講義を通して、「仕事・働くこと」に関する知識と理解を深めていく。社会人インタビューやインターンシップによって、自己の将来のキャリア選択に対する関心と意欲を養っていく。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義 / 演習

[個人] プレゼンテーション

[ペア] ヘアワーク

[グループ] なし

[上記以外] なし

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

仕事・働くことに関する参考図書を事前に読んでくる (1.5 時間) 講義・フィールドワーク後、そこでの学びを整理し、レポート等にまとめる (1.5 時間)

■授業の概要

- 第1講 ホームゼミ オリエンテーション
- 第2講 研究計画の立案・報告・更新①
- 第3講 研究計画の立案・報告・更新②
- 第4講 研究計画の立案・報告・更新③
- 第5講 研究計画の立案・報告・更新④
- 第6講 研究計画の立案・報告・更新⑤
- 第7講 研究計画の立案・報告・更新⑥
- 第8講 研究計画の立案・報告・更新⑦
- 第9講 研究計画の立案・報告・更新⑧
- 第10講 研究計画の立案・報告・更新⑨
- 第11講 研究計画の立案・報告・更新⑩
- 第12講 研究計画の立案・報告・更新⑪
- 第13講 研究計画の立案・報告・更新⑫
- 第14講 研究計画の立案・報告・更新⑬
- 第15講 研究計画の立案・報告・更新⑭

■フィードバックの要領

研究成果のレポートやプレゼンテーションに対して、適時フィードバックを行う

■評価基準

評価 P (合格): ①ゼミ発表 (60%) ②インターンシップへの参加 (40%) の合計が 60%以上を合格とする
 評価 F (不合格): ①ゼミ発表 (60%) ②インターンシップへの参加 (40%) の合計が 60%未満を不合格とする

■評価方法

①ゼミ発表 (60%) ②インターンシップへの参加 (40%)

■留意点

本ゼミを履修する学生は、夏季休暇・冬季休暇中にインターンシップに参加することが望まれる。

科目名	ホームゼミ (Seminars) 浜田 正幸		
サブタイトル	組織マネジメント、組織心理学		
担当教員	浜田 正幸	対象学年	2年生以上
実務経験のある教員による授業		区分	春・秋学期

■講義目的

産業社会で活躍する社会人を育成する。

■講義分類

ビジネス環境理解/ビジネス創造/社会人力育成

■到達目標

2年時は、ビジネスレポートを書くことができるレベル。またフィールドワークの手法を適切に使うことができるレベル。3年時は、組織運営ができるレベル。また就職活動と内定を獲得できるレベル。卒業時には、「社会人3年目」を目標とする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

社会人として必須の、高度な思考力と判断力を身につける。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

演習

- [個人] プレゼンテーション/ワークシート
- [ペア] ペアワーク/相互教授法/ピア・レビュー/ロールプレイ
- [グループ] PBL/Buzz Group/KJ法/マインド・マップ
- [上記以外] なし

■準備学習の時間(予習・復習等 1.5時間以上) 及び具体的な内容

毎回課題が出され、次回までに完遂しなければならない。(各授業毎 1.5時間以上) QCD は MUST である。

■授業の概要

- 第1講 ゼミナールの進め方説明 浜田ゼミナールの理念、行動規範の説明
- 第2講 組織マネジメントに関する知識、実践力、コンピテンシーを習得する
- 第3講 組織マネジメントに関する知識、実践力、コンピテンシーを習得する
- 第4講 組織マネジメントに関する知識、実践力、コンピテンシーを習得する
- 第5講 組織マネジメントに関する知識、実践力、コンピテンシーを習得する
- 第6講 組織マネジメントに関する知識、実践力、コンピテンシーを習得する
- 第7講 組織マネジメントに関する知識、実践力、コンピテンシーを習得する
- 第8講 組織マネジメントに関する知識、実践力、コンピテンシーを習得する
- 第9講 組織マネジメントに関する知識、実践力、コンピテンシーを習得する
- 第10講 組織マネジメントに関する知識、実践力、コンピテンシーを習得する
- 第11講 組織マネジメントに関する知識、実践力、コンピテンシーを習得する
- 第12講 組織マネジメントに関する知識、実践力、コンピテンシーを習得する
- 第13講 組織マネジメントに関する知識、実践力、コンピテンシーを習得する
- 第14講 組織マネジメントに関する知識、実践力、コンピテンシーを習得する
- 第15講 組織マネジメントに関する知識、実践力、コンピテンシーを習得する

■フィードバックの要領

授業、課題の提出、ゼミ活動、ゼミイベント等、都度フィードバックする。

■評価基準

評価 P (合格) : 授業全出席 MUST 浜田ゼミ公式イベントに全出席 課題の QCD を満たしている
 評価 F (不合格) : 上記要件を満たしていない場合

■評価方法

出席(授業、イベント) 60%、課題の QCD を 40%として評価する。

■留意点

ゼミの授業は無遅刻無欠席であること。その他のゼミ活動(ゼミ合宿、イベント等)も出席することが必須である。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ホームゼミ (Seminars) 松本 祐一**サブタイトル** ソーシャルビジネス・コミュニティビジネスの事業開発**担当教員** 松本 祐一**対象学年** 2年生以上**区分** 春・秋学期**実務経験のある教員による授業****■講義目的**

将来、創業・起業したい、お店をやりたい、地域や社会の問題を解決するビジネスをやりたい、NPOの事業をやりたい、企業で商品開発や新規事業開発に携わりたいという学生を対象に、事業開発に関する理論と方法を学ぶとともに、実際に様々なプロジェクトを企画運営しながら事業開発力を養う。

■講義分類

ビジネス創造/ビジネスマネジメント/地域ビジネス

■到達目標

事業開発に関する理論と方法を理解し、自分で事業をデザインできるようになること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

地域や社会の課題をとらえ、その解決のための仕組みを構想することができる。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

演習

[個人] プレゼンテーション/ワークシート

[ペア] 相互教授法

[グループ] PBL

[上記以外] なし

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

ビジネスプランのケース分析や自身のビジネスプラン作成(各授業毎1.5時間以上)

■授業の概要

第1講 2年生時:事業開発の基本とプロジェクトマネジメントの経験

第2講 3年生時:チームによるビジネスプランの作成

第3講 4年生時:卒業作品の制作

第4講 上記参照

第5講 上記参照

第6講 上記参照

第7講 上記参照

第8講 上記参照

第9講 上記参照

第10講 上記参照

第11講 上記参照

第12講 上記参照

第13講 上記参照

第14講 上記参照

第15講 上記参照

■フィードバックの要領

その時々アウトプットに対してコメント・評価する。

■評価基準

評価 P (合格):ゼミに積極的に参加、企画立案を独自の視点で行い、プロジェクトに積極的に貢献した。

評価 F (不合格):上記を達成できていない場合

■評価方法

課題等のアウトプットの質 30% 授業中やプロジェクト中の姿勢 40% チームワーク・リーダーシップ 30%

■留意点

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ホームゼミ (Seminars) 水盛 涼一

サブタイトル 世界経済と移民社会から現代日本を考える

担当教員 水盛 涼一

対象学年 2年生以上

区分 春・秋学期

■講義目的

中国、台湾、香港、澳門、シンガポール。いわゆる大中華圏で中国語を母語とする人々は14億人を超えます。これは英語(6億人)、インドのヒンディー語(5億人)、スペイン語(4億5千万人)、アラビア語(3億人)、そして日本語(1億3千万人)の母語話者をおさえ、世界で最大の話者人口です。高齢化の進む日本、必ずや大中華圏を中心とした諸外国との交流が必要になります。そのためにも異文化を視野に各種調査活動を行い、またプレゼンテーション・ディスカッションを行っていきます。なお今後の指針については「留意点」「配分」の項目をご覧ください。

■講義分類

社会力育成／グローバルビジネス

■到達目標

ゼミ生はそれぞれ「東アジア・東南アジア班」「南アジア・西アジア・アフリカ班」「ヨーロッパ班」「南北アメリカ班」に分かれます。月の前半は指定された課題に関するディベート・プレゼンテーションを行います。また月の後半は班活動の成果を班員一人ずつが発表し、またその地域の異文化に直接接するフィールドワークを行います。また秋学期のアクティブラーニング発表祭を意識し活動していきます。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

異文化を知れば「知識と理解」に繋がります。そして異文化を聴衆に平易に伝える「表現と技能」も習得できます。そして「社会における多様な価値観」への関与を目指すわけですから「高い志」という志に結びつきます。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

演習

- [個人] プレゼンテーション
- [ペア] ペアワーク
- [グループ] KJ法
- [上記以外] なし

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

担当する地域の時事問題にアンテナを張る必要があります。その情報を分析する処理能力、そしてその分析結果を周囲に伝えられるコミュニケーション能力の習得にも努力せねばならないでしょう。(各授業毎1.5時間以上の予習・復習)

■授業の概要

- 第1講 ゼミ開始ガイダンス
- 第2講 プレゼンテーション
- 第3講 グループ発表
- 第4講 フィールドワーク
- 第5講 プレゼンテーション
- 第6講 プレゼンテーション
- 第7講 グループ発表
- 第8講 フィールドワーク
- 第9講 プレゼンテーション
- 第10講 プレゼンテーション
- 第11講 グループ発表
- 第12講 フィールドワーク
- 第13講 ディベート
- 第14講 グループ発表
- 第15講 フィールドワーク

■フィードバックの要領

各班の重要な学修となるフィールドワークには、書面でのフィードバックを行います。

■評価基準

評価 P (合格) : 出席時の学修への参加程度 (50%)、グループ発表の内容 (50%) の総合が 60 点以上
 評価 F (不合格) : 出席時の学修への参加程度 (50%)、グループ発表の内容 (50%) の総合が 59 点以下

■評価方法

出席時の発表・質疑内容、グループ発表での班行動貢献・内容の良否、事後の A3 レポートの内容の良否によります。なお信憑書類のない2回の欠席により転ゼミも視野に入れた相談を行います。

■留意点

以下に全体方針を記します。①、2年春には在日外国人へのインタビューおよび異文化交流、それを踏まえた発表、そして指摘点を踏まえた再発表。②、2年秋には春内容に加えて在外公館への訪問。③、3年春には主に在外公館の訪問を行いつつ発表技術を高める。④、3年秋には春内容に加えて卒業研究への道筋をつける。(続きは web シラバスの「参考文献」へ)

科目名	ホームゼミ (Seminars) 村山 貞幸		
サブタイトル	イベントの企画・運営を通じてプロフェッショナルスキルと社会性を学ぶ		
担当教員	村山 貞幸	対象学年	2年生以上
実務経験のある教員による授業		区分	春・秋学期

■講義目的

プロフェッショナル・ビジネスパーソンに必要な社会性とスキルを獲得することで、ビジネスの高度な問題解決を行う能力を養う。それは、就職力向上にもつながり、厳しい就職活動に打ち勝つ能力を獲得することになる。本ゼミでは、「プロフェッショナル ビジネスパーソンを、「社会性を重視し、組織目標を圧倒的に優れた能力により達成する人」とする。そのために必要な能力は、社会性と社会人基礎力（前に踏み出す力、考え抜く力、チームで働く力）である。

■講義分類

顧客理解／ビジネス環境理解／ビジネス創造

■到達目標

衰退の危機に直面している日本伝統文化に関する地域イベント、社会的な大型イベント等を企画・運営することで社会性と社会人基礎力を獲得し、グローバル社会を理解し、考え抜く力、社会の発展に貢献する力、コミュニケーション力をベースとした組織貢献力を獲得し、高い志を確立する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP3 関心と意欲 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

実際の社会課題を発見し、その解決策を創造、さまざまな困難に直面しながら実行することを通じ、産業社会に求められる主体性、関係者を巻き込む力、そして絶対に諦めない実行力を修得する。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

演習

- [個人] プレゼンテーション
- [ペア] ノートテイキング=ペア/ロールプレイ
- [グループ] PBL/Buzz Group
- [上記以外] なし

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5時間以上）及び具体的な内容

ゼミで学習した内容を完全に理解するまで復習する。

■授業の概要

- 第1講 オリエンテーション
- 第2講 日本伝統文化1
- 第3講 日本伝統文化2
- 第4講 マナー
- 第5講 プロジェクトマネジメント
- 第6講 自己管理
- 第7講 プロフェッショナルの意味と意義
- 第8講 プロフェッショナル化の方法と事例
- 第9講 大型イベント企画、電話演習、子供イベントサポート
- 第10講 大型イベント企画、イベント先開拓電話、子供イベントサポート
- 第11講 大型イベント企画、子供イベントサポート
- 第12講 大型イベント企画、広報、子供イベントサポート
- 第13講 大型イベント実施、広報、子供イベントサポート
- 第14講 大型イベント企画、子供イベントサポート
- 第15講 総括

■フィードバックの要領

活動に関するフィードバックを面談により行う。

■評価基準

評価 P (合格) : 社会性レベルと社会人基礎力が成長した。
 評価 F (不合格) : 社会性レベルと社会人基礎力が成長していない。

■評価方法

平常点 100%

■留意点

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 ▶▶▶ ホームゼミ (Seminars) 良峯 徳和

サブタイトル ▶▶▶ 脳波を計測・分析して心の謎に挑戦する

担当教員 ▶▶▶ 良峯 徳和

対象学年 ▶▶▶ 2年生以上

区分 ▶▶▶ 春・秋学期

■講義目的

脳波計などの測定装置を用いることで、心の状態をある程度「見える化」できるようになった。心の状態を「見える化」することで、これまでの生活のあり方やビジネスの方法、コミュニケーションの方法などが変わる可能性がある。こうした可能性について、さまざまな実験を通じて、実践的に学ぶ。また BMI (Brain Machine Interface) を体験して、その実用化の可能性を実験を通して探求する。

■講義分類

ビジネス創造／社会人力育成／ビジネス ICT

■到達目標

①脳に関する基本的な知識の習得 ②脳に関する最新研究の事例調査 ③脳波計や皮膚電位計、心拍計などを使い、脳と心の状態を実験・計測する手順・方法を学ぶ。④実験計画策定→実験実施→実験結果の集計→考察→発表という一連の科学的研究方法を学ぶ。⑤グループワークでの協調性、積極的な発言力、実行力を身につける。⑥効果的なプレゼンテーション資料を制作する力をつける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ③ ①・②で選択された事項の詳細

脳波などの生体情報の測定方法を実践的に学ぶとともにデータ分析に関する基礎的な学力を養い、心に関わるさまざまな問題に脳科学、データサイエンスの観点から対処する能力を習得する。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

演習

[個人] プレゼンテーション
[ペア] ペアワーク
[グループ] なし
[上記以外] なし

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

実験においては、事前準備がきわめて重要である。メンバーは分担して、実験に必要な試料や実験計画の立案、実験装置の準備などを行う。こうした準備学習 (予習・復習) のため、1.5 時間以上かけること。

■授業の概要

- 第1講 ゼミの概要説明
- 第2講 脳の構造
- 第3講 大脳の構造と機能
- 第4講 大脳辺縁系と大脳基底核、脳幹、小脳の構造と機能
- 第5講 脳と視覚情報処理
- 第6講 脳と感情
- 第7講 脳と記憶
- 第8講 脳と体性感覚、皮膚感覚、触覚
- 第9講 脳波とは何か
- 第10講 脳波測定装置を実際に使ってみる
- 第11講 脳波測定による実験計画の策定
- 第12講 脳波測定実験 1
- 第13講 脳波測定実験 2
- 第14講 脳波測定実験 3
- 第15講 実験報告レポート

■フィードバックの要領

レポートや発表内容に対し、コメントを記入してフィードバックを行う。

■評価基準

評価 P (合格) : 積極的に参加し、プレゼンやデータ分析、実験準備などの役割をこなしている。
評価 F (不合格) : 上記基準を満たしていない場合。

■評価方法

課題や役割分担への取り組み、ゼミへの参加態度 60%、最終レポート 40%

■留意点

野外実習、ゼミ合宿、研究発表会には必ず参加すること。

科目名 ホームゼミ (志) (Seminars (Aspiration))**サブタイトル** 実践力養成のため「専門ゼミ」**担当教員** 趙,小林(英),大森,中村(有),椎木,高橋,増田,崎濱,関 **対象学年** 2年生以上**区分** 春・秋学期**実務経験のある教員による授業****■講義目的**

学生一人ひとりが興味、関心のあるテーマを選択し、専門分野のエキスパートである教員の指導・サポートを受けながら自主的に研究活動を行う。少人数グループでの討論、発表を通じてコミュニケーションとプレゼンテーションの能力を養うとともに、将来の生き方にもつながる「志」を培っていく。

■講義分類

ビジネス環境理解/ビジネス創造/社会人育成

■到達目標

志をもとに、社会における問題を専門分野の方法論にて解決できることを目標とする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP3 関心と意欲 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

複雑な経営環境と問題解決の手がかりを理論的に理解させ、各分野の専門の専任教員の講義とグループ討議を通じて、学生の高い志の確立につなげる。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

講義/演習

[個人] プレゼンテーション、ワークシート、T/Fテスト、問題作成

[ペア] ペアワーク/相互教授法/ピア・レビュー/ノートテイキング=ペア/ロールプレイ

[グループ] PBL/KJ法/マインド・マップ

[上記以外] なし

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

ホームゼミ所属にあたっては、各ゼミに関連する書籍を最低でも3冊程度読み、その概要を確認しておくことが望ましい。各授業の準備として、問題解決のための調べ物やそれを報告するための準備が必要(90分程度)。

■授業の概要

- 第1講 ガイダンス
- 第2講 コミュニケーション
- 第3講 問題解決の前提
- 第4講 問題発見
- 第5講 問題設定
- 第6講 問題分析1
- 第7講 問題分析2
- 第8講 問題分析3
- 第9講 問題分析4
- 第10講 問題解決1
- 第11講 問題解決2
- 第12講 問題解決3
- 第13講 まとめとディスカッション
- 第14講 まとめとプレゼンテーション
- 第15講 最終課題

■フィードバックの要領

複数の教員がレポートに対し、評価あるいはコメントを記入してフィードバックを行う。

■評価基準

評価P(合格):総合評価が60点以上であり、この講義の到達目標に達したと認められる場合

評価F(不合格):総合評価が60点未満で、この講義の到達目標に達していない場合

■評価方法

絶対評価にて評価を行う

■留意点

このシラバス(達成目標・評価基準・各々時間割)は例示であり、各教員によって内容は異なる。ホームゼミの内容・場所・時間については、教員に確認のうえ講義に望むこと。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 インターゼミ (Inter Seminars)**サブタイトル** 寺島学長ゼミ (社会学研究会)**担当教員** 高橋 俊夫 (SGS: 英語、英語、英語)、
高橋 俊夫 (SGS: 英語、英語、英語)**対象学年** 1年生(秋学期)以上**区分** 春・秋学期**実務経験のある教員による授業****■講義目的**

インターゼミ(寺島学長ゼミ)の目的は、学部生・大学院生・ゼミOB/OGなど40名と寺島学長をはじめとする本学2学部と大学院の教員15名が、現代社会の抱える課題について、塾形式で切磋琢磨しながら多様な要素や手法を組み合わせた柔らかい発想で、体系的・総合的な答を志向する総合設計力を身に付けることである。学生自身による課題の発掘・発見から仮説の提示、そして多様な要素の組み合わせによる問題解決へ至るプロセスの中で、寺島学長以下、学内の教員や社会で活躍する学外の専門家による付加価値を高め、創造的問題解決を志向する。12年目を迎えるインターゼミは、1年間で51論文を完成させた。テーマは、以下希望する分野・グループから選ぶこと。①多摩学、②アジアダイナミズム、③サービス・エンターテインメント、④AI、⑤地域活性化。

■講義分類

グローバルビジネス/ビジネスICT/地域ビジネス

■到達目標

①産業社会の持つ課題を発見し、解決へのアプローチを目指す論文を作成する。②選択したテーマについて、文献調査とフィールドワーク、考察と執筆を行い、1年後に論文を完成させる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

文献研究とフィールドワークを通じて課題発見力、課題解決に向けたプロセスを明らかにして準備できる計画力、課題に対して新たな価値や解決方法を生み出せる創造力を修得する。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

演習

[個人] プレゼンテーション

[ペア] なし

[グループ] PBL

[上記以外] なし

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

①各テーマに従って文献一覧を作成する(1時間)。②フィールドワークをアレンジする(1時間)。③年間スケジュールを作成する(1時間)。

■授業の概要

第1講 希望する分野・グループを選ぶ。

第2講 学長講話と自己紹介

第3講 グループ分け作業

第4講 グループの決定と詳細テーマの検討

第5講 学長講話と各グループの担当教員と学生からの進捗報告

第6講 学長講話とグループワーク

第7講 教員講話とグループワーク

第8講 グループワークおよびフィールドワーク

第9講 グループワークおよびフィールドワーク

第10講 学長講話と各グループの進捗状況報告

第11講 研究計画の発表と学長のアドバイス

第12講 学長講話と学長のグループ別指導

第13講 学長講話と学長のグループ別指導

第14講 学長講話グループワーク

第15講 春学期は箱根合宿(8月中旬)での中間発表。秋学期は最終発表と完成論文の提出。

■フィードバックの要領

論文作成の進捗状況に応じてフィードバックする。

■評価基準

評価P(合格):グループワーク貢献度、中間・最終発表の合算点が、60%以上であること。

評価F(不合格):グループワーク貢献度、発表の合算点が、59%以下の場合不合格とする。

■評価方法

グループワーク貢献度(50%)、中間および最終発表(50%)の割合で評価する。

■留意点

①欠席時は、必ず連絡すること。②授業開始時間は、16時20分であるが、原則16時に集合すること。③寺島学長の講演会やセミナーなどに積極的に参加すること。

科目名 アクティブ・ラーニング実践Ⅰ～Ⅷ (Active Learning PracticeⅠ～Ⅷ)**サブタイトル** ALプログラム**担当教員** 金 美徳**対象学年** 1年生以上**区分** 春・秋学期**実務経験のある教員による授業****■講義目的**

グローバル化や少子高齢化など社会の急激な変化や予測困難な時代において、生涯学び続け、主体的に考える力を持った人材は、受動的な学修経験でははぐくむことはできない。教員と学生とが意思疎通を図りつつ、学生自らが主体性を発揮し、周りの環境に働きかけを行い、そのなかでコミュニケーション能力を鍛えて、チームワークを発揮し組織による問題解決に貢献出来る社会人基礎力を備えた人材に成長するためには、課題解決型の能動的学修(アクティブ・ラーニング)が必要である。このアクティブ・ラーニング実践は、上記の趣旨で、教員が用意する学外や課外での体験活動などの事前学習・実践・事後学習を通じた主体的な学びのプログラムに参加し、単位取得に必要な時間の学修をし、社会人基礎力の向上があったと担当教員が認めるときに単位を付与する講義である。

■講義分類

グローバルビジネス/ビジネスICT/地域ビジネス

■到達目標

①主体的に「事前学習」に取り組む。②「実践」の場面においては、主体性を発揮し、周りの環境に働きかけを行い、そのなかでコミュニケーション能力を鍛えて、チームワークを発揮し組織による問題解決に貢献するように努力する。③主体的な活動の中で得られたものを「事後学習」の中で、自らの志の実現のためにどう活かしていくのかを整理する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

各種プログラムへの参加を通じて、課題発見力と課題解決力を修得する。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

演習

[個人] プレゼンテーション

[ペア] ペアワーク

[グループ] PBL/ジグソー法/BuzzGroup/KJ法

[上記以外] なし

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

受講者の能動的な学修が基本となる。事前学習・調査と事後学習は、22.5時間以上必要である。

■授業の概要

アクティブラーニング・プログラムは、39プログラム(2019年実績)を展開している。分野は、海外研修・留学導入、企業研究、地域研究、キャリア、知識・教養であり、それぞれのプログラム内容や実施時期などは、各担当教員が案内や説明会を行う。

■フィードバックの要領

事後学習を通じて、フィードバックを行う。

■評価基準

評価N(認定):アクティブラーニング・プログラムの「計画書」と「報告書」を提出すること。

評価F(認定せず):「計画書」と「報告書」の未提出や学修時間を確保できなかった場合は、認められない。

■評価方法

「アクティブ・ラーニング実践報告書」等に基づき能動的学修の達成時間で評価する。

■留意点

①アクティブラーニング・プログラムの説明会に参加し、どのような活動を行うのか、学修時間はどの程度になるのか、活動に要する負担は時間的な面、金銭的な面でどれくらいになるのかを確認してプログラムへ参加すること。②課外や学外でのプログラム参加に伴う費用は、大学から補助が出る場合を除き、受講者の負担となる。③事前学習、フィールドワーク、事後学習に必ず参加すること。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 AP 数学 (Advanced Practical Mathematics)**サブタイトル** ビジネス数学応用**担当教員** 大森 拓哉**対象学年** 1年生以上**区分** 春学期**■講義目的**

経営情報学部においては、複合領域での知識や技術の修得が必要となる。このような複合領域を対象とする分野で必要になるデータを扱う数学的手法の基礎について、演習と講義により身につけることが本講義の目的である。本講義では、課題を解決するためにどのようなデータの取り扱いをするとよいか、中学から高校1年程度の数学を基点として、問題解決方法の理解とそれを応用した問題解決演習を行い、産業社会において必要な数的・論理的処理力の基礎を完全習得する。

■講義分類

社会人力育成／ビジネス ICT

■到達目標

経営情報学部で学ぶ上での必要な数学の十分な能力が身につけているか。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

データを扱う技法の基礎を身につけることにより、高度な分析技能と結果の表現方法を習得する。

■授業形態 AL 手法 ※該当する項目のみ記載

講義／演習

[個人] ワークシート, T/Fテスト, 問題作成

[ペア] 相互教授法

[グループ] なし

[上記以外] なし

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

高校数学の知識を必要とするので、各回で取り扱う単元の事前学習（1.5 時間）を行うこと。各回で完答できなかった問題を中心に、課題の復習（1.5 時間）を行うこと。

■授業の概要

本講義は、1 年次ビジネス数学検定受講者のうち、中間テスト時点で合格した者のみが受講可能な講義であり、受講可能者は別途許可される。講義内容は、高校までの数学をベースに、経営情報学における基礎数学の学習と、その応用問題への適用を行い、数字（データ、エビデンス）に基づいた考察ができるようになるためのより実践的な問題解決方法を習得する。

■フィードバックの要領

毎回の授業内課題演習のチェック、中間・期末テストのフィードバックを行う。

■評価基準

評価 N（認定）：1 年次ビジネス数学基礎受講者のうち中間試験で検定合格かつ期末試験で合格した者

評価 F（認定せず）：期末試験で合格しなかった場合

■評価方法

平常課題点 50%、期末試験 50%

■留意点

①履修は許可制となる。②試験に対してフィードバックを行う。

科目名	スタディーアブロード I～VIII (Study Abroad I～VIII)		
サブタイトル	志を持って海外で活動する学生のための単位認定		
担当教員	パートル	対象学年	I 年生以上
実務経験のある教員による授業		区分	春・秋学期

■講義目的

原則として、大学が認定した海外活動（研修・留学・インターンシップ）に参加した学生が、研究・留学・インターンシップ先で取得した単位（活動時間など）を多摩大学の正規の単位として読み替えるための科目である。担当教員との事前面談、審査と事前学習、事後学習、成果報告が必須である。

■講義分類

ビジネス環境理解／社会人力育成／グローバルビジネス

■到達目標

①自分たちの意見、考え方をしっかりとした形で伝え、提案できる（発信）、②相手からの発信を正確に理解し、状況に応じて的確な処理が行える（受信）、③自分が必要な情報（WEB／論文をはじめとする資料や文献など）を検索し、内容を読み取って利用できる（情報理解）、④グローバリズムに対する正しい知識と、地球人として自分の志を実現するための社会における人間力、コミュニケーション力を海外での活動を通して身につける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

海外の活動先に対する理解を深めると共に、物事に積極的に取り組む主体性や目的に向かって、失敗を恐れずに粘り強く挑戦していきける実行力を身につけ、国際的ビジネスの場で活躍できるようになる。

■授業形態 AL 手法 ※該当する項目のみ記載

演習

【個人】 プレゼンテーション

【ペア】 ペアワーク／相互教授法／ピア・レビュー／ロールプレイ

【グループ】 PBL

【上記以外】 海外の大学生との交流を通じて多様な視点や意見に触れる。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

海外での単位認定を伴う活動のため、担当教員との面接、説明会や研修会への参加、事前学習・事後学習が必須。上記の準備学習に要する時間は最低 10 時間とする。

■授業の概要

経営情報学部認定留学プログラム、またはグローバルスタディーズ学部認定留学プログラムに参加し、この科目の単位を取得することができる。また、大学が認定した海外での社会的活動（インターンシップなど）で、顕著な成果をあげた学生、海外での国際交流活動や地域の国際交流活動に参加して、教員の認定を受けた学生の単位授与にも用いられる場合がある。この科目の単位取得に関係するプログラムに参加希望の学生は、T-NEXT 上に掲載される関連情報やお知らせを注意深くチェックし、指示が出たら、学生課国際交流担当者に必ずコンタクトを取り所定の手続きを行ったうえ、出発前教員と十分に相談をし、入念な準備をする必要がある。このコンタクトがない場合はプログラムに参加することはできない。留学先教育機関での単位認定を多摩大学の単位として読み替える。または海外での活動の内容を審査することにより、それにふさわしい単位数を原則として認定する。留学先教育機関の単位認定制度に原則として準じる。または、海外での活動内容を担当教員が審査、評価する。多摩大学の学生にふさわしい志をもって海外での活動に積極的に取り組んだかどうかが重視される。

■フィードバックの要領

海外活動に関する事前学習と事後報告の際に、適宜アドバイスと指導及び総括を行う。

■評価基準

評価 N（認定）：留学での活動先の成績認定に準じ、十分な成果を出したかどうかで単位を認定する。

評価 F（認定せず）：留学先のルールを遵守せず、活動も積極的に行わず、十分な成果を出さなかった場合。

■評価方法

海外での活動実績（取得単位数・活動時間など）70%、活動前後のレポート・報告 30%

■留意点

①海外での単位認定を伴う活動のための事前事後審査シートの記入、担当教員との面接、担当教員が必要と判断する研修見学への参加、活動報告会での発表、必要に応じて多摩大学ホームページ（海外 NOW など）への投稿。参加する社会的活動に関連したすべての書類と資料の提出。②提出された課題に対してフィードバックを行う。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 インターンシップ I・II (Internship I・II)**サブタイトル** 就職前に必ず受けておかなければならない「就業体験」**担当教員** 浜田 正幸**対象学年** 2年生以上**区分** 春・秋学期**実務経験のある教員による授業****■講義目的**

実際に社会で働く会社の人たちとの職業体験を通じて、「働く」ということを理解する。アルバイトとは全く異なる、「会社で働く」ということを実体験する。

■講義分類

社会人力育成

■到達目標

① 社会人としての基本的な行動ができるようになる（マナー、報連相）② 朝から夜まで、一つの仕事に集中して取り組むことができ、毎日それが続けられる ③ 社会人として認められる、最低限の仕事のレベルに到達する

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP5 高い志 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

社会人として世の中に貢献する志を持つ。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

演習

[個人] プレゼンテーション

[ペア] ロールプレイ

[グループ] PBL

[上記以外] 実習先の仕事・業務を試行する。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

事前講義に参加（10 時間）。事前講義の課題の作成（20 時間）。外部インターンシップイベントに参加（6 時間）。インターンシップ参加報告書の作成（6 時間）。インターンシップ報告会の参加（2 時間）。

■授業の概要

【要注意】秋学期の履修登録であるが、春学期に事前講義を実施する。春学期第 1 講「インターンシップ事前講義」で詳細を説明するので、必ず受講しなければならない。インターンシップ実習は次の 3 タイプとなる。

1. 自分で実習先を探して応募し、合計 3 日間以上の実習をする。2 単位。
2. 大学が実習先を紹介し、1 週間以上 2 週間未満の実習をする。2 単位。
3. 大学が実習先を紹介し、2 週間以上の実習をする。4 単位。
(週間とは、土日を除く平日を指す) 4 年間で 2 回の履修が可能である。実習タイプの組み合わせは制限がない。したがってタイプ 3 を 2 回履修した場合は合計 8 単位の取得が可能である。

■フィードバックの要領

実習評価を報告会でフィードバックする。また、担当教員から随時注意・指示する。

■評価基準

評価 N（認定）：事前講義、実習、報告会、提出物、すべて満たしている場合「認定＝N 評価」。

評価 F（認定せず）：要件を一つでも満たしていない場合「認定せず＝F 評価」。

■評価方法

平常点（事前学習ならびに報告会への参加等） 50%、実習 50%

■留意点

【要注意】秋学期の履修登録であるが、春学期第 1 講で詳細を説明するので、必ず参加しなければならない。

科目名 教育課程総論 (Curriculum)**サブタイトル** 教育課程改革の動向を把握し、情報科の単元指導計画を作成する**担当教員** 杉森 知也**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■教育職員免許法施行規則における科目区分**

教育の基礎的理解に関する科目

■教育職員免許法施行規則における各科目に含まれることが必要な事項

教育課程の意義及び編成の方法 (カリキュラム・マネジメントを含む。)

■講義目的

教育課程 (カリキュラム) の意義と、その編成方法・カリキュラム・マネジメントの重要性を理解し、また現代の日本の教育課程改革の動向とその課題について歴史的・国際的に把握した上で、その改善のために学校としてどのような対応ができるのかについて理解することができる。

■講義分類

社会人力育成

■到達目標

1. 教育課程編成の意義や編成の方法を理解することができる。2. 学習指導要領の変遷から、学力観の変遷を見出すことができる。3. カリキュラム・マネジメントの意義を、実践事例を通して理解することができる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

授業を構築するための基礎的な理解を獲得するとともに、学校現場で生起する課題に実例を踏まえて学校のマネジメントの重要性を把握する。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

授業を構築するための基礎的な理解を獲得するとともに、学校現場で生起する課題に実例を踏まえて学校のマネジメントの重要性を把握する。

[個人] プレゼンテーション

[ペア] なし

[グループ] Buzz Group

[上記以外] なし

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

事前学習の作業をおこない、メモ等を作成して持参する。また、事後学修を課す場合は、次回の授業にレポートを提出する。事前学修に 180 分、事後学修に 90 分程度を要する。

■授業の概要

- | | |
|------|---------------------------------------|
| 第1講 | 教育課程と学習指導要領の関係 |
| 第2講 | 学力低下問題と教育課程改革：キー・コンピテンシー、PISA 型学力とは何か |
| 第3講 | 学習指導要領の歴史的変遷と学力観①—戦後初期の教育実践とその批判 |
| 第4講 | 学習指導要領の歴史的変遷と学力観②—系統主義からの転換 |
| 第5講 | 教育課程編成の基本原則 |
| 第6講 | クロスカリキュラムと総合的な学習 |
| 第7講 | 「主体的・対話的で深い学習」の視点とカリキュラム・マネジメント |
| 第8講 | 学校評価とカリキュラムマネジメント |
| 第9講 | 教育課程総論 第8講科目のため空欄 |
| 第10講 | 教育課程総論 第8講科目のため空欄 |
| 第11講 | 教育課程総論 第8講科目のため空欄 |
| 第12講 | 教育課程総論 第8講科目のため空欄 |
| 第13講 | 教育課程総論 第8講科目のため空欄 |
| 第14講 | 教育課程総論 第8講科目のため空欄 |
| 第15講 | 教育課程総論 第8講科目のため空欄 |

■フィードバックの要領

次回の授業またはメールにて授業内容・コメントシート等へのフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 教員たるにふさわしい態度、参加意欲等を十分に発揮している

評価 A (89 ~ 80 点) : 教員たるにふさわしい態度、参加意欲等を発揮している

評価 B (79 ~ 70 点) : 講義に参加しているが、積極的な参加姿勢が十分ではない

評価 C (69 ~ 60 点) : 講義に参加しているが、理解度が十分ではなく、また提出物の提出についても遅滞が多い

評価 F (59 点以下) : 講義が理解できない、他者と協力できないなど、いずれか一つ以上に該当

■評価方法

事前・事後学修の課題メモ、レポートで 50%、授業での積極的な姿勢 50% で総合的に評価する。

■留意点

講義部分ではできる限り少なくし、学生の質問や意見交換を主な活動とするため、事前学習が必須である。また、自主的・積極的に発言することを望む。各個人はもちろん、互いに進捗状況等を報告しあう等の調整が必要である。なお履修人数等の状況によって、扱う回数の入れ替えを行う場合がある。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 教育原理 (Educational Principle)**サブタイトル** 幅広い「教育」という事象を科学する**担当教員** 杉森 知也**対象学年** 3年生以上※(2017年度以前入学生対象)**区分** 秋学期**■教育職員免許法施行規則における科目区分**

教育の基礎的理解に関する科目

■教育職員免許法施行規則における各科目に含まれることが必要な事項

教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想

■講義目的

人間の成長をより望ましい形に方向づけようとする「教育」は、幅広い諸科学と連携しながら理論化・体系化されている。こうして形成されてきた教育学の理論を概観し、教育を科学的にとらえる「眼」を養う。

■講義分類

社会人力育成

■到達目標

教育という現象を科学的にとらえるための知識と技術を身につける。(※取得可能な資格：高等学校情報科教諭免許)

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP2 思考と判断 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

教育学と人間の発達に関する基本的な知識と理解をもとに、自らの教育観・教職観・指導観等を幅広い視野から考え、見直し続ける判断力を身に付ける。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

教育学と人間の発達に関する基本的な知識と理解をもとに、自らの教育観・教職観・指導観等を幅広い視野から考え、見直し続ける判断力を身に付ける。

[個人] プレゼンテーション

[ペア] なし

[グループ] Buzz Group

[上記以外] なし

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

指定教科書の該当箇所を事前に読み、疑問点と自分なりの考察(意見)をもって授業に参加すること。不明な用語についてはweb、図書館の教育学辞典等で調べてくこと。事前学修に180分、事後学修に90分を要する。

■授業の概要

- 第1講 教育を科学する—教育とは何か—
- 第2講 教育にとって家族の果たす役割
- 第3講 教育環境としての地域社会
- 第4講 近代社会の成立と学校
- 第5講 公教育制度の展開とゆらぎ
- 第6講 学校の組織と文化
- 第7講 教育内容と教育方法
- 第8講 生徒指導と道徳教育
- 第9講 転換期における教育
- 第10講 子どもの育ちと生成としての教育
- 第11講 教育の構造と機能
- 第12講 教育の文化的基礎
- 第13講 教育学の系譜(1)—社会現象としての教育—
- 第14講 教育学の系譜(2)—現代教育学の流れ—
- 第15講 学習社会の成立と生涯学習

■フィードバックの要領

今回の授業またはメールにて授業内容・コメントシート等へのフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上) : 教員たるにふさわしい態度、参加意欲等を十分に発揮している
- 評価 A (89～80点) : 教員たるにふさわしい態度、参加意欲等を発揮している
- 評価 B (79～70点) : 講義に参加しているが、積極的な姿勢が十分ではない
- 評価 C (69～60点) : 講義に参加しているが、理解度が十分ではなく、また提出物の提出についても遅滞が多い
- 評価 F (59点以下) : 講義が理解できない、他者と協力ができないなど、いずれか一つ以上に該当

■評価方法

事前学習の取り組み50%(提出したメモの内容)、授業での積極的な参加姿勢50%を総合的に評価する。

■留意点

本講義は、受講生の主体的な働きかけで進めていくので、自主的・積極的に発言することなしには進まない。講義部分ではできる限り少なくし、学生の質問や意見交換を主な活動としたいので、事前学習が必須であることを自覚してほしい。なお、状況によって、講義内容や扱う回の入れ替えをおこなう場合がある。提出するメモに対してフィードバックを行う。

科目名 教育原理 (Educational Principle)**サブタイトル** 教育の原理と歴史的展開**担当教員** 齋藤 S. 裕美**対象学年** 1年生以上※(2018年度以降入学生対象) **区分** 秋学期**■教育職員免許法施行規則における科目区分**

教育の基礎的理解に関する科目

■教育職員免許法施行規則における各科目に含まれることが必要な事項

教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想

■講義目的

本講義は、教職に就く者として必要とされる公教育の理念と制度、教育課程の意義、教育に関する歴史及び思想についての基礎的な知識を習得し、教育の基本的原則や理論的基礎を理解することを目標とする。諸外国と日本の教育の歴史的展開と代表的な思想家の教育思想や教育実践についての基礎的な知識を習得し、歴史的事象と教育の間に関連を見出すことによって、現在の教育課題にも関連していることに気づき、教育を科学的に捉える視点を養う。

■講義分類

社会人力育成

■到達目標

教職に就く者として求められる教育観を養い、基本的な知識の習得をめざす。具体的には、次の4点をめざす。①公教育の理念について、歴史的経緯等を踏まえて理解する、②教育の原理や教育観、子ども観の変遷について理解する、③諸外国の教育史および代表的な思想家の教育思想や教育実践について理解する、④学校教育の目的や理念、方法など近代以降の日本の公教育制度の整備の歴史と戦後の学校教育の原理を理解する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP5 高い志

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

教育の原理、教育観や子ども観の変遷、公教育の理念や制度を学び、歴史的事象と教育の間の関連を見出し、教育の本質を理解できる能力を養う。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

教育の原理、教育観や子ども観の変遷、公教育の理念や制度を学び、歴史的事象と教育の間の関連を見出し、教育の本質を理解できる能力を養う。

[個人] 問題作成

[ペア] なし

[グループ] Buzz Group

[上記以外] なし

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5時間以上) 及び具体的な内容

前講までの資料をよく読んでおくこと。各講で取り扱う時代について、世界史の教科書や教育学事典等で時代背景を確認しておくこと。必要な予習・復習時間は各1.5時間程度(合計3時間程度)である。

■授業の概要

- 第1講 教育の原理
- 第2講 古代ギリシア～中世ヨーロッパの教育
- 第3講 17～18世紀ヨーロッパの教育
- 第4講 近代社会の成立と教育
- 第5講 近代公教育制度の発達
- 第6講 19世紀の教育思想
- 第7講 新教育運動
- 第8講 日本の近世までの教育
- 第9講 近代教育制度の創始
- 第10講 公教育制度の整備と近代日本の教育方法の発達
- 第11講 第二次世界大戦前後の教育
- 第12講 系統主義と経験主義
- 第13講 教育の現代的課題①
- 第14講 教育の現代的課題②
- 第15講 教育の現代的課題③

■フィードバックの要領

最終講義等で全体に対してフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : 到達目標①～④を関連づけ、自分の考察を含めて的確に説明できる。

評価 A (89～80点) : 到達目標①～④を個別に、自分の考察を含めて説明できる。

評価 B (79～70点) : 到達目標①～④のうち2つ以上の内容を説明できる。

評価 C (69～60点) : 到達目標①～④のうち1つ以上の内容を説明できる。

評価 F (59点以下) : 講義内容について著しく理解が不足している。

■評価方法

期末レポート 50%、期中の課題 50%。

■留意点

状況によって、講義内容や扱う回の入替えを行う場合がある。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 教育実習 (Practice Teaching)**サブタイトル** 学校教育インターン**担当教員** 大森 拓哉**対象学年** 4年生**区分** 春・秋学期**■教育職員免許法施行規則における科目区分**

教育実践に関する科目

■教育職員免許法施行規則における各科目に含まれることが必要な事項

教育実習 (学校インターンシップ (学校体験活動) を含む。)

■講義目的

本講義は、教育実習の前後に行う指導である。事前に、教育実習の意義、実習上の留意事項、授業の見方、授業の実施方法、実習校とのかかわり方などについて講義するとともに、模擬実習を組み込んで2週間～3週間の教育実習の指導・助言を図る。実習後には、実習体験の整理の方法などについてふれる。その際に、教育実習が単に教える技術を学ぶ場だけではなく、主体的に行動し人間関係を創ってゆく総合的な体験の機会であったことを思い起こし、この体験を通じて得た自信を今後の社会人としての生活に生かせるように総括する。

■講義分類

ビジネスマネジメント/社会人力育成/ビジネス ICT

■到達目標

教職に就く者として求められる教育実習について、講義技法と教育者としての態度を身に付け、基本的な知識の修得をめざす。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP5 高い志

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ③ ①・②で選択された事項の詳細

教育実習を通して、指導の方法、クラスマネジメント、およびこれまでの教職授業で得た知識を実践の場で生かすことを試みる。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

教育実習を通して、指導の方法、クラスマネジメント、およびこれまでの教職授業で得た知識を実践の場で生かすことを試みる。

[個人] プレゼンテーション/問題作成

[ペア] 相互教授法/ロールプレイ

[グループ] なし

[上記以外] なし

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

実習にあたっての事前準備として、学習指導案作成、教材研究等を行うので、関連書籍の熟読を必要とする (20 時間)。授業時に提示するプレゼンテーション課題 (模擬授業) についても万全な準備をする (25 時間)。

■授業の概要

第1講 事前学習 1

第2講 事前学習 2

第3講 事前学習 3

第4講 事前学習 4

第5講 事前学習 5

第6講 事前学習 6

第7講 教育現場実習

第8講 教育現場実習

第9講 教育現場実習

第10講 教育現場実習

第11講 教育現場実習

第12講 教育現場実習

第13講 教育現場実習

第14講 事後学習 1

第15講 事後学習 2

■フィードバックの要領

事後指導および事後報告会を行い、詳細な検討・分析を行う。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 講義内容を完全に理解できている

評価 A (89 ~ 80 点) : 実習に行く準備・実習後のまとめがきちんとできている

評価 B (79 ~ 70 点) : 講義内容が理解できている

評価 C (69 ~ 60 点) : 最低限の理解ができている

評価 F (59 点以下) : 講義科目の履修目標に達していない

■評価方法

全演習 50%・全課題 50%

■留意点

①本講義は教育実習及び教員免許法で定められているその前後の1単位分の事前・事後指導を行う。②事前授業は教育実習前(事前)の指導に必要な準備をする。また教育実習後(事後)に、主体的に行動し人間関係を創ってゆく総合的な体験を思い起こし、この体験を通じて得た自信を今後の社会人としての生活に生かせるように総括する。③本講義は集中授業であるため実施日は別途連絡する。④課題に対してフィードバックを行う。

科目名 教育心理学 (Educational Psychology)**サブタイトル** 学校教育・社会人教育における心身の発達および学習の心理学**担当教員** 大森 拓哉**対象学年** 3年生以上**区分** 春学期**■教育職員免許法施行規則における科目区分**

教育の基礎的理解に関する科目

■教育職員免許法施行規則における各科目に含まれることが必要な事項

幼児、児童及び生徒の心身の発達及び学習の過程

■講義目的

教育心理学とは、人間の「教える」「学ぶ」という営為について、心理学の観点から科学的に理解・考察する学問である。この講義の目的は、心理学の研究から得られた知見や技術を教育活動の場に応用することによって、教育という活動を社会において効率的・効果的に行えるようにすることである。

■講義分類

社会人育成／ビジネス ICT

■到達目標

教育・発達について、心理学的な観点から科学的に理解し、一般社会における学校教育・社会教育においても本講義で学んだ知見を応用できるようにすることを目標とする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP3 関心と意欲 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ③ ①・②で選択された事項の詳細

教育効果、モチベーションの増幅、心理発達支援、等を理解することにより心の理解をした上での教育を行うことが可能となる。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

教育効果、モチベーションの増幅、心理発達支援、等を理解することにより心の理解をした上での教育を行うことが可能となる。

[個人] プレゼンテーション

[ペア] ヘアワーク

[グループ] PBL

[上記以外] 橋本メソッドによりグループワークを実施する。

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

毎回のトピックスに関して、参考図書等の当該部分を事前に読しておくこと (1.5 時間)。また、授業内で取り扱った内容について、自分自身の経験を踏まえた考察をまとめておくこと (1.5 時間)。

■授業の概要

- 第1講 教育心理学とは何か
- 第2講 教育と発達
- 第3講 認知発達
- 第4講 学習理論
- 第5講 教授・学習過程
- 第6講 意欲と動機づけ
- 第7講 パーソナリティ・個人差
- 第8講 個に応じた学習指導
- 第9講 集団における人間関係
- 第10講 言語の発達
- 第11講 数概念の発達と算数・数学の学習
- 第12講 知能と学力
- 第13講 教育評価
- 第14講 ライフスキルを高める教育
- 第15講 心身発達と多様な学びとの関連性の展望とまとめ

■フィードバックの要領

講義内課題提出、前回授業内課題の振り返りと教師からの個別コメント等を行う。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 講義内容を十分理解し、他者教育、自己成長に十分生かすことができるか。

評価 A (89 ~ 80 点) : 講義内容を理解し、他者教育に十分生かすことができるか。

評価 B (79 ~ 70 点) : 講義内容を理解し、他者教育に生かすことができるか。

評価 C (69 ~ 60 点) : 講義内容を理解し、他者教育に生かせるだけの基礎知識を獲得できているか。

評価 F (59 点以下) : 上記を満たさない場合

■評価方法

授業内課題 50%、テスト (定期試験期間内に実施) 50%

■留意点

①本講義は教職科目中の一科目でもあるので、教職課程履修のものは必修の授業である。②講義中の飲食、携帯電話操作、帽子・サングラスの着用等は厳禁である。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 教育制度論 (Educational System)

サブタイトル 教育の法と制度について、比較教育学・教育社会学的な視点を含めてとらえる

担当教員 杉森 知也

対象学年 2年生以上

区分 春学期

■教育職員免許法施行規則における科目区分

教育の基礎的理解に関する科目

■教育職員免許法施行規則における各科目に含まれることが必要な事項

教育に関する社会的、制度的又は経営的事項（学校と地域との連携及び学校安全への対応を含む。）

■講義目的

1. 主に、公教育をとりまく社会・行政の制度改革の動向を含めて考察する。
2. 現在の日本の教育制度・行政等について、歴史的視点と国際比較の視点の両面から読み解く。

■講義分類

社会人力育成

■到達目標

日本の教育行政・制度設計および政策の動向についての基礎的な理解の上に、これを多角的・客観的に評価することができる。また、学校と地域との連携、学校安全への対応についての基礎的な知識を身につける。（※取得可能な資格：高等学校情報科教諭免許）

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

教育の制度に関する基礎的な知識をグローバルとローカルの関係性を意識して獲得する。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

教育の制度に関する基礎的な知識をグローバルとローカルの関係性を意識して獲得する。

【個人】 プレゼンテーション

【ペア】 なし

【グループ】 Buzz Group

【上記以外】 なし

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

指定教科書の該当箇所を読み、疑問点と自分なりの考察（意見）をもって授業に参加すること。不明な用語については web、図書館の教育学辞典等で調べてくること。事前学習に 180 分、事後学習に 90 分程度を要する。

■授業の概要

- 第1講 教育の「制度」とは何か、「公教育」とは何か
- 第2講 国の教育行政組織と教育政策過程
- 第3講 国の教育法令の構成と原理
- 第4講 分権改革による国と自治体の教育行政改革
- 第5講 地方自治体の教育行政組織としくみ
- 第6講 教育課程の行政としくみ
- 第7講 教科書の行政としくみ
- 第8講 学校と保護者・子どもの法的地位
- 第9講 教育の機会均等保障と教育費負担問題
- 第10講 学校の組織・運営と人事管理
- 第11講 教員の勤務問題と業務改善の課題
- 第12講 教員給与の政策と法制度改革
- 第13講 子どもの学力保障と学校改革
- 第14講 学校改革をめぐる論議と新たな学校づくりの取り組み
- 第15講 学校における安全教育と安全管理

■フィードバックの要領

今回の授業またはメールにて授業内容・コメントシート等へのフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 教員たるにふさわしい態度、参加意欲等を十分に発揮している

評価 A (89 ~ 80 点) : 教員たるにふさわしい態度、参加意欲等を発揮している

評価 B (79 ~ 70 点) : 講義に参加しているが、積極的な姿勢が十分ではない

評価 C (69 ~ 60 点) : 講義に参加しているが、理解度が十分ではなく、また提出物の提出についても遅滞が多い

評価 F (59 点以下) : 講義が理解できない、他者と協力できないなど、いずれか一つ以上に該当

■評価方法

事前学習の取り組み 50%（提出したメモの内容）、授業での積極的な参加姿勢 50%を総合的に評価する。

■留意点

本講義は、受講生の主体的な働きかけで進めていくので、自主的・積極的に発言することなしには進まない。講義部分はできる限り少なくし、学生の質問や意見交換を主な活動としたいので、事前学習が必須であることを自覚してほしい。なお、状況によって、扱う回の入れ替えをおこなう場合がある。

科目名 教育相談 (Educational Counseling)**サブタイトル** 心理・教育的支援およびカウンセリング・コミュニケーションスキル養成**担当教員** 大森 拓哉**対象学年** 3年生以上**区分** 秋学期**■教育職員免許法施行規則における科目区分**

道徳、総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目

■教育職員免許法施行規則における各科目に含まれることが必要な事項

教育相談 (カウンセリングに関する基礎的な知識を含む。)の理論及び方法

■講義目的

本講義は、教育場面において相談を受ける立場となった時のその方法や技術・知識の習得と、理論的学問的な背景、実践場面での応用などについて学ぶ。実際にカウンセラーとなって業務を行うには数多くの経験と豊富な知識が必要であり、本講義だけでそれを満たすことは不可能であるが、相談を受ける立場の者として最低限必要な素養を身につけることを目的とする。教育場面とは、学校教育のみならず、社会人教育、人材教育などの場面も想定し、実社会で必要な、意味のある知識を習得する。

■講義分類

顧客理解/ビジネスマネジメント/社会人育成

■到達目標

教育相談の理論と実践について、適切に理解し、実際の場面でも適用できる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP5 高い志

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

傾聴の態度を学び、コミュニケーションの基礎を体得することにより、相談を受ける知識・姿勢を学ぶ。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

傾聴の態度を学び、コミュニケーションの基礎を体得することにより、相談を受ける知識・姿勢を学ぶ。

[個人] ワークシート/問題作成

[ペア] ヘアワーク/相互教授法/ピア・レビュー/ロールプレイ

[グループ] Ball-toss/マインド・マップ

[上記以外] なし

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

毎回のトピックスに関して、参考図書等の当該部分を事前に読了しておくこと (1.5 時間)。また、授業内で取り扱った内容について、自分自身の経験を踏まえた考察をまとめておくこと (1.5 時間)。

■授業の概要

- 第1講 教育相談とは何か
- 第2講 幼児・児童期の発達
- 第3講 思春期・青年期の発達
- 第4講 不適応・不登校
- 第5講 いじめ・虐待
- 第6講 学習障害・発達障害
- 第7講 学校カウンセリング
- 第8講 教育相談の意義
- 第9講 カウンセリングの基本的枠組み
- 第10講 カウンセリング・心理療法の種類と技法
- 第11講 心理テストの理論とその評価
- 第12講 心理テストの技法
- 第13講 ソーシャルスキル・ライフスキル教育
- 第14講 進路・キャリア相談
- 第15講 精神障害とその理解

■フィードバックの要領

各回の講義で課題・演習・自己分析を行い、その評価とコメントを与える。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上) : 講義内容を完全に理解し、現場での相談業務で実践できる。
- 評価 A (89 ~ 80 点) : 講義内容を十分に理解し、現場での相談業務に生かすことができる。
- 評価 B (79 ~ 70 点) : 講義内容を理解し、現場での相談業務に生かすことが期待される。
- 評価 C (69 ~ 60 点) : 最低限の講義内容を理解し、現場実践業務に携わることができる。
- 評価 F (59 点以下) : 講義科目の履修目標に達していない

■評価方法

授業内課題 60%、期末テスト (定期試験期間内に実施) 40%

■留意点

①本講義は教職科目の中の一科目でもあるので、教職課程履修のものは必修の授業である。②課題に対してフィードバックを行う。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 教育方法 (Teaching Method)

サブタイトル 情報機器を活用した効果的な授業設計の検討と実践力の養成

担当教員 水上 晃実

対象学年 2年生以上

区分 秋学期

■教育職員免許法施行規則における科目区分

道徳、総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目

■教育職員免許法施行規則における各科目に含まれることが必要な事項

教育の方法及び技術（情報機器及び教材の活用を含む。）

■講義目的

本講義では、高等学校情報科の授業において、情報に関して倫理的態度をもって安全に配慮する規範意識のもと、実践的に情報を活用できる力を指導できる教員を養成することを目的とする。具体的には、生徒に対して情報機器等を効果的に活用したコミュニケーション能力・情報の創造力・発信力・科学的思考力・判断力等を育成し、生徒自身が情報化社会に積極的かつ主体的に参画できる能力・態度を身につけられるよう、その方法をインストラクショナルデザインの原理を用いて学ぶ。また、教育におけるアクティブ・ラーニングの重要性を考慮して、受講者全員が模擬授業を行うこととし、学習指導案の作成から授業の実施までを受講者自身が全て行うことで、個人の課題を発見するとともに、受講者同士がアドバイスを送り、互いに学び合いながら実践的な教師力・授業力を養うことを目的とする。

■講義分類

社会人力育成

■到達目標

1) 教育方法の基礎的理論と実践を理解している。2) 生徒の資質・能力を育成するための教育方法を理解している。3) 学級、生徒、教員、教室、教材など授業を構成する基礎的な要件を理解している。4) 学習評価の考え方を理解している。5) 話法、板書等、授業を行う上での技術を身につけている。6) 学習指導理論を踏まえた学習指導案を作成することができる。7) 情報機器を活用し、生徒の興味・関心を高めることができる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ③ ①・②で選択された事項の詳細

自分の意思を効果的かつ分かりやすく伝える力とコミュニケーション能力を養い、将来学校教育の現場に立って生徒の学習効果を上げる授業を展開できる技能を習得する。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

自分の意思を効果的かつ分かりやすく伝える力とコミュニケーション能力を養い、将来学校教育の現場に立って生徒の学習効果を上げる授業を展開できる技能を習得する。

〔個人〕 プレゼンテーション

〔ペア〕 相互教授法

〔グループ〕 PBL

〔上記以外〕 なし

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

教科書の該当部分を講義前に読んでくること。また、模擬授業の際には、学習指導案と板書計画を作成し、事前に提出すること。その他、レポートや振り返り等の課題も含め、予習・復習には毎週3時間を要するものを課す。

■授業の概要

- 第1講 ガイダンスおよびイントロダクション（教育方法の基礎的理論について）
- 第2講 効果的な教育システムの設計について学ぶ。
- 第3講 生徒の資質・能力を育成するための教育方法を学ぶ。
- 第4講 学級、生徒、教員、教室、教材など授業を構成する基礎的な要件とは。
- 第5講 学習評価の考え方について学ぶ。
- 第6講 話法、板書等、授業を行う上での技術（教師のスキル）とは。
- 第7講 情報通信ネットワークやメディアの特性・役割・情報モラルについて。
- 第8講 情報機器の活用とその操作方法を学ぶ。
- 第9講 学習指導理論を踏まえた上で、高等学校情報科の学習指導案作成方法を学ぶ。
- 第10講 模擬授業 (1) および教材の選び方の検討。
- 第11講 模擬授業 (2) および教師のスキルとしての話法・板書についての確認。
- 第12講 模擬授業 (3) および学習指導案の作成についての確認。
- 第13講 模擬授業 (4) および情報機器の活用についての確認。
- 第14講 模擬授業 (5) および主体的かつ対話的な深い学びの実現について。
- 第15講 講義全体の振り返りと到達目標の確認および最終指導案の発表。

■フィードバックの要領

学習指導案やレポート等の提出課題についてはコメントを記入してフィードバックを行う

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 意欲的に取組み、講義内容を十分に理解した上、学習指導案・模擬授業の完成度が高い。
 評価 A (89 ~ 80 点) : 講義内容を十分に理解し、学習指導案・模擬授業に関しても概ね良好である。
 評価 B (79 ~ 70 点) : 講義内容を概ね理解はしているが、講義の到達目標までにはあと一歩の努力を要する。
 評価 C (69 ~ 60 点) : 講義内容の理解が不十分で、提出期限に遅れた課題がある。
 評価 F (59 点以下) : 遅刻や欠席が多く、講義内容が理解できていない。未提出課題がある。

■評価方法

学習指導案および板書案 30%、模擬授業 40%、学期末レポート 30%。なお、欠席・遅刻に関しては正当な理由がない限り認められない。

■留意点

本講義はアクティブ・ラーニングをもとに、受講生の能動的かつ主体的な取組みを期待するものである。情報教育の理解とともに、実践的な能力の育成を目指し、模擬授業にも重きを置く。受講生の人数により模擬授業を実施する回数に変動が生じる場合があるが、教壇実習の重要性を理解し、積極的に臨んでほしい。

科目名 教職概論 (Teaching Profession)**サブタイトル** 自らの教職観を構築する**担当教員** 杉森 知也**対象学年** 1年生以上**区分** 秋学期**■教育職員免許法施行規則における科目区分**

教育の基礎的理解に関する科目

■教育職員免許法施行規則における各科目に含まれることが必要な事項

教職の意義及び教員の役割・職務内容 (チーム学校運営への対応を含む。)

■講義目的

教職の意義と教員の役割について国内外の動向を含めて広く理解し、将来、教職に就くための基礎的資質を養う。

■講義分類

社会人力育成

■到達目標

1. 教職の意義、教員の役割と職務内容、教職の専門性などについて総合的に理解することができる。2. 近年の学校・教員を巡る状況の変化について、世界的な動向を含めて説明することができる。3. レポート課題を含めて将来の進路選択の機会にする。4.1. ~3. を踏まえて自己の教職観を構築して、それを説明することができる。(※取得可能な資格：高等学校情報科教諭免許)

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

グローバルな動向を背景に、教員を巡る状況の変化について基礎的な理解を養う。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

グローバルな動向を背景に、教員を巡る状況の変化について基礎的な理解を養う。

【個人】 なし

【ペア】 なし

【グループ】 Buzz Group

【上記以外】 なし

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

ディスカッションを円滑に進めるために、授業前に指定教科書の該当箇所と参考書、インターネット等でその内容を調べて、自分らの解釈をしておくこと。事前学修に 180 分、事後学修に 90 分程度を要する。

■授業の概要

- 第1講 ガイダンス：教員との出会いを振り返る
- 第2講 教員の職務内容とその意義
- 第3講 教員の地位と身分①：教員の「地位」
- 第4講 教員の地位と身分②：教員の義務と身分保障の意味
- 第5講 教員の地位と身分③：教員の待遇
- 第6講 教員研修：その種類と意義
- 第7講 教員の免許制度と教員の存在意義①：日本の教員免許制度
- 第8講 教員の免許制度と教員の存在意義②：世界の教員免許制度と日本の改革動向
- 第9講 教師のやりがいとバーンアウト
- 第10講 価値多様化社会の中の専門職①：価値多様化社会とは何か
- 第11講 価値多様化社会の中の専門職②：反省的实践家と反省的思考
- 第12講 新しい教師の力量①：日本における政策動向とその対応
- 第13講 新しい教師の力量②：OECDの政策動向から考える
- 第14講 チーム学校
- 第15講 教員への聞き取りから見えるもの

■フィードバックの要領

今回の授業またはメールにて授業内容・コメントシート等へのフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上)：教員たるにふさわしい態度、参加意欲等を十分に発揮している。
- 評価 A (89 ~ 80 点)：教員たるにふさわしい態度、参加意欲等を発揮している。
- 評価 B (79 ~ 70 点)：講義に参加しているが、積極的な姿勢が十分ではない。
- 評価 C (69 ~ 60 点)：講義に参加しているが、理解度が十分ではなく、また提出物の遅滞が多い。
- 評価 F (59 点以下)：講義が理解できない、他者と協力できないなど、いずれか一つ以上に該当

■評価方法

最終レポート 50 点、コメントシート・小レポート 20 点、授業の参加姿勢 30 点の総合評価とする。

■留意点

記載した事前・事後学習以外にも自主的に学習し、質問を用意して授業に参加すること。活発な授業の展開には、学生の事前学習が重要であることを自覚して欲しい。教員への聞き取りとそれに基づく調査レポート (最終レポート) の作成に関する質問は随時受け付ける。調査レポートについては、提出の遅滞および必要事項を満たしていないものは採点しない。なお、状況によっては扱回りの入れ替え等を行うことがある。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 教職実践演習 (Teacher Training Practice)**サブタイトル** 学生生活と教育実習を振り返り、自己の教職観を再確認する**担当教員** 峯岸 久枝**対象学年** 4年生**区分** 秋学期**■教育職員免許法施行規則における科目区分**

教育実践に関する科目

■教育職員免許法施行規則における各科目に含まれることが必要な事項

教職実践演習

■講義目的

学生生活（特に、教職に関すること）と教育実習の体験を丹念に省察し、その過程で自己の強み・弱みを自覚する。また、この振り返りを通して、自己の教職観を見直し、修正する。

■講義分類

社会人力育成

■到達目標

1. 学生時代の振り返りを通して、今後の自己成長に必要なことを見出す。2. 個人ワークやグループディスカッションを通して、教育実習等の経験の振り返りをおこない、それぞれの経験を共有化する。3. これらの活動を通して、自己の教職観を再確認・修正する。（※取得可能な資格：高等学校情報科教諭免許）

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

教育実習で学んだことや考えたことについて、自分の意思をわかりやすく伝えることができる。また、自分の意見を発信する力や他者の発言を聴き入れる傾聴力を身につける。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

教育実習で学んだことや考えたことについて、自分の意思をわかりやすく伝えることができる。また、自分の意見を発信する力や他者の発言を聴き入れる傾聴力を身につける。

[個人] プレゼンテーション/ワークシート

[ペア] ペアワーク/ピア・レビュー/ロールプレイ

[グループ] PBL/KJ法/マインド・マップ

[上記以外] なし

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

教育実習の記録を詳細にとっておくことに加え、主に教職課程で得られたことを、教職履修カルテや実習日誌等をもとに整理しておく。事前学習にはおよそ 180 分、事後学習には 90 分を要する。

■授業の概要

- 第1講 ガイダンス：本講の目的と概要
- 第2講 学生時代を振り返る①：授業の振り返り
- 第3講 学生時代を振り返る②：正課外の経験を振り返る
- 第4講 教育実習を振り返る①：特別活動
- 第5講 教育実習を振り返る②：総合的な学習の時間
- 第6講 教育実習を振り返る③：情報科の授業内容の省察
- 第7講 教育実習を振り返る④：情報科の授業での生徒の反応を振り返る
- 第8講 教育実習を振り返る⑤：研究授業の指導案を書き直す
- 第9講 教育実習を振り返る⑥：研究授業をおこなう (1)
- 第10講 教育実習を振り返る⑦：研究授業をおこなう (2)
- 第11講 教育実習を振り返る⑧：研究授業をおこなう (3)
- 第12講 教育実習を振り返る⑨：教員との関係・校務
- 第13講 教育実習を振り返る⑩：生徒との関係づくり
- 第14講 教育実習を振り返る⑪：プレゼンテーションの準備
- 第15講 教育実習を振り返る⑫：プレゼンテーション

■フィードバックの要領

レポートに対し、一人ひとりコメントを記入し、個人に対してフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上)：教員たるにふさわしい態度、参加意欲等を十分に発揮している

評価 A (89 ～ 80 点)：教員たるにふさわしい態度、参加意欲等を発揮している

評価 B (79 ～ 70 点)：講義に参加しているが、積極的な姿勢が十分ではない

評価 C (69 ～ 60 点)：講義に参加しているが、理解度が十分ではなく、また提出物の提出についても遅滞が多い

評価 F (59 点以下)：欠席が多い、講義が理解できない、他者と協力できないなど、いずれか一つ以上に該当

■評価方法

平常点 50%、レポート 50%とする。グループワークの様子（態度や発言）を観察して積極的な姿勢を評価し、課題の提出は指定された日時に指示された方法で提出され、その内容を点数化する。これらを総合的に評価する。

■留意点

本講義は、原則として宿泊合宿の形で実施する。必要な資料を作成・持参して授業に臨むこと。この授業でさまざまな資料を駆使して振り返る作業をおこなうことを想定して、実習中に出来事を記載したメモなどを紛失しないようデータの保持につとめること。なお、履修人数等によっては、シラバスの内容を変更することもある。

科目名 情報科教育法 I (Teaching Method on Information Education I)**サブタイトル** 高等学校「情報」の指導方法研究**担当教員** 齋藤 S. 裕美**対象学年** 3年生以上**区分** 春学期**■教育職員免許法施行規則における科目区分**

教科及び教科の指導法に関する科目

■教育職員免許法施行規則における各科目に含まれることが必要な事項

各教科の指導法 (情報機器及び教材の活用を含む。)

■講義目的

本講義は、高等学校情報科の教員として多様な高校生に「情報」の本質を指導する基本的な能力を身につけることを目的とする。教科情報にかかわる理念、制度、知識・技能、指導法等の情報教育の基本的な事項の理解を深めながら、実践的な指導力や教師としての資質の習得を図ることを目的とする。本講義では、現行学習指導要領 (平成 25 年度入学生から学年進行で実施) の改訂ポイントについて触れ、模擬授業などの実習を通じて情報科教育の研究を進め、教材研究の方法、学習指導の工夫などの授業創りの実際を体験する。また、新学習指導要領 (令和 4 年度入学生から学年進行で実施) の改訂ポイントについても紹介する。

■講義分類

社会人力育成

■到達目標

教職に就く者として求められる教科教育 (情報) について、基本的な知識と授業実践の手法の習得をめざす。①情報教育の沿革と現状、在り方を理解する、②教科「情報」の基本的な理念、目標、内容、構成を理解する、③指導計画を作成し、それを基に模擬授業を通じた実践ができる、④他の学生の模擬授業を見て、改善点や修正点などを指摘できる、⑤指摘を受け入れて、自らの指導計画や授業などを改善・工夫ができる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ① 最も身につけられる事項 ② 2 番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】 ③ ①・②で選択された事項の詳細

「情報科」教員として、学習指導要領に基づいて授業を設計し、授業内容をわかりやすく教える能力を習得する。

■授業形態 AL 手法 ※該当する項目のみ記載

「情報科」教員として、学習指導要領に基づいて授業を設計し、授業内容をわかりやすく教える能力を習得する。

[個人] 問題作成

[ペア] なし

[グループ] Buzz Group

[上記以外] 単元指導計画・学習指導案の相互評価、模擬授業の実践と相互評価

■準備学習の時間 (予習・復習等 1.5 時間以上) 及び具体的な内容

学習指導要領を精読すること。授業内の指示に従って学習指導案を作成すること。必要な予習・復習時間は各 1.5 時間程度 (合計 3 時間程度) である。

■授業の概要

- 第 1 講 情報教育の沿革と現状
- 第 2 講 高等学校学習指導要領における情報教育の全体像
- 第 3 講 「社会と情報」の目標・内容・内容の取扱いの要点解説①
- 第 4 講 「社会と情報」の目標・内容・内容の取扱いの要点解説②
- 第 5 講 「情報の科学」の目標・内容・内容の取扱いの要点解説①
- 第 6 講 「情報の科学」の目標・内容・内容の取扱いの要点解説②
- 第 7 講 指導計画の作成①
- 第 8 講 指導計画の作成②
- 第 9 講 指導計画の作成③
- 第 10 講 模擬授業①
- 第 11 講 模擬授業②
- 第 12 講 模擬授業③
- 第 13 講 模擬授業④
- 第 14 講 模擬授業⑤
- 第 15 講 教育課程の編成

■フィードバックの要領

模擬授業実施回においてフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上) : 到達目標①を説明でき、②～⑤全てを満たす授業の設計と実践ができる。
 評価 A (89 ～ 80 点) : 到達目標①を説明でき、②～⑤の 2 つ以上を満たす授業の設計と実践ができる。
 評価 B (79 ～ 70 点) : 到達目標①を説明でき、②～⑤の 1 つ以上を満たす授業の設計と実践ができる。
 評価 C (69 ～ 60 点) : 到達目標①を十分ではないが説明でき、50 分間の授業の設計と実践ができる。
 評価 F (59 点以下) : 講義内容について著しく理解が不足、または 50 分間の授業の設計や実践ができない。

■評価方法

期末試験 30%、学習指導案 30%、模擬授業 40%。

■留意点

①高等学校で使用している「情報」の教科書を講義の中心に位置付け、レジュメおよび参考資料を配付する。②各自で学習指導案・単元指導案および参考資料 (手許資料) を作成して、他の受講生にも配付する。③基本的な知識・態度と授業実践の手法の十分な習得が欠かせない。④指定した課題についての発表・模擬授業の機会を設け、教員としての適性の有無を観察・評価する。⑤課題や試験等に対してフィードバックを行う。

一般科目 1 年生以上

一般科目 2 年生以上

一般科目 3 年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 情報科教育法 II (Teaching Method on Information Education II)

サブタイトル 高等学校「情報」の指導方法研究

担当教員 齋藤 S. 裕美

対象学年 3年生以上

区分 秋学期

■教育職員免許法施行規則における科目区分

教科及び教科の指導法に関する科目

■教育職員免許法施行規則における各科目に含まれることが必要な事項

各教科の指導法（情報機器及び教材の活用を含む。）

■講義目的

本講義は、高等学校情報科の教員として多様な高校生に「情報」の本質を指導する基本的な能力を身につけることを目的とする。教科情報にかかわる理念、制度、知識・技能、指導法等の情報教育の基本的な事項の理解を深めながら、実践的な指導力や教師としての資質の習得を図ることを目的とする。本講義では、現行学習指導要領（平成25年度入学生から学年進行で実施）の改訂ポイントについて触れ、模擬授業などの実習を通じ情報科教育の研究を進め、教材研究の方法、学習指導の工夫などの授業創りの実際を体験する。また、新学習指導要領（令和4年度入学生から学年進行で実施）の改訂ポイントについても紹介する。

■講義分類

社会人力育成

■到達目標

教職に就く者として求められる教科教育（情報）について、基本的な知識と授業実践の手法の習得をめざす。①情報教育の沿革と現状、在り方を理解する、②教科「情報」の基本的な理念、目標、内容、構成を理解する、③指導計画を作成し、それを基に模擬授業を通じた実践ができる、④他の学生の模擬授業を見て、改善点や修正点などを指摘できる、⑤指摘を受け入れて、自らの指導計画や授業などを改善・工夫ができる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP4 表現と技能 DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

「情報科」教員として、学習指導要領に基づいて授業を設計し、授業内容をわかりやすく教える能力を習得する。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

「情報科」教員として、学習指導要領に基づいて授業を設計し、授業内容をわかりやすく教える能力を習得する。

〔個人〕 問題作成

〔ペア〕 なし

〔グループ〕 Buzz Group

〔上記以外〕 単元指導計画・学習指導案の相互評価、模擬授業の実践と相互評価

■準備学習の時間（予習・復習等1.5時間以上）及び具体的な内容

学習指導要領を精読すること。授業内の指示に従って学習指導案を作成すること。必要な予習・復習時間は各1.5時間程度（合計3時間程度）である。

■授業の概要

第1講 単元の設定と展開

第2講 教材教具①

第3講 教材教具②

第4講 指導計画の作成①

第5講 指導計画の作成②

第6講 学習評価①

第7講 学習評価②

第8講 専門教科「情報」各科目の目標・内容・内容の取扱いの概説①

第9講 専門教科「情報」各科目の目標・内容・内容の取扱いの概説②

第10講 模擬授業①

第11講 模擬授業②

第12講 模擬授業③

第13講 模擬授業④

第14講 模擬授業の再検討①

第15講 模擬授業の再検討②

■フィードバックの要領

模擬授業実施回においてフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90点以上) : 到達目標①を説明でき、②～⑤全てを満たす授業の設計と実践ができる。

評価 A (89～80点) : 到達目標①を説明でき、②～⑤の2つ以上を満たす授業の設計と実践ができる。

評価 B (79～70点) : 到達目標①を説明でき、②～⑤の1つ以上を満たす授業の設計と実践ができる。

評価 C (69～60点) : 到達目標①を十分ではないが説明でき、50分間の授業の設計と実践ができる。

評価 F (59点以下) : 講義内容について著しく理解が不足、または50分間の授業の設計や実践ができない。

■評価方法

期末試験30%、学習指導案30%、模擬授業40%。次の4点にて評価 1: 専門用語理解 2: 学習指導要領に基づいた単元指導計画と学習指導案作成 3: 十分な教材研究、正確で整理された授業構成 4: 指導案と模擬授業の整合

■留意点

①高等学校で使用している「情報」の教科書を講義の中心に位置付け、レジュメおよび参考資料を配付する。②各自で学習指導案・単元指導案および参考資料（手許資料）を作成して、他の受講生にも配付する。③基本的な知識・態度と授業実践の手法の十分な習得が欠かせない。④指定した課題についての発表・模擬授業の機会を設け、教員としての適性の有無を観察・評価する。

科目名 生徒指導・進路指導論 (Student Direction and Career Guidance)**サブタイトル** 道徳、総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目**担当教員** 峯岸 久枝**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■教育職員免許法施行規則における科目区分**

道徳、総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目

■教育職員免許法施行規則における各科目に含まれることが必要な事項

生徒指導の理論及び方法 進路指導及びキャリア教育の理論及び方法

■講義目的

学校教育において学習指導と並んで重要な意義を持つ生徒指導は、教育相談、進路指導・キャリア教育への対応など多岐にわたり、意義と役割について学習することが必要である。また、生徒指導に関わる様々な局面において、具体的な事例や指導例をもとに教師が求められる役割は何かについて、当事者意識で考えて議論し、理解を深める。

■講義分類

社会人力育成

■到達目標

1. 生徒指導・進路指導・キャリア教育の意義と役割について、基本的な概念を理解し、説明することができる。2. 生徒指導・進路指導・キャリア教育・教育相談等の教育活動について、教師の果たすべき役割を理解し、そのあり方を具体的に考え、説明することができる。3. 生徒指導の実際の場면을観察・視聴し、学校現場での教職員との協力や外部機関との連携など、具体的な指導方法について意見や改善点を述べるができる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP3 関心と意欲 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

生徒の置かれている環境や状況を分析し、課題を明らかにすることができる。また、その課題に対して、生徒指導や進路指導の場面において、「当事者意識」で教師としてどのように課題解決を図るかを考える力をつける。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

生徒の置かれている環境や状況を分析し、課題を明らかにすることができる。また、その課題に対して、生徒指導や進路指導の場面において、「当事者意識」で教師としてどのように課題解決を図るかを考える力をつける。

[個人] プレゼンテーション/ワークシート

[ペア] ヘアワーク/ピア・レビュー/ロールプレイ

[グループ] PBL/KJ法/マインド・マップ

[上記以外] なし

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

テキストの該当部分を事前に読んでおく（事前学習 1.5 時間）。また、配布された資料をよく読み、教師の立場で考え、自分の言葉で説明できるような指導観を講義後に整理する（事後学習 1.5 時間）。

■授業の概要

- 第1講 オリエンテーション：教育課程における生徒指導・進路指導・キャリア教育の位置づけ
- 第2講 生徒指導・進路指導・キャリア教育と各教育活動との関連や意義
- 第3講 生徒指導・教育相談・進路指導・キャリア教育における組織的な指導体制について
- 第4講 生徒指導・進路指導・キャリア教育の組織的な計画と取組について
- 第5講 学校における指導体制①：集団指導と個別指導
- 第6講 学校における指導体制②：ガイダンス機能と個別指導
- 第7講 生活習慣の確立や規範意識とキャリアデザイン
- 第8講 個別の課題を抱える生徒への指導と支援①
- 第9講 個別の課題を抱える生徒への指導と支援②
- 第10講 個別の課題を抱える生徒への指導と支援③
- 第11講 個別の課題を抱える生徒への指導と支援の実際①：体験活動の計画
- 第12講 個別の課題を抱える生徒への指導と支援の実際②：問題行動の生徒指導
- 第13講 生徒指導・進路指導・キャリア教育の今後の課題①
- 第14講 生徒指導・進路指導・キャリア教育の今後の課題②
- 第15講 講義全体のまとめ：場面指導に基づいた模擬授業の実施

■フィードバックの要領

レポートに対し、一人ひとりコメントを記入し、個人に対してフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90 点以上)：積極的・意欲的に参加し、内容を十分理解している。考察を深め、的確に説明できる。
- 評価 A (89～80 点)：内容を理解しており、自分の考察を聞き手にわかりやすい表現で説明できる。
- 評価 B (79～70 点)：講義内容について理解しているが、講義の到達目標に十分に達していない。
- 評価 C (69～60 点)：講義に参加しているが、理解度が十分ではなく、また提出物の提出の遅滞が多い。
- 評価 F (59 点以下)：講義が全く理解できない、他者とコミュニケーションが成立せず協議等で話せず、協力できない。

■評価方法

平常点 50%、レポート 50%とする。グループワークの様子（態度や発言）を観察して積極的な姿勢を評価し、課題の提出は指定された日時に指示された方法で提出され、その内容を点数化する。これらを総合的に評価する。

■留意点

①本講義は受講生の主体的な働きかけで進めていくので、自主的に積極的に発言・参加することを望む。②教師を目指している人だけでなく、教師を目指すか迷っている人もぜひ受講し、進路選択の一助としてほしい。③状況によって、講義内容や扱う回の入替えなどが生じることがある。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

科目名 特別活動・総合的な学習の時間の指導法 (Extra-Curricular Activities and Integrated Studies)**サブタイトル** 学校・学級づくりと人格形成と教師の指導性**担当教員** 峯岸 久枝**対象学年** 2年生以上**区分** 秋学期**■教育職員免許法施行規則における科目区分**

道徳、総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目

■教育職員免許法施行規則における各科目に含まれることが必要な事項

特別活動の指導法 総合的な学習の時間の指導法

■講義目的

高等学校の「特別活動」においては、人間関係形成・社会参画・自己実現の視点を持ち、学校における集団活動を通して課題解決の力をつけるための指導の方法を模索する。また「総合的な学習の時間」においては、探究的な見方・考え方を通して、自己の生き方を考えていくための資質・能力の育成ができるような力をつけることを目的とする。

■講義分類

社会人力育成

■到達目標

高等学校の「特別活動」においては、人間関係形成・社会参画・自己実現の視点を持ち、学校における集団活動を通して課題解決の力をつけるための指導の方法を模索する。また「総合的な学習の時間」においては、探究的な見方・考え方を通して、自己の生き方を考えていくための資質・能力の育成ができるような力をつけることを目標とする。(※取得可能な資格：高等学校情報科教諭免許)

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項 ② 2番目に身につけられる事項

DP3 関心と意欲 DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③ ①・②で選択された事項の詳細

生徒の置かれている環境や状況を分析して課題を明らかにすることができる。また、その課題に対して、学級や特別活動(学校行事など)を通してどのようにアプローチをすれば解決できるかを考え、発信する力を養う。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

生徒の置かれている環境や状況を分析して課題を明らかにすることができる。また、その課題に対して、学級や特別活動(学校行事など)を通してどのようにアプローチをすれば解決できるかを考え、発信する力を養う。

[個人] プレゼンテーション/ワークシート
 [ペア] 相互教授法/ピア・レビュー/ロールプレイ
 [グループ] PBL/KJ法/マインド・マップ
 [上記以外] なし

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

事前学習として、指定教科書の該当部分を読み、自身が受けてきた教育や経験したことをもとに、具体的な場面・指導がおこなわれていたかと思いついておく。事前学習に180分、事後学習に90分を要する。

■授業の概要

- 第1講 ガイダンス：学習指導要領における特別活動・総合的な学習の時間
- 第2講 教育課程における特別活動・総合的な学習の時間の位置づけ
- 第3講 特別活動・総合的な学習の時間と各教科との関連
- 第4講 学級・ホームルーム活動①：学級や学校の生活づくり・適応と成長及び健康安全
- 第5講 学級・ホームルーム活動②：今日の学級活動の課題
- 第6講 学校行事①：学習指導要領に示された儀式的、文化的、健康安全・体育的活動について
- 第7講 学校行事②：生徒会活動や部活動について
- 第8講 ボランティア活動・奉仕活動①：地域との連携を軸として
- 第9講 ボランティア活動・奉仕活動②：探究的な学習を軸として
- 第10講 特別活動・総合的な学習の時間の評価の方法
- 第11講 特別活動・総合的な学習の時間における話し合い活動の指導方法
- 第12講 特別活動・総合的な学習の時間における主体的な学習を促す方法
- 第13講 特別活動・総合的な学習の時間の具体的な授業計画①
- 第14講 特別活動・総合的な学習の時間の具体的な授業計画②
- 第15講 特別活動・総合的な学習の時間の授業を実施する

■フィードバックの要領

レポートに対し、一人ひとりコメントを記入し、個人に対してフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+ (90 点以上)：積極的・意欲的に参加し、内容を十分理解している。考察を深め、的確に説明できる。
 評価 A (89 ～ 80 点)：内容を理解しており、自分の考察を聞き手にわかりやすい表現で説明できる。
 評価 B (79 ～ 70 点)：講義内容について理解しているが、講義の到達目標に十分に達していない。
 評価 C (69 ～ 60 点)：講義に参加しているが、理解度が十分ではなく、また提出物の提出の遅滞が多い。
 評価 F (59 点以下)：講義が全く理解できない、他者とコミュニケーションが成立せず協議等で話せず、協力できない。

■評価方法

平常点 50%、レポート 50%とする。グループワークの様子(態度や発言)を観察して積極的な姿勢を評価し、課題の提出は指定された日時に指示された方法で提出され、その内容を点数化する。これらを総合的に評価する。

■留意点

①本講義は受講生の主体的な働きかけで進めていくので、自主的に積極的に発言・参加することを望む。②教師を目指している人だけでなく、教師を目指すか迷っている人もぜひ受講し、進路選択の一助としてほしい。③状況によって、講義内容や扱う回の入れ替えなどが生じることもある。

科目名 特別支援教育概論 (Special Support)**サブタイトル** 個別の教育的ニーズに対する支援スキル養成**担当教員** 中川 宏子**対象学年** 2年生以上**区分** 春学期**■教育職員免許法施行規則における科目区分**

教育の基礎的理解に関する科目

■教育職員免許法施行規則における各科目に含まれることが必要な事項

特別の支援を必要とする幼児、児童及び生徒に対する理解

■講義目的

通常の学級にも在籍している発達障害や軽度知的障害をはじめとする様々な障害等により特別な支援を必要とする幼児、児童及び生徒が授業において学習活動に参加している実感・達成感もちながら学び、生きる力を身に付けていくことができるよう、幼児、児童及び生徒の学習上又は生活上の困難を理解し、個別の教育的ニーズに対して、他の教員や関係機関と連携しながら組織的に対応していくために必要な知識や支援方法を理解する。

■講義分類

社会人力育成

■到達目標

1. 特別の支援を必要とする幼児、児童及び生徒の障害の特性及び心身の発達を理解する。2. 特別の支援を必要とする幼児、児童及び生徒に対する教育課程や支援の方法を理解する。3. 障害はないが特別の教育的ニーズのある幼児、児童及び生徒の学習上又は生活上の困難とその対応を理解する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】①最も身につけられる事項 ②2番目に身につけられる事項

DP1 知識と理解 DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】③①・②で選択された事項の詳細

特別の支援を必要とする子どもの特性及び心身の発達を理解し、対応していける能力を修得する。

■授業形態 AL手法 ※該当する項目のみ記載

特別の支援を必要とする子どもの特性及び心身の発達を理解し、対応していける能力を修得する。

[個人] ワークシート

[ペア] ペアワーク

[グループ] ジグソー法/KJ法

[上記以外] なし

■準備学習の時間(予習・復習等1.5時間以上)及び具体的な内容

「新学習指導要領(平成29年3月公示)」を読んでおく。各回に新出した用語について調べておく。講義後に感想レポートを書き、提出する。これらの事前事後学習は、各回3時間を要す。

■授業の概要

- 第1講 「特別支援教育」とは何か
- 第2講 視覚障害・聴覚障害・知的障害・肢体不自由・病弱の子どもの教育
- 第3講 LD、ADHD、ASDなどの子どもの教育
- 第4講 特別支援学校や特別支援学級での教育課程や支援の方法
- 第5講 通常学級での支援の方法と二次障害の防止
- 第6講 「通級による指導」及び「自立活動」
- 第7講 支援が必要な子どものための支援体制
- 第8講 様々な教育的ニーズ
- 第9講 第8講科目のため空欄
- 第10講 第8講科目のため空欄
- 第11講 第8講科目のため空欄
- 第12講 第8講科目のため空欄
- 第13講 第8講科目のため空欄
- 第14講 第8講科目のため空欄
- 第15講 第8講科目のため空欄

■フィードバックの要領

課題へのコメントにてフィードバックを行う。

■評価基準

- 評価 A+ (90点以上) : 内容を十分理解しており、ディスカッションに積極的に参加している。
- 評価 A (89～80点) : 内容を理解しており、ディスカッションで発言している。
- 評価 B (79～70点) : 講義内容について理解しているが、ディスカッションでの発言が少ない。
- 評価 C (69～60点) : 講義内容について理解が不十分で、ディスカッションでの発言がほとんど無い。
- 評価 F (59点以下) : 講義内容が理解できていない。ディスカッションでの発言が無い。

■評価方法

授業参加態度 60%、レポート 20%、発言 20%とする。

■留意点

①教職科目の中の一科目でもあるので、教職課程履修のものは必修の授業である。②教師を目指している人だけでなく、社会は様々な特徴を持った人によって構成されていることに気付く機会にしてほしい。③状況によって、講義内容や扱う回の入れ替えなどが生じることもある。※本科目は「集中科目」です。開講日は8月17日(月)～8月20日(木)の予定ですので、注意してください。

一般科目1年生以上

一般科目2年生以上

一般科目3年生以上

演習科目

認定科目

教職科目

